# 國譯一切經

大東出版社藏版

# 國譯一切經

大東出版社藏版

LIBRARY
JUN 0 1 1993
UNIVERSITY OF TORONTO

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

# 本縁部

# 五

平等通昭
赤沼智善
西尾京雄
岡教邃
譯

# 目次

（本丁）（通頁）

佛所行讃（五巻中後二巻）……（八九―一六〇）……一

巻の第四 ……（八九―一二四）……一

瓶沙王諸弟子品第十六……（八九―九六）……一

大弟子出家品第十七……（九六―九九）……八

化給孤獨品第十八……（九九―一〇六）……一一

父子相見品第十九……（一〇六―一一二）……一八

受祇桓精舍品第二十……（一一二―一一六）……二五

守財醉象消伏品第二十一……（一一六―一二〇）……二八

菴摩羅女見佛品第二十二……（一二〇―一二三）……三二

巻の第五 ……（一二五―一六〇）……三七

神力住壽品第二十三……（一二五―一二九）……三七

離車辭別品第二十四……（一二九―一三三）……四一

涅槃品第二十五……（一三三―一三八）……四五

大涅槃品第二十六……（一三八―一四七）……五〇

歎涅槃品第二十七……（一四七―一五四）……五九

分舍利品第二十八……（一五四―一六〇）……六六

撰集百緣經解題……（一—八）……七三
撰集百緣經……（一—一七八）……八一
菩薩授記品第一（卷の第一）……（一—一八）……八一
一、滿賢婆羅門、遙に佛を請ずるの緣……（一—三）……八一
二、名稱女、佛を請ずるの緣……（三—四）……八三
三、窳惰子、難陀、佛を見るの緣……（四—六）……八四
四、五百の商客、海に入りて寶を採るの緣……（六—七）……八六
五、貧人、須摩持縷、佛に施する緣……（八—九）……八八
六、婆持加、病に困むの緣……（九—八九）……八九
七、王家の池を守る人、花を佛に散ずるの緣……（一一—一三）……九一
八、二梵志、各如來を諍ふの緣……（一三—一四）……九三
九、佛、說法し二王を度し出家せしむる緣……（一四—一六）……九四
一〇、長者、七日王と作るの緣……（一六—一八）……九六
受報應供養品第二（卷の二）……（一九—三五）……九九
二、船師、佛を請じ水を渡るの緣……（一九—二〇）……九九
三、觀頂王、佛を請ずるの緣……（二〇—二二）……一〇〇
三、法護王、佛を洗浴に請ずるの緣……（二二—二三）……一〇一

一四、佛、疫病を救濟し給ふの縁……（二三——二五）……一〇三
一五、天、帝釋、佛を供養するの縁……（二五——二七）……一〇五
一六、佛、帝釋の形を現じ婆羅門を化するの縁……（二七——二八）……一〇七
一七、乾闥婆、樂を作し佛を讃ずるの縁……（二八——三一）……一〇八
一八、如願、當に刑戮せらるべきに臨み佛を求め
出家するの縁……（三一——三三）……一一一
一九、頻婆娑羅王、佛を請ずるの縁……（三三——三四）……一一三
二〇、帝釋、迦蘭陀竹林を變ずるの縁……（三四——三五）……一一四

授記辟支佛品第三（卷の第三）……（三六——四九）……一一六

二一、王子に化生して辟支佛となるの縁……（三六——三八）……一一六
二二、小兒、散花し佛を供養するの縁……（三八——三九）……一一八
二三、女人、金輪を以て佛上に擲つの縁……（三九——四〇）……一一九
二四、老母善愛、慳貪の縁……（四〇——四二）……一二〇
二五、合香長者、佛を請ずるの縁……（四二——四三）……一二二
二六、船師、佛、僧を渡し水を過ぐるの縁……（四三——四四）……一二三
二七、婢使、栴檀香を以て佛足を塗るの縁……（四四——四五）……一二四
二八、貧人、拔提、佛に樵木を施すの縁……（四五——四六）……一二五
二九、作樂供養し辟支佛と成るの縁……（四七）……一二七
三〇、劫賊、惡奴の縁……（四八——四九）……一二八

出生菩薩品第四（卷の第四）……（五〇——六八）……一三〇

三一、蓮華王、身を捨て赤魚と作るの縁……〔五〇——五二〕……一三〇
三二、梵豫王、婆羅門は穀を施すの縁……〔五二——五四〕……一三二
三三、尸毘王、眼を剜り鷲に施すの縁……〔五四——五六〕……一三四
三四、善面王、法を求むるの縁……〔五六——五八〕……一三六
三五、梵摩王の太子法を求むるの縁……〔五八——六二〕……一三八
三六、婆羅門、佛從り債を索むの縁……〔六一——六二〕……一四一
三七、佛、般涅槃に垂とし五百の力士を度するの縁……〔六二——六四〕……一四三
三八、兎、身を燒き仙人に供養するの縁……〔六四——六六〕……一四四
三九、法護王子、母の爲に殺さるるの縁……〔六六——六七〕……一四六
四〇、劫賊、樓陀の縁……〔六七——六八〕……一四七
餓鬼品第五（卷の第五）……〔六九——八六〕……一四九
四一、富那奇、餓鬼に墮すの縁……〔六九——七〇〕……一四九
四二、賢善長者の婦、餓鬼に墮すの縁……〔七〇——七二〕……一五〇
四三、惡見にて水を施さず餓鬼に墮するの縁……〔七二——七三〕……一五二
四四、槃陀羅、餓鬼に墮し身體臭き縁……〔七三——七四〕……一五三
四五、目連、城に入り五百の餓鬼を見るの縁……〔七四——七六〕……一五四
四六、優多羅の母、餓鬼に墮するの縁……〔七六——七九〕……一五六
四七、生盲餓鬼の縁……〔七九——八〇〕……一五九
四八、長者若達多、慳貪餓鬼に墮するの縁……〔八〇——八二〕……一六〇
四九、餓鬼、自ら生み還び五百の子を噉ふの縁……〔八二——八三〕……一六二

五〇、嶠婆羅、餓鬼に似るの緣……〔八三―八六〕……一六三
諸天、來下供養品第六（卷の第六）……〔八七―一〇六〕……一六七
五一、賢面、慳貪にして毒蛇の身を受くるの緣……〔八七―八九〕……一六七
五二、月光兒、天に生るるの緣……〔八九―九一〕……一六九
五三、華を採り佛に供養し生天を得るの緣……〔九一―九三〕……一七一
五四、功德意、塔を供養し生天するの緣……〔九三―九四〕……一七三
五五、須達多、象に乘り勸化するの緣……〔九五―九六〕……一七五
五六、鸚鵡子王、佛を請ずるの緣……〔九六―九八〕……一七六
五七、王、使を遣はし佛を請じ命終して生天するの緣……〔九八―九九〕……一七八
五八、佛、水牛を度し生天せしむるの緣……〔九九―一〇二〕……一七九
五九、二梵志、共に齋を受くるの緣……〔一〇二―一〇五〕……一八二
六〇、五百の鴈、佛の說法を聞くの緣……〔一〇五―一〇六〕……一八五
現化品第七（卷の第七）……〔一〇七―一二〇〕……一八七
六一、身、金色と作るの緣……〔一〇七―一〇〕……一八七
六二、身、栴檀香有るの緣……〔一〇八―一一〇〕……一八八
六三、大威德有るの緣……〔一一〇―一一一〕……一九〇
六四、大力有るの緣……〔一一一―一一二〕……一九一
六五、人の爲に恭敬せらるる緣……〔一一二―一一三〕……一九一
六六、頂の上寶蓋有るの緣……〔一一三―一一四〕……一九三
六七、妙聲の緣……〔一一四―一一五〕……一九四

六八、百子、同時に產むの緣……〔一一五——一一七〕……一九五
六九、頂の上寶珠有るの緣……〔一一七——一一八〕……一九七
七〇、佛に幡を布施するの緣……〔一一九——一二〇〕……一九九
比丘尼品第八（卷の第八）……〔一二一——一二九〕……二〇一
七一、寶珠比丘尼、生れし時城內を光照するの緣……〔一二一——一二三〕……二〇一
七二、善愛比丘尼、生れし時自然に食有るの緣……〔一二三——一二四〕……二〇二
七三、白淨比丘尼、衣にて身を裹み生るるの緣……〔一二四——一二五〕……二〇四
七四、須漫比丘尼、辯才の緣……〔一二五——一二六〕……二〇五
七五、舞師の女、比丘尼と作るの緣……〔一二六——一二八〕……二〇六
七六、伽尸比丘尼、生れし時身袈裟を被るの緣……〔一二八——一二九〕……二〇八
七七、額の上眞珠鬘有る比丘尼の緣……〔一二九——一三一〕……二〇九
七八、差摩比丘尼生れし時二王和解するの緣……〔一三一——一三三〕……二一一
七九、波斯匿王の女子、醜の緣……〔一三三——一三七〕……二一三
八〇、盜賊人の緣……〔一三七——一三九〕……二一七
聲聞品第九（卷の第九）……〔一四〇——一五七〕……二二〇
八一、海生商主の緣……〔一四〇——一四一〕……二二〇
八二、須曼花の衣、身に隨つて產るるの緣……〔一四二——一四三〕……二二二
八三、寶手比丘の緣……〔一四三——一四四〕……二二三
八四、三藏比丘の緣……〔一四四——一四六〕……二二四
八五、耶舍蜜多の緣……〔一四六——一四七〕……二二六

八六、化生比丘の緣……〔一四七―一四九〕……三二七
八七、衆寶莊嚴の緣……〔一四九―一五〇〕……三二九
八八、罽賓寧王の緣……〔一五〇―一五三〕……三三〇
八九、拔提釋王比丘と作るの緣……〔一五三〜一五五〕……三三三
九〇、佛王子護國を度し出家せしむるの緣……〔一五五―一五七〕……三三五
諸緣品第十（卷の第十）……〔一五八―一五九〕……三三八
九一、須菩提、惡性の緣……〔一五八―一五九〕……三三八
九二、長老比丘、母胎中に在ること六十年の緣……〔一五九―一六二〕……三三九
九三、兀手比丘の緣……〔一六一―一六三〕……三四一
九四、梨軍支比丘の緣……〔一六三―一六五〕……三四三
九五、生死極めて苦しと唱へ言ふの緣……〔一六五―一六六〕……三四五
九六、長者の身體、瘡を生ずるの緣……〔一六七―一六八〕……三四七
九七、醜陋比丘の緣……〔一六八―一七〇〕……三四八
九八、恒伽達の緣……〔一七〇―一七三〕……三五〇
九九、長爪梵志の緣……〔一七三―一七七〕……三五三
一〇〇、孫陀利、端正の緣……〔一七七―一七八〕……三五七
菩薩本生鬘論解題……〔一―八〕……三五九
菩薩本生鬘論（十六卷中初十二卷）……〔一―一三六〕……三六七

卷の第一……〔一—一〇〕……二六七
投身飼虎縁起第一……〔一—五〕……二六八
尸毘王救鴿命縁起第二……〔五—七〕……二七一
如來分衛縁起第三……〔七—一〇〕……二七三
卷の第二……〔一一—二三〕……二七七
最勝神化縁起第四……〔一一—一七〕……二七七
如來不爲毒所害縁起第五……〔一七—一八〕……二八三
兎王捨身供養梵志縁起第六……〔一九—二三〕……二八五
卷の第三……〔二三—三二〕……二八九
慈心龍王消伏怨害縁起第七……〔二三—二七〕……二八九
慈力王刺身血施五夜叉縁起第八……〔二七—二九〕……二九三
開示少施正因功能縁起第九……〔二九—三二〕……二九五
卷の第四……〔三三—四三〕……二九八
如來具習不嫉他善縁起第十……〔三三—三六〕……二九八
佛爲病比丘灌頂獲安縁起第十一……〔三六—三七〕……三〇二
稱念三寶功德縁起第十二……〔三七—四〇〕……三〇三
造塔勝報縁起第十三……〔四〇—四二〕……三〇六
出家功德縁起第十四……〔四一—四三〕……三〇七
卷の第五……〔四四—五一〕……三一〇

菩薩施行莊嚴尊者護國本生義邊十一……〔四四〕……三一〇
菩薩布施莊嚴尊者護國往梵天生義邊十二……〔四四―四六〕……三一〇
菩薩布施莊嚴鬘飾尊者護國本生之事次第十三……〔四六―五一〕……三一二
菩薩布施莊嚴尊者護國本生義邊十有其四……〔五一―五七〕……三一七
卷の第六……〔五六―六八〕……三二二
菩薩布施莊嚴鬘飾尊者護國本生義邊第十五……〔五七―五九〕……三二三
菩薩布施行尊者護國本生之行次第十六……〔五九―六〇〕……三二五
菩薩行布施行莊嚴其處護國尊者本生義邊次第十七……〔六〇―六三〕……三二六
菩薩施行莊嚴護國尊者本生之義次第十八……〔六三―六六〕……三二九
菩薩施行嚴飾尊者護國本生之義次第十九……〔六六―七三〕……三三二
卷の第七……〔六九―七六〕……三三五
菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義邊次第二十……〔七三―七七〕……三三八
卷の第八……〔七七―八九〕……三四三
菩薩行布施行莊嚴之義尊者護國本生義邊第二十一……〔七七―八二〕……三四三
菩提薩埵修布施行護國尊者本生義邊第二十二幷
第二十三義合……〔八二―一〇三〕……三四八
卷の第九……〔九〇―一〇〇〕……三五六
卷の第十……〔一〇一―一〇七〕……三六七

菩薩施行莊嚴尊者護國本生義次第二十有四……〔一〇三——一〇九〕……二六八

卷の第十一……〔一〇八——一一四〕……二七四

菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第二十五……〔一一〇——一一四〕……二七六

卷の第十二……〔一一五——一二六〕……二八一

菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第二十六……〔一一五——一二二〕……二八一

菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第二十七……〔一二三——一二六〕……二八八

◇　◇

索引……卷末

# 巻の第四

## 瓶沙王諸弟子品第十六

時に彼の五比丘　阿濕波誓等は　彼の法を知るの聲を聞き、
慨然として自ら愧(は)じ、　合掌して敬を加へ、　尊顔を仰瞻せり。
如來は善く方便して　次に正法に入らしむ。　前後の五比丘は
道を得て諸根を調へたり。　猶ほ[一]五星は天を麗しうし、　明月に列侍せる如し。
時に彼の鳩尸城(カーシー)の　長者の子[二]耶舍(ヤシャス)は　夜、睡忽ち覺悟し、
自ら其の眷屬の　男女の身裸かにて臥し、たるを見て、　即ち厭離心を生じたり。
此は煩惱が本となり、　愚夫を誑惑せりと念ひ、　服を嚴にし、瓔珞を佩(を)び、
家を出でゝ山林に詣(いた)る。　路を尋ねて普く唱ふ。　「惱み亂れたり、惱み亂れ亂れたり。」と。
如來は夜經行して　『惱み亂れたり』と唱ふるの聲を聞き。　即ち命ず。『汝善く來れ。
此に安穩處有り。　涅槃は極めて淸涼にして　寂滅は諸惱を離る。』
耶舍は佛の教を聞き、　心中に大に歡喜し、　本よりの厭離心に乘じ、
聖慧冷然として開けり。　淸涼池に入る如く、　肅然として佛所に至れり。
其の身は猶ほ俗容の如くにて　心は已に[三]漏盡を得たり。　宿(ひさし)く殖へし善根の力にて
疾かに羅漢果を成ぜり。　淨き智理は潛明にして　法を聞いて能く即ち悟れり。
猶ほ鮮なる[四]素縞(そしよう)は　其の色を染むるを爲すは易きが若し。　彼は已に自ら覺知し
應に作す可き所は已に作したり。　身を顧みるに猶ほ莊嚴ありて、　慚愧心を生ぜり。
如來は彼の念を知つて、　爲に偈を說いて言ふ。　[五]『嚴飾するに瓔珞を以てし、

【一】五星、木星(東方歲星)火星(南方熒惑星)金星(西方太白星)水星(北方辰星)土星(中央塡星)の稱。

【二】耶舍(Yaśas)。波羅捺の長者の子にて榮華の生活を送つてゐた。以下の事跡本讃に詳しく傳へる如し。佛の聲にて河を渡つて來たと。歸佛後、友六十人と共に最初の傳道に派遣された。

【三】漏盡(Kṣīṇāsrava)。煩惱を滅盡した位をいふ。

【四】素縞。白き帛。

【五】此處では、修道は衣服によらず、在家出家の生活樣式によらず、精神に存するを說破さる。在家時代の出家高潮と相對照し、反つて佛教の眞意を現はす。

心は諸根を調伏し、　平等に衆生を觀る。　行法は形を計らず。
身は出家服を被り、　其の心は累りて未だ忘れず、　林に處り、世榮を貪るは、
是れ則ち俗人と爲す。　形は俗儀を表すと雖も、　心は高勝境に栖む。
在家も山林に同じければ、　則ち我所を離る。　縛を解くは心に存し、
形は豈に定相有らん　[六]鉀を佩びるも　[七]重袍を衣るも、　謂ふに能く强敵を制す。
形を改め、染衣を著るも、　煩惱の怨を伏する爲めなり』　即ち『比丘よ、來れ。』と命ずれば、
聲に應じて俗容變せり。　出家儀を具足し、　皆沙門と成れり。
先に彼に俗の遊朋有り、　[八]其數五十四なり。　善友の出家を尋ねて、
次に隨つて正法に入れり。　斯く宿善業に由り　妙果は今に成ぜり。
[九]淳灰は洽つて已に久しく、　水を經て速かに鮮明せり。　上行の　[一〇]諸聲聞
六十阿羅漢は　悉く羅漢法を知り、　隨順して敎誡されたり。
『汝今已に　生死の河の彼岸に濟度り、　所作已に畢竟り、
[一一]一切供を受くるに堪ゆ。　各〻應に諸國に遊び、　諸の未度者を度すべし。
衆生の苦は熾然とし、　久しく救護する者無し。　汝等各〻獨り遊べ。
哀愍して攝受せよ。　吾今亦獨り行き、　彼の伽闍山に還らん。
彼には大仙人有り、　王仙及び梵仙は　悉く皆彼に在り、
擧世の宗ぶ所なり。　迦葉苦行仙は　國人は悉く奉事し
受學者甚だ衆し。　我今往いて之を度せん。』　時に六十比丘は
敎を奉じ、法を廣宣せり。　各〻其の宿緣に從ひ、　意に隨つて諸方に詣れり。
世尊は獨り遊歩し、　伽闍山に往詣し、　空靜なる法林に入り、

---

【六】鉀。甲と同じ。鎧。
【七】重袍。袍は丈夫の服にて、腰下に著け、蹠に至るもの。
【八】五十四人の内四名は離垢(Vimala)、善臂 Subahu 又は善實善博、具足(Purna 又は滿足)、憍梵波提(Gavāmpati 又は牛王・牛主)。殊に憍梵波提は坐禪を好み、佛滅後大迦葉が王舍城にて第一結集をなした折、天上界尸利沙宮(又は尸利沙樹の幽居)にあり、佛滅を知らず、知らせを得て、自らも涅槃に入つた、と。
【九】淳灰。淳は「純し」「濃し」。一本純灰に作る。灰は衣の誤寫か。藏譯然り。
【一〇】聲聞(Śrāvaka)。佛の弟子にて佛の聲敎を聞いて四諦の理を知り、見思の惑を斷じて涅槃に入るもの。佛道中の最下根。
【一一】阿羅漢の資格の一。

〔二〕迦葉仙人に詣れり。彼は事火窟に有り、惡龍の居る所にて、
山林は極めて清曠にて、處々に不安無し。世尊は教化の爲に
彼に告げて宿を請ふ。迦葉は佛に白して言ふ。『宿止の處有る無し。
唯事火窟有り、善く清淨にて居る可し。而して惡龍の止る有り、
必ず能く人を傷害す。』佛言ふ。『但し與へられよ。且く一宿にて止住せん。』
迦葉は種々難ずるも、世尊は請ふて已まず。迦葉は復た佛に白す。
『心は相與ふるを欲せず。然れど我は悋惜有りと謂はれん。且く自ら所樂に隨ふべし。』
佛卽ち火室に入り、端坐して正思惟せり。時に惡龍は佛を見て、
瞋恚して毒火を縱にせり。舉げて室の洞は熾然たり。而して佛身に觸れず。
舍を盡し、火自ら滅し、世尊猶ほ安坐せり。〔三〕猶ほ劫火起り、
梵天宮の洞は然へ、梵王は正基に坐し、恐れず亦畏れざる如し。
惡龍は世尊の光顏に異相無きを見て、毒息み、善心生じ、
稽首して歸依せり。迦葉は夜に火を見て、歎ず。『嗚呼怪しい哉、
此の如き道德人にして龍火の爲に燒かる。』迦葉及び眷屬は
晨朝に悉く來つて看る。佛は已に惡龍を降し、鉢中に置在せり。
彼は佛の功德を知りて、奇特想を生ぜり。憍慢久しく習ふ故に
猶ほ『我が道尊し』と言ふ。佛は以て時宜に隨ひ、種々の神變を現はし、
其の心の所念を察し、變化して之に應ず。彼の心を柔軟にして
正法の器爲るに堪へ、自ら其の道の淺く、世尊に及ばざるを知らしむ。
決定して謙下の心生じ、〔四〕隨順して正法を受けたり。鬱毘羅迦葉と

【二】迦葉、詳しくは鬱毘羅迦葉（Uruvilvā-kāśyapa）。三迦葉中の長兄、事火派に屬し、火神アグニ（Agni）に事へ、その功德により解脫を求めてゐた。佛に教化されて後は、教團中でも高足の佛弟子と爲つた。

【三】劫末の末に、世界に劫火起り、滅盡すると言はれてゐる。

【四】大乘的佛傳普曜經（Lalitavistara）等では毒龍の迫害を更に誇張的に記す。又迦葉の剛慢の程度を更に詳しく記し、佛が彼を歸服せしめる爲種々の神通變化を現せることを記す。

弟子五百人とは　師の善調伏に隨ひ、　次第に正法を受けたり。
迦葉并びに徒衆は　悉く正化を受け已り、　仙人は資生物
并びに諸の事火具を　悉く水中に棄てたり。　漂沒して流に隨つて遷る。
[15]那提・伽闍等の　二弟は下流に居り、　被服・諸物の
流に隨つて亂下するを見て、　謂ふ。『其れ大變に遭へり。』　憂怖して自ら安ぜず、
二人の衆五百人は　江を尋ねて兄を求む、　兄の已に出家し、
諸弟子も亦然るを見て、　未曾法を得せしを知りて、　奇特想を起せり。
『兄今已に道に服せり。　我等も亦當に隨ふべし。』　彼の兄弟三人
及び弟子眷屬に　世尊は爲に說法せり。　[16]卽ち事火を以て、
愚癡の黑烟起り、　亂想の鑽燧生じ、　貪欲瞋恚の火は
衆生を焚燒せるに譬ふ。　是の如き煩惱の火は　熾然として休息せず、
生死に[17]彌淪せり。　苦の火も亦常に然ゆ。　能く二種の火を見るに、
熾然として依怙無し。　云何にして心有る人にして　厭離心を生ぜざらんや。
厭離して貪欲を除き、　貪盡きて解脫を得、　若し已に解脫を得れば、
解脫知見生じ、　生死の流を觀察して　梵行を擧げ、
一切所作已に作し、　更に[18]後有を受けず。　是の如き千比丘は
世尊の說法を聞き、　諸漏永く起らず、　一切心解脫せり。
佛は迦葉等　千比丘の爲に說法し、　所作は已に作され、
淨慧と妙莊嚴と　諸功德と眷屬あり、　戒を施して諸根を淨めたり。
大德仙、道に從ひて、　苦行林は榮を失へり。　人の戒德を捨て、

---

【一五】伽闍(Gayā)。那提(Nadī)。は欝毘羅迦葉の弟にて、兄が尼連禪河上流の欝毘羅村に住むに反し、少し下流の次兄伽闍住み、更に下に那提が住したと。共に事火派に屬する一婆羅門であつた。

【一六】事火僧に事火を以て喩とする說法を爲すは、佛の對人說法の好例を示す。

【一七】彌淪。遍く沈むこと。

【一八】後有(Punarbhava)。再生と同じ。來世に再び生れること。之は流轉輪廻に屬す。

身を空して徒に生くるが如し。　世尊と大眷屬は　進んで王舍城に詣で、
摩竭王先に修せし所の　要誓を憶念せり。　世尊既に至り已つて、
一九 杖林に止住せり。　瓶沙王は之を聞き、　大眷屬と倶に
國を擧げて士女從ひ、　世尊の所に往詣せり。　遠く如來の坐せるを見るに、
心を降し、諸根を伏し、　諸の俗容を除去し、　車を下りて歩み進めり。
猶ほ天帝釋の　梵天王に往詣せるが如し。　前んで、佛足を頂禮し、
體の和安を敬問せり。　佛は還りて勞を慰め畢り、　命じて一面に坐せしむ。
時に王は心に默し念ふ。　二〇『釋迦の大威力は　勝德の迦葉等
今皆弟子と爲れり。』　佛は衆心の念を知りて、　迦葉に問ふ。
『汝、何の福利を見て　事火法を棄てしや』　迦葉は佛命を聞き、
驚いて大衆の前に起ち、　胡跪して合掌し、　高聲にて佛に白して言ふ。
『福を修して火神に事ふるも、　果報は悉く輪廻し、　生死し煩惱は增す。
是故に我は棄捨せり。　精勤して火に奉事するも、　五欲境を求むる爲にて、
愛欲は增して窮り無し。　是の故に我棄捨せり。　事火は呪術を修するも、
解脫を離れ、生を受く。　生を受くるは苦の本と爲す。　故に捨てゝ更に安きを求む。
我本謂へらく、苦行は　祠祀し、大會を設け、　最第一勝爲り、と。
而して更に正道を違ふ。　是の故に今は棄捨し、　更に勝れし寂滅を求む。
生・老・病・死を離れ、　無盡淸涼處あり。　此の義を知るを以ての故に、
事火法を放捨せり。』　世尊は迦葉の　自らの知見の事を説くを聞き、
諸世間をして普く　淨信を生ぜしめんと欲せし故に、　迦葉に告げて言ふ。



【一九】杖林(Yastivana)。王舍城郊外の園林、後、此處に佛僧等の爲に精舍立ち、安居中止宿されること多かつた。

【二〇】他傳では佛が迦葉等の弟子と王市民等思ひ、その爲め佛は迦葉に神通を行ひ、佛弟子たるを表白せしめたりと傳ふるものあり。

『汝大士、善く來り、
種々の法を分別して、
勝道に從へり。
今大衆の前に於て
汝の勝れし功德を顯せ。
巨富の長者の
寶藏を開現する如く、
貧に苦める衆生をして
其の厭離心を增せしめよ。』
『善い哉、尊敎を奉ぜん。』
卽ち大衆の前に於て、
身を斂めて正受に入り、
飄然として虚空に昇り、
經行し、住し坐し臥し、
或ひは擧身洞然とし、
左右より水火を出し、
燒かれず、亦濡れず。
身より雲雨を出し、
雷電は天地を動せり。
世を擧げて悉く瞻仰し、
目を縱にして觀て厭く無し。
異口にして同音に
未曾有を稱歎し、
然る後に神通を攝し、
世尊の足を敬禮せり。
『佛は我が大師爲り、
我は尊の弟子爲り。
敎を奉じて斯の行を聞き、
所作已に畢竟せり。』
世を擧げて、普く彼を見て、
迦葉は佛弟子と爲り、
決定して、世尊に
眞實の一切智あるを知れり。
佛は諸の會衆の
受法の器と爲るに堪ゆるを知りて、
瓶沙王に告ぐ。
『汝今善く諦聽せよ。
心意及び諸根は
斯れ皆生滅の法なり。
生滅の過を了知するは、
是は則ち平等觀なり。
是の如き平等觀は
是は則ち身を知ると爲す。
身の生滅法は
取無く亦受無きを知る。
身の諸根覺れば、
我無く、[二]我所無きを知る。
純一の苦積聚し、
苦生じて苦滅す。
已に諸の身相の
我無く我所無きを知れば、
是は則ち之の第一の
無盡淸涼處なり。
我見等の煩惱は
諸世間を繋縛するも、
既に我所無きを見れば、
諸縛悉く解け脫す。
不實を見れば縛する所となり、
實を見れば則ち解脫す。
世間の攝受戒は

---

【二】我所。我所有の意。自身以外の萬物を言ふ。有我の人は自分以外の事物を皆自分の所有とす。

則ち邪攝受と爲る。　[三二]若し彼に[三三]我有れば、　或ひは常か或ひは無常なり。
生死の二邊見は　其の過最も尤も甚し。　若し無常ならしめば、
修行するも果無し。　亦後有を受けざれば、　功無くして解脫す。
若し有常ならしめば、　死生の中間無く、　則ち應に虛空に同じく、
生無く亦滅無かるべし。　若し有我ならしめば、　則ち一切同じく、
一切皆有我にして、　業果自ら成る無し。　若し我作者有れば、
應に苦んで修行すべからず。　若し自在主有れば、　何ぞ造作を須ひて爲さんや。
若し我あれば則ち有常にて、　理、變異を容れず。　苦樂の相有るを見れば、
云何ぞ有常と言はん　生を知れば則ち解脫し、　諸塵垢を遠離す。
一切悉く有常ならば、　何ぞ解脫を用ひて爲さん　無我は唯言はず、
理實に實性無し。　我作事を見ずして　云何ぞ[三四]我作を說かん。
我既に所作無し。　亦作我者無し。　此の二事無き故に
眞實に我有る無し。　作者知者無く、　主無くして、常に遷る。
生死は日夜流る。　汝今我が說を聽く。　[三五]六根と　六境界とは
緣に因つて[三六]六識生ず。　三事會つて[三七]觸を生じ、　[三八]心・念・業を隨轉せり。
陽珠、乾草に遇へば、　日を緣とし、[三九]火隨つて生ず。　諸根・境界・識
士夫生ずるも亦然り。　芽は種子に因つて生ずるも、　種は卽ち是れ芽に非ず。
卽せず亦異らず、　衆生の生も亦然り。』　世尊は眞實の
平等なる第一義を說き、　瓶沙王は歡喜し、　垢を離れし法眼生じ、
王眷屬人民　百千諸鬼神は　甘露法を說くを聞いて、



---

【三二】 以下に外道說を擧げて、佛敎的立場より批評す。その說は特殊の學派の說でなく、當時の民間說らしい。

【三三】 我(Ātman)。一般に身心の主體として主宰し、轉變の主體となるもの。

【三四】 我作は、我の創造をいふ。作我者は我を創造する者をいふ。

【三五】 六根(Indriya)とは、感覺器官にて、眼・耳・鼻・舌・身・意を言ふ。六境界(Viṣaya)とは色・聲・香・味・觸・法をいひ、六根所對の境界故にかく言ふ。

【三六】 六識 (Parijñāna)。とは眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識を言ふ。六根が次第にして色・聲・香・味・觸・法に對して、見・聞・嗅・味・覺・知の了別の作用を生ずるものをいふ。

【三七】 觸(Sparśa)。感覺を言ふ。

【三八】 心(Manas)。念(Smṛti)業(Karma)。藏譯はこの外慧(Buddhi)。を數ふ。

【三九】 珠(レンズ)に日光を集めて、物を燒くことを言ふか。

亦隨つて諸塵を離れたり。

## 大弟子出家品第十七

爾の時[30]瓶沙王は　稽首して世尊に　[31]竹林に遷住せんことを請ふ。
哀んで受くるが故に黙然たり。　王は已に眞諦を見て、　奉拜して宮に還れり。
世尊は大衆と　徒り居つて竹園に安ぜり。　衆生を度せん爲の故に、
慧燈明を建立し、　梵住・天住　賢聖住を以て住せり。
[32]時に阿濕波誓は　心を調へ、諸根を御し、　時至つて乞食を行じ、
王舍城に入れり。　容貌は世に[33]挺特し、　威儀諦かに安庠たり。
城中の諸士女にて　見る者、歡ばざるは莫し。　行者は住歩の爲に
前に迎へ後に風馳す。　[34]迦毘羅仙人は　廣く諸弟子を度せしが、
第一に勝れし多聞にて　共名[35]舍利弗といふなり。　比丘の庠序として
閑雅にて諸根を靜むるを見て、　路に蹰つて至るを待ち、　手を擧げ請問して言ふ。
『年少にて靜なる儀容あり、　我未だ曾て見ざる所、　何の勝妙法を得たるや
何の師に宗事したるや　師敎は何の所說なるや　願くは告げて所疑を決せよ。』
比丘は彼の問を欣び、　和顏にて遜辭にて答ふ。　『一切智を具足し、
甘蔗勝族に生れ、　天人中の最尊は　是れ則ち我が大師なり。
我年既に幼稚にて　學ぶ日も又初淺なり。　豈に能く大師の
甚だ深く微妙なる義を宣べんや　今當に淺智を以て　略して師の敎法を說くべし。
一切有法は生じて　皆因緣より起る。　生滅の法は悉く滅し、

---

【三〇】 瓶沙王(Śreṇya)。毘婆娑羅王(Bimsāra)に同じ。
【三一】 竹林精舍(Veṇuvana)。長者の所有であつた竹林で、もと尼犍子外道に與へたものを、後に佛に奉つて僧團の精舍とした。印度佛敎精舍の最初で、佛陀の愛し給ふたもの。王舍城の新城と舊城との間にあり、前者の北方(三百ヤード)の所にあり。
【三二】 「佛本行經」度寶稱品では、佛は馬勝の出ずるに前立ち、異學に出會ふべきを豫言し、四諦を說法すべきを命じてゐる。
【三三】 挺特。挺は拔ん出ずること。
【三四】 迦毘羅(Kapila)。數論の神話的開祖と稱せられる。舍利弗の師と一般に傳へるものと異る。
【三五】 舍利弗(Śāriputra)。王舍城外迦羅臂拏迦邑の出で、舍利(Śāri)の子で、名を優波底沙(Upatiṣya)と言ひ、六師外道の一人の沙然(Saṃjaya)に從つた出家で、弟子百人を持つてゐたと。歸佛因緣は大體本讃の傳へる如くである。歸佛後は佛弟子として教團に於ける極めて高足な重要な弟子となつた。法王子の嘉稱あり、智慧第一と言はれる。

道を説いて方便と爲す。」　二生[三六]優波提は　聽くに從つて心内に融け、
諸の塵垢を遠離し、　清淨なる法眼生ぜり。　先に修する所、決定して
因及び無因を知る。　一切は所作無く、　皆[三七]自在天に由るとせしも、
今、因縁法を聞き、　無我の智開明せしむ。　世の教は諸煩惱を增微し、
能く究竟に除く無し。　唯如來教有り、　永く盡きて遺る無し。
我所を攝受せずして　能く吾我を離る。　明かに日燈に因り興り、
熟して能く光なからしめん。　蓮花の莖を斷ち、　微絲猶ほ連綿たるが如し。
佛の教は煩惱を除き、　猶ほ石を斷ち、餘る無き如し。　比丘の足に敬禮して
退辭して家に還れり。　比丘は乞食し已り、　亦竹園に還歸せり。
舍利弗は家に還り、　貌色甚だ和かに雅かなり。　善友大[三八]目連は
同體にて聞才均し。　遙かに舍利弗の　顏儀甚だ＊熙怡するを見て、
告げて言ふ。『今汝を見るに、　常容と異る有り、　素より至つて沈隱なるに、
歡相、今に見ゆ。　必ず甘露法を得たらん。　此の相、因無きに非ず。』
答へて言ふ。『如來に告げられ、　實に未曾法を獲たり。』　即ち請ふて爲めに說かしめ、
聞けば即ち心開解し、　諸塵垢も亦除き、　隨つて正法眼生ぜり。
久しく妙因果を殖へ、　掌中の燈を觀るが如し。　佛の不動の信を得たり。
倶に佛所に行詣し、　徒衆弟子　二百五十人と共なりき。
佛は遙かに二賢を見て、　諸衆に告げて言ふ。　『彼の來れる者二人は
吾が上首の弟子たり、　一は智慧無雙にて　二は神足第一たらん。』
深淨なる梵音を以て　即ち命ず。『汝善く來れ。』　此に清涼法有り、



【三六】 二生(Dvija)、婆羅門のこと、優波提(Upatiśya)は舍利弗の名。

【三七】 自在天。創造主としての梵天を言ふ。

【三八】 目連(Maudgalyāyana) 王舍城外拘律陀村の出身で、名は拘律陀(Kolita)と言ひ、舍利弗と共に沙然の弟子であつた。弟子百人あつたが、安心立命せず、二人は先に良師に會つた者が他に教へる約であつた。歸佛後は目連も教團に重要な高足となり、神通第一の稱がある。

＊熙怡。樂しみ喜ぶこと。

出家究竟道なり。』
手に[三九]三掎杖を執り、
桊髮にて澡瓶を持ち、
佛の善來の聲を聞き、
卽ち變じて沙門と成れり。
二師及び弟子は
悉く比丘儀となり。
世尊の足に稽首し、
卻いて一面に坐せり。
隨順して、説法の爲に、
皆羅漢道を得たり。
爾の時二生有り、
[四〇]迦葉族の明燈にて、
[四一]多聞にて身相具し、
財盈ち、妻極めて賢し。
厭捨して出家し、
志して解脫道を求む。
路、[四二]多子塔に由り、
忽ち[四三]釋迦文に遇へり。
光儀顯れ、明かに耀き、
猶ほ祠天幢の若し。
肅然として擧身にて敬ひ、
稽首して足を頂禮せり。
『尊は我が大師爲り、
我は是れ尊が弟子たり。
久遠に癡冥を積めり。
願くは爲めに燈明と作られよ。』
佛は彼の二生の
心樂んで解脫を崇ぶを知り、
清淨なる軟和音にて
之に命ずるに『善來』を以てす。
命を聞いて心融け泰かに、
形神疲勞して息み、
心は勝解脫に栖めり。
寂靜にて諸塵を離れ、
大悲して所應に隨ひ、
略して其の爲に解脫し、
諸深法を領解し、
四無礙辯を成ぜり。
大德は普く流聞し、
故に[四四]大迦葉と名く。
本、身と我と異ると見、
或は我卽ち身にて
我及び我所有りと見しも、
斯の見、已に永く除き、
唯衆苦の聚を見る。
苦を離れば則ち餘無し。
戒を持し、苦行を修し、
非因にして因を見る。
平等に苦性を見、
永く他の聚心無し。
若しくは『有り』、若しくは『無し』と見る。
一見は猶豫を生ず。
平等に眞諦を見て、
決定して復た疑無し。
財色に染著し、
迷醉して貪欲生ず。
無常不淨想あれば、
貪愛は永く已に弭く。
慈心平等念あれば、

---

【三九】三掎杖。掎はかたよること。三掎杖は三叉の杖をいふ。三掎杖、桊髮澡瓶は婆羅門修行者の標である。

【四〇】迦葉(Kāśyapa)。

【四一】多聞(Bahuśruta)。多く聞ける、卽ち學識ある。

【四二】多子塔。王舍城に近き那羅聚落の中程にある神祇で、繁蒼たる樹木枝を交へたりと。

【四三】釋迦文(Śākyamuni)。釋迦族の仙士の意。

【四四】大迦葉(Mahākāśyapa)履歷については本讃に詳しい。王舍城附近の摩訶婆羅陀村の出身。妻は、吠舍離城附近の迦羅毗迦村の富豪婆羅門の子で妙賢と言ひ、美貌賢明であつた。二人は修行者としての純潔な家庭生活を送つたと。歸佛後は佛弟子中一、二の高足の弟子となり、少欲知足頭陀(dhūta 修治)第一と言はれるに至つた。滅後最初の王舍城の結集は大迦葉によつて司宰された。

怨親、異想無し。　一切を哀愍すれば、　則ち瞋恚の毒を消す。
色に依り諸有對　種々の雜想生ず。　思惟して色想を壞せば、
則ち色を愛に斷ず。　無色天に生ずと雖も、　命は亦之を要するに、盡く。
四正受を愚にして　解脱想を生じ、　寂滅して諸想を離る。
無色なれば貪永く除き、　動亂心は變逆して、　猶ほ狂風鼓浪の如し。
深く堅固定に入り、　(四五)掉亂心を寂止し、　法は我所無く、
生滅は堅固ならずと觀る。　(四六)歎中上を見ず、　我慢心自ら忘る。
智慧燈を熾へ然やし、　諸癡冥闇を離れ、　盡無盡法を見、
無明悉く餘る無し。　(四七)十功德を思惟し、　(四八)十種煩惱滅し、
甦息し、所作已に作されたり。　深く感じて尊顏を仰ぎ、　(四九)三を離れて　三を得、
(五〇)三弟子、三を除く。　猶ほ三星布列し、　(五一)三十三司弟の
三五に列侍する如し。　三の佛に侍するも亦然り。

## 化給孤獨品第十八

時に大長者有り、　名けて　(五二)給孤獨と曰ふ。　巨富財無量にて
廣く施して貧乏を濟ふ。　遠く北方　(五三)憍薩羅國より來り。
一知識舍に止る。　主人は　(五四)首羅と名く。　佛の世に興り、
近く竹園に住するを聞き、　名を承つて其の德を重じ、　即夜彼の林に詣れり。
如來は已に彼の　根熟し、淨信生ぜしを知り、　宜に隨つて其の實を稱へて、
爲に說法して言ふ。　『汝已に正法を樂しみ、　淨き信心虛渴し、



【四五】 掉亂心。掉はふるふ、ゆるぐこと。
【四六】 歎中上即ち下中上。
【四七】 十功德。(1)精勤、(2)少欲知足、(3)有勇猛心、(4)多聞能與人說法、(5)無畏無恐、(6)戒律具足、(7)三昧成就、(8)智慧、(9)解脱成就、(10)解脱見慧成就。
【四八】 十種煩惱。(1)貪煩惱、(2)瞋煩惱、(3)癡煩惱、(4)慢煩惱、(5)疑煩惱、(6)身見、(7)邊見、(8)邪見、(9)取見、(10)戒禁取見。
【四九】 三毒、貪・瞋・癡を言ふ。
【五〇】 舍利弗・目連・大迦葉を言ふ。
【五一】 三十三司弟 (Trayastriṁśa-deva)。
【五二】 給孤獨 (Anāthapiṇḍika)。舍衛城の長者にて、實名は須達(Sudatta)といひ、この名孤獨者に布施する故、有力なる有り。佛に歸依し、祇園精舍を祇外護者となり、太子と共に奉獻す。

能く睡眠を滅じて　來つて我を敬禮せり。　今日當に汝の爲に
具に初賓の儀を設くべし。　汝宿しく徳本を殖へ、　堅固にて其の望を淨め
佛名を聞いて歡喜し、　正法の器爲るに堪ゆ。　虚懷にして廣く惠を行じ、
貧窮に周ねく給し、　名徳普ねく流聞す。　果成るは宿因に由る。
今當に法施　至心精誠施を行ずべし。　時に寂靜施を施さん。
兼ねて淨戒を受持せよ。　戒は莊嚴具と爲り、　能く惡趣を轉じ、
人をして天に上昇せしめ。　報ゆるに天の五樂を以てす。　諸求は大苦爲り、
愛欲は諸過を集む、　當に惡を遠離し、　欲を離れし寂靜樂を修すべし。
[五五]老・病・死の苦　世間の大患を知り、　正に世間を觀察し、
生・老・病・死を離れよ。　既に人間に　老・病・死の苦有るを見たり。
生天も亦復た然り。　常存者有る無し。　無常は則ち是れ苦にて
苦は則ち我有る無し。　無常の苦は我非らず。　何ぞ我、我所有らん
苦は、即ち是れ苦なるを知り、　集は則ち集と爲す。　苦滅すれば即ち寂靜にて
道は即ち安穩處なり。　群生は流動性なり。　當に知るべし、是れ苦の本なり。
末を厭して其の源を塞ぎ、　有・非有を願はず。　生・老・死の盛火にて
世間は普ねく熾然たり。　生死の動搖するを見て、　當に無想を習ふべし。
[五六]三摩提は究竟にて　甘露の寂靜處なり。　空は我、我所無く、
世間は悉く幻の如し。　當に此の身を觀るべし。　諸大衆の行聚なり。』
長者は說法を聞いて、　即ち[五七]初果を得たり。　生死の海は消滅して
唯一滴、餘り有り。　空閑にて離欲を修するも、　第一有無の身あり。

---

【五三】憍薩羅(Kosala)。北印度にあり、大國にて、波斯匿王(Prasenajit)即ちアグニダッタ(Agnidatta)が王位にあり、舍衞城(Srāvasti)に都す。

【五四】首羅(Sūla 又は Sūla)王舍城にある須達の友人にて豪商の名。

【五五】四諦即ち苦・集・滅・道の說明。

【五六】三摩提(Samādhi)。定を言ふ。

【五七】初果、聲聞乘四果中の第一預流果(Srotāpanna-phala)である。凡夫を去つて初めて聖道の法流に入るをいふ。

今俗人にて　眞諦を見て正解脱するに如かず、　諸苦行を離れずして、」
種々の異見の網あり、　第一有に至ると雖も、　眞實義を見ず。
邪想は天福に著し、　愛有れば、縛轉じ深し。　長者は說法を聞き。
陰蓋[58]煥然として開けたり。　正見を逮得して　諸の邪見永く除けり。
猶ほ秋の[59]厲風の　重雲を飄散する如し。　[60]自在の因を計らず、
亦邪因にて生ぜしに非ず。　亦復た無因にて　世間に生ぜしに非らず。
若し[61]自在天、生ぜしならば、　長幼先後無く、　亦[62]五道の輪廻無し、
生者應に滅すべし。　亦應に災患あるべからず。　惡を爲すも亦過ならず。
淨業と不淨業とは　斯は自在天に由る。　若し自在天、生ぜしならば、
世間應に疑あるべからず。　子の父より生ぜし如く、　孰れか其の尊を識らざらん。
人、窮苦に遭へる時、　應に反つて天を怨むべからず。　悉く應に自在天を宗とぶべし。
應に餘神を奉ずる可らず、　自在天は是れ作者ならば、　應に自在天と名くべからず、
其れ是の作を以ての故に　彼は則ち應に常に作すべし。　常に作せば則ち自ら勞す。
何ぞ名けて自在天と爲さん。　若し無心にて作せば、　嬰兒の所爲の如し。
若し有心にて作せば、　有心は自在に非らず。　苦樂は衆生に由れば、
則ち自在天の作れるに非ず。　自在天が苦樂を生ぜしならば、　彼は應に愛憎有るべし。
已に愛憎有るの故に、　應に自在天を稱すべからず。　若し復た自在天の作なれば、
衆生は應に默然たるべし。　彼の自在力に任せ、　何ぞ修善を用ひて爲さんや。
正に復た善惡を修するも、　應に業報有るべからず。　自在天が若し業を生ずれば、
一切は即ち共業なり。　若し是れ共業なれば、　皆應に自在天を稱すべし。




【五八】　煥然。明かなる貌。
【五九】　厲風。西北の風。大風。淋しく寒むげに吹く風。
【六〇】　以下世界の創造主に就いての長き論議がある。その學說は(1)自在天(Īśvara)が創造である、(2)自性が因である、(3)時が作者である、(4)我(大我の意味の)が原因である、(5)因無し、である之等の說は事實佛陀によつて說かれたのでなく、馬鳴によつて挿入されたのであらう。
【六一】　正確には「自在天が生ぜしめしならば」、自在天(Īśvara)は創造主としての梵天のこと。以下自在天創造說を佛教的態度より批評す。
【六二】　五道即ち五趣即ち天人、畜生・餓鬼・地獄。

自在天は若し無因ならば、
自在天は應に窮り無るべし。
當に知るべし、自在義は
說く無ければ則ち過有り。
諸の[六四]明因論者は
能く所作有り。
是の故に一切を知れば、
唯一因より生ぜしに非ず、
若しくは彼の自性は
亦能く所作無し。
若し一切處に遍ければ、
常に應に所作有るべし。
是れ故に應當に知るべし。
一切の[六五]求那を離ると說く。
一切の諸世間は
亦復た因と爲すに非ず。
常を以て因と爲す故に
故に自性は因に非ず。
自性を以て因と爲せば、
當に別に因有りと知るべし。

一切も亦應に無かるべし。
是の故に諸の衆生は
此の論に於ては則ち壞る。
若し復た[六三]自性より生ぜしならば、
未だ曾て是の如きを說かず。
彼々皆な因に由り、
則ち自性より生ぜしに非ず。
而して一自性を說く。
一切の處に周滿すると言ふ。
既に能く所作無きは
一切に作者有り。
若し常作者ありと言ふならば、
自性は因と爲るに非らず。
一切の所作事は
悉く求那有るを見る。
若し彼の自性は
其の性は應に異るべからず。
自性若し常住ならば、
因果の理は應に同じかるべし。
若し彼が自性の因ならば、

若し餘の自在天に因れば、
悉く作者有る無し。
一切義は相違す。
其の過も亦是の如し。
所依無く因無くして
猶ほ種子に依る如し。
一切の諸の所作は
是の故に則ち因に非らず。
若し一切に周滿するも
是は則ち因と爲すに非ず。
是は則ち一切時に
時を待つて物を生ずる無し。
又彼の自性は
亦應に求那を離るべし。
是の故に知る、自性は
求那に異る者ありと說くならば。
衆生は求那と異る、
事も亦應に壞つべからず。
世間は壞を見る故に、
應に解脫を求むべからず。

---

【六三】自性數論の自性 Pra-kriti 物質の本源で、三德未分の位で、それより變異（現象界）が轉變する。詳しくは前出（十二品參照）常住偏滿唯一の性質と求那を說く邊數論の自性（Prakṛti）を示してゐると思はれる。

【六四】明因論者、原本漢譯然り。因明論者（Hetuvidyā）の誤り？

【六五】求那（Guṇa）、性質の意。自性の成分。凡ての存在物の主な性質。詳しくは前出。（看第十二品）。

自性有るを以ての故に
自性還つて縛を生ず。
此も亦因と爲さず、
因果悉く倶に見ゆ。
烟を見て火を知る如く、
見事を生ずるに非らず。
自性は是れ事の因ならば、
應に解脱を求むべからず。
世間に邊有る無し
應に方便して求むべからず。
種々の説有りと雖ども
應に欲に隨つて生ずべし。
欲せずして更に得る。
云何にして我作れりと言はん。
種々の業果生ず。
時は應に唯善を作るべし。
若し無因を作者ならしめば、
因を修するに何の所爲あらん。
是れ故に一切は　無因が作せりと爲すに非ざるを知る。
悉く因縁より起る。

應に彼の生滅を任ずべし。
若し自性見ざれば、
因果の理は殊なる故、
若し自性に心無ければ、
因果の類は相求む。
猶ほ金にて器服を造るも、
始終豈に殊るを得んや。
彼の時は常なるを以て
時節亦た復た然り。
[六七]陀羅驃求那なる
當に一因に非ずと知るべし。
而して今欲に隨はずして
欲者は反つて更に違ふ。
若し我を作者たらしめば、
故に我作れるに非るを知る。
善惡、緣に隨つて生ず。
應に方便を修すべからず。
世間に種々の業あつて
世間の一切法は

假令解脱を得るも、
法因を見る者と爲す。
世間の諸見事は
應に心の因有るべからず。
彼の因を見ずして
始終金を離れざる如し。
若し[六六]時を作者たらしめば、
彼の時節に任すべし。
是が故に修行者は
世間の一異論あり。
若し[六八]我作れりと説くならば、
云何して我作れりと説かん。
苦樂は自在ならず、
應に惡趣業無かるべし。
我は時に隨つて作れりと言ふも、
故に我作れるに非るを知る。
一切が自然に定れば、
種々の果を獲る。
有心及び無心は
無因にて生ぜし者に非ず。』

---

【六六】時(Kāla)。

【六七】陀羅驃求那。Tripunna guna śāstra? 然し如何なる教論なるか、不明。

【六八】我(Ātman)。

長者の心は開解し、　勝妙義を通達し、　一相にて實智生じ、
決定して眞諦を了せり。　世尊の足に敬禮し、　合掌して啓請せり。
[六九]「舍婆提に　居住されよ。　土地豐かにて安樂なり。　[七〇]波斯匿大王は
師子元族の冑にて　福德名稱流れ、　遠近の宗敬する所なり。
精舍を造立せんと欲す。　唯願くは哀愍して受けられよ。　佛心は平等にて
居る所安きを求めざるも、　彼の衆生を愍むの故に、　我が所請を違へざるを知る。」
佛は長者の心を知り。　大施、今に發す。　染無く所著無く、
善く衆生の心を護れり、　「汝已に眞諦を見たり。　素より心好んで施を行ず。
錢・財・非常寶は　宜しく應に速かに施を爲すべし。　藏庫の燒かれ、
已に出せし者は珍と爲すとも、　明かに人は無常を知り、　財を出して廣く惠を行ふ如し。
慳貪者は守り惜んで　恐れ盡きて受用せず、　亦無常を畏れず、
徒に失つて憂悔を增せり。　應時に應器を施し、　健夫の敵に臨んで、
能く施して能く戰ふ如し。　是は則ち勇慧の士なり。　施者は衆の愛する所、
善稱は廣く流聞す。　良善樂は友と爲り、　命終つて心常に歡ぶ。
悔無く、亦怖無く　餓鬼趣に生ぜず。　此は則ち花報と爲す。
其の果は思議し難し。　[七一]六趣の中に輪廻するに、　良伴は施に過ぐる無し。
若し天人中に生ずれば、　衆の爲に奉事する所となる。　畜生道に生れゝば、
施報隨つて樂を受く。　智慧は寂定を修し、　依無く數有る無し。
甘露道を獲ると雖も、　猶ほ資施以て成る。　彼の惠施を緣とする故に。
[七二]八大人念を修し、　念に隨つて歡喜心あり、　決定して三摩提あり、

【六九】舍婆提(Sravasti)、舍衛とも記す。北邊の大國拘薩羅(Kosala)の首都で、波斯匿王(Prasenajit)毘琉璃王(Viruḍhaka)の父子、王であつた。

【七〇】波斯匿王(Prasenajit)拘薩羅の國王で、毘琉璃王の父で、强盛な國王であつた。佛に歸してからは、摩伽陀の瓶沙王と共に、有力な外護者であつた。子毘琉璃によつて不遇の最期を遂げたと言はれる。

【七一】六趣。五趣に阿修羅を付け加へる。

【七二】八等至(Samāpatti)に當る。1. paṭhamajjhāna-samāpatti, 2. dutiyajjhāna-samāpatti, 3. tatiyajjhānas, 4. catutthajjhānas, 5. ākāsānañcāyatanas, 6. viññāṇañcāyatanas, 7. ākiñcaññāyatanas, 8. nevasaññānāsaññāyatanas。

三昧は智慧を増し、　能く正に生滅を觀る。　正に生滅を觀已り、
次第に解脱を得。　財を捨て惠施する者は　貪著を蠲除す。
慈悲して恭敬して與へ、　兼ねて嫉恚慢を除く。　明かに惠施の果を見て、
無施の癡は除かるゝを見、　諸[七三]結煩惱は滅す。　斯は惠施に由る。
當に惠施は　則ち解脱因と爲ると知るべし。　猶ほ人の種き栽るは、
蔭と花果の爲の故なり。　布施も亦是の如し。　報樂は大涅槃なり。
不堅固なる財施にて　報として堅固果を獲る。　食を施せば唯力を得、
衣を施せば好色を得る。　若し精舍を建立すれば、　衆果は具足し成る。
或は施して五欲を求め、　或は大財を貪求す。　或は名聞[七四]施の爲に、
生天樂を求むる有り。　或は貧苦を免れる爲になす。　唯汝は無想施なり。
施中の最上にて、　利無くして獲あらず。　汝の心弘き所有り。
宜しく速かに成就せしめよ。　癡愛の心は來り遊ぶも、　清淨眼は開き還れ。』
長者は佛の敎を受け、　惠心轉じて增明せり。　[七五]優波低舍を請じ、
賢友と而して同じく歸り、　彼の憍薩羅國に還り、　周行して良墟を擇べり。
太子の[七六]祇園の　林流極めて清閑なるを見て、　太子の所に往詣して
請ふて其の田を買ふを求む。　太子は甚だ寶を惜み、　元より賣心を出す無し。
『設ひ黃金を布いて滿つるも　猶ほ倘地は遷らず』　長者は心に歡喜し、
卽ち黃金を遍ねく布けり。　祇言ふ。『我、與へず、　汝云何にして金を布くや』
長者言ふ。『與へざれば、　何ぞ黃金を滿たせと言はん。』　二人共に諍訟し、
延びて斷事官に及べり、　衆、皆奇特を歎じ、　祇も亦其の誠を知り、



【七三】 結。結集の意。繫縛の意。煩惱の異名。煩惱因となり。生死を結集する故結といひ、衆生を繫縛して解脱させぬので、結といふ。卽ち生死の因たるもの。

【七四】 名聞を得る爲に爲す施。

【七五】 優波低舍(Upatiśya)。諸傳も、祇園精舍建設の折は舍利弗が行いて指導せるを記す。

【七六】 祇(Jeta)。憍薩羅國の波斯匿王の太子で、多分毘琉璃王の長兄であらう。此時、給孤獨の懇請に出會つて、自らも打たれ、祇は樹木を寄附した。この折の圖表がバルフート塔(Bharhut Stūpa)。の圖表五七に出てゐる。

廣く其の因緣を問ふ。　辭して曰く『精舍を立て、　如來幷びに
比丘僧を供養せん。』　太子は佛の名を聞き、　其の心卽ち開悟し、
唯其の半金を取り、　和を求め、同じく建立せり。　『汝は地、我は樹林を、
共に以てして佛を供養せん。』　長者は地を、祇は林を、　以て舍利弗に付せり。
經て始めて精舍を立て、　晝夜勤めて速かに成り。　高く顯れ、勝れて莊嚴に
猶ほ[七七]四天王宮の如し。　法に隨ひ、道宜に順ひ、　如來の所應を稱へたり。
世間に未だ曾つて有らず、　暉を舍衞城に增せり。　如來は神蔭を現し、
衆聖は集つて[七八]安居せり。　無侍者は哀んで降り、　有侍は道宜を資せり。
長者は斯の福に乘じ、　壽盡き、天に上昇し、　子孫、其の業を繼いで、
歷世、福田を種けり。

## 父子相見品第十九

佛は摩竭國に於て　種々の[七九]異道を化し、　悉く一味の法に從はし、
日の衆星に映ずる如し。　彼の五山城を出で、　千弟子と倶にて
前後に眷屬を從へ、　尼金山に往詣せり。　[八〇]伽維羅衞城に近くして
報恩心を生ぜり。　當に法供養を修し、　以て父王を奉ずべしとす。
[八一]王師及び大臣　先に伺候人を遣し、　常に尋ねて左右を從へ、
其の進止を瞻察せり。　佛の事に還らんと欲するを知り、　[八二]駈馳して先に白す。
『太子遠く遊學して　願滿ちて今來り還る。』　王は聞いて大に歡喜し、
駕を嚴にして卽ち出で迎へたり。　國を擧げて諸士庶は　悉く皆王に從つて行けり。

【七七】四天王宮、四天王は帝釋の外將である。須彌山の半腹にある由揵陀羅に四頂あり、四王各こゝに居り、各一天下を守る。その所居を四王天といふ。是れ六欲天の第一にて天處の最初なり。四王天 Caturmahārājakāyikās と稱し、東は持國王 Dhṛtarāṣṭra 南は增長王 Virūḍhaka 西は廣目天 Virūpākṣa 北は多聞天 Dhanada 又は Vaiśramaṇa といふ。
【七八】安居。印度の僧徒は雨期三ケ月間外出を禁じて坐禪修學を勵む。之を雨安居と名く。異名坐夏坐臘、
【七九】異道。外道と同じ、佛教以外の教論を奉ずる者。
【八〇】佛陀歸國の時期は數論あり、一は王舍城の名城迦毘羅城に傳はり、父王は太子を長く見ず、老衰したので、使を遣り招いたとし、時期は成道第一年とし、又祇園精舍建立後、波斯匿王が佛に歸依し、佛の成道を知したので、父王は使を出し迎へたとする。祇園建立は第三年說、第六又は七年說、十二年又は十五年說がある。恐らく成道後第五、六年頃とするが正しからう。
【八一】他說によれば、優陀夷等の使者は佛陀の說法を聞いて歸鄉せず、最後に迦留陀夷

漸く近づき佛を見るに、
猶ほ梵天王の如し、
顏を瞻いで內に欣誦し、
子超然として登仙せるを顧る。
自ら惟ふに久しく思ひ渴して、
安隱にして容を改めず。
人の久しく虛渴して
泉に臨んで忽ち枯渴す。
心踈に氣高絕に
渴して枯れし泉に對する如し。』
人の離れし親を念ひ、
猶ほ[八四]曼陀王の若し。
[八五]安靜なること須彌山の如く。
無畏師子吼なし、
[八六]佛は父王の心に
幷びに一切衆を哀んで、
空中を遊行し、
還りて復た合して一と爲る。
石壁も身を礙らず、
父子の情悉く除けり。

光相、昔容に倍せり。
車を下りて徐ろに進み、
口に言ふ所を知る莫し。
子、道尊に居ると雖も、
今日宣ぶる由無し。
久しく別れて感情無し。
路に清涼なる泉に逢ふ如し。
今我其の子を見るに、
都て蔭流心無し。
未だ見ざれば繁想馳せ、
忽ち畫形の像を見る如し。
汝今乞食を行ず。
光相は日の明かなる如し、
四天の封を受けず、
猶ほ子の[八七]想を存するを知り、
[八八]神足にて虛空に昇り、
種々の異變を作せり。
或ひは水を履むこと地の如く、
[八九]左右より水火を出せり。
空中の蓮花座に坐して

大衆中に處り、
恐れて法留難を爲す。
自らは貪つて俗累に居り。
未だ何の名を稱するやを知らず。
子今は默然と坐し、
[八三]『我が心獨り悲しましむ、
奔馳して飲まんと欲し、
猶ほ是れ本の光顏あり。
情を抑へて虛望斷つ。
對目すれば則ち歡ぶ無し。
『應に四天下に王たるべきを、
斯の道は何ぞ榮とするに足らん。
庠に行き、牛王の步なし、
乞ひ求めて身を養ふ。』
其の心を開くの爲の故に、
兩手にて日月を捧じ、
或ひは分身すること無量に、
或ひは地に入ること水の如し。
父王は大に歡喜し、
王の爲に說法せり。



---

Kalodayin が行き、出家したが、能く王の命を果したとする。因緣譚は更に誇張し、千人を九回遣はし出家し、最後に優陀夷を千人の頭として、遣して使命を果したといふ。

【八二】 待ち戀れてゐた子を迎へた喜びと、沙門の異裝の驚きに、胸ふさがり、言葉なき、父王の心胸を短き文にてよく短的に現す。

【八三】 愛子の沙門の姿を見、轉輪王たるを太子に期待してゐた王の悲嘆と一種の恥辱とを生々と語らしてゐる。

【八四】 曼陀王(Māndātṛ)。有名な轉輪王である。詳しくは前出。轉輪王は世界の統一王にて、四天下に王たり。

【八五】 安靜如須彌 光相如日明 庠行牛王步 無畏師子步 佛、こゝでは轉輪王の妙相である。

【八六】 佛陀は期待を裏切られ落膽する王の心を知り、轉輪王以上の轉輪法王の威力を示し、以て王以下を救はうとする。

【八七】 父子の世間一般の相互的の權利義務(子が父に敬意を拂ふ等の)の念あるをいふか。

【八八】 神足(Ṛddhi)。神通を言ふ。

【八九】 對の神通。(Yamaka-

『王の心は慈念して　子の爲に憂悲を增し、　纒綿して子を愛念するを知る。
宜しく應に速かに除滅すべし。　愛を息め、其の心を靜め、　我が子の養法を受けよ。
人の子の未だ奉ぜざる所を　今以て父王に奉ぜん。　父未だ子より得ざるを
今子より之を得。　人王の奇特にて　天王にも亦希有なる
勝妙の[九〇]甘露道を、　今以て大王に奉ぜん。　自業は業を受けて生じ、
業は業果報に依る。　當に知るべし、業の因果は　度世業を勤習す。
世間を諦觀するに、　唯業は良朋爲り。　親戚及び身は
深く愛して相ひ戀慕するも、　命終つて神獨り往き、　唯業は良朋にして隨ふ。
五趣に輪廻し、　[九一]三業は三種に生ず　愛欲は其の因と爲り、
種々の類に差別す。　今當に其の力を竭し、　身口業を淨治すべし。
晝夜勤めて修習し、　亂心を息め、寂然たれ。　唯此は己利と爲る。
此を離れよ。悉く我に非ず。　當に知るべし、[九二]三界の有は　猶ほ海濤波の若し。
樂み難く、習近し難し。　當に第四業を修すべし。　生死の五道の輪廻は
猶ほ衆星の旋轉する如し。　諸天も亦遷變す。　人中にて豈に常住を得んや。
[九三]涅槃は最安と爲す。　禪寂樂中の勝なり　人王の五欲の樂は
危險にて恐怖多し。　猶ほ毒蛇の同居する如し。　何ぞ須臾も歡び有らん。
明に人は世間を見るに、　盛火の圍遶する如し。　恐怖して暫くも安き無し。
生・老・死を離るを求む。　無盡寂靜處にて　慧者の居る所なり。
利き器、仗　象馬、以て[九四]兵車を須ひず、　貪・恚・癡を調伏せよ。
天下の敵は勝つ無し。　苦を知り、苦因を斷じ、　滅を證し、方便を修せ。

---

pātihāriyaṃ)。であらうか。(cf. Rhys Davids: Birth stories p. 105 n).

【九〇】甘露道(Amṛta-mārga) 卽ち不死への道。甘露(Amṛta)は佛音(Buddhaghosha)によれば、涅槃 Nirvāṇa と同意であると。漢譯書にても屢〻かく譯されてゐる。卽ち涅槃への道。

【九一】身・口・意の三業をいふ。

【九二】三界の有(Bhava)。卽ち三界に於ける存在。

【九三】涅槃(Nirvāṇa)。

【九四】王侯が敵を征伏するに用ふる武器である。心の敵を征伏するにはかゝるものを要さず、四諦八正道に因る。

正覺四眞諦にて、
王の心を歡喜せしめ、
合掌して讃歎す。
奇なる哉、我を饒益す。
奇なる哉、我今日
宜しく精勤して苦を習ふべし。
古昔の諸仙王は
汝は今、悉く已に獲たり。
昔本世間に住し、
如何ぞ我が心を開解せしめんや。
設ひ轉輪王と爲るも、
輪廻の大苦は滅し、
此の如き妙神通あり、
天人の上と爲れり。
是の如く讃歎し已り、
謙卑して稽首して禮せり。
深妙の法を說くを聞き、
悉く奇特想を生じ、
釋種の諸王子は
親愛を捨てゝ出家せり。

惡趣の恐怖は除かる。』
信を樂しむの情已に深く、
『奇なる哉、誓果成れり。
子を生むの果報成る。
先に憂悲を增すと雖も、
宜しく親族の榮を離るべし。
唐いに苦んで功無し。
自ら安じて彼を安じ
轉輪王と爲る者は、
亦此の妙法無く、
生死の緒は絕へず。
能く衆生類の爲に
智慧甚だ深く廣し。
聖王位に居ると雖ども、
法を愛して恭敬を增せり。
國中の諸人民は、
衆ねて王の敬重して
俗累に居るを厭患し、
心悟り、道果成り、
[九六]阿難陀・[九七]難陀

先に妙神通を現はし、
正法の器爲るに堪ゆ。
[九五]奇なる哉、大苦離れたり。
悲を緣とする故に利を獲たり。
宜しく勝妙樂を捨つべし。
宜しく恩愛の情を割くべし。
清涼なる安穩處を
大に悲んで衆生を濟へり。
自在の神通無く、
我を今日歡ばしめんや
汝、今已に生死を免れ、
廣く甘露法を說く。
永く生死の苦を滅し、
終に斯の利を獲ず。』
王父の尊位に居りて、
佛の神通力を覩、
合掌して頭面にて禮するを見、
咸、出家心を生ぜり。
悉く世の榮樂を厭ひ、
[九八]金毘羅・[九九]阿那律



【九五】　王は佛陀の神通と說法により、轉輪王たる以上の恩惠を佛陀より與へられ、誤解と迷妄醉めて、その歡喜を衷心より吐露してゐる。

【九六】　阿難陀（Ānanda）。淨飯王の弟甘露飯王（Amṛtodana）の子で、佛陀の從弟。佛陀出家の前に生れたと。溫情怜悧であつた。佛陀還國の時、教化され、弟子となつた。愛情深く、美貌の爲婦人との挿話が多い。瞿曇彌等の比丘尼團創設に助言し、與る所多い。成道第二十一年、佛陀五十五歲の時常隨弟子となり、侍ること廿五年、佛陀によく仕へ、愛され、感謝され、入滅の折にも終始よく仕へ、遺訓を受けた。滅後阿羅漢果を得て、第一結集に經を誦出した。大迦葉より法燈を受け、之を高那和須に傳へ、佛滅後廿余年、恒河上に入滅した。多聞第一の弟子とされる。

【九七】　難陀（Nanda）。佛母摩耶夫人の妹憍曇彌（Gotamī）の子で、佛陀の異母弟。佛歸國の折は太子として新妻孫陀利（Sundarī）を迎へてゐた。心ならずも佛陀によつて出家させられたが、僧團にて戀々として愛妻を思ひ、修道せず、佛の方便によつて漸く果を得た。（この間の說話を詩作して、

[一〇〇]難陀・跋難陀　及び[一〇一]軍荼陀那　是の如き等を上首とし、
及び餘の釋種子は、　悉く佛の教に從ひ、　法を受けて弟子と爲れり。
[一〇二]匡國の大臣子　[一〇三]優陀夷を首と爲し、　諸王子と倶に
次に隨つて出家せり。　[一〇四]又阿低梨の子　名けて優波離と曰ふは、
彼の諸王子　大臣子の出家するを見て、　心に感じ、情開解し、
亦出家法を受けたり。　父王は其の子を見るに、　神力と諸功德あり、
自らも亦清流　甘露の正法門に入れり。　王位國土を捨て、
禪定の甘露飯を食し、　閑居して靜默を修し、　宮に處つて王仙を習ふ。
如來は悉く隨つて　本族の知識を攝し已り、　道を申べ、顏和ぎ悅び、
親戚は歡喜して隨ふ。　時至れば應に乞食し、　迦維羅衛に入るべし。
城中の諸士女は　驚喜して聲を擧げて唱ふ。　[一〇五]『悉達阿羅陀は
學道成つて歸れり。』と。　內外に轉じ相告げ、　巨細馳せ出でゝ看たり。
門戸窓牖の中に　肩を比べて目を側てゝ　佛身の相好を見るに、
光明甚だ暉曜し、　外に袈裟衣を著し、　身光は內に徹照し、
猶ほ日の圓輪が　內外に相映發する如し。　觀る者は心に悲喜し、
合掌し、涕涙流れたり。　佛を見るに、庠序として步み、　形を斂し、諸根を攝し、
妙身は法儀を顯し、　敬ひ惜んで悲歎を增せり。　剃髮して形好を毀ち、
身に染色衣を被り、　堂々たる儀と雅かなる容あり、　束身して地を視て行けり。
『應に[一〇六]羽寶蓋を戴き、　手に飛龍轡を攬るべし。　如何にして游塵を冒し、
鉢を執つて行乞せん。　藝は怨敵を伏するに足り、　貌は婇女を歡ばすに足れり。

---

馬鳴は孫陀羅難陀詩 Saundarananda-kāvya を殘した。）果を得た後の難陀はよく人々の教化に努めて、佛陀に讚へられた。

【九八】　金毘羅(Kimbila)。

【九九】　阿那律(Anuruddha)。阿㝹樓陀、阿陀㝹陀とも音譯される。離障の意。釋尊の親族で從弟であるが、確實な親兄弟のことは異說多く一定しない。風采優れ、教養高かつた。釋尊歸國の折教化され、佛弟子となつた。常に努力精進し、又傳道に努め、高弟であつて、佛滅の折もその場に列した。(本讚後出)。佛弟子中天眼第一の稱がある。

【一〇〇】　難陀・跋難陀(Nandu-pananda)。

【一〇一】　軍荼陀那 (Cuṇḍadana?)

【一〇二】　匡國。匡は正しい意。

【一〇三】　優陀夷(Udāyin)。大臣は宮廷僧の子にて、在家時代の太子の學友。

【一〇四】阿低梨(Atali)の子優波利(Upāli) 迦毘羅の王宮に仕へた理髮師で賤しい生れであつた。釋迦王族が歸佛した後、彼も出家を乞ふて許され、佛弟子となつた。早く得果し、教團の上首となり、賤種の出にも拘らず四海一味の教團で尊ばれた。佛滅後、結集に際

華服は天冠を冠り、　黎民は咸な首陽せり。　如何にして茂容を屈し、
心を拘し、其の形を制し、　妙なる欲しき光服を捨て、　素身にて染衣を著、
何の相を見て、何を求むるや　世に與ふるに五欲の怨を以てし、　賢妻と愛子を捨て、
獨りを樂んで孤り遊べり。　難い哉、彼の[一〇七]賢妃　長夜、憂思を抱きて、
今出家を聞き、　性命猶ほ能く全きは、　不審なり、淨飯王は
竟に此の子を見て、愛著せず。　其の[一〇八]妙相身を見るに、　形を毀ちて出家せり。
怨家さへ猶ほ痛惜す。　父見て、豈に能く安からん。　[一〇九]愛子羅睺羅は
泣涕し、常に悲しみ戀へり。　見て撫慰心無し。　此の道を學ぶを用ふる爲に。
諸の[一一〇]相法を明にする者は、　咸な太子生れて、　[一一一]大人相を具足し、
應に食を四海に享くべしと言へり。　今の所爲を觀るに、　斯は則ち皆虚談なりき。』
是の如く比ぶる衆多く、　[一一二]紛紜して亂說せり。　如來の心は染著無く、
欣び無く、亦感無く、　慈悲して衆生を愍み、　貧苦を脫せしめんと欲す。
彼の善根を增長し、　幷びに當に來る可き世の爲に、　其の少欲の跡を顯はし、
兼ねて俗塵の謗を除き、　貧里に入つて乞食せり。　精麁、所得に任せ、
巨細は門を擇ばず、　[一一三]鉢を滿して山林に歸れり。

## 受祇桓精舍品第二十

世尊は已に開化して、　迦維羅衞人は　緣に隨つて度し已畢り、
大衆と倶に行けり。　憍薩羅國に往き、　波斯匿王に詣れり。
[一一四]祇桓已に莊嚴し、　堂舍は悉く周く備れり。　流泉は相灌ぎ注ぎ



して戒律を誦出した。佛弟子中持戒第一と傳へられる。
【一〇五】悉達阿羅陀（Siddhārtha）。佛陀の名。
【一〇六】羽寶蓋。天子の羽の天蓋、飛龍轡は天子の馬の轡。
【一〇七】耶輸陀羅妃を言ふ。
【一〇八】妙相（Lakṣaṇa）。轉輪王又は佛陀の立派なる相好をいふ。三十二を數ふ。大人相（Mahāpuruṣalakṣaṇa）ともいふ。
【一〇九】羅睺羅（Rāhula）。前出（第二品）。
【一一〇】相法。占相をいふ。
【一一一】大人相を具し、食を四海に享くるは、轉輪王卽ち世界統一王の屬性である。
【一一二】紛紜。紜は物事の多くして亂れること。
【一一三】迦毘羅城民の內では太子が轉輪王として歸國することを期待してゐたものが多かつた。今轉輪王となる可き素質を有しつゝ、一のむさくるしき乞食僧として歸つた佛陀を見て、その期待を裏切られ、不平不滿を洩し、陰口を言ふものがあつた。その世評の內に、釋尊自身は超然として乞食し、說法し、禪定に孜んでゐた。その間良き對照を見る。
【一一四】祇桓精舍詳しくは祇樹給孤獨園（Jetavana-anātha-

花果は悉く敷き榮へたり。　水陸の衆の奇鳥は　類に隨つて群れ、和ぎ鳴けり。
衆美、世に比無く、　[一一五]稽羅山宮の若し。　給孤獨長者は
眷屬と路を尋ねて迎へ、　花を散じ、名香を燒き、　奉請して祇桓に入れり。
手に金龍瓶を執り、　[一一六]躬ら跪いて長水を注ぎ、　祇桓精舍を以て
十方僧に奉施せり。　世尊は呪願して受けたり。　『國を鎭めて久しく安からしめ。
給孤獨長者に　福慶流れて窮り無からしめよ。』[一一七]時に波斯匿王は
世尊已に至れるを聞き、　駕を嚴かにして祇桓を出で、　世尊の足に敬禮し、
却いて一面に坐し、　合掌して佛に白して言ふ。　『圖らざりき、卑小の國、
忽ち大吉祥を成ぜり。　惡逆にて[一一八]殃害多く、　豈に能く大人を感ぜしめん
今聖顏を觀るを得て、　沐浴して清化を飮めり。　鄙にて[一一九]凡品處ると雖も、
聖を蒙りて[一二〇]勝流に入れり。　風の香林を拂ひ、　氣合し[一二一]薫颷を成ずる如し。
衆鳥は須彌山に集り、　異色にて金光を齊しくする如し。　明人と會ふを得て、
蔭を蒙つて榮を同じうす。　野夫は仙人に供し、　生きて[一二二]三足の星と爲る。
世利は皆盡くる有り、　聖利永く窮り無し。　人王は多く[一二三]愆咎あり、
聖に遇つて利常に安し。』　佛は王心至つて、　[一二四]法を樂んで帝釋の如く、
唯[一二五]二種の著有り、　財色を忘る能はざるを知れり。　時を知り、心行を知りて、
王の爲に說法せり。　『惡業ある卑下の士も、　善を見て猶ほ敬を知る。
況んや復た自在王は　德を積んで宿因に乘じ、　佛に遇へば恭敬を加へん。
此れ乃ち難きと爲さず。　國は素より靜かに民安かなるも、　見て佛の增す所に非ず。
今當に略して法を說くべし　大王且く諦聽し、　我が所說を受持し、

---

pindadusyārāma) といふ。園は舍衞城外にあり、城に遠からず、近からず、竹樹繁茂し、泉池清涼、寒からず、暑からざるの地であつたといふ。精舍の設計都督は本讃にもある如く、佛陀の命により舍利弗がなした。有部律によれば、佛在世には十六大院あり、院毎に六十房あり、後に至つて繁榮であつた時は十二の浮圖七十二の講堂、三千六百の房室、五百の樓閣があつたといふ。佛は在世中多く此に住された。

【一一五】稽羅山宮(Kailāsa)。富神クヴエーラ(Kubera)の住居で、シヴア神(Śiva)の極樂。雲山山頂にあり。

【一一六】バルフート(Barahut)の彫刻には水をそゝぐ動作をなした。瓶を持つた圖像がある。然し跪いてはゐない。

【一一七】バルフートの彫刻には祇園精舍に波斯匿王が行く圖表が多くある。十三圖には精舍が現はされ、佛陀が說法してゐるのを示す法輪があり、衣服が搖れ、手を鳴らして、聽者は喜んでゐる圖がある。

【一一八】殃害。殃は禍のこと。

【一一九】凡品。平凡なる者。

【一二〇】之は舍衞城のあるラプテイー河 Rapti を言つてゐるかも知れない。この喩は貧

[一二六]我が功果の成ぜしを見られよ、　命終れば形神乖(そむ)き、　親戚悉く別離す。
唯善惡業有り、　始終にして影の如く隨ふ。　當に法王の業を崇び、
萬民を子の如く養ふべし。　現世に名稱流れ、　命終つて天に上昇すべし。
情を縱(ほしいまゝ)にし法に順はざれば、　今に苦んで後に歡び無し。　古昔 [一二七]贏馬王は
法に順つて天福を受け　[一二八]金歩王は惡を行ひ、　壽終つて惡道に生れたり。
我今大王の爲に、　略して善惡の法を説かん。　大要は當に慈心にて
民を觀ること猶ほ一子の如くすべし。　迫せず、亦害せず　善く諸根を攝持し、
邪を捨て正路に就かしめよ。　自ら擧げ、人を下さず、　友を苦行に結び、
邪見の朋を習ふ勿れ。　王の威勢を恃む勿れ。　邪佞の言を聽く勿れ、
諸苦行者を惱ます勿れ。　王の [一二九]正典を踰ゆる勿れ。　佛を念じ、正法を維(たも)ち、
非法者を調伏せよ。　現に人中の上と爲り、　[一三〇]德は隆(たか)き道の中にあるを惟ひ、
深く無常想あり、　身命念々にして遷るを思へ。　心を高勝の境に栖(すま)はせ、
清涼津を志求せよ。　慈を保つて自在に樂しみ、　來世に其の歡を增せ。
名を曠劫に傳へ、　必ず如來の恩を報ぜよ、　人の甜果を愛し、
必ずその良栽(たね)を種く如くせよ。　明より暗に入る有り、　闇より明に入る有り、
闇々相ひ續ぐ有り、　明々相ひ因する有り。　智者は [一三一]三品を捨て、
當に始終明るきを學ぶべし。　言惡ければ群響應じ、　善く唱ふれば隨ふは難し。
不作果有る無し。　作者は敗亡せず、　創業は勤習せず、
至り竟つて能く爲す莫し。　素(もと)より善因を修せず、　後に樂を致し、期無し。
既に往いて息む期無し。　是の故に當に善を修すべし。　自ら省みて惡を爲さず、



富貴賤が等しく河の流れに入るやうに正法の河流に入るをいふ。
【一二一】薫颸。颸は狂風を言ふ。
【一二二】三足の星。不明？
【一二三】愆咎。愆は過失。
【一二四】ベルフート塔圖像十三では、波斯匿王の訪ねた説法堂は帝釋天の宮殿に詳しく類似してゐる。この比喩は之に聯想あるか。
【一二五】波斯匿王が「著」ある記述は佛教文獻に多く出る。看照漢譯「法句經」二九品。
【一二六】佛自ら、現在の學德正覺は過去の修行の結果なのを肯定してゐる。
【一二七】贏馬王（Kṛśāśva ?）。事跡不明。
【一二八】金歩王（Hiraṇyakaśipu ?）。事跡不明。
【一二九】王の正典。印度には帝王學として王法（Rājaśāstra）又は行論（Nītiśāstra）あり、王の行爲を指示す。
【一三〇】德將（惟）隆道中（申）。
【一三一】三品。婆羅門の人生目的である法財愛を言ふか。

自ら作し自ら受くる故に。
生・老・病・死の山に
斯の苦の重山を出す。
老死は錐鋒の端なり。
猶ほ自在天の若くにて、
久しく世に存するを望まん
[一三二]劫火は須彌山を鎔かし、
盛火は水の消す所となり。
長夜苦んで守護し、
死時忽然として至れば、
勤修して、豈に睡眠せんや。
不續樂を習はず、
不斷智を學ばず、
身有るも境に染まされ。
時に遷轉するを免れず。
此の身有るを以ての故に、
本を無身に息む。
是の故に、[一三五]欲有に於て
則ち衆苦を受けず。
不寂靜を以ての故に。
猶ほ四の石山合し
群生は脱れるに由なし。
世間は悉く無常にて、
何ぞ應に非法を習ふべき
勇健の志は虚に騰りしも、
海水は悉く枯竭せり。
猛風は隨藍を止め、
物有れば悉く滅に歸したり。
廣く資するに財色を以てし、
挺直して枯木の如し。
生死は獨り機を搖り、
苦報者は爲さず、
[一三三]不受有智を學べ。
境に染れば大過を爲す。
當に不變身を學ぶべし。
衆苦の本と爲す。
一切の衆生の類は
當に厭離心を生ずべし。
色・無色界に生ずると雖も
況んや欲を離れざるに於てをや。
衆生、逃るゝ處無きが如し。
唯正法を行ふ有りて、
五欲の境は電の如し。
古昔の諸勝王は
暫く顯れ已に磨滅せり。
況んや身は泡沫の如くにて
日光は須彌を翳らし、
此の身は無常の器にて、
放逸にて憍慢を生じ、
明かに人は斯の變を見て、
止まずして會ゝ墮落せり。
不勝友は近かず、
受あれば必ず身を無からしむ。
[一三四]無色天に生ずると雖も、
不變なれば則ち過無し。
是れ故に諸の智者は
斯く欲に由つて苦を生ず。
欲有を厭離すれば
變易は大患と爲す。
是くの如く三界を觀るに

【一三二】劫火。劫(Kalpa)の終る時大火が起つてこの世界の凡てを燒き盡す、と印度世界觀は考ふ。

【一三三】不受有智は、受(感情)有らざるの智の意?

【一三四】無色天(Arūpa-deva)。

【一三五】欲有(Tanha-bhava)、三有の一、欲界の業因果報存在して實有なるを言ふ。

無常にて主有る無し。　衆苦は常に熾へ然ゆ。　智者豈に樂を願はんや
樹盛に火にて然ゆる如し。　衆鳥豈に群れ集らん　覺者は明士と爲す。
此を離れゝば則ち無明なり。　此は則ち開覺の士なり。　此を離れゝば則ち覺にあらず。
此は則ち所作に應ず。　此を離れゝば則ち應ぜず。　此は則ち近宗と爲す。
此を離れゝば則ち理と乖く。　此の殊勝の法は　在家の所應に非らずと言ふは、
此は則ち非説と爲す。　法は唯人の弘むるに在り、　熱を患ひ、冷水に入れば、
一切は清涼なるを得。　冥室に燈火明るければ、　悉く五色を覩る。
修道も亦是の如し。　道俗、異方無し。　或ひは山に居するも罪に墮し、
或ひは家に在つても仙に昇る。　癡冥は巨海と爲り、　邪見は濤波と爲る。
群生は愛流に隨つて　漂轉して能く度する莫し。　智慧は輕舟と爲り、
三昧・正方便の　戒と念の械を堅く持し、　能く無知の海を濟る。』
時に王專ら心に　一切智者の所説を聽き、　俗榮を厭薄し、
王者に歡び無きを知れり。　逸醉狂象の　醉醒めて純熟し還る如し。
【一三六】時に諸外道有り、　王の佛を信敬するを見て、　咸、大王に
佛と神通を決するを求めたり。　時に王白す。『世尊、　【一三七】願くは彼の求むる所に從はれよ。』
佛即ち默然と許す。　種々なる諸異見　五通神仙士は
悉く佛所に來詣せり。　佛は即ち神力を現はし、　正基に空中に坐し、
普ねく大光明を放ち、　日の朝陽に耀く如し。　外道悉く降伏し、
國民普ねく歸祟せり。　【一三八】母の爲に說法するの故に　即ち【一三九】忉利天に昇れり。
三月、天宮に處り、　普ねく諸天人を化せり。　母を度し、報恩畢り、



【一三六】波斯匿王への説法の後、佛が外道と神通を比べたことは他傳にも出で、「佛本行經」現大神變品では同一事がより誇大に詳細に誇張して語られてゐる。「摩訶帝經」では佛は舍利弗に代つて神通を比せしめたとする。漸く佛陀の教權高まるに伴ひ、其派教徒の迫害が企てられて來た事を示す。

【一三七】五通。詳しくは五神通をいふ。(1)天眼通、色界の四大にて造れる清淨の眼根を得て色界及び欲界の六道中の諸物を洞破すること。(2)、天耳通、同清淨の耳根にて能く一切の聲を聞くを得るもの。(3)、他心通。能く一切他人の心を知ることを得るもの。(4)、宿命通、能く自己の宿世の事を知るを得るもの。(5)、如意通・神境通・神足通・飛行自在石壁礙なく、又石を化して金となし、火を變じて水と爲す等の奇變を行ふを得るもの。

【一三八】母教化の爲の忉利天上昇は諸傳(「増一阿含」六、「雜阿含」一九、「佛本行經」・「五分律」・「十誦律」・「増一阿含」等に出る。其他この折の説法に擬せられる經も多い。然し、之は佛力の偉大と佛の報恩心厚きを語る爲の事實以上の紛飾であらう。

【一三九】忉利天(Trāyastriṁśa)即ち三十三天。前出。

安居の時過ぎて還れり。[一四〇]諸天衆羽從ひ、七寶の階(きざはし)に乘り、
[一四一]下りて閻浮提に至れり。諸佛常に[一四二]下る處なり。無量の諸天人は
宮殿に乘じて隨ひ送れり。閻浮提の君民は合掌して仰瞻せり。

## [一四三]守財醉象調伏品第二十一

天上に母及び餘の諸天衆を敎化し、還りて人中に遊び、
緣に隨つて化を行ふ。[一四四]樹提迦・[一四五]耆婆(ジーヴァカ)[一四六]首羅・[一四七]輸盧那
長者子[一四八]央伽及び[一四九]無畏王子[一五〇]尼瞿屢陀等
[一五一]尸利掘多迦[一五二]尼揵憂波離(ウパーリ)悉く解脫を得しむ。
[一五三]乾陀羅國王其名は弗迦羅といふ。微妙の法を說くを聞いて、
國を捨てゝ出家せり。[一五四]醯茂鉢低鬼及び波多耆利は
毘富羅山に於て調伏して化を受く。[一五五]波羅延梵志は
波沙那山中にて半偈の微細義にて調伏され、信樂せしめらる。
[一五六]他那摩帝村に鳩吒檀耽有り、是の二生の首は
廣く殺生して祠祀せり。如來は方便して化し、其を正道に入らしむ。
[一五七]毘提訶山に於て大なる威德ある天神にて般遮尸呿と名くるは
法を受けて決定に入れり。[一五八]毘紐瑟吒村にて彼の難陀の母を化し、
[一五九]央伽富梨城にて大力神を降伏せり。[一六〇]富那跋陀羅
輸屢那檀陀凶惡なる大力龍國王及び後宮は
悉く皆正法を受け、以て甘露門を開けり。彼の[一六一]侏儒村に於て

---

【一四〇】諸天衆羽從。「諸天衆の羽從ふ」であらう、羽は即ち天王等を示す羽の天蓋であらう。それにて天王を現した提喩と思はれる。恐らく「一諸天衆は羽にて從へり」ではなからう。(羽ある天使(angel)の思想は當時印度にはないと思はれる。

【一四一】閻浮提(jambudvipa) 印度全土をかく呼ぶ。印度世界觀では須彌山の南方にある大洲を言ひ、理論上は我等の居る所は之に屬す。この洲の中央に閻浮樹ある故、この名があると。

【一四二】即ちサンキサ(Sankisa 又はサーンカージユヤ Sāṅkāśya) である。(cf the Archaeological Survey of India, 1862—1863)

【一四三】馬鳴はこの一品に傳道時中佛陀の遊行處、敎化せる人物を要抄す。傳道時の記述少き折柄、この記述は極めて貴重な資料である。

【一四四】樹提迦(Jutika)。

【一四五】耆婆(Jivaka)。名醫耆婆である。俊英にしてよく醫術を修め、摩訶陀王瓶沙の侍醫となり、佛・佛弟子の醫師ともなつた。厚き在俗の佛弟子であつた。

【一四六】首羅(Sula)。

【一四七】輸盧那(Cūrṇa)。

稽那及び尸直は
[162]央崔利摩羅は
化して即ち調伏せしむ。
大に富み、多く錢財あり、
化を受け、廣く施を行へり。
及び跋陀羅の
二婆羅門有り。
論議して以て降伏し、
諸の羅刹鬼を化せり。
*薩遮尼揵子は
鬼跋陀羅
又[168]阿臘山に至り、
三は訶悉多迦といふを度せり。
及び針毛夜叉
彼の迦旃延(カーティヤーヤナ)を化し、
彼の諸の商人
妙香今に流る。
牟尼、彼に住せり。
終に則ち磨滅せず。
摩偸羅國に至り、

生天樂を志求したりしが、
彼の脩侔村に於て
大長者子
富那跋陀の如し。
彼の[164]跋提村に於て
兄弟の二鬼神を化したり。
一は名けて大壽と爲し、
正法に入らしむ。
并びに離車師子王
悉く正法に入らしむ。
及び跋陀羅迦
鬼阿臘婆
還りて[169]伽闍山に至り、
及び其の姉妹子を度せり。
然る後に神通に乘じ、
◎多波揵尼劍を化し、
[171]摩醯波低に至り、
[172]足は石上を蹈み、
[173]波羅那處に至り、
鬼竭曇摩を度せり。

化して正道に入らしむ。
爲に神通力を現はし、
[163]浮梨耆婆男有り、
即ち如來の前に於て
彼の跋提梨
[165]毘提訶富利に
二は名けて梵壽と曰ふ。
[166]毘舍離城に至り、
及び諸の離車衆
[167]阿摩勒迦波に
跋陀羅劫摩有り。
二は鳩摩羅と名け、
鬼絁迦那
[170]又波羅奈に至り、
輸盧波羅に至り、
其の旃檀堂を受け、
迦毘羅仙を度し、
千輻雙輪現れ、
波羅那鬼を化し、
[174]偸羅倶惡吒にて



---

【一四八】長者子央伽(Aṅga)。
【一四九】無畏(Abhaya)。王子。
【一五〇】尼瞿屢陀(Nyagrodha)。cf. Hardey: Manual of Buddhism. p. 39,
【一五一】尸利掘多迦 (Śrīkutaka)又は Śrīguptaka)。
【一五二】尼揵優波離(Upāli, the Nigrautha)。cf. Hardey: M. B. p. 267.
【一五三】乾陀羅 (Gandhāra)。國王弗迦羅(Pudgala?)。乾陀羅は印度北西部地方にある國、後世揵陀羅美術と言はれる希臘美術の影響を受けた特色ある印度藝術にて著明となつた。
【一五四】醯茂鉢低鬼 (Himapati)。波多耆利(Vātagiri)。毘富羅(Vibhāra) 山。
【一五五】波羅延梵志Prayan(tika)。波沙那(Vajana)。
【一五六】他那摩帝村(Dānamati又はKhānumat)。鳩吒檀耽(Kūtadanta)。
【一五七】毘提訶(Videha)山。般遮尸阿(Pañcaśkha)。音樂神ガンダルヴアの一人。cf. M. B. p. 288.
【一五八】毘紐瑟吒村(Vainuṣṭa)難陀の母とは大愛瞿曇彌(Mahāprajāpatigotamī) のことである。瞿曇彌等は夫王淨飯王の死に會つて無常を感じ、荼毘を終つて南に歸る釋尊を追ひ、出家を求め、阿難の取

頼吒波羅を度せり。
[一七六]迦利摩沙村に
阿耆尼毘舍を化せり。
闍帝輸盧那
外道の師
施多毘迦の
佛仙の道に入らしむ。
[一八〇]金毘羅國に至り、
二は迦羅迦と名く。
其の名は毘沙と曰ふ。
正法を信樂せしむ。
及び二優婆夷
衆多く次第に度せり。
是の如き等の次第にて
日の幽冥を照すが如し。
[一八六]內心、嫉妬を懐き、
正法僧を破壞せり、
石分れて二分と爲り、
狂醉せる惡象を放てり。
横に泄りて奔走し、

[一七五]鞞蘭若村に至り、
薩毘薩深を度し、
復た舍衞國に還り、
道迦阿低梨を度せり。
[一七八]弗迦羅婆梨
寂靜なる空閑處に至り、
[一七九]阿輸闍國に至り、
二惡龍王を度す。
[一八一]又跋伽國に至り、
那鳩羅父母
[一八二]倶舍彌國に至り、
波闍欝多羅
[一八四]揵陀羅國に至り、
空行く者、水陸性のもの
爾の時　[一八五]提婆達(デーヴァダッタ)は
諸禪定を退失し、
耆闍崛山に登り、
[一八八]佛の左右に墮ちたり。
震へ吼へて雷霆の若く、
逸越して暴風の如し。

諸の婆羅門を度せり。
亦復た彼の
彼の　[一七七]瞿曇摩
憍薩羅國に還り、
及び諸の梵志衆を度せり。
諸の外道仙を度し、
諸の鬼龍の衆を度せり。
一は金毘羅と名け、
夜叉鬼を化度せり。
幷びに及び大長者に
[一八三]瞿師羅
伴等優婆夷を化度せり。
阿婆羅龍を度せり。
皆悉く往いて化度し
佛德の殊勝なるを見て、
[一八七]諸の惡方便を造り、
石を崩し以て佛を打てり。
[一八九]王の平直路に於て、
勇氣奮つて雲と成る。
鼻牙尾四足に

---

りなしで漸く許された。その場所は普通跋耆(Vajji)國のナチカ(Nacika)であるとする。(西藏傳然り。「中阿含」は那摩提)。

【一五九】央伽富梨城(Aṅgavari 又はAgrāṭavi)。

【一六〇】富那跋陀羅Bhana bhadra(Ptala)。輸屢那檀陀(Sronadanta)。

【一六一】侏儒村。侏儒は丈の甚だ低き人、一寸法師のこと。その村か。或ひはVajji 又はPavijjia 稽那(Kina)。尸盧(Sila)。

【一六二】央瞿利摩羅(Aṅgulimāla)。本名はアヒンサカ(Ahiṅgsaka)。憍薩羅國王の國師の子で、父はバールッガヴァ(Bhārggava) 母はマンターニー(Mantāni)と言つた。舍衛城の一婆羅門の弟子となつたが、美貌にて才智あり、婆羅門の妻に迷され、百人を殺し、指鬘を作らうとした。百人目に佛陀に會つて、敎化され、疾やかに果を得て、從順となつた。前の惡事の故に人々に嘲馬迫害されても、法をよく喜び耐へ、釋尊に嘉された。(cf. M. B. p. 249.)
脩伴村(Suma)。

【一六三】浮梨耆婆男(Purijivana)。富那跋陀(Punnavati 又はPunyavati?)

觸れゝば則ち摧けざる莫し。
尸を横へて路に布き、
恐怖して門を出です。
城を出でゝ馳走する有り、
時至つて城に入れり。
如來の心は安泰とし、
慈心を安からしめんとす。
諸の比丘は逃避して、
一自性に移さゞる如し。
身を投じて佛足を禮し、
日の烏雲を照すが如し。
『象は［一九一］大龍を害する莫し。
終に善處に生れず。
是が故に汝は今日
捨てされば更に深きに轉ず。』
身心、安樂を得、
國人悉く歡喜せり。
下善は轉じて中と成り、
已に信ずる者は深く固し。
心に奇特想を生じ、

王舍城の巷路は
髓腦血は流離せり。
合城悉く戰悚し、
竄穴に自ら藏(かく)るゝ有り。
高閣窓牖の人は
怡然として懼容無し。
天龍の衆は營(めぐ)り從つて、
唯［一九〇］阿難と倶なり。
醉象は奮つて狂ひ怒りしも、
猶ほ太山の崩れるが若し。
佛の足下に跪伏せり。
象の龍と戰ふは難し。
貪・恚・癡の迷醉は
當に貪・恚・癡を捨つべし。
彼の象は佛説を聞いて、
渇して甘露を飲むが如し。
咸、希有を唱へ、
中善は進んで增上となり、
［一九三］阿闍世大王は
歡喜して倍して敬を增せり。

狼藉して人を殺傷せり。
一切の諸士女は
但し驚喚の聲を聞けり。
如來衆五百、
佛に啓して行く勿らしめんとす。
唯貪嫉の苦を念ひ、
漸く狂象の所に至れり。
猶ほ法に種々相あるも、
佛を見て心卽ち醒めたり。
蓮花掌にも頂を摩し、
爲めに説法して言ふ。
象、大龍を害せんと欲すれば、
降し難くして佛已に降せり。
已に苦の［一九二］淤泥(あいでい)に沒す。
醉は解け、心は卽ち悟れり。
象は已に佛化を受け、
種々の供養を設けたり。
不信者は信を生じ、
佛の醉象を降すを見て、
如來は善く方便して



【一六四】跋提(Bhadī ?)。跋提梨(Bhadari ?)。跋陀羅(Bhadara ?)。
【一六五】毘提訶富利(Bhidhavali)。大壽(Mahāyus ?)。梵壽(Brahmāyns ?)。
【一六六】毘舍離城(Vesāli)。離車族(Licchavi)の都で、摩訶陀國の北東部にあり、毘提訶等十六族と共に跋耆(Vajji)として寡頭的族長政治を行つてゐた。離車師子はその族長であつた。羅刹(Rakṣa)。惡鬼であつて、夜中種々の形に變化して人家近く忍び寄り、子女家畜を害し、獸肉人肉を好んで食する。
※薩遮尼揵子(Soca, the Nr-grantha)。
【一六七】阿摩勒迦波(Hamakinkhava)。跋陀羅(Bhadara)。跋陀羅迦(Bhadara)。跋陀羅劫摩(Bhadaragāma)。
【一六八】阿臘山(Ala)。阿臘婆(Alava)。鳩摩羅(Kumāra)。訶悉多迦(Asidaka)。
【一六九】伽闍(Gayā)。鬼鉏迦那(Kañjana)。針毛夜叉Kamo, the Yakṣa
【一七〇】波羅奈(Vārāṇaṣi)。前出。迦旃延(Kātyāyana)。卽大迦旃延子(Mahā kātyāyaniputra)。佛の十大弟子の一人。論義第一の稱あり。迦旃延は婆羅門十號の一で、婆羅門出

種々の神力を現し、　諸衆生を調伏し、　力に隨つて正法に入らしめたり。
國を擧げて善業を修し、　猶ほ[一九四]劫初の人の如し。　彼の提婆達兜は
悪の爲に自ら纒縛し　先に神力にて飛行せしに、　今は[一九五]無擇獄に[一九六]墮せり。

## 菴摩羅女見佛品第二十二

世尊は廣く化し畢りて、　涅槃心を生ぜり。　王舍城を發し、
[一九七]巴連弗邑に詣でたり。　到り已つて、彼の　[一九八]巴吒利支提に住せり。
彼は是れ[一九九]摩竭提の　邊邑の附庸國なり。　國主婆羅門は
多聞にて經典に明かに、　土の安危を瞻相し、　國の仰觀師たり。
摩竭王は使を遣はし、　勅して彼の仰觀師に告げ、　牢城を起し、
以て强隣に備へしむ。　世尊は記ぶ。[二〇〇]『彼の地は　天神の保持する所。
中に於て城廓を起せば、　永く固く危亡せざらん。』　仰觀は心に歡喜し、
佛法僧を供養せり。　佛は彼の城門を出で、　恒河の濱に往詣せり。
仰觀は深く佛を敬し、　名けて[二〇一]瞿曇門と爲せり。　恒河の側の人民は
皆出でゝ世尊を迎へ、　種々の供養を興し、　各船を嚴にして渡さしむ。
世尊は船多きを以て、　偏頗に受くれば衆心を違ふを思ひ、　即ち神通力を以て
身及び大衆を隱し、　忽ち此の岸より沒して、　彼岸に出でたり。
佛は以て智慧船に乘じて、　廣く衆生を濟へり。　斯の徳力を緣とするの故に、
河を濟るに舟に憑す。　恒河の側の人民は　聲を同じうして『奇なる哉』と唱へたり。
咸言ひて此の津を名け、　名けて瞿曇津と爲す。　城門を瞿曇門とし、

---

身。◎多波揵尼劍(Davakin & Nikin(?))。
【一七一】摩醯波底(Mahīvati)。迦毗羅(Kapila)。
【一七二】佛足跡崇拜思想がある。後人は佛陀敎化を感謝し、その廣き敎化をなさしめた足を崇拜するに至つた。千輻輪相は妙相の一。
【一七三】波羅那處(Prāṇa)。波羅那鬼(Prāṇa)。摩偸羅(Mathurā)。ヤムナー河(Yamunā)の右岸に榮へた有名な都市。釋尊がマツラに行つたか否かは疑問とされてゐたが、本讃には遊行せしを明記す。△竭曇摩(Godama 又は Khadama?)。
【一七四】倫羅俱瑟吒(Thurakusanti)。マツラの近所か？賴吒波羅(Rāṣṭrapāla 又は Rāṣṭravara)。拘樓擅國(Kuru ?)。鍮盧吒村の長者の一人子、釋尊が近くを遊化された時、說法を聞いて、出家せんとし、父母が許さぬので、斷食し苦行して許しを待つた。父母は止むなく之を許し、美しき妻を殘して出家した。やがて果を得て、故鄕にも歸り、父母等を敎化した。馬鳴はこの材料によつて妙伎樂賴吒波羅を作つて、華氏城に之を演じ、

津を瞿曇津と名く。　斯の名は世に流れ、　歷代共に稱へ傳へたり。
如來は復た前み行いて、　彼の[二〇二]鳩梨村に至れり。　法を說いて化する所多く、
復た[二〇三]那提村に至れり。　人民多く疫にて死し、　親族悉く來り問ふ。
『諸親の疫死者は　命終つて何所に生ずるや』　佛は善く業報を知り、
悉く問に隨つて記說せり。　前んで[二〇四]鞞舍離に至り。　[二〇五]菴羅林に住せり。
彼の[二〇六]菴摩羅女　其の園に詣れるを承り、　侍女衆を隨從して
庠序として出で奉迎せり。　善く諸情根を執り、　身に輕き素衣を服し、
莊嚴服を捨離し、　自ら沐浴し、香花にて飾れり。　猶ほ世の貞賢なる女が
潔素になり、以て天を祠る如し。　端正にて妙なる容姿は　猶ほ[二〇七]天の玉女の形の如し。
佛は遙かに女の來るを見て、　諸の比丘衆に告ぐ。　[二〇八]『此の女は極めて端正にて
能く行者の情を留む。　汝等當に正しく念じ、　慧を以て其の心を鎭むべし。
寧ろ暴虎の口　狂夫の利劍の下に在るとも、　女人の所に於て
愛欲の情を起さゞれ。　女人は恣かなる態を顯はし、　若くは行住坐臥
乃至は畫像の形も　悉く妖なる姿容を表はし、　人の善心を劫奪す。
如何にして自ら防がざらん　啼笑喜怒を現はし、　體を縱にして肩を垂れ、
或ひは髮を散らし、髻傾きても、　猶ほ倚人心を亂す。　況んや復た容儀を飾り、
以て妙なる姿顏を顯すに於ては。　莊嚴は陋形を隱し、　愚夫を誘誑す。
迷亂は惡想を生じ、　醜穢形を覺へず。　當に無常苦、
不淨無我所を觀ずべし。　其の眞實を諦見し、　貪欲想を滅除し、
正しく自境を觀ぜよ。　天女も倚樂ます。　況んや復た人間欲に於ては。



人々は之を聞いて多く出家し、その爲に王禁を蒙つたと。今は失本となつてゐる。
【一七五】鞞蘭若村(Vairañja)。
【一七六】迦利摩沙村 (Kalamasa又はKramasa)。薩毘薩深(Savasasin)。阿耆尼毘舍(Ajirivasa)。
【一七七】瞿曇摩(Gautama)。闍帝輪盧那(Jātisruna)。道迦阿低梨(Dakātili)。
【一七八】弗迦羅婆梨(Vakrapali又はVikravar)。施多毘迦(Satavaka)。
【一七九】阿輸闍(Ayodhyā)。今のオード(Oudh)。十車王の都として榮へ、著名な中印度の都城。
【一八〇】金毘羅國(Kimbila)。迦・迦(Kālaka)。
【一八一】跋迦(Vajji)。毘沙Pisavaiśramana、北方の支配者である。那鳩羅(Nāgara)。
【一八二】俱舍彌(Kauśāmbi)。拘跋蹉國(Vatsa)の首都で、薩羅の南にあり、恒河とヤムナ(Jumna)との合流點に近い。釋尊當時は優塡(Udayana)が其の王であつた。今ヤムナ河のコーサンビ・ナガル(Kosambi-nagar)と呼ばれ、アラハバッド(Allahabad)から三十哩の地にあるコーサム(Kosam)村がそれであると。
【一八三】瞿師羅(Goshira)。cf.

而して能く人心を留む。　當に精進弓と　智慧鋒と利箭を執り、
正念の重鎧を被り、　五欲と決戰すべし。　寧ろ熱せる鐵槍を以て
雙目を貫徹するとも、　愛欲心を以て　女色を覩ざれ。
愛欲は其の心を迷はす。　女色に炫惑されざれ。　亂想にて命終れば、
二〇九 必ず　三惡道に墮す。　彼の惡道の苦を畏れ、　女人の欺きを受けざれ。
根は境界に繋れされ、　境界は根に繋れざれ。　中に於て貪欲想は
根の境界に繋るゝに由る。　猶ほ二耕牛が　同一軛一鞅に繋るゝ如し。二一〇
牛は轉じて相ひ縛されず。　根と境界も亦然り。　是の故に當に心を制し、
其をして放逸せしむる勿かるべし。』　佛は諸の比丘の爲に　種々說法し已れり。
彼の菴摩羅女は　漸く世尊の前に至り、　佛の樹下に坐し、
禪定し靜に思惟するを見、　佛が大悲心にて　我が樹林を哀受するを念ふ。
端心にて儀容を斂り、　素の妖冶情を止め、　恭しくして形心純ら至り、
稽首し足に接して禮し、　世尊は命じて坐せしめ、　心に隨つて說法を爲す。
二一一 『汝の心は已に純に靜かに、　外に徳容を表徹す。　壯年は財寶を豐かにし、
徳を備へ、兼ねて姿顏あり、　能く正法を信樂するは、　是は則ち世の難とする所なり。
丈夫智慧を宿り、　法を樂むは奇と爲さず。　女人の情志は弱く、
智淺く愛欲深し。　而も能く正法を樂むは、　此も亦甚だ難しと爲す。
人は世間に生れ、　唯應に法は自ら娛しむべし。　財色は常寶に非ず、
唯正法は珍と爲す。　強良は病の壞す所、　少壯は老の遷す所、
命は死の困らす所と爲る。　行法は能く侵す無し。　愛する所も離れざる莫し。

---

Jul. II. 285. 優婆夷(Upasikā)。在家の女の佛弟子。淸信女と譯す。波闍替多羅(Vajuttara)。

【一八四】 犍陀羅(Gandhāra)。印度北西部の國、カシュラールの西北、パンヂャツブの北にあつた國、印度希臘の交通の衝に當り、紀元前後の製作にかゝる精巧なる美術品多く發見される。然し釋尊が犍陀羅國に遊行されたことは殆んど信じられない。

＊阿婆羅龍(Apalāla)。cf. Jul. II. 135.

【一八五】 提婆達(Devadatta)。佛の從兄弟で、阿難の兄であるが、その父は白淨王とも斛飯王、甘露飯王ともいひ、定說がない。釋尊と常に對照的にあり、在家時代にも性行相反し、耶輸陀羅姫を爭つて、武藝を比べたと傳へられる。佛歸國の折他の釋族と共に歸佛した。よく修行したが、高慢にして我の強い彼は、高德の高弟途には佛陀をも嫉妬するに至つたらしい。こゝに於て教團を分裂せしめんとし、異見を立て、徒黨を語らひ、阿闍世王と結び、他に教團を立て、佛陀に對抗し、阿闍世をそゝのかせて、瓶沙王を謀殺させ、自立した。阿闍世王の心が彼から去ると佛陀に迫害

愛さずして強隣あり。
他力は大苦と爲し、
兼ねて他は子の苦を懷く。
彼の菴摩羅女は
能く愛欲を斷ぜり。
陋形を耻ずると雖も、
『已に尊の攝受を蒙れり。
佛は彼の誠心を知り、
即ち隨歡喜せしむ。

求むる所は意に隨はず、
自在力は歡びと爲す。
是の故に當に思惟し、
法を聞いて心歡喜し、
即ち自ら女身を厭ひ、
法力は其の心を勸め、
明日供養を丞受し、
兼ねて諸群生を利し、
女は視、聽きて轉た明を增し、

唯法は心に從ふと爲す。
女人は悉く他に由り、
女身を厭離すべし。』
堅固なる智は明を增し、
境界に染まず。
稽首して佛に白す。
其の志願を滿さしめよ。』
默然として其の請を受け、
禮を作して家に還れり。

を還しうし、石を山上より落し、又醉象を放ち、又刺客を送り、自らも佛陀を襲はうとして病んで果さず死した。(成道第三十七年)提婆は多分にその性格に禍されてゐる悲劇的人物である。

【一八五】提婆自立の第一理由である。一傳は佛が拘睒彌城にあつた時、佛弟子には在俗の布施あり、自らになく、提婆は不滿の意を以て、王舍城に歸つたと。「五分律」は王舍城靈鷲山にある時、佛に僧伽を領せんことを願ひ、たしなめられて、他意を含んだと。南傳には提婆が佛に貪施を乞ふた嚴戒四を記してゐる。

【一八七】僧伽の不和は以前に一度あり、成道後第九年戒に就いての異見より、一時分裂せることあり、此の折提婆關係せるや否や不明。多分提婆が自立後伽耶に歸り、不平の徒を語らひ、五百人を僧伽より得て新教團を建て、佛の僧伽を動搖せしめたのを言ふか。

【一八八】「五分律」によれば、この時石の破片が佛の足を傷け、出血せしめたと。後阿毘達磨論師は提婆が佛僧伽を分裂せしめたのと、佛身より出血せしめたのと、何れが罪が重いかを論じてゐる。

【一八九】「五分律」、「佛本行經」も醉象を放つことを記す。「五分律」はこの後に、刺客三十三人を送つたが、順次教化され、後自ら刺客として堀山に登り、石を落したとする。「佛本行經」は貴姓子高度を味方に誘はんとし、果さず、事を構へて罪に落し、刑に會ふ時佛に助けられ、その折阿闍世は說法を聞き、歸依心を起したと。

【一九〇】得果せし高弟は四散し、未だ得果せぬ阿難が一人從つたのは、皮肉である。

【一九一】大龍とは、佛陀を言ふ。

【一九二】淤泥。泥、ぬかるみ。

【一九三】阿闍世王(Ajātaśatru)。摩竭國王毘婆娑羅王の子。太子の時、提婆にそゝのかされて父を謀殺し、母韋提希夫人を苦します、又佛陀を迫害した。後悔いて、耆婆の勸めにて佛の說法を聞き、歸依して、良き外護王になつた。佛滅後、その舍利を分ち、塔を建てゝ供養した。この頃、摩訶陀國は隆盛に赴きつゝある氣運に向つてゐた。

【一九四】太古、人類の祖マヌ(Manu)王の時代には、社會はよく政まり、人民も善良であつた。詳しくは前出。

【一九五】無擇獄。無間地獄の古譯。無間業を造るものは何人を擇ばず、之を押收するから、かく名ける。

【一九六】佛傳中には彼は阿闍世王の支持も失ひ、目連・舍利弗が彼の弟子を佛の下に連れ歸つたので、力を失ひ、正に歸らず、死んだと。(本生話)。又最後に祇園に至り、佛陀を刺さんとし輿に乘つて行つたが、渇して池に水を飲まんとし、そのまゝ地中に呑まれ、無間地獄に落ちたとする。「佛本行經」は阿闍世も會ふを謝られ、輿をかつぐ弟子も恐れて、捨て去り、最後に自ら佛の下に行つたが、佛も會はれず、市民に罵られて、路上に野垂れ死し、地獄に落ちたと傳へる。

【一九七】巴連弗邑(Pāṭaliputra)花(Pāṭali Bignonia suaveo-

lena）に因んでかく呼ばれるらしい。又Kusumapura（花の都市、華氏城）とも呼ぶ。希臘人が Palimbothra と呼んだのは之か。近代の パトナ（Patna）であると思はれる。佛陀の七十九歳の折は城壁のない村であつたが、メガステネス（Megasthenes）の時には印度の最大の最も繁華な都城であつた。佛陀が八十又は八十一歳にて北方に發ち、涅槃を取られた途次こゝに立寄つた時は、阿闍世王の大臣禹舍（Vassakāra）は、跋耆族（Vajji）の南下を防ぐ爲、こゝに城塞を築きつゝあつた。

【一九八】婆吒利支提（Pāṭali cetiya）。巴利語大般涅槃經（Mahāparinibbāna-suttanta）にはこれについての記述はない。（唯Cetiya 講堂と記す。）之は他傳によれば、阿闍世王と商議する爲に來た毘舍離の離車王子を迎へる爲に之が建てたものらしい。この堂のことはアヂャンター壁畫十六圖に出てゐる。「涅槃經」の（Cetiya）講堂と之とは同一のものか。

【一九九】之の記述によれば、巴連弗邑は摩竭國の屬國の如くである。國王は婆羅門の如くであるが、仰觀師又は仰觀は普通名詞か固有名詞か不明である。或ひは國王と仰觀師とは國の二種の役人か？巴利語大般涅槃經によれば、摩竭王は跋耆の族の南下を防ぐ爲に巴連弗邑に大臣ヌニーダ（Sunidha）と禹舍（Vassakāra）に命じて、城塞を築かしめてゐたと。

【二〇〇】涅槃經（巴利語）にてもこの豫言を佛陀は爲してゐる。

【二〇一】瞿曇（Gautama）門。これは南方所傳に一致す。

【二〇二】鳩梨村（Kuli）。コーテイ村（Koṭigāma）と同じ、ビガンデー（Bigandet. P. 259.）はカンテイカマ（Kantikama）と呼ぶ。

【二〇三】那提（Nādika）村。大般涅槃經にも出る。（R. Davids: P. 24.）

【二〇四】鞞舍離（Vaiśālī）。離車族（Licchavi）の都城で、恒河の岸近く、摩訶陀の北、憍薩羅國の東にあり。毘提・阿耆等と合致して、跋耆（Vajji）として、强力で、寡頭的族長政治を行つてゐた。

【二〇五】菴羅（Amra）。檬梂（マンゴーMango）のこと。

【二〇六】菴摩羅女（Ambapālī）。有名な富み美しい白拍子である。後佛に歸依し、長老尼歌（Therīgāthā）にはこの人に歸せられる美しい詩がある。（同書二五二以下）巴利語「涅槃經」にも、この遊女が佛陀を訪問したことを記してゐる。

【二〇七】天の水神アプサラス（Apsaras）のことを言ふか。然らば富神クヴェーラの宮殿に仕へる美しき天女で音樂を好む。

【二〇八】以下は婦人に就いての佛陀の弟子への訓戒である。こゝに佛教の女性觀の一面が覗はれる。この女性觀は修道弟子に婦人の誘惑を警戒せしめる爲のものであるから、多少偏頗なるを免れない。巴利語にはこの記述は出でない。他傳のこの折の說法は異る。「涅槃經」は受ある內は受より生ずる悲を、思ひ感ずる間は念に從より起る悲を、力强く制し、壓し、打ち勝つべき」を言つてゐる。他傳は「力を致すべく、骨をくだくとも、心に從つて惡をなすべからず」といひ、自ら心を正しくし、勸めた故作佛したといふ。

【二〇九】三惡道。惡業によつて往來すべき處三種ある。（1）、地獄道、上品の十惡業をなしたものが行く。（2）、餓鬼道、中上の十惡業をなしたものが行く。（3）、畜生道、下品の十惡業をなしたものが行く。

【二一〇】軛鞅。軛は「くびき」。鞅は牛馬の喉下に絡ふ羈絆。むながい。

【二一一】以下の菴摩羅女への佛の說法には女身を厭離すべきことを說き、成佛の至難を說き、說法も高遠なる思想を說かない。釋尊の女性觀（或ひは馬鳴の）がかく女性に稍偏頗なのは在家生活中女性の誘惑に苦しまされて來た爲であらう。

## 巻の第五

### 神力住壽品第二十三

爾の時鞞舍離の　諸[一]離車長者は、　世尊の國に入り、
菴摩羅園に住すると聞き、　素車輿に乘り、　素蓋素衣服は
青赤黃綠色にて　其の衆各ゝ異儀有るを、　導き從へ、前後を翼とし、
塗を爭ひ、路を競ひて前みたり。　天冠・[二]袞花服　寶飾を以て莊嚴せり。
威容は盛に明かに曜き、　暉きを彼の園林に增せり。　[三]五威儀を除捨し、
車を下りて歩み進めり。　慢を息めて形は恭しく、　佛足を頂禮せり。
大衆は佛を圍繞し、　日の重輪光の如し。　離車は[四]師子と名くるを、
諸の離車の長と爲せり。　德貌、師子の如く、　位は師子の臣に居り、
師子の慢を滅除し、　誨を[五]釋師子に受く。　『汝等は大なる威德あり、
名族にて美しき色容あり。　[六]能く世の憍慢を除き、　法を受けて以て明を增せり。
財色香花飾は　戒の莊嚴に如かず。　國土豐かに安樂なるは、
唯汝等の榮を以てす。　身を榮へ而して民を安ずるは、　調御の心に在り。
加ふるに法を樂しむ情を以てし、　德を轉た崇高ならしめよ。　[七]薄土・群鄙にあらずして、
能く衆賢を集む。　當に日は其の德を新にし、　萬民を撫養すべし。
衆を導くに明正を以てし、　牛王の津を渉るが如くせよ。　若し人能く自ら
今世及び後世を念へば、　唯當に正戒を修すべし。　福利あつて二世安かなり。
衆の敬重する所と爲り、　名稱普ねく流聞し、　仁者は樂んで友と爲り、



【一】離車(Licchavi)。鞞舍離の住民、毘提訶等と合致して、跋耆族を形成す。他民族と風俗習慣を少しく異にす。以下の記述、巴利語「涅槃經」にも出す。
【二】袞花服。袞は天子の法服、龍を繡す。
【三】五威儀。王冠・耳環・頸飾・腕環・栴檀をいふか？
【四】師子(Siṁha)。
【五】釋師子(Sakya-siṁha) 釋種出身の人中の師子の意。離車師子に對す。
【六】以下持戒の大切なるを說法す。
【七】跋耆族の恒河の沿岸に於ける富裕とその善政を言つたか。

德流は永く竭り無し。　山林の寶玉石は　皆地に依つて生ず。
戒德も亦地の如く、　衆善の由る所なり。　翅無く虚に騰らんと欲し、
河を渡るに良舟無き如く、　人にして戒德無ければ、　苦を濟ふは實に難きと爲す。
樹に美しき花果あるも、　針刺ありて攀づ可きは難きが如し。　多聞にて美しき色力あるも、
戒を破る者も亦然り。　勝れし堂閣に端坐して、　王の心は自ら莊嚴さる。
淨戒と功德を具し、　大仙に隨つて化さる。　衣服毛羽を染め、
螺髻にて鬚髮を剃り、　戒德を修さずして、　方に衆の苦難を渉らんとす。
[八]日夜三沐浴し、　火を奉じて苦行を修し、　身を穢れし野獸に遺し、
水火に赴いて巖に投ず、　菓を食し、草根を餌とし、　[九]風を吸ひ、恒水を飲み、
氣を服し、以て糧を絶すとも、　正戒を遠離すれば、　斯れ禽獸の道を習ふにて、
正法の器と爲さず。　戒を毀ち、誹謗を招くは、　仁者の親まざる所にて、
心は常に恐怖を懷き、　惡名は影の如く隨ひ、　現世に利益無し。
後世豈に安きを獲んや　是れ故に智慧士は　當に淨戒を修すべし。
生死の曠野に於て　戒は善導師爲り。　持戒は自力に由る。
此は則ち難と爲さず。　淨戒は[一〇]梯隥と爲り、　人を天に上昇せしむ。
淨戒を建立するは、　斯は煩惱の微なるに由る。　諸の過の其の心を壞つは、
善功德を喪失するに由る。　先ず當に我所を離るべし。　我所は諸善を覆ふ。
猶ほ灰の火の上を覆ひ、　足蹈みて燒きを覺ゆる如し。　[一一]憍慢は其の心を覆ひ、
日の重雲を隱すが如し。　慢怠は慚愧を滅し、　憂悲は强志を弱む。
老病は壯容を壞ち、　我慢は諸善を滅す。　諸天阿修羅は

---

【八】　以下苦行を批評し、持戒より功德あるを説く。
【九】　蛇は空氣中の花粉を吸ふて生きると、印度では考ふ。蛇の苦行を行ふものは、しかく空氣を吸つて生きる。恒河の水は神聖視され、それを飲めば功德が多いと考へられてゐる。
【一〇】　梯隥。隥は階。
【一一】　以下貪・瞋・恚の惡を説く。

貪嫉にて諍訟を興す。
[二]我は勝中に於て勝り、
斯は則ち愚夫と爲す。
終に磨滅法と爲る。
詐りて親みて密に怨む。
貪欲の熾燃は
貪愛は消す可きは難し。
貪欲の火、心を焚けば、
樂は不淨業を增す。
貪は則ち愛を生じ、
冗惡は貪に過ぐる無し。
邪覺は正思にあらず。
我無く我所無し。
是れが故に境界に於て
貪欲は解脫を得。
德と過と二を俱に忘れゝば、
能く端正の色を壞す。
親愛の義を斷絕し、
瞋心に隨ふ勿れ。
世に善く駟を調すと稱するを

諸功德を喪失するは、
我、德は勝者と同じ。
色族は悉く無常にて、
何ぞ憍慢を用ひて爲さんや。
猛火は內より發し、
世間の火よりも甚し。
猛火、曠野を焚くも、
正法生ずるは則ち難し。
惡業あれば惡道に墮ち、
愛は則ち諸欲を習ふ
貪は則ち大病と爲す。
能く貪欲を增さしむ。
智慧眞實觀は
當に眞實觀を修すべし。
[三]德を見て貪欲を生じ、
貪恚は除滅を得。
瞋恚は明目を翳らし、
世の輕賤する所と爲る。
能く狂恚心を制するを
是は攝繩容と爲す。

悉く我慢を懷くに由る。
我は勝少に於て劣り、
動搖して暫くも停らず。
貪欲は巨患と爲す。
貪火も亦復た然り。
火盛なれば、水能く滅す。
草盡く還りて復生ず。
貪欲は世樂を求め、
怨は貪欲に過ぐる無し。
欲を習へば、衆苦を招く。
智藥を愚夫は止む。
無常苦は不淨にて
能く彼の邪貪を滅す。
眞實觀已に生ずれば、
過を見て瞋恚を起す。
瞋恚は素容を改め、
法義を聞かんと欲するを害す。
是が故に當に恚を捨つべし。
是を[四]善御者と名く。
恚を縱にし、自ら禁せず、



【二】 我の勝者(Jina)。とは我を無くしたるものゝ意。

【三】 德は勝れたるものゝ意。

【四】 巴利語の Purisadammasārathi (人の牡牛の御者)に當る。回心せざる人を野生の牛に喩へ、佛がそれを調御すると考へた。北傳では「馬の御者」となつたが、之は戰車競爭を好む北方人の嗜好から案出されたのであらう。

憂悔の火は隨つて燒く。
然る後に彼に加へ、
衆生に逼迫し、
世の衆苦迫るを見て、
增微無量の差あり。』
譬へば世の良醫の
佛の說く所の法を聞き、
[一六]佛及び大衆を請じて、
菴摩羅巳に請ぜりと告げたり。
佛心の平等なるを知りて、
安慰して心悅ばしむ。
夜過ぎて明相生じ、
彼の供養を受け畢れり。
三月の安居畢り、
林樹の間に坐し、
佛所に來詣し、
巳に眞實の要を發せり。
今所作巳に作さる。
『滅度の時は遠からず。
時に魔は如來の

若し人、瞋恚を起せば、
或ひは燒かれ、或ひは燒かれず。
復た恚害を加へ、
應に慈悲心を起すべし。
如來は善く方便し
病に隨つて藥を投ずる如し。
卽ち起つて [一五]佛足を禮し、
明日、薄供を設けんとす。
離車は慙愧を懷きて言ふ。
隨喜心を起せり。
伏し化され、純熟し歸れり。
佛は大衆と俱に
[一七]毘紐村に往詣し、
復た鞞舍離に還れり。
普く大光明を放ち、
合掌して勸請[二〇]して言ふ。
「我が所作事畢れば
當に本心を遂ぐべし。」
却後三月滿つれば、
*滅度巳に期有るを知り、

先ず自ら其の心を燒く。
生・老・病・死の苦は
怨多く、復た怨を增す。
衆生は煩惱を起せば、
病に隨つて略說せり。
爾の時諸の離車は
歡喜して頂受せり。
佛は諸の離車に
『彼れ何ぞ我が利を奪ふや』と。
如來は善く宜に隨つて、
蛇の嚴呪を被れるが如し。
菴摩羅の舍に詣り、
彼に於て夏安居せり。
[一八]獼猴池の側に住し、
以て [一九]魔波旬を感ぜしむ。
『昔尼連禪河の側にて
當に涅槃に入るべし。」
時に佛波旬に告ぐ。
當に涅槃に入るべし』
情願旣に已に滿ち、

---

【一五】 佛足を禮するのは歸順を示す表象である。
【一六】「涅槃經」等にも、離車等が供養に請じ、菴摩羅との先約の故に佛は謝り、離車は不快の情を抱いたが、佛になだめられて、退いたとの記述出ず。
【一七】 毘紐村(Beluva)。同樣の記述「涅槃經」に出ず。
【一八】 獼猴池 (Markatahrada)。毘舍離園(摩羅園側にあり、佛こゝにあつて諸經を說く。五精舍の一。
【一九】 魔波旬(Piśuna māra) 魔が合掌し、入滅を乞ふてゐる圖像がある。(Tree and Serpent Worship. plate XXVI)佛教の魔はサタン(Satan) の概念と異り、欲界天(Kāmaloka) である。又彼は三十三天の上の高臺に立つてゐるものとして現されてゐる。(plate XXX)
【二〇】 魔王の捨壽勸請は「涅槃經」・「本行經」にも出て、古い所傳らしい。「涅槃經」によれば、毘紐村滯在中重病に罹られたと記されてゐるので、釋尊自身が涅槃の近きを自覺されたのを、かゝる捨壽の形に修飾したらしい。
* 涅槃のこと

歡喜して天宮に還れり。 如來は樹下に坐し、 正しく三摩提を受け、
業報壽を放捨し、 神力住し命存せり。 如來の壽を捨てしを以て
大地は普く震動し、 十方の虛空境は 周遍く大火然へたり。
須彌山の頂は崩頹し、 天雨は礫石を飛ばし、 狂風は四方に激しく起り、
樹木悉く摧折し、 天樂は哀聲を發し、 天人の心は歡を忘れたり。
佛は三昧より起り、 普く諸の衆生に告げたり。 『我今已に壽を捨て、
三昧力は身に存す。 身は朽敗せる車の 復た往來の因無きが如し。
已に三有を脫し、 鳥の卵を破りて生ぜし如し。』と。

## 離車辭別品第二十四

尊者阿難陀は 地普く天動くを見。 心に驚き、身毛竪ち、
佛に問ふ。『何の因緣ぞ』 佛、阿難陀に告ぐ。 我は住すること三月の壽にて
餘の命行は悉く捨てたり。 是の故に地は大に動けり。』 阿難は佛の教を聞き、
悲を感じ、淚交ゝ流れたり。 猶ほ大力象の 彼の栴檀樹を搖かす如し。
擾動し理[二一]迫迮し、 香汁と淚は流れ下れたり。 大師尊に親重し、
恩深くして未だ[二二]欲を離れず。 此の[二三]四事を惟ふが故に、 悲苦自ら勝へず。
[二四]『今我、世尊の 涅槃の決定の教を聞く。 擧體悉く萎消し、
方に迷つて常音を失ひ、 所聞の法は悉く忘れ、 荒悖は天地を亡せり。
怪しい哉、救世主は 滅度して一駛すべし。 寒水に遭つて死に垂んとし、
火に遇ふも火忽ち復た滅す。 煩惱の曠野に於て 迷亂して其の方を失ひ、



【二一】迫迮。迮は「せまる」「蹙迫す」。
【二二】欲を離る(離欲Virāga)は阿羅漢の屬性である。この時阿難は未だ阿羅漢果を得てゐなかつた。
【二三】四事。四は四方卽ち世界の意か。然らば、四事は世界の事の意。
【二四】以下に阿難は佛に現れて、滅することの速きを眞情を吐露して述べて、人の心を打つ。譬喩も巧である。

忽ち善導師に遇ひ、　未だ度ずして忽ち復た失ふ。　人の長き砂漠を渉り、
熱渇久しく水に乏しく、　忽ち清涼池に遇ひ、　奔趣して悉く枯渇する如し。
二五 紺睫臨睛目は　明かに三世を鑒て、　智慧は幽冥を照せり。
昏迷一に何ぞ速き、　猶も旱地の苗は　雲興り、雨を仰希し、
暴風と雲は現れて速かに滅し、　望絶へて空田を守るが如し。　無智の大闇冥に
群生は悉く方に迷ひ、　如來は慧燈を燃し、　忽ち滅し、出ずるに由莫し。
佛、阿難の說の　酸訴の情悲しく切なるを聞き、　軟語して安慰して言ひ、
爲に眞實に法を說く。　『若し自性を知れば、　應に憂悲に處るべからず。
一切の諸の 二六 有爲は　悉く皆磨滅の法なり。　我已に汝の爲に說けり。
二七 合會の性は別離にて、　恩愛の理は常ならず、　當に悲戀の心を捨つべし。
有爲流動の法は　生滅し、二八 自在ならず。　長存せしめんと欲すれば、
終に是の處有る無し。　有爲若し常に存すれば、　遷變する者有る無し。
此は則ち 二九 解脫と爲す。　何に於て更に求めん　汝及び餘の衆生は
今我に於て何ぞ求めん。　三〇 汝等の應に得べき所は　我已に說き竟れりと爲す。
何ぞ我が此の身を用ひんや　妙法身は長く存す。　我は我が寂靜に住す。
所要唯此に在り。　然れども我、衆生に於て　未だ曾て惓く所有らず。
當に厭離想を修し、　善く自洲に住すべし。　當に知るべし、自洲は
專精に勤方便し、　獨り靜かに閑居を修し、　他信に從はず。
當に知るべし、法洲とは　決定の明慧燈にて　能く癡闇を滅除し、
四境界を觀察し、　勝法を逮得す。　我を離れ、我所を離る。

---

【二五】　佛陀の眼を修飾するに好んで用ひられる。相好の一。

【二六】　有爲。爲とは造作の義、有爲とは造作を有するをいふ。即ち因緣所生の事物は盡く有爲である。無爲は之に對し、涅槃のことをいふ。

【二七】　會者常離の思想。梵文金剛針論(Vajracchedikā sūtra. An. OX. vol. 1. part 1. p. 46) に同じ頌句 (Tānakā timiram)出ず。

【二八】　吠陀では神々は不滅と考へられてゐるが、初めもなく自在であるものとは考へられてゐない。

【二九】　即ち解脫を求むる必要はない。何故ならば、常住ならば、既に解脫を有してゐるので。

【三〇】　法身思想である。こゝには教法を法身(Dharmakāya)とする法身常住思想が現れてゐる。(妙法身長存、佛身之存亡　此法常無盡)

*住於自洲、　法洲の思想は普通自燈明・法燈明の思想として現れてゐる。即ち、本讃では自洲に住し、法洲に住せであるが、普通自らを燈明として、法を燈明とせよ、と考へられてゐた。然し、「涅槃經」の (dīpa) も佛音の註によれば「島」

骨竿皮肉の塗　[三一]血澆以筋纒とを　諸観するに悉く不浄なり、
云何ぞ此身を楽まん。　[三二]諸受は縁によつて生じ、　猶ほ水上の泡の如し。
[三三]生滅は無常苦なり。　楽想を遠離せよ。　心識生ずれば住滅し、
新に新にして暫くも停らず。　寂滅を思惟すれば、　常想は永く已に乖く。
[三四]業行は因縁により起り、　聚散して常に倶ならず。　愚癡は我想を生じ、
慧者は我所無し。　此の四境界に於て　思惟し、正観察せよ。
此は則ち一乗道にて　衆苦悉く皆滅す。　若し能く此に住すれば、
眞實の正観者なり。　[三五]佛身の存は亡ぶとも、　此の法は常に盡くる無し。」
佛は此の妙法を説き、　阿難を安慰するの時、　諸離車は[三六]之を聞き、
惶怖して咸來集せり。　悉く俗の威儀を捨て、　驅馳して佛所に至り、
禮し畢り、一面に坐し、　問はんと欲して宣ぶる能はず。　佛は已に其の心を知り、
逆に方便して説を爲す。　『我今汝を観察し、　心は異常想有り、
俗縁の務を放捨し、　唯法を念じ、情を爲す。　汝今我より
所聞所知を欲するは、　我が存亡の際に於て　愼んで憂悲を生ずる莫れ。
無常なる有爲の性は　躁動變易の法にて、　堅からず利益に非らず。
久しく住するの相有る無し。　古昔の諸仙王　[三七]婆私吒仙等
[三八]曼陀轉輪王は　其の比亦衆多し。　是の如き諸先勝は
力、[三九]自在天の如くにて、　悉く已に久しく磨滅し、　一も今に存するは無し。
日月天帝釋は　其の數亦甚だ衆きも、　悉く皆[四〇]磨滅に歸し、
長く存する者有る無し。　過去世の諸佛は　數、恒邊の沙の如くにて



と解すべきである。(Mahāparinibbāna. s .II. 25. p. 00—101)之は漢譯者が梵 dvīpa (巴dīpa)島、dīpa(dīpa)燈明とを、巴利語にては同じ爲混同したのである。本讃の漢譯は正しい。

【三一】 血澆。澆は水の洄り流るゝ波。

【三二】 受(Vedanā)。感情

【三三】 生滅住の法、世界の開展の階段についての佛教的説明である。世界は渾沌から生じ、一定期間住し、後滅する。この法則は永續的のもので、空間時間を通じて行はれる。

【三四】 業行(Saṁskāra)。行は盲目的意志とでも解すべきもの、十二因縁中の無明より生ず。

【三五】 佛身(Buddha-kāya)。こゝでは單に釋尊の肉身の意に用ふ。

【三六】 佛陀の涅槃が近づくことを聞いて。

【三七】 婆私吒仙(Vaśiṣṭha)。梵志、前出。

【三八】 曼陀轉輪王(Māndhātṛ, the Cakravartin)。前出。

【三九】 自在天(Īśvarava)。

【四〇】 神々は死すべきものと考へられてゐる。cf. Wilson: Rgveda, vol 1. p. 7. n. eto.

智慧は世間を照し、　悉く皆［四一］燈の滅するが如し。　未來世の諸佛も
將に滅せんとするも亦然り。　我今豈に獨り異らんや　當に涅槃に入るべし。
彼(かしこ)に應に度すべき者有り。　今宜しく進んで前行すべし。　毘舍離は快く樂し。
汝等且(しばら)く自ら安ぜよ。　世間は［四二］依怙無し。　三界は歡ぶに足らず。
當に憂悲の苦を止めて、　離欲心を生ずべし。　決斷して長く別れ已りて、
北方に遊び、　［四三］靡々(びゞ)として長路を渉り、　日の［四四］西山に傍(ちか)づく如し。
爾(そ)の時諸離車は　悲しみ吟じ、路を逐ふて隨ひ、　天を仰いで哀歎せり。
［四五］『嗚呼何ぞ怪なる哉。　［四六］形は眞金山の如く、　衆相は莊嚴を具し、
久しからずして將に崩壞せんとす。　無常何ぞ慈無き　生死は久しく虚渴す。
如來は智慧の母にて、　今頓に放捨せり。　救無き苦は奈何にせん
衆生は久しく闇冥なりしも、　明燈を假りて以て行けり。　如何にして智慧日は
忽然として光を潛めたる　無智は迅流と爲り、　諸衆生を漂泊せしめたり。
如何にして法の橋梁は　一旦にて忽然として摧けし　慈悲の大醫王は
無上智の良藥にて　衆生の苦を療治し、　如何にして忽ち遠く逝くや
慈悲の妙天幢は　智慧を以て莊嚴し、　金剛心にて絞絡し、
世間は觀て厭くる無し。　祠祀の嚴勝幢は　云何にして一旦にて崩るゝや
衆生、何ぞ薄福にして、　生の盡流を輪迴するや　解脫の門は忽ち閉ぢ、
長く苦んで出ずるの期無し。　如來は善く安慰し、　情を割りて長辭せり。』
心を制して悲戀を忍び、　萎れし［四七］迦尼花の如く、　徘徊して遲々とし、
［四八］悵怏(ちやうあう)して路に隨つて行けり。　人の其の親々喪ひ、　葬畢り、長く訣して還れる如し。

---

【四一】燈の消えるとの考は、涅槃の定義(Pajjotassa nibbānam)として基本的のものである。

【四二】依怙。依り所。

【四三】靡靡。相隨從する貌、遲き貌。

【四四】佛陀が次第に彼岸の涅槃に近くのを、太陽が沈むべき西山に近くのに喩へた。

【四五】以下佛陀の涅槃の速きを、巧な譬喩を以て哀しむ。哀調切々として讀者の胸を打つ。

【四六】佛身を金山(須彌山)に喩へるのは屢々現れる所である。相好の一。＊衆相(Lakṣaṇāḥ 複數)。馬鳴は三十二相を知つてゐたと思はれる。

【四七】迦尼(Karṇikāra)。Pterospermum acerifolium の花。

【四八】悵怏。嘆きうらむこと。

# 涅槃品第二十五

佛は涅槃處に至り、　鞞舍離は空虛にて、　猶ほ夜の雲冥して、」
星月の光明を失ふ如し。　國土は先に安樂にして、　今は頓に凋悴せり。
猶ほ慈父を喪ひ、　孤女の常に獨り悲しむ如し。　[四九]端正にして無聞、
聰明にして薄德、　心猾にして心吃、　慧明にして才乏しく、
神通ありて威儀無く、　慈悲心ありて虛僞に、　高勝にして力無く、
威儀にして法無きが如し。　鞞舍離も亦然り。　素榮へて今悴へ、
猶ほ秋田の苗の　水を失ひ、悉く枯萎するが如し、　或ひは火を斷ち、烟を滅し、
或ひは食に對し飡を忘る。　悉く公私の業を廢し、　諸の俗緣を修めず。
佛を念じ恩を感ずるは深く、　默々として各言はず。　時に師子離車は
強く其の憂悲を忍ぶも、　泣を垂れ、哀聲を發し、　以て眷戀心を表したり。
[五〇]『世尊は諸の邪徑を破壞し、　正法を顯示せり。　已に諸の外道を降し、
遂に往いて復た還らず。　世は世道を絕離し、　無常は大病と爲す。
世尊は大寂に入り、　依無く救有る無し、　方便の最勝なる尊は
潛光究竟處なり。　我等は强志を失ふ。　火の其の薪を絕つが如し。
世尊は世蔭を捨つ。　群生は甚だ悲しむべし。　人の神力を失ふが如く、
世を擧げて共に之を哀しむ。　暑を逃れ、涼地に投ず、　寒に遭ひ、以て火に憑る。
一旦にて悉く廓然たり。　群生何ぞ歸する所あらん　殊勝の法を通達し、
世の陶鑄師と爲る。　世間は宰主を失ひ、　人、道を喪へば則ち亡ぶ。



【四九】以下の譬喩は、優れたものであるが、何か一方に缺くる所あるものである。鞞舍離は勝れたる都市なるも、佛陀無きを言ふ。

【五〇】以下の離車師子の哀歎は譬喩殊に巧みで、哀愁をこめた珠玉の如き詩句である。

老・病・死は自在にて、道喪はるれば、非道通ず。能く大苦の機を壞つ。
世間は何ぞ雙有らんや。猛熱極焰は盛なるも、大雲雨は消へしむ。
貪欲の火は熾然たり。其れ誰か能く滅せしめん。[五一]堅固にて能く擔ふ者は
已に世の重任を捨てたり。復た何の智慧力にて能く不請の友と爲らん
彼の刑に臨む囚の死と爲りて酒に醉ふが如し。衆生は迷惑し、識は
惟、死受生の爲なり。利鋸は以て材を解き、無常は世間を解く。
癡闇は深水と爲り、愛欲は巨浪と爲り、煩惱は浮沫と爲り、
邪見は[五二]摩竭魚なり。唯智慧船有りて、能く斯の大海を度れり。
業病は樹花と爲り、衰老は纖條と爲り、死は樹の深き根と爲り、
有業は其の芽と爲る。智慧の剛利刀は能くこの三有の樹を斷てり。
無明は鑽燧と爲り、貪欲は熾焰と爲り、五欲境界は薪なり。
之を滅するに智水を以てす。殊勝法を具足し、已に癡冥を壞ち、
安隱の正路を見、諸煩惱を究竟せり。慈悲は衆生を化し、
[五三]怨親は異相無く、一切智通達して、今悉く棄捨せり。
[五四]歎美なる清淨音あり、方身と纖長臂ある。かゝる[五五]大仙にして、しかも邊有り。
何人か無窮を得ん當に覺るべき時は遷りて速し。應に正法を勤求すべし。
嶮道にて水に遇ひ、時に飲み、速かに路を進むが如し。非常は甚だ暴逆にて、
普く壞ち、貴賤無し。正觀は心に存し、眠ると雖も亦常に覺めたり。」
時に離車師子は常に佛の智慧を念じ、生死を厭離し、
[五六]人中の師子を歎慕し、世の恩愛を存せず、深く離欲の德を崇び、

---

【五一】佛の性格を説明する名の一。

【五二】摩竭魚(Matsya)。「魚」。神話の大魚で、マヌ(Manu)に保護せられて大きくなつたと。ヴイシユヌの化身で、マヌが船で渡るとき、現れて綱でその大きな角に舟を結び、水の引く迄安全に保つたと。然しながら、この摩竭魚は人・舟を呑み込み、害を加へることがあるを恐れられてゐる。

【五三】怨みあるも親しき者も等しき目で見て、相違なきこと。

【五四】歎美清淨音　方身纖長臂、佛又は轉輪王の相好の一。

【五五】大仙さへ死あり。不滅でなく例外を主張し得ない。離車は無常の法を信じ、これは彼等は慢の高い性質であつたが、學ばねばならぬ知識であつたらしい。

【五六】人師子(Sinha)。卽ち人中の師子、佛陀を言ふ。離車族の師子に相對する。毘舍離の遺跡の近くに「師子」を頭に冠らした美しい柱が發見された。

輕躁の意を折伏し、　心、寂靜處に栖めり。　勤修して惠施を行ひ、
憍慢を遠離し、　獨り閑居に修するを樂しみ、　眞實法を思惟せり。
爾の時一切智者は　五七 圓身にて師子の顧みをなし、　彼の鞞舍離を瞻て、
長辭偈を說けり。　「是は吾の最後の　此の鞞舍離に遊ぶことなり。
五八 力士の生地に往いて、　當に涅槃に入るべし。」　漸く 五九 次第にして遊行し、
彼の 六〇 蒲伽城に至れり。　六一 堅固林に安住し、　諸比丘を敎誡せり。
「吾今中夜を以て　當に涅槃に入るべし。　六二 汝等は當に法に依るべし。
是は則ち尊勝處なり。　修多羅に入らず、　亦律儀に順はず、
眞實義に相違する敎は　則ち應に攝受すべからず。　其は法に非らず、亦律に非ず、
又我が所說に非らず。　是は則ち闇說と爲す。　汝等は應に速かに捨て、
六三 明說を執受すべし。　是は則ち顚倒に非ず。　是は則ち 六四 我が所說にて
法の如き律の如き敎なり。　我が 六五 法、律の如く受くるは、　是は則ち信ず可きと爲す。
我が法、律は非なりと言ふは、　是は則ち信ず可らず。　六六 微細義を解さず、
謬は文字に隨ふ。　是は則ち愚夫と爲す。　非法にして妄說なり。
其の眞僞を別たざるは、　無見にして闇受なり。　猶ほ 六七 鍊金共に肆ねて、
世間を誑惑する如し。　愚夫は淺智を習ひ、　眞實義を解さず。
相似法を受けて、　眞法受を作る。　是の故に當に審諦し、
眞法律を觀察すべし。　猶ほ鍊金師の　燒き打ちて眞を取るが如し。
六八 諸經論を知らざれば、　是は則ち黠慧に非らず、　應に所應を說くべからず。
應に作すべく、應に見るべからず。　當に平等受を作すべし。　句義は說の如く行へ。

【五七】 圓身師子顧。巴利語「涅槃經」では Nāgāvalokitam apaloketvā 卽ち象の眺めを眺めて、である。象は首が短いので、後を見るには全身をふり向けねば見ることが出來ない。佛は首の骨に接ぎ目なく、振り向くには身體全體を向けなければならない。そのことを言つた。「涅槃經」では矢張り、毘舍離を佛が最後に去る時この記述がある。本讃の記述もその意味であらう。

【五八】 力士。末羅族（Mallā）を言ふ。北方、鳩夷城附近に住み、强力にて、佛涅槃の折には葬式に貢献する所多かつた。

【五九】「次第にして」は巴利語では、毘舍離からバンダ村（Bhaṇḍa-gāma）に、バンダ村からハッテイ村（Hatthi-gāma）に、ハッテイ村からアンバ村（Amba-gāma）へ、アンバ村からヂャンブ村（Jambu-gāma）へ、それから薄伽城（Bhoga）に行つたことになつてゐる。

【六〇】 蒲伽城（Bhoga）。

【六一】 アーナンダ支提（Ānandacetiya）に於ける堅固林 Sāla である。沙羅（Śāla）樹はシャール樹（Śāl）で、Vatica Robusta。高價な用材木である。

剣を執るも方便無ければ、　則ち反つて其の手を傷く。　辭句は巧に便ぜざれば、
其の義は了知し難し。　夜行き室を求め、　宅曠しく處を知る莫し。
義を失へば則ち法を忘れ、　法を忘れゝば心馳亂す。　是の故に智慧士は
眞實義を違へず。』　斯の教誡を說き已り、　[六九]波婆城に至れり。
彼の諸力士衆は　種々の供養を設けたり。　時に長者子有り、
其名は[七〇]純陀と曰ふ。　佛に請じ、其舍に至り、　[七一]最後飯を供設せり。
飯食し、說法し畢り、　[七二]鳩夷城に行詣し、　[七三]蕨蕨河及び
熙連二河を度れり。　彼に堅固林有り、　安隱閑靜處なり。
[七四]金河に入り洗浴すれば、　身は眞金山の若し。　阿難陀に告勅し、
彼の雙樹の間に於て　掃灑し淸淨ならしめ、　[七五]繩床を安置せり。
『吾今中夜の時に　當に涅槃に入るべし。』　阿難は佛の教を聞き、
氣塞ぎて心悲しめり。　行いて泣いて教を奉じ、　布置し訖り、還つて白せり。
如來は繩床に就き、　北首右脇にて臥し、　手を枕にし、[七六]雙足を累ね、
猶ほ師子王の如し。　苦を畢へ、後邊身は　一臥して永く起たず。
弟子衆は圍繞し、　哀歎せり。[七七]『世眼滅せんとす。』　風止み、林流靜かに、
鳥獸寂として聲無く、　樹木の汁涙流れ、　華葉は非時にして零ちたり。
未だ欲を離れざる人天は、　悉く皆大に惶怖せり。　人、曠澤に遊び、
道險にして未だ村に至らず、　但く行いて至らざるを恐れ、　心懼れ、形怱々たる如し。
如來畢竟して臥して、　阿難陀に告ぐ。　『往いて諸力士に告げよ。
我が涅槃の時至れり。　彼若し我を見ざれば、　永く恨んで大苦を生ぜん。』

---

【六二】 後世僞ぞを判釋する爲の批判方法である。修多羅(Sūtra)に入らず、律儀(Vinaya)に入つてゐない教は佛說として取るべからずの意。この說法は巴利文とよく一致す。
【六三】「正しく語られし語を受け保て」又は「正しき道理に從ふもの」は佛の教說の範圍を決定する標準とされる。
【六四】「我所說」と法律との區別に就いては佛說(Tathāgatena vutto)と呼ばれる多くの議論に摘用されてゐる。
【六五】 法律(Dhamma-vinaya)。この法は經(Sūtra)と後世に論に發展する論義的傾向を有するものを含む。
【六六】 文字(Vyañjanam)の眞實の意味を汲まず、文字に拘泥し、誤解するを言ふ。この記述は巴利語にも出ず。
【六七】 眞鍮と金とを並らべ、世間を誑くこと。色は似るも、實質は異る。
【六八】 經論(Sūtra-śāstra)。
【六九】 波婆城(Pāvā)。離車と同盟せる末羅(Mallā)即ち力士族の都市。
【七〇】 長者子純陀(Cunda)。鍛冶屋の子であつて、佛陀に最後飯を供養した。佛陀はその前から胃腸を害して居られたが、この食後激しい腹痛を覺へられ、入滅された。純陀

阿難は佛の教を受け、　悲しみ泣いて路に隨へり。　彼の諸力士に告ぐ。
『世尊は已に畢竟せり。』　諸力士は之を聞き、　極めて大恐怖を生じ、
士女は奔馳して出で、　號泣して佛所に至り、　弊衣にて散髪し、
塵を蒙り身に汗を流せり。　號慟して彼の林に詣れり。　猶ほ(七八)天福の盡きたる如し。
涙を垂れ、佛足を禮し、　憂悲し、身は萎熟せり。　如來は安慰して說く。
『汝等は憂慼する勿れ。　今は應に隨喜すべき時なり。　宜しく憂慼を生ずべからず。
長劫の規する所、　我今始めて獲得せん。　已に根境界を度り、
無盡なる清涼處に至り、　地・水・火・風を離れ、　寂靜にて生滅せず、
永く憂患を除けり。　云何ぞ我が爲に憂ふる　我は昔(七九)伽闍山にて
此の身を捨てんと欲せり。　本因緣を以ての故に　世に存して今に至れり。
斯の危脆の身を守るは、　毒蛇の同居する如し。　今大寂に入り、
衆苦の緣已に畢らん。　復た更に身を受けず、　未來の苦は長く息まん。
汝等復た應に　我が爲に恐怖を生ぜざれ。』　力士は佛の大寂靜に
入らんと說くを聞き、　心亂れて目冥し、　大黑闇を覩るが如し。
合掌して佛に白して言ふ。　『佛は生死の苦を離れ、　永く(八〇)寂滅の樂に之く。
我等實に欣慶せん。　猶ほ燒れし舍の　盛火中より親の出ずるが如し。
如來は旣に滅して後、　群生は覩る所無し。　永く救護を違る。
是れ故に憂悲を生ず。　譬へば商人衆の　遠く曠野を涉り、
唯一導師有り、　忽然として中道にて亡び、　大衆の怙る所無きが如し。
云何ぞ憂悲せざる　現世にて自ら證知し、　一切知見を覩て、



は供養を悔いて悲しんでゐた時、佛は親しく慰める所あつた。

【七一】 巴利文涅槃經によれば、この折の食は軟食（Bhojaniyam）嚼食（Khādaniyam）とSūkaramaddavam とであつたと。後者は異說があつて一定しないが、佛音（Buddhaghosa）の註によれば、若くもなく年老つてもゐない野羊の美味しい肉其他數說を擧げる。漢譯は栴檀木耳（卽ち一種の茸）とも言ふ。何れが正しいか不明であるが、不消化的な食物であつたのだらう。

【七二】 鳩夷城（Kusinagara）。末羅族の都城。現在のカシア（Kasia）、この附近の林の中にて佛陀は涅槃を取られた。

【七三】 蹶蕨河（Kakutthā）。巴利文によれば、この河の附近で釋尊が水を乞ひ、阿難は五百車が通り、濁ることを述べたが、再三の命で行けば、水は清かつたと。

【七四】 熙連河（Hiranyavati）。鳩夷城附近の河。現土はヒラナ（Hirana）として知られる。

【七五】 金河。Hiranyavati（金ある）の異名。

【七六】 繩床。繩を張つた粗末な床。禪者之による。

【七七】 一方の足の上に他の足を累ねること。

而も勝利を獲ず。　世を擧げて應に笑ふ可き所なり。　譬へば寳山を經て、
愚癡にて貧苦を守るが如し。』　是の如く諸力士は　佛に向つて悲しみ訴へたり。
猶ほ人の一子の　慈父に悲しみ訴ふる如し。　佛は善誘辭を以て
第一義を顯示し、　諸力士衆に告ぐ。　『誠に汝の言ふ所の如し。
[81]道を求めて須しく精勤すべし。　但我が得しを見ざるとも、　我が所說の如く行へ。
衆苦の網を離るゝを得ん。　行道は心に存す。　必ずしも我を見るに由らず。
猶ほ疾病人の　方に依り良藥を服し、　衆病自然に除き、
醫師を見るを待たざる如し。　我が說の如く行はざれば、　空しく我を見るも益無し。
我と相ひ遠しと雖も、　法を行ずれば我に近しと爲す。　同じく止るも法に隨はざれば、
當に知るべし、我を去ることを遠しと。　心を攝し、放逸なる莫れ。　精勤して正業を修せ。
人は世間に生れ、　長夜、衆苦迫り、　擾動して自ら安ぜず。
猶ほ風中の燈の若し。』　時に諸力士衆は　佛の慈悲の敎を聞き、
內に感じて涙を收め、　強いて自ら抑へ止めて歸れり。

## 大般涅槃品第二十六

爾の時梵志有り、　[82]須跋陀羅と名く。　賢德は悉く備り足り、
淨戒は衆生を護れり。　少しく邪見を稟へ、　外道を修して出家せり。
來りて世尊を見んと欲し、　阿難陀に告げ語れり。　『我、如來の道を聞くに、
厥の義深く測り難し。　世間の無上覺にて　第一[83]調御師なり。
今[84]般涅槃を欲し、　復た[85]再び遇ふ可きは難し、　見難く、見者は難し。

【七七】世界の眼　世界にて眼の役目をする者。即ち覺者たる佛のこと。
【七八】天(Deva)の處　天が終りに近づく時には、ある相(頭の華鬘が色あせるとか、寢床が不安になる等)が示され、天、天女達にも一般の悲みがあると考へる。
【七九】闍耶山(Gayā)。
【八〇】寂滅樂は涅槃(Nirvāṇa)の樂の意味か。
【八一】道を行ずる者は我と遠く離れても、近く住するのであり、道を行じなければ近く住しても何の益もないとのこの思想は、注意すべきである。
【八二】須跋陀羅(Subhadra)。佛入滅直前に拘尸城外にて敎化を受け、歸佛し、直ちに自らも入滅せし最後弟子。
【八三】調御師(Purisa-dhamma-sārathi)。馬を調御する者に、人を調御し、敎導する佛陀を喩へた。
【八四】般涅槃(Parinirvāṇa)。
【八五】如來は極めて稀れにこの世に出現すると考へられる。

猶ほ鏡中の月の如し、　我今無上善導師を　見奉らんと欲す。
衆苦を免るゝを求め、　生死の彼岸を度らん爲に。　佛日は光を潛めんと欲す。
願くは我に暫く見はしめよ。　阿難は情悲しみ感じ、　兼ねて謂へらく[八六]譏論か、
或ひは世尊の滅を欣ぶ爲にて、　宜しく佛に見はしむべからずと。　佛は彼の希望の
正法の器爲るに堪ゆるを知りて、　阿難に告げて言ふ。　『彼の外道の前むを聽け。
[八七]我、人を度する爲に生る。　汝、留難を作す勿れ。』　須跋陀羅は聞いて、
心に大歡喜を生じ、　樂法の情は轉ゝ深く、　敬を加へて佛前に至る。
時に應じて隨順して言ひ、　軟語して問訊し、　和顏にて合掌して請ふ。
『今問ふ所有らんと欲す。　世に知法者有り、　我比の如き甚だ衆し。
唯佛所得の　解脫異要道を聞けり。　願くは我が爲に略說し、
虛渴懷を沾潤されよ。　論義を爲さざるの故に　亦勝負心無し。』
佛は彼の梵志の爲に　略して八正道を說けり。　彼は聞いて卽ち虛心にて受け、
猶ほ迷つて正路を得たる如くにて、　先に學ぶ所は　究竟道と爲さざるを覺知せり。
卽ち未曾有を得て、　邪徑を捨離し、　兼ねて癡闇の障に背けり。
先に習ふ所は　瞋恚癡冥と俱にて　不善業を長く養ひ、
愛恚癡等の行はるゝを思惟し、　能く諸善業　多聞・慧・精進を起せり。
亦有愛に由りて生ずる　恚癡若し斷ずれば、　則ち諸業を離れ、
諸業既に已に除けり。　是は[八八]業解脫と名く。　諸業解脫は
義と相應せず、　世間は一切　悉く皆[八九]自性有りと說く。
愛瞋恚癡有りて　自性有るは、　此則ち應に常に存すべし。



【八六】譏論。譏は誹(そし)ること。

【八七】入滅の時に敢へて何人を救はんとする所に、佛陀の教師としての面目躍如としてゐる。

【八八】業解脫(Karma-mokṣa)。

【八九】自性(Svabhāva)の說は馬鳴當時廣く行はれてゐたらしい。佛教の Svabhāvika 派もこの時代に源を有するか。

云何にして解脱せん　九〇 正使恚癡滅すれば、　有愛還りて復た生ず。
水の自性は冷きも、　火を緣とする故に熱を成ずる如し。　熱き息は冷に歸す。
自性は常なるを以ての故に。　當に知るべし、愛性有れば、　聞慧進んで增さず。
增さず、亦滅ぜず、　云何にして是れ解脱と言はん。　先に謂へらく、彼の生死は
本、自性中より生ずと。　今彼の義を觀るに、　解脱を得る者無し。
自性は則ち常住ならば、　云何にして究竟有らん　譬へば明燈を燃やす如し。
何ぞ能く光無からしめん　佛道は眞實義なり。　愛を緣として世間を生ず。
愛滅すれば則ち寂靜なり。　因滅する故に果亡ぶ。　本謂へらく、我は身と異るとし、
作者無きを見ず。　今佛の正敎を聞くに、　世間に我有る無し。
諸法は因緣にて生ず。　自在有る無き故に、　因緣にて生ぜし故に苦しみ、
因緣滅すれば亦然り。　世の因緣生なるを觀ずれば、　則ち 九一 斷見を滅す。
緣離れ、世間滅すれば、　則ち 常見を離る。　悉く本の所見を捨て丶
深く佛の正法を見たり。　宿命は善因を種へ、　法を聞いて能く卽ち悟る。
已に善寂滅　淸涼無盡處を得たり。　心開き、信增し廣く、
如來の臥するを仰瞻して、　如來の世を捨て、　般涅槃するを觀るに忍びず、
「佛の未だ究竟せざる及び　我當に先に滅度すべし。」と、　合掌して聖顏を禮し、
一面に正基に坐せり。　壽を捨て丶涅槃に入り、　雨の小火を滅する如し。
佛は諸比丘に告げて、　「我が最後の弟子なり。　而して今已に涅槃せり。
汝等當に供養すべし。」と。　佛、初夜過ぎ、　月明かに衆星朗らかに、
閑林靜かにして聲無きを以て、　大悲心を興し、　諸弟子を 九二 遺誡せり。

【九〇】正使。習氣に對するの稱。正しく現起する煩惱の正體を正使と言ひ、其の煩惱の餘習を習氣といふ、阿羅漢は正使を斷ずるも習氣を亡すこと能はない。

【九一】斷見、常見。有情の身心は一期を限つて斷絕すると見るを斷見と言ひ、之に反して身心共に常住不滅と見るを常見と言ふ。この二見を邊見と名けて、五惡見の第二とする。

【九二】巴利文「大般涅槃經」に說くものと略ゝ一致する。佛陀は事實入滅直前にこれらの遺誡を爲されたであらう。戒・正業・慚愧・貪・瞋恚を無くすこと、諂僞・慳悋無きこと。少欲知足・精進・正定・智慧・慈悲を勸め說いてゐる。

「吾が般涅槃の後に　汝等當に　九三 波羅提木叉を恭敬すべし、
即ち是は汝の大師にて　巨夜の明燈、　貧人の大寶なり。
當に教誡する所の者は　汝等當に隨順し　我に事へる如くにて異る無かるべし。
當に身口行を淨め、　諸治生業を離るべし、　田宅は衆生を畜へ、
財及び五穀を積む、　一切は當に遠離し、　大火坑を避くるが如くすべし。
土を墾し、草木を截へ、　醫は諸病を療治する。　九四 仰いで曆數を觀、
吉凶の象を推步し、　利害を占相す。　此れ悉く應に爲すべからず。
身を節して隨時に食し、　使を受けて術を行はず。　湯藥を合和せず、
諸諂曲を遠離せよ。　法に順へる資生の具は　應當に量を知りて受くべし。
受くれば則ち積聚せず。　是は則ち略して戒を説く。　九五 衆戒の根と爲し、
亦解脱本と爲す。　此の法に依り、能く　一切の諸正受を生ず。
一切の眞實智は　斯を緣とし、究竟を得る。　是の故に當に執持して、
其を斷壞せしむる勿るべし。　淨戒斷ぜざる故に、　則ち諸善法有り。
無ければ則ち諸善無し。　戒建立を以ての故に、　已に清淨戒に住し、
善く諸情根を攝り、　猶ほ善く牛を牧し、　其を縱暴せしめざる如し。
九六 諸根の馬を攝せず、　六境に縱逸なれば、　現世にては殃過を致し、
將に惡道に墮ちんとす。　譬へば馬を調せざれば、　人を坑陷に墮さしむるが如し。
是の故に明智者は　應に諸根を縱にすべからず。　諸根は甚だ凶惡にて
人の重怨と爲る。　衆生は諸根を愛し、　還つて彼の爲に傷害さる。
深怨は毒蛇を盛り、　暴虎及び猛火は　世間の甚惡にて





【九三】 波羅提木叉（Prātimokṣa）。戒律三名の一、別解脱又は處々解脱と譯す。七衆所受の戒律は別々に身口七支の惡を解脱する意味で、定共戒・道共戒に簡異して別解脱戒と稱する。

【九四】 天文の運行を觀察して人事其外の吉凶の前徴を占相すること。印度に於ては占星術は發達してゐた。

【九五】 戒(Sīla)。

【九六】 根(Indriya 感官)は好んで奔馬に喩へられる。

慧者の畏れざる所。　唯輕躁心の　人を將いて惡道に入るを畏る。
彼の樂小恬を以て　深險を觀ざるの故に、　狂象は利鈎を失ひ、
九七猨猴は樹林を得る。　輕躁心は是の如く、　慧者は當に攝持すべし。
放心は自在ならしめて　終に寂滅を得ず。　是の故に當に心を制し、
速やかに安靜處に之くべし。　九八飯食は節量を知り、　當に服藥法の如くすべし。
飯食を因とし、　貪恚心を生ずる勿れ。　飯食は飢渇を止む。
膏と朽敗車の如し。　譬へば蜂の花を採り、　其の色香を壞たざる如し。
比丘は乞食を行ひ、　彼の信心を傷くる勿れ。　若し人心を開いて施せば、
當に彼の堪ゆる所を推すべし。　牛の力を籌量せざれば、　重く載んで其を傷かしむ。
朝中　九九哺の三時に　次第に　一〇〇正業を修め、　初後二夜分も
亦睡眠に著く莫れ。　中夜、端心にて臥し、　係念、明相在り。
終夜睡眠し、　身命空しく過さしむる勿れ。　時に火常に身を燒く。
云何にして長く睡眠せん　煩惱は衆怨の家にて、　虛に乘じて隨つて害す。
心は睡寐に惛く、　死至り、孰れか能く覺めん　毒蛇は宅に藏し、
善呪にて能く出でしめ、　一〇一黑虺、其の心に居り、　明覺善呪にて除く。
術無くして長眠するは、　是は則ち無慚の人なり。　慚愧は嚴服と爲し、
慚は制象の鈎と爲す。　慚愧は心を定めしめ、　無慚は善根を喪ふ。
慚愧は世に賢と稱し、　無慚は禽獸の倫なり。　若し人、利刀を以て
節々に其の身を解かるゝとも、　應に恚恨を懷く可らず。　口に惡言を加へず。
惡しく念ひて惡しく言へば、　自ら傷け、彼を寧せず。　身を節し、苦行を修するも、

【九七】猨猴。猨は猿屬、手長猿。
【九八】乞食に際しての罪過に開説してゐる。與へられる食の量が多くても、違つてゐても不可である。
【九九】哺。申の刻、卽ち今の午後四時に當る。
【一〇〇】正業(Samyak-karma)八正道の一。
【一〇一】黑虺。虺は蝮。

[102] 忍辱の勝に過ぐる無し。　唯忍辱を行ずる有れば、　堅固力を伏し難し。
是の故に恨を懷き、　[103] 惡言以て人に加ふる勿れ。　瞋恚は正法を壞ち、
亦端正の色を壞ち、　美名稱を喪失す。　瞋火は自ら心を燒く。
瞋は功德の怨と爲す。　愛德は恨を懷く勿れ。　在家は諸惱を多くし、
瞋恚の故に怪まず。　出家して瞋を懷くは、　是れ則ち理と乖く。
猶ほ冷水中にて　盛火の燃ゆる有る如し。　憍慢心、若し生ずれば、
當に[104] 自ら手にて頂を摩すべし。　剃髮して染衣を服し、　手に乞食の器を持ち、
邊に生じ裁ち自ら活く。　何ぞ爲に憍慢を生ぜん　俗人にて衣に色ある族も
憍慢は亦過と爲す。　何ぞ況んや出家人が　解脫道を志求して、
憍慢心を生ぜんや。　此は則ち大に不可なり。　曲と直との性は相違し、
俱ならず、猶ほ霜と炎との如し。　出家は直道を修し、　諂曲は所應せず。
諂僞幻虛詐あるも、　唯法は欺誑せられず。　多求は則ち苦と爲す。
少欲は則ち安樂なり。　安きが爲にも應に少しく欲すべし。　況んや眞解脫を求めんや
慳悋は多求を畏れ、　其の財寶を損ずるを恐る。　[105] 施を好む者も亦畏るゝも、
財の供へ足らざるを愧ず。　是の故に當に少しく欲し、　彼の無畏心を施すべし。
此の少欲心に由れば、　則ち解脫道を得る、　若し解脫を求むるを欲すれば、
亦應に知足を習ふべし。　知足は常に歡喜あり、　歡喜は卽ち是れ法なり。
資生の具は陋しと雖も、　知足の故に常に安し　不知足の人は
生天の樂を得ると雖も、　不知足を以ての故に　苦火は常に心を燒く。
富んで足るを知らざれば、　是れも亦貧苦と爲す。　貧しと雖も足るを知れば、



【一〇二】忍辱(Kṣānti)。六波羅蜜の一。
【一〇三】正語(Samyagvāc)。
【一〇四】頭髮を剃つてゐることについて言ふか？然し入圖の方式が判然としないので、不明である。
【一〇五】施(Dāna)。六波羅蜜の一。

是は則ち第一の富なり。
其れ足るを知らざる者には
五欲境は彌廣し。
猶ほ更に求めて厭く無ければ、
長夜、馳騁（一〇六）して苦しむ。
汲々として憂慮を懷き、
反つて知足を哀れと爲す。
多く眷屬を受けず、
其の心常に安隱なり。
安隱にて寂靜なる故に、
人天は悉く奉事す。
是の故に當に
親踈の二眷屬を捨離すべし。
曠澤孤樹に
衆鳥多く集り栖む如し。
多くの畜衆も亦然り。
長夜、衆苦を受く。
多衆は多く纏累し、
老象の泥に溺るゝ如し。
若し人勤めて精進（一〇七）すれば、
利して獲ざるなし。
是の故に當に晝夜
精勤して懈怠せざるなし。
山谷の微かなる流水も
常に流るゝ故に石を決す。
火を鑽するも精進せざれば、
徒勞にして獲ず。
是の故に當に精進すべし。
壯夫の火を鑽する如し。
善友は良しと爲すと雖ども、
（一〇八）正念に及ばず。
正念は心に存し、
衆惡は悉く入らず。
是の故に修行者は
常に當に其の身を念ずべし。
身に於て若し失念すれば、
一切善は則ち忘る。
譬へば勇猛將の
（一〇九）鉀を被り、强敵を御する如し。
正念は重鎧爲り、
能く六境の賊を制す。
（一一〇）正定は覺心を撿し、
世間の生滅を觀る。
是の故に修行者は
當に三摩提を習ふべし。
（一一一）三昧は已に寂靜にて、
能く一切苦を滅す。
（一一二）智慧は能く照明し、
攝受を遠離す。
等觀し、內思惟し、
隨順して正法に趣く。
在家及び出家は
斯は應に此の路に由るべし。
生・老・死の大海には
智慧、輕舟と爲り、
無明の大闇冥には
智慧、明燈爲り。
（一一三）諸纏結の垢病には
智慧、良藥爲り。
煩惱の棘刺林には

---

【一〇六】馳騁。騁は、はすこと。

【一〇七】精進(Vīrya)。六波羅蜜。

【一〇八】正念(Samyak-smṛti)。八正道中の正念を言ふ。以下八正道の德目出ず。

【一〇九】鉀。甲と同じ。

【一一〇】正定(Samyagdhyāna)。

【一一一】三摩提三昧(Samādhi)。卽ち定、八正道の一。

【一一二】智慧(Prajñā)。六波羅蜜の一。

智慧、利斧爲り。　癡愛の駛水流には　智慧、橋梁爲り。
是の故に當に　[一三]聞思修を勤習し、慧を生ずべし。　[一四]三種慧を成就すれば、
盲と雖も慧眼通ず。　慧無ければ心虚僞にして、　是は則ち出家に非らず。
是の故に當に覺知して　諸の虚僞法を離れ、　微妙樂を逮得すべし。
寂靜は安隱處なり。　[一五]不放逸を遵崇せよ。　放逸は善の怨なり。
若し人、不放逸ならば、　*帝釋處に生ずるを得。　心を縱にし、放逸なる者は、
則ち[一六]阿修羅に墮つ。　安慰なる慈悲業は　所應は我已に畢れり。
汝等は當に[一七]精勤し、　善く自ら其の業を修すべし。　山林空閑處は
寂靜心を增長す。　當に自ら勤め勸勉すべし。　後に悔恨せしむる勿れ。
猶ほ世の良醫の　病に應じ、方藥を說く如し。　病を抱いて服さゞるは、
是は良醫の過に非ず。　我已に眞實を說き、　平等路を顯示せり。
聞いて奉用せざるは、　此は說者の咎に非らず。　四眞諦の義に於て
了せざる所有る者は、　汝今悉く應に問ふべし、　復た所懷を隱す勿れ。』
世尊哀愍して教ふるも、　衆會默然として住す。　時に[一八]阿那律陀は
諸大衆を觀察するに、　默然として所疑なし。　合掌して佛に白す。
『月溫かに日光冷く、　風靜かに地性動く、　是の如き四種の惑は
世間は悉く已に無し。　苦・集・滅・道の四諦は　眞實にて未だ曾て違はず。
世尊の所說の如く　衆會は悉く疑無し。　唯世尊の涅槃を
一切悉く悲感す。　世尊の說に於て　不究竟想を起さず、
[一九]正使新に出家し、　情未だ深く解さゞる者も、　今の慇懃の教を聞き、

---

【一三】聞思修。三學といひ、教說を聞き、思ひ、修めること。
【一四】三種慧。(1)聞慧、經教を見聞するに依つて生ぜし智慧、(2)思慧、理を思惟するに依つて生ぜし智慧、(3)修慧、禪定を修するに依つて生ぜし智慧をいふ。
【一五】不放逸。規矩を守ること。
*帝釋天(Śakra)の天界、即ち三十三天の頂上。
【一六】阿修羅(Aśura)。
【一七】精進(Virya)。
【一八】阿那律陀(Anuruddha)
【一九】正使。正しく生起する煩惱の當體をいふ。

疑惑悉く已に除く。
今皆悲戀を生じ
種々の憂悲の說を以て
『正使、劫を經へ住す。
理自ら常に倶ならず。
天人の應に度すべき者は
展轉して正法を維つ。
當に自ら方便を勤め、
世の闇冥を照除す。
親の重病に遭ひ、
生死海流に逆ひ、
汝等善く自ら護り。
我今涅槃に入る。
〔三〇〕初禪三昧に入り、「
還つて初禪に入る。」
出定心は寄無く、
大地は普く震動し、
又復た地より起り、
熾燃するも亦是の如し。
猶ほ天と阿修羅の

已に生死の海を度れるは、
歎ず、佛滅何ぞ速き』
復た慈悲心を以て
終に歸りて當に別離すべし。
自他利已に畢り、
悉く已に解脫を得。
必ず、磨滅有るを知り、
不別離の處に到るべし。
世は皆牢固ならず。
療治して苦患を脫する如し。
永く衆苦の患を離る。
放逸を生ずる勿れ。
言語、是れより斷つ。
次第に九正受に入る。
復た初禪より起り、
便ち〔三一〕涅槃に入れり。
空中普く火を雨ふらし
八方倶に熾燃し。
雷霆は天地を動かし、
鼓を撃つて戰闘する聲の如し

欲無く所求無し。
佛、阿那律の
安慰して告げ言ふ。
異體にて和合するは、
空しく住するも何の爲す所あらん。
汝等諸弟子は
復た憂悲を生ずる勿れ。
我已に智燈を燃やし、
汝等當に隨喜すべし。
已に苦器を捨て、
是れ亦應に隨喜すべし。
有者は必ず滅に歸す。
此は則ち最後の敎なり。』
逆に次第に正受し、
第四禪に入り、
〔三二〕佛涅槃を以ての故に、
薪無くして自ら焔へたり。
乃至は諸天宮
霹靂は山川を震はし、
狂風は四方に激しく起り、

---

【三〇】初禪三昧（Prathama-dhyāna-samādhi）。

【三一】涅槃（Nirvāṇa）。又は泥洹等。譯して滅・滅度・寂滅等。√vā「吹き滅す」來る生死の因果を滅し、流轉輪廻の因無く、生死の流を度り、卽ち苦を完全に解脫し、安樂・無爲・不生なるを言ふ。普通有餘涅槃と無餘涅槃とを考へる。有餘涅槃とは生死の因たる惑業を盡して猶ほ有漏の依身の苦果を餘すをいふ。無餘涅槃は更に依身の苦果を滅ぼし、餘す所無きを言ふ。成道の時に有餘涅槃を成じ、命終の無餘涅槃を成ず。

【三二】佛滅年代は歐米の一般說の平均を取れば、紀元前四八〇年であるが、阿育王を滅後百十八年の人とすれば、前三八六年（宇井敎授說）となり、これが眞に近いらしい。佛滅の年齡は八十歲が眞に近いと思はれる。佛生涯を逐年的に列記すれば、

出生　紀元前四六六年（※同五六〇年）
出家　紀元前四三七年（※同五三一年）二十九歲
成道　紀元前四三一年（※同五二五年）三十五歲
初轉法輪　紀元前四三一年（※同五二五年）三十五歲

山崩れ、灰塵を雨ふらし、
日月は光暉無く、
清流は悉く沸涌し、

堅固林は萎悴し、
華葉は時に非ずして零ちたり。
飛龍は黑雲に乘り、

五首を垂れて涙流し、
一三三 四王及び眷屬は
悲みを含んで供養を興せり。

淨居天は來り下り、
虚空中に列侍し、
無常變を觀察し、

一三四 憂無く亦喜び無きも、
世の天師と違れるを歎ず。
『眼の滅するは一何ぞ速かなる。』

一三五 八部の諸天神は
虚空中に遍滿し、
華を散じ以て供養し、

感々として心歡ばず。」
唯魔王有り、喜び、
奏樂し、以て自ら娛めり。

閻浮提は榮を失ひ
猶ほ山頽れ、巓崩れ、
大象の一三六 素牙折れ、

牛王の雙角摧け、」
虚空は日月無く
蓮花は嚴霜に遭ふ。

如來、般涅槃し
世間の悴ふるは亦然り。」

## 歎涅槃品第二十七

時に一天子有り、
一三七 千白鵠宮に乘り、
上虚空中に於て

佛の般涅槃を觀て、
普ねく諸天衆の爲に
廣く無常偈を說く。

『一切性は無常にて、
速かに生じて速かに滅す。
生るれば則ち苦と俱にして、

唯だ寂滅は樂と爲す。
行業の薪は積聚し、
智慧火は熾燃す。

名稱の烟は天を衝き、
時雨雨つて滅せしむ。
猶ほ劫火起り、

一三八 水・火の滅する所となる如し。』
復た一三九 梵仙天有り、
猶ほ第一義仙の如く、

天の勝妙樂に處りて、
天報に染まず。
如來の寂滅を歎じ、

心定りて口に言ふ。
『三世法を觀察し、」
始終不壞無し。



入滅　紀元前三八六年（※同四八〇年）八十歲
在世　紀元前四六六―三八六年（※同五六〇―四八〇年）

【一三三】四王。天王、東、持國天・南、增長天・西、廣目天・北、多聞天。

【一三四】淨居天（Suddhādhivāsa-deva）。は憂悲喜悅を斷つてゐるとする。

【一三五】八部諸天神。八部衆の謂か。
一、天衆（Deva）。欲界の六天、色界の四禪天、無色界の四空處天なり。
二、龍衆（Nāga）。畜類にて水屬の王。
三、夜叉（Yakṣa）。空中を飛行する鬼神。
四、乾闥婆（Gandharva）。富神クヴエースに仕へる樂神。
五、阿修羅（Aśura）。惡神にて帝釋天と戰ふ。
六、迦樓陀（Garuḍa）。金翅鳥と譯す。龍を食をする神話的の大鳥。
七、緊那羅（Kinnara）。頭上に角ある人に類する歌神。帝釋天に仕ふ。
八、摩睺羅迦（Mahoraga）。大蟒神、地龍をいふ。

【一三六】素牙。素は白き。

【一三七】千白鵠宮。判然せず。白鵠（Haṁsa）は梵天（Brah-

【一三〇】第一義に通達し、
世間無比の士にて
慧知見の士、
【一三一】世間を救護する者たり。
悉く無常の壊す所と爲る。
何ぞ人は長存するを得ん。』
時に阿那律陀(アヌルッダ)は
世に於ては【一三三】不律陀(ルッダ)
已に滅しては不律陀、
生死は【一三二】尼律陀(ルッダ)にて、
【一三四】如來の寂滅を歎ず。
『群生は悉く盲冥、
諸行聚は無常にて、
猶ほ輕雲浮び、
速かに起きて速かに滅する如し。
慧者は保持せず。
無常の金剛杵は
【一三五】牟尼の山王を壊せり。
鄙しい哉、世は輕躁たり。
破壊は堅固ならず。
無常の暴師子は、
【一三六】龍象大仙を害へり。
如來の金剛幢は
猶ほ無常の壊す所と爲る。
何ぞ況んや未離欲にして
怖畏を生ぜざる
【一三七】六種子より一芽生じ、
一水の雨ふる所にて、
四引の深根にて、
二觚にて五種の果あり、
【一三八】三際同一體なる
煩惱の大樹を、
牟尼の大象は拔きしも、
而も無常を免れず。
猶ほ【一三九】飾楽鳥の如し。
水を楽んで毒蛇を呑み
忽ち天の大旱に遇ひ、
水を失つて身を亡ぼす。
駿馬、戰に勇しく、
戰畢つて純熟して還る。
猶ほ火は薪を縁として熾へ、
薪盡きれば則ち自ら滅する如し。
如來も亦是の如し。
事畢りて涅槃に歸せり。
猶ほ明るき月光の
普ねく世の爲に冥を除き、
衆生悉く照を蒙りて、
復た【一四〇】須彌に隱るゝが如し。
如來も亦是の如く、
慧光は幽冥を照す。
衆生の爲に冥を除きて、
涅槃山に隱れたり。
名稱と勝れし光明は
普ねく世間を照らし、
一切の冥を滅除し、
停らざること迅流の若し。
【一四一】善く御されし七駿馬は
軍衆と羽に從ひ遊ぶ。
【一四二】光々たる *日天子が
猶ほ◎崦嵫に入り

---

【一二八】…mai)の乘物である。
【一二八】佛教の世界の成滅に關する見解。最後の破滅は水によつてなされる。
【一二九】梵仙天。最高梵又は吠陀文學に屬するプラヂャーパティ(Prajāpati)仙を言ふか。
【一三〇】第一義(Paramārtha)。第一最高の眞理をいふ。
【一三一】世間は人間のみでなく、生くる者凡てをいふ。
【一三二】不律陀(Ruddha)。阿那律陀(Anuruddha)の中の律陀(Ruddha)「止らぬ」を譬喩として出したか。
【一三三】尼律陀(Niruddha)。「止れる」か。
【一三四】如來寂滅(Tathāgata-nirvāṇa)。
【一三五】牟尼山王。佛陀を指す。
【一三六】龍象大仙。佛陀を指す。
【一三七】以下の數句は何を言ふか、判然しない、枝葉根の強く榮へし煩惱の樹を意味するか。
【一三八】三際。過去・現在・未來をいふか。
【一三九】飾楽鳥(Sikhin?)。鳥の一種。
【一四〇】須彌山(Sumeru)。卽ち妙高。
【一四一】善御七駿馬、軍衆羽從遊、判然とせず。羽は「天子」の意か。七駿馬は日天(Sūrya)の七駿馬(Saptāśvavāhana)を

一四三 日月は五障に翳り、
唯燋黑烟有り。
恩愛希望を絶ち、
事畢り希望を絕てたり。
群衆の憒亂を離れ、
苦器の故に棄捨せり。
煩惱の埃塵を
永く寂靜處に之けり。
一切樂法をして
一切の德普ねく流れたり。
諸有の德を競ふ者は
四衰は以て感せず、
澄心平等觀あり、
人の得ざる所を得、
人の施さゞる所を施し、
悉く一切念を知り、
一切の病の良藥にて、
法を樂んで各異端なり。
聖慧の大施主は
薪盡きて復た燃へざる若し。

衆生は光明を失へり。
如來已に輝を潜め、
普ねく衆生の望に應ず。
煩惱の身縛を離れて、
寂靜處に入れり、
癡冥の重闇を
智水にて洗ひ、淨からしむ。
一切の生死を滅し、
慧を以て一切を充さしむ。
名聞は一切に遍ねく、
彼に於て哀愍心あり。
善く諸情を攝り、
六境は染著せざりき。
諸の 一四五 出要の水を以て
亦其の報を望まず、
好惡は傾動せず、
無常の壞す所と爲れり。
普ねく其の所求に應じ、
一び往つて復た還らず。
一四七 八法の染まざる所、

火祠天を奉じ畢り、
世、榮を失ふも亦然り。
衆生は望み已に滿ち、
眞實道を得、
神通にて虛遊に騰り、
智慧光にて照し除き、
復た數々還らず、
一切悉く宗敬せり。
悉く一切を安慰し、
重照は今に迄べり。
一四四 四利は欣びと爲さず、
諸根は悉く明徹にて、
所得は未曾有にて、
虛渴せるを飽滿せしむ。
寂靜の妙相身は、
力は一切 一四六 怨に勝れり。
一切の衆生類は
悉く其の所願を滿せり。
猶ほ世の猛火の
五難を降し群を調へ、




---

言ふのであらう。
【一四二】光々。よく光ること。☆日天子(Sūrya-deva)。◎崦嵫。日の入る所の山。山海經「鳥鼠同穴山の西南を崦嵫と曰ふ。下に虞泉有り。日の入る所の處。」梵文學に出典あるや否や、不明。
【一四三】日月が沒し隱れるを言ひ、如來の涅槃に比較す。
【一四四】四利、四衰は何を指すや?
【一四五】出要。出家と同じ。
【一四六】怨。敵(Śatru)の意。
【一四七】判然とせず、八法は八正道を指すか。五は五根、一は宗教生活の統一を指すか?

三を以て三を見、三を離れて三を成じ、一を藏し、以て一を得、
七を超へて長眠せり。究竟の寂滅道は聖賢の宗ぶ所なり。
已に煩惱の障を斷じ、宗奉者は已に度し、飢虚渇乏者には
之に飲ましむるに甘露を以てせり。忍辱の重鎧を被り、諸の恚怒を降伏せり。
勝法の微妙義は以て衆心を悦ばせり。世界善を修する者は
植ゆるに聖種子を以てし、正不正を習ふ者は等しく攝して捨てす
一四八 無上法輪を轉じ、普く世に歡喜して受けられ、宿く樂法の因を殖へ、
斯く皆解脱を得たり。人の間に遊行し諸の未度者を度し
未だ眞實を見ざる者は悉く眞實を見せしめ、諸の外道を習ふ者には
之に授くるに深法を以てせり。生死は常無く、主無く、樂有る無きを說き、
大なる名稱の幢を建て、衆の魔軍を破壞せり。進却に欣感無く、
生を薄じ、寂滅を歎じ、未度者を度せしめ、未脱者を脱せしめ、
未寂者を寂せしめ、未覺者を覺らしめ、牟尼は寂靜道にて、
以て衆生を攝し、衆生は聖道を達へ、諸の不正の業を習へり。
猶ほ一四九大劫の盡くる若し。持法者は長く眠り、密雲は霹靂を震はし、
林を摧き、甘露を雨らし、少象は棘林を摧き、識養ひ、能く人を利せり。
一五〇 雲離れ、象老悴す。斯は皆堪ゆる所無し。見を破り能く見を成し、
世度に於て度し、已に諸邪論を壞ちて、自在道を得たり。
今大寂定に入り、世間、救護無し。魔王の大軍衆は
武を奮ひ、天地を震はし、牟尼尊を害せんと欲し、傾動せしむる能はざりき。

---

【一四八】無上法輪（Anuttara-dharmacakra）。無法の教法の意。法輪とは轉輪王の武器輪に對し、轉法輪王の敎法を言ふ。

【一四九】大劫の終は萬物の滅である。持法者は佛を指す。密雲震霹靂摧林、は雲は佛をいひ、その業を記し、雨甘露は不死を得た眠れる佛の恩惠をいひ、小象は「若き象」即ち若き佛弟子をいふか。

【一五〇】雲離象老悴。雲は佛、象は弟子をいふか。

如何にして忽ち一朝にて　非常の魔の壞す所となりし　天人は普く雲集し、
虛空中に充滿し、　無窮の生死を畏れ、　心は大憂怖を生ぜり、
世間は遠近無く、　天眼は悉く照見し、　業報は諦明し了り、
鏡中の像を觀る如し。　【一五一】天耳は勝れ、聰達し、　遠くして聞へざる無し。
虛に昇り、諸天を敎へ、　人境を遊步し、化せり。　【一五二】身を分ちて體を合し、
水を涉りて濡れず、　過去の生を憶念し、　劫を彌つて忘れず。
諸根は境界に遊んで、　彼々各、念を異にし、　他心を知るの通智にて
一切は皆悉く知れり。　神通の淨妙智にて　平等に一切を觀て、
悉く一切漏を盡し、　一切事已に畢れり。　智は【一五三】有餘界を捨て、
智を息めて長く眠れり。　衆生は剛强心なるも、　見られゝば則ち柔軟を得、
鈍根の諸衆生は　見られゝば則ち慧は明利となり、　無量の惡業の過も
見られゝば【一五四】各通塗を得たり。　一旦にて忽ち長眠す。　誰か復た斯の德を顯さん
世間は救護無く、　望斷ち、氣息絕へたり。　誰か淸凉水を以て
之に灑ぎ、蘇息せしめん　所作自ら事畢り、　大悲已に長く息めり。
世間の愚癡網を　佛なく誰か當に壞裂を爲す可き　生死の迅流に向ひ、
誰か當に說いて反せしむべき　群生は癡惑心あり、　誰か寂靜道を說かん
誰か安隱處を示さん　誰か眞實義を顯さん　衆生は大苦を受け、
誰か慈父の救を爲さん　猶ほ多く誦し悉く忘れ、　馬は士を易へ、威を失ひ、
王者は亡んで國を失ふ如し。　世に佛無きも亦然り。　【一五五】多聞なるも辭辯無く、
醫と爲りて慧無く、　人王は光相を失ひ、　佛滅して俗は榮を失へり。

【一五一】以下五神通卽ち天耳通・天眼通・他心通・命通・神足通を擧げて、佛力を說明す。
【一五二】神通にて身を分ち、後又其を一に合したのをいふ。
【一五三】有餘界。有餘は一切の事理に就いて未だ究竟し至極せざるをいふ。有餘土とは阿羅漢の如き三界の煩惱を斷じたる聖者の死して生れる所。
【一五四】通塗。塗は路のこと。
【一五五】それに肝要なる重要なものなきをいふ。

良馭は善御を失ひ、　乘舟は船師を失ひ、　[一五六]三軍、英將を失ひ
商人は其の導を失ひ、　疾病は良醫を失ひ、　聖王は[一五七]七寶を失ひ、
衆星は明月を失ひ、　壽を愛して命を失ふ。　世間は亦是の如し。
佛滅して大明を失へり。』　是の如く阿羅漢は　所作皆已に畢り、
諸漏悉く已に盡きしも、　恩を知り、恩を報ずる故に、　纒綿として悲戀して說き、
徳を歎じて世苦を陳べたり。　諸の未だ欲を離れざる者は　悲泣して自ら勝へず、
其の諸の漏盡者は　唯生滅の苦を歎ぜり。　時に諸[一五八]力士衆は
佛の已に涅槃せるを聞き、　聲を亂し、慟き悲泣し、　群鵠の鷹に遇ふ如し。
悉く來り、雙樹に詣り、　如來長く眠り、　復た覺悟する容無きを視て、
胸を推ちて天を呼べり。　猶ほ師子の犢を搏ち、　群牛亂れ呼ぶ聲ある如し。
中に一力士有り、　心已に正法を樂み、　[一五九]聖法王の
已に大寂に入れるを諦觀し、　言ふ『衆生悉く眠り、　佛は開發して覺らしむ。
今、大寂に入り、　畢竟して長く眠れり。　衆の爲に法幢を建てゝ、
今一旦にて崩れたり。　如來は智慧日とし、　[一六〇]大に覺り、照明を爲し、
精進は炎熱と爲り、　智慧は千光を耀かし、　一切の闇を滅除せり。
如何にして復た長く冥ならん　一慧は三世を照し、　普ねく衆生の眼と爲りて、
今は忽然として盲たり。　世を擧げて路を知る莫し、　生死の大河流
貪・欲・癡の巨浪にて　法橋は一旦にて崩れ、　衆生は長く沒溺せり。』
彼の諸力士衆は　或ひは悲泣し、號咷し、　或は密かに感じて聲無く、
或は身を投げ地に躃れ、　或は寂默し禪思し、　或は煩冤し長吟せり。

【一五六】三軍。步兵・騎兵・車軍をいふ。
【一五七】七寶。轉輪王の七寶である。
【一五八】力士衆即ち末羅族(Mallā)。鳩夷城及び波婆城(Pāvā)に住む。離車族(Licchavi)も末羅族と呼ばれると。
【一五九】法王(Dharmarāja)。即ち法界の王。大寂(Mahāparinibbāna)。
【一六〇】或ひは大覺即ち名詞にとり佛陀の異名と考ふべきか。

一六一 金銀の寶輿に
香花具莊嚴を辦へ、
如來の身を安置し、
寶帳にて其の上を覆ひ、
幢幡華蓋を具へたり。
一六二 種々の諸伎樂をなし、
諸力士男女は
導き從つて供養を修し、
諸天は香花を散じ、
空中に天樂を鼓せり。
人天は一じく悲歎し、
聲を合せて同じく哀しめり。
城に入り、士女
長幼に供養せられ畢れり。
一六三 龍象門を出で、
*熈連河表を度り、
諸の過去佛の
一六四 滅度支提所に到る。
牛頭栴檀
及び諸の名香木を積み、
佛身を上に置き、
灌するに衆の香油を以てす。
火を以て其の下に燒く。
三燒いて燃けず。
一六五 時に彼の大迦葉は
先に王舍城に住し、
佛の涅槃を欲するを知り。
眷屬は彼に從つて來る。
淨心にて妙願を發し、
世尊の身を見んと願ふ。
彼の誠願を以ての故に、
一六六 火滅して燃へず、
迦葉と眷屬至り、
悲歎し倶に顏を瞻て、
雙足を敬禮せり。
然る後に火は乃ち燃ゆ。
內に煩惱の火を絕ち、
外火は燒く能はず、
外の皮肉を燒くと雖も、
金剛の眞骨は存せり。
香油は悉く燒け盡し、
骨を盛るに金瓶を以てす。
一六七 法界の盡きざる如く、
骨の盡きざるも亦然り。
金剛の智慧果は
動き難きこと須彌山の如し。
大力の 一六八 金翅鳥は
傾移する能はざる所にて
寶瓶に處り、
世に應じて流遷せり。
奇なる哉、世間の力は
能く寂滅法を轉じ、
德稱は廣く流布し、
十方に周滿せり。
世に隨つて長く寂滅し、
唯餘骨の存する有り。
大光は天下に耀き、
群生は悉く照を蒙り、
一旦にして暉を潛し、
骨を瓶中に遺せり。



---

【一六一】この輿の圖は第六十四の一(Tree and Serpent Worship. 初版)に現れてゐる。輿は鳩夷城を通つて行列をなして行く。之を捲毛の男達が負つてゐる。

【一六二】葬式に伎樂舞踊を用ふるのは、印度一般の普通の古習慣である。

【一六三】龍象門(Nāga)。
*熈連河(Hiraṇyavatī)。

【一六四】過去佛思想がある。過去佛滅度の地で入滅するとは、一の修飾化である。滅度支提所 Nirvāna-caitya)。巴利文涅槃經にはこの記事はないが、前の所で、阿難が佛にかゝる不便な邊地の小城で涅槃を取らず、王舍城とか舍衞城の如き大城で涅槃をとる可きをすゝめた時、佛は嘗て前生にこの地で涅槃を取つた故この地で入滅すると告げてゐる。漢譯には巴利文に一致する記述をなすものが多くある。

【一六五】大迦葉が王舍城より涅槃地に急ぎつゝあつたとは、巴利文涅槃經其他多く傳へる。この涅槃の折は既に波婆城と鳩夷城との間にまで來てゐたといふ。

【一六六】事實は大迦葉の來るを知り、之を皆が待つて後火をかけたのであらう。火を付けるを止めたのは阿那

[一六九]金剛の利き智慧にて、　煩惱の苦山を壞てり。　衆苦、其の身に集るも、
金剛の志は能く安んじ、　大苦を受くる衆生を　悉く除滅するを得しむ。
是の如き金剛體も　今火の焚く所と爲れり。　彼の諸力士衆は
勇健にて世に雙び無く、　怨家の苦を摧伏し、　能く苦を救ひ歸依し、
親愛にて苦難に遭ふも、　志强く能く憂ふる無し。　されど今如來の滅を見て、
悉く憂悲を懷きて泣き、　壯身にて氣は强盛にて、　憍慢は天步を虛しくするも、
憂苦、其の心に迫り、　城に入るに猶ほ曠澤の如し。　[一七〇]舍利を持つて城に入り、
巷路に普く供養し、　[一七一]高樓閣に置き、　天人は悉く奉事せり。

## 分舍利品第二十八

彼の諸力士衆は　舍利を奉事し、　勝れし妙香花を以て
無上の供養を興せり。　時に[一七二]七國の諸王は　佛の已に滅度せるを承り、
使を遣つて力士に詣り、　佛の舍利を請求せり。　彼の諸力士衆は
如來の身を敬重し、　兼ねて其の勇健を恃みて、　憍慢心を起し、
寧ろ自身の命を捨つるとも、　佛の舍利を捨てざらんとす。　彼の使は悉く空しく還り、
七王は大に忿恨し、　軍を興し、雲雨の如く　鳩夷城に來詣せり。
人民にて城を出ずる者は　悉く皆驚き怖れ還れり。　諸の力士衆に
諸國の軍馬來り、　[一七三]象馬車步衆　鳩夷城を圍繞せりと告げたり。
城外の諸園林　泉池花果樹は　軍衆悉く踐蹈し、
榮觀悉く摧碎せり。　力士は城に登つて觀るに、　生業悉く破壞せり。

---

律陀であると。
【一六七】法界(Dharmadhātu)。法の世界卽ち精神的の世界、無邊とされる。
【一六八】金翅鳥。迦樓陀鳥(Garuḍa)のこと。神話的の巨鳥にて、龍を食とすると。
【一六九】金剛利智慧。壞れ難き智慧又は金剛石の如き智慧。

【一七〇】舍　(Śarīra)。佛陀を荼毘にした後の遺骨をいふ。
【一七一】巴利文涅槃經によれば、その講堂に槍と弓の柵を圍らして守つたといふ。軍隊にて守衛したことをいふのであらう。

【一七二】七國王は巴利文涅槃經によれば、摩訶陀の王、毘舍離(Vaiśālī)の離車(Licchavi)迦毘羅城(Kapilavastu)の釋迦族 Śākya) アラカッパ(Allakappa)のブリ族(Buli)ラーマグラーマ(Rāmagrāma)の拘利族(Koliya)ヴェータディパ(Veṭhadipa)の婆羅門(Brahman)波婆城(Pāvā)の末羅族(Mallā)である。
【一七三】象軍・馬軍・步兵・戰車軍は印度の軍制で、四軍(Caturaṅga)といふ。

戰鬪の具を嚴備し、　以て外敵に擬せり。　[一七四]弓弩礮石車
飛炬、獨り發來せり。　七王は城を圍繞し、　軍衆は各精鋭なり。
[一七五]羽儀は盛に明顯し、　猶ほ[一七六]七耀光の如し。　鍾鼓は雷霆の如く、
勇氣は盛なる雲霧の如し。　力士は大に奮怒し、　門を開きて敵に向ふを命ず。
[一七七]長宿の諸士女にて　心に佛法を信ずる者は、　驚怖して誠願を發し、
彼を伏して害せざらんとし、　親に隨つて相勸諫し、　鬪戰せしめんと欲せず。
勇士は重鉀を被り、　戈を揮ひ、長劍を舞はし、　鍾鼓は而して亂鳴せり。
仗鋒は執つて未だ交へず、　一婆羅門有り、　名けて[一七八]獨樓那と曰ひ、
多聞にて智略勝れ、　謙虛にて衆の宗ぶ所にて、　慈心にて正法を樂しみ、
彼の諸王に告げて言ふ。　『彼の城の形勢を觀るに　一人も亦當るに足る、
況んや復た心力を齊うすれば、　彼を伏する能はざらん　[一七九]正使は相摧滅し、
復た何の德稱有らん　利き鋒刃旣に交れば、　勢、兩全有る無し。
此を困らして彼を害し、　二俱に傷く所有り。　鬪戰は機變多く、
形勢測量し難し。　或は強きが弱きに勝つ有り、　或は弱くして強きに勝つ。
健夫は毒蛇を輕んじ、　豈に其の身を傷けざらんや　人の性の柔弱なる有り、
群女子の奬むる所。　陣に臨み、戰士と成るは、　火の膏油を得る如し。
鬪には弱敵を輕ずる莫れ。　謂ふに彼に恃む所無し。　身力は恃むに足らず、
法力の強さに如かず。　古昔、勝王有り、　[一八〇]迦蘭陀摩と名く。
端坐して慈心を起し、　能く大怨敵を伏せり。　四天下に王たり、
名稱財制豐かなりと雖も、　[一八一]終に歸りて亦皆盡せり。　牛の飲んで飽き歸るが如し。

---

【一七四】弩は石弓、礮は機を設けて石をはぢき飛ばす兵器、石車は石をつみし車にて、城壁等に衝突させ破壞する武器か？飛炬は火矢の如きものか。之等は北方王族に用ひられた武器であらう。（多分馬鳴時代に）

【一七五】羽儀。羽を以てせし國王の標。

【一七六】北斗七星をいふか？

【一七七】長宿。年老へる者の意。

【一七八】獨樓那(Droṇa)。巴利文「涅槃經」は Doṇa とし、「佛本行經」「遊行經」は香姓とする。

【一七九】正使。煩惱の謂。

【一八〇】迦蘭陀摩（Karandhama）はアヴイクシツト（Avikṣit）の名。

【一八一】「終歸」は死に歸したことか、戰にて財を失ったことか判然せず。

應に法を以て義を以てすべし。　應に和方便を以てすべし。　戰勝てば其の怨を增し、
一八二 和勝の後には患無し。　今飲血の誓を結ぶは、　此の事甚だ不可なり。
佛を供養せんと欲する爲には、　應に佛の忍辱に隨ふべし。』　是の如く婆羅門は
決定して誠實を吐き、　方宜しく義は和し理りて、　無畏說を作せり。
爾の時彼の諸王は　婆羅門に告げて言ふ。　『汝今善く時に應じ、
黠慧の義饒益し、　親密なる至誠言は　法に順ひ、强理に依れり。
されど且く我が所說を聽け。　王者の法爲るや、　或は五欲に因りて諍ひ、
嫌恨して强力を競ふ。　或ひは其の嬉戲に因り、　急に戰爭を致さす。
吾等は今法の爲なり。　戰爭復た何ぞ怪しまん　憍慢にして義に違ふ
世人にも尙伏從す。　況んや佛は憍慢を離れ、　人を化して謙下ならしむ、
我等而も身を亡して　供養する能はず。　昔諸の一八三大地主
一八四 弱瑟阿難陀は　一端正女の爲に　戰爭して相摧滅せり。
況んや今清淨なる　離欲師を供養する爲には　身を愛して命を惜しみ、
力を以て爭求するにあらず。　先王一八五驕羅婆は　般那婆と戰ひ、
展轉して更に相破れたるは、　正に貪利の爲の故なり。　況んや無貪師の爲にして
復た其の生を貪らんや　一八六 羅摩仙人の子は　千臂王を瞋恨し、
國を破り、人民を殺せしは、　正に瞋恚の爲の故なり。　況んや無恚師の爲にして
身命を惜まんや　一八七 羅摩は私陀の爲に　諸の鬼の國を殺害せり。
況んや天の攝受師　其の爲には命を沒せざらんや　一八八 阿利及び婆俱の
二鬼は常に怨を結べり。　正に愚癡の爲の故に　廣く衆生を害せり。

---

【一八二】戰に勝てば、敗者は怨を抱くが、講和の後には患はない意。

【一八三】地主。地の主、卽ち國王。

【一八四】弱瑟阿難陀。二王名か。弱瑟不明、阿難陀(Ānanda)。事跡不明。

【一八五】驕羅婆(Kaurava)。般那婆(Pāṇḍava)。摩訶婆羅多詩(Mahābhārata)に於ける兩黨の爭をいふのであらう。前出。

【一八六】羅摩仙人子(Rāmarṣi-putra)。千臂王(Sahasrabāhu?)。事跡不明。

【一八七】羅摩(Rāma)。私陀(Sītā)。羅摩耶奈詩に事跡詳しく出ず。羅摩太子は掠奪されし私陀姬を救ひ出す爲惡鬼ラヴアナ(Rāvaṇa)をセイロン島に攻め滅ぼせり。

【一八八】阿利(Alaka?)。婆俱(?)事跡不明。

況んや智慧師の爲にして　復た身命を惜まんや　是の如く比衆多く、
義無くして自ら喪へり。　況んや今は天人師　普く世の恭敬する所にて、
身を計りて命を惜み、　勸めて供養を求めざらんや　されど汝若し爭を止めんと欲すれば、
吾等の爲に城に入り、　彼に勸めて開解せしめ、　我が願をして滿つるを得しめよ。
汝の法言を以ての故に、　我が心をして少しく息ましめよ。　猶ほ盛毒蛇も
呪力の故に暫く止むが如く。』　爾の時、婆羅門は　彼の諸王の教を受け、
城に入り、力士に詣で　問訊し、以て誠を告ぐ。　『外の諸の人中の王は
手に利き器仗を執り、　身に重鉀を被り、　精銳は日光に耀き、
師子の勇氣を奮ひ、　咸、此の城を滅さんと欲す。　然れども其は法の爲の故に、
猶ほ非法行を畏る。　是の故に我を遣せり。　來旨を所白する有らんと欲す。
「我は土地の爲ならず、　亦錢財を求めず、　憍慢心を以てせず、
亦懷恨心無し。　大仙を恭敬する故に、　而して此に來り、至れり。
汝當に我が意を知るべし。　何の爲に苦んで相ひ違へん　尊奉は彼我同じく、
則ち法兄弟爲り。　世尊の遺靈は　一心に共に供養せん。
錢財を慳惜するは　此は則ち大過に非らず。　一八九 法慳の過は最も甚しく、
普く世の薄んずる所。　決定して通ぜざれば、　當に待賓の法を修すべし。
一九〇 刹利の法有る無ければ、　門を閉して自ら防げ。」　彼等悉く是の如く。
此の吉凶の法を告げたり。　我今私に懷く所も　亦其の誠實を告げん。
彼此相違ふ莫れ。　理は應に共に和合すべし。　世尊、世に在りて、
常に忍辱の教を以てす。　聖教に順はざれば、　云何ぞ供養と名けん



【一八九】法又は法利を惜んで他に頒たぬこと。
【一九〇】刹利(Kṣatriya?)の法、即ち武士の法か？武士の法を知れば和して迎ふべく、知らなければ門を閉して我等と戰へ、の意か。

世人は五欲を以て　財利田宅を諍はん。　若し正法の爲ならば、
應に聖理に隨順すべし。　法の爲にして怨を結へば、　此の則ち理と相違ふ。
佛は寂靜にて慈悲あり、　常に一切を安ぜんと欲す。　[一九一]大悲を供養して、
大害を興す勿れ。　應に等しく舍利を分ち、　普ねく供養を得しむべし。
法に順つて名稱流れ、　義通じ、理は則ち宣ぶ。　若し彼の非法行は
當に法を以て之を和ぐべし。　是は則ち樂法と爲し、　法をして久しく住するを得しめよ。
佛は一切施を說き、　法施は最勝と爲す。　人は斯く財施を行ふも、
法施を行ふは難し。』　力士は彼の說を聞き、　內に愧じ、互に相視て、
彼の梵志に報じて言ふ。　『深く汝の來意を感ず。　親善は法言に順ひ
和理雅正の說なり。　梵志の所應は　自らの功德に隨順せり。
善く彼此に和し、　我に示すに要道を以てす。　塗に迷へる馬を制し、
還りて正路を得しむるが如し。　今當に和理を用ひ、　汝の所說に從ふべし。
誠言にして顧みざれば、　後に必ず悔恨を生ぜん。』　卽ち佛舍利を開き、
等しく分ちて八分と爲し、　自ら一分を供養し、　七分を梵志に付せり。
七王は舍利を得て、　歡喜して[一九二]頂受し、　持ち歸りて自國に還り、
塔を起して供養を加へたり。　梵志は力士を求め、　舍利の瓶を分つを得、
又彼の七王より　第八分を分つを求め、　持ち歸りて[一九三]支提を起し、
號けて金瓶塔と名く。　[一九四]倶夷那竭人は　餘の灰炭を聚集して、
一支提を起し、　名けて灰炭塔と曰く。　八王は八塔を起し、
金瓶及び灰炭は　是の如くにて[一九五]閻浮提に　※始めて十塔を起せり

【一九一】大悲。佛陀をいふ。

【一九二】舍利を尊んで頭にいたゞくをいふ。圖表三八(Tree and Serpent worship)

【一九三】支提(Caitya)。塔をいふ。

【一九四】倶夷那竭人(Kusinagara)。卽ち鳩夷城の住民。

【一九五】閻浮提(Jambudvipa)。こゝでは全印度の謂。

※同樣の記述巴利文涅槃經にあり。

國を舉げて諸士女は　悉く寶花蓋を持ち、　塔に隨つて供養し、
莊嚴は[196]金山の若し。　種々の諸伎樂は　晝夜長く讃嘆せり。
[197]時に五百羅漢は　永く大師の蔭を失ひ、　[198]恇然として恃む所無く、
[199]耆闍崛山に還れり。　彼の[200]帝釋巖に集り、　諸經藏を結集せり。
一切は皆共に　長老阿難陀を推せり。　『如來の前後の說を
亘細汝悉く聞けり。　鞞提醯牟尼は　當に大衆の爲に說くべし。
阿難は大衆中にて　師子座に昇り、　佛說の如く說き、
『是の如く我聞けり。』と稱ふ　合坐、悉く涕を流せり。　此の『我聞けり』の聲を感じ、
法の如く、其の時の如く、　處の如く、其の人の如く、　說に隨つて筆受し、
究竟して經藏成れり。　勤方便し修學し、　悉く已に涅槃を得たり。
今得及び當得の　涅槃も亦然り。　[201]無憂王は世に出で、
强者を能く憂へしめ、　劣者は爲に憂を除き、　[202]無憂花樹の如く、
閻浮提に王たり。　心常に所憂無く、　深く正法を信じ、
故に無憂王と號せり。　[203]孔雀の苗裔にて　正性を稟けて生じ、
普ねく天下を濟へり。　兼ねて諸塔廟を起し、　本（もと）、强無憂と字（あざな）し、
今は[204]法無憂と名けたり。　彼の七王塔を開き、　以て舍利を取り、
分布し、一旦にて　[205]八萬四千の塔を起せり。　唯第八塔有り、
[206]羅摩（ラーマ）村に在り、　神龍の守護する所にて　王は取りて得る能はず。
舍利を得ざると雖も、　佛の遺骸有り、　神龍の供養する所と知り、
其の信敬心を增せり。　王は國土を領すると雖も、　[207]初聖果を逮得せり。



【一九六】金山。金山としての須彌山(Sumeru)をいふ。
【一九七】第一結集である。「涅槃經」「佛本行經」は語らないが、本讃のみは之を記す。佛滅後直ちに王舍城にて五百羅漢によつてなされた。本讃の如く經は阿難が、律は優婆利が誦出した。然しこの時は唯に正說を定めるに止め、漢譯の如く筆受したのではなからう。年少比丘等は王舍城に入るを拒まれ、後異流の生ずる基ともなつた。
【一九八】恇然。一本惟然（慮る貌）
【一九九】耆闍堀山(Gṛdhrakūṭa)即ち靈鷲山。王舍城外にあり。
【二〇〇】帝釋巖(Indra Śilagṛha)。
【二〇一】無憂王。阿育(Aśoka)の譯。憂は(śoka)。佛滅後百十八年頃出でた印度統一の英王で、內治よく、道路を修め、各種の施設をなし、佛敎の外護者となつて之を宣揚し、外國にも傳道師を派遣した。
【二〇二】無憂花は Aśoka の漢譯。灌木にて美しき赤き花を開く。
【二〇三】孔雀(Māyura)苗裔。阿育王朝は孔雀王統であるといはれる。
【二〇四】法無憂(Dharmāśoka)
【二〇五】この數字は北方所傳に

能く普ねく天下に　如來の塔を供養せしめ、　二〇六 去來今現在に
悉く皆解脱を得たり、　如來は現に世に有り、　今は涅槃し、及び舎利あり。
恭敬し供養する者は　其の福等は異る無し、　明慧増上心は
深く如來の徳を察し、　道を懐き、供養を興す。　其の徳も亦倶に勝る。
佛は尊勝の法を得て、　應に一切供を受くべし。　已に不死處に到れり。
信者も亦隨つて安く、　是の故に諸天人は　悉く應に常に供養すべし。
第一に大慈悲あり、　第一義を通達し、　一切衆生を度せり。
孰れか聞いて感ぜざらん。　生・老・病・死の苦は　世間苦中にて過ぐる無し。
死苦は苦の大にて　諸天の畏るゝ所、　永く二種の苦を離れたり。
云何に供養せざらんや　二〇九 後有の樂を受けず、　世間樂は無上なり。
生苦の大を増し、　世間苦は無比なり。　佛は生苦を離るるを得て、
後有樂を受けず、　世の爲に廣く顯示す。　如何にして供養して
諸牟尼尊を讃ぜざらんや。　二一〇 始終の所行は　自ら知見を顯はさず、
亦名利を求めず、　佛經に隨順して說き、　以て諸世間に濟せり。

# 佛所行讃巻第五（終）

は多く傳へられるものであるが、實數ではなからう。

【二〇六】羅摩村(Rāmagrāma)。

【二〇七】初聖果は四果中第一預流果(Srotāpanna-phala)をいふ。凡夫を去つて初めて聖道の法流に入る。

【二〇八】以下作者馬鳴自ら、佛徳を讃歎し、之の詩篇を著作せし所以を記してゐる。

【二〇九】後有(Punarbhava)。即ち再生。

【二一〇】馬鳴は「佛所行讃」著作の心著、典據を述べてゐる。

# 撰集百緣經解題

## 一、撰集百緣經の表題の意義

撰集百緣經（百の緣を撰集せる經）の梵名は Avadāna-Çataka Çatā vadāna, (Çatakavadānakathā（百緣經漢譯とを區別する爲に、梵本の方は以後百緣經と呼ぶ)——であり。又、同じ名稱や類似の名稱を避ける爲に、西藏譯より推定せられる梵名は　Pūrṇamukha-Avadāna Çataka（滿賢を始めとする百緣）であつて、佛敎の十二分敎の第七位の譬喩（Avadāna）と名づけられる部類に屬してゐる物語若しくは說話集である。一體此種の典籍は何から成立してゐるのであるか。

## 二、Avadāna の語の意味と本來の性質

緣（Avadāna）の語の意味。漢譯が緣と譯せし Avadāna はパーリ語の Apadāna（阿波陀那）の語の轉訛であるが、此の Avadāna の語の本來の意味を決定し、日本語の上に正しく譯し出することは容易でない。或る人々はそれに「說話」とか「英雄的行業」とかの意味を與へてゐるがそれでは到底充分ではない。此の譯出上の當惑さはあらゆる方面に顯はれてゐるのであつて、蒙古語の「Domok」（史傳）でも、西藏語の「Rtogs-brjod」或は「Rtogs-pa-brjod-pa」（差別ある話）でも的確なる譯語といふ譯には行かない。其處へ來ると、寧ろ漢譯の譬喩といふ譯語は、其等の諸譯より的確であり又明白であると曰はねばならない。此の譯語は現在まで、Avadāna の支那譯として、一番廣く用ひられ、又日本の現在でも多く使用されて居るのであるが、然し實の所は、支那人自身にしても此の譯語に滿足してゐるらしくはない。そのことは或る人(姚秦の竺佛念)は、出曜(炯く光明、黎明）と譯し、或る人は因緣と譯し其他、「證喩」、「喩」、「本」、「本末」、「古來世時」等極めて多くの譯語があるのでも知られるのであつて、我々は實は其の撰擇に迷ひ其語の概念を得るに困難を感ずるものである。

然し、此等譯語の不一致から來る概念の不明瞭さが多いだけ、此語の意義が深いともいはれるであらう。此等の譯語を、一と通り、整理して比較的妥當なる譯語を提示し置くことは必要であると思はれる。何故なら此等の Avadāna の集錄は

佛教文學中餘他の集錄と異つた文學形式を持つてゐる廣大なる地位を占めてゐるのであるからである。出曜といふ譯語の氣の利いたものでないことは言ふを要しないだらう。因緣の譯語は分教中第六位を占めてゐる Nidāna なる語を譯するのが通例であるから、それを玆に用ひるのは面白くない。單に「喩」は通常、梵語の Upama. 西藏語 Dpe. を譯するに用ひられ、それは意味がせばめられて適當ではない。「本」といふ譯語は本生話 (Jātaka) なる語と混同を來して善い譯語ではなく、又「本末」にしても、「古來世時」にしても說明になりすぎて不適當である。

それ故に此等の數多の譯の中では「譬喩」なる語が先づ一番良い譯語であらう。此「譬喩」なる語は廣い意味を持つて居り、御伽噺はこの譬喩の型に於て存在してゐる。然し、譬喩が御伽噺といふわけではない。例へば、昔、長い頸と嘴とを持つた一羽の鳥が、狼の咽喉にさゝつた骨を拔き出してやつた。然し、それに對して罵詈と脅迫との外には何も報ひられはしなかつたといふ御伽噺を話したとすれば、その一の寓話の中に、話し手は人世生活に處する一つの敎訓を寓してゐる譯である。而して一方それが佛敎徒、殊に佛陀の口に上ると次のことを附言することを忘れない。鳥とは私自身であり。狼とは提婆であつた。私等の今日の關係は昔の其等の關係の相續若しくは結果にすぎないと。此處に、輪廻しつゝ現はれて來てゐる身分や性格の緣を證らしめるのである。尙、又其處には正義が個人の運命を主宰し、決定し限定するのであることがほのかにしかし確かに顯はされて來てゐる。かくの如き話し方になると、それが譬喩といはれるのである。

二　譬喩の定義と性質。それ故に私はレオン・フィーヤ氏の適當なる定義を此處に引用するであらう。譬喩とは現在世の出來事を前世に爲した行爲に結びつける所の—何んとなれば現在は過去の產物として考へられてゐるから—緣を明かならしむる運命的敎訓であると。又フィーヤ氏は次の如く說明する。一切の譬喩は、本質上二つの物語から出來てゐる。卽ち目下の出來事の物語と、それを決定した過去の出來事の物語である。昔の物語の完全なる認識を必要とする此の物語の語り方は何人でもなし得ることではない。かくの如き記憶を思ひ出し得るのは全智の佛陀の外にはない。而して此の佛陀は本より佛陀あるが故に佛陀の述べ給ふ說明は必ず我々の御伽噺の道德に相應する戒（いましめ）・掟・敎訓を持つてゐる。それ故に譬喩は次の四つの部分から構成されてゐる譯である。第一は佛陀のお住ゐになる場所を先づ知らしつゝ、多かれ少なかれ

佛陀を稱讃する所の序言、第二は或る語り手によつて話される現在の物語、第三現在の物語を說明しつゝ而して佛陀によりて話される過去の物語、第四は佛陀がその證人であつた事實及び佛陀が呼び起した記憶の場合に佛陀によつて與へられる教訓である結論である。佛教文學の中には此の計畫に隨つて話されてゐる物語が非常に澤山あると。

我々は以上の說明によつて譬喩文學とは如何なる性質のものであるかを大體了解し得るのであるが、然し何れの譬喩、一切の譬喩が必ず此の形式を踏襲してゐるかといふに、必ずしもさうではないのであつて、此處が譯語の上に於て統一されない原因であらう。レオン・フイーヤ氏は極めて適當に五種の異類を數へあげてゐる。

第一は從來述べしが如き形式の譬喩であつて、「本來の譬喩」、即ち「過去譬喩」と名づけられるものである。第二は「譬喩本生」、或は「本生話」であつて、佛陀が自分自身の過去を想ひ出すのみならず、他人のそれをも亦想ひ出し、或時は佛陀が參與した事實、或時は佛陀が傍觀者にとゞまつた事實を話されるのである。この中佛陀が關係した所の事實の物語は、本生話（Jātaka）と呼ぶ特別なる一部類となり、十二分教中に於ては第九位を占めてゐるのであるが、此の本生話は實際は譬喩に外ならないのであつて我我は屢々本生、譬喩（Jātaka-Avadāna）といふ複合名詞を見出すし、又本生話集錄中にも菩薩譬喩（Bodhisattva-avadāna）といふ語さへあるのである。全く本生話は譬喩の特別なる場合、譬喩の一種に過ぎないものである。

第三は現在の譬喩と名づけられてゐるものであつて、普通には過去の想起と未來の觀察とは長い時劫を含み、佛陀は後方に於いても前方に於いても非常に遠く見給ふのであつて、或る行爲の結果が生ずる爲には非常に長い時間が絕對的に必要なことになつてゐるのであるが、佛教徒の常として何千年、何萬年と年を計へることを喜びとするに拘らず、又時たま出來事の進行を非常に速めることもあり。過去の物語もなく未來の懸記もない、然も、ほんの僅かの時間の中に時としてその翌日、その罰若しくは果報が行爲に隨從して來るといふ多くの物語もあるのである。かういふ譬喩の通常の形式が手輕に變形されてゐる是等の物語に對し「現在の譬喩」の名を與へるのである。

第四「未來の譬喩」或は「授記」、と名づけられるものであつて、若し現在が過去の所產であるならば、現在は又未來の生產者である譯であり、今日の出來事は、往昔の業の結果であると同樣に、現在の業は未來の出來事の原因である譯であ

る。鏡中を見るが如く過去を見給ふ所の全智の佛陀は又未來をも察知し給ふのであつて、その察知に依つて、過去の物語が一つの豫言に取り替へられ、現在を未來に結びつける教訓が與へられる。この形式の文學は授記と稱する特別の部類を形作り、分教中第三位を占めてゐるのであるが、此に類似した本文が譬喩の集錄中にも現はれて居り、且つ名詞たる授記に相應する動詞が此等諸本文中いたる處にある。全ての授記は豫言ではないが然し全ての豫言は授記である。それ故に、此の意味を取れば授記は又譬喩の特別な場合、譬喩類の異種に外ならぬものとすることが出來る譯である。第五は「混合の譬喩」といはれるものであつて、目前の行業に就て或る時は過去の記憶を想ひ起し、或時は未來の祕密を公開し給ふ佛陀は、一行爲によつてその二重の知識—過去の事實の記憶と未來の出來事の豫感—を同時に雙方共に示すことが出來ない譯はない筈である。而して現にかゝる場合は屢々ではないが佛教文學中にあることはあつて、過去の物語が未來の豫言と重複して說かれてゐる物語を我々は見出すのである。これは未だ特別な名を持つてゐないが、我々は玆にこれに「譬喩・授記」或は「混合の譬喩」の名をつけやう。

フイーヤ氏はかくの如く、手際よく譬喩の五種の異形を大體以上の如くに述べて、更にこれらの異形は共通する廣い定義を次の如く下してゐる。譬喩とは諸の事實によつて行業とその避けがたき結果との間に存する緣を示す教訓であると。

以上によつて我々は「譬喩」の特異相を知り得たと思ふが、佛教文學中、この特別なる定義を持てる集錄を譬喩文學と名づけ譬喩文學は、これを本生話文學、喩（Upamā）文學と種分して見るべきものであり、又是等すべての文學の總稱命名として「大正藏經」の編纂者が新に附した「本緣」なる語を信用して「本緣文學」の名に依つて呼ぶことが至當であると思ふ。

## 三、撰集百緣經の組織

撰集百緣經は十卷あり、十品より成立してゐる。各品中正確に十の譬喩を含んで居り、其等各品中の十物語の主人公の間には相通ずる特殊な性格がある。

初めの四卷は佛陀と辟支佛に充てられ後の四卷は阿羅漢に當てられ、全編輯の十分の八は人間を稱揚してゐることになつてゐる。僅かに中央の二卷即ち五卷と六卷とが天と畜生とに充てゝある。第五卷は餓鬼種を知らしめ第六卷は天と畜生との間の再生を、卽ち直接に動物性から天性への轉生を示してゐる。

初めの四卷の中、第一卷は菩薩の物語に充てられ、第三卷は過去と未來との辟

支佛に當てられ釋尊の往昔の有德の行業の物語を充たしてゐるのは、第二卷と第四卷であつて、これらは眞實の本生話である。然し、第二卷のものと第四卷のものとは著しい相違を示して居り、第四卷のものは、フイーヤ氏は古典的本生話と呼んで居り、本生話と非常に密接な關係があるものである。阿羅漢については第七卷のものは全て釋迦族のものであり、第八卷は比丘尼（阿羅漢尼）のもの、第九卷は無漏の阿羅漢、第十卷は有漏の阿羅漢の譬喩である。

第一卷　菩薩（授記品）……………一―一〇
第二卷　本生話（非古典的、報應受供養品）……………一一―二〇
第三卷　辟支佛（過去の二、未來の八、授記品）……………二一―三〇
第四卷　本生話（古典的、菩薩出生品）……………三一―四〇
第五卷　餓　鬼……………四一―五〇
第六卷　天と畜生（諸天來下供養品）……………五一―六〇
第七卷　釋迦種の阿羅漢（現化品）…六一―七〇
第八卷　阿羅漢尼（比丘尼品）……七一―八〇
第九卷　（十卷―第一〇）無漏の阿羅漢（聲聞品）……八一―九〇（100）
第十卷　有漏の阿羅漢（諸緣品）……九一―九九

この百の物語を前述の譬喩の五類に分けてフイーヤ氏は左の表を示してゐる。

第一　過去の譬喩……………五二
第二　譬喩―本生話……………一三
第三　現在の譬喩……………五
第四　未來の譬喩……………一八
第五　混合の譬喩……………二
合　計　一〇〇

以上の敍述により簡單ではあるが撰集百緣經の組織と其等に含まれる譬喩の内容を知り得るであらう。

## 四、同種の集錄とその關係

如意樹譬喩鬘論（Kalpa-druma-avadāna-mālā）といふ集錄がありて三十の物語より成つて居り。百緣經と極めて密接なる關係を有してゐる。即ち此の三十譬喩の中の第二十四譬喩まで、たゞ一つの例外を除いて他は皆百緣經より借り來つて居るものである。百緣經の最後のものが、此集錄では始めの物語となつて居り、續く物語は次の如く順序正しく（但し第四卷を除く）百緣經より引かれて居るものである。

如意樹、
No.　1（Av-Ç. 100）
No.　2（　—　1）
No.　3（　—　11）
No.　4（　—　21）
No.　5（　—　41）
No.　6（　—　51）
No.　7（　—　61）
No.　8（　—　71）
No.　9（　—　81）
No. 10（　—　91）

如意樹、
No. 11（Av-C　2）
No. 12（　—　12）
No. 13（　—　22）
No. 14（　—　42）
No. 15（　—　52）
No. 16（　—　62）
No. 17（　—　72）
No. 18（　—　82）
No. 19（　—　92）
No. 20（　—　54）
No. 21（　—　15）
No. 22
No. 23（　—　33）
No. 24（　—　16）

又寶石譬喩鬘論（Ratnāvadānamālā）といふものがあるが、この譬喩集錄も三十四の物語よりなり前の集錄と同じい立案に基いて百緣經より次の如く借用して居るのである。

寶石、

| | |
|---|---|
| No. 1 | (Av-Ç. 3) |
| No. 2 | ( — 13) |
| No. 3 | ( — 23) |
| No. 4 | ( — 43) |
| No. 5 | ( — 53) |
| No. 6 | |
| No. 7 | ( — 63) |
| No. 8 | |
| No. 9 | ( — 73) |
| No. 10 | ( — 83) |
| No. 11 | ( — 93) |

寶石、

| | |
|---|---|
| No. 12 | ( 4 ) |
| No. 13 | ( 14 ) |
| No. 14 | ( 24 ) |
| No. 15 | ( 44 ) |
| No. 16 | ( 32 ) |
| No. 17 | ( [illegible]5 ) |
| No. 18 | ( 64 ) |
| No. 19 | ( 74 ) |
| No. 20 | ( 84 ) |
| No. 21 | ( 94 ) |

此等の二集錄と百緣經との大なる相違は前者が韻文であるに反して後者は散文であることとである。

更に阿育譬喩鬘論（Açokâvadāna-mālā）といふものがあつて、これは阿育王と優波笈多長老との韻文の會話であるが不釣合なる長さの二十七品に分けられて居り、その中八つが百緣經の各卷の第十の物語に相應してゐるものである。

阿育譬喩、

| | |
|---|---|
| No. 14 | (Av-Ç. 10) |
| No. 15 | ( — 20) |
| No. 16 | ( — 30) |
| No. 17 | ( — 50) |
| No. 18 | ( — 60) |
| No. 19 | ( — 70) |
| No. 20 | ( — 80) |
| No. 21 | ( — 90) |

以上の三集錄の比較によつて知られるが如く、其等が百緣經より借用してゐる數は約五十の譬喩である。それで殘餘の五十の譬喩が同じいやうに二つ或は三つの同じ立案のもとに編纂された集錄中に發見せらるべきであらうことを信じても善い樣に思はれる。

二十二譬喩、（Dvaviṃçati-Avadāna）といふものもあつて、此集錄も亦百緣經に關係深いものであるが、然し、その編輯の方法は全然前の三集錄と異なるものである。これは二十二章より成つては居るが附錄の二章があるから結局二十四章のものである。さうしてこの二十四章は種々の教訓によつて分類されて居り各章毎に教訓の德目を掲げてゐて、直接物語の名稱は現はれてゐない。

此書は散文ではあるが韻文をも挿入してゐる。玆にも阿育王と優波笈多の對話が現はれてゐるが、此等兩人は直接舞臺を去つて釋尊と彌勒とが現はれてくる。彌勒が教訓を求めつゝ、釋尊が此の求めに應じて對話が開始されてゐる形になつてゐる。

此書中には百緣經の十二の物語が認められ注意すべきことは此等引用の物語は原文通りに轉載してあることとである。

今、十二の物語を各章に對照した表を示さう。



| 「二十二譬喩」章 | 「百緣經」番號 |
|---|---|
| 第一章　功德の行爲の話 | |
| 第九章　蓋話 | 第一九 |
| 第十二章　軟食話 | 第二〇 |
| 第十三章　飲料話 | 第四三 |
| 第十四章　衣話 | 第七三 |
| 第十五章　花話 | 第五三 |
| 第十九章　精舍話 | 第一五 |
| 第二十章　耳飾話 | 第六一 |
| 第二十一章　掃除話 | 第六三 |
| 第二十二章　Candana話 | 第二一 |
| 第二十三章　布施話　イ、衣 | 第五五 |
| ロ、尸毘王 | 第三四 |
| ハ、善面王 | 第三五 |

此の表により、尙特に注意してよいことは前の三集錄には百緣經の第四卷の物語が一つしか引いてないのに此處では附錄として、ではあるが二つの物語が他の物語の如く原文通りに引いてあるといふことである。此のことは百緣經と此等集錄の關係の究明に於て注意を要する點と思はれる。猶一言斷つて置きたいことは玆にはこれらの諸集錄と梵本百緣經との關係を述べたのであるが漢譯のそれも同樣にいはれるのである。その物語の相違點は橫線を引き注意して居いた。さうしてこの成果はフイーヤ氏によつたものであることを特に斷つて置く。

## 五、撰集百緣經の著者と譯者

此原の編纂の存在とその著者の名は撰集百緣經の梵語寫本の末尾の不幸にもかなり不分明な註の中に記入してある。それは次の如く讀まれる。Samāptam (ca) avadānaçatakam̃……tryam̃ Sugata bhāṣotam̃ thandiçvar·cīrya pūrvam̃ idānīm prakāçitam̃ (點線は理解出來ない個所を示す)。は「百緣經完結……善逝によつて語られたり、以前に阿闍梨 Thandīçvara.(に因つて集錄され) 今、發表されたり」と。此註は現在の百緣經の編纂が Thandiçvara といはれる阿闍梨の書の修正であるといふことを指示するらしい。然しこの讀方は猶甚だ不明瞭であるし、玆に固有名詞と考へられる言葉が甚だ奇異な形を持つて居るところから見て不明と云ふより外はない。西藏譯も漢譯もそれについては無言である。

西藏譯は甘珠爾の經部、u 第二十九卷 (foo p. 1—422) の殆んど全てを滿してゐる。此の西藏譯は常の如く、非常に正確であり而も文學的であるが、二三の諸點に於て梵本と符合しないし、又二つ三つの物語の中で、編纂が目立つて趣を異にしてゐる。然し澤山の物語の中のことであるから、其等の間の二三につき多少の異本のあることは免がれないことであり、從つてこれらの相違がさまで重要でないことは明かなことであらう。それであるから現存の梵本寫本が百緣經のかなり決定的な編纂を我々に與へてゐるといふことは西藏譯より明にし得ることである。此の譯は印度人智友 (Jinamitra) と西藏人、大德天月 (Devacandra De-b-stan-dra) の共譯である。

漢譯の撰集百緣經十卷は、吳月氏優婆塞、支謙 (A. D.223—253.) 譯である大正藏經では第四卷、No. 200 に收められてゐる。此處に國譯したのは此大正藏經を底本としたものであり、その字句の上に適宜にその註により宋・元・明・聖語藏に從ひ間々ある誤植は縮刷により國譯の註に訂正して居いたものである。

佛譯は、Avadāna-Çataka（佛教の百說話）と題してレオン・フイーヤ氏が西紀、一八九一年梵語原典より佛譯したものである。「ギメー博物館の年報」第十八卷中に收められて居る。その佛譯の原典はホヂソン氏がネポールの梵本寫本を巴里の亞細亞協會に寄贈せしものによつたので國立圖書館本である。此の佛譯は西藏譯も對照しつゝ譯されたものでありその研究の成績は實に見るべきものが多い。而してその序言にも述べて居られる樣に此譯完成に十年以上の歲月を費されたものである。一八九一年此譯が發表される以前百緣經を素材とする研究が"Journal Asiatvque"（一八八一より一八八四）にまで「如何にして阿羅漢となるか」等の論文として載せてある。

此經の梵本出版は此佛譯より遲れて一九〇六年、St. Pétersburg に於て J. S. Speyer 氏が出版してゐる。譬喩文學一般論についてはフイーヤ氏の諸論と共に Speyer 氏の緒論を參考すべきものである。

昭和四年八月十六日

譯者　赤沼智善
　　　西尾京雄　識

# 撰集百縁經

## 卷の第一

呉・月氏優婆塞支謙譯

### 菩薩[一]授記[二]品第一

#### 一、[三]満賢婆羅門、遙に佛を請ずるの縁

佛、[四]王舍城、迦蘭陀竹林に在しき。

時に、彼の南方に一婆羅門あり、名づけて満賢と曰ふ。財寶量なく、稱計う可からず。[五]毘沙門天に似て徳と信と賢善、體と性と調順せり。自らを利し、他を利し、衆生を慈愍すること母の子を愛するが如し。異學の所に於て、大會を施設し、種々の[六]餚饍を以て常に恒に、百千の諸外道等に供養し悕望して梵天上に生れんと欲求せり。

時に、彼の満賢に一親友あり、王舍城より彼の國に來詣し、満賢の所に到り佛・法・僧の所有功徳を歎ずらく「名聲遠徹し、[七]三達[八]遐鑒じ[九]婆伽婆と名く、今、王舍城の迦蘭陀竹林に在して諸の[一〇]天・[一一]龍・[一二]夜叉・[一三]揵闥婆・[一四]阿修羅・[一五]迦樓羅・[一六]緊那羅・[一七]摩睺羅伽・[一八]人非人等・國王・長者・及び諸民衆のために[一九]説法を爲し給ふ。皆、共に供養し尊重し讃嘆す。彼の修習する所其の味精妙なり。世界に遍くして欽仰せざるはなし」と。時に、婆羅門、彼の親友の佛の功徳を歎ずるを聞き深く信敬を生ぜり。尋で高樓に上り手に香と花を執り長跪し合掌し遙に世尊を請ぜんとて是の如き言を作せり。

「如來、今は實に功徳あり、我が燒く所の香氣をして芬馥として王舍城に遍からしめ、丼びに、散

---

【一】菩薩。梵語(Bodhisattva.)覺有情と譯し佛果を求むる大乘衆に名づく。
【二】授記。梵語(Vyākaraṇa.)。十二部經の一、佛發心の衆生に對し當來作佛の記別を授與するをいふ。
【三】満賢婆羅門遙請佛緣。此梵本No. 1題名、Pūrṇa(或Pūrṇabhadra)満(賢)婆羅門は印度四階級の第一、僧侶階級、如意樹譬喩第二。
【四】王舍城迦蘭陀竹林。梵名、Rājagṛha Kalandaka Venavana.王舍城は摩訶陀國の首府。
【五】毘沙門天。梵語(Vaiśravaṇa)、多聞天ともいひ四天王の一なり。
【六】餚饍。さかな等具はれる膳。
【七】三達。阿羅漢にて三明といふを佛にては三達といふ。天眼・宿命・漏盡のこと。
【八】遐鑒。はるかにてらす。
【九】婆伽婆。梵名(Bhagava)の音譯、世尊と意譯す。
【一〇】天。梵名、(Deva)天上の神。
【一一】龍。梵名、(Nāga)。
【一二】夜叉。梵名、(Yakṣa)勇健と意譯し、地上の下神。
【一三】揵闥婆。梵名、Gandharva)尋香と意譯し、ある一種の神。

する所の花佛の頂上に當り虛空中に於て變じて花の蓋を成ぜしめん。」と。是の誓を作し已れば、香と花尋いで至り。佛の頂上に當り、變じて花蓋と成り香烟は垂布して王舍城に遍し。

爾の時、阿難、斯の變を見已る。前みて、佛に白して言さく、「此の如き香雲、何より來たると爲すや」と。佛、阿難に告げ給はく、「南方に國あり、名づけて金地と曰ふ。彼に、長者あり、字を滿賢といひ、遙に、我及び比丘僧を請ず。吾、當に彼に往き、其の供養を受くべし。汝等、各自、皆、神通に乘じ、往きて彼の請を受けよ」と。時に、諸の比丘、佛勅を受け已り、虛に乘じ彼に往く。祠を去ることを遠からず、佛、神力を以て千の比丘を隱し唯、單、己のみを現はし[二〇]應器を執持し、滿賢の所に至りぬ。爾の時、長者、佛の來至し給ふを聞き五百の徒衆を將ゐ各々百味の飮食を齎持して如來を迎ひ奉る。佛、世尊の三十二相、八十種好を見奉るに、光明[二一]暉曜して百千の日の如し。[二二]安詳にして[二三]雅步、威儀觀るべし。前みて佛足を禮し「善く來たり給へり、世尊よ、慈哀憐愍し給ひ、今、我等の施食を納受せられんことを」と。佛、長者に告げ給はく、「設、施を欲するものは此の鉢の中に投ぜよ」と。五百の徒衆と及に齎す所の飮食各々手にて自ら佛鉢の中に投ず。滿しむる能はず。「奇なる哉、世尊、是れ神力あるなり」と、心即ち調伏せり。千の比丘僧の鉢も亦皆滿ち、忽然として現前し、佛、世尊を繞れり。

時に、彼の長者「未曾有」と歎ず。即便ち、身の五體を以て地に投じ大誓願を發すらく「此の食を施こすの善根功德を持ち未來世の中盲冥の衆生の爲めに、眼目と作り、歸依無き者の爲めに歸依と作り、救護無き者の爲に救護と作り、未だ解脫せざる者の爲めに解脫を作し、未だ安穩ならざる者の爲めに安穩と作り未だ涅槃せざる者は涅槃に入らしめん」と。是の願を發し已る、佛、便ち微笑し給ふ。其の[二四]面門より五色の光を出し、遍く世界を照し種々の色と作り、佛を繞ること三匝にして還び頂從り入りぬ。爾の時、阿難、前みて佛に白して言さく、「如來は尊重なり、妄に笑ひ給ふこ

【一四】阿修羅。梵名、(Asura) 非天と意譯し、惡神なり。
【一五】迦樓羅。梵名(Garuda) 金翅鳥。
【一六】緊那羅。梵名(Kimnara)。神仙のこと、歌神なり。
【一七】摩睺羅伽。梵名(Mahoraga) 蟒神、地龍のこと。
【一八】人非人。天より摩睺羅伽に至る八衆をいふ、人形を現じて聞法し、供養するを以つてなり。
【一九】而爲說法。聖語藏本により加ふ。
【二〇】應器。鐵鉢のこと、
【二一】暉曜。ひかり。かゞやき。
【二二】安詳。安らかなる貌。
【二三】雅步。正しき步み。
【二四】面門。佛口のこと。

とあらず、何の因縁ありて今は微笑し給ふや。唯、願くば、世尊よ、敷演、解説し給へ」と。

佛、阿難に告げ給はく、「汝、今、頗、滿賢長者、我に供養するを見るや不や」と。阿難、白して言さく「唯、然なり、已に見たり」と。「未來世に於て三[二五]阿僧祇劫を過ぎて菩薩行を具へ大悲心を修め[二六]六波羅蜜を修め當に成佛を得べし、號して滿賢と曰ふ。衆生を過度し限量すべからず、是の故に笑ふのみ」と。佛、是の滿賢の縁を説くの時、[二七]須陀洹を得るもの、[二八]斯陀含・[二九]阿那含・[三〇]阿羅漢を得るものあり、[三一]辟支佛心を發すものあり、無上菩提心を發す者ありき。

爾の時、諸の比丘、佛の説き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 二、[一]名稱女、佛を請ずるの縁

佛、[二]毘舍離の[三]彌猴河の岸の重閣講堂に在しき。

爾の時、世尊、衣を著け鉢を持ち諸の比丘を將ゐ、城に入り乞食し師子の家に到り給へり。時に、彼の長者に一[四]兒婦あり。字を名稱と曰ふ。佛の威顏種々の相好を見奉る。其の身を莊嚴して前みて[五]大家に白さく「此の如きの身得べきこと叵しや不や」と。姑、即ち答へて曰く「汝、今、若し能く諸功德を修し無上の廣大心を發さば、亦、所有相好を獲得すべし」と。時に、彼の兒婦、此の語を聞き已り、便ち、[六]姑妐より財物を求索して會を設け佛を請ず。飯食已に訖る。種々の花を持ち佛の頂上に散ずるに虛空の中にありて變じて花の蓋と成る。佛の行住に隨ひて是の變を見已りぬ。喜び自ら勝ず、五體を地に投げ、大誓願を發すらく「此の供養、作す所の功德を以て未來世に於て、盲冥の衆生の爲めに眼目と作り、歸依無き者の爲めに歸依と作り、救護無き者の爲めに救護と作り、解脱無き者の爲めに解脱を作し、安穩無き者の爲に安穩を作し、未だ涅槃せざる者を涅槃に入らしめむ。」と。



【二五】阿僧祇劫。無數劫に同じ。劫は極めて長い年時の名。
【二六】六波羅蜜。菩薩の大行を波羅蜜といふ。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧をいふ。
【二七】須陀洹。梵語 (Srota-āpanna)新に預流と譯し聲聞四果中の初果の名なり。
【二八】斯陀含。梵語 (Sakṛdāgami)(新に一來と譯し四果中の第二果にして天界と人間とに一度生を受くる故に名づく。
【二九】阿那含。梵語、(Anāgāmi)新に不還と譯し四果中の第三果にして再び欲界に還來せざる位なり。
【三〇】阿羅漢。梵語(Arahat)聲聞乘の極果なり。殺賊とも不生とも應供とも意譯す。
【三一】辟支佛。梵語、(Pratgehabuddha) 舊に縁覺新に獨覺と譯し飛花落葉の縁により聖果を得れば縁覺といふ。

【一】名稱女請佛縁。梵本No. 2 yaçomatī (名稱女) 如意樹譬喩第十一。
【二】毘舍離。梵名( Vaiçālī)。
【三】彌猴河。梵名(Markaṭahrada。
【四】兒婦。嫁。
【五】大家。しうとめ。
【六】姑妐。姑はしうとめ、妐、こじうと。

爾の時、世尊、彼の女人の廣大の心を發すを觀て、卽便ち、微笑し給ふ。其の面門より五色の光を出し遍く世界を照す、種々の色となり佛を繞ること三匝にして、還りて頂より入る。爾の時、阿難、前みて佛に白して言さく「如來は尊重にして、妄に笑ひ給ふことあらず、何の因緣ありて今は、微笑し給ふや、唯、願くば世尊よ、敷演し解說し給へ」と。佛、阿難に告げ給はく「汝、今、此の名稱女、我に供養するを見るやいなや」と。阿難、白して言さく、「唯、然なり已に見たり」と。「今、此の名稱、廣大の心を發し善根、功德を以て三阿僧祇劫を過ぎ菩薩の行を具へ大悲の心を修め六波羅蜜を滿足して當に佛と作るを得べし。名づけて寶意と曰ふ。廣く衆生を度し限量すべからず、是の故に笑ふのみ」と。佛、是の名稱の緣を說くの時、須陀洹を得るもの、斯陀含・阿那含・阿羅漢を得るものあり、辟支佛心を發す者あり、無上菩提心を發すものありき。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 三、[一]嬾惰子、難陀、佛を見るの緣

佛、[二]舍衛國の[三]祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中一長者あり。財寶量りなく稱て計ふべからず。唯、一子あり。名づけて難陀といふ。甚だ嬾惰なり。常に睡眠を喜び肯て行坐せず、然れども極めて聰慧にして衆を超絕し寢臥の中に於て經論を聽き採り、其の義味に博達せざるなし。時に、父の長者、子の聰明にして善く經論を解するを見て是の念を作して言く、「我、今當に[四]富蘭那等の外道の六師を請じ、家中に來至し、我が子に敎へしむべし」と。是の念を作し已り諸の餚饍を設け尋いで卽ち請じ呼ぶ。飯食已に訖り、六師に白して言さく、「我、唯一子あり、甚だ嬾惰と爲す眠りて肯て起きず、唯、願くば大師よ、我が爲に敎詔し家業及以び經論を修めしめよ」と。時に、六師等卽ち、共に相ひ將ゐ、子の所に往き

---

【一】嬾惰子難陀見佛緣。梵本 No. 3 Kuçīdā(怠け者)寶石譬喩第一。

【二】舍衛國。梵名(Çāvastī)。拘薩羅國の首都。

【三】祇樹給孤獨園。梵名、(Jetavana Anāthapiṇḍikārāma)須達長者が祇多太子の林園を購ひ精舍を建てゝ、世尊に獻じたるもの。

【四】富蘭那。梵名(Pūrāṇa)富蘭那迦葉のこと。六師の一人にして一切の法は斷滅性空にして君臣父子忠孝の道なしと立つるもの。その他の五師は、第二、末伽梨拘賒梨子第三、刪闍夜毘羅

到る。而るに臥して起きず。況んや、復、其の爲めに命を請けて坐を敷くをや。時に、父の長者、子の是の如きを見て手を以て頰を拄へ甚だ用て苦惱、憂愁して、樂しまず。爾の時、世尊、常に大悲を以て、晝夜六時に、衆生を觀察し給ふ。「誰か苦惱を受けなば、輒ち、彼に往至し其の爲めに說法し開解せしめむ」と。卽便ち、彼の長者、子の爲めに惱まされ頰を扶けて坐するを見て諸の比丘を將ゐ其の家に來至す。時に、窳子、忽然として驚き起ち佛の爲に坐を敷く。前みて佛足を禮し却きて一面に坐す。佛、卽ち、其の爲めに種々に說法し窳惰は諸の過咎多きことを呵責し給へり。尋で、自ら悔責し深く信敬を生じぬ。佛、便ち、其の一栴檀の杖を授けて彼の窳子に與へ、「汝、今、能く精勤中に於て少しく用心を加へて此の杖を扣打しなば、出す所の音聲、甚だ、愛樂すべし。此の聲を聞き已り、能く地中の所有伏藏を見よ」と。時に、窳惰子、尋で卽ち杖を取り、扣打するに聲を出す、皆、悉く地中の伏藏を見るを得たり。喜び自ら勝へずして是の念を作さく「我、今、此の精勤の中に於て、少し許り心を用ふるに尙、能く是の如き大利を獲得したり。況んや、復、懃加身を役して力を出さば將來の世に於て、無上の大利益の事を獲む。我、今、當に懃加に就き力を役して海に入り寶を採るべし」と。是の念を作し已る。卽便ち、令を唱へ衆人に告げて言く「誰か、海に入り大珍寶を採らんと欲するや、我れ、商主と爲らむ」と。衆人、競ひ集り、共に要誓を作す。大海に入り、各、珍寶を獲て皆、安穩にして還る。諸の餚饍を設け佛、及び僧を請じ、供養し訖已る。佛、卽ち、其の爲めに種々に說法し給ふ。心開け意、解く。卽便ち、身の五體を以て地に投じ大誓願を發すらく「此供養の善根、功德を以て未來の世に於て盲冥の衆生の爲めに眼目と作り、歸依無き者の爲めに歸依と作り、救護無き者の爲めに救護と作り、解脫無き者の爲めに解脫を作し、安穩無き者の爲に安穩を作し、未だ涅槃せざる者を涅槃せしめむ」と。是の願を發し已る。佛、便ち、微笑し給へり。其の面門より五色の光を出し、佛を繞ること三匝にして還び頂より入りぬ。



---

眡す、第四、阿耆多翅舍欽婆羅、第五、迦羅鳩馱迦旃延、第六、尼犍陀若提子、等にして此中よく佛典に現はるゝは第六尼犍子（Nirgranta Jñāti-putra）にしてその思想は苦樂罪福盡く前世に由る、必ず當に償ふべし、今道を行ふも能く斷ずる所にあらずと計する運命論者なり。

爾の時、阿難、前みて佛に白して言さく「如來、尊重にして妄りに笑ふことあらず、何の因緣を以つて、今は微笑し給ふや、唯、願くば世尊よ、敷演解說し給へ」と。佛、阿難に告げ給はく「汝、今の世に是の窳惰子海に入り寶を採り諸の餚饍を設け、我に供養するを見るや不や」と。阿難、白して言さく、「唯、然なり、已に見たり」と。「此の窳惰子、未來世に於て三阿僧祇劫を過ぎ當に佛と作るを得べし。精進力[五]と號す。衆生を過度すること限量すべからず、是の故に笑ふのみ」と。
爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き、歡喜し奉行せり。

## 四、[一]五百の商客、海に入りて寶を採るの緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。
時に、彼の城中一商主あり。五百の賈客を將ゐ共に大海に入りしが、船、破れて還迴りぬ、晝夜懇加して諸神に跪拜して以て福祐を求む。第二・第三、重ねて復び海に入る、船壞るゝこと前の如し。時に、彼の商主福德の力の故に竟に水に溺れず、還りて本土に達す。大苦惱を生じ是に念を作して言く、「我、每に曾て聞く、佛、世尊あり、一切智を得、諸天世人の及ぶ者あることなし。衆生を哀愍し自を利し、他を利し給ふ。我れ、今、當に、彼の佛の名號を稱し大海に入るべし。若し、安穩にして還りなば、當に、得る所の珍寶の半を以て彼の佛に奉施すべし」と。是の念を作し已つて、即ち、商人を集め、共に大海に入る。佛の名號を稱し大いに珍寶を獲たり。安穩にして迴り還り、家の中に達し到り其の寶物を觀て、愛戀貪惜し肯て佛に施さず、是の念を作して言く、「若し、此の寶を減じ半を持ち、與へなば、自らは已許も無からむ。我、今、當に、就ち此の寶物を持し、盡く婦に與ふべし。當に、彼の邊より少許の錢を索め、薰(香を)陸に市易へ持ちて祇洹に詣り燒香供養すべし」と。是の念を作し已る。其の設計の如く索めて兩錢を得たり。薰(香)を陸に市易へ持ち

【五】精進力。梵名、(Atibalavīrya-parākrama)。

【一】五百商客入海採寶緣。此梵本 No. 4 Sārthavāha(商客)、寶石譬喩の第十二。「衆經撰雜譬喩經」、第二十五。

て祇洹に詣る。燒香、供養す。佛、神力を以て此の香烟をして[二]靉靆、垂布し祇洹を[三]遍覆せしむ。時に、彼の商主、斯の香烟を覩深く佛前に於て自ら悔責す。「我、今、云何が、佛、世尊に向ひ奉り、此の寶を恡惜みて施與せざりしや。今は、如來、實に神力あり、此の香烟をして祇洹に遍覆せしむ。甚だ、希有となす。我、今、當に餚饍と飮食を設け佛及び僧を請じ舍に就き供養すべし」と。是の念を作し已る。卽便ち、長跪し佛、世尊を請ず。佛、默然として許し給へり。還歸して舍に到り飮食を辦具す。明くる日、時到り使を遣し佛に白さく「食具已に辦ぜり、唯、聖よ、時を知り給へかし」と。爾の時、如來衣を著け鉢を持ち、諸の比丘を將ゐ、其の家に往き到り彼の供を受け已りぬ。佛、爲に、慳貪の過惡を說法し給ふに、心、開け意解く。更に寶珠を取り佛の頂上に散ず、虛空の中に於て變じて寶蓋と成り佛の行住に隨ふ。是の變を見已る。卽便ち、己身の五體を地に投じ、大誓願を發すらく「此の供養の善根功德を以て、未來世に於て盲冥の衆生の爲めに眼目と作り、歸依無き者の爲めに歸依と作り救護無き者の爲めに救護と作り、解脫無き者の爲めに解脫を作し安穩無き者の爲めに安穩を作し未だ涅槃せざるものを、涅槃せしめむ」と。是の願を發し已る、佛、卽ち微笑し給ふ。其の面門より五色の光を出し、佛を繞ること三匝にして還び頂より入る。

爾の時、阿難、前みて佛に白して言さく、「如來は尊重なり、妄りに笑ふことあらず、何の因緣を以て今は微笑し給ふや。唯、願くば世尊よ、敷演し解說し給へ」と。佛、阿難に告げ給はく「汝、今、此の商主、慚愧の心を以つて我に供養するを知るや不や」と。阿難、佛に白さく、「唯、然なり、已に見たり」と。「今、此の商主、我に供養するを以つて故に、[四]地獄・畜生・餓鬼に墮せず。天上・人中に生れ常に快樂を受けむ。三阿僧祇劫を過ぎ、當に佛と作るを得べし。號して[五]寶盛と曰ふ、衆生を度脫すること稱て量るべからず。是の故に笑ふのみ」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き、歡喜し、奉行せり。



【二】靉靆。たなびく貌。
【三】遍覆。あまねく、おほふこと。
【四】地獄。梵語、(Naraka)。その依處地下に在るを以て名く、苦の具する生處なり。不樂・可厭・苦具・苦器・無有等譯す。
【五】寶盛。梵名、(Ratnottama)。

## 五、[一]貧人、須摩持縷、佛に施すの緣

佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中に、一織師あり。名づけて須摩と曰ふ。貧窮にして困苦せり、家に升斗なし。常に客織を行じ用て自ら活を存す。又、一日、是の念を作して言く「我、[二]先身、布施せざるを以つての故に今、貧窮に値ひ困苦すること是の如し。我、今に於いて復、布施せざれば將來の世に於いて遂に貧、轉、劇しからむ」と。是の念を作し已る。「我、今、當に更に[三]懃加、力を役して少物を推求し持ち用ひて布施すべし。未來の世に於て儻是の報を得む」と。卽便ち、求め索めて少許の[四]縷を得たり。道を涉り家に歸り一巻の中に至る。遙かに、世尊の衣を著け鉢を持ち、諸比丘を將ゐ城に入り乞食し給ふを見奉り、前みて佛の所に詣り尋で此の縷を持ち世尊に奉施せり。世尊、受け給ひ已りぬ。卽ち、衣の破れを現し尋いで用て衣を縫ひ給へり。時に、須漫那、佛、世尊の破衣を縫ひ補ひ給ふを見心に歡喜を懷けり。前みて佛の足を禮し大誓願を發す。卽ち、佛前に於て偈を說いて言く、

施す所、微少なりと雖も、　大良福田に値ひ奉り、　世尊に奉施し已りぬ、　誓願して後、成佛せむ。　[五]群萠の類を過度して、　其數、量るべからず、　大威德ある世尊よ、　當に此事を證知し給へ。

爾の時、世尊、偈を說きて答へて宣はく。

汝、今、我に値ひし故、　歸誠して信施を發しぬ、　未來、當に成佛すべし、　號して名を[六]十纒と曰ひ、　名聞、十方に遍くして、　度脫、量るべからずと。

爾の時、須摩、佛、世尊の此の偈を說き給ふを聞き已り深く信敬を生じ五體を投じ大誓願を發す

---

【一】貧人須摩持縷持縷施佛緣。梵本、No. 5 Soma。

【二】先身。前世の身。

【三】懃加、役力。ねんごろに勞働すること。

【四】縷。いとすぢ。

【五】群萠。おほくの人々。

【六】十纒。梵名(Daçatlama)。

らく「此の縫を施す所有功德を持ち未來の世に於て盲冥の衆生の爲めに眼目と作り、歸依無き者の爲めに歸依と作り、救護無き者の爲めに救護を作し、解脫無き者の爲めに解脫を作し、安穩無き者の爲めに安穩と作り、未だ涅槃せざるものを涅槃せしめむ」と。是の願を發し已る。佛、便ち、微笑し給ふ。其の面門より五色の光を出し佛を繞ること三匝にして還び頂より入る。

爾の時、阿難、前みて佛に白して言さく、「如來は尊重なり、妄りに笑ふことあらず、何の因緣によつて、今は微笑し給ふや。唯、願くば世尊よ、敷演、解說し給へ」と。佛、阿難に告げ給はく、「汝、今、此の貧人、須摩、縫を以て我に施し、心、歡喜を生じて大誓願を發すを見るや否や」と。阿難、白して言さく、「唯、然なり、已に見たり」と。「彼の須摩は、殷重の心を以て、我に縫を施す故に、未來の世に於て、當に佛と作るを得べし。號して、十縫といふ。廣く衆生を度し、限量すべからず。是の故に笑ふのみ」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き、歡喜し、奉行せり。

## 六、婆持加、病に困むの緣

佛、舍衞國、祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中に一りの長者あり、婆持加と字す。甚だ大なる惡性にして喜んで瞋恚を生じ一類と共に親善あることなし。然ども、六師に於て信敬の心を生ぜり。後時の間に於て疾に遇ひ病に困む。一人の飲食醫藥を瞻視するなく、餘命、幾くもなし。是の念を作して言く「我、今困苦せり、理、極めて正しきのみ。誰か能く我が壽命ある所を救濟するものぞ。我、當に終身、善好く、奉事すべし」と。是を思惟し已りて「唯、佛、世尊のみ、能く我が命を救はむ。即ち、佛の所に於て殷重の心を生じ渴仰して見奉らんと欲す」と。

【七】殷重心。ねんごろなる貌。

【一】婆持加、困病緣。梵本、No. 6 Vaḍika。

爾の時、世尊、常に、大悲を以て晝夜に六時衆生を觀察す、「誰か苦惱を受くるものぞ。我、當に彼に往きて之を拔濟すべし。軟語にて法を說き彼の心をして悅ばしめむ。若し、惡道に墮なば爲めに方便を設けて之を拔濟し、人・天に安置し道果を得せしめむ」と。爾の時、如來、卽便ち觀察し彼の長者を見る。病の爲めに困しめられ燋悴して濟ひ叵く人の贍養するなし。卽ち、光明を放ち病者の身を照して淸涼を得しむ。心、卽ち、醒悟し、喜び自ら勝へず、五體を地に投げ佛に歸命す。爾の時、世尊、婆持加の善根已に熟し應に我が化を受くべきを知り卽便ち彼の長者の家に往詣し給ふ。忽然として驚起し合掌し奉迎す。「善く來たまへり、世尊よ、」と。座を敷きて坐し、佛、婆持加に問ひ給ふらく「汝、今、患ひ苦しむ、何が最も劇しや」と。答へて曰く、「我、今、身心倶に苦惱を受く」と。佛、自ら、念言すらく「我、曠劫に於て修する所の慈悲を以て誓つて衆生の身心倶に病むを療す」と。時に、天、帝釋佛の念じ給ふ所を知り卽ち、香山に詣り藥草を採拾す。名けて白乳と曰ふ、以つて世尊に奉る、佛、此の藥を得て婆持加に授與し便ち、服盡さしむるに病悉く除かれて愈え身心快樂なり。卽ち、佛の所に於て倍信敬を生じ卽便ち佛及び比丘僧の爲めに諸の餚饍を設け供養、已に訖る。復、上妙の好衣價直百千兩の金を以つて佛と僧に奉上し、大誓願を發すらく「此の供養の善根功德を以つて今、世尊、我が身心を治し一切の衆病快く安樂を得たるが如く、我、來世に諸の衆生の身心倶に病むを治し安樂を得せしめむ」と。是願を發し已る。佛、便ち微笑し給ふ。其の面門より、五色の光を出し、佛を繞ること三匝にして還び頂より入る。

爾の時、阿難、前みて佛に白して言さく「如來は尊重なり、妄りに笑ふことあらず、何の因緣ありて、今は微笑し給ふや、唯、願くば世尊よ、敷演し解說し給へ、」と。佛、阿難に告げ給はく「汝、今、頗、彼の長者子、其の[二]病の差ゆるを以て供を設け我及び比丘僧を請ずるを見るや不や」と。阿難、白して言さく「唯、然なり、已に見たり」と。「將來の世に於て佛と爲るを成ずるを得む。釋

---

【二】 病差。病癒ゆること。

迦牟尼と號し、廣く衆生を度し限量すべからず、是の故に笑ふのみ」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き、歡喜し奉行せり。

## 七、[一]王家の池を守る人、花を佛に散ずるの緣

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

爾の時、[二]波斯匿王、未だ佛ありと聞かず、晝夜六時香と花を齎持し天神に奉持せり。佛、已に出世し、正覺を成ずるを得、將に波斯匿王を敎化せむと欲し給ふや。故に衣を著け鉢を持ち王の所に往詣し給ふ。時に、波斯匿王、佛の來至するを見るに光明、[三]晃昱として天地を照曜し威儀、[四]詳序として人中に[五]挺特す。心、歡喜を懷けり、命を請け坐せしむ。諸の餚饍を設け供養し訖竟る。佛、便ち、王の爲に種々に法を說き給へり。卽ち、佛の所に於て深く信敬を生じ天神に事ふることを捨て心、奉持せず。是に於て波斯匿王、日に復三時香と花を齎持して如來に供養せり。

時に、花を送るの人、王に花を奉り已り、自ら、一花を捉り、[六]市肆に詣らむと欲す。路に外道に値ふ。卽ち、之に問ふて曰く「汝、此の花を齎して賣らむと欲し爲すや不や」と。時に、須達長者、復來り邊に到り復、彼の人に問ふらく「汝、此の花を捉り、賣らむと欲爲するや不や」と。皆に言く「賣らむと欲す」と。時に、此の二主、各、共に諍ひ競ひ、倍共に價を償ふ。遂に百千兩金に至り故に、肯て止めず、時に、花を齎す人外道に問ふて言く「汝、此の花を買ひて何の所作をか爲すや」と。外道、答へて言く、「我、用つて[七]那羅延天に供養し以つて福祐を求めむ」と。次いで、須達長者に問ふらく「汝、此の花を買ひ用つて何等をか作すや」と。須達、答へて曰く「用つて佛を供養せむ」と。花を齎すの人、言く「云何が佛と爲すや」と。須達、答へて言く、「前より覩るに窮なく却いて覩るに極りなし、三界中尊く諸天、世人、皆、共に敬ひ仰ぐ」と。時に、花を

【一】王家守池人花散佛緣。此梵本 No. 7 Padma(蓮花)。

【二】波斯匿王。梵名(Prasenajit.)舍衞國の王の名、和悅・月光等と譯す。

【三】晃昱。ひかりかゞやくこと。

【四】詳序。よき貌。

【五】挺特。ぬきんづる貌。

【六】市肆。商店。

【七】那羅延天。梵名、(Narāyaṇa)天上の力士の名。或は梵天王の異名なり。

齎すの人、是の語を聞き已り、密かに歡喜を懷き是の念を作して言く「須達長者、安詳、審諦にして卒暴ならず、乃ち、今日に於て此の一花の爲に共に價數に償ひ、乃ち百千兩の金に至るも齎持して去らむと欲す、今は必ず大利益の事あり、貴賤を計らず、必ず之を得むと欲するならん」と。時に、花を齎すの人、即ち二主に答ふらく「我、華を賣らず、自ら持ち去り、用つて佛に供養せむと欲す」と。須達、聞き已り喜び自ら勝へず、尋で彼の人を將ゐ、佛、世尊を見奉る。三十二相八十種好光明普く曜き百千の日の如し。甚だ、信敬を懷く。捉りし花を持ち佛の上に散ずるに、虛空の中に於て變じて花蓋と成る。佛の行住に隨ふ。是の變を見已り、即便ち、身を以つて五體を地に投じ大誓願を發すらく「此の散花の善根功德を以て我れ、來世、盲冥の衆生の爲めに眼目と作らむ。歸依無き者の爲めに歸依と作り、救護無き者の爲めに救護と作り解脫無き者の爲めに解脫を作し、未だ涅槃せざる者を涅槃せしめむ」と。是の願を發し已る。佛、便ち、微笑し給ふ。其の面門より五色の光を出し、佛を繞ること三匝にして還へりて頂より入る。

爾の時、阿難、前みて、佛に白して言さく「如來は尊重なり、妄りに笑ふことあらず。何の因緣を以て今は微笑し給ふや、唯、願くば世尊よ、敷演し解說し給へ」と。佛、阿難に告げ給ふやう、「汝、今、此の守園人を見るやいなや、此の一花を持ち我が上に散ず。未來の世に於て三阿僧祇劫を過ぎ、當に佛と成るを得べし。號して〔一〇〕花盛と曰ふ。衆生を度脫して限量すべからず、是の故に笑ふ耳」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 八、〔一一〕二梵志各如來を諍ふの緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

【八】安詳。やすらかにしてよき貌。
【九】審諦。あきらかなること。
【一〇】花盛。梵名、(Padmottama)。
【一一】二梵志各諍如來緣。此梵本 No. 9 Dhūma。

時に、彼の城中に二梵志あり。一者深く佛法を信じ常に如來の所有功德を說き、「三界の中、尊きこと最第一と爲す」と。其の第二なる者深く邪見に著して言く「諸の外道六師の徒、亦、最第一にして與に等しき者なし」と。是の如く[二]紛紜し遂に共に諍ひ競ひて休息あることなし。乃至、上聞す。波斯匿王、二梵志を召して其の所由を問ふらく「此の諍競あるや」と。外道を信ずるもの言さく「我、奉事する所の富蘭那等、實に神力あり、彼の[三]瞿曇沙門より殊勝なり」と。王、復佛を信ずる者に問ふて曰く「汝、今、事ふる所の瞿曇沙門、何の神力あるや」。梵志、答へて曰く、「我、奉事する所の瞿曇沙門、絕、神力あり、及ぶものあることなし」と。時に、波斯匿王、其の二大梵志の語を聞き已りて之に告げて曰く、「卿等、今は各自稱譽し、奉ずる所の天神、最も第一と爲す。我、今、汝の爲に七日の頭に到り[四]平博の處に於て人民を聚集すること百千萬衆にして彼の神驗を試みむ。卿等、二人各自、香を燒き花を散じ水を灑ぎ汝の師等を請じ此の會の中に來り當に共に供養すべし」と。時に、二梵志、王の語を聞き已り各、相に「然るべし」と。七日の頭に至る。王、民衆に勅して聚集、已に訖る。時に二梵志、大衆の前に在り、各、誓願を發す。富蘭那を信ずる者、尋いで、香と花と幷びに淨水とを取り、大衆の前に在り、大誓願を發すらく「若し、我が奉ずる所の富蘭那等神力あらば此の香花幷びに淨水とをして虛空の中に於て、我が師の所に至らしめ我が心をして此の會に[五]來赴するを知らしめよ。若し、神力なければ、此の香、花、幷に淨水、住して去らざらしめよ」と。是の誓を作し已り、尋いで香と花と幷に淨水とを散ずるに皆住して去らず。卽便ち、地に墮ぬ。時に、諸の大衆、是の事を見已る。神驗あることなし。各、相ひ謂ひて言く、「今、富蘭那等實に神力なし、虛しく國中の我等の供養を受く」と。是の語を作し已る。時に、佛を信ずる者大衆の前に於て復、香と花と及び淨水とを以つて空中に散じ是の誓を作して言く、「如來、今者、實に神力あらば此の香氣ありて、散ずる所の諸花及び淨水とをして如來の所に至り、亦我が心

【二】紛紜。亂れる貌。

【三】瞿曇。梵語(Gautama)。喬答摩とも音譯し、釋種の姓。

【四】平博。ひらたくひろし。

【五】來赴。いたりいたること。

をして此の會に來赴するを知らしめよ」と。是の誓を作し已り、尋いで即ち遙かに散ず。烟雲垂布して舍衞を遍く覆ふ。散ずる所の諸花は虛空の中に於いて變じて花の蓋となり、如來の所に至り、佛の行住に隨ふ。及び淨水は琉璃の如く、遙に佛前の地に灑ぎぬ。[佛]尋いで即ち來至し給ふ。時に諸の大衆斯の變を覩已り、未曾有と歎ず。深く佛の所に信敬の心を生じ諸の外道等を捨てゝ奉ぜず。

時に、彼の梵志、願ふ所を既に獲たり。即便ち身を以つて五體を地に投じ大誓願を發すらく「此の香氣・散華・灑水の所有功德を以つて未來の世に於て盲冥の衆生の爲めに眼目と作り、歸依無き者の爲めに歸依となり、救護無き者の爲めに救護と作り、解脫無き者の爲めに解脫を作し、安穩無き者の爲めに安穩を作し、未だ涅槃せざる者を涅槃せしめむ」と。是の願を發し已りて、佛、即ち微笑し給ふ。其の面門より五色の光を出し、佛を繞ること三匝にして還び頂より入る。

爾の時、阿難、前みて佛に白して言さく、「如來は尊重なり、妄りに笑ふことあらず、何の因緣を以つて、今は微笑し給ふや、唯願くば世尊よ、敷演し解說し給へ」と。佛、阿難に告げ給はく「汝、今、是の彼の大梵志、香と花と淨水とを我に供養するを見るや不や」と。阿難、白して言さく「唯、然なり、已に見る」と。「彼の大梵志未來の世に於いて三阿僧祇劫を過ぎ當に成佛するを得べし。號して[六]不動と曰ふ。衆生を度脫し限量すべからず、是の故に笑ふ耳」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 九、[一]佛、說法し二王を度し、出家せしむる緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、二國王あり、常に共に忿諍し多く民衆を害ひ晝夜、謀を陰にし休息あることなし。時に、波斯匿王、彼の二王を觀ずるに、生死に流轉し恐らく拔濟し難し。生死の中に於いて解脫せしめん

【六】不動。梵名、(Acala)。

【一】佛說法度二王出家緣。梵本 No. 8 Pancāla。

と欲し佛の所に往詣し頭面にて足を禮し、却いて一面に坐し、白して言さく「世尊よ、今、如來は無上法王なり、諸の衆生を觀て苦厄あらば、爲めに救護を作し。鬪諍の間に於いて能く和解せしめ給ふ。今、此の二王、常に共に鬪諍し、傷害する所多し。久しく怨讎を挾み和解すべからず。唯、願くば世尊よ、彼の二王を和し鬪諍せざらしめよ」と。佛、卽ち、「然なり」と許し給ふ。

爾の時、如來、其の後日に於いて衣を著け鉢を持し諸比丘を將ゐ自ら圍繞せられ[二]波羅㮈國の鹿野苑中に詣り給ひぬ。時に、彼の二王各兵衆を集め便ち戰ひ擊たむと欲す。一は則ち怯弱にして甚だ大いに[三]惶怖し退いて佛の所に詣り前みて佛足を禮し却いて一面に坐す。佛、卽ち王の爲めに非常の偈を說き給ふ。

高き者も亦墮ち、　常なる者も亦盡く、　生あれば皆、死あり、　合會へば別離る。と。

爾の時、國王、佛世尊の是の偈を說き給ふを聞き已りて心開け、意解け、須陀洹果を得たり。卽ち、佛前に於いて出家を求索む。佛、卽ち、告げて言はく「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自から落ち法服、身に著き便ち沙門となる。精懃、修習し阿羅漢果を得たり。彼の第二の王、佛、世尊、それ彼の王を度し已に出家せしむるを聞き心意泰然として復、怖畏なし、次で、佛の所に來り、佛足を頂禮し却いて一面に坐す。佛の說法を聽き甚だ歡喜を懷き、尋で、世尊を請ず。佛卽ち、「然るべし」と。本國に還歸し諸の餚饍を設け佛、及び僧を請ず。飯食、已に訖る。卽ち、佛前に於いて大誓願を發すらく「此の供養の善根功德を以つて未來世に於いて盲冥の衆生の爲めに眼目と作り、歸依無き者の爲めに歸依と作り、救護無き者の爲めに救護となり、解脫無き者の爲めに解脫を作し、安穩無き者の爲めに安穩を作し、未だ涅槃せざる者の爲めに涅槃と作らむ」と。是の願を發し已る。佛、便ち微笑し給ふ。其の面門より五色の光を出し佛を繞ること三匝にして還び頂より入る。

爾の時、阿難、前みて、佛に白して言さく「如來は尊重なり、妄りに笑ふことあらず。何の因緣を



【二】波羅㮈國。梵名(Vārā-ṇasī)中印度恒河流域の國名。

【三】惶怖。おそれおそれること。

以て今は微笑し給ふや、唯、願くば世尊よ、敷演し解説し給へ」と。佛、阿難に告げ給はく「汝、今、此の[四]槃遮耶王、我に供養するを見るや不や」と。阿難、白して言さく「唯、然なり、已に見たり」と。「我を供養するに由り、惡趣に墮せず、天上・人中、常に快樂を受けむ。三阿僧祇劫を過ぎ當に成佛を得べし。號して[五]無勝と曰ふ。廣く衆生を度し限量すべからず、是の故に笑ふ耳」と。

爾の時、諸の比丘、佛の説き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 十、[一]長者、七日、王と作るの緣

佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、波斯匿王、[二]阿闍世と恒に共に忿諍し、各四兵、(即ち)象兵・馬兵・車兵・歩兵を集めて共に交戰せり。時に、波斯匿王の軍衆、悉く敗る、是の如く三戰し、軍故、壞敗し唯、王、單のみ退いて城内に入る。甚だ、[三]憂慘を懷き愧恥して地に委ね寢を忘れ食はず。

時に、長者あり、多財饒寶にして稱て計ふべからず。王の愁惱を聞き來りて王に白して言く「奴家に多くの金・銀・珍寶あり、王の所用を恣にし、象馬を買ひ健兒を賞募すべし。還、與に戰ひ擊たば彼に勝つを得べけむ。今は、何故に憂慘是の如きや」と。王、即ち、「然らば可し」と。大いに、珍寶を出し、奉上し王に與へぬ。健兒を募索し遍く、諸國に行き以つて策謀を求む。一健夫あり、來りて其の募に應ず。祇洹の門中に到り、二將士の共に戰法を論ずるを見る。一將士、言く「陣の前鋒に於て、先づ健夫を置き、次に中なる者を置き、後に劣者を置かむ」と。是の語を聞き已りて還歸し王に白すに、具に將士、論ずる所の兵法を說けり。王、是の語を聞き即ち四兵を集め彼の所論の如く健者は前に置き劣者は後に在らしめ。尋いで共に交戰せり。即ち、彼の軍を破りて其の象・馬を獲たり。即便ち、阿闍世王を捉へ得て大いに歡慶す。與に、共に、同じく羽寶の車に載り、將

【四】槃遮耶王。梵名(Pañcālarāja)。

【五】無勝。梵名、(Vijaya)。

【一】長者七日作王緣。梵本No. 10 Rājā(王)、阿育譬喩第十四。

【二】阿闍世。梵名、(Ajātaśatru)未生怨と譯し佛在世摩訶陀國王舍城の王、父は頻婆娑羅、母は韋提希、韋提懷胎の時、相師占て此兒生れて父を害すべしといふ。未生以前怨を懷く意にて未生怨と名く。

【三】憂慘。うれへいたむ。

ゐて佛の所に詣り、白して言さく「世尊よ、我、彼の王に於いて長夜の中初め怨嫉なし。而して彼、我に於いて返つて怨讐を生ぜり、然れども、阿闍世の其父なる先王、是れ、我と親友なり。命を害するに忍びず。今、放ち去り、本國に還歸せしめんと欲す」と。爾の時、佛、波斯匿王を讃し給ふらく「善き哉、善き哉、親、非親に於て心常に平等なるは賢聖の讃ずる所なり」と。即便ち、王の爲に偈を說いて言く、

負れば則ち憂懼を生じ、　勝ちなば則ち欣慶を懷く、　汝、今、彼王を放たば、　二(人)、俱に、
歡喜を生ずるなり　若し、能く勝負を息めなば、　最も妙にして、第一の樂なり、と。

時に、波斯匿王、佛、世尊の是の偈を說き已り給ふや、即ち、阿闍世を放ち、還りて本國に詣らしめ、自ら、舍衞に歸り自ら念言すらく「吾、今、戰鬪うて勝を獲る所以は彼長者、我に珍寶を資へ將士を賞募するに由り、今、勝つを得たるのみ」と。是の念を作し已り即ち、長者を召し、之に告げて言く「吾、汝の我に珍寶を資へ、勇健を賞募せしむるに由るの故に、戰鬪して勝つを得たり。我、今、卿の恩に還報ずべし。汝の所願を恣にせよ」と。是時、長者、跪き王に白して言さく、「我に、無畏を施こし給へ、敢て、道所あらん」と。王、即ち、答へて曰く、「汝の所說を聽む」と。長者、白して言く「我、今、願くば王に代つて七日天下を治政めむと欲す」と。王、尋いで聽許し長者の願を滿す。即ち、爲めに鼓を撃ち立てゝ正に王と爲す。鼓を撃ち令を唱へ其境内に使して咸、聞き知らしむ。皆、自在を得たり。尋いで即ち、使を遣はし諸の小王に勅して各、七日、諸王の課を罷め來朝して我を拜し三寶に歸依し佛を請じ供養せしむ。七日、旣に滿つ、甚だ大いに歡喜せり。即便ち、身を以て五體を地に投じ、大誓願を發すらく「此の七日、王と作るの功德を持ちて未來の世に於いて盲冥の衆生の爲めに眼目と作り、歸依無き者の爲めに歸依と作り、救護無き者の爲めに救護を作し、安穩無き者の爲めに安穩を作し、解脫無き者の爲に解脫を作し、未だ涅槃せざる

者を涅槃せしめむ」と。是の願を發し已る。佛、便ち微笑し給ふ。其の面門より五色の光を出し佛を繞ること三匝にして還び頂より入る。

爾の時、阿難、前みて佛に白して言さく「如來は尊重なり、妄りに笑ふこと有らず、何の因緣を以つて、今は、微笑し給ふや、唯、願くば世尊よ敷演し解說し給へ」と。佛、阿難に告げ給はく、「汝、今、彼大長者、七日王と作るを見巨きや不や」と。阿難、白して言さく「唯、然なり、已に見たり」と。「彼の大長者、我を請ずるに由り、故に、未來の世に於いて、三阿僧祇劫を過ぎ、當に佛と作るを得べし。號して【四】最勝と曰ふ。廣く衆生を度し、限量すべからず。是の故に笑ふ耳」と。佛、是の長者、王と作るの緣を說く時須陀洹を得る者、斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る者あり、辟支佛心を發す者あり、無上菩提心を發すものあり。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

# 撰集百緣經卷第一

【四】最勝。梵名、(Abhaya prada)。

# 卷の第二

## 受報應供養品第二

### 十一、船師、佛を請じ水を渡るの緣[一]

佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

伊羅拔[二]河の邊り、諸の船師あり。河の側に止住す。爾の時、如來、諸の比丘を將ゐ彼の聚落に詣る。水を渡り諸の船師を化せむと欲し給へり。是諸人、佛の來至し給ふを見奉り、各 歡喜を懷き、「船に乘せて水を渡らむ」と。前みて佛の足を禮し白して言さく「世尊よ、明日、意を屈し、船に乘じて水を渡り給はんことを」と。佛、卽ち、「然なり、可し」と(許し給ふ) 船舫[三]を莊嚴り道路を平治し瓦・石・汚穢・不淨を除去す。幢幡を竪立て香水を地に灑ぎ衆の妙華を散じ船舫を莊嚴りて佛及び僧を待つ。爾の時、世尊、明日の時、到り、諸の比丘を將ゐ河の側に往至き。船に乘り、水を渡り彼の聚落に至り、座を敷きて坐し給ふ。諸の船師等衆の坐、定まるを察し、手自ら餚饍飲食を斟酌し。供養し訖已りぬ。皆、佛の前に於て渇仰して法を聞けり。

爾の時、世尊、應の如く、四諦[四]の法を說き給ふに心開け意解け、須陀洹を得る者、斯陀含の者、阿那含の者、乃至無上菩提心を發す者あり。時に、諸の比丘、是供養と水を渡るを見て未曾有と怪しみ、前みて佛に白して言さく「如來、先世の宿、何の福を植えてか、今乃ち、是の如く自然の供養と水とを渡ることありや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく『汝等、諦かに聽けよ、吾、當に汝(等)の爲めに分別し解說すべし。乃往、過去無量世の時、波羅㮈國に佛あり出世し給へり。毘閻婆[五]と號す。諸の比丘を將ゐ



【一】 船師請佛渡水緣。此梵本 No. 11 Nāvikā (船師) 如意樹譬喩第三。

【二】 伊羅拔。梵名、(Ajiravati)。

【三】 船舫。ふね。

【四】 四諦。四聖諦、四眞諦ともいひ聖者所見の眞理なる故なり。梵語 Catvāri ārya-satyāni 巴利語 Cattāri ari-yasaccāni 一、苦諦、三界六趣の苦報、是迷の果、二、集諦、貪瞋の煩惱、これ苦報集起なれば集諦といふ、三、滅諦、涅槃なり、惑業を滅し生死の苦を離れて眞空寂滅なれば滅と名づく、四、道諦、八正道なり、是れ能く涅槃に通ずれば是れ道といふ。

【五】 毘閻婆。梵名、(Phāgi-natha)。

他國に遊行し衆生を教化し一河の側りに至り給ふ。諸の商客あり珍寶を齎持して他邦より來り、彼の河岸に到り、佛、世尊及び六萬二千の阿羅漢衆を見、深く信敬を生じ、前みて佛に白して言さく「水を渡らむと欲するや」と。佛、卽ち、「然なり可し」と(宣ふ)。諸の餚饍を設け佛と僧に供へ已る。「唯、願くば世尊よ、前に在りて渡らむ」と。儻劫賊あり、諸の比丘の衣鉢須る所を奪へり。世尊、卽便ち水を渡り諸の商人の爲めに種々に說法し給ふ。各歡喜を懷き菩提心を發す。卽ち、商主に記を授け給へり「汝、來世に於て當に佛と作るを得べし。釋迦牟尼と號す。廣く衆生を度し、限量すべからず」と。』

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の商主を知らむと欲せば則ち我身、是なり、彼の時の商客とは今の六萬二千の阿羅漢是たり。皆、彼の時、佛を供養するに由るが故に無量の世の中、惡趣に墮せず天上、人中常に快樂を受く。乃至、今は自ら成佛を致せり。故に、人・天、來りて我に供養するなり。」と。

爾の時、諸の比丘佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 十二、[一]觀頂王、佛を請ずるの緣

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

爾の時、世尊、諸の羅漢六萬二千を將ゐ[二]拘毘羅國に詣る。彼諸の民衆果性賢善にして、慈仁・孝順なり。意志寬博なり。時に、如來、是念を作して言く「吾、今、當に、[三]牛頭栴檀の重閣講堂を作り彼の民衆を化すべし」と。是の念を作し已り給ふ。時に、天帝釋、佛の心念を知り、卽ち天・龍・夜叉・[四]究槃荼等、各〻、牛頭栴檀樹を齎持し世尊に奉上し如來の爲に大講堂を造りぬ。天の諸の[五]床、榻・臥具・[六]被褥、天の[七]須陀食、自然に備はり佛、僧を供養せり。

---

【一】觀頂王、請佛緣。梵本 No. 12 Stambha 如意樹譬喩第十二。
【二】拘毘羅。梵名、(Kaurava)。
【三】牛頭栴檀重閣講堂。梵名、(Gośīrṣacandanamaya stambham)。
【四】究槃荼。梵名、(Kumbhāṇḍa)鬼の名。
【五】榻。ねだい。
【六】被褥。ふとん。
【七】須陀食。ビスケット。

時に、彼の民衆、是の事を見已り、未曾有と怪しみ各是の言を作さく「今は、如來、乃ち能く是の大功德利あり、乃ち、諸天斯供養を置くに感る」と。卽ち、共に同時に佛の所に往詣し前みて佛足を禮し却て一面に住せり。佛、卽ち、其の爲に四諦の法を說き給へり。心開け意解く。須陀洹を得る者、斯陀含を得る者、阿那含を得る者、乃至無上菩提心を發す者あり。時に、諸の比丘、是の諸天、獻ずる所の供養と床、榻とを見て、未曾有と歎じて佛に白して言さく、「不審なり、如來よ、宿に、何の福を殖えて乃ち、諸天をして斯の供養を置かしむるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく『乃往過去無量世の時、波羅㮈國に佛ありて、出世し給へり。號して〔八〕梵行と曰ふ。諸の比丘を將ゐ遊行し教化し〔九〕觀頂王の所に到り給ふ。王、佛の來至し給ふを聞き城を出でゝ奉迎し前みて佛足を禮せり、「佛と僧を請ぜむ。〔一〇〕臨顧し意を屈し三月我が〔一一〕四事の供養を受け給へ。」と。佛、卽ち、「然なり可し」と。(許し給ふ)。尋いで便ち、重閣講堂に床、榻、臥具及び、諸の餚饍を安置し、供養すること三月なり。復、妙衣を以つて各〔一二〕一領を施こす。佛、卽ち、王の爲に種々說法し給ふに、心、歡喜を懷き菩提心を發せり。卽ち、王に記を授け給へり。「汝、來世に於いて當に佛と作るを得べし、釋迦牟尼と號す、衆生を過度し限量すべからず」と』。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の觀頂王を知らむと欲せば則ち、我が身、是なり。彼の時の群臣は今の六萬二千の阿羅漢是れなり。皆、彼時佛を供養するに由るが故に無量世の中惡趣に墮せず。天上、人中、常に快樂を受け乃至、今自ら成佛を致せり。故に、人、天來り我に供養するなり」と。

爾の時、諸の比丘佛の說き給ふ所を聞き、歡喜し奉行せり。

## 十三、〔一〕法護王、佛を洗浴に請ずるの緣



〔八〕梵行。梵名、(Brahmā。
〔九〕觀頂王。梵名、(Mūrdhnābhisikta)。
〔一〇〕臨顧。のぞみいつくしむ。
〔一一〕四事。衣服・飲食・臥具・湯藥なり。或は房舍・衣服・飲食・湯藥をいふ。
〔一二〕一領。一とそろひ。

〔一〕法護王請佛洗浴緣。梵本 No. 13 Snānta (洗浴) 實石譬喩第二。

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中、五百の賈客あり。他邦に往詣し販賣して利を求め路を涉り、進引[二]し曠野の中に到る。徑路を迷失し趣く所を知る靡し。天の暑熱に値ひ渇乏し死せむと欲す。各々、諸の天神等を跪拜し以つて福祐を求むるに、皆、感あることなし。時に、諸の商人中、一優婆塞[三]あり、衆人に白して言さく「如來、世尊、常に大悲を以つて晝夜六時誰か苦厄を受くると、衆生を觀察し而して往いて拔濟し給ふ。我等、今、咸共に至心に南無佛陀と稱へて以つて苦厄を救はれむ」と。時に、諸商客、是の語を聞き已りて各々聲を同じくして南無佛陀と稱へ「願くば、此の諸の渇熱を救濟せられよ」と請ふ。時に如來遙に衆客佛の名號を稱ふるを聞き天帝釋と與に尋いで彼の諸賈客の所に往き到り大甘雨を降すに熱渇除くを得たり。各歡喜を懷き本國に達し到りぬ。「佛、及び僧を請ぜむ」と。佛、卽ち、「然なり可し」と(許し給ふ)。幢幡を竪立て諸の寶鈴を懸け香水を地に灑ぎ諸の妙華を散じ種々の香を燒き餚饍を備へ辦じ、往きて世尊に白さく。「唯、聖よ、時を知り給へ、食具、已に辦ぜり」と。爾の時、世尊、衣を著け鉢を持ち諸の比丘を將ゐ其の家に往き至り彼の供を受け已り給ひぬ。時に、諸の商人、法を聞かむと渴仰せり。佛、卽ち、其の爲に種々說法し給へり。心、開け意解け、須陀洹を得る者、斯陀含を得る者、阿那含を得る者、乃至無上菩提心を發す者あり。時に、諸の比丘、是の事を見已りて佛に白して言さく「如來、世尊、宿、何の福を殖え、乃ち、商客をして斯の供養を置かしめ復道果を獲せし給ふや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦に聽けよ、吾、當に汝の爲に分別、解說すべし」「乃往、過去に、波羅㮈國に佛ありて、出世し給へり。栴檀香[四]と號す。諸の比丘を將ゐ法護王の國に詣り給ふに天の亢旱[五]に値ひ苗稼[六]收らず。王、佛の來り給ふを聞き諸の群臣を將ゐ世尊を迎ひ奉り、「三月我が四事の供養を受け給へ」と(請ふ)。佛、卽ち「然なり、可し」と(許し給ふ)。其の城內

---

【二】進引。進み導く。

【三】優婆塞。梵語、(Upāsaka)五戒を保てる在家の佛教信者。

【四】栴檀香。梵名、(Candana)。

【五】亢旱。大ひでり。

【六】苗稼。いねのなへ。

に復浴池を造り、佛、脩を浴洗せしめ、大誓願を發すらく「此の功徳を持ち、願くば天帝釋よ、大甘雨を降らし、閻浮提に遍ねく苗稼を潤益し衆生を給濟し給へ」と。是の願を發し已り、天、尋いで雨を降らす。蒙頼【七】せざるはなし。即ち、八萬四千の寶瓶を造り、佛の浴水を盛り閻浮提の八萬四千の諸城に賜ひ、各に一瓶を與ふ。勅して塔を造りて之を供養せしむ。因つて、無上菩提の心を發す。時に、栴檀香佛、即ち王に記を授け給ふらく「汝、來世に於いて、當に成佛を得べし。釋迦牟尼と號す。廣く衆生を度し限量すべからず。」と。』

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼時の法護王を知らんと欲せば則ち我身、是れなり。彼時の群臣とは、今の諸比丘是なり。皆、彼の時、佛を供養するに由るが故に無量世の中惡趣に墮せず。天上・人中、常に快樂を受く。是の故に今、佛と成るを得たり。故に、人・天來り我に供養するなり」と。

爾の時、諸の比丘佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 十四、【一】佛、疫病を救濟し給ふの緣

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

時に、那羅聚落【二】に諸の疫鬼多く民衆を殺害せり。各競ひて諸天善神を求請し、疫病の漸く除降し得るを悕望せり。是の如くして數、跪くも病、降り癒るなし。

時に、聚落中に一優婆塞あり、衆人に語りて言く、「如來、世に在して衆生を利安し給ふ。我等、當に、共に一心にして南無佛陀と稱へ以つて病苦の患を救濟することを求むべし」と。時に、諸人等是の語を聞き已り咸、各同時に南無佛陀と稱へ、「唯、願くば世尊よ、大慈、憐愍して我等の疾疫病苦を覆蔭【三】し給へ」と請ふ。爾の時、世尊、常に大悲を以つて晝夜六時衆生を觀察し給ひ、「誰か、苦厄受けなば尋ね往いて化度し善法を修し永く諸の苦を拔かしめむ」とて、此の疫病の諸の人

【七】蒙頼。うけたよること。

【一】佛救濟疫病緣。梵本No. 14 Iti(天災)賣石譬喩第十三。

【二】那羅聚落。梵名、(Naḍa-kanthi)。

【三】覆蔭。くつがへしさへぎること。

民等、同時に、一心に佛の名號を稱へ以つて、疫病を救はんとするを見給へり。

爾の時、如來、諸の比丘を將ゐ彼の聚落に往き大慈悲を以つて諸の民衆に勸むるに勤て修善せしめ給ふ。疫鬼悉く退散し復衆患なし。時に、聚落の人如來の、民衆を利安し給ふを見、各是の言を作さく「我等、今、佛の恩德を蒙り軀命を濟ふを得たり。明に、會を設け佛、世尊を請ずべし。」と。是語を作し已り各、佛の所に詣り前みて佛の足を禮し長跪して佛を請ずらく「唯、願くば世尊よ、我等の請を受け給へ」と。佛、卽ち、「然なり、可し」と(許し給ふ)。時に、諸の民衆、佛の許を知り已りて家の中に還歸し、道路を平に治し瓦・石・汚穢・不淨を除去し幢幡を竪立て諸の寶鈴を懸け香水を地に灑ぎ諸の妙華を散し。床、榻を安置し餚饍を備へ辦じ、往きて世尊に白さく「食具、已に辦ぜり。唯、聖よ、時を知り給へ」と。爾の時、世尊、衣を著け鉢を持ち諸比丘を將ゐ來りて聚落に入り、其の供を受け已り給ふ。時に諸の民衆法を聞かむと渴仰し、佛、卽ち、其の爲めに種々說法し給へり。心開け意解け。須陀洹を得る者、斯陀含を得る者、阿那含を得る者、乃至、無上菩提心を發す者あり。時に、諸の比丘、是事を見已りて佛に白して言さく「如來、世尊宿に、何の福を植え給うて、乃ち、民衆、斯の供養を置き、及び、疫病を除くに感る」と。

爾の時、佛、諸の比丘衆に告げ給はく「汝等、諦に聽けよ、吾、當に、汝の爲に、分別解說すべし。」と。『乃往、過去に、波羅㮈國に佛ありて、出世し給へり。(四)日月光と號す。諸の比丘を將ゐ梵摩王の國に至り、王の供を受け已り給ふ。(王)長跪して佛に白さく「願くば、此の諸の民衆の災疫疾患を救濟せられむことを」と。

爾の時、世尊、尋いで著る所の(五)僧伽梨衣を持ち彼の王に授與し給ひ、(之を)幢の頭に繫げ各共に、供養するに疫鬼同時に自然に退散し復、災患なし。王、大いに歡喜び菩提心を發す。佛、王に記を授け給ふやう。「汝、來世に於いて當に佛と作るを得べし。釋迦牟尼と號し、廣く衆生を度し

【四】日月光。梵名、(Candra)。

【五】僧伽梨衣。梵語、(Saṅghāṭī) 衆聚時衣と譯し大衆集會して授戒・說戒等の嚴儀を爲す時に着るもの。

限量すべからず」と。』

佛、諸比丘に告げ給はく、「彼の時の梵摩王を知らむと欲せば則ち我身、是れなり、彼の時の群臣とは今の諸の比丘是れなり。皆、彼の時、佛を供養するに由るが故に無量世の中惡趣に墮せず。天上・人中、常に快樂を受く、是の故に、今、成佛を得ることを致せり。故に、人・天、來りて我に供養するなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふを聞き、歡喜し奉行せり。

## 十五、天帝釋、佛を供養するの緣[一]

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

爾の時、提婆達多、極めて大愚癡、憍慢にして嫉妬なり。阿闍世王に敎へて非法の制を立て、鼓を擊ち令を唱へ民衆の齋持供養して瞿曇の所に詣るを聽さずと。

時に、彼の城中、佛を信ずる者あり。是の制限を聞き憂愁、涕泣し悲感懊惱す。天の宮殿動搖し、不安を感ず。時に、天帝釋是の念を作して言く「我が此の宮殿、何の因緣ありて是の如く動搖するや。」と。尋で自ら觀察するに阿闍世王、非法の制を立て彼の城人をして憂愁涕泣せしめ、(依りて)我が宮殿、是くの如く、動搖を感ずるを見たり。尋いで卽ち、來下し、高聲にて唱へて言はく「我、今、自ら當に、佛・僧を供養すべし」と。是の唱を作し已り、卽ち、佛の所に往り、前みて佛の足を禮し長跪して佛を請ずらく「唯、願くば世尊及び比丘僧、其形壽を盡すまで我が供養を受け給へ」と。佛、「然ること可からず」と(許し給はず)。復、佛に白して言さく「若し、我が終身の供養を受け給はざれば當に五年を受け給へ」と。佛、亦、許し給はず。復、佛に白して言さく、「若し、五年を受け給はざれば當に五月を受け給へ」と。佛、亦、許し給はず。復、佛に白して言さ

【一】 天帝釋供養佛緣。梵本 No. 15 Prātihārya(奇蹟) 如意樹譬喩第二十一、二十二譬喩、第十九。

く「若し、五月を受け給はざれば、當に五日を受け給へ」と。佛、卽ち、「然なり、可し」と（許し給ふ）。尋いで迦蘭陀竹林を變じて[二]毘闍耶殿の如くなし、床・榻・臥具・天の須陀食を盛るに金器を以つてし天衆に與へ手自ら斟酌して佛・僧に供養せり。時に、阿闍世王、高樓の上に在り遙に迦蘭陀竹林を見るに猶し、天の宮殿の如し。天の須陀食を盛るに寶器を以つてし、天帝釋、諸の天衆と與に手、自ら斟酌し佛と僧とに供養するを見る。時に、阿闍世王、斯の事を覩已り、卽ち、自ら悔責し極めて大いに瞋恚し、提婆達多を罵らく「汝、是れ、癡人、云何が我に、横に非法を加へ世尊に向ふを教へしや」と。是の語を作し已りて佛の所に於いて深く信敬を生じぬ。時に、諸の群臣前みて王に白して言さく「願くば王よ、今は、先の制限を改め諸の民衆をして如來を見奉るを得、意に隨つて供養せしめよ」と。尋いで、司官に勅し鼓を撃ち令を唱へ今より以去、諸の民衆諸の餚饍を設け佛に供養するを聽し已ると。

爾の時、世尊、卽便ち、其の爲めに種々に說法し給ふ。心開け意解け、須陀洹を得る者、斯陀含を得る者、阿那含を得る者、乃至、無上菩提心を發す者あり。時に、諸の比丘、是の事を見、已り、未曾有と歎じて、佛に白して言さく「如來、世尊、宿に何の福を植えて、乃ち、天帝をして斯供養を置かしめ給ふや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦に聽けよ、吾、當に汝等の爲めに分別解說すべし。『乃往、過去無量世の時、波羅㮈國に、佛ありて出世し給へり。號して[三]寶殿と曰ふ。諸の比丘を將ゐ遊行し、敎化し伽翅王の國に到り給ふ。（王）、佛の來至し給ふを聞き諸群臣を將ゐ世尊を迎ひ奉り、長跪して佛を請ずらく「三月我が四事の供養を受け給へ」と。佛、卽ち、「然なり可し」と（許し給ふ）。其の供を受け已り、佛、便ち、王の爲めに種々に說法し給ふに（王）、菩提の心を發せり。佛、王に記を授け給へり。「汝、來世に於いて、當に佛と作るを得べし。釋迦牟尼と號す。廣く衆生

【二】毘闍耶。梵名、Vaijayanta、轉輪王の宮殿。

【三】寶殿。梵名、(Ratnaçaila。)

を度し限量すべからず。」と。」

佛、諸の比丘に告げ給はく、「彼の時の伽翅王を知らむと欲せば則ち、我が身是れなり。彼の時の群臣とは今、諸の比丘、是れなり。皆、彼の時の、佛を供養するに由るが故に、無量世の中、地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上、人中常に快樂を受く。乃至、今は自ら成佛を致せり。故に、人・天、我を供養するなり。」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し、奉行せり。

## 十六、[一]佛、帝釋の形を現じ婆羅門を化するの緣

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

時に、彼國中、一[二]輔相あり。名づけて梨車と曰ふ。邪倒の見を信じて因果を信ぜず。阿闍世に敎へ反逆して父を殺し自ら立て﹅王と爲す。(王)、心に喜悅を懷き諸の臣民に勅し大會を施設し百千の諸婆羅門を聚集し、共に峻制を立つ。「往至して瞿曇の所に詣り所受を[三]諮稟するを聽さず」と。是の語を聞き已りて皆、復、往かず。每に、一時に於いて密かに共に聚會す。或もの說いて言ふ有り。「我が、韋陀經に說いて云く、瞿曇沙門は皆、是れ、我等天の大主なり。」と。今、共に名を稱へなば或は能く、來至し會所に詣らむ。我等、當に共に形盡るまで奉事すべし」と。是の語を作し已り、咸、共に名を稱す。「南無瞿曇沙門、來りて、此の會に趣き我等の請を受け給へ」と。

爾の時、如來、常に慈悲を以つて晝夜六時、「誰か、應に度す可きや、尋ね往いて之を度せむ」と。衆生を觀察し給ふ。諸の婆羅門、善根已に熟し應に、我が化を受くべきを知り給ひ、自ら、其の身を變じて帝釋の形と作し、虛空に乘じて來り、入りて婆羅門の會に赴き給ふ。各、起ちて奉迎し、命を請けて坐す。而して、是の言を作す。「我等、求むる所、今、悉く獲得たり。當に、共に形盡る



---

【一】佛現帝釋形化婆羅門緣。梵本:No. 17 Paṇavārgaka、五年の供養、如意樹譬喩第二十四。

【二】輔相。大臣宰相。

【三】諮稟。事をはかり命をうけること。

まで奉事すべし」と。帝釋、咸皆善と稱へり。爾の時、世尊、諸婆羅門の心、已に調伏せるを知り給ひ、復、本形に還り、其の爲めに應の如く四諦の法を說き給へり。心、開け、意、解け須陀洹果を獲、各喜悅を懷きぬ。並に共に百味の飮食を施設け佛、及び僧を請じ、供養し訖已りぬ。時に、諸の比丘、是の事を見、已り、前みて佛に白して言さく、「如來、往昔、宿、何の福を植え、乃ち、能く此の諸の婆羅門をして、諸の餚饍を設け佛と僧とに供養せしめ給ふや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく、「汝等、諦に聽けよ、吾、當に、汝等の爲に分別し解說すべし。『乃往、過去無量世の時、波羅㮈國に佛あり、出世し給へり。號して妙音と曰ふ。諸の比丘を將ゐ寶殿王の所に到り給ふ。(王)、佛の來至し給ふを聞き、諸の群臣と與に世尊を迎へ奉り、「三月我が四事の供養を受け給へ」と(請ふ)。佛、卽ち、「然なり可し」と(許し給ふ)。三月の中、王の供を受け已る。其の齋中に於て七寶の蓮華を出せり。その各に化佛あり、結跏趺坐し給ふ。大光明を放ち、上は[四]阿迦膩吒天より下は[五]阿鼻地獄に至る。時に、寶殿王、是の變を見已り、無上菩提心を發せり。佛、王に記を授け給ふやう「汝、來世に於いて、當に佛と作るを得べし。釋迦牟尼と號し、衆生を過度し限量すべからず」と。』

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の寶殿王を知らむと欲せば則ち我が身、是れなり、彼の時の群臣とは、今、諸の婆羅門、是なり。皆、彼の時、佛を供養するに由るが故に無量世の中、地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上・人中、常に快樂を受け、乃至、今は自ら、成佛を致せり。故に、人・天、來り我に供養するなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 十七、[一]乾闥婆、樂を作し佛を讚ずるの緣

【四】阿迦膩吒天。梵語、(Akanistha)、色究竟天のこと。色界十八天の最上天なり。

【五】阿鼻地獄(Aviciniraga)此地下の最底にあり無間地獄と譯す。

【一】乾闥婆作樂讚佛緣。梵本 No. 17 Stuti(讚嘆)。

佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中、五百の乾闥婆あり、善く巧みに琴を彈き樂を作し歌舞して如來を供養すること晝夜を離れず。名聞、遠徹し四方に達す。時に彼の城の南に乾闥婆王あり名づけて[二]善愛と曰ふ。亦、巧に琴を彈き樂を作し歌舞す。彼の土の中に於て更に[三]訓對するものなし。憍慢にして自らを大となす。更に比あることなし。其を聞き北方に乾闥婆あり、善く巧に琴を彈き樂を作し歌舞す。故に、彼より來り、諸土を涉歷し十六大國を經。一弦琴を彈いて能く、七種の音聲を出さしむ。聲に二十一解あり。時に、諸の人民、其の彈琴・作樂・歌舞を聞き歡娛して自ら樂み、狂醉放逸にして自ら制すること能はず。共に、相ひ隨逐して舍衛に來詣す。王に見ゆるを得て[四]致意問訊し技術を[五]角試せむと欲す。時に、[六]城郭神及び乾闥婆、王に啓白して言く「云に南方の國、乾闥婆王あり、名づけて善愛と曰ふ。快く能く琴を彈き樂を作し戲笑す、今、門外に在り、致意問訊すらく、云く、彼間に在りて遙に、王邊を承はるに乾闥婆あり、善く巧に琴を彈じ歌舞し戲笑す。今、何の許に在るや。我、今、當に共に技術を角試すべしと。」王、卽ち、答へて曰く、「我、相憚らず、此を去ること遠からず、我、今、汝と共に、彼に往至せんに隨意、角試せよ」と。時に、「王よ、然なり可し」と(答へて)、世尊の所に至る。佛、王の意を知り尋いで自ら、身を變じ、化して乾闥婆王と作る。天の樂神、[七]般遮尸棄を將ゐ其の數、七千なり。各々手に琉璃の琴を執り、左右に侍衞す。時に、波斯匿王、善愛に語りて言く「此、皆、是我が樂を作す諸神なり。汝、今、共に琴術を角試すべし」と。時に、善愛王、卽便ち、自ら一弦の琴を取りて之を彈鼓す。能く、七種の音聲を出さしむ。聲に二十一解あり。鼓を彈くに節、合し、甚だ聽聞すべし。能く、衆人をして歡娛・舞戲・昏迷・放逸にして自ら持すること能はざらしむ。爾の時、如來、復、槃遮の琉璃の琴を取り鼓の一弦を彈き給ふに能く、數千萬種(の聲)を出す。其の聲、婉妙、清徹にして愛すべし。聞く者、舞笑し、



【二】善愛。梵名、(Supriya)。
【三】訓對。いらへむかふこと。
【四】致意。已の意志をつたふること。
【五】角試。試合すること。
【六】城郭。城のくるわ。
【七】般遮尸棄。梵名、(Pañca-çipha)。

歡娛、愛樂し、喜び自ら勝ず。時に、善愛王、是聲を聞き已り、未曾有と歎じ自鄙み、慚愧す。先づ、彈く所の琴出す所の音聲卽便ち〔八〕引伏し、長跪し叉手すらく「請ふ、大師と爲れ、更に琴法を諸む」と。爾の時、如來、善愛王の我慢を除去し心、已に調伏するを見て本形に〔九〕還服するに諸の比丘僧、默然として坐せり。心、驚き毛竪つ。尋いで佛の前に於て深く信敬し長跪合掌せり。求めて〔一〇〕道次に入る。佛、卽ち、告げて言く、「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮、自ら落ち法服身に著き便ち沙門と成る。精懃、修習し、未だ久しからざるの間に阿羅漢果を得たり。時に、波斯匿王、善愛王の心、已に調伏し復、道果を得たるを見て、心に歡喜を懷き長跪して佛、及び比丘僧を請ず。佛、卽ち、「然なり可し」と(許し給ふ)。(王)諸の群臣に勅し、道路を平治し瓦・石・汚穢・不淨を除去し幢幡を建立し諸の寶鈴を懸け香水、地に灑ぎ衆の名華を散じ床・榻を安置し諸の餚饍を設け佛・僧を供養せり。

時に、諸の比丘、是の供養を見て未曾有と怪しみ佛に白して言さく「如來、世尊、宿に、何の福を植えて今は乃ち、是の如き音樂の如來を供養する有りて、終に遠離せざるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦に聽けよ、吾、當に、汝の爲に分別解說すべし。「乃往、過去無量世の時、波羅㮈國、佛ありて出世し給へり。號して正覺と曰ふ。諸の比丘を將ゐ遊行教化して梵摩王の國に至り、一樹の下に在りて結跏趺坐し火光三昧に入り、天地を照し給ふ。時に、彼の國王、諸の群臣、數千萬衆を將ゐ、城を出で、遊戲し、〔一一〕倡伎の樂を作し歌舞し戲笑す。遙に、彼佛及び比丘僧の、樹下に在り、結跏趺坐し光明赫弈として天地を照すこと百千日の如きを(見)。心に歡喜を懷き諸の伎女を將ゐ佛の所に往き到り、前みて佛の足を禮し樂をなして供養し、長跪して佛を請ずらく「唯、願くば世尊及び比丘僧、大慈、憐愍して來り宮中に入り我が供養を受け給へ」と。佛、卽ち、「然なり、可し」と(許し給ふ)。(王)諸の餚饍を設け、供養し訖已る。佛、

---

【八】引伏。しりぞけること。

【九】還服。かへりしたがふこと。

【一〇】道次。佛の道筋。

【一一】倡伎。うたひめ。

即ち、王の爲めに種々に法を說き給ふ。（王）、菩提心を發す。（佛）即ち、王に記を授け給ふ。「汝、未來世に於いて、當に佛と作るを得べし。釋迦牟尼と號し、廣く衆生を度し限量すべからず」と。』

佛、諸比丘に告ぐらく「彼の時の梵摩王を知らむと欲せば、則ち我が身、是なり。彼の時の群臣とは、今の諸の比丘是れなり。皆彼の時佛を供養するに由るが故に、無量世の中、地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上・人中、常に快樂を受け、乃至、今は自ら成佛を致せり。是の音樂にして我を供養し、終に遠離せざるなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 十八、[一]如願、當に刑戮せらるべきに臨み佛を求め出家するの緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中、一愚人有り、名づけて如願と曰ふ。殺生・偸盜・邪婬を好喜び人の爲めに糾告せらる。王、勅して收捕し繫縛して市に送り、行くに順ひ令を唱へ送りて殺處に至る。規として刑戮せんと欲す。世尊に値見して禮を作し[二]歸躬し具に罪狀を說く「今、當に死に就くべし、命在ること久しからず、唯、願くば世尊よ、大慈憐愍して我が爲に王に白し聽して出家せしめよ、死すとも復、恨みず」と。爾の時、如來、即便ち「然なり、可し」とし、阿難に告げて曰く、「汝、往いて波斯匿王に語る可し、云く吾れ今日、王從り、此の一罪人を乞索す、用て出家と爲さむと」。是の時、阿難、佛の敎勅を受け尋いで即ち往到り、波斯匿王に語る。「今日、世尊、王從り此一罪人を乞索し、用つて出家と爲さむ」と。王、佛の語を聞き、勅して罪人を放ち送りて世尊に與ふ。度して出家せしむ。精懃、修習、未だ久しからざる間に阿羅漢果を得たり。

時に、諸の比丘、是の如願の死に臨み脫することを得、出家未だ久しからざるに復、道果を獲た



【一】如願臨形戮求佛出家緣。梵本 No. 18 Varnda(如願)。

【二】歸躬。歸命の意。

るを、未曾有のことゝ歎じ、而して佛に白して言さく、「如來、世尊よ、宿何の福を殖えて出言し信用せられ、彼の罪人を救ひ身命を濟ふを得給へるや、不審なり、世尊よ、其事云何」と。

爾の時、世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等、諦に聽け、吾れ當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『乃往、過去無量世の時、波羅㮈國に佛有りて出世し給へり、號して[三]帝幢と曰ふ。諸の比丘を將ゐ諸の聚落に遊び、衆生を敎化し給ふ。其の路次に於て一仙人に値ふ、佛、世尊の[四]三十二相、八十種好を見奉るに光明暉曜し百千日の如し、心歡喜し、前みて佛足を禮し請命して座に就く。諸の餚饍を設け佛を供養し已る。因つて發願して言く、「我をして來世、出言し信用せしめよ」と。佛、卽ち答へて言く、「汝の求むる所をして必ず願の如く得せしめむ、我の如く今者異なり有ること無きなり」と。時に、彼の仙人、佛語を聞き已り、卽ち佛前に於て、無上菩提の心を發せり。卽ち授記を爲し給ふ。「汝、來世に於て當に作佛を得べし、釋迦牟尼と號し、廣く衆生を度し限量すべからず」と。』

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の仙人を知らむと欲せば則ち我身是れなり、我、過去に佛を敬順するを以ての故に今者、出言して信受せられざる無く、彼の罪人を救ひ身命を免れしめ、及び道果を獲せしむることを得たり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 十九、[一]頻婆娑羅王佛を請ずるの緣

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

爾の時、[二]頻婆娑羅王、十二億[三]那由他の人を將ゐ佛の所に往詣し前みて佛足を禮し、長跪して佛を請ず「唯、願くば世尊よ、大慈憐愍し、諸の比丘を將ゐ、我が終身の四事供養を受け給へ」と。

---

【三】帝幢、梵名(Indradhvaja)

【四】三十二相。三十二大人相といふ、此三十二相は佛に限らず總ての大人の相なり、此相を具するものゝに在りては轉輪王となり家を出づれば無上覺を開くといふ。是れ天竺國の人相說なり、それに三十二の相を數ふ。八十種好とは、八十隨形好ともいひ三十二相を更に細別せしものなり。

【一】頻婆娑羅王請佛緣。梵本 No.19 Kāçikā-Vastram(迦尸の衣)二十二譬喩第九。

【二】頻婆娑羅王、梵名(Bimbisāra)佛在世摩竭陀國王の名、逆子阿闍世の爲に幽閉せられ後死す。

【三】那由他、梵語(Nayuta)數目の名、億に相當す。

佛、許可し給はず。復、佛に白して言さく「我が終身の供養を受け給はざれば當に十二年受け給へ」と。佛亦許し給はず。復、佛に白して言さく「若し我が十二年を受け給はざれば當に十二月を受け給へ」と。佛、亦許し給はず。復佛に白して言さく「若し十二月を受け給はざれば當に三月四事の供養を受け給へ」と。佛、卽ち、「然なり可し」と(許し給ふ)。(王)、諸の臣民に勅して道路を平治し瓦・石・汚穢・不淨を除去し幢幡を建立し、諸の寶鈴を懸け、香水を地に灑ぎ、諸の妙花を散ず。床・榻を安置し臥具・被褥・餚饍を備辦す。諸の群臣を將ゐ各々蓋を執り佛と衆僧を蓋ひ王舍城に入る。足、門閫を蹈むや地大いに震動し城中の寶藏自然に涌出す。盲者は視ることを得、聾者は聽くことを得、啞者は能く言ひ、躄者は伸すことを得たり。貧者は寶を得、空中の伎樂、鼓せずして自ら鳴る。象・馬・衆鳥、相和して悲鳴す、虛空の中、衆くの妙華を雨し王宮に至りぬ。諸の餚饍、百味の飮食を設け佛と僧を供養し、三月を經て王供を受け已り、佛、卽ち王の爲めに種々に說法し給ふ。(王)、心に喜悅を懷き、卽ち、迦尸育衣を以つて佛及び僧に施し、退きて一面に坐す。

時に諸の比丘、而ち佛に白して言さく「如來、世尊、宿に何の福を植え乃ち斯の如き上妙の供養を獲給へるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽けよ、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『乃往、過去無量世の時、波羅㮈國に佛有りて出世し給ふ、號して差摩と曰ふ。諸の比丘を將ゐ遊行し敎化して寶勝國に到り給ふ。王を伽翅と名づく。佛の來至し給ふを聞き、心に歡喜を懷き、諸の群臣を將ゐ城を出でゝ迎へ奉り前みて佛足を禮し長跪して佛を請ず「唯、願くば世尊よ、慈哀憐愍して我が供養を受け給へよ」と。佛、卽ち「然なり可し」と(許し給ふ)。(王)、諸の餚饍を設け佛を供養し已り。渴仰して法を聞く佛、卽ち、王の爲に種々に說法し給へり。(王)、心に歡喜を懷き、卽ち佛前に於て、無上菩提の心を發しぬ。佛、王に記を授け給へり。「汝、來世に於て當に

【四】榻、こしかけ。

【五】門閫、門のしきみ。

【六】躄者。ゐざり。

【七】迦尸育衣。梵名(Kāśikavastra. 迦尸育地方の衣。

【八】差摩。梵名(Kṣemaṅkara)。

佛と作ることを得べし、釋迦牟尼と號し、衆生を利安し限量すべからず」と』。
佛、諸の比丘に告げ給はく、「彼の時の伽翅王を知らむと欲せば則ち我身、是れなり。彼の時の諸臣とは今の諸の比丘是れなり、彼の時に佛を供養するに由るが故に、無量世の中、地獄・畜生・餓鬼に墮せず天上・人中、常に快樂を受け乃至、今者、自ら成佛を致せり。故に人・天來り我に供養するなり」と。
爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 二十、[一]帝釋迦蘭陀竹林を變ずるの緣

佛、王舍城迦蘭陀竹林に在しき。
時に、彼の城中に一長者有り、名けて瞿沙と曰ふ。財寶量無く、稱計ふ可からず、然れども、彼の長者邪倒の見を信じ、外道に奉事し佛法を信ぜず。時に[二]大目連、彼長者を觀るに、極めて邪見を生じ三塗に墜ち拔濟す可ざるを畏る。憐愍の心を生じ卽ち方便を作して帝釋に告げて言く「汝、今、迦蘭陀竹林を變じて七寶と作さしむべし」と。諸天の宮殿と等しく異り有ること無く。諸の寶蓋と諸の寶鈴とを懸け諸天、妙華を以つて其の地に散じ、天の須陀食自然に備はり佛と僧を供養する有り、[三]伊羅鉢龍、幡蓋を執持し佛の頂上を蓋ふ。又諸龍王各々、種々の幡蓋を執持し、諸の比丘を蓋ふ。舍尸夫人諸の[四]婇女を將ゐ、各々扇を執り、佛の左右に在り扇を執つて佛を扇ぎ奉る。[五]般遮尸棄、乾闥婆衆、天の伎樂を作し以て佛を娛樂せしむ。
時に、彼長者其是くの如きを見て、未曾有と歎ず。卽ち、佛の所に於て深く信敬を生じ、佛の所に往詣し「唯、願くば世尊よ、慈哀憐愍して我が供養を受けよ」と。佛、默然として許し給ふ。還りて家の中に至り飲食を設供し使を遣し、佛に白さく「食具、已に辦ぜり、唯、聖よ時を知り給へ」と。

---

【一】帝釋變迦蘭陀竹林緣。梵本 No.20 Divgabhojana。(天の飲食)阿育譬喩第十五、二十二譬喩の第十二。
【二】大目連、梵名 (Mahā-Maudgal-yāyana.)。佛、十大弟子の一、神通第一。
【三】伊羅鉢龍、梵名 (Erā-patta.)。一龍王の名。
【四】婇女。女官。
【五】般遮尸棄。梵名(Pañca-sipha.)。五髻と譯し、鼙婆の名手。

爾の時、世尊、衣を著け鉢を持し諸の比丘を將ゐ其の家に往き至り、其の供を受け已り給ふ。佛、卽ち、其の爲めに種々に說法し給ふに、心開け意解け須陀洹果を得たり。時に諸の比丘、此の神變、斯の如き供養を見て、未曾有と怪しみ而して佛に白して言さく「如來、世尊、宿に何の福を植え、乃ち斯の報を獲給へるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦に聽けよ、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『乃往、過去無量世の時、波羅㮈國に佛有りて出世し給へり、號して〔六〕滿願と曰ふ。諸の比丘を將ゐ遊行し敎化し、梵摩王國に到り給ふ。佛の來至するを聞き、(王)諸の群臣を將ゐ、城を出て奉迎し前みて、佛足を禮し長跪して佛を、請ぜり。「唯、願くば世尊よ、我が供養を受けよ、」と。佛、卽ち、「然なり可し」と(許し給ふ。王)、諸の群臣に勅し種々の百味飮食を施設し供養し訖已りぬ。佛、卽ち王の爲めに種々に說法し給ふに菩提心を發せり、卽ち王に記を授け給ふ。「汝、來世に於て當に佛と作るを得べし、釋迦牟尼と號し、廣く衆生を度し限量すべからず」と。』

佛、諸比丘に告げ給はく、「彼の時の梵摩王を知らむと欲せば則ち我身是れなり、皆、彼の時、佛を供養するに由り無量世の中、地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上・人中常に快樂を受け乃至今者自ら成佛を致せり、故に人・天、來りて我に供養するなり」と。

爾の時、諸比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 撰集百緣經卷第二



【六】滿願。梵名(Pūrṇa.)。

# 卷の第三

## 授記辟支佛品第三

### 二十一、[1]王子に化生して辟支佛と成るの緣

佛、摩竭提國に在しき。

諸比丘を將ゐ漸次遊行し恒河の側に到り、一[2]故塔の毀落崩壞するを見給ふ。人の修治する無し。時に諸の比丘、佛に白して言さく「世尊よ、此れは是れ、何の塔ぞや、朽故、乃ち爾なり、人の補治する無きや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく、「汝等諦かに聽けよ、吾、當に汝等の爲に分別解說すべし。「此の[3]賢劫中、波羅捺國に王有り、[4]梵摩達多と曰ふ。正法に依りて、治化し、人民熾盛極めて大豐樂なり。[5]兵革・軍征・鬪諍・災疫・疾病有ること無く、諸の象・馬・牛・羊六畜及び諸の珍寶に饒なり、唯、子息無く、神祇を禱祀し子有ることを求索し、叵に得ること能はず。時に、王の薗中、一池水あり。好き蓮華を生じ、其花開敷し、(中に)、一小兒有り、結跏趺坐す。三十二大人の相、八十種好有り、口、[6]優鉢羅花の香を出し、身の諸の毛孔に栴檀の香有り。時に、池を守る人、狀を以て王に白しぬ。甚だ歡喜を懷き共の后妃を將ゐ往いて薗中に到る。此の小兒を見て、喜び自ら勝へず、前みて抱取らむと欲す。兒、便ち王の爲に偈を說きて言く。

大王常に求むる所　故に來りて王の願を稱へり　子息無きを見る故に、　今、來りて王子と爲る、と。

爾の時、大王、后妃、婇女、此の說くを聞き已り、歡喜ばざる莫し。即ち小兒を抱へ宮に還り養育

---

【一】化生王子成辟支佛緣。梵本 No.21 Candana.（白檀）如意樹譬喩第四、二十二譬喩第二十二。

【二】故塔。塔は梵語(Stūpa)佛物又は經文を奉安し、又死者生存者の德を紀念する爲に舍利・牙・髮等を埋め金石土木を以て築造せしもの、大聚、方墳、靈廟、高顯處、功德聚等譯す。故は古なり、ふるき塔。

【三】賢劫。梵語（Bhadra-Kalpa.）現在の住劫をいふ。

【四】梵摩達多。梵名（Brahmadatta.）。

【五】兵革。兵器。

【六】優鉢羅花。梵名(Utpala.)青蓮花。

す。年漸く長大し、其行く處に隨つて蓮花を生ずる有り、身の毛孔の中に栴檀の香有り、因りて爲に字を立て、(七)梅檀香と名く。時に、此小兒、尋いで自ら觀察するに足跡行く處、出づる所の蓮華、初めは則ち鮮好、未だ久しからざるに萎落す。便ち自ら思惟すらく、我れ今此身、會して當に死に歸すべき。爾と心、非常を悟り辟支佛と成る。身虛空に昇り十八變を作し、尋いで涅槃に入りぬ。

爾の時、大王、后妃、婇女、天に(八)號して涕哭す、其尸骸を攝めて(九)耶旬し之を燒く(一〇)舍利を收取し塔を起し供養す。是故に今者、是れ彼の塔耳』と。

時に、諸の比丘、復佛に白して言さく「此の辟支佛宿に、何の福を植えて、斯の果報を受くるや、唯、願くば世尊よ、敷演、解說し給へ」と。

爾の時、世尊、諸比丘に告げ給はく、「汝等、諦かに聽けよ、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし」と。『乃往、過去無量世の中、波羅㮈國に佛有りて出世し給へり、號して(一一)迦羅迦孫陀と曰ふ。彼の法中に於いて一長者有り、財寶、量り無く稱て計ふべからず。其父、崩亡す、子、其母と各自、分居す。時に長者の子、甚だ色欲を好み、一婬女を見て甚だ其の惡を適らにす。金百兩を以つて方に一宿を聽す。漸く多年を經て財物蕩盡し、更に與ふる所無ければ、遮りて宿するを聽さず、慇懃に求請す「願くば一宿を見む」と。婬女、語りて言く、「汝、今、若し能く一好花を得、來りて我に與へなば汝に一宿を聽さむ」と。時に長者の子、每に自ら思惟すらく「我、今家中に財物用つて花を買ひ、以つて婬女に遺るべきもの有ること無し」と。是を思惟し已り、「今、王塔の中、必ず好花有らむ、我、當に盜み取り、持用して之を與ふべし。止宿するを得べけむ」と。然れども、彼の塔門、人有りて守護し、前むことを得るに由し無し。尋で(一二)伏竇從り、其塔中に入り好花を盜み取り以つて婬女に與ふ。乃ち、止宿を聽す。天明に至り、其人の身體諸の惡瘡を生じ甚だ苦惱し患ふ、

【七】梅檀香。梵名(Candana.)。
【八】號。大いに叫ぶ、元。明本による。
【九】耶旬。梵語(Jhāpita.)譯、焚燒、荼毘のこと。
【一〇】舍利。遺骨。
【一一】迦羅迦孫陀佛(Krakusandha)。
【一二】伏竇。水道。

痛み言ふべからず。諸の良醫を喚び、以つて瞻て療治せしむ。云く「牛頭栴檀を須ひ用つて瘡の上に塗らば除愈を得べし」と。時に長者の子深く自ら思惟す。家に財物無し、卽ち舍宅を賣り、六十萬金錢を得たり。尋で用て卽ち牛頭栴檀を買ひ方に六兩にて得たり。頓に用て瘡に塗る。良醫に語りて言く「我今、患ふ所、乃ち是れ心の病ひなり、汝、今外を治す、乃ち差すべき乎」と。是の語を作し已り、卽ち買ひし所の牛頭栴檀を持し、[三]搗末の六兩、其の塔中に入れ大誓願を發すらく。「如來、往昔、諸の苦行を修し、誓つて衆生を度し、其の厄難に隨ふ、我れ今此の身、[四]一生の數に墮す唯、願くば世尊よ、慈哀憐愍して、我が此の患ひを除き給へ」と。是の誓を作し已り、卽ち、[五]持つ所の牛頭栴檀二兩を以用つて花の價二兩を償ひ、至心に二兩を供養し、求哀懺悔す。瘡尋いで除愈せり。身の諸の毛孔に栴檀の香あり、此の香を聞き已り、喜び自ら勝えず。發願し出で去れり。是の功德に緣つて惡趣に墮せず、天上・人中、其の行く處に隨つて、好蓮華を生じ、身の諸毛孔に恒に香氣有り』と。

佛、諸比丘に告げ給はく「彼の時の長者の子の栴檀にて、塔を塗る者を知らむと欲せば、今此の辟支佛是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き、歡喜し奉行せり。

## 二十二、[一]小兒散花し佛を供養するの緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、世尊、諸の比丘を將ゐ衣を著け鉢を持ち、城に入り乞食し一巷中に至り給ふ。一婦女有り一人の小兒を抱へ、巷に在りて地に坐す。時に、彼の小兒、遙に世尊を見奉り、心に歡喜を懷き、母從り花を索む。母、卽ち買ふことを與す。小兒、得已り、持ちて佛の所に詣り、佛の上に散じぬ。

---

【三】搗末。聚めし殘りの一部。
【四】一生。一生涯の間前生の惡因によりて其に應ずべき惡報を受けたる身を云ふ。
【五】持。聖本による。

【一】小兒散花供養佛緣。梵本 No.22 Padma（紅蓮華）如意樹譬喩第十三。

虚空の中に於て變じて花蓋と成り、佛の行住に隨ふ。小兒、見已りて甚だ大いに歡喜び、大誓願を發すらく「此の供養の善根功德を以つて、我をして來世、正覺を成ずるを得せしめ、衆生を過度し佛の如く異なること無からん」と。

爾の時、世尊、此の小兒の是の願を發すを見已り、即ち微笑し給へり。其の面門より五色の光を出し、佛を繞ること、三匝にして還び頂より入る。爾の時、阿難、前みて佛に白して言さく「如來は尊重なり、妄りに笑ふこと有らず、何の因緣を以つて今は微笑し給ふや、唯、願くば世尊よ、敷演、解說し給へ」と。

佛、阿難に告げ給はく「汝、今此の小兒、花を以て我に散ずるを見るやいなや」と。阿難、白して言さく「唯然なり、已に見たり」と。「此の兒は花を以つて我に散じぬ。未來の世に於て惡趣に墮せず、天上・人中、常に快樂を受く、三阿僧祇劫を過ぎて成佛し、號して、花盛【二】と曰ふ。廣く衆生を度し限量すべからず、是の故に笑ふ耳」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き、歡喜し奉行せり。

## 二十三【一】、女人金輪を以て佛上に擲つの緣

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

時に、彼の國中、一商主有り、名づけて浮海と曰ふ。諸の商客を將ゐ大海の中に入り、其の珍寶を採る。其の婦少壯にして、容貌觀るべし。其の夫を憶望して晝夜、愁ひ念ふらく「速に家に還ることを得よ」と。即便ち、那羅延天【二】の所に往詣して呪を作して言く、「天、若し神有り人の願を違えず、我が夫主をして安穩にして速に還らしめなば、我、今當に金銀瓔珞【三】を作り、以つて天恩に報ずべし。若し還らざれば、我、糞・屎・不淨・臭處を以つて天身を毀辱せむ」と。是の誓を作し已り、



【二】花盛。梵名（Padmottara.）。

【一】女人以金輪擲佛上緣。梵本23 Cakra（輪）寶石譬喩第三。

【二】那羅延天。梵天王の異名なり。

【三】瓔珞。くびかざり。

未だ幾の時を經ざるに、果して、其の願の如く、(その夫)安穩にして家に還る。甚だ歡喜を懷く。即ち金銀瓔珞【四】環釧を造り、諸の侍從を將ゐ、天祠に往詣す。路に、如來、諸の比丘を將ゐ王舍城に入り給ふに値ふ。時に、彼女人、佛、世尊を見奉るに三十二相八十種好、光明普く曜き百千の日の如し。心に歡喜を懷き、金銀瓔珞を以つて、佛上に擲散さむと欲す。其の從ふ者語りて言く、「此は那羅延天に非ず」と遮りて聽さず。時に、彼の婦女、其の教に從がはず、即ち、瓔珞を以つて佛の上に擲散す。虛空の中に於いて、變じて寶蓋と成り、佛の行住に隨ふ。是の變を見已りて深く信敬を生じ、五體を地に投げ、大誓願を發すらく「我、今、此の佛に瓔珞を散ずるの善根功德を以つて、我をして、來世正覺を成ずるを得せしめ、廣く衆生を度し、佛の如く異ること無らむ」と。是の願を發し已る。佛、即ち微笑し給ふ。其の面門從り五色の光を出し、佛を繞ること三匝にして還び頂より入る。

爾の時、阿難、前みて佛に白して言さく「如來は尊重なり、妄りに笑ふこと有らず、何の因緣を以つて今は微笑し給ふや、唯、願くば世尊よ、敷演解說し給へよ」と。佛、阿難に告げ給はく「汝、今に於いて此の婦女、金銀・瓔珞を以て、我が上に散ずるを見るやいなや」と。阿難、白して言さく「唯、然なり已に見たり」と。「此の婦女は未來の世に於いて惡趣に墮せず、天上・人中、諸の快樂を受く。十三劫を過ぎて佛と成り。號して金輪瓔珞と曰ふ。廣く衆生を度し、限量すべからず。是の故に笑ふ耳」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 二十四、老母、善愛、慳貪の緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

【四】環釧。環は玉の輪、釧はうで輪。

時に、彼の城中、波斯匿王の后宮の婇女、名けて善愛と曰ふ。年老邁に在りて極めて大慳貪なり。惠施するを好まず。却いて坐して飲食す。

時に、大目連、彼を化せむと欲するの故に、衣を著け鉢を持し、神通力を以つて地從り踊り出でて老母の前に住し、其從り食を乞ふ。老母、瞋恚し布施するを肯ぜず。飲食、已に訖り、一殘果及び洗器の水有り、臭くして噉はず、爾の時、目連、即ち從ひて乞索す。老母瞋恚し、尋で即ち、持[一]ちて與へぬ。目連、得已り身を虚空に踊らし、十八變を作す。時に、彼老母是の變を見已り、心に信敬を懷き、歸誠し懺悔す。即ち、其の夜に於いて、便ち、命終を取り、曠野の中に生れ、一樹下に在り、果を食し水を飲み以つて自ら存活す。數時を經て、波斯匿王、諸の群臣を將ゐ遊獵し射戲し、群鹿を馳逐し渴乏し、死せむと欲す。遙に彼の樹を見て希望し水を求め馳奔し趣き向ひぬ。樹を去ること遠からずして、火炎の起る有り、遮りて近づくことを聽さず、但、遙に人の其の樹下に坐するを見るのみ。王、即ち、遙に問ふ。「汝は是れ何人ぞ、此の樹下に在るや」と。彼、即ち答へて言く、「我は是れ波斯匿王の后宮の婇女なり、年老[二]いて朽邁し、名を善愛と曰ふ。惠施するを好まず。命終して此に生れたり。唯、願くば大王よ、慈哀憐愍して我が爲めに供を設け、佛及び僧を請じ、我をして、此の弊惡の身を脱せしめよ」と。王、即ち、問うて言く「汝の爲めに福を設けなば知ることを得べきやいなや」と。彼の人答へて言く「福を設けなば必ず得む、王、自ら當に見るべし」と。

爾の時、波斯匿王是の語を聞き已り、諸の兵衆に勅す。「相去ること百步にして一人を安置し、聲をして相承けしめ城內に還歸し、其の爲に供を設け、佛及び僧を請ず。若し彼れ福を得れば、諸の兵衆、各〻聲を承け、須臾にして我に聞かしめ、虛實を知らしめよ」と。尋いで即ち設を爲し、佛及び僧を請じ、呪願し已に竟りぬ。彼の樹下の人、百味の飲食、自然に前に在り。彼の波斯匿王、

【一】持。宋・元・明・聖本による。

【二】老。聖本による。

已に知り實と爲す。即ち佛の前に於いて深く信敬を生ず。佛、爲めに說法し給ふに須陀洹果を得たり。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き、歡喜し奉行せり。

## 二十五、[一]含香長者、佛を請ずるの緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中、一長者有り、名を含香と曰ふ。財寶量り無く、稱て計ふるべからず。稟性、賢柔にして、[二]三寶を敬信す。每に自ら思惟すらく「我、今、此の身及び諸の財寶、虛僞にして眞に非ず、水中の月の如く、熱時の炎の如く、久しく保つべからず」と。是の念を作し已りて、佛の所に往詣し、前みて佛足を禮し、却いて一面に住し、佛に白して言さく、「我、供を設けて佛及び僧を請ぜむと欲す、唯聽許を垂れ給へ」と。佛、即ち、「然なり可し」と(許し給ふ)。家の中に還歸して、諸の餚饍を設け、使を遣はし佛に白さく「食具、已に辦ぜり、唯、聖よ、時を知り給へ」と。爾の時、世尊、衣を著け、鉢を持ち諸の比丘を將ゐ、其の家に往詣し、其の供を受け已り給ふに、心、歡喜を懷き、一小床を取り、佛前に在りて坐し、渴仰して法を聞く。佛、即ち其の爲に種々に說法し給ふに心開け、意解け、因つて誓願を發すらく「此の供養の善根功德を以つて、我をして來世に正覺を成ずることを得、廣く衆生を度し、佛の如く異ること無からん」と。是の願を發し已り、佛、便ち微笑し給ふ。其の面門より五色の光を出し佛を繞ること三匝にして還び頂より入る。

爾の時、阿難、前みて佛に白して言さく「如來は尊重なり、妄りに笑ふこと有らず。唯、願くば世尊よ、敷演し解說し給へ」と。

佛、阿難に告げ給はく「汝、今、此の含香長者、諸の餚饍を設け佛と僧とに供養するを見るやい

---

【一】含香長者請佛緣。梵本 No.25 Sūkşmatvāk。

【二】三寶。佛寶・法寶・僧寶の三つの寶。

なや」と。阿難、佛に白さく「唯、然なり、已に見たり」と。「此の大長者、此の供養の善根功德を以つて、未來世九十劫中に於いて地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上・人中、常に快樂を受く。最後の身に於て、辟支佛と成るを得。號して、含香と曰ふ。廣く衆生を度し、限量すべからず、是の故に笑ふ耳」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き、歡喜し奉行せり。

## 二十六、[一]船師、佛、僧を渡し水を過るの緣

佛、摩竭提國に在しき。

諸の比丘を將ゐ、漸次、遊行し恒河の側に到る。

時に、船師有り、河の邊りに住在す。佛、船師に告げ給はく「汝、今、我が爲めに諸の衆僧を渡せよ」と。船師、答へて曰く「我に[二]價直を與へよ、然らば、後當に渡すべし」と。佛、船匠に告げ給はく、「我も亦船師なり、三界の中に於て、互に相ひ濟度す、生死の海を出づるも亦快ならずや。[三]鴦掘摩羅の瞋恚熾盛にして人民を殺害するが如きも我、亦彼を度して生死海を出せり。[四]摩那答陀の極めて大憍慢にして他人を卑下せるが如きも、我、亦彼を度し、生死海を出せり。[五]憂留頻螺迦葉の愚癡偏多にして智慧有ること無きが如きも我、亦彼を度し生死海を出せり。是の如き等比の無量の衆生、我亦皆度し、生死海を出せり。盡く直を索めず。汝、今、何の故に特に我從り索め、然る後、人を渡すや」と。爾の時、世尊、是の如く種々說法し給ふも、心、遂に堅固にして渡すことを肯ぜず。

時に、河の下流に、復、船師有り、佛の說き給ふ所を聞き、心に歡喜を懷き、便ち前みて白して言さく「我、今、佛の爲めに諸の衆僧を渡さむ」と。佛、即ち、「然なり可し」と許し給ふ。船舫を



【一】船師渡佛僧過水緣。梵本No.27 Nāvikā(船師)。

【二】價直。金錢。

【三】鴦掘摩羅。梵名(Aṅgu-limāla.) 指鬘(外道)と譯、歸佛前、外道の師の夫人との因緣により殺人し、指を切り鬘としたるより、此の名あり。

【四】摩那答陀。梵名 (Mā-nast≡bdha.)。

【五】憂留頻螺迦葉。梵名(Uruvilavbgāśyapa.)。

莊嚴し、僧を喚び船に乘す。時に、諸の比丘、或は虛空に在り、或は中流に在り、或は彼岸に在りき。時に、諸の船師、佛及び僧、是の如き等の神變を現ずるを見て、甚だ信敬を懷き、未曾有と歎じ、佛、僧を敬禮しぬ。佛、卽ち其の爲めに種々に說法し給へり、心開け意解け、須陀洹果を得たり。

時に、前の船師の價直を索むる者、後の船師の佛と僧とを渡し竟るを見、復神變を見て、深く慚愧を生じ、卽便ち五體を地に投じ、歸誠して佛に[六]白し至心に懺悔し、「佛及び僧を請ぜむ」と(請ふ)。佛、卽ち、「然なり、可し」と(許し給ふ)。家中に還歸りて諸の餚饍を設け、手、自ら斟酌し、佛と僧とに供し已り、一小床を取り、佛前に在りて坐す。渴仰して法を聞く。佛、卽ち、其の爲めに種々に說法し給ふに、心開け意解け、因つて誓願を發すらく「此の供養の善根功德を以つて、我、來世に正覺を成ずることを得、廣く衆生を度し、佛の如く異ること無からむ」と。是の願を發し已る。佛、便ち微笑し給ふ。其面門より五色の光を出し、佛を繞ること三匝にして還び頂より入りぬ。

爾の時、阿難、前みて佛に白して言さく「如來は尊重なり、妄りに笑ふことあらず、何の因緣を以て、今は微笑し給ふや。唯、願くば世尊よ、敷演解說し給へ」と。佛、阿難に告げ給はく「汝、今、此の船師、慚愧、自責して供を設け懺悔するを見るやいなや」と。阿難、白して言さく「唯、然なり、已に見たり」と。「彼の船師は是の懺悔し供を設けし功德を以つて、未來世に於いて十三劫を經て地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上・人中、常に快樂を受け、最後の身に於いて辟支佛と成るを得。號して[七]度生死海と曰ふ。廣く衆生を度し限量すべからず、是の故に笑ふ耳」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き、歡喜し奉行せり。

## 二十七、[一]婢使、栴檀香を以て佛足に塗るの緣

---

【六】白。宋・元・明本による。

【七】度生死海、梵名(Saṃsārottaraṇa.)。

【一】婢使以栴檀香塗佛足緣。梵本 No.28, Gandamādana.

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

時に、彼の城中、大長者有り。一婢使有り、禀性賢善にして三寶を敬信せり。毎に、一時に於て其の大家の爲めに栴檀香を〔二〕摩り暫く門外に出で、佛、世尊の衣を著け鉢を持ち、諸の比丘を將ゐ、城に入り乞食し給ふを見奉れり。心に喜悦を懷き、尋いで還りて内に入り、少しく栴檀を取り、佛の足の上に塗りぬ。佛、神力を以て此の香雲をして靉靆、垂布して王舍城に遍ねからしめ給ふ。時に、彼の女人、是の變を見已り、倍信敬を生じ、即便ち身を以て五體を地に投げ、因つて誓願を發すらく。「此の香氣の供養の功德を以て我、來世永く貧窮下賤の身を離れ、早く正覺を成じ廣く衆生を度し佛の如く異ること無からむ」と。是の願を發し已る。佛、便ち微笑し給へり。其面門より五色の光を出し、佛を繞ること三匝にして還び頂より入りぬ。

爾の時、阿難、佛に白して言さく「如來は尊重なり。妄りに笑ふことあらず、何の因緣を以つて今者微笑し給ふや、唯、願くば世尊よ、敷演し解說し給へよ」と。佛、阿難に告げ給はく「汝、今、是の長者の婢使、栴檀香を以つて我が足に塗るを見しやいなや」と。阿難、白して言さく「唯、然なり已に見たり」と。「此の長者の婢、栴檀香を我が足の上に塗りて善根功德を以つて未來世九十劫中に於いて、身體香潔にして地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上・人中、常に快樂を受け、最後の身を受けて辟支佛と成ることを得。〔三〕栴檀香と號す、廣く衆生を度し限量すべからず、是の故に笑ふ耳」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き、歡喜し奉行せり。

## 二十八、〔一〕貧人拔提、佛に樵木を施すの緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。



【二】摩。明・聖本による。

【三】栴檀香。梵名、(Gandha-mādana.)。

【一】貧人拔提施佛樵木緣。梵本 29. Nirmala.(離垢)。

時に、彼の城中に一貧人あり、名を拔提と曰ふ。他の爲めに園を守り用て存活す。每に、一日に於て一[二]樵木を擔ひ城に入り、賣らむと欲す。城門の中に値ふて一人の化人を見る。貧人に語りて言く「汝、今、若し能く此の持つところの樵木を用つて我に與へなば我當に、汝に百味の飲食を施すべし」と。時に彼の貧人、化人の語を聞き心に歡喜を懷き、卽便ち木を以つて化人に授與せり。化人答へて曰く「汝、今木を持ち、我に隨從ひ來れ、共に祇洹に詣り當に汝に食を與ふべし」と。時に彼の貧人、卽ち相ひ隨逐して祇洹の中に到る。佛、世尊を見奉るに三十二相八十種好、光明普く曜き百千の日の如し。心に歡喜を懷き前みて佛足を禮し、卽ち樵木を以つて世尊に奉施す。世尊、受け已り、地中に挿著し給ふ。佛、神力を以つて此の樵木をして須臾の間に枝條生長し花果茂り盛え團圓として愛すべし、尼拘陀樹の如し、世尊下に在り結跏趺坐し諸の人・天百千萬衆の爲めに妙法を演說し給ふ。貧人見已り心に喜悅を懷き、卽便ち身を以つて五體を地に投じ大誓願を發すらく、「此の佛に樵木を施すの功德を以て我、來世正覺を成ずるを得、廣く衆生を度し佛の如く異ること無からむ」と。是の願を發し已りぬ。佛、卽ち微笑し給へり。其の面門より五色の光を出し佛を繞ること三匝にして還び頂より入りぬ。

爾の時、阿難、前みて佛に白して言さく「如來は尊重なり、妄りに笑ふこと有らず、何の因緣を以つて今は微笑し給ふや、唯、願くば世尊よ、敷演し解說し給へ」と。佛、阿難に告げ給はく「汝、今、是の守園の貧人、我に樵木を施すを見るやいなや」と。阿難、白して言さく「唯、然なり已に見たり」と。彼の貧人は信敬の心にて、我に樵木を施せし善根功德を以つて、未來の世に於て、十三劫を經て地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上・人中、常に快樂を受く。最後の身に於て、辟支佛を成ずることを得。號して[三]離垢と曰ふ、廣く衆生を度し限量すべからず、是の故に笑ふ耳」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

---

【二】樵木。宋・元・明・聖本による。たきゞのこと。

【三】離垢、梵名(Nirmala)。

## 二十九、作樂供養し辟支佛と成るの緣[1]

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の國中の豪貴の長者、各自に莊嚴り。好服を著し瓔珞・環・釧を飾りて香・花を齎持し、[2]倡伎の樂を作し、皆、共に相將ゐて城外に出で丶遊戲し、自ら樂しまむと欲せり。城門の中に到り、佛、世尊、諸の比丘を將ゐ、衣を著け鉢を持ち城に入り乞食するに値ひぬ。

時に、彼の諸人、佛、如來を見奉るに[3]圓光、[4]晃昱し、三十二相、八十種好、光明暉曜し、百千の日の如し。各 歡喜を懷き前みて佛の足を禮し、倡伎の樂を作し佛と僧とに供養す。各 捉る所の種々の雜花を以つて佛の上に散ず、虛空の中に於いて變じて花蓋と成り、佛の神力によつて、遍く舍衞を覆ふ。時に、諸人等是の變を見已り、未曾有と歎じ、即便ち身を以つて五體を地に投じ、因つて誓願を發すらく「此の倡伎の樂を作すの善根功德を以つて我正覺を成ずるを得、廣く衆生を度し佛の如く異ること無からむ」と。是の願を發し已る。佛、即ち微笑し給ふ。其の面門より五色の光を出し、佛を繞ること三匝にして還び頂より入りぬ。

爾の時、阿難、前みて佛に白して言さく「如來は尊重なり、妄りに笑ふことあらず、何の因緣を以つて今は微笑し給ふや、唯、願くば世尊よ、敷演し解說し給へよ」と。佛、阿難に告げ給はく、「汝、今此の諸人等を見るやいなや」と。阿難白して言さく「唯、然なり、已に見たり」と。「此の諸人等、其の作樂、散花供養の善根功德を以つて、未來の世に於いて一百劫中、地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上・人中、常に快樂を受く。最後身、辟支佛と成るを得む、皆、同一に號す、名を[5]妙聲と曰ふ。廣く衆生を度し限量すべからず、是の故に笑ふ耳」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。



【一】作樂供養成辟支佛緣。梵本 No.30. Valpuvara. 阿育譬喩第十六。

【二】倡伎樂音樂。特に女樂のこと。

【三】圓光。佛・菩薩の頭首に於ける常光。

【四】晃昱、かゞやく貌。

【五】妙聲。梵名（Valgu-varah）。

## 三十、劫賊、惡奴の緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に彼の城中、一愚人あり、名を惡奴と曰ふ、心常に樂を好み、處々に、[一]藏竄し人の物を劫奪し、用つて自ら存活す。

時に、比丘有り[二]塚間に在りて坐禪し[三]行道す。食時至らむとするや衣を著け鉢を持ち城に入り乞食す。時に長者有り、彼の比丘の威儀[四]庠序たるを見て心に信敬を生じ、卽ち舍內に入り、[五]張氎を取り、彼の比丘に施す。還りて塚の間に詣る。彼の賊人に値ふ。是の比丘氎を持ちて來至するを見、便ち從ひて取らむと索む。比丘、卽ち與ふ。明日更に來る。復、從ひて氎を索む。次いで復持ちて與ふ。第三日に於て、比丘、乞食して房內に來至す。復、從ひて鉢を索む。時に、彼の比丘、是の念言を作す「唯、此の一鉢。當に用つて乞食し性命を救濟ふべきなり、彼賊、復索む、厭足こと有ること無し、今、當に計を設け、三自歸を授け、彼の賊人を治め、來らざらしむべし」と。是の念を作し已り、卽ち賊に語りて言く、「須臾待て、[六]止息し小停せよ我れ、當に汝に鉢を與ふべし。」賊、是の語を聞き、卽便ち坐りて待つ。比丘、繩を取り、[七]羂索を張り施し[八]向內に安置す。彼の賊に語りて言く「我、今疲れ極れり、故に起ること能はず、汝、自ら手を伸して向中に[九]內著せよ我れ、汝に鉢を授けむ」と。賊、是の語を聞き、尋いで卽ち手を伸し向中に內著す、比丘、索を挽き其の手を縛り、床脚に繫著するを得たり。比丘、外に出て杖を捉り、[一〇]拷打す。唱へて言く、「一を下さば當に佛に歸依すべし」と。痛み言ふべからず、良久しくして蘇へる、種々に呵責す。復、更に拷打し「第二を下さば當に法に歸依すべし」と。倍復[一一]疼痛し命終を欲するに垂んとす。良久しくして乃ち蘇へる。轉、更に呵責す、「第三を下さば當に僧に歸依すべし」と。賊、念言を作

【一】藏竄。かくれのがれること。
【二】塚。墓。
【三】行道。經行に同じ一定の地を往返するをいふ。
【四】庠序。安らかなる貌。
【五】張氎。縫目なき衣。
【六】止息。とゞまり休むこと。
【七】羂索。わな。
【八】向。まど。
【九】內著。入れてとること。
【一〇】拷打。うちたゝくこと。
【一一】疼痛。いたみいたむこと。

す、「今は我を拷ち、心骨に徹す。痛み言ふべからず、若し首を伏せざれば我に四歸を授けむ。必ず定んで死に交らむ」と。是の念を作し已り、即便ち引いて伏す。比丘、解放す。走りて佛の所に詣り、高聲に唱へて言く、「今は、世尊は實に大慈悲なり。諸の比丘に勅して我に三歸を授け、脱して死を得ざらしめよ。若し四歸を受けなば必ず死すること疑ひなし。歸仰する所無し」と。

爾の時、世尊、彼の賊人の心〔一二〕已に調伏するを知り、即ち、爲めに説法し給ふ。心開け意解け、須陀洹果を得、出家を求索む。佛、即ち告げて言く「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち、法服を身に著け、便ち沙門と成れり。精懃修習して阿羅漢果を得たり。〔一三〕三明・〔一四〕六通・〔一五〕八解脱を具し、諸天、世人に敬仰せらるゝ所となれり。

爾の時、諸の比丘、佛の説き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

# 撰集百緣經卷第三

授記辟支佛品第三



【一二】宋・元・明・聖本による。

【一三】三明。一に宿命明、自身他身の宿世の生死の相を知る智、二に天眼明、自身他身の未來世の生死の相を知る智、三に漏盡明、現在の苦相を知りて一切の煩惱を斷ずる智をいふ。

【一四】六通。一に神足通、遊歩往來自在を得る通力、二に天眼智證通、色界天の眼根を得て見ること無礙なる通力、三に天耳智證通、色界天の耳根を得て聽くこと自在なる通力、四に他心智證通、他人の心念を知ること自在なる通力、五に宿命智證通、宿命明のこと、六、漏盡智證通、漏盡明の意なり。

【一五】八解脱。三界の煩惱を捨離して其繫縛を解脱する八種の禪定なり、一に內有色想觀外色解脱、二に內無色想觀外色解脱、三に淨解脱身作證具足住、四に空無邊處解脱、五に識無邊處解脱、六に無所有處解脱、七に、非想非々想處解脱、八に、滅受想定身作證具住をいふ。

# 卷の第四

## 出生菩薩品第四

### 三十一、[一]蓮華王、身を捨て赤魚と作るの緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、世尊、秋の果熟するの時、諸の比丘を將ゐ、聚落を遊行し、[二]果蓏を噉食す。皆、消化せず、多く[三]瘧疾有り、種々の病生じ、坐禪・讀誦・行道すること能はず。

爾の時、阿難、前みて佛に白して言さく「如來、世尊、宿に何の福を造りて、凡そ食噉する所、能く消化せしめ、身内の諸の患苦を作すことを爲さず、今は威顏、益更に鮮澤ぞや」と。佛、阿難に告げ給はく「我、自ら過去世の時を憶念するに、慈悲を修行し、湯藥を和合し用つて衆生に施せり、是を以ての故に、無病の報を得たり、凡そ、食噉する所皆悉く消化し、患苦有ること無し」と。爾の時、阿難、復、佛に白して言さく「不審なり、世尊よ、過去世の時、其事云何、願くば解說を爲し給へ」と。

佛、阿難に告げ給はく「汝、今諦かに聽けよ、吾、當に汝の爲に分別し解說すべし『乃往、過去(に於て)波羅㮈國に王有り、名を[四]蓮華と曰ふ、天下を治正し、人民熾盛、豐樂極まり無し。諸の[五]兵甲無く、相征伐せず、諸の象・馬・牛・羊の六畜、饒かに甘蔗・[六]蒲桃及び諸の果蓏・[七]甘甜にして美なり。時に彼の人民、貪食多き故に、消化すること能はず、種々の病生じ各相ひ扶侍し王の所に來詣し醫藥を求索む。時に、蓮華王、是の病人を見て大悲の心を生じ、衆醫を集喚し勅して藥を合はさしむ。民衆に施すに病者遂に多く救療すること能はず。時に蓮華王、衆醫を詰責す。「汝

【一】蓮華王捨身作赤魚緣、梵本 No.31 Padmaka。
【二】果蓏。くだものと瓜類。
【三】瘧疾。おこり。
【四】蓮華。梵名(Padmaka.)
【五】兵甲。軍隊。
【六】蒲桃。葡萄のこと。
【七】甘甜。あまくうまし。

等、今何事有るが故に、民衆を治せざるや、來りて我に向はしめよ」と。諸醫、王に白さく「湯藥具はらず、是れを以つて治せざるなり、我等、今、尙病苦有り、自ら治すること能はず、況や、餘の病者をや」と。時に蓮華王、是の語を聞き已りて深く用つて（八）惆悵す。諸醫に問うて言く「何の具はらざる有りや」と。諸醫答へて曰く「赤魚の肉・血を得て食するを須ひなば病、乃ち差べし」と。今、我等、諸醫、各々募索し、了に得ること能はず、是を以ての故に、病者遂に多く死亡する者衆し。時に、蓮華王是の念言を作す「今は、赤魚（九）鈎にて得べからず、我、當に求願して赤魚の形と作り、爲めに衆生の身中の諸病を治すべし」と。是の念を作し已り、太子及び諸の大臣を召喚し、我、國土を以つて卿等に（一〇）囑累せむ、好く共に治化し民衆を枉ぐる莫れ」と。時に、王太子及び諸大臣、是の語を聞き已り、悲感し（一一）哽噎し涕泣し涙を墮す。悲しみ言ふ能はず、前みて大王に白す「我等諸臣及び太子とに何の非法有り、乃ち大王をして是の恨語を有らしむるや」と。時に、蓮華王、其の太子及び諸臣とに答ふらく「我れ、今に於て、卿等は過狀有ることを見ず。但、此國內、一般民衆、諸の病苦多く、死亡する者衆し、赤魚の血肉を得て服することを須ひなば、病乃ち差べし。是を以つて我、今此の身を捨て赤魚の形と作り諸の民の病を治せむと欲す。是の故に今は卿等を喚び來り國土を委付せり」と。爾の時、太子及び諸の大臣、王の是の語を聞き大に號びて哭き、悲感し哽噎し前みて王の足を抱く。「我等今、王の慈覆を賴み、國土豐樂し人民熾盛にして、存活を蒙むるを得たり。云何が、一旦、便ち孤棄て、我等を捨て去るを欲するや」と。時に蓮華王、太子に答へて曰く「我が今、作す所も亦民衆の爲めにす。云何が卿等に固遮せられむ」と。

爾の時、太子及び諸の大臣種々に王を諫むれども住まらしむること能はず、時に蓮華王、香と花とを捉り持ち、尋いで高樓に上り、四方に禮を作し、大誓願を發す。「我、此の身を捨て、彼の波羅棕國の大河の中に生れ大赤魚と作らむ、其れを食ふ者あらば衆病皆愈えむ」と。是の願を發し已り、

---

【八】惆悵。いたむこと。
【九】鈎。つりばり。
【一〇】囑累。まかすこと。
【一一】哽噎。むせび泣く。

自ら樓下に投じ卽便ち命終りぬ。彼の河の中に生れ、大赤魚と作る。時に、諸の民衆彼の河の中に大赤魚あるを聞き、[二]各斤斧を齎し、競ひ來りて破り取り、其の血肉を食へり。病皆除愈す。其の割く處、尋いで復還び生ぜり。是の如く展轉し、十二年を經て衆生に給施し、毛髪も悔恨の心有ること無し。是に於て命終り、[三]忉利天に生れり』と。

佛、阿難に告げ給はく「其の時の蓮華王を知らむと欲せば則ち我身是なり。彼の時に於いて、此の身命を捨て衆生を活すに由るが故に、無量世の中、未だ曾つて病苦せず、乃至今は自ら成佛を致せり。衆生を度脱しぬ」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き、歡喜し奉行せり。

## 三十二、[一]梵豫王、婆羅門に穀を施すの緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、諸の比丘、進みて佛に白して言さく「如來、今は、何の因緣を以つて常に恒に布施の功德は度量るべからずと讚歎し給ふや。不審なり、世尊よ、其の事云何、願樂して聞かむと欲す」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け、吾、當に汝の爲に分別し解說すべし。『我、過去無量世の時を念ずるに波羅㮈國の王を[二]梵豫と名く、國土を治正し、人民熾盛にして豐樂極まり無し、諸の象馬饒かに、牛羊六畜亦甚だ衆多し。時に、彼の國中に、一婆羅門有り、善く能く相を占ふ、王に稽白して言く「今は、土境に火星の出づること有り、天、當に[三]亢旱すべし、滿十二年(の間)苗稼收らず、人民飢餓せむ」と。時に梵豫王、是の語を聞き已り甚だ憂愁を懷き、是の念言を作す。「我、當に云何がして此の民衆を活すべきや」と。卽ち、算師に勅して倉穀と民衆とを試算し、衆をして各幾許かを得せしむ。時に、諸の算師、王の敎勅を受け、尋で共に算し覓り

---

【二】斤斧。まさかりおの。

【三】忉利天。梵名 (Trāyastriṁśa.) 三十三天と譯す、欲界六天中の第二、須彌山の頂、閻浮提の上八萬由旬の處にあり。

【一】梵豫王施婆羅門穀緣、梵本No.32. Kavaja. 實不譬喩、第十六?

【二】梵豫。梵名 (Brahmadatta.)。

【三】亢旱。ひでり。

ぬ。各一升を得て、六年供するに足れり。死亡する者衆し、惟、王單己食する所の穀分二升在る有り。婆羅門有り、後に在りて來至り。前みて王に白して言さく「唯、我一人、獨り穀を得ず、命旦夕に在り、願くば、今穀を分つべき所、少し許り賜はらむことを」と。時に梵豫王、是の語を聞き已り、是の思惟を作す。「我、今、此に於て、少し許り飢渇しても忍受する能はず、況んや來世に於いて無量世の中、衆生の爲めの故に諸苦・飢渇・寒熱を忍受するをや」と。是を思惟し已り、卽ち半穀を減じ、婆羅門に施せり。精誠に感應し、天の宮殿を動かし、自ら安んずる能はざらしむ。時に、天帝釋、是の念言を作す「我が是の宮殿、何の因緣有りて動搖是の如きや、將に我今命盡きんと欲するに非ざるか、而して斯の變を致す」と。是の念ひを作し已り、尋いで卽ち觀察するに梵豫王を見たり。飢饉の中に於て、衆生の爲めの故に、能く捨て難きを捨て、我が宮殿に感じ動搖是の如し。我、今、當に往いて其の善心虛僞爲る耶を試むべし」と。卽便ち化して一婆羅門と作り、杖を拄へ、羸瘦餘命幾くも無し、宮門に來詣し、王從り乞索す。王、自ら念言すらく「我、今、此の身、施と不施と會らず、當に死に歸すべし」と。是の念ひを作し已り、寧ろ惠施に就き、衆生を利益すれば死すとも悔恨無し、唯、食する所の一升穀分有るを婆羅門に施せり。是の穀を得已りて、大王に問ふて曰く「乃し能く此の飢饉の中に於いて、能く捨て難きを捨つ、釋・梵・轉輪聖王を求むると爲す乎、世俗の榮樂なる耶」と。王、卽ち答へて言く「我、今、此の惠施の功德を以つて釋・梵及び轉輪(王)と世俗の榮樂とを求めず、願くば我、未來、正覺を成ずることを得、衆生の飢渇・寒熱を拔濟せむ」と。是の願を發し已る時に婆羅門、讃へて言く「善き哉、未曾有なり」と。復び(帝)釋の身に還り、「願くば王よ、今、民衆に約勅し田に種を修治せよ、却後七日、我當に雨を降らすべし」と。時に、梵豫王、是の語を聞き已り、心大いに歡喜び諸の民衆に勅すらく、「時に及び耕し種えよ、七日滿つる頭り必ず當に雨降るべし」と。時に諸の民衆、王の敎令を聞き各競ひ共に田作を修治す、七



【四】羸瘦。つかれやせたる貌。

【五】競。明本による。

日頭りに到り。大甘雨を降せり。一切の苗稼皆成熟を得、人民熾盛し豐樂極まり無し』と。是れを以つての故に我、常に布施の果報の稱量る可らざるを讃歎せり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 三十三、[一]尸毘王、眼を剜り鷲に施すの緣

佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、諸の比丘、[二]安居竟らむと欲し[三]自恣の時到る。春秋二時常に來り集會し佛の說法を聽く。其の中或るものは[四]浣衣・薰鉢・打染・縫治する有り、是の如く各々皆營む所有り。

時に、彼の衆中、一比丘有り、名を尸婆と曰ふ、年老い目瞑く地に坐して衣を縫ふ、[五]紝針見えず、[六]衣を縫ふを得ず、是の唱の言を作さく「誰か福德を貪り我に紝針を爲せ」と。爾の時、世尊、比丘の語を聞き尋いで卽ち往至き。比丘の手を捉り、針を索め貫かむと欲す。時に老比丘、佛の音聲を識り白して言さく「世尊、如來、往昔三阿僧祇劫、大慈悲を修し[七]六波羅蜜を滿足し菩薩の行を具へ、[八]結使を斷除し、功德備はり足りて、自ら作佛を致せり。今は何の故に猶我が所に於いて福德を求索め給ふや」と。佛、比丘に告げ給はく「我、昔より來、宿習を忘れざるに由るが故に、汝の所に於て猶福德を修す」と。時に、諸の比丘佛、世尊の是の語を作し給ふを聞き已りて卽ち佛に白して言さく「如來、往昔彼の耆舊の老比丘の所に於いて、何の功德を修し給ふか、願くば解說を爲し給へ」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽けよ、吾、當に汝(等)の爲めに分別し解說すべし。『乃往、過去無量世の中、波羅棕國に王有り名を尸毘と曰ふ、國土を治正し人民熾盛にし

---

【一】尸毘王剜眼施鷲緣。梵本No.34. Çivi, 二十二譬喩第二十三、ロ、尸毘王。

【二】安居(Varṣa)。僧徒雨期三ケ月間、外出を禁じ坐禪修學を勵む、之を雨安居と名く、坐夏・坐臘ともいふ。

【三】自恣。梵に(Pravāraṇa)といひ舊に自恣、新に隨意と譯す、夏安居の竟日卽ち舊律に在ては七月十六日新律に在ては八月十六日に於て、他の僧衆をして恣に己が所犯の罪を擧げしめ懺悔するを云ふ又は隨意ともいふ。

【四】浣衣。衣を洗濯すること。

【五】紝針。いととはり、針に糸を通すこと。

【六】不得縫衣、聖本により加ふ。

【七】六波羅蜜。梵に(Pāramitā)。究竟・到彼岸・度無極、又は度と譯す、菩薩の大行なり、此の大行に一、檀波羅蜜、布施の大行、二、尸羅波羅蜜、戒の大行、三、羼提波羅蜜、忍辱の大行、四、毘梨耶波羅蜜、精進の大行、五、禪波羅蜜、定の大行、六、般若波羅蜜、智慧の大行の六あり、是を六波羅蜜といふ。

【八】結使。煩惱の異名。

て、豐樂極まり無し。時に尸毘王、常に惠施を好み賑給し乏しきを濟ふ。諸の財寶・頭・目・髓腦に於て來りて乞ふ者有れば終に悋惜せず。精誠にして感應し天の宮殿を動かし、其所を安むぜしめず。時に天帝釋是の念言を作す。「我が此の宮殿何の因緣有りて動搖是の如きや、將に我今命盡きんと欲するに非ざる耶」と。是の念を作し已り、尋いで自ら觀察し、尸毘王を見る。財寶を惜まず、來り乞ふ者有れば皆悉く施與し、精誠にして感應し、我が宮殿を動かし、物と所を安んぜしめず我、今當に往いて其の善心を試むべし、虛と爲すや實と爲すや」と。即便ち化して一の大いなる鷲身と作り、飛び來りて王に詣る、王に啓白して言く「我聞く、大王、布施を好喜み衆生に逆はず、我、今、故に來る。求索むる所有り、唯願くば大王よ、我が心願を遂げしめよ」と。時に王聞き已り甚だ歡喜を懷き、即ち鷲に答へて言く「汝の求むる所に隨ひ終に悋惜まず」と。鷲、王に白して言さく「我、亦、金銀・珍寶及び諸の財物を須ひず、唯、王の眼を須ひて以つて美饍と爲す。願くば王よ今、雙眼を賜はらむ」と。時に尸毘王、鷲の語を聞き已り大なる歡喜を生じ、手に利刀を執り自ら雙眼を剜り以つて彼の鷲に施こし、苦痛を憚らず毛髮も悔恨の心有ること無し。爾の時、天地六種に震動し諸の天花を雨らす。鷲、王に白して言さく「汝、今、眼を剜り用つて我に施こし悔恨無きや」と。王、鷲に答へて言く「我、汝に眼を施こす。今、實に悔恨の心無し」と。鷲、王に語りて言く「若し悔心無くば何を以つて證と爲すや」と。王、鷲に答へて言く「今、汝に眼を施こす、悔の心無くば當に我が眼をして還び復故の如くせしむべし」と。是の誓を作し已る。時に王の雙眼、前の如く異ること無し。鷲(帝)釋の身に復す、讃えて言く「奇なる哉、未曾有なり、汝、今に於て能く捨て難きを捨つ、釋・梵・轉輪聖王、世俗の榮樂を求むると爲すや」と。王(帝)釋に答へて曰く「我今、釋・梵・及び轉輪(王)と世俗の榮樂を求めず、此の眼を施こすの善根功德を以つて我、來世正覺を成ずるを得、衆生を度脫せむ」と。是の願を發し已る。時に、天(帝)釋還りて天宮に詣りぬ」と。



【九】賑給。にぎはしあたふること。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の尸毘王を知らむと欲せば則ち我が身是れなり、彼の時の鷲とは今の老比丘是れなり。彼の時に於て眼目を布施し悋惜まざるに由るが故に、自ら成佛を致せり。定の故に今は猶、汝の上に於て福德を修し、倘厭足こと無し」と。
爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 三十四、善面王[一]、法を求むるの緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。
爾の時、世尊、大悲の心を薫じ一切種智の得る所の無上甘露の妙法を以つて廣く天・人・八部の衆の爲めに其長夜に於いて常に說法を爲し疲厭有ること無く懈惓を生ぜず。
時に、諸の比丘、是の事を見已り、即ち佛に白して言さく「世尊よ、今何故に其の長夜に於て法の要を說き休息有ること無く、然も佛の身心都て疲厭し給はず、云何が是の如きや」と。
爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、善く聽けよ、當に汝の爲めに說くべし。『乃往、過去無量世の時に國有り波羅㮈と名け、王を[二]善面と名く、其の王の太子を、[三]孫陀利と名く。其の國豐樂にして、人民熾盛なり。時に善面王は、聰明の智慧にて、深く道德を樂しみ、常に妙法を求め、衆くの珍寶を以つて[四]四衢に置き、是の唱へを作して言く「誰か妙法有り、我が爲めに說く者は當に珍寶を以つて之に與ふべし」と。其の至誠を以て天の宮殿に感じ皆、悉く震動しぬ。爾の時、[五]釋提桓因、尋いで即ち觀察し、善面王の法の爲に情重く、精誠に感應して此の動搖を致すを知り、即ち、其の身を化し[六]羅刹の像と作り、鉤の牙雙び出し、鋒・刀[七]長利にして、飢餓に[八]憧惶し甚だ怖畏すべし。宮門に來詣して自ら唱へて言く、「我に妙法有り」と。時に王聞き已り、即ち出でゝ奉迎し、法を聞かんことを求索む。時に彼の羅刹、即ち王に語りて言く「我法有りと雖も今定んで飢

---

【一】善面王求法緣。梵本、No.35. Surūpa.（善面）二十二譬喩第二十三八、善面王。
【二】善面。梵語(Surūpa.)。
【三】孫陀利。梵語(Sundara.)。
【四】四衢。四達の道。
【五】釋提桓因。梵に(Śakra devānām Indra.)。釋(羅)は名にして能と譯し提桓は天と譯し因(陀羅)は主、又は帝と譯す、即ち能天主、須彌山の頂上に住して忉利天即ち三十三天の主なり、略して釋帝とも帝釋とも稱す。
【六】羅刹(Rakṣasa.)。惡鬼の總名なり、暴惡可畏など義譯す。
【七】長利。ながくするどし。
【八】憧惶。やせて恐ろしき貌。

渇し宣說する能はず」と。王、是を聞き已り、卽便ち種々の飲食を具へて羅刹に與ふ。羅刹答へて言く「我が食する者は唯熱血と新肉とのみ、今此の百味の飲食は吾が食する所に非ず」と。時に王の太子孫陀利は此の語を聞き已り、父の王に白して言さく「夫れ法音は甚だ聞くことを得難し、我今、身を以つて羅刹に施與し、意に隨つて食噉はれむ、願くば父王をして妙法を聞くことを得せしめむ」と。王、太子の廣大の心を發し身命を惜まざるを聞き、卽ち自ら思惟ふ。我、曠劫に於て恩愛の縛する所と爲り生死に流轉し窮り有ること無きなり。今、寧ろ法を聞き愛する所の子を捨てむ」と。是れを思惟し已り、卽便ち之を可とす。爾の時、太子、既に聽許を蒙り卽便ち身を持ちて、彼の羅刹に與ふ。羅刹得已り、卽ち王の前に於て太子を蹈み裂き狼藉して地に在り血を飲み肉を噉ふ。之を食し既に盡く、故らに言はく「足らず」と。時に王の夫人、子の身を捨てゝ彼の羅刹に與へ、羅刹食ひ已り、故に飽かざるを言ふを見て、卽ち、是の念ひを作さく(我が)子尙此の身命を捨つ。況んや我が身に於て當に捨てざらんや」と。卽ち、念ふ所の如く具に王に白しぬ。王、此の語を聞き、卽ち、復「然なり可し」となり。時に王の夫人、卽便ち身を以て羅刹に施與こす、羅刹得已り前の如く噉食ひ、之を食ひ既に盡きて猶云く「飢渴す」と。爾の時、羅刹、卽便ち王に語るらく「汝、今、身を以用つて我が食に供せよ」と。王、卽ち答へて言く「我、今、此の身を都て慳惜まず。但、身死し已れば法を聞くを得ず。汝、今に於て先に我が爲めに說け、然る後身を捨て用つて汝の食に供せむ」と。爾の時、羅刹、其の誠信を知り、卽便ち王の爲めに偈を說きて言く、

　恩愛は則ち憂を生じ、　恩愛は便ち畏有り、　能く恩愛を離るゝ者、　永く斷ちて怖畏無し、

爾の時、羅刹、此の偈を說き已り(帝)釋の身に還り復しぬ。太子、夫人、忽然として前に在り、王、法を聞き已り倍信敬を生ず。復、夫人と太子の猶故に存在するを見、心、歡喜を懷き自ら勝る能はず」と。

【九】曠劫。はるか長い時の間。

佛、諸の比丘に告げ給はく「爾の時の善面王を知らむと欲せば則ち我身是れなり、時の太子は今の阿難是れなり。王の夫人とは今の〔一〇〕耶輸陀羅是なり、我、往昔に於て菩薩道を修するの時、法を求むるための故に、尚、敬ふ所の妻子を愛惜せず、況んや今日に於て疲惓有らむや」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 三十五、〔一〕梵摩王の太子法を求むるの緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中、一人の長者有り、名を須達と曰ふ。稟性仁賢にして、三寶を敬信す。日々、僧坊の精舍に往詣し塔、寺を除掃す。又一時に於て諸の緣務有り、値行して在らず、彼の塔、寺を掃く(能はず)。

爾の時、世尊、大目連・舍利弗・大迦葉等を將ゐ其の塔中に入り、掃除已に竟り却きて一面に坐し給ふ。諸の比丘の爲めに是の地を掃くは五功德を得と說き給ふ。一は自らの心垢を除き、二は亦他の垢を除き三は憍慢を除去き、四は其の心を調伏し、五は功德を增長し善處に生るゝを得」と。

時に須達長者、其の他行に於て還りて精舍の中に到る。佛世尊、諸の比丘の爲めに、此の地を掃き、得る所の功德を說き給ふを聞き、心、歡喜を懷き、前みて佛に白して言さく「我、今、佛の是の地を掃く五事の功德を說き給ふを聞き、〔二〕所行の處に在り、賢聖の我が目前に在るを見るが如し」と。

爾の時、世尊、須達に告げて言はく「我が愛敬する所の一切善法亦復是の如し。汝、今諦かに聽けよ、吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし。『乃往、過去無量世の時、波羅㮈國の王を梵摩達多と名づく。正法によりて治化し人民熾盛にして、豐樂極まり無し、時に王の夫人、自ら娠める有りと覺り。頂の上に自然に一つの寶蓋ありて、其の行坐に隨ふ、王、相師を召して夫人を占相はしむ。

---

〔一〇〕耶輸陀羅(Yaśodharā) 譯、持稱、持譽、具稱など、悉達太子の夫人、羅睺羅の母なり。後、摩訶波闍波提に隨て出家せり。

〔一〕梵摩王太子求法緣。No.38 Dharmagaveṣi

〔二〕他行せし先のこと。

相師、觀已り、此れ兒生るゝ已、大いなる福德有り、必ず當に四方に推求し、法を求むべし』と。(語る)是に於て夫人滿十ケ月を足ち一太子を生む。端正、殊に妙なり、世に希に有る所なり。因りて爲めに字を立て、名づけて求法と曰ふ。年、漸く長大し心、道法を樂しむ。卽ち復、人を遣し珍寶を齎持し四方に推求し、了に得ること能はず。涕哭し懊惱して自ら寧ずる能はず、精誠に感應し(帝)釋の宮を震動し其の所を安ぜしめず時に天帝釋、是の念言を作す、「我が此の宮殿、何の因緣を以つて動搖是の如きや、自ら觀察し王太子の法を求めて懊惱し、了に得ること能はず、是れを以て涕哭し、我が宮殿に感じ動搖是の如きを見たり。我、今當に往きて其の善心を試むべし虛と爲すや實と(爲ず)耶」と。卽ち、一婆羅門に化作し宮門に來詣し、是の唱を作して言く「我に妙法有り、誰か聞くことを欲樂ふや、我當に爲めに說くべし」と。時に王の太子、使者の語を聞き喜び自ら勝へず、卽ち、出でゝ奉迎し、足に接して禮を作す。將に殿上に至らむとし、好床を敷施し命じて坐せんことを請ふ。合掌し白して言さく「唯、願くば大師よ、慈哀憐愍し我が爲めに解說せよ」と。時に婆羅門、太子に答へて曰く「法を學ぶこと甚だ難し、師を追ひ積むこと久しくして乃ち知るを得べし、今云何んが直に聞くことを得むと欲するや、理として爾るべからず」と。時に王の太子、大師に白して言さく「若し須ふる所を欲せば、願くば告示めされよ、身と妻子と、象と馬と珍寶と皆悉く備に有り、終に悋惜まず、當に相ひ供給すべし」と。婆羅門、言く「汝の道ふ所の如き我悉く須ひず、汝、今、若し能く一大坑を作り、深さ十丈ならしめ、中に火を盛滿し自ら其の身を投ぜよ。乃ち法を與ふべし」と。爾の時、太子是の語を聞き已り、心、歡喜を懷き、尋いで大いなる坑を作り、中に火を盛滿し、自ら身を投ぜむと欲す。時に王の夫人及び諸の群臣、尋いで來り抱へ捉り、太子を諫諭め婆羅門に曉く、「唯、願くば火師よ、慈哀憐愍し、我等の爲めの故に、太子をして此の火坑に投ぜしむる莫れ。若し須ふる所を欲せば國城・珍寶・及び妻子を以つて當に相ひ供給すべし」

と。婆羅門言く、「吾れ、相ひ逼らず、（たゞ）太子の意に隨ふ。能く是の如くんば我爲めに法を說かむ」と。時に、王太子、是の語を聞き已りて是の言を作さく「我、曠劫に於て身命を唐捐て[三]、未だ曾つて人の我が爲めに是の如き妙法を說くを欲する有らず、卽ち、自ら投ぜむと欲す」と。時に王、夫人及び諸群臣、其の志誠必ず自ら投ぜむと欲するを觀じ、尋いで卽ち使を遣はし、八千の象に乘り、一切の、閻浮提[四]の內に宣告す。諸の大臣等速に來り集會し、太子の所に詣り合掌し、諫曉[五]む、「我等が爲めの故に、此の坑に投ずること莫れ、今、一人の爲めに一切を孤棄す」と。時に、王太子、諸臣に答へて言く「我、無數の生死の中に於て、或は地獄・畜生・餓鬼に在り、更に相ひ殺害し、火に燒かれ湯に煮られ、飢餓し困苦す。一日の中、稱て計ふべからず、痛み言ふべからず、身命を唐捐て丶未だ曾つて諸法に益有らず、汝等、今云何が我を諫むや、此の臭き身を以つて無上菩提の道を求めんが爲めの故に、此の身命を捨つ。誓つて衆生を度し生死海を出でむ」と。是の語を作し已り決定して投ぜむと欲す。婆羅門に白して言さく「唯願くば大師よ、先づ我が爲めに說け、我命儻終れば法を聞くに及ばず」と。時に婆羅門卽ち太子の爲めに偈を說いて言く。

常に慈心を行じ　恚害の想を除き去り　大悲にて、衆生を愍れみ　矜傷[六]し雨淚を爲せ。　大悲を修行する者、　己の得る所の法と同く　諸の群生を救護せば　乃ち應に菩薩行なるべし。

爾の時、太子、是の偈を聞き已り喜び自ら勝へず、卽便ち、身を大火坑の中に投ず。變じて華の池と成る。太子、中に於て蓮華の上に坐す。地大いに震動す。諸の天の華を雨らし、積りて膝に至る、時に、婆羅門「帝」釋の身に還り復し、太子を讃じて曰く「汝、今、此火難の中に於て、此の一偈の爲めに身命を惜まず、何の願ひを求むと爲す」と。太子、答へて曰く「我、無上菩提の大道を求め、衆生を度脫し生死海を出でしめむ」と。爾の時、帝釋、是の語を聞き已り未曾有と歎じ、還び天上に詣れり。

---

【三】唐捐。むなしくすつ。

【四】閻浮提。梵に(Jambudvipa.)。須彌山の南方に當れる大洲の名、卽ち、吾人の住處なり。

【五】諫曉。いさめ說く。

【六】矜傷。いたみあはれむこと。

時に、梵摩王及び諸の群臣、其の太子の是の奇特有るを見て、未曾有と歎じ歡喜ばざるなし。還び太子を將ゐ宮中に詣れり」と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の梵摩王を知らむと欲せば、今の[七]淨飯王是れなり。彼の時の母は[八]摩耶是れなり。彼の時の太子とは則ち我が身是れなり」と。

佛、是の求法の縁を說き給ふ時、須陀洹を得る者、斯陀含[を得る]者、阿那含[を得る]者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發すもの有り、無上菩提心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 三十六、婆羅門[一]、佛從り債を索むるの緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、世尊、諸の比丘を將ゐ、城に入り乞食し、一つの巷中に至りて一[人の]婆羅門に逢ひ給ふ、[婆羅門]、指を以つて地に畫し、遮ぎりて去るを聽さず、是の言を作さく「汝、今要ず當に我に五百の金錢を與ふべし、爾れば乃ち、過ぐることを聽さむ。若し與へざれば過ぎ去るを聽さず」と。爾の時、世尊、諸の比丘と默然として住し前に進むこと能はず、乃至上聞しぬ。國主[二]甁沙及び[三]波斯匿王・[四]毘舍呿・[五]釋種、及び[六]福樓那等、各珍寶と種々の財物を齎し、婆羅門に與ふ。然も肯て受けず、時に須達長者、佛、世尊、婆羅門の爲めに留難を作し住して去らざるを聞き、即ち金錢五百を取り婆羅門に與ふ、乃ち、佛の過ぐることを聽しぬ。

時に諸の比丘、是の事を見已り、佛に白して言さく「世尊よ、何の因緣有りて、乃ち、是の如き遮留の難を見る有り、佛の過ぎ給ふを聽さゞるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく、「汝等、諦かに聽け、吾、當に汝[等]の爲めに分別し解說



【七】淨飯王。梵に(Śuddhodana.) 迦毘羅衞國の王にして釋尊の父なり。
【八】摩耶。梵に(Māyā) 淨飯王の后、釋尊の生母なり。

【一】婆羅門從佛債索緣、梵本 No.39. Anāthapiṇḍada.
【二】甁沙。梵に(Bimbisāra.)頻婆娑羅とも音譯す、佛在世摩竭陀國王の名。
【三】波斯匿。梵に(Prasenajit.)。巴(Pāsenadi)舍衞國の王名、和悅又は月光と譯し玄弉は勝軍、義淨は勝光と譯す、梵授王の子なり佛と同日に生る。
【四】毘舍呿。梵に(Viśākha)。鹿子母夫人の名なり。
【五】釋種。釋迦(Śākya)の種族。
【六】福樓那。梵に(Pūraṇa)人名。

すべし」と。乃往、過去無量世の時、波羅㮈國に王有り、名を梵摩達多と曰ふ。時に王太子字を善友と曰ふ。諸の親友を將ゐ遊戲し觀看す、路に一人に逢ふ。「彼」、輔相の子と共に[七]樗蒲・[八]博戲し、五百の金錢を賭く。時に王太子、戲人に五百の金錢を負く、尋いで從ひて債を索む。肯て之を償はず。時に王太子、戲人に語りて曰く「若し、彼與へざれば我れ當に代償ふべし」と。時に輔相の子、自ら力勢を恃み後に竟に償はず。是より以來無量世の中、常に戲人と爲り、我從り債を索む」と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の王太子を知らむと欲せば則ち我身是れなり、彼の時の輔相の子とは今の須達長者是れなり、彼の時の戲人とは今の婆羅門是れなり。是の故に汝等、凡そ債を負ふ者、抵突し冒しても償はざる可らず、乃至佛と成るとも此の難を脫せず」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 三十七、[一]佛、般涅槃に垂とし五百の力士を度するの緣

佛、[二]拘尸那城の婆羅雙樹の間に在し將に涅槃せんと欲し給ふ。

時に[三]須跋陀、佛、世尊、涅槃に入らむと欲し給ふを聞き、五百の力士を將ゐ、佛の所に來詣し前みて佛の足を禮し、却いて一面に住し、道に入らんことを求索む。佛、即ち告げて言く「善く來りぬ比丘よ」と、鬚髮自から落ち法服身に著く、便ち沙門と成る。佛、即ち、其の爲めに種々に說法し給ふに、心開け、意解け、各道迹を獲たり。時に、諸の比丘、是の事を見已り、佛に白して言さく「世尊よ、今此の須拔陀、五百人等、宿に何の福を植え、佛の涅槃に垂とする急厄の中、濟度を蒙むるを得たりや」と。佛、諸の比丘に告げ給はく、「但今、厄難の中に濟度を蒙るを得るのみに非ず、過去世の時、我亦彼を濟ひ諸の厄難を脫せり」と。時に諸の比丘、復、佛に白して言さく

【七】樗蒲。賭博（ばくち）のこと。
【八】博戲。ばくち、雙六。
【一】佛垂般涅槃度五百力士緣。梵本No.40 Subhadra。
【二】拘尸那城。梵名（Kusinagarī,）。
【三】須拔陀。梵名(Subhadra.)。

「不審なり、世尊よ、過去世の時、彼等を濟度する其の事云何、願くば解說を爲せ」と。
爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽けよ、吾、當に汝[等]の爲めに分別し解說すべし。『乃往、過去無量世の中、波羅㮈國に王有り、名を梵摩達多と曰ふ。諸の民衆を將ゐ城を出て遊獵す、一つの山間に到るに大河水有り、五百の群鹿に値ふ。便ち獵射せむと欲す、我、彼の時に於て諸の鹿の王と爲る。圍を張り來り近づく。時に諸の鹿等河岸の間に在り、周慞し[四]惶怖し[五]馳走りて河に從ふ。時に彼の河水深くして底無し、越えて渡るべからず、張圍、轉近く、命旦夕に在り、時に彼鹿王、諸の鹿に語りて言く「汝等の爲めに故に其の四足を申べ河の兩岸に置かむ。汝等諸鹿、我が脊を踐み過ぎて彼岸に達すべし」と。
爾の時、諸の鹿、是の語を聞き已り馳奔り共に渡り、鹿王の脊を踐み遂に破り盡くすに至る。痛み言ふべからず。是の時、諸の鹿盡く皆渡り竟る。唯、一鹿母、一鹿麛[六]を將ゐ周慞し惶怖して最も其の後に在り、時に彼の鹿王、其後在るを見て疲苦を忍び待ちて度り過さしむ。即便ち命終し忉利天に生る』と。
佛、諸の比丘に告げ給はく「我、爾の時に於て畜生の中に在り、猶慈悲を生じ疲苦を憚らず衆生を度脫す、況んや我今三界[七]に超越し、自在無礙にして勞有らむ耶」と。
佛、諸の比丘に告げ給はく「爾の時の鹿王を知らむと欲せば則ち我身是れなり、彼時の群鹿とは今の須拔陀等五百の比丘是れなり。」と。
時に諸の比丘、復佛に白うして言さく「須拔陀等五百の比丘、宿に何の福を植えて世尊に遭値し、各道果を獲たるや」と。
佛、諸の比丘に告げ給はく「汝等諦かに聽けよ、吾當に汝[等]の爲に分別し解說すべし」と。『此の賢劫中、波羅㮈國に佛有り出世し、號[八]迦葉と曰ふ。時に五百の比丘有り、山林の中に在りて

【四】周慞。うろたへること。
【五】惶怖。ふるひおそるゝこと。
【六】鹿麛。鹿の子。
【七】三界。欲界・色界・無色界の三凡夫の生死往來する世界。
【八】迦葉。梵名(Kāśyapa.)

坐禪し行道す。未だ道果を獲ず。時に迦葉佛、化緣周訖り[九]、神を遷して涅槃し給ふ。時に彼の比丘、都て覺知せず。諸の樹神等、佛、今日將に涅槃せんと欲し給ふを知り、心に懊惱を懷き、涕哭し涙を流し、樹下に於ける比丘の頂の上に墮つ。時に諸の比丘、各樹神に問ふ。「汝、今、何故に涕泣是の如きや」と。樹神、答へて曰く「迦葉世尊、今涅槃せんと欲し給ふ。是故に我今心に懊惱を懷き、涕泣是くの如し」と。時に諸の比丘、樹神の語を聞き心驚き毛竪ち方に憂懼を懷く。樹神に白して言さく「我等、今、何に由り佛、世尊を見及ぶを得るや、先に自ら過度せむ[一〇]、佛の先に滅度し給ふを見るに忍びず」と。樹神、答へて曰く「汝等、今、若し去らむと欲せば各自、眼を閉ぢよ、我等、能く汝等をして世尊の所に到らしめむ」と。時に諸の比丘、是の語を聞き已り尋いで目を閉ぢて、覺らず、忽然として世尊の所に至り、罪咎を懺悔し各涅槃を取れり。皆、彼の時出家持戒するに由り今我に値ふことを得て道果の證を獲。』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の五百の比丘とは今此の須拔陀等五百の力士の比丘是れなり」と。

爾の時、諸の比丘佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 三十八、兎身を燒き仙人に供養するの緣[一]

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、名を拔提[二]と曰ふ、出家入道せしも心常に白衣[三]の緣務を好み樂しみ、三業[四]倶に廢つ。

爾の時、如來、此の拔提の善根已に熟し、應に我が化を受くべきを觀じ、阿難に告げて言はく、「汝、往いて彼の拔提比丘を喚び我が所に來り到らしめよ」と。尋いで卽ち往き喚びぬ。佛、拔提

---

【九】周訖。おはること。

【一〇】過度。滅度といふに同じ。しかし今はたゞ死に等し、故に再び釋尊の世に生れて須跋陀等となる。

【一】兎燒身供養仙人緣。梵本 No.37. Çaça.

【二】拔提。梵名(Bhadraka)

【三】白衣。在家の生活、之に對し出家を染衣といふ。

【四】三業。(1)身業、身の所作、(2)口業、口の所作(3)意業、意の所作をいふ。

に勅し給ふ。「汝、山林樹間に往詣し善法を修習すべし」と。尋いで佛の教を受け山林の間に詣り坐禪し行道す、未た久しからざるの間に阿羅漢果を得たり。時に、諸比丘、是の事を見已り、前みて佛に白して言さく「今、此の拔提比丘、宿に何の福を植え、復出家すと雖も常に俗縁を樂しみ。復世尊に値ひ奉り道果を獲るを得たるや」と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽けよ、吾當に汝[等]の爲めに分別し解說すべし」と。『此の賢劫中、波羅㮈國に一人の仙人有り、山林の間に在りて果を食し水を飲み、仙道を修習し、多年を經歷して天の亢旱に値ふ。花・果、茂らず飢渴逼る所あり、便ち、村に入り乞食し自活せむと欲す。時に、菩薩の兎王有り、諸の兎等と水草を隨逐し、倶に行くに是の長鬚の仙人の飢渴逼る所と爲り村落に入りて乞食し自活せむと欲するを見る。便ち、前みて白して言さく「我が明日の少許りの微供を受けよ、幷に好法有り、汝、聽受す可し」と。仙人聞き已り是の念言を作さく「彼の兎王は、或は能く飛鳥・走獸の命盡の者を値ひ見て我が爲めに食を作らむ」と。尋いで即ち許可す。時に、彼の兎王、仙人の許を知り尋いで諸の兎及び彼の仙人を集め妙法を宣說す。手、復薪を拾ひ之を地に積む。即ち、自ら火を燃し自ら其の身を投じて大火の中に在り。時に、彼の仙人即ち前みて抱へ捉る。無常の命已りて後世に就く。仙人、唱へて言く「和上[五]、大師、云何が一旦、今孤背し我を捨棄して去るや、更に法を聞かず、悲感し哽噎[六]し天に號びて哭く。悶絶して地に躃る。悲しみ言ふ能はず、爾の時に當り地大いに震動し、天、妙花を雨らし、兎王の上を覆ふ。時に、彼の仙人彼の兎王の大悲を修するを見て敢て食噉せず、其の骸骨を收め塔を起して供養す』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の菩薩の兎王を知らむと欲せば則ち我が身是れなり、彼の時の仙人とは今の拔提比丘是れなり、皆、彼の時、我が語に隨順し來りて法を聽くに由るが故に、今、我に値ふことを得て出家し道を得たり」と。



【五】和上。和尙に同じ、師といふが如し。
【六】哽噎。むせび泣く。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 三十九、法護王子、母の爲めに殺さるゝの緣〔一〕

佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、提婆達多、愚癡にして無智なり。常に嫉妬を懷き、瞋恚し罵詈して、佛、世尊に向ふ。[しかも]如來、終に提婆達多に向つて、嫌恨の心有らず。時に諸の比丘、この事を見已り前みて佛に白して言さく「不審なり、世尊よ、其の事云何」と。佛、比丘に告げ給はく「但、今日彼の爲に罵らるゝのみに非ず、過去世の時も亦常に惡罵するも、我、恒に忍受す」と。時に、諸の比丘、復佛に白して言さく「願樂ふらくば過去世の時[の事]を聞かむと欲す。敷演し解說し給へ」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け。吾、當に汝[等]の爲めに分別し解說すべし」と。『此賢劫中、波羅㮈國に王有り、名を梵摩達多と曰ふ。正法によりて治化す、人民熾盛にして豐樂極まり無し、二人の夫人有り、一を善意と名づけ、一を修善意〔二〕と名づく。其の大夫人、體と性調順なり、甚だ王の情に適ふ。然れども子息無し。第二の夫人に唯一子有り、聰明慈仁にして父母に孝順なり。王甚だ愛念す、學堂に遣詣し、書典を讀誦す。[王一日]、大夫人を將ゐ城を出て遊戲し歡喜し樂しみを受く。少の酒食を持ち城内の第二夫人に送り與ふ。夫人、瞋恚り惡口罵詈し、「我寧ろ汝の王子の咽を刺し、殺して血を飮まむ、今は終に、王の送る所の酒を飮まず」と。使者、還り馳せて狀を以て王に白す。王、是の語を聞き、復瞋恚を生じ尋いで卽ち人を遣りて王子を送り、與へて能く爲すや不やを試ろむ。夫人、得已り、卽ち、咽を刺さむと欲す。王子、躬を曲げ〔三〕合掌し母に向ひ、「我、過罪無し、何すれぞ爾を見るや」と。母、子に答へて曰く「汝の父、殺せと勅す、我が咎に非ざるなり」と。是の語を聞き已り、卽便ち母に向ひ罪咎を懺悔す。其の母聽さず、

---

【一】 法護王子爲母所殺緣。梵本 No.33. Dharmapāla. 如意樹譬喩第二十三。

【二】 修善意。梵に Durmati-(devī)。

【三】 曲ぐ。聖本による。

即便ち刺殺す。是の善心に乘りて忉利天に生る』と。「我、爾の時に於て、故に是れ凡夫、母の爲めに殺され及び以だ罵辱せらるゝも、終に恨心無し、況や我、今、三界に超出す。云何んが、提婆達多に向ひ慈悲を生ずること能はざらむ耶」と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の王子を知らむと欲せば則ち我身是れなり、彼の時の母は、今の提婆達多是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 四十、劫賊、樓陀の緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中一人の劫賊有り、名を樓陀と曰ふ。腰に利劍を帶び、手に弓箭を把り、道路に在りて民の物を劫奪し、用つて自ら存活す。遂に、數日を經て飢渴の逼る所となり、遙に比丘の鉢を持ちて行くを見、一樹下に至り是の念言を作さく「彼の人の鉢の中、必ず飲食有らむ。今、當に彼に往き奪取して之を食ふべし、若し彼れ食竟れば腹を開き取りて噉はむ」と。是の念ひを作し已る。尋いで即ち趍り向ふ、相ひ去ること遠からず、「小しく復り停住せよ」と。時に彼の比丘、尋いで賊の意を知り、今、若し喚ばざれば必ず當に我を殺すべし、彼に罪咎を增さば三塗に墜墮ちむ、先づ喚び彼に飲食を施さむに如かず」と。是の念を作し已り、即便ち遙かに喚ぶ「汝、速に、疾く來れ、我、汝に食を施さむ」と。賊、是の念を作さく「今、此の比丘、遙に我が飢を知り、我を喚んで食を與ふ」と。即ち來り前む、彼の飯を食し已る。充足し飽滿して歡喜の心を發しぬ。

時に、彼の比丘、即便ち爲めに種々の妙法を說く、心開け意解け、須陀洹果を得、出家を求索む。精懃し修習し阿羅漢果を得、三明・六通・八解脫を具へ諸天、世人の敬仰する所となる。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。



撰集百緣經卷第四

## 餓鬼品第五

### 四十一、富那奇、餓鬼に墮するの緣【一】

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

時に、尊者舍利弗、大目揵連、食を設けむと欲する時、先づ、地獄・畜生・餓鬼を觀じ然る後、方に食す。爾る所以の者は衆生をして生死を厭離し涅槃を求めしめむと欲するなり。

時に、彼の目連、一人の餓鬼を見るに身は焦柱の如く、腹は大山の如し、咽は細針の如く髮は錐刀の如く、其の身を纒刺【二】す。諸の支節の間、皆、悉く火を出す、呻吟し大に喚ひ【三】四向に馳走り、糞尿を求索め以つて飮食と爲す。疲苦終日にして得ること能はず。爾の時、目連、此の餓鬼を見て即ち、前みて問ふて言く「汝、何の業を造り是の如き苦みを受くるや」と。餓鬼、答へて曰く、「日有る處には、燈燭を須ひず、如來世尊、今、現に世に在り、汝自ら問ふべし、我、今、飢渴す、汝に答ふる能はず」と。

爾の時、目連、尋いで佛の所に往き、如來に造る所の行業、是の如き苦を受くるを問はんと欲す。爾の時、世尊、大衆の中に在り、諸の天と人との爲めに妙法を演說し給ふ、目連の入るを見て即ち之に問ふて曰はく、「汝、今に於て、何の異事を見たるや」と。目連、答へて曰く「一人の餓鬼を見たり、身體、燋然し、東西に馳走る」と。具に上事を以つてし、佛に向ひ【四】白して言さく「何の惡業を造り是の如き苦を受くるや」と。

爾の時、世尊、目連に告げて曰く「汝、今、善く聽け、吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし」



【一】富那奇墮餓鬼緣。梵本 No.41. Guḍaçilā 如意樹譬喩第五。

【二】纒刺。まとひさすこと。

【三】四向。四方に同じ。

【四】白言。聖本による。

と。『此の賢劫中、舍衞城の中に一人の長者有り、財寶量り無く稱て計ふるべからず、常に僕使をして甘蔗の汁を壓し以つて大家に輸らしむ。辟支佛有り甚だ[五]渇病を患ひ給ふ。良醫、藥を處め、「甘蔗の汁を服さば病乃ち差ゆべし」と。時に、辟支佛、卽便ち往詣し、長者の家に[六]告げ甘蔗の汁を乞ふ。時に、彼の長者、其の[七]詳序、威儀觀るべきを見て、深く信敬を生じて之に問ふて曰く、「何等を須ひむと欲し給ふや」と。辟支佛言く「甚だ渇病を患ふ、甘蔗の汁を須ふ。故に來り相ひ告ぐ」と。長者、聞き已り心に歡喜を懷き、尋いで其の婦、富那奇に勅す。「我、急緣有り、定んで出で去らむと欲す、汝、今、後に在り甘蔗の汁を取り辟支佛に施せ」と。時に婦答へて曰く「汝、但出て去れよ、我後に自ら與へむ」と。時に夫の人、出て已る。[卽ち]辟支佛の鉢を取り、其の[八]屛處に於て鉢の中に小便し甘蔗の汁を以て鉢の上を[九]蓋覆し、辟支佛に與ふ。辟支佛、受け已り尋いで是に非るを知り地に投棄し空鉢にて還歸る。其の後、命終り餓鬼の中に墮す。常に飢渇の爲に逼切せらる。是の業緣を以つて是の如き苦を受く』と。

佛、目連に告げ給はく「爾の時、彼の長者の婦を知らむと欲せば今の富那奇餓鬼是れなり」と。佛、是の餓鬼の緣を說き給ふ時、諸の比丘等慳貪を捨離れ、生死を厭惡み須陀洹を得る者、斯陀含[を得る]者、阿那含[を得る]者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 四十二、[一]賢善長者の婦、餓鬼に墮するの緣

佛、王舍城の[二]耆闍崛山の中に在しき。

爾の時、尊者大目揵連、一樹下に在り、結跏趺坐し、思惟し觀察して一人の餓鬼を見る。身は燋

【五】渇病。のどかわきて下痢する病。
【六】告。宋・元・明本による。
【七】詳序。秩序よき貌。
【八】屛處。物の小蔭。
【九】蓋覆。ふたしおほふこと。
【一】賢善長者婦墮餓鬼緣。梵本 No.42. Bhaktam. 如意樹譬喩第十四。
【二】耆闍崛山。梵名(Grdhrakūta)鷲峰山と譯す。中印度摩揭陀國王舍城の東北にあり。

杜の如く腹は大山の如く、咽は細針の如く髮は錐刀の如く、其身を纏遶す。諸の支節の間、皆悉く火然す。呻吟して大に喚ひ四向に馳走り。糞穢を求索めて終日竟夜、苦を受け疲極まり、了に得ること能はず。

爾の時、目連、此の餓鬼を見て之に問うて曰く「汝、先の身に於て何の業行を造りて是の如き苦を受くるや」と。餓鬼、答へて言く、「世に如來有り、汝、自ら問ふべし、我、今、飢渴して、汝に答ふる能はず」と。

爾の時、世尊、目連に告げて曰く「汝、今、諦かに聽け、吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし」と。『乃往、過去無量世の時、國有り波羅棕と名づく、其の土豐樂し人民熾盛にして兵甲「を以て」共に相ひ諍競すること有ること無し。時に長者有り、名を賢善と曰ふ、體性柔和にして三寶を敬信す。常に惠施を樂しみ名稱普く聞ゆ。時に比丘有り、衣を著け鉢を持ち其の家に詣り其より乞食す。時に此の長者、少しく急緣有り、竟に自ら施さず、尋いで卽ち出て去る。慇懃に婦に囑すらく「汝、今、後に在り、好念にて彼比丘に飮食を施せよ」と。其の婦、答へて言く「汝、但憂ふること莫れ、我、後に當に與ふべし」と。時に長者の婦、慳貪の心を生じ、便ち自ら念言ふよう「今、若し食を與へなば後日復び來るべし。此の諸人等甚だ惡み見るべし」と。卽ち、比丘を喚び、舍內に來り入らしめ空屋を閉著し、其卽日晚く、食を得ざらしむ。是の業緣を以つて無量世に於て餓鬼の中に墮し、是の如き苦を受く』と。

佛、目連に告げ給はく「彼の時の長者の婦を知らむと欲せば今此の餓鬼是れなり、是の故に汝等、當に布施を勸むべし、慳貪に著する莫れ、應に是の學を作すべし」と。佛、是の餓鬼の緣を說き給ふ時、諸の會に在る者、慳貪を捨離れ生死を厭惡み、須陀洹を得る者、斯陀含「を得る」者、阿那含「を得る」者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 四十三、惡見にて水を施さず餓鬼に墮するの緣[一]

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

爾の時、尊者大目揵連、一樹下に在り一人の餓鬼を見る。身は燋柱の如く腹は大山の如し、咽は細針の如く、髮は錐・刀の如く其の身を纏刺す。諸の支節の間、皆悉く火然す。渴乏して死せむと欲し、脣と口と乾燋して河・泉に往趣すれば水爲めに涸竭す、假令天の甘雨を降らし、其身の上に墮すも皆變じて火と爲る。

時に、大目連、卽ち前みて問ふて言く「汝、先の身に於て何の業行を造り是の苦を受くるや」と。時に、彼の餓鬼、目連に答へて言はく「我、今渴乏し、苦を受くること計り難く、汝に答ふる能はず、爾れば自ら佛に問へ」と。時に大目連、卽ち佛の所に詣り斯の事を問はむと欲す。爾の時、世尊、諸の大衆の爲に妙法を演說し給ふ。目連の來るを見、先に意を以て問訊す。愛語、軟語にて之を問訊し給ふ。「何の異事をか見る」と。目連、佛に白す。「我、樹下に向ひ一餓鬼を見たり。身體燋然し四向に馳走ると。具に上事を以て佛に向ひ廣說す。「宿に何の業を造り是の苦惱を受くるや」と。

爾の時、世尊、目連に告げて曰く「汝、今、諦かに聽けよ、吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし」と。『此賢劫中に、波羅㮈國、佛有り出世し給へり、號して迦葉と曰ふ。一沙門有り、路を涉りて行く。極めて熱渴を患ふ。時に女人有り、名を惡見と曰ふ。井宕[二]にて水を汲む。往きて之を乞ふ、女、之に報へて曰く「汝をして渴死せしむるも我終に水を持つて、汝に與ふる能はず、我が水を減ぜしめば、持ち去るべからず」と。時に、沙門、旣に水を得ず、道を復りて去る。時に、彼の女

---

【一】惡見不施水墮餓鬼緣。梵本 No.43. Pāniyam. 實石譬喩第四、二十二譬喩第十三。

【二】井宕。ゐどのこと。

人、遂に復慳貪にして來り乞ふ者有るも終に施與せず、其の後命終り、餓鬼の中に墮す。是の業緣を以つて是の如き苦を受く』と。佛、目連に告げ給はく「彼の時の女人水を施さゞる者を知らむと欲せば、今、此の餓鬼是れなり」と。佛、是の惡見の緣を說くの時、諸の比丘等慳貪を捨離れ、生死を厭惡み須陀洹を得る者、斯陀含を得る者、阿那含を得る者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 四十四、[一]槃陀羅、餓鬼に墮し身體臭き緣

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

爾の時、尊者大目揵連、食時至らむと欲して衣を著け鉢を持ち城に入り乞食す。飯食已に訖り、衣・鉢を攝め一樹下に在りて結跏趺坐し[二]三昧に入りて、一人の餓鬼を見る、身體極めて臭し、絕えて近づくべからず、時に目連、即便ち問ふて曰く、「汝、何の業を造り此の身形を受け臭くして近くべからざるや」と。餓鬼、答へて曰く「汝、自ら佛に問へ、當に汝の爲めに說くべし」と。爾の時、目連尋いで佛の所に詣り、白して言さく「世尊よ」と。諸佛の常法として先に意を以て問訊し給ふ。「汝、今に於て、何の異事を見たるや」と。目連、佛に白さく「我、向に於て一樹下に在りて三昧に入り、一人の餓鬼を見る。身體極めて臭く人の糞よりも劇し、四向に馳走り屎尿を求索め用つて甘饍と爲す。不審なり、世尊よ、是くの如き報ひを受くるや」と。佛、目連に告げ給はく「汝、今、是の因緣を知らむと欲するやいなや」と。目連、佛に白す「願樂ふ、聞かむと欲す」と。

爾の時、世尊、目連に告げて曰く「汝、今、諦かに聽け、吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし」と。『乃往、過去無量阿僧祇劫に於て、波羅㮈國に辟支佛有り世に出現し給へり。空閑處に草を



【一】槃陀羅墮餓鬼身體臭緣　梵本 No.44. Varcanghuta。

【二】三昧。梵語(Samādhi.)定、息慮凝心と譯す。心を一處に定めて動かざれば定といひ、緣慮を息止して心念を凝結すれば息慮凝心といふ。

以つて敬と爲し、繫念し坐禪す。身、疾患に遇ふ、良醫藥を處め「當に肉食を須ふべし、病乃ち差ゆべし」と。時に、辟支佛、是の語を聞き已り、卽便ち城に入り、一人の長者に見ゆ。名を吉善と曰ふ。從つて肉食を索む。時に彼の長者、婦の槃陀羅に勅すらく「我、急緣有り、今、外に出づべし、汝、好く彼の辟支佛の爲めに、病に隨ひ藥を作れ」と。時に、婦、答へて言く「汝、但愼しみて前めよ、後事を憂ふる莫れ、辟支佛の食、我自ら與ふべし」と。時に彼の長者、尋いで便ち出で去る。時に槃陀羅、慳貪の心を生じ、便ち是の念を作す。「我、今日に於て彼に食を施さば明日復來らむ、甚だ惡み見るべし」と。是の念ひを作し已り、卽ち從りて鉢を索め屛處に在りて鉢中に大便し、飯を以つて上に覆ひ、辟支佛に與ふ。[辟支佛]、尋いで臭穢を覺り投棄し地に著け之を捨てゝ去れり。是の業緣を以つて無量世の中、常に餓鬼に墮し身體臭穢にして附近くべからず。常に人糞を以用つて甘饍と爲す』と。

佛、目連に告げ給はく「爾の時の彼の長者婦、鉢の中に大便し辟支佛に施す者は今の餓鬼是れなり」と。佛、是の餓鬼の緣を說き給ふ時、諸の比丘等慳貪を捨離れ生死を厭惡み、須陀洹を得る者、斯陀含[を得る]者、阿那含[を得る]者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 四十五、目連、城に入り五百の餓鬼を見るの緣【一】

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

爾の時、目連、乞食の時到り、衣を著け鉢を持ち城に入り乞食す。其の門中に於て五百の餓鬼有りて外從り來り入るに遇ふ。是の目連を見て心に歡喜を懷き、之に白して曰く「唯、願くば尊者よ、

【一】目連入城見五百餓鬼緣。No.45. Maudgalyāyana.（目連）。

慈哀憐愍し、我が名字を稱へ、我家の中親しき所の眷屬に語りて言へ我等の輩、善を修せず惠施を好まざるを以つて今身形を受け餓鬼中に墮すと。唯、願くば尊者よ、我親の里より財物を求索め用つて餚饍を設け佛及び僧を請ぜよ、若し物少なければ我が爲に諸の〔二〕檀越等を勸化し共に會を設けしめて我等の輩をして餓鬼の身を脫せしめよ」と。爾の時、目連、尋いで卽ち許可す。復、餓鬼に問ふ「汝等先世に何の業行を造り斯の罪報を受けしや」と。

時に、諸餓鬼、咸共に聲を同じくして目連に白して言はく『我等宿世、俱に此の王舍城の中に在り、長者の子と爲り憍慢、放逸にして布施を好まず、世の樂みを貪著し三寶の無上道の敎を信ぜず、諸の沙門の城に入り乞食するを見て、旣に自ら施さず、逆に他人を遮る、「斯等の道人、自ら生活せず、但百姓を仰ぐ、今若し與へなば後日復び來りて、終に厭足こと無し」と。是の業緣を以つて其の後命終り餓鬼中に墮し斯の罪の報ひを受く』と。時に、目連、餓鬼に語りて言く「我、今汝の爲に諸の親里に語り幷に相ひ營み佐け共に大會を設けしめん。時に汝等の輩咸皆自ら來り會所に至れ」と。

時に、諸の餓鬼、咸皆聲を同じくし尊者に白して言く、「今、我等の輩・宿世の罪の致す所の形體を受け身は燋柱の如く腹は大山の如し、咽は細針の如く、髮は錐刀の如く、其の身を纏刺す。諸の支節の間、皆悉く火然し、四向に馳走り飮食を求索めて了に得ること能はず、設けしは甘饍を見て馳赴き趣向するに變じて膿・血と成る。云何にして能く此の身形を持つて會所に詣らむ」と。時に大目連、卽便ち諸の餓鬼等の爲めに其の眷屬に詣るに上事を具陳しぬ。諸の親、聞き已りて咸皆懊惱し共に相ひ合し率ゐて設會を爲むと欲す。時に大目連、卽便ち定に入り、諸の餓鬼、何處に在るやを觀じ十六大國に於て遍く觀ずるも見えず、次に〔三〕閻浮提、〔四〕四天下及び千世界乃至〔五〕三千大千世界に至るも、都て觀ずるに見えず。其の所以を怪しみ尋いで佛の所に往き白して言く「世尊よ、我、



【二】檀越。梵語(Dānapati.) 施主をいふ。越は施の功德をなして己が貧窮の海を越ゆる義なりと。

【三】閻浮提。梵語(Jambud-vīpa.) 須彌山の南方に當れる大州、吾人の住處、此の州の中心に閻浮樹の林あるを以つて州名とす。

【四】四天下。四大州なり。

【五】三千大千世界。須彌山を中心として七山八海を交互に繞らし、更に鐵圍山を以つて外郭となし、之を一小世界と稱し、此一小世界を一千合せたるを小千世界とし、此小千世界を一千合せたるを中千世界とし、此中千世界を一千合せたるを大千世界とす、此の小千、中千、大千の三千より成るを以て三千大千世界といふ。此一大千世界を以て一佛の化境となす。

今、諸の餓鬼等の爲に諸人幷に其の諸親を勸化し大會を施設し福德を作さしめむとす、遍く世界を觀ずるに悉く見るを得ず。不審なり、世尊よ、此の諸の餓鬼何處に在ると爲すや」と。佛、目連に告げ給はく「彼餓鬼等皆業風の吹き去る所と爲り、汝、聲聞の能く知見する所に非ざるなり。然れども、今者に於て彼の諸の餓鬼、汝の設會を蒙り罪垢を除くことを得む。吾、自ら能く會所に來詣せしめむ」と。時に、目連、卽便ち諸の餓鬼の爲めに諸の餚饍を設け、佛及び僧を請じぬ。佛、神力を以つて諸の餓鬼をして會所に來るを得せしめ。王舍城の諸の婆羅門、[六]刹利、[七]居士をして咸諸鬼の狀貌、醜弊にして甚だ怖畏すべきを見せしめ給ふ。皆共に慳貪の心を捨離れ生死を厭惡みて心開け意解け、須陀洹を得る者、斯陀含「を得る」者、阿那含「を得る」者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、世尊、卽便ち彼の諸の餓鬼等の爲めに種々に慳貪の過惡を說法し給ふ。深く信敬を生じ、卽ち其の夜に於て命終を取り忉利天に生る。便ち、自ら念言ふ「我等、今、何の福業を造り此の忉利天上に來生するを得たるや」と。卽ち自ら觀察し「是れ餓鬼にして、其の尊者大目揵連、我等の爲めの故に會を設け佛及び比丘僧を請ずるを以つて此に來生し得たるを知り、我等、當に共に往き彼に恩を報ずべし」と。是の語を作し已り、尋いで天より下り天冠を頂戴き諸の瓔珞を著けて其の身を莊嚴り各香・花を齎らし來りて佛及び大目連を供養す。供養し已訖り卻いて一面に坐し、佛の說法を聽き。心開け意解け、各道跡を獲、佛を繞ること三匝にして還りて天上に詣りぬ。

佛、目連に告げ給はく「爾の時の五百の餓鬼を知らむと欲せば今の五百の天子是れなり」と。

爾の時、諸の大衆、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 四十六、[一]優多羅の母、餓鬼に墮するの緣

【六】刹利。梵語(Kṣatriya)印度四姓の一、王種なり。
【七】居士。梵語(Kulapati.)財に居る士、家に居るの士、在家にて佛道を志す人。

【一】優多羅母墮餓鬼緣。梵本 No.46. Uttara.

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

時に、彼の國の中に一人の長者有り、財寶量り無く稱げて計ふべからず、高門を選擇し娉して以て婦と作す。倡伎の樂を作し用つて之と娛樂しむ。其の婦懷妊し十月を滿足して一男兒を生む。端正にして殊に妙れ、世に希に有る所なり。父母歡喜び因りて爲に字を立て、優多羅と名づく。年漸く長大し其の父喪亡り、兒、自ら念言ふやう「我が先父以來、販賣治生し用つて家業を成す。我、今、宜しく是の法を學ぶべからざらむや。然れども佛法に於て甚だ信敬を懷く、今出家せむと欲す」と。便ち前みて母に白す「出家を求索む」と。時に母答へて曰く「汝の父既に喪し、我今便ち無し唯、汝一子のみ、汝今云何にして我を捨てゝ出家するや。我、今存在り、汝に出家入道を聽さず、我が亡沒の後、汝の意に隨つて去れよ」と。爾の時、彼の子、願ふ所を果さず、心に懊惱を懷く、即便ち母に語るらく「若し我を聽さずむば今必ず嚴に投じ毒を飲むで死せむ」と。時に母答へて言く「是の語を作すこと莫れ、汝、今、何の故に必ず出家を欲するや。今より以去、若し諸の沙門・婆羅門等を請ぜむと欲せば我當に供を設け汝に隨つて供養すべし」と。兒、是の語を聞き用つて自ら安慰し諸の沙門・婆羅門を請ず。[諸の沙門・婆羅門]數々家に向ふ。而も之を供養す。時に彼の兒の母、諸道士の數々來往するを見て甚だ懊惱を懷き厭患の心を生ず。便ち惡言を出して諸の沙門・婆羅門等を罵しる。[自ら]生活することを欲せず、但百姓を仰ぐのみ、甚だ惡見るべし」と。時に其の兒家の中に在ず、其の母但、飲食、漿水を以つて灑ぎ散じ地に棄つ。時に兒、行きて還る。便ち之に語りて言く「汝、出で去るの後、我餚饍を設け諸の沙門及び婆羅門を請じて之に供養せり」と。尋いで便ち兒を將ゐ其の棄てし飯漿水の處を示し「我れ適供養す。尋いで即ち出で去れり」と。其の兒聞き已り甚だ用つて歡喜す。其の後の時に於て母便ち命終り、餓鬼の中に墮す。兒、便ち出家し懃加、精進して阿羅漢果を得たり。河岸の邊の窟中に在りて坐禪す、一餓鬼有り、其の口乾燋

【三】漿水。のみもの。

し飢渇し熱惱して兒の所に來詣る。比丘に語りて言く「我は是れ汝の母なり」と。比丘怪みて言く「母、生存せし時、常に布施を好む。方に今、云何んが返つて餓鬼に墮し斯の報を受くる耶」と。餓鬼、答へて言く「我れ慳貪を以て沙門・婆羅門を供養する能はず、是を以ての故に餓鬼の身を受け二十年の中、未だ嘗て食と及び漿水とを得ず、設ひ我れ河と及び泉池とに向ふも水爲めに乾竭し、若し果樹に向はゞ樹爲めに乾枯する。我今、飢渇熱惱の逼る所となり具に陳ぶべからず」と。比丘、問ふて曰く、「何の緣か是を致す」と。餓鬼答へて言く「我、布施すと雖も心常に慳惜し、諸の沙門・婆羅門の所に於て恭敬の心無く橫に罵辱を加ふ。今、是の報を受く。汝、今若し能く我が爲めに供を設け、佛及び僧に施し、我が爲に懺悔せよ、我れ必ず當に餓鬼の身を脫することを得べし」と。時に兒の比丘、是の語を聞き已り甚だ憐愍を懷き卽便ち勸化せむと餚饍を辦設けて佛及び僧を請ず。供養し訖竟りぬ。時に彼の餓鬼、卽ち其の身を現じ會中に在りて發露し懺悔す。

爾の時、世尊、此の餓鬼の爲めに種々に說法し給ふ。心慚愧を懷き卽ち、其の夜に於て命終に就く。更に身形を受け、飛行餓鬼中に墮す。天冠を頂戴き諸の瓔珞を著けて其の身を莊嚴り比丘の所に來至り、又、復び語りて言く「我、故に餓鬼の身を脫せず、汝更に、我が爲めに在所[三]を勸化し重ねて供養幷びに諸の床褥を設け四方の僧に施せ、乃ち餓鬼の身を脫することを得べし」と。時に、兒の比丘、是の語を聞き已り、復、更に勸化す。飲食幷びに諸の床褥を辦具し、四方の僧に施し、供養し訖竟りぬ。是に於て餓鬼、復、更に身を現じて大衆の前に在り、尋いで更に懺悔す。卽ち、其の夜に於て其の命終を取り忉利天に生れぬ。便ち、此の念ひを作す。「我、何の福を造り此に來生るを得たるや」と。尋いで自ら觀察し、「兒の比丘、我が爲めの故に諸の餚饍を設け、佛及び僧を請ずるに緣り、餓鬼の身を免れ天に來生するを得たり。我、今當に還りて佛世尊及び比丘の恩を報ずべし」と。天冠を頂戴き、諸の瓔珞を著けて其の身を莊嚴り、香、花を齎持ち來りて佛及び兒の比

【三】在所。すみか、故鄕のこと。

丘を供養す。供養已に訖り、却いて一面に坐し、佛の說法を聽き、心開け意解け、須陀洹果を得、佛を繞ること三匝にして還りて天宮に詣る。

佛、是の優多羅の緣を說き給ふ時、諸の比丘等慳貪を捨離れ生死を厭惡み、須陀洹果を得る者、斯陀含[を得る]者、阿那含[を得る]者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き、歡喜し奉行せり。

## 四十七、[一]生盲餓鬼の緣

佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、阿難、衣を著け鉢を持ち城に入り乞食して一人の餓鬼を見る。身は燋柱の如く腹は大山の如く、咽は細針の如く又、復生盲なり。諸の烏・鷲・鵄・梟の啄く所と爲る。[二]宛轉して自ら撲ち。聲を揚げ叫喚し休息有ること無し。爾の時、阿難、餓鬼に問ふて言く「姉妹よ、汝、先身に於て何の業行を造り是の如き苦を受くるや」と。餓鬼答へて言く「日有るの處には燈燭を用ひず、世に如來有り、汝、自ら問ふ可し」と。爾の時、阿難、尋いで佛の所に往き、白して言さく「世尊よ、我、向者に、城に入り乞食し一人の餓鬼を見るに極めて苦惱を受く、稱て計ふべからず」と。

佛、如來に向ひ具に事狀を說く。「不審なり、世尊よ、彼の餓鬼は宿に何の業を造りて此の報を受けし耶」と。

爾の時、世尊、阿難に告げて言はく「汝、今、諦かに聽け、吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし」と。『此賢劫の中、波羅㮈國に佛有りて出世し給へり、號して迦葉と曰ふ。諸の比丘を將ゐ遊行し教化し、次で鹿野苑の中に到り給ふ。時に女人有りて身、懷妊を抱え佛、世尊を見奉り、甚だ信

【一】生盲餓鬼緣。梵本 No. 47 Jātyandha.

【二】宛轉。まろぶこと。

敬を懷く。十月を滿足し、一人の女兒を生む。端正にして殊に特れ、人の敬ふ所となる。年、漸く長大し佛の所に往詣し佛の說法を聽きて心に信敬を懷き、家の中に還歸り、二親に白して言く「唯、哀愍を垂れて道次に在ることを聽せ」と。父母固く遮ぎるも止めしむること能はず、遂に便ち出家し比丘尼と作る。時に彼の父母、此の女の爲に僧伽藍を造り又諸の比丘尼を請じ共に寺の中に住す。時に長者の女、[三]戒律の中に於て少しく毀犯有り、諸の比丘尼驅ふて寺を出でしむ。心に慚愧を懷き家に歸ること能はず。他の舍に寄住し、大いなる瞋恚を生ず。便ち、此言を作さく「我、自ら舍有りて其の中に止住す、今は云何、[彼等]返りて更に我を驅うて自ら用つて住止す。」と。卽便ち彼の長者の居士に向ひ、諸の比丘尼の種々の過惡を說く。「狀、餓鬼に似たり。自ら生活せず、但百姓に仰ぐのみ、我をして身を受け此輩を見る莫らしめむ」と。是の誓を作し已り、其の後命終り餓鬼の中に墮し今生盲を得たり』と。

佛、阿難に告げ給はく「爾の時彼長者の女の出家入道し驅れて寺を出て惡口誹謗せしものを知らんと欲せば、今の生盲餓鬼是れなり」と。佛、是の餓鬼の緣を說き給ふ時諸の比丘等、各々身・口・意の業を守護り生死を厭離る。須陀洹を得る者、斯陀含[ゝを得る]者、阿那含[を得る]者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を得る者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ひし所を聞き歡喜し奉行せり。

## 四十八、[一]長者若達多、慳貪餓鬼に墮するの緣

佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、名を若達多と曰ふ。財寶量り無く、奴婢・僕使・象・馬・牛・羊、稱て計ふべからず。時に、彼の長者、[二]城を出て遊行し祇洹の中に詣り、佛世尊を見奉るに三十二相・

---

【三】戒律。五戒十善戒乃至二百五十戒など、佛徒の邪非を防止する法律をいふ。

【一】長者若達多慳貪墮餓鬼緣。梵本 No.48. Çrāddhi.

【二】出城遊行。麗本による。

八十種好、光明普く曜き百千日の如し。其の身を莊嚴し心に信敬を懷き前みて佛の足を禮し、却きて一面に坐し、佛の說法を聽き心に歡喜を生じ、還歸りて家及び諸の眷屬に辭し入道を求索む。時に、諸の親屬都て悉く聽許す。還歸りて佛に白さく「出家を求索む」と。佛、即ち告げて言く「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成る。時に、諸の親族及び諸の人民、其の先に是れ豪富の子、出家入道せしを以つて競うて衣と鉢と種々の須ふる所のものを施す。既に之を得已り、慳貪の心を生じ同梵行者に施與うる能はず。其の後、命終り餓鬼の中に墮して、還び衣と鉢とを守る。時に、諸の衆僧、其の世を去るを見て其の房戶を開き、尸骸及び衣鉢とを收め[三]闍維羯磨せむと欲す。而して此の室中に一餓鬼を見る。身は燋柱の如く狀貌畏るべし、此の衣鉢を守る、敢て近づく者無し時に諸の比丘、是事を見已り往きて世尊に白すに具に見る所を陳ぶ。是に於て如來、諸の比丘を將ゐて室の中に來り入り餓鬼に語りて言く「咄！慚愧無きや、汝、前身に於て出家し入道し利養を貪著し、肯て惠施せず、今、餓鬼の中に墮して此の醜形を受く。汝、今、云何が慚愧を生ぜず、故に復還り來り仍つて衣・鉢を守るや」と。慳貪に諸の過咎多く能く衆生をして惡道に墮せしむを呵責し、佛、即ち、其の爲に種々に說法し給ふに、心開け意解け深く慚愧を生じ即ち衣鉢を以て衆僧に捨與へぬ。其の夜半に於て便ち命終を取り、更に餘形を受け飛行餓鬼の中に墮す。端正殊に妙れ諸の瓔珞を著け其の身を莊嚴り、身より光明を出し、祇洹を照す。虛に陵りて遊行し天と異ること無し。佛の所に來詣し前みて佛の足を禮し却きて一面に坐す。佛、即ち其の爲めに種々に說法し給ふに、心開け、意解け、歡喜びて去れり。

其の晨朝に於て諸の比丘等白して言さく「世尊よ、昨夜の光明、祇洹を照す、是れ[四]梵・[五]釋・[六]四天王と爲す乎、[七]二十八部の鬼神將なり耶、是れ他方の諸大菩薩來り聽法を爲す耶」と。佛、比丘に告げ給はく「是れ、釋・梵・二十八部の諸神王に非るなり、乃ち、是の舍衞城の中の大富長者、出家

【三】闍維羯磨、焚燒の所作。荼毘の事。

【四】梵。梵語(Brahmā)。梵天のこと。色界の諸天婬欲を離れて清淨なるを總じて梵天といひ、其中別して初禪天中の主を大梵とも梵王とも云ふ。

【五】釋。帝釋のこと、忉利天の主なり、須彌山の頂喜見城に居て他の三十二天を統領す。

【六】四天王。帝釋の外將なり、東は持國天、南は增長天、西は廣目天、北は多門天の四天の王のこと。

【七】二十八部鬼神。毘沙門等の四天王に各々二十八部の鬼神衆あり、それ〳〵の神衆の大將のこと。

し入道して近日命終し飛行餓鬼の中に墮す、香・花を齎持ちて來り我を供養す。是れ其の光耳」と。

佛、是の緣を說くの時、諸の比丘等慳貪を捨離れ生死を厭惡み、須陀洹を得る者あり、斯陀含〔を得る〕者あり、阿那含〔を得る〕者あり、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 四十九、【一】餓鬼、自ら生み還び五百の子を噉ふ緣

佛、王舍城の迦蘭陀の竹林に在しき。

時に、尊者【二】那羅達多衣を著け鉢を持ち城に入り乞食す。本處に還歸りて飯食し已訖り。遙に祇洹を見るに赤きこと血の色の如し。其の所以を怪しみ尋いで卽ち往きて看一人の餓鬼を見る。肌の肉消盡し支節、骨立し、一日一夜五百の子を生む。【三】羸瘦し【四】尪弱にして氣力乏少なり、當に生まむとするの時、荒悶し【五】殞死す、支節解散し極めて飢渴の逼切する所と爲る。生むに隨つて隨ひて噉ひ終に飽足する無し。時に那羅達多、便ち前みて問ふて言く「汝、何の業を造り斯の苦報を獲るや」と。餓鬼答へて曰く「汝、今、自ら佛世尊に問ふべし、當に汝の爲に說くべし」と。時に那羅達多、尋いで佛の所に往き、前みて佛の足を禮し、卻きて一面に住す。諸佛の常法として先に意を以て問訊し給ふ「汝、今に於て何の異事を見るや」と。那羅白して言さく「向者遊行し一餓鬼を見るに、一日一夜五百の子を生み、極めて飢渴の爲に生み已り還び噉ふ、不審なり、世尊よ、宿に何の業を造り斯報を受けし耶」と。

佛、那羅達多に告げ給はく「若し知らむと欲せば好く至心に聽け、吾汝の爲めに分別し解說すべし」と。『此の賢劫の中波羅㮈國に一人の長者有り、金・銀・珍寶・奴婢・僕使・象・馬・牛・羊稱て計ふべ

---

【一】餓鬼自生還噉五百子緣、梵本 No. 48. Putra。
【二】那羅達多、梵語（Nala-da.）。
【三】羸瘦。おとろへやせること。
【四】尪弱。かよわし。
【五】殞死。死すること。

からず、唯一夫人ありて、子息有ること無し。神祇に禱祀り子有ることを求索む、了に得ること能はず、時に彼の長者卽便ち更に【六】族姓の家の女を取る。未だ久しからざるの間に便ち妊有りと覺ゆ、其の大夫人其妊有るを見て便ち嫉妬を生じ密に毒藥を與へ、彼をして墮胎せしむ。姉妹眷屬卽ち其の所に詣る。彼の大婦と極めて共に鬪諍し遂に相ひ打ち棒つ。其の虛實を問ふ。其の大婦、正に實を道はむとすれば其交に死するを恐れ、正に道はざらむと欲して苦痛言ひ叵し、逼切急を得て【七】呪詛を作すらく「若し我眞實に汝の胎を墮しなば我身を捨てゝ餓鬼の中に生じ一日一夜、五百の子を生み、生み已り隨ひて噉ひ終に飽食せざらむ」と。是の誓を作し已り尋いで卽ち放ち去る』と。

佛、那羅達多に告げ給はく「彼時の大婦を知らんと欲せば、嫉妬の心を生じ他子を墮し、故に妄に呪誓を語り、餓鬼中に墮して今是の報を受けぬ」と。

時に諸の比丘、佛の是の嫉妬の心の諸の過患多く能く衆生をして惡趣に墮せしむと說き給ふを聞き、咸共に捨離れ生死を厭惡み心開け意解け須陀洹を得る者、斯陀含［を得る］者、阿那含［を得る］者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 五十、【一】嚪婆羅、餓鬼に似るの緣

佛、毘舍離の獼猴河岸の重閣講堂に在しき。

時に、彼の城中一人の長者有り、名を遮羅と曰ふ。【二】疋偶を選擇し娉つて以て婦と爲す。諸の音樂を作し以て之と娛樂す、其の婦懷妊す、臭くして近く可らず、夫、便ち問ふて言く「汝、先に爾らず、今は何の緣にて此の臭穢有るや」と。婦答へて言く「此れ必ず是の我が胎中の子の業行の致す所ならん。是れを以て爾らん」と。十ケ月を滿足し一男兒を生む、連骸骨立し羸瘦し燋悴し相ひ見



【六】族姓。同族。

【七】呪詛。のろふこと。

【一】嚪婆羅似餓鬼緣。梵本No.50. Jāmbāla. 阿育譬喩第十七。

【二】疋偶。匹偶つれあひのこと。

るべからず、又復、糞屎を身に塗りて生れぬ。年漸く長大し家に在ることを欲せず、糞穢を貪嗜し、背て捨離せず。時に彼の父母及び諸の親族其の是の如きを見て惡みて見るを欲せず、驅ひて舍を遠らしめ近づくを得ざらしむ。卽便ち[三]闇行し糞屎を求索めて用つて甘饍と爲す。時に諸の民衆其の是の如きを見て因つて爲めに字を立て闍婆羅鬼と名づく。時に彼の國中諸の外道有り、偶行き値ひ見て、讃えて言く「善き哉」と。是の語を聞き已り甚だ用つて欣慶ぶ。喜び自勝へず、前みて外道に白さく「慈哀憐愍し道次に在るを聽せ」と。時に諸の外道、卽ち出家と爲す、敎へて裸形ならしめ灰を以て身に塗り淨行を修しぬ、時に闍婆羅、復道に在りと雖も故に糞穢不淨の處を貪ぼる。時に諸の外道其の是の如きを見て咸共に呵嘖し、或は見て鞭打つ。「汝、今、是の人、何の緣にて是の如き處の不淨を樂しむや」と。

　時に闍婆羅、諸の外道の爲めに數々呵責され、或は鞭打たれ、之を捨てゝ去り、河岸の溝坑に詣り自ら用つて歡喜す。時に彼の河岸に、復五百の餓鬼有り、其の中に依住す。闍婆羅の來るを見る。身極めて臭き處、其中に止住す。能く敢て親附する者有ること無し。然れども常に諸の餓鬼に向ひて自らを讃嘆す、「我人間に在り、或は呵嘖せられ及び鞭打たれ極めて苦惱を受く、今此の中に在り、脫して罵り及び鞭打たれず、獨り用つて歡樂す」と。時に諸の餓鬼、闍婆羅の臭き處、不淨を見て都て皆捨てゝ去る。時に闍婆羅、諸鬼に語りて言く「我、此の臭身汝に依憑するが故に數日を存することを得。汝等、今復我を捨てゝ去る。我、今後に在り、云何が活ることを得む」と。是の語を作し已り、甚だ以つて苦惱し、愁憂ひ地に躃す。

　爾の時、世尊晝夜六時に衆生を觀察し「誰か應に度すべき、尋で往き之を度せむ」と。闍婆羅を見給ふに、衆の伴侶を失ひ愁憂ひ困苦し、悶絕して地に躃る。尋いで坑所に往きて說法を爲し、歡喜せしめ給ふ。時に闍婆羅、佛世尊を見奉るに諸根寂定なり、光明暉曜き百千の日の如し。其

---

【三】闇行。くらひにゆくこと。

の身を莊嚴り心に歡喜を懷き、五體を地に投げ白して言く「世尊よ、世間頗る我等比の如き斯の下の人の出家を得ること有りや不や」と。佛、嚪婆羅に告げ給はく「我が此の法の中には尊卑にて出家を聽さゞること有る無し」と。時に嚪婆羅、佛の語を聞き已り前みて佛に白して言さく「慈哀憐愍して道次に在るを聽し給へ」と。爾の時、世尊、尋いで金色の右の臂を擧げて之に告げて言く「善く來れ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成る。威儀、詳序として十二臘の比丘の如く異り有ること無し、既に佛恩を蒙り出家を得已りぬ。卽ち、佛前に於て偈を說きて言く、

　今、佛の恩德を蒙り　意に稱へ願の如きを得て、　臭穢の身を除き去り、　沙門と爲るを成し得ぬ。と。

爾の時、世尊、嚪婆羅に告げ給はく「汝、今我が法の中に於て已に出家を得たり。懃修繫念し未だ久しからざるの間に阿羅漢を得、三明・六通・八解脫を具へ、諸天、世人皆共に敬仰すべし」と。時に諸の比丘是の事を見已り佛に白して言く「世尊よ、今、此の嚪婆羅比丘は、宿に何の業を造り、斯の罪報を受け、復何の緣を以て佛世尊に値ひ阿羅漢果を獲」と。

爾の時、世尊、諸の比丘の爲めに偈を說いて言く、

　宿に善惡の業を造り　百劫にして朽ちず　罪業の因緣の故に　今、是の如き報を獲。

時に諸の比丘、佛世尊の此の偈を說き給ふを聞き已り前みて佛に白して言さく「不審なり、世尊よ、過去世の時其の事云何、唯、願くば世尊よ、敷演し解說し給へ」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『此の賢劫中、人壽四萬歲[の時に]、波羅㮈國に佛有りて出世し給へり、迦羅迦孫陀と號す。諸の比丘を將ゐ遊行し敎化し寶殿國に到り給ふ。時に彼土の王、佛の來至し給ふを聞き心に喜悅を



【四】臘。僧の位次に功を積みたる年を數ふる語。

【五】迦羅迦孫陀。梵語、(Krakucchanda.) 過去七佛の第七、現在賢劫佛の第一首なり。

懷き、諸の群臣を將ゐ、城を出でゝ奉迎しぬ。到り已り前みて佛の足を禮し、長跪して佛を請ず、「唯、願くば世尊よ、慈哀憐愍し我が三月四事の供養を受けよ」と。佛、即ち、「然なり可し」と。時に彼の國王、佛の許可を知り、尋いで卽ち、佛及び比丘僧の爲めに房舍を造立し、一比丘を請じ用つて寺主と作し、僧事を管理せしむ。「比丘」每に一日に於て餘に行きて在らず。一羅漢比丘有り彼の寺の中に入る。威儀、詳序にして甚だ觀看す可し。寺主と檀越と其の是の如きを見て請じて浴室に入り其の爲めに洗浴す。復香油を以て其の身の上に塗る。時に彼の寺主、外より來入し、此の羅漢の香油を以て身に塗るを見て心に嫉妬を懷き便ち惡罵を出す。「汝は出家の人なり、何の爲めに是の如きや、人糞を汝の身上に塗るに似るが如し」と。是の語を作し已る。時に香油を身に塗りし彼の羅漢、心に憐愍を懷き身を虛空に踊らして十八變を現ず。時に彼寺主是の變を見已り、深く慚愧を懷き彼の羅漢に向ひ懺悔し過を謝す。各所止に歸る。是の業緣を以て五百世の中、身常に臭き處にして附近く可からず」と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の寺主の比丘惡口し罵る者を知らむと欲せば今の悶婆羅比丘是れなり、彼の時に於て曾つて出家し、故に阿羅漢に向ひ罪咎を懺悔するに由つて、今我に値ふて出家得道を得」と。佛、是の悶婆羅を說くの時、各々自ら身口意業を護り嫉妬の心を捨て、生死を厭惡み。須陀洹を得る者、斯陀含「を得る」者、阿那含「を得る」者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

撰集百緣經卷第五

# 巻の第六

## 諸天來下供養品第六

### 五十一、賢面[一]、慳貪にして毒蛇の身を受くるの緣

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、名を賢面と曰ふ。財寶量り無く稱て計ふ可からず。諸の諂[二]曲多く慳貪にして、嫉妬し、終に施す心無し、乃し飛鳥の驅るに至るまでも舍に近づけず。諸の沙門及び婆羅門、貧窮の乞匃[三]にして其より乞ふ者有れば惡口して之を罵る。資產を懃求し積聚するを業と爲し惠施を修せず。其の後命終りて毒蛇の身を受け還び本財を守る。之に近づく者有れば瞋恚猛盛にして眼を怒らして之を視、能く死せしむ。遂に之のこと頻婆娑羅王に聞ゆ。王、是を聞き已り心に驚怪を懷き是の思惟を作す。「今、此の毒蛇瞋恚熾盛にして見れば則ち人を害す。唯、佛、世尊、能く調伏し給ふを得む」と。是の念ひを作し已り、卽ち群臣を將ゐ、佛の所に往詣し佛の足を頂禮し却きて一面に坐す。佛に白して言さく「世尊よ、今、此の城の中に一人の長者有り。資財量り無きも肯て惠施せず、今便ち命終り毒蛇の身を受け還び本財を守る。瞋恚熾盛にして近かば則ち人を害す、唯、願くば世尊よ、此の蛇を降伏し人を害せしむること莫れ」と。佛、默して許可し給へり。其の後日に於て衣を著け鉢を持ち蛇の所に往詣し給ふ。蛇、佛の來るを見て瞋恚熾盛にして、如來を螫さむと欲す。佛、慈力を以て五つの指の端に於て五色の光を放ち彼の蛇の身を照し給ふに。卽ち清涼を得て熱毒消除す、心に憘悅を懷き頭を擧げて四顧す、是れ何の福人ぞや、能く此の光を放ち我が身體を照し、清涼を得せ使め快きこと言ふべからず」と。



【一】賢面慳貪受毒蛇身緣。梵本 No. 51. Nṛśmasarpa. 如意樹譬喩第六。
【二】諂曲。へつらふこと。
【三】乞匃。乞人に同じ。

爾の時、世尊、蛇の調伏せるを見て之に告げて曰く「賢面長者よ、汝、前身に於て慳貪を以ての故に此の弊形を受く、今は云何、故に復惜著し毒に縱り人を煞す、惡を爲すこと滋甚し。將來の世に於て必ず大苦を受けむ」と。蛇、佛の語を聞き「深く自ら【四】剋責し蓋障の雲除こる自ら宿命を憶ひ長者と作るの時、作す所の惡業今是の報を得たり。方に佛の所に於て深く信敬せむ」と。

爾の時、世尊、此の毒蛇の心已に調伏するを知りて之に告げて言く「汝、前身に於て我が語に順はず、此の蛇形を受く、今宜く調順して我が教勅を受くべし」と。蛇、佛に答へて曰く「佛の授けらるゝに隨ひ敢て勅に違はざらむ」と。佛、蛇に告げて言く「汝、若し調順せば我が鉢の中に入れよ」と。佛の語、已竟り、尋いで鉢の中に入る。將ゐて林の中に詣り給ふ。時に頻婆娑羅王及び諸の臣民、佛、世尊の毒蛇を調伏し鉢の中に盛りて來り給ふを聞き、合國の人民皆共に往きて看る。佛の鉢中に在る蛇、衆人を見て深く慚愧を生じ、此の蛇身を厭ひ即便ち命終り、忉利天に生れぬ。即ち自ら念言やう「我、何の福を造り天に來生するを得たるや」と。即ち自ら親察し、「世間に在りて毒蛇の身を受け佛を見るに由るが故に信敬の心を生じ、蛇身を厭惡ひ此に來生するを得て、天の快樂を受くるを見る。今、當に還りて佛世尊に恩を報ずべし」と。天冠を頂戴き諸の瓔珞を著けて其の身を莊嚴り香、花を齎持ち、光明を照して曜き佛の所に來詣し、前みて佛の足を禮し供養し訖已り、却きて一面に坐し、佛の說法を聽き心開け意解け、須陀洹果を得たり。即ち佛前に於て偈を以て佛を讚ず。

巍巍たる大聖尊、　功德悉く滿足す、　能く諸の盲冥を開き、　尋いで佛果を得給へり。　煩
惱の垢を除去き　生死海を超越え、　今、佛の恩德を蒙り、　三惡道を閉づることを得たり。

爾の時、天子佛を讚歎し已り、佛を繞ること三匝にして還りて天宮に詣りぬ。

時に頻婆娑羅王、其の晨朝に於て佛の所に來詣し白して言さく「世尊よ、昨夜の光明世尊を照す、

【四】剋責、きびしく責むること。

是れ釋・梵・轉輪聖王、二十八部鬼神將と爲す耶」と。佛、王に告げて曰く「亦、釋・梵・諸天神等來り法を聽くに非ざるなり。乃ち是れ昔日、慳貪の長者天上に生ることを得て來り我に供養す、是れ彼の光耳」と。時に頻婆娑羅王、佛の是の慳貪の緣を說くを聞くの時、會に在る諸人須陀洹を得る者、斯陀含「を得る」者、阿那含「を得る」者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 五十二、月光兒、天に生るゝの緣[一]

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に彼の城中に一人の婆羅門有り。其の營務む所、田を耕すを業と爲す、其の匹對[二]に於て婢を以て婦と爲す。十ケ月を滿足し一男兒を生む。名を月光と曰ふ。年漸く長大し須達[三]長者の兒と外に出でゝ、觀看し、僧坊の中に到り、諸の比丘の懃加誦習を見る。時に婆羅門の兒、即便ち一つの四句偈を聞くを得て深く信敬を生じ、即ち家に還歸り、七日の却後即便ち命終り、忉利天に生る。時に兒の父母悲號し涕泣し、心情懊惱し自ら制すること能はず。即ち死屍を抱き塚間に往詣し號泣して言く「我、唯一子のみ、今、我を捨てゝ去りぬ。誰れか當に我を看るべき、痛み言ふ可からず、我寧ろ死に隨はむ。家に歸ること能はず」と。時に諸の親屬種々に諫曉す。故に肯て歸らず、精誠、感應し、兒の宮殿をして動搖し安んぜざらしむ。尋いで自ら觀察し、人の中より天上に生るゝを得たるを知り、及び父母を見るに塚の間に在り、我が死屍を抱き悲感し哽咽して能く自ら止まらず、我が宮殿動搖して是の如きを感ず。其の父母を愍れみ、即ち、天より下り、自ら其の身を變じて仙人の形と作り、父母の邊に到り五熱「を以て」身を炙る。時に婆羅門、仙人に問ふて言く「汝、今、



【一】月光兒生天緣。No. 52. Candra. 如意樹譬喩第十五。
【二】匹對。匹偶に同じ、つれあひ。
【三】長者。聖本によりて加ふ。

何の故に五熱[を以て]身を炙る、何をか求むる所と爲すや」と。仙人、答へて曰く「我、今一國王と作らむことを欲求む。金を以て車を作り、衆寶を〔四〕厠塡し、日月の天子我が左右に在り、四天王をして歩みて我が車を牽かしめ四天下を遍る。亦快ならず乎」と。時に婆羅門、仙人に答へて曰く「汝、今、假使百年の中晝夜に身を炙るも此の如き珍寶の車、及び諸天の汝を侍衞する者を求めむと欲して終に得べからず」と。是に於て仙人、復婆羅門に問ふ。「汝、今是の死屍を抱き何の願を求めむと爲すや」と。婆羅門、言く「我が唯一子、我を捨てゝ死去す、是を以て懷き抱く、還び活かし得むことを望む」と。仙人、答へて曰く「汝、今、是の死屍を抱き晝夜號泣き百年を滿つとも子を終に得ること叵し」と。時に婆羅門、仙人の語を聞きて心に慚愧を懷き止めて復び哭かず。默然として住す。時に兒の天子、仙人の形を變じて還び本身に復り、父母に白して言さく「汝の一子とは今我身是れなり、我一時を以て僧坊の中に詣り一つの四句偈を聞きぬ。心に歡喜を懷き内に信心を發し、便ち命終を取りて今、天に生るゝことを得たり。我、今、父母の憂苦を解釋んと欲爲するが故に仙人の形と作り來りて相ひ〔五〕曉喩す」と。是に於て父母、天子の語を聞き尋いで即ち信解し喜び自ら勝ず。時に天子天冠を頂戴き諸の瓔珞を著けて其の身を莊嚴り香・花を齎持ちて父母に勸めて共に佛の所に詣り佛を供養し已り、却きて一面に坐す。佛、即ち其の爲に〔六〕四諦の法を說き給ふに、心開け意解け、一時に倶に須陀洹果を得たり。時に諸の比丘是の事を見已り前みて佛に白して言さく「今、此の天子宿に何の福を植え、能く今に於て善言し慰喩し父母を解釋し止めて涕泣せざらしめ及び道果を獲たる」と。佛、比丘に告げ給はく「但だ今日父母を解釋し憂惱せざらしむるのみに非ず、過去世の時も亦曾つて解釋して憂惱せざらしむ」と。時に諸の比丘、是の語を聞き已り復佛に白して言さく「不審なり、世尊よ、過去世の時其の事云何。唯、願くば世尊よ敷演し解說し給へ」と。

---

【四】厠塡。雜へはめ込むこと。

【五】曉喩。さとすこと。

【六】四諦法。梵語(Catvāri-āryasatyāni)。巴利語(Cattāri ariyasaccāni)。といひ、一に苦諦、三界六趣の苦報、二に集諦、貪瞋等の煩惱及び善惡の諸業なり、これ三界六趣の苦報を集起する故なり、三、滅諦、涅槃なり、惑業を滅し生死の苦を離れて眞空寂靜なれば滅と名く、四、道諦、八正道これなり、是れ能く涅槃に通ずれば道と名く、この四諦聖者所見の眞理なり。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽けよ、吾、當に汝の爲に分別し解說すべし」と。『乃往、過去無量世の時、波羅榛國に一人の愚人有り、常に好みて賊を作す。邪淫にして欺誑なり。伺官[之を]捉へ得て、繫縛して王に詣る。王、罪狀を問ふ。上の如く實を首す。尋いで勅して殺さしむ。爾の時に當り、我其の子と爲る。性を受くること慈仁・調順・賢柔なり、國を擧げて聞知す。天、父の爲めの故に彼國王に向ひ父の命を救はむと請ふ。是の如くして三たびに至る。王、違ふこと能はず。放ちて殺さざらしめ、意に隨つて去ることを得たり』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の賊人と作る者を知らむと欲せば今の天子の父是れなり。爾の時の兒とは今の天子是なり。一時、迦葉佛の所に於て、三自歸を受くるに由るが故に今、我に値ふことを得て出家得道せり」と。佛、是の天子の緣を說く時、須陀洹を得る者、乃至無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 五十三、[一]華を採り佛に供養し生天を得るの緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中の豪富長者皆共に聚集り泉の水上に詣り、倡伎の樂を作して自ら娛樂し娑羅花會を爲す。時に彼の會の中、一人を遣はし林樹の間に詣り、沙羅花を採り諸の花鬘を作る。時に花を採る人、還りて會所に來り路に世尊を見奉る。三十二相八十種好光明普く曜き百千の日の如し。心に歡喜を懷き前みて佛の足を禮す。採る所の花を以て佛世尊に散じ、是に於て去りぬ。還りて復樹に上り更に花を採らむと欲す。樹の枝折るゝに値ひ墜墮して命終り忉利天に生れ端正殊に妙れ、娑羅の花を以て宮殿を作る。帝釋、問ふて曰く「汝、何處に於て福業を造りて此に來生するや」と。

【七】欺誑。あざむきたぶらかすこと。

【一】採華供養得生天緣。梵本No.53. Sala. 寶石譬喩第五、二十二譬喩第十五。

天子、答へて曰く「我、閻浮提にて沙羅花を採り世尊に値見し花を佛の上に散じ、是の功德に緣り此に來生するを得たり」と。爾の時、帝釋、此の天子を見るに身體[二]挺特し端政第一なり。偈を說きて讚歎す。

身は眞金色の如く、　照曜にして極めて鮮明、　容貌極めて端政、　諸天の中最勝なり。

爾の時、天子即便ち偈を說き帝釋に答へて曰く、

我、佛の恩德を蒙り、　散ずるに沙羅花を以てす、　是の善因緣に由り、　今、此の果報を得たり。

爾の時、天子是の偈を說き已り、即ち帝釋と共に佛の所に來詣し佛の足を頂禮し却きて一面に坐す。佛、即ち、其の爲めに種々に說法し給ふに、心開け意解け、二十億の邪見業障を破り須陀洹果を得たり。心に欣慶を懷き、即ち佛の前に於て偈を說きて佛を讚ず。

巍巍たり大聖尊、　最上にして比有る無し　父母及び師長　功德及ぶ者無し。　[三]四大海を乾竭し　白骨の山を超越し　[四]三惡道を閉塞し　能く、[五]三善門を開きぬ。

爾の時、天子、此の偈を說き已り、佛の足を頂禮し佛を繞ること三匝にして還りて天上に詣りぬ。

時に、諸の比丘、是の事を見已り、其の晨朝に於て前みて佛に白して言く「世尊よ、昨夜の光明普く祇洹を曜かせり。是れ、帝釋、梵天王等、四王天と爲す耶、二十八部の鬼神將「と爲す」耶」と。佛、比丘に告げ給はく「是れ、帝釋・梵天・鬼神・四天王等に非ず、乃ち、是れ昔日沙羅花を採り、我に供養する者今、天に生るゝを得て諸の香・花を持ち來りて我に供養せり。是れ、彼の光耳」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

---

【二】挺特。ぬきいづること。

【三】四大海。須彌山の四方にある大海なり。

【四】三惡道。地獄・畜生・餓鬼の三道。

【五】三善門。無貪・無瞋・無癡の三善。

## 五十四、[一]功德意、塔を供養し生天するの緣

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

時に、彼の頻婆娑羅王、毎日三時、諸の官屬を將ゐ佛の所に往詣し世尊を[二]禮觀す。其の後の時に於て年漸く老大す。身體、轉た重し。月日故に往きて禮拜すること能はず。時に諸の官人王に啓白して言さく「佛世尊より、髮爪を索め、後宮の中、塔寺を造立し、此に於て禮拜し、香花、燈明にて之を供養せよ」と。時に王、「然なり、可し」と。佛の所に往詣し、啓白すらく「世尊よ、卽ち髮爪を以て頻婆娑羅に與へ給へ、其の宮內に於て塔寺を造立し繒の[三]幡蓋を懸け香・花・燈明［を以て］日に三時供養せむ」と。時に王太子阿闍世、提婆達多と共に陰謀を爲し父王を殺害し、自ら立ちて主と爲る。尋いで宮內に勅し彼の塔を禮拜し供養するを聽さず。之を犯す者有らば[四]罪不請に在り。

其の後の時に於て七月十五日、僧[五]自恣の時一人の宮人有り、功德意と字す。而して自ら念言やう。「此の塔は乃ち是れ大王の造く所なり。今、[六]坌汚れて人の掃き灑ぐもの無し。我、今、此の身臨みて當に刑戮を受くべし、彼の塔を掃き灑ぎ香・花・燈明にて之を供養せむ」と。是の念を作し已る。尋いで卽ち燈を然し彼の塔を供養す。時に阿闍世王、遙に樓上に在り彼の燈明を見て卽ち大いに瞋恚す。尋いで卽ち人を遣し往きて是れ誰かと看る。功德意、燈を然し供養するを見る。使者還り來り狀を以て王に白しぬ。王勅して喚び來り、其の所由を問ふ。時に功德意、卽ち王に答へて曰く「今、此の塔は先王の造る所にして供養の處なり。此の良日を以て掃除し清淨にし。燃燈供養せり」と。時に阿闍世、是の語を聞き已り、功德意に告ぐ「汝、我先に約勅する所を聞かずや」と。功德意言く「王の勅する所を聞きぬ。然れども王の今其の治化する所先王に勝れず」と。時に阿闍世、



【一】 功德意供養塔生天緣。梵本 No. 54. Crimati。如意樹譬喩第二十。

【二】 禮觀。まみへて禮拜すること。

【三】 幡蓋。はたとき、ぬがさ。

【四】 罪不請。官憲より處罰を吟味せざるも既に罪の成立し居ること。

【五】 自恣。梵語(Pravārna.)夏安居の竟日他の淸衆を恣に己が所犯の罪を各他の比丘にあげしめ之懺悔するをいふ、新に隨意といふ。

【六】 坌汚。ちりあくたにけがれること。

是の語を聞き已り倍瞋恚を增し、即ち劍を以て功德意を斬殺す。此の善心に乘じ、即便ち命終り忉利天に生る。身の光照り曜き一由旬を滿せり。時に天帝釋及諸天等咸來り觀看して之に問ふて言く「汝、何の福を造り此に來生するを得たるや、光明殊に特れ諸天に倍勝れり」と。爾の時、天子、即ち偈頌を以て帝釋に答へて曰く、

如來、世に出で給ひ　日月の光明の如し、　彼の諸の黑闇を照し　皆、悉く普く明ならしめぬ。　見る者歡喜を生じ　心の垢自然に除こる、　善き哉、無上尊、　衆生の良福田なり。

信心福德を修するに　我、身命を惜まず　害はれ命終を致し　天上に生るゝを得たり。

爾の時、天子、帝釋に向ひ此の偈を說き已る。天冠を頂載き諸の瓔珞を著け其の身を莊嚴り、諸の天衆を將ゐ各香・花を齎し下りて佛を供養す。光明普く曜き竹林に於て常に倍々踰たり。前みて佛の足を禮し却きて一面に坐しぬ。佛、即ち其の爲に四諦の法を說き給ふに、心開け意解け、須陀洹果を得たり。即ち是の語を作す。「自ら念ふに我、昔白骨を積み須彌に過ぎ、涕泣し雨淚すること巨海よりも多し、血肉を乾竭し徒に身命を喪へり、今、以て離るゝことを得たり」と。是の語を作し已り、佛を繞ること三匝にして天宮に還りね。

時に、諸の比丘、其の晨朝に於て世尊に白して言さく「昨夜の光明殊に常に倍せり。是れ帝釋・梵天・四天王と爲す乎、二十八部の鬼神大將なりや」と。佛、諸の比丘に告げ給はく「亦、梵天・鬼神大將に非るなり。乃ち是れ頻婆娑羅王の后宮の婇女功德意と名く。塔を供養するが故に阿闍世王の爲めに害せられ命終りて忉利天に生れ、來りて我に供養す。是れ彼の光耳」と。佛、是の功德意の緣を說き給ひし時、須陀洹を得る者斯陀含「を得る」者、阿那含「を得る」者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

# 五十五、須達多、象に乘り勸化するの緣

佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、名を須達と曰ふ。百千の金錢を以て佛に布施して是の念を作さく「我が今の如きは財寶量無し、祇洹の精舍に百千金を以て佛・僧に布施すと雖も難しと爲すに足らず。今、若し貧窮下賤を勸化し、[一]針縷を[二]減割して用つて布施せむ。乃ち名けて難しと爲さむ、復、量無き邊無く功德を得む」と。是の念を作し已り、即便ち往きて波斯匿王に白しぬ。尋いで便ち「然なり、可し」と。即ち臣佐を遣はし其の城內に於て鼓を擊ち令を唱へ諸人に語りて曰く「須達長者、今、衆人を勸化して以て惠施を修せむと欲す。七日の頭に於て大白象に乘り四道の頭に於て街巷・[三]里陌・處々に勸化せむ」と。時に諸人等心に歡喜を懷き競ひて共に布施す。或るものは、衣服・瓔珞・金銀・寶物・種々の環玔、針縷・領帶を以て家の所有に隨つて持らし用つて布施す。爾の時一人の貧窮の女人有り、[四]客作すること三月一つの[五]張氎を得たり。用つて衣を作るべし。須達長者諸人を勸化するを見て即便ち其の傍らの諸人に問ふて曰く「彼の須達長者、財多く寶饒なり、乏少き所無し。乃ち能く地中の伏藏を見る。今、何の乏しき所ありて、乃ち復人に從つて行乞し索む」と。諸人語りて言く「今、彼の長者實に乏しき所無し。憐愍を爲す故に衆人を勸化し共に福を修し佛及び僧を請ぜむと欲するなり」と。時に此の貧女、是の語を聞き已り心に歡喜を懷きて是の語を作さく「我、先世、布施せざるに由るが故に今、貧窮と爲りぬ。今、若し施さずんば後世遂に劇しからむ」と。復、自ら思惟す「佛の世に値ひ難し、我、今、佛及び僧を請ぜむと欲すと雖も無所有と爲す。我れ、今、身上、唯此の一氎のみ、若し用つて布施せば裸形にして坐せむ。設し用ひざれば後望む所無し。我、今、窮苦なり。會ず當に死に歸すべし、寧ろ此の氎を捨て、持用つて布施せむ」

【一】針縷。はりといとすぢ。
【二】減割。わりまへを分つこと。
【三】里陌。さとのみち。
【四】客作。三月、梵に(Tri-bhirmāsaih prehrepa. M. Léon Feer.)氏は「三月にて、良く骨折つて作りし…」と譯してゐる。客作は勞作の意なり。
【五】張氎。織物。

と。是の念を作し已り、即ち、此の氎を以て[六]牕牖の中に於て須達に擲げ與へぬ。須達、得已り、人を遣はし往きて看せしむ。貧しき女人裸形にて坐するを見る。時に彼の使者之に問ふて言く「汝、今、何の故に衣を用て布施するや」と。貧女、答へて言く「我、來世遂に更に貧劇しきを畏る。是を以ての故に持用つて布施せり」と。時に彼の使者具に事狀を以て往きて須達に白す須達、聞き已り歎じて言く「奇なる哉」と。即ち身上著くる所の服飾を脫して用つて貧女に施す。貧女、得已り心に歡喜を懷く。「我、今、布施し現に果報を得たり況や將來の世をや」と。遂に數日を經て貧女命終り忉利天に生る。便ち、自ら念言らやう「我、何の福を造り天上に生るゝことを得たるや」と。尋いで自ら觀察す。人中に在りて極めて貧窮と爲り氎を以て布施するが故に此に來生を得たるを知り、「我、今、當に還りて佛の恩及び須達とに報ずべし」と。天冠を頂戴き諸の瓔珞を著け其の身を莊嚴り、香と花を齎持し下りて佛及び須達を供養す。前みて佛の足を禮し却きて一面に坐す。佛、即ち其の爲めに四諦の法を說きぬ。心開け意解け、須陀洹果を得たり。佛を繞ること三匝にして天に上還歸りぬ。

時に諸の比丘、其の晨朝に於て前みて佛に白して言く、「昨夜、光明照り曜く、如來よ、是れ、釋・梵・四天王・二十八部鬼神大將と爲すや」と。佛、諸の比丘に告げ給はく「亦・釋・梵・諸神王等に非ざるなり、乃ち是れ須達、貧女を勸化し、[貧女]氎を以て布施し天上に生るゝことを得、來りて我を供養す。是れ其の光耳」と。佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の貧窮の女人を知らむと欲せば今此の天子是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 五十六、[一]鸚鵡子王、佛を請ずるの緣

---

【六】牕牖、まど。

【一】鸚鵡子王請佛緣。梵本 No. 56. Culm.

佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。夏安居竟り、諸比丘を將ゐ他國に遊行せむと欲し給ふ。時に、頻婆娑羅王、諸の群臣を將ゐ城を出で、遙に如來を望む。「世尊よ、何の所在と爲す、唯、願くば慈愍し給へ、比丘僧と來りて我が供を受けよ」と。爾の時、世尊、遙に王の意の深く渴仰を生ずるを知り、比丘僧と漸次遊行し摩竭提國に詣り給ふ。諸の群鳥に値ふ。中に鸜鵒子王有り、遙に佛の來り給ふを見て虛空を飛騰し道に逆へて奉迎す。「唯、願くば世尊よ、比丘僧と慈哀憐愍し我が林の中に詣り一宿の請を受けよ」と。佛、即ち、「然なり可し」と「許し給ふ」。時に鸜鵒王、佛の許を知り已り本の林に還歸り、諸の鸜鵒に勅し各來り迎へ奉る。爾の時、世尊、諸の比丘を將ゐ鸜鵒の林に詣り給ふ。各坐具を敷き樹下に在りて坐禪し思惟す。時に鸜鵒王、佛と比丘と寂然として宴坐するを見て甚だ喜悅を懷き、通夜、飛翔して佛と比丘を繞り四向を顧視す、諸の師子・虎・狼・禽獸及び盜賊と世尊、比丘を觸惱する無きや不やと視る。明の清旦に至り、世尊、進引み給ふ。鸜鵒、歡喜びて前に在りて引導き王舍城に向へり。頻婆娑羅に白うして言さく「世尊、今、諸の比丘を將ゐ遂に來り近きに在り給ふ。唯、願くば大王よ、諸の餚饍を設け道に逆へ奉迎し給へ」と。時に頻婆娑羅王、是の語を聞き已り、勅して餚饍を設け幢幡・香・花・伎樂を執持ち諸の群臣を將ゐ道に逆へ奉迎す。時に鸜鵒王、其の夜中に於て即便ち命終り、忉利天に生れ、忽然として長大にして八歲の兒の如し。便ち是の念を作す。「我、何の福を造り此の天子に生れたるや」と。尋いで自ら觀察し、鸜鵒として佛を請じ故らに一宿止住せしめしに由り此に來生し得たると知る。我、今、還りて世尊に恩を報ずべし」と。天冠を頂戴き諸の瓔珞を著け、其の身を莊嚴り、香・花を齎持し佛を供養し却きて一面に坐す。佛、即ち其の爲めに四諦の法を說き給ふ。心開け意解け、須陀洹果を得たり。佛を繞ること三匝にして天上に還歸りぬ。

時に諸の比丘、其の晨朝に於て前みて佛に白して言さく「昨夜の光明、是れ、釋・梵・四天大王・

【三】夏安居。一夏九旬の安居、安居とは外出を禁じて坐禪修學する行事なり。

二十八部鬼神將と爲す耶」と。佛、比丘に告げ給はく「亦、釋・梵・諸神王等に非ず、乃ち、是れ道路にて、鸚鵡子王、我及び僧を林樹の間に請じ一宿止住せしむ。命終りて天に生れ來りて我を供養す。是れ其の光耳」と。時に諸の比丘、復、佛に白して言さく「今、此の天子、宿に何の業を造り鸚鵡の中に生れ、復、何の福を修し法を聞き果を獲たる」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽けよ、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。此の賢劫の中、波羅㮈國に佛有りて出世し給へり、號して迦葉と曰ふ。彼の法中に於て一人の長者有り五戒を受持ちしが、便ち一時に於て一戒を毀犯す、故に鸚鵡の中に生る。餘の四完くして具はる。今、我に値ふことを得て出家して、道を得たり」と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の[三]優婆塞を知らむと欲せば今の鸚鵡天子是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 五十七、王[一]使を遣はし佛を請じ命終して生天するの緣

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。夏安居竟り、諸の比丘を將ゐ他國に遊行せむと欲し給ふ。時に、須達長者、波斯匿王に白して言さく「我等、今者久しく佛に見えず、願くば王よ、今書を修め使を遣はし往きて世尊を請じ、此の間に來詣して共に供養せむ」と。時に波斯匿王、是の語を聞き已り尋いで即ち使を遣し往きて世尊を請ず。書を通じて問を致せり「遙に、世尊を禮し奉る。久しく奉覲えず、唯、哀愍を垂れ、來りて我が請を受け給へ」と。爾の時如來、即便ち「然なり、可し」と。[許し給ふ]。使者還りて王に啓白して言さく「世尊、許可したまへり」と。王、使者に勅して車乘を莊嚴り彼の使者と與に往きて世尊を迎ふ。「願くば哀愍を垂れ此の車に乘り彼の王の請を受け給へ」と。時に佛、答へて曰く「我に[二]六通の神足、[三]七覺の花鬘[四]八聖の道分、[五]五衍の安車有

---

【三】優婆塞。梵語（Upāsaka.）。淸信士近事男・善宿男等譯す、三寶に親近し奉事する義、總て五戒を受けたる男子の稱。

【一】王遣使請佛命終生天緣。梵本（No. 57. Dūta.）。

【二】六通。（1）神境智證通、（2）天眼智證通、（3）、天耳智證通、（4）他心智證通、（5）宿命智證通、（6）漏盡智證通をいふ。

【三】七覺。梵に（Saptabodhyaṅga.）定慧均等ならしむる七法、修道に於て思惡を斷ずること此の七覺の力なり、七覺とは、（1）に擇法覺支、（2）精進、（3）喜覺、（4）輕安（5）念覺、（6）定覺、（7）行捨覺支の七なり。

【四】八聖道分、梵に（Sarva

り、是我が神足、汝の車を須ひず」と。時に彼の使者慇懃に三たび請ふ「唯、願くば矜愍し神足を用ふること莫れ、願くば此の車に乘り彼の王の請を受け給へ」と。爾の時、世尊、其の使者を愍れみ、卽便ち車に上り給ふ。神通の力を以て彼の車乘をして虚を履みて行かしむ。王舍城に至り彼の王の請を受く。時に彼の使者、卽ち其の夜に於て命終を取り忉利天に生れ忽然として長大にして八歳の兒の如し。便ち自ら念言ふやう「我、何の福を修し此の天上に生れたるや」と。尋いで自ら觀察し、世間に在りて、王の使はす所と爲り、佛世尊に車に乘り往至し彼の王の請を受くるを勸め、是の善心を以て天に來至するを知り「我、今、當に還りて佛の恩を報ずべし」と。天冠を頂載き諸の瓔珞を著けて其の身を莊嚴り、香・花を齎持し、光明普く曜き祇洹を照し、來りて佛を供養し前みて佛の足を禮し却きて一面に坐せり。佛、卽ち其の爲めに四諦の法を說き給ふに、心開け意解け、須陀洹果を得たり。佛を繞ること三匝にして天宮に還りぬ。時に諸の比丘、其の晨朝に於て前みて佛に白して言さく「昨夜の光明、是れ、釋・梵・四天大王、二十八部鬼神將と爲す耶」と。佛、諸の比丘に告げ給はく「亦、釋・梵・諸神王等來り法を聽きしに非ざる也、乃ち是れ王の使せし所と爲り我を請ずる者なり、此の善心に乘じ天上に生るゝことを得、來りて我を供養するなり、是れ其の光耳」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 五十八、佛、[一]水牛を度し生天せしむるの緣

佛、[二]驕薩羅國に在しき。

諸の比丘を將ゐ勒那樹下に詣らむと欲し一つの澤の中に至り給ふ。五百の水牛甚だ大きくして凶惡なり。復、五百の放牛の人有り。遙に佛の來りて、諸の比丘を將ゐ此道より行き給ふを見、高聲



mârga.)。八正道分のこと。(1)正見、(2)正思惟、(3)正語、(4)正業、(5)正命、(6)正精進、(7)正念、(8)正定をいふ。此の八法能く邪非を離るれば正と云ひ、能く通じて涅槃に到れば道といふ。

【五】五衍、五行のこと、(1)布施行、(2)持戒行、(3)忍辱行、(4)精進行、(5)止觀行なり。

【一】佛度水牛生天緣。梵本No.58. Mahisa.(水牛)。

【二】驕薩羅。梵語(Koçala.)普通憍薩羅に作る。舍衞國の本名なり。

に叫喚ぶ「唯、願くば、世尊よ、此の道を行き給ふこと莫れ、此の牛群中に大惡牛有り、【三】觝突し人を傷く、過ちを得べきを離ふ」と。爾の時、佛、放牛の人に告げて言く「汝等、今、大いに憂怖する莫れ、彼の水牛、設ひ來り我に觝るゝも吾自ら時を知る」と。比丘、語り言の頃、惡牛卒かに來り、尾を翹げ角を低し、地を跑り吼喚し、【四】跳踉し直ちに前にあり。爾の時、如來、五つの指の端に於て五の師子を化し佛の左右に在り四面を周匝すに。大いなる火坑有り。時に彼の水牛甚だ大に【五】惶怖る。四向に馳走り去る處有ること無し。唯、佛の足の前に少し許りの地有り、【六】宴然として清涼なり。馳奔して趣き向ふ。心意泰然として復怖畏無し、長跪して首を伏し世尊の足を舐む。復、更に頭を仰ぎ、佛如來を視て喜び自ら勝ず。

爾の時、世尊、彼の惡牛の心已に調伏せるを知り、即便ち牛の爲に偈を說きて言く、

盛心、惡意を興し、　來りて我を傷害はむと欲し、　歸誠、勝を得むと望み、　返び來りて我足を舐む。

時に彼の水牛、佛世尊の是の偈を說き給ふを聞き已り、深く慚愧を生じ　【七】欻然として悟り解け、蓋障の雲除こる。先身在ること人道の中に在り、所作の惡業を知り、倍　慚愧を生じ、水草を食はず。即便ち命終り忉利天に生れ。忽然として長大にして八歲の兒の如し。便ち自ら念言ふやう「我、何の福を修し此の天上に生れたるや」と。尋いで自ら觀察すらく「世間に在りて水牛の身を受け佛の化度を蒙むり天に來生し得たるを知り、「我、今、當に還りて佛の恩に報ゆべし」と。是の念を作し已り、天冠を頂載き諸の瓔珞を著けて其の身を莊嚴り、香・花を齎持し佛の所に來詣す。光明、赫奕として佛、世尊を照し奉る。前みて佛の足を禮し却きて一面に坐す。佛、即ち、其爲に四諦の法を說き給ふ。心開け意解け、須陀洹果を得たり。佛を繞ること三匝にして天宮に還りぬ。時に、放牛の人、其の晨朝に於て佛に白して言さく「昨夜の光明、是れ釋・梵・四天王・二十八部鬼神將と爲

【三】觝突。牛の角にてつくこと。

【四】跳踉。おどりたちもとほる。

【五】惶怖。おそれおそるゝこと。

【六】宴然。たのしき貌。

【七】欻然。たちまち。

す耶」と。佛、放牛の人に告げ給はく「亦、・釋・梵・諸神王等法を聽きしに非ざるなり、乃ち是れ汝等の導きし所の惡牛我を見しを以ての故に命終りて天に生れ來りて我を供養す。是れ其の光耳」と。時に五百の放牛の人、佛語を聞き已り、各相ひ謂つて言く「彼の惡水牛尙能く佛に見えて天上に生るゝことを得たり。況んや我等の輩、今は是れ人なり。云何が諸の善法を修せざらむ耶」と。是の語を作し已り、各相ひ[8]率ゐ合ひ、諸の餚饍を設け佛及び僧を請じ奉り。飮食已に訖り、佛、卽ち、其の爲に種々に說法し給ふ。心開け意解け各道跡を獲、出家を求索む。佛、卽ち告げて言はく「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自から落ち法服を身に著け便ち沙門と成る。精懃修習し阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具ふ。諸天、世人の敬仰せらるゝ所なり。時に、諸の比丘是の事を見已りて佛に白して言く「今、此の水牛及び五百の放牛の人、宿に何の業を造り水牛の中に生れ、復、何の福を修めて佛世尊に値ひ出家道を得たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等今、水牛及び放牛の人の宿業造る所の諸の惡業の緣を知らむと欲せば、我、今、當に汝等の爲に偈を說くべし」と。

宿に善惡の業を造り、　百劫にして朽ちず、　善業の因緣の故に　今、是の如き報を獲。

時に諸の比丘、佛、世尊の是の偈を說き給ふを聞き已り前みて佛に白して言さく「不審なり、世尊よ、過去世の時、其の事云何、唯、願くば世尊よ敷演し解說し給へ」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け、吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし。『此賢劫中、波羅㮈國に佛有り出世し給へり、號して迦葉と曰ふ。彼の法中に一人の[9]三藏の比丘有り、五百の弟子を將ゐ他國に遊行す。大衆の中に在りて共に論議す、難問者有り通達すること能はず。便ち嗔恚を生ず。返りて更に惡罵す「汝等、今、曉知る所無し。强いて我に難問す、狀、水牛の人に觝突し來るに似たり」と。時に諸の弟子、咸皆、「然なり可し」と。以つて他を非と爲す。



【八】率。宋・元・明本による。

【九】三藏の比丘。經藏・律藏・論藏に通じてゐる比丘のこと。

是の語を作し已りて各自ら散じ去りぬ。是の惡口業の因緣を以ての故に五百世の中水牛の中に生れ、放牛の人と共に相ひ隨逐し、乃至今者〔〇〕來りて脫するを得たり』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の三藏の比丘を知らむと欲せば、今此群の中の惡水牛是れなり、彼の時の弟子とは今の五百の放牛の人是れなり」と。佛、是の水牛の緣を說く時各々自ら身口意の業を護り、生死を厭惡み、須陀洹を得る者有り、斯陀含[を得る]者、阿那含[を得る]者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 五十九、〔一〕二梵志、共に齋を受くるの緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

其の初夜に於て五百の天子有り、天冠を頂戴き諸の瓔珞を著けて、其の身を莊嚴り、香・花を齎持し、光明赫奕として祇洹の林を照し、佛の所に來詣り前みて佛の足を禮し供養し訖已り却きて一面に坐し、佛の說法を聽き、心開け意解け。須陀洹果を得たり。佛を繞ること三匝にして還りて天宮に詣りぬ。其の晨朝に於て爾の時、阿難、佛に白して言さく「世尊よ、昨夜の光明、祇洹を照曜し常よりも〔二〕倍逾す。是れ、釋・梵・四天大王・二十八部鬼神大將來りて聽法を爲す耶」と。

佛、阿難に告げ給はく「亦、釋・梵・諸神王等來りて法を聽くに非ざるなり。乃ち、是れ過去迦葉佛の時、二婆羅門有り國王に隨從して佛の所に來詣り、禮拜し問訊す。時に彼の城中に一人の優婆塞有り、二人の婆羅門に勸めて言く「汝等、今、王に隨從して來り、佛、世尊に見えたり。由つて齋を受くべし」と。婆羅門、言く「此の齋法を受け何の利益有りや」と。優婆塞、言く「此齋法を受けなば意の求むる所に隨ひ必ず願の如く得む」と。婆羅門、是の語を聞き已り即ち共に齋を受け

〔〇〕來。宋・元・明本による。

〔一〕二梵志共受齋緣。梵本 No. 59. Upoṣadha.。賢愚經 No.3.

〔二〕倍逾。倍にこゆること。

一は生天を求め、二は人王を求めぬ。齋を受け已竟る。倶に共に諸の婆羅門聚會の處に還歸れり。諸の婆羅門言く「汝等、飢渇せむ、共に飲食すべし」と。齋を受くる者言く「我、佛の齋を受けぬ。時を過して食せず」と。諸の婆羅門、言く「我等には自ら婆羅門の法有り、何ぞ彼の沙門の齋を受くるを須ひむ耶」と。是の如く慇懃に數々勸請す。其の意を勉めず生天を求むる者即便ち飲食す。齋を破るを以ての故に願ふ所を果さず、其の後命終り龍の中に生れぬ。

第二人は絶えて飲食せず、齋戒を持つを以ての故に其所願を果し國王と作るを得たり。其の先身共に齋を受くるを以ての故に[龍に]彼の國王の園池の水の中に生る。[三]時に、彼國王も園池と字せり。時に守園の人、日々常に種々の果、蓏を送り、奉上して王に獻ぜり。卒に一日園池の水の中に於て一つの美果を得たり。色と香と甚だ好し。是の念言を作す「我れ出入すと雖も常に[四]門監の爲めに[五]前却せらるゝ所なり。我、此の果を持ちて當に用つて之を與ふべし」と。是の念を作し已り、尋いで即ち門監に與ふ。門監得已り、復、是の念を作さく「我れ出入すと雖も[六]黄門に前却せらるゝ所と爲る、當に用つて之を與ふべし」と。是の念を作し已り尋いで即ち持つて黄門に與ふ。黄門、得已り復、是の念を作すらく「夫人、我が爲に常に大王に向ひ我が徳を歎譽す。我、此の果を持つて當に用つて之を與ふべし」と。是の念を作し已り即便ち持つて夫人に與ふ。夫人得已り、復、大王に上つる。王、果を得已り、即便ち之を食す。甚だ香美を覺えぬ。即ち、夫人に問ふ「汝、今、何處にて此果を得來るや」と。夫人、即時に實の如く對へて曰く「我、黄門より是の果を得來れり。復、黄門に問ふらく「汝、何處より是の果を得來るや」と。是の如く展轉して園子に推し到る、王、即ち、召し呼ぶやう「吾が園の中、是の美果有り、何ぞ送り見めず。乃ち他人に與ふや」と。園子、是に於て本末を自ら陳ぶ。王、言ふことを聽かずして之に告げて曰く「今より以後、常に此果を送れ、若し爾らざれば吾當に汝を殺すべし」と。園子、還歸りて其の園の中に入り、[七]號咷し涕泣し、



【三】時の字は、聖本により加ふ。

【四】門監。門番なり。

【五】前却。進退といふに同じ。

【六】黄門。天子の御所門、即ち禁門、黄闥の故にいふ。此處では、その監視人のこと。

【七】號咷。さけびさけぶこと。

自ら制する能はず、此の果種無し、何に由つて得べけむ。時に彼の龍王、是の哭聲を聞き、人の、形を化作し、來りて之に問ふて言く「汝、今、何を以て涕泣乃ち爾るや」と。園子、對へて曰く「我、昨日に於て此の園の池の中に一つの美果を得、持つて門監に與ふ、門監得已り、復黃門に與ふ。黃門得已り、復、夫人に與ふ。夫人得已り、復、上りて王に與へたり。今、約勅せらる。今より以後、仰いて此の果を送れ、若し爾らざれば當に刑戮せらるべし。今、此の園中、此の果種無し、是を以て涕泣す」と。時に化人、是の語を聞き已り、還りて水中に入り好美果を取り金盤の上に著け持つて園子に與ふ。因つて復、告げて言く「汝、此の果を持つて奉上し王に獻ぜよ、幷びに吾意を說きて云へ。我と王と、昔、佛の世に在せし[時]本是れ親友なり俱に梵志と作り共に齋法を受けぬ。各願の如く、求めしが、汝は戒を完具し國王と作るを得たり。吾は戒全からずして、生きて龍中に在り、我、今還つて齋法を奉修せむと欲し、此身を捨てむことを求む」と。[又]願くば汝の王に語れ、我が爲に八關齋法を求索め送り來りて我に與へよ。若し其れ相違せば吾汝の國を覆へし用つて大海と作さむと。」園子、時に果を盤に納受め王に奉獻し已る。因つて復、龍の囑する所の語を說く。王、是れを聞き已り、甚だ用つて樂しまず、然る所以は、爾の時に當り乃至佛法の名有ること無し、況んや復、八關齋文をや。復、得ること叵し。若し其れ獲ずむば危害さるゝを恐る。此の理を思念うて辦ずべき由無し。時に彼の國王に一人の大臣有り、最も敬重する所なり。而して之に告げて言く「龍神、我より八關齋文を求索む。卿を仰ぎ之を得む。當に用持つて與ふべし」と。大臣、答へて曰く「今の世法無し云何が得可けむ」と。王、復告げて曰く「汝、若獲して送與ずむば吾必ず卿を殺さむ」と。大臣、聞き已り却退きて家に至る。顏色常と異なり甚だ以て愁惱す。時に、臣の父有り、年耆舊に在り、每に外より來る子の顏色改易りて常と異なるを見る。尋いで卽ち問ふて言く「汝、何事か有りて顏色乃ち爾るや」と。時に大臣、卽ち、父に向ひ委曲の情理を說く。父、子

【八】八關齋。八齋戒の異名。關は禁なり、八戒齋は殺盗等の八罪を禁閉して犯さしめざる法なれば關と名く。

【九】耆舊。老人。

に答へて曰く「吾が家の堂柱に我れ光有るを見る。[一〇]今、汝の爲の故に試みに破り共に看む。儻、異物有らむか」と。是に於て大臣、其の父の敎に隨ひ、尋いで[一一]施代を爲す。取りて破り之を看るに經二卷を得たり。一は是れ、十二因緣、二は是れ八關齋の文なり。大臣、得已り甚だ用つて歡喜び、金の案の上に著け奉獻して王に與ふ。王、之を得已り、喜び自ら勝へず、送りて龍王に與ふ。龍王、得已り、甚だ用つて歡喜び。珍寶を齎持し贈遺し王に與へ、各 所止に還る。五百の龍子と共に八關齋の法を勤加し奉修し、其の後、命終り忉利天に生れ、來りて我に供養せり、是れ彼の光耳』と。

佛、阿難に告げ給はく「彼の時の五百の龍子齋法を奉修する者を知らむと欲せば今の五百の天子是れなり」と。佛、是の緣を說くの時須陀洹を得る者、斯陀含[を得る]者、阿那含[を得る]者、阿羅漢を得る者有り。辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 六十、[一]五百の鴈、佛の說法を聞くの緣

佛、波羅㮈國に在しき。

[佛]林澤の中に於て諸天・世人の爲めに妙法を演說し給へり。時に虛空の中に五百の群鴈有り、佛の說法を聞き深く心に愛樂し[二]盤迴して翔り來り下りて法を聽けり。時に獵師有り羅網を張り施す。五百の群鴈共の網の中に墮ち、諸の獵師の爲めに都て悉く殺さる。此に於て命終り忉利天に生れ、忽ち自ら長大して八歲の兒の如し。端政、殊に妙れ諸の天身の光明宮殿を曜かし猶寶山の若し。便ち自ら念言ふやう「我、何の福を修し天に來生することを得たるや」と。尋いで自ら觀察す。鴈の身より佛の說法を聞き深心に信樂し、此の善心に乘り、卽便ち命終り此に來生することを得たりと知り、便ち、是の言を作さく「我等、今當に佛の恩を報すべし」と。卽ち共に同時に、天冠を頂載き



【一〇】今爲汝故。聖本による。

【一一】施代。改めかへること。

【一】五百鴈聞佛說法緣。梵本 No.60. Haṃsā. 阿育譬喩第十八、賢愚經第六十。

【二】盤迴。めぐりめぐること。

諸の瓔珞を著けて其の身を莊嚴り、衆香を身に塗り香・花を齎持し佛の所に來詣し世尊に供養しぬ。供養已に訖り、佛の足を頂禮し却きて一面に坐し、佛に白して言さく「我等、今、世尊の妙法を演說するを蒙り勝處に生るゝことを得たり、唯、願くば世尊よ、我等を慈愍して更に爲めに重ねて說き、道要を開示し給へ」と。爾の時、世尊、卽便ち爲めに種々の法要を說き給ふに、心開け意解け五百の天子、一時に皆須陀洹果を得たり。心に歡喜を懷き佛を繞ること三匝にして佛の足を頂禮し還りて天上に詣りぬ。

爾の時、阿難、佛に白して言さく「世尊よ、昨夜の光明林樹を照せり、何の因緣有りや願くば告示し給へ」と。

佛、阿難に告げ給はく「汝、今、善く聽け、吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし」と。「我、先の時を以て林澤の中に於て諸の天と人との爲に妙法を演說せり。五百の群鴈有り、法の聲を愛敬し心に愉悅を懷き卽ち共に飛來り我が所に至らむと欲し獵師の殺す所と爲る。此の善心に因つて天上に生るゝことを得たり。故に來り恩を報ぜり」と。爾の時、阿難、佛の說き給ふを聞き已り、未曾有と歎ず、「如來世に出づること實に尊妙と爲す。蒙賴せざるは莫し、乃し飛鳥に至るまで佛の音聲を聞き尙道果を獲。何ぞ況んや人類をや、信心受持し彼より過逾[三]すること百千萬倍にして、比と爲すべからず、是の故に汝等當に共に一心に佛法を信敬し法の如く修行すべし」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き須陀洹を得る者、斯陀含[を得る]者、阿那含[を得る]者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

# 撰集百緣經卷第六

【三】過逾。こえすぐること。

## 現化品第七

### 六十一、身、金色と作るの縁[1]

佛、迦毘羅衞國[2]の尼拘陀樹下に在しき。

時に彼の城中に一人の長者有り財寶量り無く稱て計ふべからず。族望[3]を選擇し娉して以て婦と爲す。諸の音樂を作し以て娛樂す。其婦懷妊し、十ケ月を滿足し一男兒を生む。身、金色と作り端正殊に妙れ、世に希に有る所なり。身に光明有り彼の城內を照すに皆金色と作る。時に兒の父母其の是の如きを見て心に歡喜を懷き未曾有と歎ず。諸の相師を召し此の兒を占相せしむ。相師覩已り其の父母に問ふ「此の兒產るゝ時、何の瑞相有りしや」と。父母答へて曰く「此の兒生るゝ時、身、金色と作り兼ねて光明有り、因つて爲に字を立てゝ名を金色と曰ふ」と。年漸く長大し、體性賢柔慈仁にして孝順なり。世に佛有りて尼拘陀樹下に在るを聞き諸の親友を將ゐ佛の所に往詣し佛世尊を見奉るに三十二相、八十種好、光明普く曜き百千の日の如し。心に悕悅を懷き前みて佛の足を禮し、却いて一面に坐しぬ。佛、卽ち其の爲めに四諦の法を說き給ふに心開け意解け、須陀洹果を得たり。歸りて父母に白すやう「我、今日に於て尼拘陀樹下に往到し佛世尊に見えぬ。神容、炳耀き百千の日の如し、又比丘を見るに諸根寂定にして威儀觀る可し、我の願樂ふ所なり、唯、願くば慈愍して我に出家を聽し給へ」と。時に兒の父母、是の語を聞き已り、子を愛念するが故に違逆する能はず、尋いで佛の所に將ゐ出家を求索む。佛、卽ち告げて言く「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成り、精懃に修習し、阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解

【一】 身作金色緣。梵本 No. 61 Suvarnābha。如意樹譬喩第七、二十二譬喩第二十。

【二】 迦毘羅衞國。梵名(Kapilavastu.) 城名、悉多太子の生處。

【三】 族望。良きほまれある家柄。

脫を具し、諸天、世人の敬仰する所となる。時に諸の比丘是の事を見已り、佛に白して言く「世尊よ、此の金色の比丘、宿に何の福を植え、豪族に生れ身金色と作り世尊に値ふことを得て出家して道を獲たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、善く聽け、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『乃往、過去九十一劫[の前]に波羅㮈國に佛有り出世し給へり、[四]毘婆尸と號す。敎化し周り訖り、神を遷し涅槃し給ふ。爾の時、王有り、[五]槃頭末帝と名く。其の舍利を收め四寶の塔を起す。高さ一由旬にして之を供養す。時に一人有り、値行して塔を見る。少しく破落有り、和泥にて補治し、及び金薄を買ひて其の上を[六]安鉆し、發願し去る。是の功德に緣り九十一劫[の間]惡道に墮せず。天上・人中、身常に金色にして天の快樂を受け、乃至今は我に遭値せり。身故に金色、出家して、道を得たり』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の金薄を鉆りし人を知らむと欲せば今、現在の金色比丘是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。」

## 六十二、[一]身、栴檀香有るの緣

佛、迦毘羅衛國の尼拘陀樹下に在しき。

時に、彼の國中に一人の長者有り、財寶量り無く稱て計ふべからず。高門を選擇し娉して以て婦と爲す。諸の伎樂を作し以て之を娛樂す。其の婦懷妊し十ケ月を滿足して一男兒を產む。容貌端正にして世に比ひ無き所なり、身の諸の毛孔に牛頭栴檀の香有り、其の面門從り[二]優鉢羅花の香を出せり。父母親屬、歡喜ばざるは莫し。諸の相師を召し、此の兒を占相せしむ。相師、見已り、其父

---

【四】毘婆尸。梵語(Vipaśyin.)。過去七佛の第一佛なり。勝觀、種々觀、種々見等譯す。

【五】槃頭末帝。梵語(Bandhumatī.)。

【六】安鉆、靜かにはりつけること。

【一】身有栴檀香緣。梵本No.62. Sugandhi。如意樹譬喩第十六。

【二】優鉢羅花。梵語(Utpala.)青蓮花。

母に問ふやう「此の兒生るゝの時何の瑞相有りしや」と。父母、答へて曰く「此の兒生るゝの時、身の諸の毛孔に牛頭梅檀の香有り其の面門從り優鉢羅華の香を出しぬ。因つて爲めに字を立てゝ梅檀香と名く。」と。年漸く長大して、體性仁和にして見る者愛敬す。諸の親友を將ゐて遊戲し、漸次に尼拘陀樹下に往到し、佛世尊を見奉るに三十二相、八十種好、光明普く曜き百千の日の如し。心に歡喜を懷き前みて佛の足を禮し、却いて一面に坐す。佛、卽ち其の爲めに四諦の法を說き給ふに、心開け意解け、須陀洹果を得たり。歸りて其の父母に道に入らんことを求索む。父母、愛念し違逆ふこと能はず、將ゐて佛の所に詣り出家を求索む。佛、卽ち告げて曰く「善く來りぬ。比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成る。精懃し修習して阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具し、諸天、世人の敬仰する所となる。時に諸の比丘、是の事を見已り佛に白して言さく「世尊よ、今、此の梅檀香比丘、宿に何の福を植え生れて便ち香有り又、世尊に値ふて出家し道を得たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『乃往、過去九十一劫に波羅㮈國に佛有りて出世し給へり。毘婆尸と號す。敎化周り訖り神を遷し涅槃し給ふ。時に彼の國王を槃頭末帝と名く。舍利を收取り四寶の塔を造り、諸の群臣・后妃・婇女を將ゐて香、花を齎持して彼の塔中に入りて共に供養せり。塔地を【三】踐蹋して破落の處有り。時に長者有り、此の塔地の破落の處有るを見、尋いで好泥を和し用つて之を塗り治し、梅檀香を以て其の上に【四】坌散し發願して去りぬ。是の功德に緣りて九十一劫惡趣に墮せず、天上、人中身、口に常に香あり、天の快樂を受け、乃至今は我に遭値せり。身、口故に香しく出家して道を得たり』と。佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の梅檀香を以て地に坌散する者を知らむと欲せば今の香身比丘是れなり」と。

【三】踐蹋。ふむこと。

【四】坌散。ならべ散ずること。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 六十三、[一] 大威德有るの緣

佛、迦毘羅國の尼拘陀樹下に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、財寶量り無く稱て計ふ可からず。高門を選擇し娉して以て婦と爲す。種々の音樂を以て之と娛樂す。其の婦懷妊し十ヶ月を滿足して一男兒を生めり。身體柔軟にして顏色鮮澤しく、端正殊に妙れ世に希に有る所なり。父母親屬之を見て歡喜び因つて爲めに字を立てゝ名を威德と曰ふ。年漸く長大して柔和、調順なり、見る者愛敬す。遠近信伏す。諸の親友を將ゐ遊行し觀看して尼拘陀樹下に到る。佛世尊を見奉るに三十二相、八十種好、光明照曜し百千の日の如し。心に歡喜を懷き前みて佛の足を禮し、却きて一面に坐す。佛、卽ち其の爲めに四諦の法を說き給ふ。心開け意解け、須陀洹果を得たり。歸りて其の父母に道に入ることを求索め、父母愛念して違逆すること能はず、將ゐて佛の所に詣り出家を求索む。佛、卽ち告げて言く「善く來りぬ。比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成り、精懃し修習し阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具へ諸天、世人の皆共に敬仰するところとなる。時に、諸の比丘是の事を見已り、佛に白して言さく「世尊よ、今、此の威德比丘、宿に何の福を植え身極めて柔軟、顏色鮮明なるや。又衆人の爲に敬仰せらるゝ所、世尊に遭値し出家し道を得たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、善く聽け、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。乃往過去九十一劫に、波羅㮈國に佛有りて出世し給へり、毘婆尸と號す。教化周り訖り、神を遷し涅槃し給へり。彼の時王有りて槃頭末帝と名づく、其の舍利を收め四寶の塔を造る。高さ一由旬にして之を供養す。時に一人有り、値行し往到す。彼の塔上を見るに諸の萎める花、塵土の上に

【一】有大威德緣。梵本No.63. Vapuşmān。寶石譬喩第七二十二譬喩第二十一。

萎まる有り。卽ち萎める花を取り拂ひ拭ひ淨め還び用て供養す。發願して出て去りぬ。是の功德に緣り九十一劫［の間］地獄・畜生・餓鬼に墮ちず、天上・人中［に生れて］、顏色光澤あり、大威德有り天の快樂を受け、乃至今は我に遭値せり。故に威德あり、出家して、道を得たり』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の花を拂ひ拭ひし人を知らむと欲せば今の威德比丘是れなり」と。

爾の時、諸の比丘佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

### 六十四、[一]大力、有るの緣

佛、迦毘羅衞國の尼拘陀樹下に在しき。

時に、彼の國中に一人の長者有り、財寶量り無く稱て計ふ可からず。族望[二]を選擇し娉して以て婦と爲す。倡伎樂を作して之と娛樂す。其の婦懷妊し十ケ月を滿足し一男兒を生めり。骨節、麁大なり、肥壯にして大力あり、父母、之を見て因みて爲めに字を立てゝ名を大力と曰ふ。年漸く長大して勇健にして多力あり、及ぶ者有ること無し。諸の親友を將ゐ遊行し觀看し、尼拘陀樹下に到り、佛世尊を見奉るに、三十二相、八十種好ありて、光明、普く曜き百千の日の如し。心に歡喜を懷き前みて佛の足を禮し、却きて一面に坐す。佛、卽ち其の爲めに四諦の法を說き、心開け意解け、須陀洹果を得たり、歸りて父母に白すやう「道に入らんことを求索む」と。父母、愛念して違逆する能はず、將ゐて佛の所に詣り、出家を求索む。佛、卽ち告げて言く「善く來りぬ比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成り、精懃し修習し、阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具へ、諸天、世人敬仰する所となる。時に、諸の比丘、是の事を見已り、佛に白して言さく「世尊よ、此の大力比丘、宿に何の福を植え生れては則ち大力、勇健にして敵無く、又世尊に値ふて出



【一】有大力緣。梵本 No.64. Balavān（力士）。寶石譬喩第十八。

【二】族望。名望ある家柄。

家し道を得たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽けよ、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『乃往過去九十一劫に、波羅㮈國に佛有り、出世し給へり、毘婆尸と號す、敎化し周り訖りぬ。神を遷し涅槃し給へり。時に彼の國王、槃頭末帝、舍利を收取り四寶の塔を造りぬ。時に一人有り、此の塔の邊に在り高聲に唱へて言く「衆人を集喚め、塔の[三]棖を建立せむ」と。發願して去りぬ。是の功德に緣りて九十一劫[の間]地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上・人中、常に大力有り、天の快樂を受け乃至今は我に遭値せり。故に大力有り出家して道を得たり』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時、衆人を唱喚び 棖 を竪立せし者を知らむと欲せば今此の大力比丘是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 六十五、[一]人の爲に恭敬せらるゝ緣

佛、迦毘羅國の尼拘陀樹下に在しき。

時に、彼の國中に一人の長者有り、財寶量り無く稱て計ふべからず。高門を選擇し娉して以て婦と爲す。種々の音樂を以て之を娛樂す。其の婦懷妊し十ケ月を足滿し一男兒を生めり。端正にして殊に妙なり、衆と超絕す。之を見ること有る者敬仰せざる無し。年漸く長大して諸の親友と與に遊行し觀看し、尼拘陀樹下に到り、佛、世尊を見奉るに、三十二相、八十種好あり、光明普く曜き百千の日の如し。心に歡喜を懷き前みて佛の足を禮し却きて一面に坐す。佛、卽ち、其の爲めに四諦の法を說き給ふに心開け意解け、須陀洹果を得たり。歸へりて父母に辭き入道を求索む。父母、愛念し敢て違逆せず。將ゐて佛の所に詣り、出家を求索む、佛、卽ち告げて曰く「善く來れり、比丘

【三】棖。門楔(はらだて)のこと。

【一】爲人所恭敬緣。　梵本 No.65. Priya°

よ」と。鬚髪自ら落ち法服を身に著け、便ち沙門と成り精懃し道を修し阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脱を具へ、諸天・世人の敬仰する所となる。時に、諸の比丘、是の事を見已り、佛に白して言さく「世尊よ、今、此の人の敬仰する所と爲る比丘、宿に何の福を植え、生れて便ち端正、之を見ること有る者敬仰せざる無く、又、世尊に値うて出家して道を得たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、善く聽けよ、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『乃往過去九十一劫に、波羅㮈國に佛有り出世し給へり。毘婆尸と號す。敎化し周り訖り、神を遷して涅槃し給へり。彼の時に王有り、槃頭末帝と名く、其の舍利を收め四寶の塔を造りて之を供養しぬ。其の後の時に於て、少しく毀破有り、時に童子有りて、其の塔の中に入り此の破處を見て和顏悅色して衆人を集喚め各共に塗り治め、發願して出て去りぬ。是の功德に緣りて九十一劫「の間」地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上、人中「に於て」樂を受くること極まり無し。常に人・天の爲めに敬仰せらるゝ所なり、乃至、今者我に遭値せり。故に諸人の爲めに敬仰せらるゝ所となり、出家して道を得たり』」と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時、衆人を集め喚び塔地を塗りし者を知らむと欲せば今、此の人の敬ふ所と爲る比丘是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ひし所を聞き歡喜し奉行せり。

## 六十六、頂の上に寶蓋有るの緣[一]

佛、迦毘羅衛國の尼拘陀樹下に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、財寶量り無く稱て計ふ可からず。族望を選擇し娉して以て婦と爲す。諸の音樂を作し常に之と娛樂す。其の婦、懷妊し十ケ月を足滿して一男兒を生めり。容貌

 

【一】頂上有寶蓋緣。梵本 No. 66. Padma.

端正にして世希に有る所なり。然るに其の生れし時、頂上に自然に摩尼の寶蓋有り、遍く城の上を覆ふ。父母、歡喜び因みて爲めに字を立てゝ名を寶蓋と曰ふ。年漸く長大して、諸の親友と城を出でゝ遊戲す。漸次、尼拘陀樹下に往到し佛世尊を見奉る。三十二相、八十種好、光明暉曜[二]して、百千の日の如し。心に歡喜を懷き前みて佛の足を禮し出家を求索む。佛、卽ち告げて言く「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成り、精懃し修習して阿羅漢果を得たり。時に諸の比丘、是の事を見已り未曾有と怪しみて佛に白して言さく「今、此の寶蓋比丘、宿に何の福を植え初生の時、頂上に自然に摩尼の寶蓋有り遍く城の上を覆ひ、又世尊に値ひ奉り出家して未だ久しからざるに道果を獲たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け。吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。乃往過去九十一劫に、波羅㮈國に佛有りて出世し給へり。毘婆尸と號す。諸國に遊行し化緣周く訖り神を遷し涅槃し給へり。時に國王有り、槃頭末帝と名づく。舍利を收取り四寶の塔を造る。高さ一由旬なり。之を供養せり。時に商主有り、海に入り寶を採り安穩にて來り歸り、卽ち摩尼寶珠を以て其塔の頭を蓋ひ、願を發して去りぬ。是の功德に緣りて九十一劫惡趣に墮せず、天上・人中常に寶蓋有りて隨ひ共に生じ乃至、今は我に値ふことを得て出家して道を獲たり』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の商主、摩尼寶珠を奉上せし者を知らむと欲せば今此の寶蓋比丘是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 六十七、妙聲の緣[一]

佛、迦毘羅衛國の尼拘陀樹下に在しき。

【二】暉曜。ひかりかゞやくこと。

【一】妙聲緣。梵本 No. 67. Dundubhisvara.

時に、彼の國中に一人の長者有り、財寶量り無く稱て計ふ可からず。族望を選擇し娉して以て婦と爲し諸の音樂を作し以て之と娛樂す。其の婦懷妊し十ケ月を足滿し一男兒を生みぬ。端正殊に妙なり、世に希有とする所なり。年、漸く長大して、好き音聲有り衆をして聞くことを樂しましむ。諸の親友と與に城を出で、遊戲し尼拘陀樹下に至り、佛、世尊を見奉るに三十二相、八十種好あり、光明暉曜し百千の日の如し、心に歡喜を懷き前みて佛の足を禮し却きて一面に住しぬ。佛、即ち其の爲めに四諦の法を說き給ふ。心開け意解け、須陀洹果を得たり。歸へりて父母に辭ひて道に入らんことを求索む。子を愛念する故に違逆すること能はず、將ゐて佛の所に詣り出家を求索む。佛、即ち、告げて言く「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け、便ち沙門と成る。精懃し修習して阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具し、諸天・世人の敬仰する所となる。時に、諸の比丘、是の事を見已りて佛に白して言さく「世尊よ、今、此の妙聲比丘、宿に何の福を植え是の妙聲有るや。復、世尊に値うて出家し道を得たるや」と。爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽けよ。吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし。『乃往過去九十一劫に、波羅㮈國に佛有りて出世し給へり、毘婆尸と號す。敎化周く訖り、神を遷して涅槃し給へり。時に國王有り、槃頭末帝と名づく、舍利を收取り四寶の塔を造り高さ一由旬なり。之を供養せり。時に一人有り、此の塔を見るが故に心に歡喜を懷き便ち音樂を作し以て繞り供養し、願を發して去れり。是の功德に緣りて九十一劫［の間］地獄・畜生・餓鬼に墮ちず。天上、人中、常に好聲有り、衆をして樂しみ聞かしめ、乃至今は我に遭値し出家して道を得たり。故に好聲あり』」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 六十八[一]、百子同[二]時に産むの緣



【一】百子同時產緣。梵本No.68. Putrāḥ(諸子)。
【二】時。聖本により加ふ。

佛、迦毘羅衞國の尼拘陀樹下に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、財寶量り無く稱て計ふべからず。族望を選擇し娉して以て婦と爲し、倡伎樂を作し以つて之と娛樂す。其の婦懷妊し、十ケ月を足滿し一肉團を生む。時に彼の長者其の是の如きを見て心愁惱を懷き。謂うて非祥と爲す。佛の所に往詣し前みて佛の足を禮し長跪して佛に白さく「我が婦、懷妊して一肉團を生めり。不審なり、世尊よ、是れ吉凶と爲すや。唯、願くば世尊よ、幸に告げ語り給へ」と。佛、長者に告げ給はく「汝、疑怪すること莫れ、但好く養育せよ、七日を滿し已り、汝、當に自ら見るべし」と。時に彼の長者是の語を聞き已り喜び自ら勝ず。還りて家の中に詣る。勅して[三]瞻養せしむ。七日の頭に到り、肉團開敷し、百男兒有り、端正殊に特れたり。世に希有とする所なり。年、漸く長大して便ち共に相ひ將ゐ城を出でゝ觀看し、漸次に尼拘陀樹下に往き到り、佛世尊を見奉る。三十二相、八十種好ありて、光明普く曜き百千の日の如し。心に懽悅を懷き前みて佛の足を禮し却きて一面に坐す。佛、即ち其の爲めに四諦の法を說き給へり。心開け意解け、各須陀洹果を得たり。即ち佛の前に於て道に入らんことを求索む。佛、童子に告げ給はく「父母、聽さゞれば出家することを得ず」と。時に彼の童子、是の語を聞き已り、歸りて父母に辭ひ出家を求索む。父母、愛念して違逆する能はず。將ゐて佛の所に詣り、出家を求索む。佛、即ち告げて言はく「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成る。精懃し修習して阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具へ諸天、世人の敬仰する所となる。時に、諸の比丘、是の事を見已り前みて佛に白して言さく「今、此の同生の一百の比丘、宿に何の福を植え兄弟百人、一時に倶に生れ、端正殊に妙へにして人に愛敬せられ。又世尊に遭値し出家して道を得たるや」と。

一　爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽けよ、吾、當に汝等の爲めに分別し解說

---

【三】瞻養。にぎはしやしなふこと。

すべし。』乃往過去九十一劫に波羅奈國に佛有りて出世し給へり。毘婆尸と號す。教化し周ねく訖りぬ。神を遷し涅槃し給へり。時に彼の國王を槃頭末帝と名づく。舍利を收取り、四寶の塔を造りて之を供養せり。時に同邑に一百餘人有り、倡伎樂を作し香・花を齎持し彼の塔を供養し、各誓願を發すやう「此の供養の善根功徳を以て我をして來世所生の處に在りて共に兄弟と爲さしめよ」と。是の願を發し已り各自ら歸へり去りぬ』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の同邑の人を知らむと欲せば今、此の一百の比丘是れなり、彼の時の誓願の力に由るが故に九十一劫、地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上、人中に常に共に同じく生れ、天の快樂を受け、乃至今は我に遭値せり。故に復、同生し、出家し道を得たり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 六十九、[一]頂上、寶珠有るの緣

佛、迦毘羅衞國の尼拘陀樹下に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、財寶量り無く、稱て計ふべからず。族望を選擇し以て娉して以て婦と爲す。諸の音樂を作して之と娛樂す。其の婦懷妊し、十ケ月を足滿し一男兒を生めり。端正殊に妙なり。世に希有とする所なり。頭上に自然に摩尼珠有り。時に兒の父母、其の是の如きを見、因みて爲めに字を立つ。名を寶珠と曰ふ。年、漸く長大して、諸の親友を將ゐ城を出でゝ遊戲し尼拘陀樹下に至り。佛、世尊を見奉る。三十二相、八十種好ありて、光明普く曜き百千の日の如し。心に歡喜を懷き前みて佛の足を禮し却きて一面に坐し、佛の說法を聽く。心開け意解け、須陀洹果を得たり。歸りて父母に辭ひ道に入ることを求索む。父母愛念して違逆する能はず、將ゐて佛の所に詣り、出家を求索む。佛、即ち告げて言はく「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち



【一】頂上有寶珠緣。梵本 No.69. Sūrya.(太陽)。

法服を身に著け便ち沙門と成る。精懃し修習して阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具し、諸天、世人の敬仰する所となる。衣を著け鉢を持ち城に入り乞食せり。時に彼の寶珠故に頭上に在り、城中の人民、其所以を怪しみ、「云何が比丘、頭上珠を載せて乞食に行く」と競ひ來りて之を看る。時に寶珠比丘、深く自ら慚耻し止る所に還歸り、白して言はく「世尊よ、我が此の頭上、此の寶珠有り、去らしむる能はず、今乞食す、爲めに人、嗤笑す。願くば佛世尊よ、此の珠を却け給へ」と。佛、比丘に告げ給はく「汝、但珠とのみ語れ、『我、今、生分已に盡きぬ、更に汝を須ひず』と。是の如く三たび說かば珠、自ら當に去るべし」と。時に寶珠比丘、佛の敎勅を受け三遍向つて說く、是に於て寶珠忽然として現れず。時に、諸の比丘、是の事を見已り、前みて佛に白して言さく「今、此の寶珠比丘、宿に何の福を植え其の生るゝ時に於て頭に寶珠を載き光、日月を踰え又世尊に値ひ奉り出家し道を得たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽けよ、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『乃往過去九十一劫に、波羅棕國に佛有りて出世し給へり、毘婆尸と號す。敎化周ねく訖り、神を遷し涅槃し給へり。時に彼の國王を槃頭末帝と名づく。舍利を收取り四寶の塔を造る。高さ一由旬にして之を供養せり。時に彼の王子、其の塔中に入りて禮拜し供養す。一摩尼珠を持ち、棖の頭に繫著し、願を發して去りぬ。是の功德に緣りて九十一劫、地獄・畜生・餓鬼に墮せず。天上・人中にありて常に寶珠有り、常に其の頂の上に在り天の快樂を受け乃至今、我に遭値し出家して道を得たり。故に寶珠有りて其の頂上に在り』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の王子を知らむと欲せば今、此の寶珠比丘是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

【二】嗤笑。あざわらふこと。

【三】繫著。つなぎつける。

## 七十、佛に幡を布施するの緣[一]

佛、迦毘羅衞國の尼拘陀樹下に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、財寶量り無く稱て計ふべからず。族望を選擇し娉して以て婦と爲し、諸の音樂を作して以て之と娛樂す。其の婦懷妊して十ケ月を足滿して一男兒を生めり。端正殊に妙にして、衆を超絕せり。初生の日、虛空の中に大幡蓋有り、遍く城の上を覆へり。時に諸の人衆、因みて爲めに字を立てゝ[二]波多迦と名づく。年漸く長大して諸の親友を將ゐ城を出でゝ遊戲し尼拘陀樹下に到り、佛、世尊を見奉る。三十二相、八十種好ありて光明普く曜き百千の日の如し。心に歡喜を懷き前みて佛の足を禮し却きて一面に住す。佛、卽ち其の爲めに四諦の法を說き給へり。心開け意解け、須陀洹果を得たり。歸りて父母に辭ひ一道に入らんことを求索め、父母愛念して違逆する能はず。將ゐて佛の所に詣り出家を求索む。佛、卽ち告げて言はく「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成り、精懃し修習して阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具へ、諸天・世人の敬仰する所となる。時に、諸の比丘、是の事を見已りて佛に白して言さく「世尊よ、今、此の波多迦比丘、宿に何の福を植え、生れて便ち端正にして衆を超絕し、又、空中に於て大幡蓋有り、遍く城の上を覆ひ、復世尊に値ふて出家し道を得たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『乃往過去九十一劫に、波羅㮈國に佛有りて出世し給へり、毘婆尸と號す。敎化して周ねく訖り神を遷して涅槃し給へり。爾の時王有りて槃頭末帝と名づく、舍利を收め取りて四寶の塔を造る。高さ一由旬なり。之を供養せり。時に一人有り、大會を施設し供養し訖竟る。一つの長幡を作りて塔上に懸け著け願を發して去りぬ。是の功德に緣りて九十一劫、地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上・

【一】布施佛幡緣。梵本 No. 70. Mallapatāka（力士の幡）阿育譬喩、第十九。

【二】波多迦。梵語(Patākā)。梵文此の名を Viditayaśā とし、西藏譯又 Sñangrgs とす。Patākā は軍旗、幡のこと。後者は名譽あるものゝ義。

人中にありて常に幡蓋有り、其の上を覆蔭して天の快樂を受け、乃至今我に遭値し出家して道を得たり』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時、幡を作りし者を知らむと欲せば今此の波多迦比丘是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

撰集百緣經卷第七

---

【三】覆蔭。おほひおほふこと。

## 比丘尼品第八

### 七十一、寶珠比丘尼、生れし時、城内を光照するの緣

佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、名を善賢と曰ふ。財寶量無く稱て計ふべからず。族望を選擇し、娉して以て婦と爲し、諸の音樂を作し以て之と娛樂す。其の婦懷妊して十ケ月を足滿して一女兒を生む。端正殊に妙にして世に希に有る所なり。頂上に自然に一つの寶珠有り、光り城内に曜く。父母歡喜し因みて爲に字を立てゝ名を〔一〕寶光と曰ふ。年、漸く長大して、稟性調順にして惠施を好喜む。頂上の寶珠も來り乞ふ者有れば卽ち取りて施與す、尋いで復還りて生ず。父母歡喜び將ゐて佛の所に詣る。女、佛を見已り心に喜樂を生じ、道に入らんことを求索む。佛、卽ち告げて言く、「善く來りぬ、比丘尼よ」と。頭髮自ら落ち法服を身に著け比丘尼と成る。精懃し修習して阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具し、諸天・世人の敬仰する所となる。時に、諸の比丘、是の事を見已り、前みて佛に白して言さく「今、此の寶光比丘尼、宿に何の福を植え、生れて便ち頂上に此の寶珠有り、佛、世尊に値うて道果を得獲たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽けよ、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『乃往過去九十一劫に、波羅奈國に佛有りて出世し給へり、毘婆尸と號す。化緣周ねく訖り、神を遷して涅槃し給へり。王有りて名を梵摩達多と曰ふ。其の舍利を收さめ四寶の塔を起して之を供養せり。時に一人有り、此の塔の中に入り、一つの寶珠を持ち帳の頭に繫著し、發願して去り

〔一〕寶光。宋・元・明本珠に作る。

ぬ。是の功德に緣り九十一劫、惡趣に墮せず、天上・人中にありて常に寶珠有りて、隨つて共に倶に生じ天の快樂を受け乃至今、我に遭値して出家して道を得たり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 七十二、[一]善愛比丘尼、生れし時自然に食有るの緣

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、名を修伽と曰ふ。財寶量り無く稱て計ふ可からず。族望を選擇し娉して以て婦と爲す。倡伎樂を作し以て之と娛樂す。其の婦懷妊し十ケ月を足滿し一女兒を生む。尋いで即ち能く語り、家の中に自然に百味の飲食皆悉く備りて有り。時に女の父母、其の是の如きを見て、謂へらく是れ人に非ず毘舍闍鬼なりと。畏れて敢て近づかず。時に彼の女子、其の怖畏するを見て合掌し母に向つて偈を說いて言く。

願くば母、我語を聽け　今、當に如實に說くべし、　實に毘舍闍、及び　諸餘の鬼等に非ざるなり。　我、今、實に是れ人なり　業行相ひ隨逐して、　善業の因緣の故に　今是の如き報を獲と。

爾の時、父母、女の偈を說くを聞き喜び自ら勝ず、尋いで前みて抱へ取り[二]乳哺、養育す。因みて爲に字を立てゝ名を善愛と曰ふ。時に彼の女子、母の歡悅ぶを見て合掌して白して言く「我が爲めに佛及び比丘僧を請ぜよ」と。尋いで即ち與に請ず。百味の飲食皆悉く充足す。即ち、佛の前に於て渴仰して法を聞く。佛、即ち其の爲めに四諦の法を說き給ふに、心開け意解け、須陀洹果を得たり。年、漸く長大して、便ち父母に白すやう「道に入らんことを求索む」と。父母愛念し違逆する能はず。將ゐて佛の所に詣り、出家を求索めぬ。佛、即ち告げて言く「善く來りぬ、比丘尼よ」と。頭髮自ら落ち法服を身に著け比丘尼と成る。精懃し修習し阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解

---

【一】善愛比丘尼生時有自然食緣。梵本 No.72. Supriyā (善愛)如意樹譬喩第十七。

【二】乳哺。ちゝをふくますこと。

脱を具へ、諸天、世人の敬仰する所となる。

爾の時、世尊、千二百五十の比丘を將ゐ他邦に詣り給ひ、曠野の中に到り、食時、已に至りぬ。善愛比丘尼に告げて言はく「汝、今、飲食を設け佛と僧とを供養すべし」と。尋いで佛鉢を取り虚空の中に擲ぐ。百味の飲食自然に盈滿つ。是の如く次第して千二百五十の比丘の鉢を取る。飯亦皆滿つ。都て豐足せしむ。爾の時阿難、是の事を見已り、未曾有と歎じ前みて佛に白して言さく「今、此の善愛比丘尼、宿に何の福を植えて乃ち能く是の奇特の妙事有り、百味の飲食、念に應じて卽ち至り、又、世尊に値ふて出家し道を得たるや」と。

爾の時、佛、阿難に告げ給はく「汝、今、諦かに聽けよ、吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし。『此の賢劫の中に、波羅奈國に佛有りて出世し給へり、號して迦葉と曰ふ。衣を著け鉢を持ち、諸の比丘を將ゐ城に入り乞食し、次第に一大長者の家に到り給ふ。諸の餚饍を設け賓客を請ぜむと欲す。客未だ至らざる頃一人の婢使有り、佛及び僧の門外に在りて乞食し立ちて住するを見て長者に白さずして其の飲食を取り盡く持つて佛及び衆僧に施與せり。後、客來り坐す。彼の婢に勅して言く「食を〔三〕辦設け來れ」と。婢、〔四〕大家に答ふるやう「今、佛と僧と在り、其の門外に在りて乞食し立ちて住し給ふ。我、此の食を持ち用つて布施し盡せり」と。大家、聞き已り尋いで用つて歡喜び。卽ち婢に語りて言く、「我等、今、是の福田に値ふ、汝、能く此の飲食を持ち施與せり。快、言ふべからず。我、今、汝を放たむ。意の求むる所に隨へ」と。婢、大家に答ふるやう「若し放たれなば道次に在るを聽せ」と。尋いで卽ち聽許されて比丘尼と作れり。一萬歲の中、精懃し替ること無く、便ち、命終を取り、惡趣に墮せず。天上・人中にありて、百味飲食、念に隨つて卽ち至る』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の婢使なる比丘尼を知らむと欲せば今、此の善愛比丘尼是れ



【三】辦設。そなへとゝのへること。
【四】大家。主人のこと、長者。

なり。彼の時精懃して持戒するに由り、今、我に値ふことを得て出家して道を得たり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 七十三、[一]白淨比丘尼、衣にて身を裹み生るゝの緣

佛、迦毘羅衛國の尼拘陀樹下に在しき。時に彼城中に一人の長者有り、名を瞿沙[二]と曰ふ。族望を選擇し、娉して以て婦と爲し、諸の音樂を作し、以て之と娛樂す。其の婦懷妊し十ケ月を足滿して一女兒を生めり。端正にして殊に妙なり。白淨の衣有りて身を裹みて生れたり。因みて爲に字を立つて、名を白淨と曰ふ。年、漸く長大して衣も亦隨つて大なり。鮮白にして淨潔なり。浣染[三]をするを煩はさず。衆人、之を見て競うて共に求索む。父母に白して言さく「我、今、世俗の榮華を貪らず。出家を願樂ふ」と。父母、愛念して、違逆する能はず。尋いで佛の所に將ゐ入道を求索む。佛、即ち告げて言く「善く來りぬ。比丘尼よ」と。頭髮、自ら落ち身上の白衣、化して袈裟と爲り、比丘尼と成る。精懃し修習して阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具へ諸天・世人の敬仰する所となれり。爾の時、阿難、是の事を見已りて佛に白して言さく「世尊よ、今、此の白淨比丘尼、宿に何の福を植え、生れし時自然に好き淨衣有り身を裹みて生れ出家して未だ久しからざるに道跡を得獲たるや」と。

爾の時、世尊、阿難に告げて言く「汝、今、諦かに聽けよ。吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし。『此賢劫中、波羅奈國に佛有りて出世し給へり。號して迦葉と曰ふ。諸の比丘を將ゐ聚落を遊行して衆生を教化し給ふ。時に女人有り、佛及び僧を見奉り心に歡喜を懷き一張氎[四]を持ち、佛と僧とに布施し、願を發して去れり。是の功德に緣りて天上、人中にありて常に淨衣あり身を裹みて生れ、乃至今我に遭値して出家し道を得たり」と。

---

【一】白淨比丘尼衣裹身生緣。梵本 No.73. Çuklā (白淨) 寶石譬喩第九、二十二譬喩第十四、賢愚經第二十六。

【二】瞿沙。梵語(Rohiṇa.)。

【三】浣染。そゝぎすむること。

【四】張氎。細毛の布。

佛、阿難に告げ給はく「彼の時、氎を布施する者を知らむと知らむと欲せば今、此の白淨比丘尼是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 七十四、[一]須漫比丘尼、辯才の緣

佛、舍衞國、祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中に一人の婆羅門有り、名を[二]梵摩と曰ふ。多聞にして辯才あり經論を明解す。[三]四韋陀典に[四]鑒達せざる無し。高門を選擇し娉して以て婦と爲す。十ケ月を足滿して一女兒を產めり。端正、殊に妙なり。智慧、辯才及ぶ者有ることなし。諸の婆羅門の父と共に論議するを聞き悉く能く受持して一言も失はず。是の如く展轉して聞く所甚だ多し。[五]耆舊・長宿、皆來りて[六]諮啓す。通達せざる無し。世に佛有り、始めて正覺を成じ衆生を敎化し法味を諮受し給ふと聞き。尋いで自ら莊嚴り諸の瓔珞を著け佛の所に往詣す。佛、世尊を見奉るに三十二相、八十種好あり、光明普く曜き百千の日の如し。前みて佛の足を禮し却きて一面に坐す。佛、卽ち、其の爲に四諦の法を說き給へり。心開け意解け、須陀洹果を得て出家を求索む。佛、卽ち告げて言く「善く來りぬ。比丘尼よ」と。頭髮、自ら落ち法服を身に著け比丘尼と成り、精懃して修習して阿羅漢果を得たり。爾の時、阿難、是の事を見已り佛に白して言さく「世尊よ、今、此の須漫比丘尼、宿に何の福を植え女身を受くと雖も多聞第一にして、又世尊に値ふて出家して道を得たる」と。

爾の時、世尊、阿難に告げて言く「汝、今、善く聽けよ。吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし。此の賢劫の中に、波羅奈國に佛有りて出世し給へり、號して迦葉と曰ふ。化緣周ねく訖り、神を遷して涅槃し給へり。[七]像法の中に於て一比丘尼有り、心常に喜樂し說法し敎化す。精懃替ること無



【一】須漫比丘尼辯才緣。梵本 No.74. Somā. 寶石譬喩第十九。
【二】梵摩。梵語（Brāhma-pa.)。
【三】四韋陀典。婆羅門の四種の韋陀經なり、韋陀は梵語(Veda.)四韋陀とは(1)リグ吠陀(Rg-veda.) (2)サーマ吠陀(Sāma-veda.)(3)ヤジュル吠陀(Yajur-veda.)(4)アタルバ吠陀(Atharva-veda.)となり。
【四】鑒達。識別し達すること。
【五】耆舊。長宿、共に老人のこと。
【六】諮啓。問ふこと。
【七】像法。正・像・末三時の一、像は似なり。佛滅五百年の後一千年の間に行はるゝ正法に似たる佛法をいふ。

し。因つて誓願を發すやう「我をして來世釋迦牟尼佛法の中にありて、經論を明解せしめよ」と。是の願を發し已りて便ち命終を取り天と人との中に生れ聰明にして智慧あり、及ぶ者有ること無し」と。

佛、阿難に告げ給はく「彼の時、說法、敎化せし比丘尼を知らむと欲せば今我に値うて出家、得道し多聞第一を得たる者是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 七十五、舞師女、比丘尼と作るの緣[一]

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

時に、彼の城中の豪富長者、各相率ゐ合して[二]大節會を設け、諸の伎樂を作して自ら娛樂す。時に舞師有り、夫婦二人、南方從り來る。一美女を將ゐ青蓮華と字す。端正、殊に妙にして、世に希有とする所なり。聰明にして智慧あり、[三]通達せざる無し。婦人の所有六十四藝、皆悉く備り知り、善く舞の法を解しぬ。迴轉し俯仰し、曲、節を得て解す。是唱を作して言く「今、此の城中、頗だ能く舞ふこと我の如き者あるやいなや。經論を明解し能く問答するや不や」と。時人、答へて曰く「佛、世尊有り、迦蘭陀竹林に在す、善く能く問答し汝をして疑ひ無からしめむ」と。舞女、聞き已り、尋いで諸人を將ゐ共に相ひ隨逐し。且つ歌ひ且つ舞ひ、竹林の中に詣り佛、世尊を見奉り、猶し[四]故のごとく、憍慢・放逸・戲笑し如來を敬はず。爾の時、世尊其の是の如きを見て卽ち神力を以て此の舞女を變じて百歲の老母の如くし。髮白く面皺み、牙齒疏に缺け、俯し僂みて行く。時に彼の舞女、自ら其の身の形狀極めて老いたることを觀じて是言を作さく「今、我が此の身、何の因緣を以て卒に是の如く衰老相ひ現ずること有りや。今必ず是れ佛の威神、我をして故らに爾らしむるな

---

【一】舞師女作比丘尼緣。梵本 No.75. Kuvalayā.

【二】大節會。規定の公事の大宴。

【三】無不通達。聖本による。

【四】故。朋友、知人。

らん」と。即ち、佛の前に於て深く慚愧を生じ前みて佛に白して言さく「我、今に於て世尊の前に在り憍慢、自大にして放情し[五]縱意せり[六]、唯、願くば世尊よ、當に原恕せらるべし」と。爾の時、世尊、此の舞女の心中調伏せるを知り、神通の力を以て舞女の身を變じて前の如く異ること無からしめ給ふ。時に諸の大衆此の舞女を見るに卒に老ひ卒に壯なり。常に定り有ること無く。各厭離を生じ非常を解悟る。心、開け意解け、須陀洹を得る者、斯陀含[を得る]者、阿那含[を得る]者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

時に彼の舞女及び其の父母即ち佛前に於て出家を求索む。佛、即ち告げて言く「善く來りぬ。比丘尼よ」と。頭髮自ら落ち法服を身に著けて比丘尼と成り、精懃し修習して阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脱を具へ、諸天・世人の敬仰する所となれり。時に諸の大衆、是の事を見已り、前みて佛に白して言さく「乃ち能く此の放逸・妖姿[七]・不信の人を化し、開悟し出家の道を得せしむ」と。爾の時、世尊、諸の大衆に告げ給はく「但、今のみ能く彼を化するに非ず。過去の世の時も亦我、彼を化しぬ」と。時に諸の大衆、是の語を聞き已り、復、佛に白して言さく「不審なり、世尊よ、過去世の時、其の事云何、唯願くば世尊よ、敷演し解説し給へ」と。

爾の時、世尊、諸の大衆に告げ給はく「汝等、諦かに聽けよ、吾、當に汝等の爲めに分別し解説すべし。『乃往過去無量世の時、波羅奈國王に太子有り、孫陀利[八]と字す。山に入り道を學び、五神通を獲、緊那羅[九]女を見る。端正殊に妙にして、狀、諸天の如く諸の姿態を作し、且つ歌ひ且つ舞ひ、我が心を鼓動し望みて染著せしめ、仙道を退失せしむ。我、彼の時に於て心遂に堅固、欲想有ること無し。彼女に語りて言く「一切は有爲[一〇]なり。常に定なること有ること無し。我、今、汝を觀るに形體臭穢にして、其の中に充滿す。薄皮上を覆ふて久しく保つべからず。[一一]爾の世の時を經て髮白く面皺み俯し僂みて行かむ。汝、今、何の爲めに憍慢・放恣、乃至是の如く向には歌聲あり、其音已



【五】放情。氣儘。
【六】縱意。ほしいまゝにすること。
【七】妖姿。なまめかしき姿。
【八】孫陀利。梵語(Kāśisundarā)。
【九】緊那羅。梵語(Kdnnarā.)神仙なり歌神なり。
【一〇】有爲。梵語(Samskrita.)。爲と造作の義にして造作を有するを有爲といふ。即ち因緣所生の事物は盡く有爲なり。
【一一】經爾世時。聖本による。

に變じ何故に此に在りて諸の恣態を作すや」と。是に於て緊那羅女、是の語を聞き已り、尋いで仙人に向つて罪咎を懺悔しぬ。因つて願を發して言く「我をして來世生死を斷ずることを得せしめよ。我れ、汝の邊に於て道果を得獲む」と。』

佛、大衆に告げ給はく「彼の時の王子、仙道を學ぶ者を知らむと欲せば則ち我身是れなり。彼の時の緊那羅女は今の青蓮花比丘尼是れなり。彼の時の發願の力に由つての故に今我に値ふことを得て出家し道を得たり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 七十六、〔一〕迦尸比丘尼、生れし時身に袈裟を被るの緣

佛、波羅奈國の〔二〕鹿野苑中に在しき。

爾の時、梵摩達多王の其の婦、懷妊し、十ケ月を足滿して一女兒を生めり。身、袈裟を被、端正殊に妙にして、世に希に有る所なり。諸の相師を召し此の女を占相せしむ。相師、觀已り、其の父の王に問ふやう「此の女生れし時何の瑞相有りしや」と。父王、答へて曰く「此の女生れし時、身に袈裟を被ると。因みて爲に字を立つて、〔三〕伽尸孫陀利と名く。年、漸く長大し、衣も亦隨つて大なり。稟性、賢善にして慈仁、孝順なり。諸の親友侍者を將ゐ城を出でゝ遊戲し、漸次、鹿野苑の中に往到し、佛、世尊を見奉り、三十二相、八十種好あり、光明、普く曜き百千の日の如し。心に喜悅を懷き前みて佛の足を禮し、却きて一面に坐す。佛、即ち其の爲めに四諦の法を說き給ふに、心開け意解け、須陀洹果を得たり。歸りて父の王に白さく「我、今、城を出でゝ觀看し、鹿野苑の中に到り、佛、世尊を見奉るに百福の相好、其の身を莊嚴し、威儀、庠序なり、容貌觀るべし。願くば王よ、今慈哀、憐愍し道次に在ることを聽し給へ」と。時に於て父の王、此の女を愍むの故に違

【一】伽尸比丘尼生時身被袈裟緣。梵本 No.76. Kāçikasundari。

【二】鹿野苑。梵名（Mṛgadāva）。中天竺波羅㮈國にあり、鹿の住む園林の意なり。

【三】伽尸孫陀利。梵語（Kāśikasundari.）。

逆すること能はず、將ゐて佛の所に詣り出家を求索む。佛、卽ち、告げて言く「善く來れり、比丘尼よ」と。頭髮自ら落ち法服を身に著け比丘尼と成り。精懃し修習して阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具へ、諸天・世人の敬仰する所なり。時に諸の比丘、是の事を見已り、前みて佛に白して言く「今、此の迦尸孫陀利比丘尼、宿に何の福を植え、豪族に生れ此の袈裟有り、身に著けて生れ、及び道果を獲たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽けよ。吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『乃往過去無量世の時、波羅奈國に佛有りて出世し給へり、迦那加牟尼と號す。諸の比丘を將ゐ遊行し敎化し給ふ。時に王女有り。値行して佛を見奉り、心に意悅を懷き前みて佛の足を禮し、佛及び僧を請ず「唯、願くば世尊よ、三月の中、我が四事の供養を受け給へ」と。佛、卽ち、「然なり可し」と[許し給ふ]。三月の中、供養を受け已る。復、妙衣を以て各一領を施す。是の功德に緣り天上・人中[に於て]、尊榮にして豪貴なり。常に袈裟有りて身に隨つて生ぜり』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の王女を知らむと欲せば今の孫陀利比丘尼是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 七十七、額の上、眞珠鬘有る比丘尼の緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、名を沸疏と曰ふ。財寶、量無く稱て計ふ可からず。族望を選擇し娉して以て婦と爲し、諸の伎樂を作して以て之と娛樂す。其の婦懷妊し十ケ月を足滿して一女兒を生めり。端正殊に妙にして世に希に有る所なり。額の上に自然に眞珠鬘有り。父母、之を見て甚だ欣慶を懷き、諸の相師を召し此の女を占相せしむ。相師、視已り其の父母に問ふやう「此の



【四】迦那加牟尼。梵語(Kanakamuni.) 拘那含牟尼とも音譯し金寂、金仙人と譯す。賢劫中の第二佛、過去七佛中の第五、人壽三萬歲の時淸淨城に生る。

【五】一領。一とかさね。

【一】額上有眞珠鬘比丘尼緣。梵本 No.77. Muptā。

【二】沸疏。梵語(Puṣya.)。

女生れし時何の瑞相有りしや」と。父母、答へて言く「此の女生れし時、額の上に眞珠鬘有り」と、因みて爲に字を立てゝ、名を眞珠鬘と曰ふ。年、漸く長大にして稟性、賢善なり、孤窮を慈愍し來り乞ふ者有らば此の珠鬘を脫し、尋いで以て之を施せり。續いて復還り生じ、前の如く異ること無し。時に、須達長者、彼の沸䟽に此の好女有るを聞き[三]信命を通致し珠鬘を求索め、其の子の爲めに娉して以て婦と爲さむと欲す。時に眞珠鬘、須達多の兒の爲めに求索むるを聞き、前みて父母に白さく「慈哀、憐愍せよ。若し我を持つて彼の兒に與へんと欲せば當に要誓を作すべし。「必ず共に出家せんと。然る後彼に與へよ。若し爾らざれば我世俗の榮華を貪らず」と。時に女の父母、女を愛念するが故に違逆する能はず、尋いで卽ち往至し須達に語り言うて、女の意を具陳す。時に須達多、是の語を聞き已り、「共に相に然なり、可し」と。卽ち[四]納娶を爲す。未だ幾の時を經ざるに共に厭の心を生じ、倶に共に相ひ將ゐて佛の所に往詣し出家を求索む。佛、卽ち告げて言く「善く來りぬ。比丘尼よ」と。頭髮自ら落ち法服を身に著け比丘尼と成り。精懃し修習して各道果を獲たり。三明・六通・八解脫を具へ、諸天・世人の敬仰する所となる。時に、諸の比丘、是の事を見已り、前みて佛に白して言さく「今、此の眞珠鬘夫婦、宿に何の福を植えて、生れし時自然に此の珠鬘有り頭に著けて生れ出家して未だ久しからざるに阿羅漢果を獲たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『此の賢劫の中、波羅奈國に佛有りて出世し給へり、號して迦葉と曰ふ。諸の比丘を將ゐ鹿野苑の中にて正法輪を轉じ衆生を度脫し給ふ。時に長者有り、阿沙羅と名づく。佛の彼に在り衆生を化度し給ふを聞きて是の言を作す「我當に城中の民衆を勸化して佛及び僧の爲めに[五]般遮于瑟を作すべし」と。是の語を作し已り國王に上白して大白象に乘り[六]市肆を行けり。處々の道の頭りにて諸人を勸化し、般遮于瑟を作す。時に婦女有り、其の勸化を見て頂上に珠有り尋いで卽ち解き與へ

---

【三】信命。たよりのこと。

【四】納娶。よめをとること。

【五】般遮于瑟。梵語（Pañcavārsipa.）譯せば五年會なり、五年每に設くる大齋會、義譯して無遮會と云ふ。一切の人を容受して遮遣せざればなり。

【六】市肆。商店ある街。

ぬ。夫、外より來り婦の頭上に珠鬘有ること無きを見て尋いで卽ち問ふて言く「汝、此の珠鬘、當に爲めに誰に與へしや」と。婦、夫に答へて曰く、「今、阿沙羅長者此の中に來至し諸人を勸化せり。我、此の珠を解き持用つて施與せり」と。夫、卽ち歡喜ぶ。更に寶珠を取り持用つて布施せり。因つて願を發して言く「我をして來世に惡趣に墮すること莫らしめよ、天上、人中、常に珠鬘有り我に隨がつて倶に生ぜよ」と。佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時、珠を布施するに由るが故に今我に値ふて出家し道を得たり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 七十八、[一]差摩比丘尼生れし時二王和解するの緣

佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、波斯匿王及び梵摩達王常に共に忿諍し、各兵衆を將ゐ象兵・馬兵・車兵・歩兵、河の兩岸に住し各[二]幖相を立つ。夫人月滿ち各男女を生めり。端正殊に妙なり。王大いに歡喜し鼓を擊ちて令を唱へ、諸の兵衆を集め財物を賞賜しぬ。等しく同じく歡慶し相和解を求め共に婚姻を爲す、「我二國をして今より以後更に相ひ犯すこと莫らしめむ」と。乃至子孫是の要を作し已り各本國に還る。時に梵摩王子、年始めて七歲、珍寶と種々の雜物を齎持し波斯匿王に送與し納娶を求欲む。時に女聞き已り父の王に白して言く「人身得難し、我、今已に得たり。諸根具へ難し、我、今已に具りぬ。信心生じ難し我、今信生じぬ。佛の世値ひ難し、我、今値ふことを得たり。願くば大王よ、女の身を置き諸難の中に在り女をして永く諸の善知識を離れ令ること莫れ、唯、願くば慈愍して我が出家を聽し給へ」と。王、女に答へて言く「汝、胎に在りし時、吾已に彼を許せり、汝に由るの故に二國和善し相ひ[三]侵陵せず。吾、今若し當に彼に隨はざるべければ則ち言信に負く。彼、必ず



【一】差摩比丘尼生時二王和解緣。梵本 No.79. Ksemā。

【二】幖相。しるしのこと。

【三】侵陵。をかしをかすこと。

當に還び我と讐を作すべし、諸天、我を嫌ひ擁護を加へず、大臣、人民都て信ぜられず、亦先王宿舊の法制に違ふ。汝、頗る曾つて聞くや。阿闍世王、波瞿利王、是の如き等比の數十の諸王、皆妄語に由りて地獄の中に墮せしことを、汝、今、云何んが、我をして彼の諸王と同じく地獄の苦を受けて妄語を作さしめむと欲するや。汝、今、我に辭を請ふべからず」と。時に波斯匿王、是の語を作し已り、即便ち使を遣はし梵摩達王に語るらく「七日の內速に來り納娶せむ」と。使者、敎を奉じ速かに往き彼に到る。梵摩王に語るらく「七日の中、我、當に婚を成すべし」と。時に王女、王、使を遣はすを聞き彼王を[四]催喚し、心憂惱を懷き[五]垢膩の衣を著け、諸の瓔珞を捨て其の形を[六]毀悴す。即ち高樓に上り長跪し合掌す。遙に祇洹に向つて是の言を作す「如來、世尊、一切衆生を慈悲憐愍し、一念の中に能く三世を知り給ふ。我、今、苦厄す。願くば哀愍を垂れて救濟し給へ」と。爾の時、世尊、遙に王女の精誠に求哀め救濟を求索むるを知り、恍惚の間に即ち女の前に現はれ種々に說法し給へり、心開け意解け、阿那含果を得たり。七日の頭に至り梵摩王子諸の侍從數千萬人を將ゐ其の珍寶と種々服飾を齎し來りて婦を娶らむと欲し其の宮中に至りぬ。其に妻を娶ることを欲す。覺へず女の身虛空の中に在りて十八變を作す。東に涌り西に沒す。南に涌り北に沒す。行・住・坐臥・變化自在なり。還び空より下りぬ。時に波斯匿王、女の是の如きを見て深く惶怖を生じて女に語りて言く「我、今、[七]愚冥にして、都て汝の是の神變有るを知らずして汚穢を以て汝を塵染す。罪咎を懺悔し汝に出家を聽さむ」と。其の梵摩王子亦信敬を生じて是の言を作す「我も亦愚癡にして識別する所無く是の如き意を作しぬ。願くば亦我を聽せ、其の罪を懺悔し汝に出家を聽さむ」と。爾の時王女、是の語を聞き已り尋いで祇洹に詣り、佛世尊を見奉り出家を求索む。佛即ち聽許し給へり。比丘尼と作り精懃に修習して阿羅漢果を得たり。時に、諸の比丘、是の事を見已り、佛に白して言さく「世尊よ、今、此の差摩比丘尼、宿に何の福を植え生れて王家に在り欲想有

【四】催喚。よびたつること。
【五】垢膩衣。あかとあぶらによごれた衣服。
【六】毀悴。やみやつれること。
【七】愚冥。おろかにしてくらし。

ること無く出家し道を得たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦に聽けよ、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『此賢劫の中、波羅奈國に佛有りて出世し給へり。號して迦葉と曰ふ。其の法中に於て一婦女有り。其の夫主と心相ひ憐れまず常に共に忿諍ふ。每に一日に於て各相ひ勸勉し比丘の所に詣り八關齋を受く。因つて共に求願す。「我等の輩をして所生の處に在り尊榮・豪貴・鬪諍の中に於て常に共に和解せしめよ」と。是の願を發し已り、壽の長短に隨つて各命終を取り共に王家に生れたり』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の夫主の公を知らむと欲せば今の梵摩王是れなり。彼の時の婦の公は今の波斯匿王是れなり。彼の時の夫主は今の王子是にして、彼の時の婦は今の王女是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 七十九、[1] 波斯匿王の女子醜[2]の緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、波斯匿王の摩利夫人一女兒を生めり。面貌極めて醜く、身體、麁澁にして猶し蛇皮の如し。頭髮、麁强にして猶し馬の尾の如し。王、此女を見て一つも喜ぶ心無く、便ち內宮に勅して懃加し守護す。「外に出さしめて人をして見ることを得せしむる勿れ」と。王、自ら念言やう「此の女、醜形人に似ずと雖も然も是れ末利夫人の生みし所なり」と。而して之を養育す。年、漸く長大し、嫁娶[3]すべきに任れり。時に王憂愁す。當に奈何がすべきを知り餘の方針無し。便ち一臣に告ぐ「卿、推求すべし。本是れ豪族の種姓の家者、今、若し貧乏にして錢財無き者を便ち將來すべし」と。



【一】波斯匿王醜女緣。梵本No.80. Virūpa(醜)阿育譬喩第二十賢愚經第八、雜寶藏經第二十一。
【二】女子醜。聖本による。
【三】嫁娶。よめいりとむこどり。

臣、即ち教を受け遍く往きて求覓めぬ。一貧窮豪族の子を得たり。使、便ち之を喚び將來して王に詣る。王、此の人を見て共に[四]屛處に至り密に共に私語すらく「聞く、卿、豪族にして今は貧窮なりと。當に相ひ供給すべし、我に一女有り、面貌極めて醜し。幸に卿、逆はずんば當に之を納受すべし」と。時に此の貧人長跪して王に白すらく「當に教勅を奉ずべし、正に大王に使し狗を以て賜らむも、我、亦受くべし、王の教に違はず。何ぞ況んや今は末利夫人、生み給ひし所の女なり、今、設賜らば命を奉じて之を納れむ」と。王、即ち女を以て彼の貧人に妻し。爲めに舍宅を起し、門戶を牢閉し七重に有らしむ。王、女の夫に囑し。自ら戶を捉り排らき、若し出でゝ行かむと欲する時に、自ら之を閉ざゝしむ。「我が女、醜惡なり、外人をして其の面狀を見せしむること勿れ、常に戶を牢閉し[五]幽關して內に在らしめよ」と。王、財物を出し其須ふる所に隨つて女婿に供給し、乏短無からしむ。王、即ち跪拜し授けて大臣と爲せり。後の時間に於て多財、饒寶にして乏少する所無し。諸の豪族と共に[六]邑會を爲す。日月[七]更作す。會同の時、夫婦共に來り男女雜合し、共に相ひ娛樂す。諸の來り會する者各自らの婦を將ゐ共に來り、會に赴きぬ。唯、彼の大臣のみ獨り將ゐ來らず。衆人、疑怪む。「彼の人の婦は儻能く端正にして顏色曜耀なるか、或は能く極めて醜く中に顯現せざるか。是を以て彼の人、婦を將ゐ來らざるかと。今、當に計を設け往きて彼の婦を觀む。即ち各心を同じくし密に共に相ひ語り酒を以て之に勸め醉して地に臥せしむ。解きて門鈎を取り五人をして其家に往至き其の門戶を開き其の婦を觀んと欲す。

爾の時に當りて彼の女の心惱み、自ら罪咎を責む。我、何の罪を種えて夫の爲に憎まれ、恒に幽閉せられ闇室に處在り。日月と及び諸人とを覩ざるや。復、自ら念言やう「今、佛、世に有り、常に慈悲を以て諸の衆生の苦危有る者を觀給はゞ即ち往きて之を度し給ふ」と。爾の時、此の女、即便ち至心に遙に世尊を禮し「唯、願くば哀愍し我が前に來り到り教訓し給へ」と。[請ふ]其の女精誠

【四】屛處。物の小蔭。
【五】幽關。深く門をふさぐこと。
【六】邑會。宴會に同じ。
【七】更作。あらたまること。

にして敬心、純篤なり。佛、其の意を知り、即ち其の家に到り其の女の前に於て、地中より涌出し給ふ。紺髪の相現はれ。其の女頭を擧げて佛の髪相を見奉り倍歡喜を加ふ。敬心極めて深し。其の女の頭髪自然に細軟にして、紺青の色相あり。佛、漸く面を現ず。女、便ち之を見て心に歡喜を懐き、面、復端正、悪相の麁皮自然に化し滅しぬ。佛、漸く身を現じ給へり。金色晃昱なり。益、歡喜を増し、身體端嚴なり、猶天女の如し。佛、便ち爲めに種々に法要を說き給へり。心開け意解け、須陀洹果を得たり。心踊悅を懐き世に比なし。時に佛還へり去り給ひき。爾の時、五人門を開き內に入り、其の端正殊に妙にして雙ぶもの少きを見たり。時に彼の五人各相ひ謂つて言く「我怪しむ。此の人「何故に」、婦を將ゐ來らざる」。婦の端正を見、乃至是の若きを觀覩已竟りぬ。門戶を牢閉し還りて戶の鈎を彼の人の帶頭の本の處に繫けぬ。會同各罷み、其の人、家に還り其の舍內に入り婦端正にして殊に特れ人に過ぐるを見て欣然として問ふて言く「汝は是れ何人ぞや」と。婦、夫に答へて言く「我、是れ汝の婦なり」と。夫、即ち問ふて言く「汝、前に極めて醜なり、今者何の緣、端正乃ち爾る」と。其の婦、具に上事を以て夫に答へぬ。「佛の神德に緣り我をして今是の如き身體を得せしめ給へたり」と。婦、復、夫に白すらく「今、我が意、王と相見ゆることを欲す。汝、當に我が爲めに其の意情を通ずべし」と。夫、即ち其の言を受け、即ち往きて王に白すらく「女郎、今來り相ひ見えむことを欲す」と。王、女の夫に答ふらく「此の事を道ふこと莫れ、急ぎて當に牢閉し愼しみ出さしむること勿るべし」と。女の夫、王に答ふ「何を以て乃し爾るや、女郎、今は佛の威神を蒙むり便ち端正なるを得、天女と異ること無し」と。王、是を聞き已り「審かし、是の如くならば速に往き將ゐ來れよ」と。即ち車を莊嚴り女を迎へ宮に入りぬ。王、女の身を見るに端正にして殊に特れ世に等しく雙ぶもの無し。歡喜量り無く、自ら勝ふること能はず。王、即ち勅を告げ、車乘に嚴かに駕り、共に佛の所に詣り佛の足を頂禮し却きて一面に坐し、長跪して佛に白して言さ



【八】晃昱。ひかりかゞやくこと。

【九】女郎。男子の才氣ある婦人の稱。

く「世尊よ、不審なり、此の女、宿に何の福を種え乃し豪貴、富樂の家に生れ、復、何の業を造り醜陋の形を受け皮毛の麁く強きこと畜生より劇しきや、唯、願くば世尊よ、當に開示せらるべし」と。

爾の時、世尊、大王と夫人に告げ給はく「汝、今、善く聽けよ、當に汝の爲めに說くべし」と。『乃往過去無量世の時一大國有り波羅㮈と名づく。一人の長者有り財寶量り無く稱げて計ふべからず。時に彼の長者其の家內を合せ常に恒に一辟支佛を供養す。身體麁惡形狀、醜陋にして憔悴看叵し。時に長者の家に一小女有り、辟支佛の來るを見て惡心輕慢なり、呵罵し毀語すらく「面貌醜陋にして身皮麁惡なり、何ぞ其れ憎むべきや」と。時に辟支佛、數、其の家に至り其の供養を受け給いぬ。世に在り經ること久しくして涅槃に入らむと欲し、即便ち其の爲めに大神變を現じ身を虛空の中に踊らし身より水火を出し東に涌き西に沒し、南に湧き北に沒し、虛空の中に於て、行・住・坐・臥、意に隨つて變現す。長者をして家の一切を覩見せしむ。還び空より下り長者の家に至り給ふ。長者、歡喜し自ら勝ふること能はず。其の女、即時過を悔ひ自責すらく「唯、願くば慈哀し開恕せらるべし、我前に惡心、罪疊り過厚し。幸に懷くこと在らず、今懺悔を聽し罪有らしむ勿れ」』と。

佛、大王に告げ給はく「爾の時の彼の長者の女を知らむと欲せば辟支佛を毀呰するが故に後の生處に於て常に醜形を受け、後に神變を見て其に向つて悔過するが故に今端正を得たり。世に超ること奇特なり、及ぶ者有ること無し。是の辟支佛を供養するが故に所生の處に在りて常に富家に生れ尊榮、豪貴にして乏少する所無し。又、我に値ふて其の憂苦を脫せり」と。

爾の時、波斯匿王、及び諸の臣民、佛の是の業報因緣を說き給ふを聞き心開け意解け、須陀洹果を得る者、斯陀含[を得る]者、阿那含[を得る]者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り。無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 八十、盜賊人の緣

佛、毘舍離國の重閣講堂に在しき。

時に、彼の城中に一愚人有り、心常に偸盜を憘樂し業と爲す。以て自ら存活す。其の土の人民咸皆聞知す。又一時に於て、僧坊中に好[一]銅瓨有るを聞き規として盜み取らむと欲す。即便ち諸の行人と與に僧坊に入り瓨を盜み取らんと欲す。竟に獲得す。諸の比丘の一の四句偈を說き、諸天、眼眴せすること極めて遲く世人速疾ことを論說するを聞き、時に彼[二]偸人是の語を聞き已り憶えて心に懷くこと在り。尋いで即ち出で去れり。其の彼の時に於て諸の商客有り他邦より來り一つの上價の摩尼寶珠を持ち奉獻して王に上つれり。王、珠を得已り尋いで即ち人を遣り塔の頭に繫著す。時に彼の偸人、王の珠を繫ぎ塔の棖頭に著けしを聞き密に心に懷くこと在り、即便ち偸み取れり。匿して出さず。時に王聞き已りぬ。「塔の棖の珠を失ふ」と。大いなる瞋恚を生じ即ち國中を募る。「設見る者有らば密に來り[三]糺譖せよ、我、當に重賞すべし」と。遂に數時を致し敢て募に應ずるものなし。時に王、怨禱し以て計を爲す無し。時に智臣有り、王に啓白して言さく「今、王境都て豐樂極まり無し、盜者甚だ少し、唯此一人のみ偸盜を業と爲し以用て自活す。國を擧て聞知せり、今、此の寶珠必ず是れ彼の人見て偸取を爲せしならん。今、若し繫縛し[四]榜笞し鞭打せよ。必ず敢て首さゞらむや。王、當に計を設け彼人を策謀し虛實に當ることを爲すべし」と。王、智臣に問ふ、「當に何の計を設くべきや」と。智臣、答へて曰く「密に餘人を遣り偸人を請喚し各酒食を勸め極めて醉はしめ、輿にて殿上に著け密に覺らさらしむ。殿堂を莊嚴し及び諸の伎女極めて殊妙ならしめ、衆くの音樂を作し以て之を娛樂す。偸人、是に於て必ず當に驚覺すべし。諸の伎女に勅し、普

【一】銅瓨。銅のかめ。
【二】偸人。盜人に同じ。
【三】糺譖。たゞしつぐること。
【四】榜笞。むち打つこと。

く各語りて言く、汝、閻浮提の中の塔の根頭の珠を偸むが故に今、此の忉利天上に生るゝことを得たり、我れら諸の伎女音樂を作唱し共に汝を侍衞す。汝、實に爾るや不やと」と。時に彼の偸人[五]蔞瞢の故に醉ふ。正に實を道はむと欲し不か是かを恐畏る。正に道さらむと欲す。復、爲めに諸女逼切して語らしむ。時に彼の偸人、卒に自ら憶念す「我、昔、曾つて沙門說く所の講說を聞く、諸天眴せすること極めて遲く世人速疾し。今者伎女、眴せ皆速疾なり。必ず是れ天に非ず」と。尋いで即ち頭を低くして肯て道ず。是に於て未だ久しからず、便ち醒悟を得。官、罪を問はず。脫して死せざるを得。時に。彼の智臣、復、更に王に白さく「當に更に計を設け偸人を策謀すべし」と。王、復問ふて曰く「何の策謀を以てせん」と。智臣答へて曰く『王よ詐り親しむべし、彼の偸人を喚び賜ふに大臣と爲し一切の庫藏密に頭數を計り悉く之を委付せよ。其の後の時に於て王軟語すべし。「今更に卿の如く親しき所無し、好く庫藏を守り失脫せしむること無れ」と。偸人聞き已りて必ず歡喜を懷かむ。王、徐に問ふべし、「我、前に著くる所の摩尼寶珠、塔の根に繫ぐ者卿知ると爲すや不や」と。其の偸人は必ず實を首すべし、何を以て之を知る、今、王の爲に貴重とせらるる所の一切の財寶の任信を爲すを見て必ず王に向つて首さむ』と。時に、波斯匿王、臣の道ふ所の如く、計を設け[六]規略す。是に於て偸人智臣の語の如し。王に向つて實を首さく「此の寶珠は奴實に盜み取れり。畏れて敢て出さゞりき」と。王、復問ふて言く「卿、前に醉ひ臥して、我が殿上に在り、諸女詰問す。汝天上に在りて何を以て首さゞるや」と。偸臣、白して言さく「我、昔、曾て僧坊の中に入り、諸の比丘の四句偈を講ずるを聞けり、云道く諸天は眼瞬すること極めて遲く世の人は速疾なりと。尋いで自ら憶念せり。是の故に天上に生在するに非ざるを知り、是を以て首さゞりき」と。是に於て波斯匿王還び寶珠を得て甚だ歡喜を懷き偸臣作す所の罪咎を問はず。時に、彼の偸臣既に脫るゝことを得已り前みて王に白して言さく「願くば罪咎を恕し奴の出家を聽せよ」

【五】蔞瞢。暗きこと。

【六】規略。はかりごと。

と。王、偸臣に告ぐらく「汝、今、尊榮・富貴・快樂、極めて正に爾し、今、何を以ての故に必ず出家を欲するや」と。偸臣、王に白さく「我、曾つて沙門の說く所の一つの四句偈を聞き脫れて死せざるを得たり。是の如く厄難にして然り、況んや復多聞、讀誦し修習し說の如く修行せば必ず大利を獲む。是の故に今願ふて出家を欲す」と。精懃し修習し阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具へ、諸天、世人の敬仰する所となれり。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

# 撰集百緣經卷第八

# 卷の第九

## 聲聞品第九

### 八十一、海生商主の緣[一]

佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中五百の賈客有り。大海に入り珍寶を採取せんと欲す。時に彼の商主族望を選擇し娉して以て婦と爲す。將ゐて共に海に入り十ケ月を足滿して一男兒を產む。因みて爲めに字を立てて名を海生と曰ふ。大福德有り。諸の商主をして大珍寶を獲せしむ。安穩にして廻り還れり。咸共に唱へて言ふ「安穩なり、海生よ」と。年漸く長大にして重ねて復勤勉なり。更に大海に入り其の珍寶を獲て進引み還り來りて大黑風に値ふ。其の船舫[二]を吹き羅刹鬼の國に飄墮す。廻波[三]、黑風なり。時に、諸の商人各々諸天善神を跪拜す、一も感應し彼の厄難を救ふ無し。中に優婆塞有り、商人に語りて言く「佛世尊有り常に大悲を以て晝夜六時衆生を觀察し苦厄を受くるを護り。輙ち往きて之を度し給ふ。汝等咸當に彼の佛名を稱ふべし、或は能く此に來り我等の命を救ひ給はむ」と。時に諸の商人各共に同時に南無佛陀と稱せり。爾の時、世尊、遙かに商客の極めて厄難に遇ふを見て卽ち光明を放ちて黑風を照耀し給ふ。風、尋いで消滅す。皆解脫を得たり。各是の言を作さく「我等、今、佛の威光を蒙り此の諸難を脫す。今、若し平安に達到せば當に佛と僧との爲に塔寺を造立し、佛と僧を請命し其の中に安置し諸の餚饍を設けて所須を供給し皆乏しきこと無からしむべし」と。是の語を作し已り、咸、皆「然なり可し」と云ふ。是に於て進引み皆悉く平安に鄉土に達到せり。先の言要の如く塔寺を造立し、佛僧を請命し諸の餚饍を設け供養し訖竟る。却きて一

---

【一】海生商主緣。梵本 No. 81. Samudra(海)、如意樹譬喩第九。

【二】船舫。ふね。

【三】迴波。波の旋迴する(めぐる)こと。

面に坐し、佛の說法を聽き心開け意解け、各〻道果を獲たり。卽ち佛の前に於て出家を求索む。佛、卽ち告げて言はく「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成れり。精懃し修習し阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具へ、諸天・世人敬仰する所となれり。時に、諸の比丘是の事を見已り前みて佛に白して言さく「不審なり、世尊よ、今此の商人五百の比丘、宿に何の業を造り是の如く種々厄難に遭値し佛の威光を蒙むり諸難を脫することを得たるや。又、世尊に値ひ奉り出家し道を得たるや」と。佛、比丘に告げ給ふやう「但、今日、彼の厄難を救ふのみに非ず。過去世の時我れ亦彼を救ひ諸の厄難を脫せしめぬ」と。時に、諸の比丘重ねて佛に白して言さく「不審なり、世尊よ、過去世の時其の事云何、唯、願くば世尊よ敷演し解說し給へ」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『乃往、過去無量世の中、波羅㮈國に五通仙人有り、河の岸邊に住す。時に五百の商人有り。大海に入らむと欲し路、河岸に由る。彼の仙人を見て各共に彼に往き安吉を問訊す。彼の仙人を勸め「共に海に入らしめむ」と。仙人、答へて言く「汝等、自去れ、設し恐難有らば但我が名を稱へよ。當に汝等を護るべし」と。爾の時商人是の語を聞き已り進引みて海に入りぬ。大いに珍寶を獲還び來り還らむと欲し羅刹、黑風の諸難に逢ふ。爾の時商人咸共に一心に仙人の名を稱ふ。卽ち往きて救護し諸の厄難を脫せしむ』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「爾の時の彼の仙人を知らむと欲せば則ち我が身是れなり。彼の時の五百の商人とは今の五百の比丘是れなり。我、彼の時に於て未だ煩惱を斷ぜず尙能く彼の諸の厄難を拔濟せり。況んや今三界に出づることを得て彼を化度し能はざらむや」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 八十二、須曼花の衣、身に隨つて產るゝの緣[一]

佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に彼の城中に一人の長者有り、財寶量り無く稱て計ふべからず。高門を選擇し娉して婦と爲し、種々の音樂を以て之と娛樂す。十ケ月を足滿して一男兒を產む。端正殊に妙なり、須曼花の衣身と俱に生ず諸の相師を召し此の兒を占相せしむ。相師、觀已り「此の兒產れし時何の瑞相か有る」と。父母、答へて言く「須曼花の衣有りて身を裹みて生る、因みて爲めに字を立てゝ須曼那と名づく」と。體性、賢柔にして慈心、孝順なり。年漸く長大にして衣も亦隨つて大なり。父母愛念し便ち小兒を將ゐ阿那律に與へて[二]沙彌と作さしむ。教へて坐禪せしむ。未だ久しからざるの間に阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具へ諸天・世人の敬仰する所なり。時に、阿那律、沙彌に勅して言く「汝、今、[三]拔提河邊に往き淨水を取り來るべし」と。尋いで彼の河に往き瓶に水を盛り滿し虛空の中に擲つ。後に隨つて飛び來れり。時に諸の比丘、是の沙彌を見て未曾有と歎ず。佛に白して言さく「世尊よ、今、此の須摩那沙彌、宿に何の福を植え巨富の家に生れ須摩那の衣身に隨つて俱に生じ、出家して未だ久しからざるに阿羅漢果を獲たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け吾れ當に汝等の爲めに分別し解說すべし。乃往、過去九十一劫に、波羅㮈國に佛有りて出世し給へり。毘婆尸と號す。教化周く訖り神を遷して涅槃し給へり。時に國王有り、梵摩達多と名く。其の舍利を收め四寶の塔を造りて之を供養す。時に童子有り、彼の塔を見るの故に心に欣樂を生じ即便ち出家す。年老耄に至り空しくして獲る所無し。深く自ら剋責し須曼花を買ひ縷を持つて之を貫き遍く塔上を覆ひ發願して去れり。是の功德に緣り、九十一劫「の間」地獄・畜生・餓鬼に墮せず。天上・人中常に須曼花の衣有りて身と俱に

【一】須曼花衣隨身產緣。梵本 No.82. Sumanā 如意樹譬喩第十八。

【二】沙彌。梵語(Śrāmaṇera.)。勤策ツ、求寂男と譯す。大僧の爲に勤めて策勵せらるればなり。男子の出家にして十戒を受けしものゝ通稱なり。

【三】拔提河。梵名 (Ajiravatī.)。

生じ天の快樂を受け、乃至今、我に遭値うて出家し道を得たり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 八十三、寶手比丘の緣[一]

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、財寶量り無く族望を選擇し娉して以て婦と爲す。倡伎樂を作し以つて之と娛樂す。其の婦懷妊し、十ケ月を足滿して一男兒を產む。端正殊に妙にして世に希有とする所なり。其の兩手の中に金錢を出すこと有り、取り已れば還び有り、是の如く展轉して取り盡くすべからず。諸の相師を召し此の兒を占相せしむ。相師觀已り「此の兒產れし時何の瑞相か有りしや」。父母答へて言く「其の兩手の中に金錢有りて出づ取れば還び生ず。因みて爲めに字を立てて名を寶手と曰ふ」と。年漸く長大し稟性賢柔にして慈心、孝順なり、惠施を好憙み、從つて乞ふ者あれば其の兩手を伸し、好き金錢有り、尋いで以つて之を施こす。諸の親友を將ゐ城を出で觀看し、漸次遊行して祇洹の中に到り、佛世尊を見奉るに、三十二相八十種好ありて光明普く曜やき百千の日の如し。心に喜悅を懷き前みて佛の足を禮し、合掌して佛及び比丘僧を請ずらく「慈哀、憐愍し我が供を納受け給へ」と。時に彼の阿難、佛の左右に在り小兒に問ふて言く「若し供を設けむと欲せば當に財寶を須ふべし」と。是に於て小兒阿難の語を聞き尋いで兩手を伸すに、金錢 雨「の如く」落つ。須臾に積聚る。佛、阿難に勅し給ふやう「汝、今、此の金錢寶物を取り餚饍を營理し佛、及び僧を請ぜよ」と。阿難、敎を受け飮食を營理し供養し訖竟る。佛、爲めに法を說き給ふ。心開け意解け、須陀洹果を得たり。歸りて父母に白し道に入らんことを求索む。父母愛念して違逆する能はず。將ゐて佛の所に詣り出家を求索む。佛、即ち告げて言く「善く來りぬ。比丘よ」と。



【一】寶手比丘緣。梵本、No.83. Hiraṇyapāṇi 寶石譬喩第十、賢愚經。No.9.

鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成る。精懃し修習し阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具へ、諸天・世人の敬仰する所となる。爾の時、阿難是の事を見已り前みて佛に白して言く、「今、此の寶手比丘、宿に何の福を植え豪族の大長者の家に生れ、然も其の兩手に此の金錢有り、取れば還び生じ、佛世尊に値ひ復道果を獲たるや」と。

爾の時、世尊、阿難に告げて言く「汝、今諦かに聽け、吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし。『此の賢劫の中に波羅㮈國に佛有りて出世し給へり、號して迦葉と曰ふ。敎化周ねく訖り神を遷して涅槃し給へり。時に彼の國に王有り、名を[二]迦翅と曰ふ。舍利を收め取り四寶の塔を造る。時に長者有り、其の[三]塔寺を見て心に隨喜を生じ一金錢を持ち棖の下に安置し發願して去れり。是の功德に緣り、惡趣に墮せず、天上・人中常に金錢有り手を伸して出す、乃至今我に遭値へり。故に金錢有り取れば還び有り。出家して道を得たり』」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 八十四、[一]三藏比丘の緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、波斯匿王の夫人懷妊し十ケ月を足滿して一男子を生む。端正殊に妙にして、世に希有とする所なり。身に袈裟を被りて生れ已に能く語る。父王に問ふて言く「如來・世尊、今、在すや不や、大德、迦葉・舍利弗・大目揵連、是の如く遍く諸大弟子悉く在すと爲すや不や」と問へり。父王、答へて曰く「今、悉く都て在り」。「唯、願くば大王よ、我が爲めに供を設け佛及び僧を請ぜよ」と。尋いで勅して「供の」設を爲し、佛を請じ佛、宮に入り給ふ。其の太子を見て之に問ふて曰はく「汝、自ら迦葉佛の時を憶念せよ。是れ三藏比丘なりや不や」と。答へて言く「實に是れなり」と。「此[二]胞胎

---

【二】迦翅。梵語 Kṛkiṇ (Kṛṣiṇ)。

【三】塔寺。梵本による。

【一】三藏比丘緣。梵本 No.84. Tripiṭa(三藏)、寶石譬喩、第二十。

【二】胞胎。胎衣のこと。

に處し安穩と爲すや不や」と。「佛の遺恩を蒙り　[三]性命を存するを得て朝夕を過すを得たり」と。時に王夫人、此の太子、佛、世尊と共に相ひ答問するを見て喜こび自ら勝ずして佛に白して言さく、「今、此の太子、宿に何の福を植えて生れて便ち能く語り、乃し能く佛と敢て答問するや、唯、願くば世尊よ、敷演し解說し給へ」と。爾の時、世尊、即便ち王の爲めに偈を說いて言はく、

　宿に諸の善業を造り　百劫、而も朽ちず　善業の因緣の故に　今、是の如き報を獲、

是の時、波斯匿王及び其の夫人、佛、世尊の此の偈を說き給ふを聞き已り前みて佛に白して言さく「不審なり、世尊よ、過去世の時其の事云何、唯、願くば世尊よ、敷演し解說せよ」と。

　爾の時、世尊、大王に告げて曰く「汝、今、諦かに聽け。吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし『此賢劫の中に波羅㮈國に佛有りて出世し給へり、號して迦葉と曰ふ。諸の比丘を將ゐ遊行し敎化し。迦翅王の國に到る。時に王太子名を善生と曰ふ。佛、世尊を見て深く信敬を生じ歸りて大王に白し道に入らんことを求索む。王、聽許さず。「我、唯一子のみ、當に王位を繼ぎ民衆を養育すべし、終に汝の出家、入道を聽さず」と。時に王太子、是の語を聞き已り、[四]愁悴して地に躃れ、穀を斷ちて食せず。一日・二日乃至六日絕ちて飲食せず。時に諸の群臣王に啓白して言さく「太子食せず、已に六日を經たり。恐くば命全からざらむ、願くば今出家せしむることを聽せ。故に相見ゆることを得む」と。時に彼の大王、臣の語を聞き已り違逆する能はず。彼の太子に勅して共に要誓を作すらく「汝、今若し能く三藏を讀誦し經書に[五]通利せば汝に出家を聽さむ。然る後我を見よ」と。時に彼の太子王勅を聞き已り心に喜悅を懷き尋いで即ち出家す。懃加して三藏の經書を誦習し盡く通利し、還り來りて王に見ゆ。王、比丘に問ふやう「我、先に汝に勅しぬ。要らず三藏を誦し經書に通利し然る後我に見えよと。今、利と爲すや不や」と。比丘、答へて曰く「今、悉く通利せり」と。王大いに歡喜び即ち比丘に語るやう「我、今、庫藏の所有財物を汝の取用に隨つて終に悋惜まず」



【三】性命。生命のこと。

【四】愁悴。うれひやつれること。

【五】通利。能く其事に通じて無礙なること刄の利き如きを云ふ。

【六】三衣。一に僧伽梨、衆聚時衣と譯す。大衆集會して授戒・說戒等の嚴儀を爲す時に着るもの、二に鬱多羅僧、上衣

と。時に王子の比丘、王の敎を聞き已り大いに財物を取り種々の百味の餚饍を施設け迦葉佛及び二萬の比丘を請じ供養し訖已る。一一の比丘に各三衣六物を施せり。是の功德に緣りて惡趣に墮せず、天上・人中常に袈裟有りて身を裹みて生る。乃至、今我に遭値へり。故に袈裟有り出家して道を得たり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 八十五、耶舍蜜多の緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、財寶量り無く稱て計ふべからず。族望を選擇し娉して以て婦と爲し、倡伎樂を作し以て之と娛樂す。其の婦懷妊し十ケ月を足滿して一男兒を生む。端正殊に妙にして、世に希に有る所なり。生るゝの日に當り天大雨を降らす。父母歡喜す、諸の相師を召し此の兒を占相せしむ。相師覩已り「此の兒福德あり」と。生れては則ち雨を降らし國を擧げて聞知す。因みて爲めに字を立てゝ耶舍蜜多と名づく。乳を哺みて飲まず。其の牙齒の間自然に八功德水有り。用つて自ら充足す。年、漸く長大にして、諸の親友と與に遊行し觀看し祇洹の中に到り佛世尊を見奉る。三十二相、八十種好ありて、光明普く曜き百千の日の如し。心に歡喜を懷き前みて佛の足を禮し出家を求索む。佛、卽ち聽許し給ふ。「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成る。精懃し修習して阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具へ諸天・世人の敬仰する所となる。時に諸の比丘是の事を見已り佛に白して言さく「世尊よ、今、此の耶奢比丘、宿に何の福を植え生れて甘雨を降らし、乳を哺み飲まず、其の牙齒の間に自然に八功德水有り、以つて自ら充足し、又、世尊に値ひ奉り、出家して道を得たるや」と。

---

と譯す、安陀會の上に着るもの、三に安陀會、中着衣と譯す、體に襯して着するもの。

【七】六物。佛、比丘を制して必ず畜へしむるもの六種あり。(1)僧伽梨。(2)鬱多羅僧。(3)安陀會、以上の三衣。(4)鐵鉢。(5)尼師壇、坐具なり。(6)漉水嚢坐尊をいふ。

【一】耶舍蜜多緣。梵本 No. 85. Yaçomitra。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、善く聽け、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『此の賢劫の中、波羅㮈國に佛有りて出世し給ひ號して迦葉と曰ふ。彼の法の中に於て一人の長者有り。年齒老耄にして出家し入道せり。懈慢・懶墮にして精懃する能はず。又、復、重病なり。良醫之を占ふて云く「酥を服むべし、病乃ち差ゆべし」と。尋いで醫の敎を用ひ酥を取り之を服す。其の夜の中に於て病發し、熱渇す。馳せ走りて水を求むるも。水器皆空なり。復泉池に趣くも、皆亦枯竭せり。河の中に至り趣くも、河も亦枯竭す。是の如く處々に水を求め得ず。深く自ら悔責し彼の河の岸に於て衣を脫ぎ樹に繫け、之を捨てゝ還り來り、其の明旦に至りて、狀を以て師に白しぬ。師、是の語を聞き卽ち之に答へて言く「汝、此の苦に遭ふ狀、餓鬼に似たり、汝、今我が瓶の中の水を取り僧中に至り行すべし」と。卽ち師の敎を受け瓶を取り水を行すに水盡く涸竭す。心に憂怖を懷き、謂ふやう「其れ命終らば必ず餓鬼に墮せむ」と。尋いで佛の所に詣り具に上事を陳べて世尊に白さく「我、此の厄に遭ふ。甚だ惶怖を爲す。恐く餓鬼に墮せむ。唯、願くば世尊よ、大慈憐愍して幸に見示を爲し給へ」と。佛、比丘に告げ給はく「汝、今當に衆僧の中に於て好き淨水を行すべし。此の餓鬼の身を脫することを得べし」と。時に彼の比丘佛の敎を聞き已り心に喜悅を懷き、卽便ち僧中に常に淨水を行せり。二萬歲を經て卽便ち命終り、所生の處に在り其の牙齒の間に常に清淨の八功德水有り。自ら用つて充足す。乳を哺み飲まず。乃至今我に遭値うて出家し道を得たり』」と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時の老耄比丘を知らむと欲せば今此の耶奢蜜多是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 八十六、化生比丘の緣[一]

【二】酥。ちゝざけ。

【一】化生比丘緣。梵本 No. 86. Upāpāduka。

爾の時、世尊、忉利天上波利質多羅樹下の寶石殿上に在しき。

安居三月、母摩耶の爲めに說法し訖竟り、還來り下りて閻浮提に至り給へり。爾の時、釋提桓因、佛の下らむと欲し給ふを知り諸天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・究槃茶等を勅し佛の爲めに三道の寶梯を造作る。佛、天より下り給ふ。寶梯の兩邊に無量百千萬億の諸天・龍・夜叉・人非人等有り、佛、如來の天上より下り給ふを見て歡喜せざる莫し。渴仰して法を聞かむとす。爾の時、世尊諸大衆の善根已に熟するを觀て卽ち爲めに法を說き給ふ。心開け、意解け須陀洹を得る者、斯陀含「を得る」者、阿那含「を得る」者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

時に、彼の會中に忽然として一人の化生の比丘有り。諸の大衆に告ぐるやう「汝等、今、各我が請を受け、餚饍飲食、百種の須ふる所我悉く能く與へむ」と。是の語を作し已る。時に諸の大衆各々自ら念ふやう「諸天の寶器、百味の飲食、皆悉く獲得て、充足飽滿せり」と。爾の時、阿難、是の事を見已り前みて佛に白して言さく「今、此の化生の比丘は、宿に何の福を植えて、今乃ち能く此の大衆をして充足飽滿せしむ。不審なり、世尊よ、其の事云何」と。

爾の時、世尊、阿難に告げて言はく「汝、今諦に聽け、吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし。『乃往過去九十一劫「に於て」、波羅㮈國に佛有りて出世し給へり、毘婆尸と號す。彼の法中に諸の比丘有り、夏坐三月、山林に在りて坐禪行道せり。乞食の處遠くして行道を妨廢し、甚だ用つて疲勞せり。時に彼の衆中に一人の比丘有り。衆僧に白して言はく「我、汝等の爲めに檀越を勸化し衆僧に供給し乏しきこと有ること無らしめむ。汝等、但、安心して行道すべし、慮を爲すに足らず」と。時に諸の比丘、是の語を聞き已り各共に心を用ひ行道すること三月にして皆道果を獲たり。是の功德に由り所生の處に在りて、常に種々の百味の飲食有り、念に應じて卽ち得。乃至今我に遭値へり

【三】夏坐。夏安居を作すこと。

『飲食』念に應じて卽ち至り、大衆を供養し乏しきこと有ること無からしむ』と。

爾の時、阿難、復佛に白して言さく「何の因緣を以て今化生を得たるや」と。佛、阿難に告ぐらく『此の賢劫中迦葉佛の時一人の商主有り、諸の商客を將ゐ、他邦を涉歷し、販賣し利を求めぬ。其の婦懷妊し其の中路に於て產に値ふ。甚だ難く死を求めて得ず。時に彼の商主心に厭惡を生じ之を捨てゝ去り、出家し入道し大誓願を發すらく「此の出家の善根功德を持ち、我をして來世所生の處胞胎を受くる莫らしめ、常に化生を得む」と。是の故に今是の報を得たる耳』と。

佛、阿難に告げ給はく「彼の時の商主を知らむと欲せば今の化生の比丘是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 八十七、衆寶莊嚴の緣[1]

佛、迦毘羅衞國の尼拘陀樹下に在しき。

時に、彼の城中一人の長者有り、財寶量り無く稱て計ふべからざるも、子息有ること無し。神祇を祠祀り、子有ることを求索む。精誠に感應し十ケ月を足滿して一男子を生む。端正殊に妙にして、世に希有とする所なり。家の中に自然に一泉水有りて、地より涌出す。諸の珍寶有り其の中に充滿す。復、花樹有り天衣・上服之の樹枝に懸る。時に彼の長者、其の是の如きを見て喜び自ら勝へず、諸の相師を召し此兒を占相せしむ。相師、覩已り其の父母に問ふらく「此兒生れし時何の瑞相有りしや」と。父母答へて言く「此の兒生れし時家の中に自然に一泉水有りて地より湧出し、諸の珍寶有りて其の中に充滿す。及び樹に上に好き天衣有り、因みて爲に字を立てゝ衆寶莊嚴と名づく」と。年漸く長大して稟性賢柔、慈心孝順なり。諸の親友を率ゐ城を出でゝ觀看し、漸次、遊行して尼拘陀樹下に到り、佛、世尊を見奉るに三十二相、八十種好あり、光明普く曜き百千の日の如し。心に



【一】衆寶莊嚴緣。梵本 No. 87. Çobhita。

歡喜を懷き、前みて佛の足を禮し、却いて一面に坐し、佛の說法を聽き、心開け意解け、須陀洹果を得たり。歸りて父母に白して道に入らんことを求索む。父母愛念し違逆する能はず。將ゐて佛の所に詣り出家を求索む。佛、卽ち告げて言はく「善く來りぬ。比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成る。精懃し修習して阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具へ諸天・世人の敬仰する所となる。時に諸の比丘、是の事を見已り前みて佛に白して言さく「今、此の衆寶莊嚴比丘、宿に何の福を植え生れて便はち是の奇特の事有り、出家して未だ久しからざるに復道果を獲るや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け。吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『乃往、過去無量世の時、波羅㮈國に佛有りて出世し給へり、迦留孫陀と號す。化緣周ねく訖り、神を遷して涅槃し給ふ。時に彼の國王を梵摩達多と名づく。舍利を收め取り四寶の塔を造り。高さ一由旬にして之を供養す。時に長者有り花樹を齎持し諸の珍寶と種々の衣服及び瓶の水を懸けて塔前に安置し發願し供養せり。是の功德に緣り無量世の中地獄・畜生・餓鬼に墮せず。天上・人中常に泉水及び花樹有り、隨ひ共に倶に生ぜり。乃至、今我に遭値うて出家し道を得たり』と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「彼の時華樹を奉上り塔を供養せし者を知らむと欲せば今、此の衆寶莊嚴比丘是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 八十八、[一]罽賓寧王の緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

一時に、彼の南方に一國土有り、名を金地と曰ふ。王を[二]罽賓と名づく。其の夫人と共に相ひ娛樂

【一】罽賓寧王緣。梵本 No. 88. Kapphina. 賢愚經 No.38.

【二】罽賓。梵名 (Kalpa)。

し、十ケ月を足滿して一男兒を生む。骨節肥壯にして大氣力有り。生るゝの日に當り復一萬八千の大臣の子等有り。彼の王子と共に同日に俱に生ぜり。亦大氣力有り、時に彼の王子年漸く長大し共の王[三]崩背して、王位を紹嗣す。尋いで一萬八千の諸臣の子等を取り賜ふに大臣と爲し、共に國事を理めたり。時に罽賓寧王、諸の群臣を將ゐ遊獵射戲し、諸臣に問ふて言く「今、此の世間、人の能く大氣力有ること我の如き者有り叵きや不や」と。時に、商客有り王の從中に在りて王語を聞き已り尋いで王に答へて曰く「彼[四]中都の下復大王有り波斯匿と名づく。絕大の力有り、殊に王に倍勝ること百千萬倍なり」と。時に罽賓寧王、商客の語を聞き已り瞋恚隆盛にして尋いで即ち使を遣はし波斯匿王に告げて言く「却後七日、諸の侍從を將ゐ卿の來至を仰ぐ。吾が國土に達し[五]朝跪問訊せよ。若し爾らざれば吾當に彼に往き、汝の五族を誅し滅盡せしむべし」と。時に波斯匿王、使者の語を聞き甚だ惶怖を懷き以て計を爲す無し。即ち佛の所に詣り世尊に白して言さく「罽賓寧王、我に勅す。七日諸の侍從を將ゐ彼の國に達し朝拜問訊せよ。若し爾ざれば當に來りて我を誅すべしと。不審なり、世尊よ、事情如何」と。爾の時、佛、波斯匿王に告げ給ふやう汝憂懼るゝこと莫れ、但、彼の使に語りて云へ、我は是れ小王なり。更に大王有り、近く祇洹に在せり。卿、今往きて汝の王命を傳ふべし」と時に彼の使者尋いで即ち往至し祇洹の中に到り、佛、世尊を見奉るに「佛は」轉輪聖王と作り、大目連をして[六]典兵の臣と作し。諸の軍衆を將ゐて祇洹を圍繞せしめ其の四邊に七重の塹有らしむ。七寶の諸樹行列して相ひ、當び其の塹の中に、諸の蓮花有らしめ。若干の種々の色稱て計ふべからず。光明赫奕き城内を照せり。王は殿上に在り尊嚴畏るべし。時に彼の使者、此の王を覩已り情甚だ[七]驚悚し自ら念ふやう。「我が君、[八]無狀にして禍を招く」と。然れども已を得ず、前みて王に書を奉る。時に此の化王彼の書を得已り、脚底に[九]蹋著し使者に告げて言く「吾、大王と爲り四域を臨統す。汝、今、彼に至り吾が教勅を道へ、信至るの日馳奔し[一〇]來觀せよ。臥して吾

【三】崩背。崩御に同じ。

【四】中都。中國の意。

【五】朝跪。朝賀といふに同じ。

【六】典兵。兵をつかさどること、典兵臣は陸軍大臣の意。

【七】驚悚。おどろきおそること。

【八】無狀。善行なきこと。

【九】蹋著。ふみつけること。

【一〇】來觀。天子に謁見に來ること。

が聲を聞かば、便ち起生すべし、坐して吾が聲を聞かば便ち起立すべし。立ちて吾が聲を聞かば便ち路を渉るべし。七日を[一一]剋期し諸の侍從を將ゐ朝拜して我に見えよ。若し斯の制に違はゞ罪[一二]不請に在り」と。使者還り馳せ、具さに上事を以て彼の王に向つて說く。時に王聞き已り、深く自ら咎め責む。尋いで諸臣三萬六千を集め嚴駕して來り大王を朝拜せむと欲す。然れども疑ふ所有り、未だ進引むるに及ばず先に一人の使を遣はし大王に白して言さく「臣等領する所の三萬六千の諸の小王の輩都て去くべしと爲すや、半を將ゐて來るべき耶」と。時に此の化王使者に報へて言く「半を將ゐて速に來れ」と。使者還り馳せ罽賓寧王に白すやう「大王よ、勅を約せり、半を留めて住することを聽せり」と。尋いで一萬八千の諸の小王等を將ゐ馳奔り速に來りて王を朝拜し已る。是の念言を作さく「今、大王の形貌勝ると雖も、力は我に如かざらむ」と。化王、時に遙に彼の意を知り典藏の臣に勅して「我が先祖の[一三]大弓弩を取り來り彼の王に授與へよ」といふ。王、勝ふること能はず。化王還し取り指を以て弓を張り、復、還、持與へ、語りて引挽かしむ。殊て弦動かず。化王還び索めて指を以て彈扣すれば、聲、三千大千世界に震ひ皆悉く震動す。次に復、箭を射るに、化して五[一四]撥と爲り、其の諸の箭頭に各蓮華有り。一一の花の上に復化佛有り、大いなる光明を放ち三千大千世界を照す。[一五]五道の衆生蒙賴せざるは莫し。諸天・人民道果を獲る有り。地獄の中は湯冷え火滅し、餓鬼の中は悉く飽滿を得、畜生の中は重擔を脫せり。貪欲・瞋恚し愚癡の煩惱斯の光に遇ふ者悉く皆調伏し佛法を信敬せり。時に罽賓寧王斯の變を見已り化王に向つて五體を地に投じ心即ち調伏す。爾の時化王調伏し已れるを知り本形に還復り[一六]四衆、圍繞す。即ち一萬八千の諸の小王等の爲めに種々說法し給ふ。心開け意解け、各道跡を獲、須陀洹果を得たり。即ち佛の前に於て出家を求索む。佛、即ち告げて言はく「善く來れり、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成る。精懃し修習し未だ久しからざるの間に阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具へ

【一一】剋期。時日を定むること。
【一二】不請。罪吟味せざるも罪のあること。
【一三】大弓弩。いしゆみ、大弓。
【一四】撥。ばち。
【一五】五道。地獄・餓鬼・畜生・人・天迷ひの世界。
【一六】四衆。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷をいふ。

諸天・世人の敬仰する所となる。爾の時、阿難佛に白して言さく「今、此の罽賓寧王等の比丘、宿に何の福を植え皆豪族に生れて大氣力有り。佛、世尊に値ひ各道果を獲たるや」と。

爾の時、世尊、阿難に告げて言く「汝、今、諦に聽けよ。吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし。『乃往、過去に、波羅㮈國に佛有りて出世し給ふ。毘婆尸と號す。諸の比丘を將ゐ寶殿國に到り給ふ。時に王の名を槃頭末帝と曰ふ。佛の來至し給ふを聞き心に喜悅を懷き諸の群臣一萬八千を將ゐ城を出て奉迎し、前みて佛の足を禮し長跪して佛及び比丘僧を請ずるやう「慈哀・憐愍し三月の我が四事の供養を受け給へ」と。時に彼の佛と僧と王の供を受け已り、佛、卽ち王の爲に種々に說法し給ふに、王、大いに歡喜び各發願して言く「此の供養の善根功德を持ち我等の輩をして、所生の處に在りて、其の大王と同日に倶に生れしめよ」と。是の願を發し已り各所止に還へれり。是の功德に緣り無量世の中、惡道に墮せず天上・人中共に同日に生れ、天の快樂を受け、乃至今我に遭値うて出家し道を得たり』」と。

佛、阿難に告ぐらく「彼の時の槃頭末帝王を知らむと欲せば今、此の罽賓寧比丘是れなり。彼の時の群臣とは今の一萬八千の比丘是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 八十九、拔提釋王比丘と作るの緣[一]

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、如來六年苦行し始めて正覺を成じて滿十二年、千二百五十の比丘を將ゐ方に迦毘羅衞國に往詣せむと欲し、毎に自ら念言ひ給ふやう。我、今、彼に往く、常と同じからず。彼の土の諸[二]釋、憍慢にして情多し、咸、各々神變を現はし、彼の土に往くべし」と。卽ち千二百五十の比丘に

【一】拔提釋王作比丘緣。梵本 No.89. Bhadrika。

【二】諸釋。諸々の釋迦族。

勅すらく「我、今は本國に歸へらむと欲す。汝等各々神變を現はし、彼の諸釋をして歸誠し信伏せしめよ」と。

爾の時、世尊、大光明を放ち諸の比丘と虛に乘じ彼の迦毘羅衞國に詣り給ふ。時に[三]淨飯王、佛の來至を聞き諸釋等に勅し道路を平治し不淨を除去し、幢幡を建立し諸の寶鈴を懸け香水を地に灑ぎ衆くの妙花を散じ、諸の伎樂を作して世尊を奉迎せり。前みて佛の足を禮し請じて宮に入り王の供養を受けしむ。時に淨飯王、佛の翼從を見るに神力有りと雖も形貌醜陋にして人情に適せず。「我、今當に拔提釋等五百餘人容貌端正なるを選び世尊を翼從せしむべし」と。是の語を作し已り尋いで勅して五百人を選擇び、將ゐて佛の所に詣り[四]優波離をして鬚髮を剃除せしむ。[優婆離]眼目に淚を流し釋王の上に墮す。尋いで即ち問ふて言く「汝、今、何故に涕泣是の如きや」と。優波離言く、「王は今諸釋中の尊なり。期せずして一旦、形を毀り麁食し糞掃衣を著る。王の是の如きを見て眼目に淚を流せり」と。時に拔提釋是の語を聞き已り心惆悵を懷き猶憍慢を生じ、鬚髮を除き竟る。衣鉢を辨具し具戒を受けむと欲し僧中に入り、次第に禮を作し優波離の前に到り住して禮せず。佛、釋王に問ひ給ふやう。「汝、今、何故に獨り優波離に禮せず耶」と。拔提釋言く「彼賤しく我貴し。是を以て禮せず」と。佛言く「我が此の法中に貴賤有ること無し。猶し幻化の如く安危保ち難し」と。拔提釋言く「彼は是れ我が奴なり。禮を爲すに忍びず」と。佛、復、告げて言はく「一切の奴僕、貧富・貴賤・恩愛・別離何の差別か有らむ」と。時に拔提釋、佛の語を聞き已り、[五]俛仰して禮を爲す。地大に震動す。天、空中に於て未曾有と歎ぜり。拔提釋王、道を求むる爲めの故に乃ち能く彼の下賤の人の爲めに躬を曲げて跪拜す。我慢の幢將に崩れ倒ふれむとする時、拔提釋具戒を受け竟る。却いて一面に坐し、佛の說法を聽き心開け意解け、阿羅漢果を得たり。應器を執持ちて乞食に行き、塚の間に詣り樹の下に止宿し、心意泰然として復怖畏無し。而して是の言を作さく「我、昔日に於て

【三】淨飯王。梵名(Çuddhodana.)。迦毘羅衞國の王にして釋尊の父。

【四】優婆離。梵名(Upāli)。釋尊敎團中持律第一。

【五】俛仰。首をたれること。

王宮に在る時、健夫を募索め器仗を執持ち左右に安置き故に危懼を懷く。我、今出家入道し此の塚の間に在りて復怖畏無し、快言ふべからず」と。爾の時、阿難、拔提釋の是の語を作すを聞き已り前みて佛に白して言さく「今、此の拔提釋比丘、宿に何の福を植え豪族に生れ、出家して未だ久しからざるに羅漢果を獲たるや」と。

爾の時、世尊、阿難に告げて言く「汝、今、諦に聽け、吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし。『乃往過去無量世の時波羅㮈國に辟支佛有り、應器を執持ちて乞食に行けり。時に一人有り貧窮にして飢餓す。路を涉りて行くに、唯、少餅あるのみ。規として自ら食せむと欲し、辟支佛の威儀詳序として乞食に行き給ふを見て心に歡喜を懷き、尋いで卽ち餅を取りて辟支佛に施せり。「辟支佛」其の餅を受け已り身を虛空におどらし、十八變を現はし、東に涌き西に沒し、南に涌き北に沒し、身より水火を出す。是の如く種々に十八變を作し給ふ。時に餅を施せし人是の變を見已り甚だ信敬を懷き、發願して去れり。是の功德に緣り無量世の中地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上・人中に於て尊榮、豪貴常に快樂を受け乃至今我に遭値うて出家し道を得たり』と。

佛、阿難に告げ給はく「彼の時の餅を施せし人を知らむと欲せば今、此の拔提釋王比丘是れなり」と。佛、是の緣を說くの時、須陀洹を得る者、斯陀含「を得る」者、阿那含「を得る」者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發すもの有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 九十[一]、佛、王子護國を度し出家せしむるの緣

佛、拘毘羅國吐羅樹下に在しき。

是の念言をなし給ふ。「我、今、往きて彼の王子護國を度し出家せしむべし」と。是の念を作し已

---

【六】器仗。ほこ。

【一】佛度王子護國出家緣。梵本 No.90. Rāṣṭrapāla. 阿育譬喩第二十一。

り、諸の比丘を將ゐ城門の中に至り足門閫を蹈み給ふに、六種に震動し諸の天花を雨らし、大光明を放ち彼の城内を照し給ふ。盲者は視ることを得、聾者は聽くことを得、啞者は能く言ひ、躄者は能く行く。時に彼の王子斯の光を覩已り、未曾有と歎じ、尋いで佛の所に詣り佛、世尊を見奉る。三十二相、八十種好ありて、光明普く曜き百千の日の如し。威儀詳序として甚だ愛樂すべし。心に歡喜を懷き前みて佛の足を禮し却きて一面に住す。佛、即ち其の爲めに四諦の法を說き給ふに、心開け意解け、須陀洹果を得たり。歸りて父の王に白し佛の功德を歎ずらく、「若し家に在らば轉輪聖王と作り四天下を典り七寶隨從し遊行自在なるべし。尙、能く捨離して出家、入道し給ふ。況んや我れ今にして隨從し佛を求め出家せざらむや」と。是の念を作し已り前みて王に白して言く「唯だ願くば大王よ、慈哀憐愍して我が出家を聽し、世尊に隨從せしめよ」と。時に須提王、太子の語を聞き遮つて聽さず。「護國」心に懊惱を懷き穀を斷ち食せず。一日・二日乃至六日なり。時に諸の群臣其の太子の食せざること六日なるを見て跪づき王に白して言さく「太子、今、穀を斷ち食せざること六日を經たり。恐くは命全からざらむ、願くば王よ今出家せしむることを聽し給へ、故に相見ゆることを得む」と。時に須提王、諸臣の語を聞き聽して入道せしむ。尋いで佛の所に詣り出家を求索む。佛、即ち告げて言はく「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便はち沙門と成り、精懃し修習して阿羅漢を得たり。三明・六通・八解脫を具へ諸天・世人の敬仰する所となる。時に諸の比丘、是の事を見已り、前みて佛に白して言さく「今、此の王子護國比丘、宿に何の福を植え王家に生れ、出家して未だ久しからざるに便はち道果を獲たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦に聽けよ。吾、當に汝等の爲めに分別し。解說すべし。乃往、過去無量世の時、波羅棕國の王を毘提と名づく、兵甲を興起し隣國の王と交陣し共に戰ふ。時に隣國の王彼れの爲めに敗れ諸の兵衆を將ゐ逃避し退去す。曠野の中に到り天の暑熱

---

【二】轉輪聖王。梵語(Cakra-vartti-rāja) 此王身に三十二相を具し位に卽く時天より輪寶を感得し其輪寶を轉じて四方を降伏すれば轉輪王といふ。

【三】毘提。梵名(Videha)。

に値ひ水草有ること無く飢渇し死せむと欲す。尋いで即ち彼の辟支佛の所に往き[辟支佛]便はち王に水草を示す。渇乏を解くを得て其の道を導引き還へりて本國に達せり。喜び自ら勝ずして此の言を作さく「我等、今此の飢渇苦惱の患ひを脫す。皆、彼の辟支佛の德を蒙むるに由る。今、當に供を設け辟支佛を請ずべし」と。是の語を作し已り、勅して餚饍と種々の飲食を設け辟支佛を請じ宮に入れ供養す。[辟支佛]其の供を受け已り尋いで般涅槃し給ふ。時に王須提及び諸の群臣・后妃・婇女、號啼し涕哭し悲感し懊惱し、其の舍利を收め取り四寶の塔を造りて之を供養す。是の功德に緣り、無量世の中地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上・人中に於て尊榮、豪貴にして天の快樂を受け、乃至今、我に遭値うて出家し道を得たり』と。

佛、諸の比丘に告げ給ふやう「彼の時の須提王を知らむと欲せば辟支佛を供養するに由り今我に値ふことを得て出家し道を得たり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

# 卷の第十

## 諸緣品第十

### 九十一、須菩提、惡性の緣【一】

爾の時、世尊、初始めて成佛し給ふ。便はち諸の龍王を教化せむと欲し、故に卽便はち須彌山の下に往至き、比丘の形を現はし端坐して思惟し給ふ。時に金翅鳥王有り大海の中に入り一小龍を捉へ須彌の頂に還り規として食噉せむと欲す。時に彼の小龍の命故に未だ斷せず。遙に比丘の端坐思惟するを見て至心に哀を求む。尋いで卽ち命終り、舍衞國の婆羅門の家に生れ、名を【二】負梨と曰ふ。端正殊に妙にして、世に希有とする所なり。因つて爲めに字を立てゝ須菩提と名づく。年漸く長大し智慧聰明にして及ぶ者有る無し。唯、甚だ惡性なり。凡そ眼に見る所の人及び畜生は卽便はち瞋罵り、未だ曾つて休廢せず。父母親屬皆共に厭患ひ喜び見る者無し、遂に便はち家を捨てゝ山林の中に入り、乃ち鳥獸及び草木の風吹きて動搖するを見ても亦瞋恚を生ず。終に喜心無し。時に山神有り、須菩提に語りて言く「汝、今、何故に家を捨てゝ此の山林の中に來るか。既に善を修めざれば則ち利益無し、唐に自ら疲苦せむのみ。今、世尊有りて祇洹の中に在せり、大福德有り、能く衆生に善を修め惡を斷つを敎え給ふ。今、若し彼に至らば必ず能く汝の瞋恚の惡毒を除かむ」と。時に須菩提、山神の語るを聞き卽ち歡喜を生じ、尋いで之に問ふて曰く「今、世尊、何處に在ますと爲すや」と。山神答へて曰く「汝、但眼を眠せ、我自ら汝を將ゐて世尊の所に至らむ」と。時に須菩提、山神の語を用ゐて目を眠すこと須臾にして、覺えず自然に祇洹の中に在り。佛世尊を見奉るに三十二相八十種好あり、光明、普く曜き百千の日の如し。心に歡喜を懷き前みて佛の足を禮し却きて

【一】須菩提惡性緣。梵本No.91. Subhūti 如意樹譬喩第十。

【二】負梨。梵名(Bhūti)。

一面に坐す。佛、卽ち爲に瞋恚の過惡、愚癡の煩惱、善根を燒滅し衆惡を增長し後、果報を受け地獄に墮在し備に苦痛を受け稱て計ふべからず。設ひ復脫し得ても或は龍蛇・羅刹・鬼神と作り心常に毒を含み更に相ひ殘害すと說き給ふ。時に須菩提、佛、世尊の是の語を聞き心驚き毛竪ち、尋いで自ら悔責す。卽ち佛の前に於て罪咎を懺悔し豁然として須陀洹果を獲得たり。心に喜悅を懷き道次に入らむと求む。佛、卽ち聽許し給ふ「善く來れり、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成れり。精懃し修習し阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具へ諸天・世人の敬仰する所となれり。時に諸の比丘、是の事を見已り佛に白して言さく「世尊よ、今、此の須菩提比丘、宿に何の業を造り人と爲ることを得と雖も常に瞋恚を懷き未だ曾つて休息せず、佛世尊に値ふて出家し道を得たるや」と

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『此の賢劫の中波羅奈國に佛有りて出世し給へり。號して迦葉と曰ふ。彼の法中に於て一人の比丘有り常に勸化を行ひ一萬歲中諸の比丘を將ゐ處々に供養す。後の時間に於て僧少緣有りて、竟に隨從せず。便ち惡罵を出すらく「汝等[三]佷戾、狀毒龍に似たり」と。是の語を作し已り尋いで卽ち出で去れり是の業緣を以て五百世の中毒龍[の身]を受け身心常に毒を含み衆生を[四]觸嬈す。今人[の身]を得と雖も[五]宿習除かず。故に復瞋を生ぜり』と。

佛、諸の比丘に告げ給ふやう「爾の時の勸化の比丘惡口して罵る者を知らむと欲せば今の須菩提是れなり。爾の時僧を供養するに由るが故に今我に値ふことを得て出家し道を得たり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 九十二、長老比丘、[一]母胎中に在ること六十年の緣

【三】佷戾。ねぢけもとること。
【四】觸嬈。ふれみだること。
【五】宿習。先世の習氣（くさみ、にほひ）。
【一】長老比丘在母胎中六十年緣。梵本 No.92. Sthavira（長老）如意樹譬喩九。

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、財寶量り無く稱て計ふべからず。高門を選擇し娉して以て婦と爲し、種々の音樂を以て之と娛樂す。十ケ月を足滿して便はち子を產まむと欲す。然れども肯て出でず、尋いで重ねて娠む有り、十ケ月を足滿して復一子を產む。先に懷妊する者右の脇に住在す。是の如く次第に懷妊して九子各十ケ月を滿して產むも、唯先の一子のみ故に胎中に在りて外に出づることを得ず。其の母極めて患ふ。諸の湯藥を設けて以て自ら療治す。病損滅無きの時、家中に囑するやう我が腹中の子故に活きて死せず。命、若設し終らば必ず我が腹を開き子を取り養育せよ」と。其の母時に病患を免かれず即便はち命終る。時に諸の眷屬其の尸骸を載せ塚の間に詣り、大醫〔二〕耆婆を請じ腹を破り之を看せしむるに一小兒を得たり。形狀故の如し、頭髮皓白にして〔三〕俯僂して行く四向に顧視し、諸親に語りて言く「汝等、當に知るべし、我れ先身、諸の衆僧を惡口し罵辱するに由るが故に此の生熟を藏の中に處り六十年を經て是の苦惱を受けぬ」と。時に諸の親屬、兒の語るを聞き已り〔四〕號咷し涕泣し、悲しみ答ふる能はず。爾の時、世尊、遙に此の兒の善根已に熟するを知り諸の大衆を將ゐ〔五〕尸所に往到き小兒に告げて言はく「汝、是れ長老比丘なるや不や」と。答へて言く「實に是れなり」と。第二、第三亦是の如く問ふ、故に言是と道ふ。時に諸の大衆此の小兒佛と答へ對ふるを見て各疑惑を懷き前みて佛に白して言さく「今、此の老兒宿に何の業を造り此の胎中に處し頭髮皓白俯僂して行き、復、如來と共に相ひ答問するや」と。

爾の時、世尊、諸の大衆に告げ給はく「汝等、諦かに聽け、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。此の賢劫の中、波羅奈國に佛有りて出世し給へり。號して迦葉と曰ふ。諸の比丘有りて夏坐安居す。衆僧和合して、一比丘を差ぶ。年老耄に在り、僧、〔六〕維那と爲す。共に制限を立つ。此の夏坐に於て要ず道を得る者共に〔七〕自恣を聽す。若し未だ得ざる者は自恣を聽さず。今、此の維那獨り

---

【二】耆婆。梵名(Jîvika.)。佛出世當時の名醫なり。

【三】俯僂。うつぶしてかゞむこと。

【四】號咷。なきさけぶこと。

【五】尸所。しかばねを置ぐ所、墓所といふに同じ。

【六】維那。梵語(Karmadâna)。禪家にヰノと呼ぶ、寺中の事務を司る役名にして寺中三綱の一なり。授事・知事・寺護等と稱す。

【七】自恣。梵に(Pravâraṇâ)といふ夏安居の竟日卽ち舊律に在ては七月十六日新律に在ては八月十六日に於て、他の淸衆をして恣に己が所犯の罪を各他の比丘にあげしめて之を懺悔するをいふ。

道を得ず。僧皆布薩[八]自恣を聽さず。心懊惱を懷きて是の言を作す。「我、獨り爾の爲めに僧事を營理し汝等の輩をして安穩に行道せしむ、今、復、返つて更に自恣布薩羯磨[九]を聽さず」と即便ち瞋恚り、衆僧を罵辱す。尋いで即ち牽捉へ室の中に閉づ。是の唱言を作さく「汝等の輩をして常に闇冥に處り光明を見ざらしめむ、我れ、今、此の闇室に處るが如くせむ」と。是の語を作し已り自殺して命終る。地獄の中に墮し大苦惱を受け、今、始めて脫るゝことを得たり。故に胎中に在りて是の苦惱を受く』と。

爾の時、衆會、佛の說き給ふ所を聞き各々自ら身に意業を護り生死を厭離れ、須陀洹を得る者、斯陀含(を得る)者、阿那含(を得る)者、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り。無上菩提の心を發す者有り、時に諸の親屬、還び老兒を將ゐ家に詣り養育す。年、漸く長大し放ちて出家せしむ。精懃し修習し阿羅漢果を得たり。時に諸の比丘是の事を見已り佛に白して言さく「世尊よ、今此の老兒比丘宿に何の福を植え出家して未だ久しからざるに羅漢果を獲るや」と。

佛、諸の比丘に告げ給はく「往昔、衆僧を供養し及び維那と作り僧事を營むに緣るが故に今我に値ふことを得、出家して道を得たり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 九十三、兀手比丘の緣[一]

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、財寶量り無く稱げて計ふべからず。族望を選擇し、娉して以て婦と爲し、諸の伎樂を作し以て之と娛樂す。其の婦懷妊して十ケ月を足滿し一男兒を產む。兀にして手有ること無し。產れて便はち能く語る。是の唱言を作さく「今、此の手は甚だ得難きと爲す。




【八】布薩。もと梵語 (Upavasatha) が巴利 Uposatha に變じ、梵語の原形を失ひて posadha となる。淨住、善宿又は長養と譯す。出家の法には半月每に衆僧を集めて戒經を說き比丘をして淨く戒中に安住せしめ能く善法を長養せしめ、又在家の法には六齋日に八戒を持して善法を增長するをいふ。

【九】羯磨(Karma.)。譯作業、授戒懺悔等の業事をなす一種の宣告式をいふ。此宣告文に由りて其事成就すればなり。

【一】兀手比丘緣。梵本 No. 93. Hastaka 寶石譬喩、第十一。

深く愛惜を生ず」と。父母之を怪しみ諸の相師を召し此の兒を占相せしむ。相師觀已り其の父母に問ふやう「此の兒產るゝ時何の瑞相有りしや」と。父母答へて言く「此の兒產れ已り是の唱言を作す、今此の手は甚だ得難きと爲すと。因つて爲めに字を立て、名づけて兀手と曰ふ」と。年漸く長大して稟性・調順・聰明・智慧あり諸の親友を將ゐ漸行し觀看し、祇洹の中に到り、佛世尊を見奉る。三十二相、八十種好ありて、光明赫奕として百千の日の如し。心に歡喜を懷き前みて佛の足を禮し却きて一面に住す佛即ち其の爲めに種々に說法し給ふに、心開け意解け、須陀洹果を得たり。歸りて父母に辭ひ道に入らんことを求索む。父母愛念して違逆する能はず、將ゐて佛の所に詣り出家を求索む、佛即ち告げて言はく「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮、自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成り精懃し修習して阿羅漢果を得、三明・六通・八解脫を具へ諸天・世人の敬仰する所となれり。時に諸の比丘、是の事を見已りて佛に白して言さく「今、此の兀手比丘、宿に何の福を植え、生れ已りて能く語り、然も手有ること無く、又世尊に値ひて道跡を得獲たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け、吾、當に分別し解說すべし。此の賢劫の中、波羅棕國に佛有りて出世し給へり。號して迦葉と曰ふ。二比丘有り、一は是れ羅漢にして二は是れ凡夫なり。說法師と爲る。時に諸の民衆、競うて共に請喚す、常に法師を將ゐ檀越の請を受く。脫して一日法師在らず、餘者を將ゐて行く。瞋恚りて罵しり言ふ。「我、常に汝の爲めに鉢を洗ひ水を給す。今、更に返つて餘の者を將ゐて共に行くや。今より以往、更に汝の使と爲り、我をして手無からしめむ」と。是の語を作し已り。各自辭退し止まり共に行かず」と。「是業緣を以て五百世中是の果報を受く。是故に唱へて言ふ。今此の手は甚だ得難しと爲す」と』。

佛、諸の比丘に告ぐらく「彼の時の法師比丘の呪誓を作す者を知らむと欲せば、今兀手比丘是れなり。彼の時に聖人を供給するに由るが故に今我に値ふことを得て出家し道を得たり」と。佛、是

の兀手の縁を説き給ふ時、諸の比丘等各々自ら身・口・意業を護り生死を厭悪ひ須陀洹を得る者、斯陀含[を得る]者、阿那含[を得る者]、阿羅漢を得る者有り、辟支佛の心を發す者有り、無上菩提の心を發す者有り。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 九十四、梨軍支比丘の縁[1]

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中に一人の婆羅門有り、其の婦懷妊し十ケ月を足滿し一男兒を產む。容貌弊悪にして身體臭穢なり。母乳を飲む時能く乳をして壞れしむ。若し餘を雇はゞ亦皆壞る。唯、酥蜜[2]を以て指に塗り舐めしめ軀命を濟ふを得たり。因つて爲めに字を立て梨軍支と號す。年漸く長大し、遂に復薄福にして飲食を求索むるも、未だ曾つて飽くを得ず。諸の沙門を見るに威儀詳序として應器を執持ち乞食し鉢を滿して還る。見已りて歡喜び、是の念言を作さく「我、今、當に佛、世尊に往詣し求めて沙門と作り、或は能く飽くことを得べし」と。是の念を作し已りて卽ち祇洹に詣り佛に求めて出家す。佛、卽ち告げて言く「善く來れり、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便はち沙門と成る。精懃し修習して阿羅漢果を得たり。而して乞食に行くに、亦獲得ず。便はち自ら悔責す。其の塔中に入り、少しき坌汚[3]を見、卽便ち掃灑し、時に乞食に到るに、卽便ち豐足す、心に歡喜を懷き、衆僧に白して言さく「今より以往衆僧よ、塔寺は我に掃灑を聽せ、然る所以は掃灑に由るが故に乞食し飽くを得ればなり」と。僧、卽ち聽し常に掃灑せしむ。又一日愚癡に縛せられ眠りて覺曉めず、未だ掃灑に及ばざるの時、舍利弗五百弟子を將ゐて他邦より來る。世尊に問訊す。佛の塔中少しく塵坌有りと。卽便ち之を掃く。時に梨軍支、便ち眠りより覺め。舍利弗の掃灑し已

【一】梨軍支比丘縁。No. 94. Lekuncika. 寶石譬喩第二十一。

【二】酥蜜。酥は牛乳を精選して製せるもの。

【三】坌汚。ちりあくた。

竟れるを見、心に悵恨を懷き舍利弗に語る「汝、我が地を掃き、我をして今、飢困一日ならしむ」と。時に舍利弗、是の語を聞き已りて之に告げて言く「我、今、自ら當に汝と共に城に入り請を受くべし、飽滿を得べし、汝憂ふること勿れ」と。時に、梨軍支是の語を聞き已り、心泰然を懷く。請を受くる時到り、舍利弗と共に城に入り請を受く。正に檀越の夫婦の鬪諍に值ひ、竟に食を得ず。飢餓して還る。時に舍利弗、第二日に於て復更に語りて言く「我、今朝に於て當に自ら汝を將ゐ長者の請を受け汝をして飽足せしむべし」と。時到り將ゐて往く、其の上・中・下皆悉く食を得たり。唯此の一人のみ獨り食を得ず。高聲に唱言ふ「我、食を得ず」と。爾の時、主人都て聞く者無し、飢困して還る。爾の時、阿難是の事を聞き已り深く憐愍を生じ、第三日に梨軍支に語りて言く「我、今朝、佛に隨つて請を受く、汝の爲めに食を取らむ、定んで飽食せし(め)む」と。然れども彼の阿難、如來の八萬四千の諸の法藏門を受持し未だ曾つて漏脫せず。今、故に此の梨軍支比丘の爲めに其飲食を取るを忽然として憶せず。空鉢にして還る。第四日に於て阿難復更に其の爲めに食を取り、所止に還歸り道に惡狗に逢ひ【四】噬掣を爲す所となり飲食を地に棄てゝ、空鉢にして還り、復食を得ず。第五日、大目犍連、復爲めに食を取り所止に還歸るも、道中、復金翅鳥王の爲めに搏噬せられ鉢を含み持ち去り大海の中に置かれ、復食を得ず。第六日に於て舍利弗、復爲めに食を取り彼の房門に到るに門自然に閉づ。復神力を以て其の房內に入り其前に踊出づるも、鉢を失して地に墮し金剛の際に至る。復、神力を以て手を申べ鉢を取るも、其の口復噤みて、竟に食ふこと能はず。日時已に過ぎて口輒ち自ら開く。第七日に於て竟に食することを得ず。極めて慚愧を生じ四衆の前に於て、沙を食ひ水を飲み卽ち涅槃に入りぬ。時に諸の比丘是の事を見已り其の所由を怪しむ。「梨軍支比丘、宿に何の業を造り產れては則ち飢餓し初めて豐足無く、復何の緣を以て出家し道を得たるや」と。

---

【四】噬掣。かみとること。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け、吾、當に汝等が爲に分別し解說すべし。『乃往、過去無量世の中、波羅奈國に佛有りて出世し給ふ、號して帝幢と曰ふ。諸の比丘を將ゐ遊行し敎化し給ふ。時に長者有りて名を瞿彌と曰ふ。佛及び僧を見て深く信敬を生じ請じ來りて供養す。日々是の如くす。便はち後の時を經て其の父崩亡し、母故に惠施するに、子極めて慳貪にして遮りて施を聽さず。乃至食を計りて母に與ふ。母故に分減して佛及び僧に施す。子聞き瞋恚り卽便ち母を捉へ空屋に閉著し、戶を鎖して棄て去り、七日の頭に至り母極めて飢困し子より食を索む。兒、母に答へて曰く「何如ぞ沙を飡ひ水を飲め、活くるに足らむ、今、何の爲めに我より食を索むるや」と。是の語を作し已り之を捨てゝ去る。竟に食を得ず。母、便ち世を去り、其の子後に卽便ち命終り[五]阿鼻獄に入り苦を受け畢已り、還び人中に生れて飢困是の如し』と。

佛、諸の比丘に告ぐらく「彼の時、母の食を斷つ者を知らんと欲せば今の梨軍支比丘是れなり。往昔、佛を供養するに由るが故に今、我に値ふことを得て、出家し道を得たり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 九十五、[一]生死極めて苦しと唱へ言ふの緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、財寶量り無く稱て計ふべからず。良賢を選擇し娉して以て婦と爲し、倡伎の樂を作し以て之と娛樂す。其の婦懷妊し十ケ月を足滿して一男兒を生む。自ら宿命を憶ひ產れ已りて唱へ言ふ。「生死極めて苦し」と。因つて爲めに字を立てゝ生死苦と名づく。年、漸く長大し、凡そ人を見るの時、故に唱へ「生死極めて苦し」と言ふに由る。然れども父母・師僧・耆舊・有德に於て慈心孝順なり、言、常に笑を含み終に麁惡の言語を出さず。諸の親友を將ゐ城を出



【五】阿鼻獄。梵名(Avici)。無間地獄と譯す。此の地下の最底にあり、餘の大地獄は其上に重疊す、苦を受くること間斷なきなり。

【一】唱言生死極苦緣。梵本No.95. Aṁīsāra(生死)。

で、觀看し、漸次、遊行して祇洹の中に到り、佛、世尊を見奉るに三十二相、八十種好あり、光明暉曜し百千の日の如し。心に歡喜を懷き前みて佛の足を禮し却きて一面に坐す。佛、即ち其の爲めに四諦の法を說き給ふに、心開け意解け、須陀洹果を得たり。歸りて父母に辭ひ道に入らんことを求索む。父母愛念して違逆する能はず、將ゐて佛の所に詣り出家を求索む。佛、即ち告げて言はく「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成り、精懃し修習し阿羅漢を得、三明・六通・八解脫を具へ諸天・世人の敬仰する所となれり。時に諸の比丘、是の事を見已り佛に白して言さく「今、此の生死比丘、宿に何の福を植え生れて便ち能く語り、自ら宿命を憶ひ、又如來に値うて出家し道を得たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、善く聽け、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。『此の賢劫中人壽二萬歲にして波羅㮈國に佛有り出世し給へり。號して迦葉と曰ふ。彼の法中に一人の沙彌有り、和上に奉事す。時に彼の城中大設會を作す。爾の時沙彌、和上に語りて言く「今、設會の日、宜しく早く乞食すべし。必ず當に多く獲べし」と。師、即ち答へて言く「日時故に早く、且く坐禪すべし」と。第二、第三、是の如く師に白す。師、猶從はず。沙彌、瞋恚り、惡口して罵しり言ふ。「今、何故に舍中に死せざらむ」と。是の語を作し已り、尋いで即ち出て去る。城に入り乞食し所止に還歸り、師に向つて懺悔す。是の業緣に由り五百世中地獄中に墮し、諸の苦惱を受け今始めて脫することを得たり。是の故に唱へて生死極めて苦しと言ふ』と。

佛、諸の比丘に告げ給ふやう「彼の時師を罵しる沙彌を知らむと欲せば今の生死比丘是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 九十六、長者の身體瘡を生ずるの緣[一]

佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、財寶量り無く稱げて計ふべからず。高門を選擇し娉して以て婦と爲し、種々の音樂を以て之と娛樂す。十ケ月を足滿して一男兒を產む。身體に瘡有り、甚だ苦痛を患ふ。呻號叫喚し未だ曾つて休息せず。年、漸く長大し、瘡皆潰爛し膿血横に流れ常に疼痛を患ふ。因つて爲めに字を立て名を呻號と曰ふ。父母憐愍し諸方に藥を設け療治を加ふと雖も瘡除愈すること無し。年漸く長大し諸人の語るを聞く「祇洹精舍に好良き醫有り、善く衆病を療して能く除愈せしむ」と。尋いで卽ち往至き、祇洹の中に詣り佛、世尊を見奉る。三十二相、八十種好ありて、光明暉曜し百千の日の如し。心に喜悅を懷き前みて佛の足を禮し却きて一面に坐す。佛、卽はち爲めに[二]五盛陰苦、是瘡是、[三]癰にして、毒の箭心に入り人を傷害するが如し、皆是れ衆病の根本なりと說き給ふ。時に、呻號子、佛、世尊の是の語を說き給ふを聞き已り深く自ら咎責す。佛、世尊に向つて罪咎を懺悔す。瘡尋いで除き差ゆ。心に歡喜を懷き出家を求索む。佛、卽ち告げて言く「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成り、精懃し道を修して阿羅漢果を得たり。時に諸の比丘是の事を見已り佛に白して言さく「世尊よ、今、此の呻號比丘、宿に何の業を造り初めて產るゝ時、身に惡瘡有り、膿血横に流れ甚だ惡み見るべく。復、何の緣を以て出家し道を得たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け、吾、汝等の爲めに分別し解說すべし。乃往、過去無量世の時、波羅柰國に二人の長者有り、各悉く巨富・資財量り無し。因つて相ひ忿諍ふ。其の一長者大いに珍寶を齎らし貢ぎ奉じて王に與ふ。王納受し已る[に及び]彼の長者を讒す。



[一] 長者身體生瘡緣。梵本 No.96. Guptika.

[二] 五盛陰苦。我々の身は色・受・想・行・識の五陰を具へ衆苦熾盛なれば五盛陰苦とも又は五陰盛苦ともいふ。

[三] 癰。はれもの。

彼の人惡心にして、常に奸謀を懷き規として我を害せむと欲す。唯、願くば大王よ、我をして任意に彼の長者を治むることを聽るし給へ」と。王、卽ち「然らば可し」と。尋いで其の家に至り彼の長者を執へ繫縛し㈣榜笞す。楚毒量り無く身を擧げて傷破す。膿血橫に流れ痛み言ふべからず。時に彼の長者旣に免かるゝを得已り、深く自ら思惟すらく「身皆苦有り、衆惡の集まる所、諸の災禍多く甚だ厭患ふべし、我、彼の人に於て大いなる怨讐無く橫に傷毀せらる。乃至此の如し」と。卽ち自ら思惟し、山林中に詣り㈤有爲皆是無常と觀察して深く空を悟解し、辟支佛と成り、諸の怨親を視る心皆平等なり。「彼の長者を念ずるに、惡を我に加ふ。將來の世、地獄に墮し大いなる苦痛を受けむ。我、今、往きて爲めに神變を現じ彼をして開悟せしむべし」と。是の念を作し已り長者の前に詣り身を虛空に踊らし十八變を作す。時に彼の長者是變を見已り深く渇仰を懷き倍信敬を生じ卽ち請じて坐せしむ。爲めに餚饍の種々の供養を設け辟支佛に向ひ先罪を懺悔す』と。

佛、諸の比丘に告ぐらく「彼の時彼の國王に向ひ其の長者を讒し拷掠し榜笞する者を知らむと欲せば今の呻號比丘是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 九十七、㈠醜陋比丘の緣

佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に、彼の城中に一人の長者有り、高門を選擇し娉して以て婦と爲し、倡伎樂を作し以て之と娛樂す。其の婦懷妊し十ケ月を足滿して一男兒を產む。形貌極めて醜く、狀惡鬼に似たり。人有り見る者、之を捨てゝ去る。年漸く長大し父母厭患ひ馳せて遠く棄てしむ。乃至畜生も此の醜陋を見て尙怖懼を懷く、況んや人類をや、又一時林樹の間に詣り、花果を採取し以て自ら存活す。飛鳥、

---

【四】榜笞。むちうつこと。

【五】有爲。爲とは造作の義にして、造作を有するを有爲といふ。卽ち因緣所生の事物は盡く有爲なり。

【一】醜陋比丘の緣。梵本No. Virūpa.(醜陋)。

走獸の之を見ること有るもの怖畏れざる無し。跡を此の林に絕ち敢て住する者無し。爾の時、世尊、常に慈悲を以て晝夜六時衆生を觀察し誰か應に度すべき「を見」輒ち往きて之を度し給ふ。彼の醜陋、善根已に熟し化度の時到るを知り給ひ。佛、比丘に告げ給ふやう「我等、今、皆當に山林中に往詣し彼の醜陋を化すべし」と。爾の時、世尊、諸の比丘を將ゐ山林の中に到り給ふ。時に彼の醜陋、佛、世尊を見て卽ち避け走らむと欲す。佛、神力を以て去ることを得ざらしむ。時に、諸の比丘各樹下に在り結跏趺坐し繫念して前に在り。爾の時、世尊、卽便ち一醜陋の人を化作し應器を執持ち中に食を盛滿し漸く醜陋に向ふ。醜陋已に形狀己に類するを見て心に喜悅を懷く。今、此の人は眞に是れ我伴なり、尋いで來り共に語り、器を同じくして食す。時に此の飯は香味甘美なり。旣に之を食し已る。時に彼の化人忽然として端正なり。醜陋問ふて言く、「汝、今、何故に忽然として端正なるや」と。化人、答へて言く「我、此の飯を食す、兼ねて善心を以て彼の樹下に坐禪する比丘を觀る。我をして端正ならしむ」と。醜陋聞き已り、尋いで復之に效ふ。善心にて彼の坐禪の比丘を觀、尋いで端正を得たり。心に喜悅を懷く。卽ち化人に向ひ深く信解を生ず。時に化人本形に還復る。醜陋佛を見奉る。三十二相、八十種好ありて光明普く曜き百千の日の如し。前みて佛の足を禮し却きて一面に坐す。佛、卽ち其の爲めに種々に說法し給ふに、心開け意解け、須陀洹果を得たり。卽ち佛前に於て出家を求索む。佛、卽ち告げて言はく「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成る。精懃して道を修め阿羅漢果を得たり。時に諸の比丘是の事を見已り、佛に白して言さく「世尊よ、今、此の醜陋比丘、宿に何の業を造り人形を受くと雖も醜陋乃ち爾り、復、世尊に値ひ奉りて出家し道を得たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、善く聽け吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。「乃往、過去無量世の中波羅㮈國に佛有りて出世し給ふ。號して弗沙と曰ふ。一樹下に在り、結跏

【二】弗沙。梵名(Puṣya.)。

趺坐し給ふ。我及び[三]彌勒倶に菩薩と爲り彼の佛所に到り種々供養し、而して一足を翹げ七日中に於て偈を說いて佛を讃ず、

天上、世間佛に如く無く、　十方世界亦有る無し、　世界有る所悉く能く見、　能く佛の如く
及ぶ者有る無し。

爾の時、菩薩是の偈を說き已る。時に彼の山中に一鬼神有り、醜陋の形と作り來りて我を恐怖す。我れ神力を以て彼の行く處懸崖嶮岨過ぐるを得る能はざらしむ。時に彼の山神、即ち是の念を作さく「我、惡心を以て他を恐怖するが故に我今行く處嶮難過ぐを得べからざらしむ、今、當に彼に往き先きの罪を懺悔すべし」と。是の念を作し已り尋いで即ち往詣き、懺悔し訖已り、發願して去る』と。

佛、諸の比丘に告ぐらく「彼の時の山神我を恐怖する者を知らむと欲せば今此の醜陋の人の羅漢を得たる者是れなり。我を恐怖するが故に五百世中形體醜陋にして見る者驚き走る。彼の時懺悔退するに由り我に遭值うて出家し道を得たり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 九十八、恒伽達の緣[一]

佛、波羅㮈國の鹿野苑中に在しき。

時に、彼の國中に一人の[二]輔相有り、其の家大いに富めり、然れども兒息無し。時に恒伽河邊に[三]摩尼抜陀天祠有り、國土人民皆共に敬ひ奉ずるの時、此の輔相祠所に往詣して之に呪して言く「我に子息無し、承聞す、天神大功德有り[四]群生を救護し能く其の願を與ふ。今、故に自ら歸す。若し所願を蒙り願くば一子を賜らば當に金銀を以て天身を莊嚴し及び名香を以て神屋を塗治すべし。如し其の驗なからば當に此の廟を壞し屎を汝の身に塗るべし」と。天神、聞き已り自ら思惟して言く

【三】彌勒。梵名(Maitreya.)。

【一】恒伽達緣。梵本 No.98. Gangika. 賢愚經 No.6.

【二】輔相。大臣(Purohita)

【三】摩尼抜陀天祠。梵名(Manibhadra)。夜叉八大將の一、譯、寶賢・滿賢。

【四】群生。衆生といふに同じ。

「此の人豪富力勢、强盛なり、是れ凡品の其の子を爲すことを得るに非ず。我が力尠少にして願を與ふこと能はず。願、若し果さゞれば必ず神廟を毀辱せられむ」と。便ち復往きて摩尼抜陀に白す。摩尼抜陀の力辦ずる能はず。便ち復、毘沙門天王に往詣し自ら此の事を啓す。毘沙門王言く「亦、我が力、能く子を有らしむること非ず」と。尋いで天帝に詣る。其より願を求む。毘沙門王、即時上天し帝釋に啓して曰く『我れに一臣摩尼抜陀有り、近日語るを見るに、云く「波羅㮈國に一人の輔相有り、其より子を求む。重誓を結立す、我が願既に遂げなば供養倍加せむ。所願若し違はゞ當に我が廟を破りて毀辱を加ふべし」と。彼の人豪兇必ず能く是の如くせむ、幸に天王に望むらくば其れをして子有らしめよ』と。帝釋、答へて言く「斯事甚だ難し、當に有緣を覓むべし」と。時に一天有り五德身を離れ命盡きんと欲するに臨む。帝釋、告げて言く「卿、今終りに垂とす。願くば彼の輔相の家に生るべし」と。天子答へて言く「意、出家し正行を奉修せむと欲す。若し尊榮に生るれば欲を離るゝこと則ち難し。中流に在らむと欲す。冀くば所願を遂げむ」と。帝釋、復、白すらく「但、往きて彼に生れよ。若し學道を欲せば吾當に汝を佐くべし」と。天子命終り、神を降し輔相の家に受胎す。即ち生れて外に出づ。形貌端正なり。即ち相師を召し兒の爲に字を立つ。相師問ふて言く「本、何處に於て求めて此の兒を得たるや」と。輔相、答へて曰く「昔、恒河の天神より之を求む」と。因つて爲めに字を作り恒伽達と名づく。年漸く長大して便はち父母に啓して出家を求索む父母答へて言く「吾、今富貴にして、生業弘廣なり。唯汝一子のみ、當に門戸を嗣ぐべし。吾、今存在す。終に汝の出家入道を聽さず」と。兒の志に從はず。深く自ら[五]惆悵す。便ち捨身し更に凡處を求めむと欲す。中に於て出づることを求めなば、必ず易とすべきなり。是に於て密に去る。自ら山巖に投じ既に墮ちて地に在り、傷損する所無し。復河の邊に至り身を水中に投ず。水尋いで[六]瀄出し亦苦しむ所無し。復毒藥を取りて之を呑噉す。毒氣行かず、出りて死を致す無し。



【五】惆悵。いたむこと。

【六】瀄出。たゞよひ出づること。

復、是念を作さく「當に官法を犯し王の爲めに殺さるべし」と。王夫人及び諸婇女宮を出でゝ園池の中に到り、[七]澡洗し衣服を解脱して林樹の間に置くに値へり。時に、恒伽達、密に林中に入り其の服飾を取り抱持して去る。門監之れを見て卽便ち將ゐ往きて阿闍世王に白す。王、此の事を聞き瞋恚隆盛にして便ち弓箭を取り自ら手にて之を射る。而して箭還返りて、正に王の身に向ふ。是の如く三たびに至る。中しむること能はず。王怖れて弓を投じ彼の人に問ふて言く「卿は是れ天・龍・鬼神と爲す乎」と。恒伽達言く「我に一願を賜へ、乃ち敢て自ら陳べむ」と。王、曰く「當に與ふべし」と。恒河達言く「我は是れ天に非ず。亦龍・鬼に非ず。是れ舍衛國の輔相の子なり、我出家を欲するも父母聽さず。故に自殺して更に餘處に生れむと欲し、巖に投じ、河に赴き毒を飮むも死せず。故に五法を犯し望みて命を危くするを得たり、王、今害を加ふ。復中つる能はず、事情是の如し。何ぞ酷の甚だしきや、願くば憐愍を垂れ我入(道)を爲すを聽せ」と。王、尋いで告げて曰く「汝に出家を聽さむ」と。因つて復將ゐて到り、佛の所に詣り、世尊に啓白すること向の事の如し。時に如來聽して沙門と爲す。法服體に在り便ち比丘と爲る。佛、爲に說法し給ふ。心開け意解け、阿羅漢果を得、三明・六通・八解脱を具ふ。時に阿闍世王、尋いで佛に白して言さく「世尊よ、此の恒伽達は先世の時何の善根を植えて、山に投じて死せず、水に墮して溺れず、毒を食して苦無く、箭射りて傷つくこと無きや、加ふるに世尊に遇うて生死を度することを得たるや」と。

佛、王に告げて曰く「乃往、過去無數の世の時に一大國有り、波羅㮈國と名く。其の王の名を梵摩達多と曰ふ。諸の宮人を將ゐ林中に遊戲す。諸の婇女の輩を遣はし聲を激しくして歌ふ。外に一人有り高聲に之に和す。王、其の聲を聞き、便ち瞋恚を生じ人を遣はし捕へ來らしめ、勅して之を殺さしむ。時に大臣有り、外より來り此の一人の囚執せらるゝを見て「何に緣り乃ち爾る」と「問ふ」。其の傍の諸人、事狀を具列す。臣曰く「且く停めよ、我王に見ゆるを待て」と。大臣進み入り

【七】澡洗。そゝぎ洗ふこと。

王に啓白して言く「彼人の罪、深重に至らず。何を以て之を害するや、其の音を和すと雖も而も形を見ず。既に交通、姦淫の事ならず。幸に願くば矜を垂れ其の生命を原せよ」と。王、達すること能はず。赦して刑戮せず、其の人脱するを得て大臣に奉事し懃謹替ること無し。是の如く[八]承事すること多年なり。便ち自ら思惟すらく「婬欲人を傷つけ刀劍を利くす。我の困厄皆欲に由るが故なり」と。即ち大臣に語るらく「我、出家して道業を遵修するを聴せ」と。大臣、答へて曰く「敢へて相違せず、學びて若し道を成ぜば還り來りて相見えよ」と。即ち山澤に詣り專ら如理を思ふ。精神開悟し辟支佛と成れり。城邑に還來り大臣の家に造る。大臣見え已り心大いに歡喜び請じて之を供養す。甘饍飲食四事乏しきこと無し。時に辟支佛、虚空の中に於て神變化を現はし身より水火を出し大光明を放つ。大臣之を見て欣然無量なり。便ち誓願を立てぬ。我が恩に由るが故に命全濟を得たり。我をして世々富貴長壽殊勝奇特數千萬倍ならしめよ、我が智德をして相與に共に等しからしめよ』と。

佛、王に告げて曰く「時に彼の大臣、一人を救治し得脱せしむる者、今の恒伽達是れなり。是の因緣に由り所生の處、命中夭せず。今我に値ふを得て[九]應眞を逮得せり」と。

佛、此を說き已り諸會に在る者信敬歡喜し頂戴し奉行せり。

## 九十九、長爪梵志の緣[一]

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

時に、彼の城中に一人の梵志有り。名を[二]蛭駛と曰ふ。其れに二子有り男を長爪と名づけ、女を舍利と字す。其の男長爪、聰明博達なり、善く能く論議す。常に其の姉舍利と共に凡そ論說する所每に常に姉に勝つ。姉既に妊娠す。弟と共に論議す。弟又如かず。時に弟長爪是の言を作さく「我が姉、先に來り、我と共に論議し常に我に如かず。懷妊以來論議殊に勝れたり。乃ち是れ胎子の福德



【八】承事。よく仕へること。

【九】應眞。阿羅漢の譯。人天供養を受く應き眞人。

【一】長爪梵志緣。梵本 No. 99. Dirghanákha(長爪)。

【二】蛭駛。梵名(Tdsya.)。

の力なり。若し子生れ已りなば論必ず我に勝たむ。我、今當に宜しく[四]方に遊び、廣く四韋陀典、十八種術を學ぶべし、然る後國に還り外物と與に論ぜむ」と。是の念を作し已りなば南天竺に詣り諸論を習學す。「若し未だ通利第一師と爲らずば誓つて爪を剪らず」と。是に於て其の姉日月滿足し一男兒を產む。母に因つて名字を立てゝ、舍利弗と曰ふ。端正殊に特れ聰明智慧あり、博く諸論に達す。[三]詶對すべきこと難し。時に王舍城中の諸の梵志等大いなる金鼓を擊ち國人十八億衆を招集し論場に會し四高座を敷く、時に舍利弗年始めて八歲論場に會す。諸人に問ふて言く「誰をか待たむと欲し爲すや」と。諸人答へて言く「一は國王の爲め二は太子の爲め、三は大臣の爲め四は論師の爲めなり」と時に舍利弗、是の語を聞き已り輒ち論師の高座に昇りて其の上に坐す。時に諸の宿德、耆舊の梵志、一切徒衆驚き怪しまざる無し。是の念言を作さく「我が諸の論師、彼の小兒と共に論議し勝を得るも榮と爲すに足らず、其れ若し勝ざれば大に恥愧とすべし」と。是の念を作し已り即ち下座の小婆羅門を遣はし舍利弗と共に論ぜしむ。粗相ひ答問す。時に婆羅門等辭窮り理屈す。漸次相推し遂に上座に至る。其の論議數返を過ぎず盡く皆如かず。時に舍利弗、論議既に勝ち、名聲遠く十六大國に著はれ智慧博く通じ獨り出でゝ、侶無し。後に一時、王舍城に於て高樓の上に昇り四顧し視瞻す。城内の人民[四]節慶の聚會を見て便ち自ら思惟すらく「斯等の[五]蠢々百年の後廓然として無に歸せむ」と。是の念を作し已り、即ち高樓を下り外道の法中に出家し道を求めぬ。爾の時、世尊、初始めて成佛し給ひ、時に十六大國都て未だ聞知せず。如來の大慈、敎化せむと欲するの故に阿鞞比丘を遣はし王舍城に詣り[六]衣を著け鉢を持ち城に入り乞食す。時に舍利弗、其の威儀詳序として觀るべきを見て是の念を作さく「斯は是れ何人ぞや福德乃し爾る。我先より來、未だ此の比丘を見ず」と。是の念を作し已り即ち前みて問ふて曰く「汝、何の師に事え、法として則ち乃し爾る」と。時に阿鞞比丘偈を說きて答へて曰く、

---

【三】詶對。應答のこと。

【四】節慶。さだまりの慶びごと。祭。

【五】蠢々。うごめくこと。

【六】著衣持鉢入城。聖本による。

吾が師は天中の天、　三界、無極尊、　相好身は丈六　神通、虚空に遊ぶ。

時に阿鞞比丘、是の偈を說き已り、默然として住す。時に舍利弗、阿鞞に語りて言く「汝の師の容貌・神通、我今已に聞けり、何の道を悟り是の如きを得と爲す乎」と。時に阿鞞比丘、後偈を以て答ふらく、

花薫、五陰を去り、　十二根を拔斷し、　天と世の樂を貪らず　心淨く法門を開く。

時に舍利弗、復阿鞞比丘に問ふて言く「汝の師の說く所幾時を經て何法を習學すと爲すや」と。阿鞞比丘復偈を以て答ふらく、

我が年、既に幼稚、　學ぶ日又初淺なり　豈、能く　正眞如來の廣大の義を宣んや。

時に、舍利弗、復阿鞞に語りて言く「汝の師の說く所、幸に告示せられよ」と。爾の時、阿鞞復偈を以て答ふらく、

一切の諸法の中　因緣空にて主無し　本原に達す　故に號し沙門と爲す。

時に舍利弗、此の偈を聞き已り、心卽ち開悟して須陀洹果を得たり。

爾の時、目連、舍利弗の顏色怡悅を見て之に問ふて言く「我、昔、汝と要誓有り、若し先に甘露の法味を得るあらば要ず當に相語るべしと、我、今汝を觀るに得る所有るを以て顏色怡悅す」と。時に舍利弗、卽ち上の偈を以て其の目連の爲めに三遍之れを說く、目連、聞き已りて心開け意解け、須陀洹果を得たり。時に舍利弗、目連 各 道跡を獲て心に歡喜を懷き還りて徒衆に白すに具に上の事を以てし、而して之に向ひ說くやう「我、今、佛に詣り出家を求めむと欲す、汝等云何」と。時に諸の弟子 各 師に白して言さく「大師、今、若し瞿曇の所說を習學すべしとせば我弟子等も亦隨從すべし」と。時に舍利弗、目連是の語を聞き已り諸の弟子 各 二百五十人を將ゐ阿鞞比丘に隨がひ竹林に詣る。佛、世尊を見奉るに三十二相八十種好ありて、光明普く曜き百千の日の如し。心に

歡喜を懷き前みて佛の足を禮し出家を求索む。佛、卽ち聽許し給ふ「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成り。精懃し修習し阿羅漢果を得たり。三明・六通・八解脫を具へ諸天・世人の敬仰する所となれり。

爾の時、長瓜梵志、舍利弗の出家入道するを聞き瞋恚懊惱して是の言を作さく「我が此の外甥舍利弗、稟性聰慧にして博く群籍に通ず。十六大國の宿舊の論師咸其の德に服す。如何が忽然として此の高名を捨てゝ瞿曇に奉事するや」と。卽ち南天竺より佛所に來詣し佛と論議す。爾の時、世尊、梵志に告げて曰く「汝、今の所見は是れ究竟涅槃の道に非ず」と。時に彼の梵志是の語を聞き已り默然として答へず。是の如く三問す。亦復默然たり。時に金剛密迹虛空の中に於て金剛杵を以て梵志の頂に擬す。「汝、若し答へざれば我此の杵を以て汝の身を碎破せむ」と。爾の時、梵志、心に惶怖を懷き汗を流し垢を拭ふ。歸趣する所無し、卽ち自ら引負し顏を寄するに所無し。便ち佛の前に於て心に敬伏を懷き出家を求索め佛弟子と爲る。佛、卽ち聽許し給ふ。「善く來りぬ。比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成り、精懃し道を修めて阿羅漢を得たり、時に諸の比丘是の事を見已り佛に白して言さく「世尊よ、今、此の梵志比丘、宿に何の福を植え、邪を捨て正に就き佛、世尊に値ひ出家し道を得たるや」と。

爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給はく「汝等、諦かに聽け、吾、當に汝等の爲めに分別し解說すべし。乃往、過去無量世の時、波羅㮈國に辟支佛有り、山林に在り坐禪し思惟し給ふ。時に五百の群賊有りて、他物を劫掠し、將に彼の山林樹間に入らむと欲す。時に彼の賊帥先に一人を遣はし往きて林中に人有ること無きや否やを看、辟支佛の一樹下に在り端坐思惟し給ふを見て卽ち前みて牽捉し、繫縛し將ゐ來り賊帥の邊に到る。共に之を殺さむと欲す。時に辟支佛是の念言を作さく「我、若し默然として彼の爲めに殺さるれば其の罪業を增し地獄に墜墮して出期するに出し無からん。我

【七】金剛密迹。密迹金剛、密迹力士、金剛力士、金剛手、執金剛など呼び、總て金剛杵を執り大威勢を現じて佛法を擁護する天神の通稱なり。

【八】引負。論議の負くること。

【九】賊帥。賊のかしら。

れ今、當に爲めに神變を現はし彼をして信伏せしむべし」と。是の念を作し已り身虛空に昇り東に涌き西に沒し、南に涌き北に沒し、身より水火を出し、或は大身を現じて虛空の中に滿し而して復小を現はす。是の如く展轉して十八變を作す。爾の時、群賊是の變を見已り甚だ惶怖を懷き卽便ち各々五體を地に投げ歸誠し懺悔す。時に辟支佛其の懺を受け已りぬ。諸の餚饍を設け辟支佛を請じ發願して去る。是の功德に緣り無量世の中地獄・畜生・餓鬼に墮せず、天上・人中、天の快樂を受け乃至今我に遭値うて出家し道を得たり』と。

佛、諸の比丘に告げ給ふやう「彼の時の賊帥の人を知らむと欲せば今の長爪梵志是れなり」と。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

## 百、[一]孫陀利、端正の緣

佛、王舍城の迦蘭陀竹林に在しき。

時に、波斯匿王の夫人懷妊す。十ケ月を足滿して一男兒を產む。容貌端正にして世に無比とする所なり。兩目、明淨拘那羅鳥の如し。時に、王因つて名づけて[二]拘那羅と字す。諸の瓔珞と上妙の衣服を著け人を遣はし抱きて行く、諸の聚落に遍し。諸人に問ふて言く「世間、我兒の端正に似たる如き者有ること叵しや不や」と。時に聚落の中に諸の商人有り、大王に白して言さく「願くば王よ恕して、我に無畏を施せよ。乃ち敢て陳說べむ」と。王、卽ち答へて言く「但た道へ、畏ること莫れ」と。是に於て商人大王に白して言さく「我が居止する所の聚落の中に一小兒有り、[三]孫陀利と字す。端政殊に妙れ容貌天に似たり、王子に勝ること百千萬倍比と爲す可からず。又兒の產れし時舍の內に自然一涌泉有り香水冷美、諸の珍寶有りて其の中に充滿せり」と。時に波斯匿王、商人の語を聞き尋いで卽ち使を遣はし彼の聚落に勅して云く「我、自ら彼に往き彼の孫陀利を觀るべし」と。時に聚落主、王の來り孫陀利を看んと欲するを聞き便ち共に議りて言く「王、今來らば何を用

【一】孫陀利端正緣。梵本No.100. Śaṅgiti. 如意樹譬喩第1。

【二】拘那羅。梵名(Kuṇāla.)

【三】孫陀利。梵名。(Sundara.)。

て『[四]瞻待せむ、先に送るに如かず」と。是の議を作し已り、卽便ち孫陀利を莊嚴り諸の瓔珞と上妙の服飾を著け往いて送つて王に與ふ。王、孫陀利の端正殊に妙にして世の無比とする所[を見]、深く疑怪を生じ未曾有と歎ず。卽ち小兒を將ゐ佛の所に往至き是の如き身を受くる所由を問はむと欲す。小兒、佛の三十二相八十種好ありて光明普く曜き百千の日の如きを見て心に歡喜を懷き前みて佛の足を禮し却きて一面に坐す。佛、卽ち其の爲めに四諦の法を說き給ふに、心開け意解け、須陀洹果を得、出家を求索む。佛、卽ち告げて言はく『善く來りぬ、比丘よ』と。鬚髮自ら落ち法服を身に著け便ち沙門と成る。精懃し修習して未だ久しからざるの間に阿羅漢果を得たり。時に波斯匿王斯の事を見已り佛に白して言さく「世尊よ、今、此の孫陀利比丘宿に何の福を植えて、生れし時自然に此の泉水有り及び諸の珍寶其の中に充滿し又世尊に値うて出家し道を得たるや」と。

爾の時、世尊、波斯匿王に告げ給ふやう「汝、今、諦かに聽け、吾、當に汝の爲めに分別し解說すべし。『此賢劫の中波羅㮈國に佛有りて出世し給へり。號して迦葉と曰ふ。一萬八千の比丘有り、山林の中に在り坐禪し行道す。時に長者有りて、偶行きて値見し、心に歡喜を懷き、卽ち家に還歸り、香水を備辦し、衆僧を澡浴し、諸の餚饍を設け供養し訖竟り、復、珍寶を以て之を[五]瓫水に投じ衆僧に奉施し、發願して去りぬ。是の功德に緣り惡趣に墮せず。天上・人中常に池水有り珍寶其に隨つて倶に生ず』と。

佛、大王に告げ給ふやう『彼の時の大長者の子衆僧を澡浴し供養を設くるの故に常に端正を得る者を知らむと欲せば今の孫陀利比丘是れなり』と。

爾の時、大王、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

# 撰集百緣經卷第十(終)

【四】瞻待。もてなすこと。

【五】瓫水。瓫は盆なり。

# 菩薩本生鬘論解題

## 一　本論の名稱

本論は菩薩本生鬘論といふ名稱になつてゐるから、梵文原本のヂャータカ・マーラー(Jātakamālā, 本生の華鬘)に相當すべきものゝやうであるが、漢譯の前半は釋尊の本生譚を說述したもので第一章より第八章までは略ゝ梵文原本に相當し、第九章より第十四章までは異なる本生譚を記載してある。然し漢譯の後半所謂論に當る各章では、目次にも出てゐる通り、菩薩施行莊嚴尊者護國本生義邊と譯し、或は菩薩布施莊嚴尊者護國往梵天生本生義邊、或は菩薩布施莊嚴鬘飾尊者護國本生之事、菩薩布施力用周遍尊者護國本生之義等と譯出してゐるところから推測すると本論の名稱は未だ一定してゐなかつたものだといふことが判斷できる。

釋尊の本生譚は南方佛教徒のブッダゴーシャの傳ふる所では五百五十種の多きに及ぶと註して居るが、未だ具體的に其の譚を列記した一部の本生經は傳はらない。巴利語文ではチャリヤー・ピタカ（所行藏）の中には三十五種の本生譚を含み、ブッダハワンサの中には二十四種の本生譚を擧げてある。

然し本論は北方佛教所傳のもので、現存する梵本ヂャータカ・マーラーとは異る梵本であるが、梵名の漢音譯から見て其れが梵語たりしことは明瞭に推知せられる。

## 二　組織の內容

本論は漢譯にて十六卷三十四章に分れ、前分第一卷より第四卷までは單なる本生譚のみにして論述無く、後分第五卷より第十六卷までは法相の斷片的論述にして本生譚では無い。かゝる點から察するに本論の漢譯は二部の梵本の前半と後半との斷篇を接合して一部の論といふ名稱を附したものだと云ひ得る。何となれば前分は第一章より第十四章まで本生譚のみを第一卷より第四卷に至る間に收め。後分の初なる第六卷には章段第十一と名け、次第して第三十四章に終つて居る、第十一より第十四まで章段次數の重複するを見ても容易に推斷することができる。更に其內容を一讀せば愈ゝ明瞭ならんと思ふ。

しかして本論前分の本生譚は釋尊が般(パン)遮羅(チャラ)大聚落の一林中で阿難尊者に物語られ、其れを滅後に於て集錄したと傳へらるゝ本生經より更に聖勇菩薩等が多少順序を替へて編輯したものが此論の前分を

爲すものと考へられる。されば論といふ名稱はあるが其實前分は本生經と同質であるから大正藏經は此論を本緣部の中に編輯したのは賢明なる編纂である。本論前分の綱要を述ぶると左の如くである。

一、摩訶薩埵王にて在りし時身を投じて餓えたる女虎の飼となり血肉を施せし本生譚。

二、尸毘王にて在りし時鷹に身を施して鴿を救ひし本生譚。

三、善生王子にて在りし時身を施して兩親の飢餓を救ひし本生譚。

四、株杌太子にて在りし時醜き姿變じて美男となりし本生譚。

五、申日長者が毒飯を以て釋尊を害せんとせしが害せられざりし佛在世譚。

六、兎王にて在りし時身を捨て飢えたる梵志を救ひし本生譚。

七、慈心龍王にて在りし時龍群の爲に代りて金翅鳥の害を消伏せし本生譚。

八、慈力王にて在りし時身血を刺して五夜叉に施せし本生譚。

九、一商主航海前佛僧に施し航海難を脫れし佛在世譚。

十、須達長者の老母に羅睺羅沙彌を遣し邪見を飜へさせし佛在世譚。

十一、如來が病める比丘の惡瘡を洗ひ看護せられし佛在世譚。

十二、淨飯王の爲に觀佛三昧法門を說き三寶の功德を稱念せし佛在世譚。

十三、佛塔を造立する功德を說きし佛在世譚。

十四、福增老比丘を敎化せんが爲に目連尊者が摩竭大魚等を觀ぜしむる佛在世の因緣譚。

已上本論の前分は過去の本生譚或は佛在世の因緣談を說ひたものであるが、若し梵本のヂャータカ・マーラー（本生の華鬘）と本論の漢譯が同本と看做すならば、第十五章より第三十四章までの本生譚が闕けて居ることになる。さうして是等の多くは原始的な本生經を含むものであるから强ひて大小隔歷すると小乘經典に屬すべきものだとも云ひ得る。

本論の後分は第十一章の終の部分より始まれば、第一章より第十一章の初の部分が闕本になつて居ることは明白である。さうして前分の本生譚を論述した釋論に相當すべきもので論と名けた所以のものはこゝに在る。しかし此の後分の第十一章已前が闕文になつて居り、彼前分の第十五章已下が亦た闕文になつて居るから判然云へないが、若し後分の各章が前分の本生譚の各章に相應して釋論したものとせば、後分の第十一章は佛爲病比丘灌獲安緣起第十一を釋論し、第十二章は稱念三寶功德緣起第十二、第十三章は造塔勝報緣起第十三、第十四は出家功德緣起第十四と各〻の本生譚を釋論せるものと云はねばならぬ。しかし後分の釋論

中に引用せる所謂本文は前分の本生譚中に往々發見するを苦むものがある。時として後分の釋論は前分の本生譚とは關係無く他經の釋論では無いかとさへ疑はしむるものが有る。或る學者は本論の後分は支那撰述の論で無いかとさへ疑つて居られる程だ。予は依然梵文の簡潔なる論文體から直譯し潤文を加へざる素譯のものなることを主張したい。しかしそれが直譯で有るならばそれだけ、梵文原本も組織立ち統一ある論文では無く訓古的な註釋論と看做される。さうして此後分は大乘的思想に立脚した釋論たることは明瞭である。渡邊海旭先生の所説では本論の後分は菩薩布施莊嚴尊者護國本生之義とあるから、此の尊者護國は大寶積經卷第八十第八十一に收むる護國菩薩會に出てくる慧命菩薩比丘護國に關係ある。菩薩だとされる。寶積部の護國菩薩會は梵本 Rāṣṭrapāla paripṛcchā（護國菩薩所問經）も現存する經である。此の經では護國菩薩の所問に對して世尊が多くの四種法門を説きたる後ち釋尊の本生譚四十三種に關する概要を列擧され、其の中福焰太子本生は可なり詳説してある。

之を以て推察するに本論後分は前半闕本せるが故に判然せざるも或は彼の寶積部護國會の護國尊者が問を發して論述すといふが如き構説なるやも計りがたい、暫く所感のまゝを記して參考に供することゝする。次に後分の概要を述ぶると左の如し。

一一、中に處して顚倒と無顚倒との二邊を遠離する旨を論述す。

一二、丈夫の相好は和合し變り無きことより菩薩行を稱揚して小乘聲聞の因行を遠離せんことを論述す。

一三、遠離・無性等とは云何と問を設けて自性が染を遠離すれば眞實に相應する旨を論述す。

一四、寂靜の法・染・諍等を論述す。

一五、持戒に關して諍・染を遠離すれば尸羅圓滿なることを論述す。

一六、圓滿眞實の演説は無諍の法に相應し、彼の有力者は離染行を修する旨を論述す。

一七、施は無相行にして根本より顚倒無きことを論述す。

一八、菩薩は持戒寂靜、種族寂靜より自性遠離の行相を論述す。

一九、菩薩の根本は調伏と寂靜とにして、德行は靜住を本とし、智慧によりて煩惱を除くを論述す。

二〇、施を以て求むれば嚴峻の修行を爲さざるも倒染を損減し得ることを論述す。

二一、貪瞋癡を遠ざけ勝義を發さば顚倒染は悉く盡き寂靜なることを論述す。

二二、菩薩の意趣は隨順聽聞にして、眞實の布施は正解脫の法なることを論述す。

二三、勝因の本際は如々にして、十善の崇

修は流轉有ること無きを論述す。

二四、我見は苦の受眞實の顚倒にして、如如の勝義は我見の作用を止息することを論述す。

二五、如來性の義に合すれば悲願し崇修して盡くること無きを論述す。

二六、大乘の至極は安固無動にして、涅槃の止息は清淨寂默なることを論述す。

二七、聽聞は菩薩の教誨、智慧をもつて了知するは吉祥勝行なること等を論述す

二八、清淨眞實なれば盡くして染諍無く、廣大の邊際は楚毒も圓相なること等を論述す。

二九、邪見の勝義も染無くば有力に施を行ひ本より無學地は正見に隨順すれば纒蓋遠離すと論述す。

三〇、圓滿なる施の因の報は飢渴を除き、自性を增上すれば相貌鮮潔なることを論述す。

三一、施の義を發生すれば菩提の勝因にして清淨の覺慧は默靜として能く離るゝことと等を論述す。

三二、隨順聽聞は菩薩の眞實なる根本の相狀なること等を論述す。

三三、眞實の邊際は殊勝の荷負にして、根本清淨なるは自性の相貌なること等を論述す。

三四、瀑流顚倒は我慢を生ずるに因る、第六意識は之れ本なること等を論述す。

## 三　本論原本

漢譯本生鬘論の原本と覺しきものは梵本にヂャータカ・マーラー(Jātakamālā 本生の華鬘)といふ原典あることは先に述べたが。

南條博士の大明三藏聖教目錄一二九〇頁一三一二號に英人ホヂソン氏古寫本目錄第三卷二三頁(Catalogue of the Hodgson Manuscripts III 23)を引用して各章の品題を擧げ。

又印度人ハラプラサード・シャーストリ氏のネパール國皇室圖書館所藏貝葉幷紙本古寫本目錄第二卷一一頁・一六七頁にも各章の品題が列擧してある。(A Catalogue of Palm-leaf & selected Paper Mss. belonging to the Durber library Nepal. by M. H. Sāstri. M. A., C. I. E. Vol.II.) 又西紀千九百十四年米國ハーバード・オリエンタルセリス第一卷に、エッチ・ケルン博士によりて、梵文ヂャータカ・マーラーが出版されてゐる。(The Jātaka-Mālā, by Hendrik Kern)

今其れ等と漢譯國譯とを對照して表示すると左の如くである。

| (漢譯本論) | (梵Jātakamālā.) | (梵文直譯) |
|---|---|---|
| (1) 投身飼虎緣起第一 | Vyāghrījātaka. | 女虎本生 |
| (2) 尸毘王救鴿命緣起第二 | Śibijātaka. | 尸毘本生 |
| (3) 如來分衞緣起第三 | Kulmāṣapiṇḍijātaka. | 少量粥本生 |
| (4) 最勝神化緣起第四 | Śreṣṭhijātaka. | 最勝本生 |
| (5) 如來不爲毒所害第五 | Aviṣahyajātaka. | 不可衰減本生 |
| (6) 兎王捨身供養梵志緣起第六 | Śaśajātaka. | 兎本生 |
| (7) 慈心龍王消伏怨害緣起第七 | Agastyajātaka. | 阿伽須多耶本生 |
| (8) 慈力王刺身血施五夜叉緣起第八 | Maitrībalajātaka. | 慈力本生 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| (9) | 開示少施正因功能緣起第九 | Viśvantara Jātaka, | 勝一切者本生 |
| (10) | 如來具知不嫉他善緣起第十 | Yajña jātaka. | 犧牲本生 |
| (11) | 佛爲病比丘灌頂護安緣起第十一 | Śakra Jātaka. | 帝釋本生 |
| (12) | 稱念三寶功德緣起第十二 | Brāhmaṇa Jātaka, | 婆羅門本生 |
| (13) | 造塔勝報緣起第十三 | Unmādayanti Jātaka, | 雲摩陀延提本生 |
| (14) | ………………………… | Supāraga Jātaka, | 須波羅伽本生 |
| (15) | 出家功德緣起第十四 | Matsya Jātaka, | 摩蝎大魚本生 |
| (16) | ………………………… | Vartakāpotaka Jātaka, | 轉斑鳩本生 |
| (17) | ………………………… | Kumbha Jātaka, | 水瓶本生 |
| (18) | ………………………… | Aputra Jātaka, | 無子本生 |
| (19) | ………………………… | Bisa Jātaka | 蓮華本生 |
| (20) | ………………………… | Śreṣṭhi Jātaka, | 最勝本生 |
| (21) | ………………………… | Cuḍḍabodhi Jātaka, | 小覺本生 |
| (22) | ………………………… | Hansa Jātaka | 鵝本生 |
| (23) | ………………………… | Mhābodhi Jātaka, | 大覺本生 |
| (24) | ………………………… | Mahākapi Jātaka, | 大猿本生 |
| (25) | ………………………… | Śarabha Jātaka, | 八脚獅子本生 |
| (26) | ………………………… | Ruru Jātaka, | 狗本生 |
| (27) | ………………………… | Mahākapi Jātaka, | 大猿本生 |
| (28) | ………………………… | Kṣānti Jātaka, | 忍辱本生 |
| (29) | ………………………… | Brahma Jātaka, | 梵天本生 |
| (30) | ………………………… | Hasti Jātaka, | 象本生 |
| (31) | ………………………… | Sutasoma Jātaka, | 須多蘇摩本生 |
| (32) | ………………………… | Ayogrha Jātaka, | 阿踰伽羅訶本生 |
| (33) | ………………………… | Mahiṣa Jātaka, | 水牛本生 |
| (34) | ………………………… | Śatapatra Jātaka, | 啄木鳥本生 |

梵・漢を對照するに(1)より(8)までは漢譯は梵本に略ゝ一致するが、其他は相違して居る點が多いから、本論の漢譯は現存の梵本ヂャータカ・マーラーとは異る原本たることが判る。

西藏譯にもヂャータカ・マーラー (Judex, P. 417, Tome III XCI. Tibetain 286, Hphags-padpaḥbo Āryacūra.)があるが梵本と一致せるもの〻やうであり。

英譯 The Gātakamāla or garland of birth-stories by Ārya sūra translated from the Sanskrit by J. S. Speyer, 1895. 卽ち本生華鬘も梵本より飜譯したものである。しからば漢譯本論前分の本生談は稍ゝ梵本と類似點を見出し得るも、後分の論釋に至つては全く梵文原本が發見されないことになる。

## 四　造論諸師

本論の漢譯はよし現存梵本ヂャータカ・マーラー(本生華鬘)と全同一致せざるにせよ、原語の漢音譯より觀察するに梵文なりしことは疑ふ餘地がない。しからば梵本の中にも異本有りしことを認むることができるわけだ。

本論の造論師は聖勇菩薩等造とあれば

聖勇菩薩が論主で有り得ることは言を俟たないが、至元法寶勘同總目錄卷第九の十三丁左（縮藏・結八・七五左右）には聖勇・寂變・聖天等造とあり。并に宋沙門紹德等譯新編入錄と記載してある。此論主たる聖勇(Āryaśūra)の出世年代に關し、マクスミューラー翁(F. Max Müller)はスペーヤー氏(J. S. Speyer) 英譯ヂャータカ・マーラーの序文一五頁に聖勇の年代は不確定なりとなし、西藏の佛教史ターラナータを引ひてカニ王時代にして馬鳴菩薩と同時ならんと發表して居られるが、寺本婉雅教授國譯ターラナータ印度佛教史一四九頁に馬鳴の異名マートリチェータ等の名を列擧し、著作の讃歌を記し、迦膩迦王の招聘に代理を遣せることを錄したる後ち、

只經部の函帙中に存するものと關係せざるものにして、首座及び阿闍梨耶等の耳より耳に相承せる「十生譚」「十波羅密」と比較して著はさんことを望まれし故に「三十四種」を作り、終りて蟬脫せり。

或歷史に據れば、菩薩は身を牝虎に與へしなどの因緣を考ふことは我(著者)に適當なれば、敢て困難なる事柄の所作にあらずと思惟す。(一四九頁)註(4)

「三十四歷生譚」(一五五頁)

上に陳ぶる「三十四種」或は「三十四歷生譚」は梵文ヂャータカ・マーラーの三十四種本生譚を指せるが如く見ゆる。

又義淨三藏の南海寄歸內法傳卷四、三十二讚詠之禮に梵讚ヂャータカ・マーラーの事を記載して曰く、

其の社得迦摩羅亦た同じく此の類なり、【註・社得迦とは本生なり、摩羅とは卽ち是れ貫なり。菩薩昔生難行の事を集め取り之を一處に貫す」若し譯せば十餘軸を成すべし。本生の事を取りて詩讚を爲るは、俗に順じて妍美にし讀む者をして歡愛し、敎へて群生を攝せしめんと欲するのみ。時に戒日王極めて文筆を好む、乃ち敕を下して曰く、諸君但し詩讚を好む者有らば明日且咸將て朕に示せと。其の總べ集むるに及び五百夾を得、展べて之を閱するに多く是れ社得迦摩羅なり。方に知る讚詠の中には斯れを美の極と爲すことを。南海の諸島十餘國有り、法俗を問ふこと無く皆諷誦すること前の詩讚の如し。而も東夏未だ曾て譯出せず。

是の如く義淨三藏の述ぶる社得迦摩羅卽ち本生華鬘は韻文の讚頌にして詠歌諷誦するものなれば現存のヂャータカ・マーラーに一致するものゝ如くであるが、其の作者は多數の人より成るやうである。さうして一も聖勇菩薩に言及してゐない。恐らくは諸師の作を編輯したといふのが妥當であらう。

漢譯の本生鬘論は現存梵本のヂャータ

カ・マーラーとは別本にして、本生鬘を釋論するに當りて前に本生譚を集め、後に法相を釋論する形式に成りし釋論なりといふを妥當とする。其の釋論を造りし一人聖勇菩薩は、先に大勇菩薩分別業報略經を造り、西紀四百三十四年宋朝の康僧鎧三藏が漢譯して居らるゝ、若し此人と本論主とが同人なりとせば西歷第四紀已前の出世で有ると云ふことができるであらう。彼の至元錄には聖勇の外に寂變・聖天の共著なるが如く記してあるが恐らくは同時代の人であらう。

漢譯者紹德・慧絢は宋朝（西紀九六〇年——一一二七年）の出世にして譯出年代等は詳でないが、少くとも四人以上の譯者より成りしことは本論の後分に於て品題の異り漢譯せるもの四五種ある點より推知することができる。

昭和四年八月廿五日

譯者　岡　教　遂　識

# 菩薩本生鬘論

## 巻の第一

聖勇菩薩等造

宋朝散大夫試鴻臚少卿同譯經

梵方大師紹德慧詢等奉詔譯

一切智妙湛圓融の德に稽首したてまつる、　聖なる[一]支分の相貌は無作にして眞際に同じ。我意靜にして諍無く稱讃と布施とを忘れ、　四大を以て本と爲す白淨の生は變ること無し。往昔人中に於て常に寂靜行を修し、　[二]拘蘇摩華を以て合掌して散じ奉る。　諸の罪惡を遠離し諸の煩惱を解脫して、　人天の爲に愛敬せられ無上道を演說したまふ。　意寂靜に由るが故に淸淨法を獲得し、　世間相常住にして無盡・無修作なり。　彼の世間の衆生は相應の功德を聞きて、　決定せる信解を起して如來の密藏に住す。　運動と遷變とを息め虛妄と顚倒とを滅す、　彼の勝智の功能は燈の常に遍く照すが如し。　是の諸の有情類は自性本より無垢に、佛世尊に依止して樂みて眞淨業を修す。　謂ふに三寶の名及び師長の敎誨を聞き、　隨順して善く行學し我慢の意を蠲除す。　往昔において調御師は菩薩道を勤修し、　布施・愛語及び利行に依りて事に同ず。　勝慧を攝取し染汚と縈縛とを脫し、　有情を利樂して諸の白法を增長す。　施力圓滿に由りて梵天の種族に生れ、　唯淨業を增上して其の根本と爲す。　若し我慢及び無勝慧力を起さば、　自種類中に於て多慢の類に生る。　百千萬種に於て生の喜樂を離

【一】支分は四支身分なり。

【二】拘蘇摩華は梵語にして「クスマ」Kusuma 花の義なり。

るゝは、顚倒の取に由るが故に彼れ則ち證する能はず。又彼の寂靜處は福德最も殊勝にして、廣大なる色相を具すること小因の所得に非ず。唯捨家出家せし彼の菩提薩埵は、已に大智慧を具足し能く荷負に堪任したまへり。彼は過去世に於て久しく六度の行を修し、已に障染を斷除し爲に後邊を出離せらる。廣大なる慈心を具へ衆生類を憐愍したまふ、彼の自性眞實は別に染汚の因無し。是の時天帝釋は世間を觀察し、來りて彼の人の行を驗するに其の心傾動無し。而して是の如き言を作さく今此の善男子は、世間に出現し最も殊勝者と爲す。遷變無常に於て心安固なること是の若し、淨妙の飲食を以て供養恭敬を伸べ。諸天及び世人咸く皆善利を獲、憶念して淨因を修し無相の眞智に契ふ。是の如き修行者は能く煩惱の病を治し、清淨の學處に住し質直にして僞無し。勝義諦を觀察し染を離れて修作無く方便の慈門を啓き平等に安樂を施す。勝解を發生して邪命と希求無く、諸の有爲を棄背して實際に直躋す。清淨道を成就して諸の功德に相應し、雜染の因緣に於て畢竟して皆除斷す。常に如來祕密藏を崇奉恭信し、妄執分別を離れ恚惱を息除す。勝種族に隨順して染習を生じ、影の其形に隨ふが如く母の子を生ずるが如し。菩薩の悲願力諸の群生を愍恤して、勇猛に自身を損じて憂苦の想を生ぜず。我れ今微善を以て歸命して稱讚を伸ぶ、願くば衆聖冥加せられ悉地成就を祈る。

## 投身飼虎緣起第一

爾の時に世尊諸の大衆を將ひて、[一]般遮羅大聚落の所に詣でゝ一林中に至り、阿難に謂ふて曰はく、「汝此間に於て我が爲に座を敷け」、佛其の上に坐し諸の比丘に語げたまはく、「汝等我が往昔の時苦行を修行せし舍利を見んと欲するや不や」。白して言く。「見たてまつらんと願ふ」。時に世尊手

---

【一】般遮羅は梵語パンチャーラ（Pañcāle）の音譯にしてガンジス河とヤムナー河との間に在る地方の總稱なるも其境域の一大村落の名なり。

を以て地を按じたまふに六種に震動し、七寶塔有り其前に涌現す。世尊卽ち起つて禮を作し右に旋りたまひ。阿難よ、汝此戸を開き、七寶函の珍奇間飾せるを見るべし。阿難よ。汝復此函を開き舍利有るを見るべし白きこと珂雪の如し、汝此大士の骨を持ち來るべし。世尊よと受け已りて衆をして諦觀せしめ、頌を說きて曰く。

菩薩は勝れたる功德なるかな、　六度行を勤修し。
勇猛に菩提を求め、大捨の心倦むこと無し。

汝等比丘よ、咸禮敬を伸べよ。此は之れ舍利なり、乃ち是れ無量の戒定慧香の熏修する所なりと。時に會は禮を作し未曾有なりと歎ず。時に阿難陀白して言く。「世尊よ。如來大師の三界に出過したまひ、何の因緣を以て此身骨を禮したまふや」。佛言く。「阿難よ。我れ此れに因りての故に成佛を至すことを得たり。往恩を報ぜんが爲の故に玆に禮を致すなり。今汝等の爲に疑惑を斷除し昔の因緣を說かん、志心に諦聽せよ。阿難よ。乃往過去無量世の時、一國王有り名けて大車と曰ふ。王に三子有り、[二]摩訶波羅・[三]摩訶提婆・[四]摩訶薩埵とす。是時に大王賞を山谷に縱にするや、三子皆從ふ。大竹林に至り中に於て憩息す。次に復前み行くに一虎有るを見る、七子を產生し已りて七日を經たり。第一王子是の如き言を作さく、七子圍繞して食を尋ぬるに暇無く、飢渴に逼られなば必ず其子を噉まんと。第二王子是說を聞き已つて、哀なる哉、此虎將に死せんこと久しからず、我れ何してか能く彼の命を濟ふこと有らんかと。第三王子是思念を作さく、我が今此身は百千生に於て虛く棄て敗壞せしも曾て少益無かりき、云何してか今日捨つること能はずやと。時に諸の王子是議を作し已りて、徘徊之を久くし倶に捨てゝ去る。薩埵王子便ち是念を作さく。當に我身をして大善業を成し、生死の大海に於て大舟航を作さしむべし、若し此を捨てば則ち無量の癰疽惡疾百千の怖畏を棄つるなり。是身は唯便利不淨有るのみ。筋骨連持して甚厭患すべし、是故に我れ今當に棄捨すべし。以て無上究竟の涅槃を求め、永く憂悲無常の苦



【二】摩訶波羅。マハーパーラ(Mahāpāla)。大守護の義にして王子の名。
【三】摩訶提婆。マハーデーワ(Mahādeva)。大天の義にして王子の名。
【四】摩訶薩埵。マハーサットワ (Mahāsattva) 大士の義にして王子の名。

惱を離れ、百福莊嚴にして一切智を成じ、諸の衆生に無量の法樂を施さんと。是時に王子大勇猛を興し、悲願力を以て其心を增益し、彼の二兄が共に留難を爲すを慮り、先に宮に還りたまはんことを請ひ、我れ當に後に至るべしと。爾の時に王子摩訶薩埵は遽に竹林に入り、其虎の所に至り、衣服を脱去して、竹枝の上に置き、彼虎の前に於て身を委ねて臥す。菩薩慈忍なれば虎能く爲す無し。卽ち高山に上り身を地に投ず。虎今羸弱にして我を食ふこと能はず、卽ち乾竹を以て頸を刺し血を出す。時に大地六種に震動し、風の水を激するが如く、涌沒して安からず、日精明無きこと[五]羅睺の障るが如し。天は衆の華及び妙香末を雨し、繽紛として亂れ墜ち林中に遍滿し、虛空の諸天咸共に稱讚したまふ。是時に餓えたる虎卽ち頸の血を舐め、肉を噉み皆盡し、唯餘骨有るのみ。時に二王子大愁苦を生じ、共に虎の所に至り、自ら持つこと能はず、身を骨の上に投じ久くして乃ち蘇ることを得、悲泣懊惱せしが漸にして捨て去る。時に王の夫人は高樓上に寢ねたまひしが、忽ち夢中に於て不祥事を見、兩乳割かれ牙齒墮ち落つ、三の鴿鶵を得しも一は鷹の爲に奪はると見たまふ。時に侍女外人より聞く有りて言く、王子を求覓するも今猶未だ得ずと。卽ち宮中に入り夫人に白して知らしむ、聞き已りて憂ひ惱み悲の涙目に盈る。卽ち王の所に至り、白して言く、大王よ、我が最小なる愛する所の子を失へりと。王是を聞きたまひて悲哽して言く、苦しき哉、今日我が愛子を失ふとはと。夫人を慰喩して汝憂感すること勿れ、吾れ今諸の大臣人民を集め、卽ち共に城を出で分散して尋ね覓めんと。未だ久しからざるの頃、一大臣有り前みて王に白して言く、王子在を聞く、其最小なる者は今猶未だ見えずと。次に第二臣來りて王の所に至り、懊惱啼泣し卽ち王子身を捨つるの事を以てし具に王に白して知らしむ。王及び夫人は悲み自ら勝えず、共に菩薩身を捨つるの地に至り、其遺骨の隨處に交橫せるを見て、悶絶して地に投じ都て知る所無し、水を以て遍く灑ぎて惺め悟ることを得たまへり。是時に夫人頭髮蓬亂して地に宛轉したまふこと、魚の陸に

【五】羅睺ラーフラー（Rāhula）。は梵語にして月蝕する阿修羅王の名。

處するが如く、牛の犢を失ふが若し。及び王の二子も悲哀號哭し、共に菩薩遺身の舍利を收め、爲に供養を作し寶塔の中に置けり。「阿難よ當に知るべし、此は卽ち是れ彼薩埵の[六]舍利なり。我れ爾の時に於て煩惱・貪・瞋・癡・等を具すと雖も、能く地獄・餓鬼・傍生・惡趣の中に於て、緣に隨ひ救濟し出離することを得せしめき。何に況や今時煩惱都て盡き復餘習無く、天人師と號し一切智を具し、而も一一の衆生を險難の中より衆苦を受くるに代ることを爲し能はざらんや。

佛、阿難に告げたまはく。往昔の王子摩訶薩は豈に異人ならんや、今此會中の我が身是れなり。昔の國王は今の淨飯父王是れなり。昔の后妃は摩耶夫人是れなり。昔の長子は彌勒是れなり。昔の次子は文殊是れなり。昔の彼虎は今の姨母是れなり。七虎子は大目乾連・舍利弗・五比丘是れなり。

爾の時に世尊是の往昔の因緣を說きたまふ時、無量阿僧祇の人天大衆は皆悉く悲喜し、同じく[七]阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。先に涌出せられし七寶の妙塔は佛神力を攝めたまひしかば忽然として現れずなりにけり。

## 尸毘王救鴿命緣起第二

佛諸の比丘に告げたまはく。我れ往昔の無量阿僧祇劫を念ずるに、[一]閻浮提の中に大國王有り名を[二]尸毘と曰ひき。都する所の城は[三]提婆底と號し、地唯沃壤のみにして人民豐樂多く、八萬四千の小國を統領し、后妃采女其數二萬、太子五百、臣佐一萬なり。王は慈行を蘊へ仁恕和平にして庶民を愛念したまふこと猶赤子の如し。是の時に三十三天帝釋天主は五衰の相貌にて將に退墮せんことを慮りたまふ。彼に近臣[四]毘首天子有り、是の事を見て天主に白して言く何故に尊儀忽ち憂色有るやと。帝釋謂ふて曰く吾れ將に逝かんと。世間を思念するに佛法已に滅し、諸の大菩薩復出現したまはず、我が心何れにか歸趣する所を知らず。時に毘首天復天主に白さく、今閻浮提に尸毘王有



【六】舍利は梵語シャーリ(Sali)。にして遺身或は遺骨の義なり。

【七】阿耨多羅三藐三菩提は梵語アヌッタラサミャクサムボーディ(Anuttarasamyaksambadhi)にして無上正等覺の義なり。

【一】閻浮提は梵語。ヂャムブヅィーパ(Jambudvipa)にして此の世界の名。

【二】尸毘はシビ王(Sibi)。過去の王名。

【三】提婆底は梵語でデーワティー(Devati)。天女神城の義なり。

【四】毘首天子。梵語ビシヌ(Visnu)にして卽ち韋紐天のことなり。

り、志固く精進し樂ひて佛道を求めり、當に往ひて歸し投ずべしと。天帝聞き已つて審に實と爲すや不や、若し是れ菩薩ならんか今當に之を試むべしと、乃ち毘首を遣し變じて一鴿と爲し、我は化して鷹と作り、逐ひて王の所に至り彼の救護を求め其誠を驗すべしと。毘首白して言く、今菩薩に於て正に供養すべし、宜しく苦を加ふべからず、難事を以て逼り惱すこと無からんやと。時に天帝釋偈を說ひて曰く、

我れ本惡意に非ず、火の眞金を試みるが如く、此を以て菩薩を驗し、爲に眞實なりや不やを知らんとするのみ。

是の偈を說き已りて、毘首天子化して一鴿と爲り、帝釋鷹と作り、急に後を逐ひ將に搏し取らんとす。鴿甚だ惶怖し王の腋下に飛び藏れ避くる處を求む。鷹は王の前に立ちて乃ち人語を作さく、今此鴿は是れ我の食なり、我れ甚しく饑ゆること急なり。願くば王還されよと。王曰く、吾れ本誓願して當に一切を度すべしと。鴿來り依り投ず終に汝に與へずと。鷹曰く、大王よ、今一切を愛念すと、若し我が食を斷たば命も亦濟れずと。王曰く、若し餘の肉を與ふれば汝能く食するや不や。鷹言く、唯新しき血肉ならば我れ乃ち之を食せんのみ。王自ら念じて言く、一を害し一を救ふは理に於て然らず、唯我が身を以て彼に代り能ふべし、其餘命有らば皆自ら保ち存せんと。即ち利刀を以て自ら股の肉を割き、肉を以て鷹に與へ此鴿の命に貿らん。鷹言く、王施主と爲り今身の肉を持ちて鴿に代らば足らしむと稱すべしと。王勅して兩頭の施盤を取り、鉤を中央に挂し、其をして鴿の肉と均等ならしめ各一處に置くに、股の肉割き盡すも鴿の身尚低し、以て臂脇に至り身の肉都てし、其鴿の形に比するに輕くして猶未だ等しからず、王自ら身を擧げて稱盤に上らんと欲するも力相ひ接せず足を失ひて地に墮ち、悶絕して覺ること無かりしが、良久しくして乃ち蘇りたれば、勇猛力を以て自ら其心を責め、曠大劫より來れ我れ身の累を爲すとも六趣に循環して備に萬苦を榮

る、未だ嘗て福利を爲して有情に及ばず、今正に是れ時なり何ぞ懈怠せん耶と。爾の時に大王是の念を作し已りて自ら强ひて起立し身を盤上に置き、心喜足を生じ未だて有らざることを得たり。是の時大地六種に震動し、諸天の宮殿は皆悉く傾き搖ぎ、色界の諸天は空に住して稱讃し、此菩薩の難行苦行を見て、各々悲感の涙下ること雨の如く、復天華を雨して供養を伸ぶ。時に天帝釋等復本形に還り王の前に住し立ちて是の如き說を作さく。王は苦行を修す功德量り難し、輪王釋梵の位を希ふが爲に、三界の中に於て何の所作をか欲するやと。王卽ち答へて曰く。我が願ふ所は須からく世間尊榮の報ならず、此善根を以て誓ひて佛道を求めん。天帝復言く。王今此身痛骨髓に徹し寧ろ悔有らずや。王曰く、弗ざるなりと。我れ汝が身を見るに甚大に艱苦するも自ら悔無しと云ふ、何を以て表明するや。王乃ち誓ひて曰く、我れ心を擧げてより此に至る、少も悔ゆること毛髮の如き許も有ること無し、若し我が求むる所の決定成佛眞實にして虛しからずば願ふが如く得ば、吾が肢體をして卽ち當に平復すべし、此誓を作し已りし頃故の如くなることを得たり。諸天世人は希有なりと讃言し、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はざりき。佛大衆に告げたまはく、往昔の時の尸毘王とは豈に異人ならんや、我が身是れなりと。時に彼衆會は是の語を聞き已りて、異口同音に咸歡請を伸ぶ。昔世尊救度の衆行軀命を惜まざるは大法を求めんが爲ならん、法海已に滿ち法幢已に建ち法鼓已に擊ち法炬已に然ゆ、機熟し緣和し正しく其所を得たまへり、云何ぞ一切衆生を捨離して涅槃に入り說法せざらんと欲したまひしや、時に梵天王如來を稱讃し、法を求めんが爲の故に嘗て千頭を捨てたまへり。佛請を受け已りて卽時に往ひて[五]波羅㮈國鹿野苑中に趣き三たび法輪を轉じ同じく四諦を觀じたまふ。三寶是に於て世間に出現せるなり。

## 如來分衞緣起第三



【五】波羅㮈國は梵語バーラナシーにして今のベナレス市なり。

爾の時に世尊は[1]摩竭國竹林精舍重閣講堂に在したまひしが、阿難陀と與に衣を著し鉢を持ちて城に入り乞食したまふ、衰へ老ひたる夫婦二人有るを見たまふに、兩目明を失し加ふるに復貧しく悴せたり、唯一子年始めて七歳なる有り、常に出でゝ乞丐し以て其親を贍る、或は新しく好き果蓏飲食を得ば先づ父母に奉り、硬澁殘觸の物を得る有らば而も自ら之を食せり。是時に阿難此小兒を念ふに幼年に有りと雖も篤く孝を行ひ、意を勤めて朝夕所須を失はざりき。佛分衛し訖りて精舍に還歸し、食畢りて足を洗ひ座を敷きて坐し、諸の大衆の爲に將に經法を演じたまはんとす。阿難叉手して前み佛に白して言く、適々世尊に侍して城に入り分衛せしに、一小兒の盲ひたる父母を將ひ往來し求め乞ふを見しに承順にして孝養なり、日に以爲へらく常に甚だ得難しと爲すと。佛言く、阿難よ、在家と出家者とを惟ふこと眶れ、皆孝行を以て其先と爲す、其功德を計るに稱量すべからず、所以は何ん、過去無量劫の時を憶念するに、我れ童子と爲り亦年七歳なりき、孝順の心を以て曾て身の肉を割き、以て父母危急の命を濟ひしが、是より已來此功德を承けて、常に天帝と爲り及び人王と作り、直に成佛に至れるも皆此福に因るなりと。阿難は佛に白さく、願はくば親の命を活せし往因を聞き奉らんとす、其事如何ぞや。佛言く、阿難よ、汝當に諦に聽くべし、吾れ今汝が爲に分別して之を說かん。乃ち往古の世、此閻浮提に於て一大國有り[2]得叉尸羅と名けき、時に彼國王の名をば[3]提婆と曰ひ、十太子有りて各〻一國を領しける。其最小者の名をば善住と曰ひ、國界康樂にして人民熾盛なりき。時に彼隣境に一惡王有り名を[4]羅睺と曰ひ、來り侵掠せんと欲し其兇黨を搆へ師を擧げ相ひ攻めしが、時に善住王の兵力如かず、乃ち父の國に奔り其禍難を避く。王に愛子有り其名を善生と名く、方に賊亂に在り棄て遺すに忍びず、將に婦をして兒を抱かしめ忽遽に境を出でんとす、一路せば七日にして家邦に至ることを得ん。(然るに)一路荒僻にして十四程を經、勉力して七日の儲を負ふ、途を登ること惶惶として悞りて迂道を涉り、方に半路

【一】摩竭は、梵語マガダへ(Magada)。にして今のビハル州地方なり。

【二】得叉尸羅國は梵語タクシヤシーラ(Takṣaśilā)にして北印度の地今のペシヤワル地方なり。

【三】提婆は梵語デーワ(Dēva)天の義にして王名なり。

【四】羅睺は梵語ラーフラー(Rahulā)。王名なり。

を行き已りて餱糧絶え、日を累ねて飢羸し相ひ顧るに殆ど盡く。王是の念を作さく事迫り計窮す、須からく一人を捨てゝ二命を存すべしと、乃ち夫人を諭し兒を携へて前進せしめ、刃を引き後より婦の身を斫り、用ひて幼兒を活し兼ね以て自ら濟はんと欲す、善生は迴顧し父の刃を擧ぐるを見て、急に王に白して言く、母を殺すこと勿れ、寧ろ我が肉を割き以て其糧に充てよ、未だ子が母の肉を食すること有るを聞かずとなし、誠を勤め泣き諫めしかば母の命は全きことを獲たり。是の時に善生乃ち王に白して言く、願くば身の肉を以て二親を救はん、若し肉を割く時頓に盡さしむること勿れ、漸に食を取らば數程を延ぶることを得可し、若し命絶えなば肉當に臭爛すべし、必ず棄つる所と爲りて事に於て成ること無からんと。是の時父母善生に謂ふて曰く、今罪の行を爲すは予の本心に非ず、何ぞ刃を擧げて親しく汝が肉を割くに忍びんやと。是に於て王子先づ利刃を持ち、自ら身の肉を割き跪いて之を奉る。王と夫人とは是の事を見已りて、悲み啼き懊惱久しくして乃ち食し能ふ、數朝を經て身の肉都て盡く、未だ他國に至らざるに饑急にして堪え難く、骨節の間に於て復少の肉を得、之を齎して前途に用ひ餘命を接がんとす。時に善住王及び彼夫人各ゝ善き言を以て其子を慰喩し、首を聚めて哀戀し之を捨て遂に行く。爾の時に王子は而も此念を作さく、我れ身の肉を以て親の命を濟ひ活す、願くば鄕國に達し身安く泰然ならんことを、此善根を以て菩提を獲、十方の一切群品を濟度し、衆の苦を離れ眞の常樂を證せしめんと。是の願を發しける時三千世界六種に震動し、欲色の諸天は悉く皆驚愕し、卽ち天眼を以て世間を觀じ、乃ち菩薩是の孝行を修するを見、是の諸天子は虛空の中に於て合掌して稱讚し淚墮つること雨の如し。時に天帝釋化して虎狼と作り、菩薩を試驗せんとて來り呑み噉まんと欲しき、王子自ら念へらく、此諸の猛獸今來りて我を食せんとす、唯餘骨有るのみ悉く皆之を施さんと、歡喜の心を以て悔ひ惱みを生ぜざりき。是の時に帝釋は還りて本形に復し、王子を讚めて言く、甚希有と爲す、能く身の肉を以て二親を濟ひ活し

たまふ、是の如き孝心は能く及ぶ無きなり。汝須からく何を願はんとするや今當に之を說くべしと。我は唯無上道を志し求むるのみと。天帝復言く、我れ今汝の身を視るに肉都て盡く、疲れ苦しみ堪え難からん、父母を悔ひ恨むこと無きを得んやと。王子答へて言く、若し我れ誠實心にして悔ひ恨み無くんば決定して當來に成佛を得る者ならば、我が身の肉倏然として故の如くならしめんと、是の誓を作し已りて卽ち平復することを得たりける。時に天帝釋及び諸の天人は聲を同ふして讃めて言く、善い哉善い哉と。佛阿難に告げたまはく、往昔時の善住王とは豈に異人ならんや、今の淨飯父王是れなり。王の夫人とは今の摩耶夫人是れなり。昔の善生王子とは則ち我が身是れなりき。

菩薩本生鬘論卷第一

# 巻の第二

## 最勝神化緣起第四

爾の時に世尊遊化して摩竭陀國・[一]王舍城中に居止したまひ、諸の弟子を將ひて大阿難漢一千二百五十人と倶なりき。時に彼國王を[二]洴沙王と名け、稟性仁賢にして久しく德本を植ゑ、已に初果を證し不壞の信を得、奉佛の心倍ゝ隆厚を加へ、常に上妙の飲食・衣服・臥具・醫藥を以て如來及び比丘衆に供養せり。是の時に國中先に外道六師の徒・[三]富蘭那等有り、久しく王境に在りて邪教を宣布をし、民庶を誑惑し信服する者衆し。王に一弟有り其宗を崇め尙び、四事欽び承け其れを有道と謂へり。佛日初めて出で法寶肇めて興る。王の意慇懃に伸び歸向せしむるも邪說を固執して勸諭に從はず。乃ち王に白して言さく、我れ自ら師有り復敬を彼の[四]瞿曇に致さゞるなりと。王復謂ふて曰く、福田には遇ひ難し珍饌を營み如來を供養すべし、然るに王の敎ふる所の理は敢て違はず、當に大齋を設けて來る者を限らざるべし、若し其れ自ら至らば我れ當に之を延ぶべしと。備に飲食を設け床座を敷き置き、乃ち從者をして密に六師を召す、命に應じて來り尊に處して坐せり。佛及び衆僧は自ら來り赴かざりき。王は弟に謂ふて曰く、汝躬から詣でゝ佛を請ふこと能はずと雖も、特に一人を遣し白して言はしめよ、時至れりと。佛は請を受け已りて諸の大衆を將ひ威儀詳肅として來り會所に赴き、諸の外道を見たまふに先に高位に踞せり。乃ち神足を以て彼の六師及び徒衆等を移し皆下行に置く、彼れ皆相ひ顧み名のり起ちて移り坐す、坐定りて復見れば已に其下に在り。此の如きこと三たびに至りたれば俛仰して坐しき。次に淨水を行ふ。佛施主に語りたまはく、先づ汝の師に與へよと。澡瓶の口塞れり。佛より首と爲せば水乃ち注ぎ下る。次に食を施すに當りて、佛は施主に語りたまはく、當に汝の師を請ひ以て其の食を施すべしと。六師口噤み言を出すこと能は

【一】王舍城は梵語にては、ラージャグルハ(Rājagṛha)にして今のビハル州ーラジギル驛の地なり。

【二】洴沙王は梵語、ビンビサーラ(Bimbisāra)にして王舍城なり、又頻毘沙羅王とも音譯せり。

【三】富蘭那は梵語、プーラナカーシャパ(Pūraṇakāśyapa)は釋尊當時六師外道中の一派にして斷滅撥空の見解を有せり。

【四】瞿曇は梵語、ガウッタマ(Gautama)にして最上牛の義あり、釋尊の實名。

ず、但だ佛を指すのみ。佛呪願したまふに梵音清徹にして聽者聞かんと樂ふものなり。次に食を行ふに當り、佛施主に語りたまはく、先づ汝が師に奉ぜよと。食乃ち空しく住す。持て佛の所に至れば食卽ち還り下る、佛衆僧と與に飯食し訖り、[五]盥漱齒木し座を敷きて坐したまふ。次に說法するに當りて、佛施主に語りたまはく、汝が師をして說かしめよと。前の如く口噤み、但だ佛を指して說けと。是の時如來梵音聲を以て廣く衆會の爲に微妙の法を演べたまひしかば、大衆聞き已りて咸悉く了達せり。洴沙王の弟は心淨く信解し、三寶を歸依して初果を證することを得、自餘の衆會も二果乃至漏盡・衆生果を得る者有りき。時に外道の輩は向ふ所利を失し、甚だ恚惱を懷き心暫も安きこと無く、各〻靜處に於て求めて奇術を學び、天魔波旬すら其の怯弱を慮ひ、昔授けし所の法を保護する能はず、乃ち下り化して六師の相狀と作り、一人の前に於て五人の術を現じ、空中を飛行し身より水火を出し、形を分ち體を散じ種々に變現す。是に由て邪徒更に相ひ恃み賴みて念ずらく、前に辱を被り衆の心離散すと。今察するに已に能く定で彼に勝るべしと。卽ち王の前に詣り自ら神異を誇り、對し之を試みて其の優劣を見よと請ふ。時に洴沙王乃ち之を哂して曰く、汝邪徒を觀るに愚迷特に甚し、佛德廣大なる言をも能く宣ぶること莫く、螢火を以て日と與に明を爭はんと欲し、蹄涔の水を以て巨海に比し、蟻垤の阜を須彌に等ふし、野干の卑軀を師子に方するがごとく、大小の相形昭然として自ら顯るべしと。六師白して言く、大王よ、未だ我の殊變を測らず、何ぞ偏心に因りて見ること薄きこと此の如くなるやと。後ち七日を期して試場に置かんことを請ふ。王は佛の所に詣り具に上の事を陳べ、唯だ願くば世尊暫く威神を屈して邪黨を伏し除き悉く正道に歸せしめよと。佛言く、大王よ、我れ自ら時なりと知れり。王是の語を聞き謂へらく佛許可したまふと、卽ち臣吏に勅て寬廣の處を擇び平正に修治して淸淨ならしめ、幢幡を建立し床座を施設せしむ。當に其の會日を人民企望せり。是に於て如來諸の大衆を將ゐ、王舍城より[六]毘耶離國に往きたま

【五】口漱ぎ楊子を嚼み食後口中を淸潔にすること。

【六】毘耶離國は梵語、バイシヤーリー（Vaiśali）にして廣嚴國の義、今のビハル地方なり。

ふ。時に彼の大王の名を[七]嚗𡙸と曰く、諸の臣庶を將ゐて佛を奉迎す。六師邪徒咸是の言を唱ふらく、瞿曇の智術微淺なるを知るや久し、將に勝を較べんと迫らば畏れて避け去らんと。時に洴沙王聞きて佛前に進み、諸の供具を辨じ五百の車に滿たし、王及び臣民十萬數なるべきと其の所須を備へ悉く佛に隨ひ往けり。外道卽ち嚗𡙸王に白して言く、沙門と其の神化を搉せんと請ふ。王乃ち謂ふて曰く、咄哉癡人、自ら有道と云へり。但だ汝輩自ら毀辱を貽くを慮ふのみと。王佛に白して言く、六師紛紜として奇術を比べんと欲せり、唯願くば其の邪惡を制したまへと。佛言く、大王よ、我れ自ら時を知れりと。是く說きたまひしを聞きて謂へらく佛許可したまふと、嚴に治し備へ辦ずること洴沙王の如く、民庶佇み觀て期明日に在り。

是の時に如來毘耶離より大衆を統領して[八]拘睒彌國に詣りたまへり、時に彼の大王の名を[九]優塡と曰ふ、諸の臣民を集め悉く來り奉迎せり。毘耶の人民明晨佛を問ひ、云何にして已に拘睒彌國に往きたまひしやと。六師是に由て高心愈〻增し其の徒に語りて曰く、必ず窮迫せられたりと。時に嚗𡙸王は佛の前進したまふと聞くや、亦た供具を備へ五百の車に滿たし以て供養を俟ち、王及び臣民七萬の數に充てると其の所須を備へ。悉く佛の後に隨ひ、拘睒彌國より、[一〇]越祇國に往き、越祇國より[一一]特叉尸羅國に往き、以て[一二]波羅奈國・迦毘羅衞國・[一三]舍衞國等に至りける。時に世尊の歷たまひし所の境は、王及び臣民千萬億衆悉く來り奉迎して供養恭敬しまつれり。一國に至る每に彼の六師輩は常に後を逐ひ佛に搉試を求むること廣衍已に能く皆前說の如し。時に諸の國王將ふる所の臣民無量百千萬億の衆、川野に充塞し舍衞國に集る。時に彼の大王の名を[一四]勝軍と曰く、大名聲有りて威德特尊なり。六師の輩前みて王に白して言く、沙門と與に其の優劣を較べんと請ふ、潛みて諸國に奔り意避くることを求めんと欲せり、我れ徒屬と與に今逐ふて此に至ると。時に勝軍王外道に謂ふて曰く、如來の聖德は思議すべきこと難し、汝輩の凡愚と輙ち勝負を論ぜんやと。王は佛の



【七】嚗𡙸は、梵語、ワツサ(Vatsa)王の名。
【八】拘睒彌國は、梵語、カウシャーンビー(Kauśāmbi)にして今のバルフット塔趾附近の地方なり、又憍賞彌國とも漢譯す。
【九】優塡王。梵語、ウダーヤナ(Udāyana)王の名。
【一〇】越祇國は、梵語、ヷッギ(Vaggi)にして舍衞城の南方にありし中印度の國名。
【一一】特叉尸羅國は、梵語、タクシャシーラ(Takṣaśilā)にして北印度ペシヤワル地方。
【一二】波羅奈は、梵語、バーラーナシー(Vārāṇasi)中印度ベナレス市。
【一三】舍衞國は、梵語、シラーワスティ(Śrāvasti)にして中印度、今のサーヘト・マーヘト地方の名。祇園精舍の在りし地なり。
【一四】勝軍王は、梵語、プラセーナヂット(Prasenajit)。卽ち波斯匿王のことなり。

所に詣り具に上の事を陳べ、唯願くば世尊略して神化を施し、普く諸國の一切群迷をして佛の神通を覩せしめ其の邪正を辨ぜしめたまへと。佛言く、大王よ、此は小緣に非ず、今正に是れ時なり其の請ふ所の如くせんと。王臣吏に勅して嚴に會所を治し、廣く香華を積み床座を敷設し、諸の來れる大衆は皆悉く雲集せり。當に月の一日晨朝時に於て佛は大衆と與に初めて論場に至りたまふ。勝軍大王は是の日に食を設け淨き心もて親しく手づから以て楊枝を奉る、佛は受け嚼み已り擲てゝ殘し地に置きたまふに、忽然の間に根莖を發生し以て青翠に至り、漸次高大にして三百由旬なり、其の條傍に布くこと二百由旬、枝葉華果は七寶にて成る所、多種の色有り色に隨ひて光を發す、其の果を食する者味甘露の如し。一切の人民は是かる神變を覩て咸信重を生じ、讃めて言く、希有なるかな、佛は機の宜に隨ひて爲に妙法を說きたまふ、法を聞き解悟して不退轉を得たりと。次に第二日拘睒彌國[一五]優塡大王は佛に請ふて供養したてまつる、佛兩邊に於て二大山を化す、高廣嚴好にして七寶にて合成し衆の色晃曜たり、一山の上に粳稻の飯を出し香滑なる甘味は[一六]蘇陀味の如し。諸の國土の中の無量の有情は共に來り之を食し皆豐に足ることを得たり。一山の上に細軟香草を出し、食するに苦澁無くして能く充足し、象・馬・牛・羊諸の傍生の類皆飽滿することを得たり。諸國の人民是の神變を覩て、咸信重を生じ、讃めて希有なるかなと言へり。佛爲に法を說きたまひしかば皆悉く悟解して須陀洹果を得たり。次に第三日[一七]大越支國　純眞陀王は佛に請ふて供養し佛に淨水を奉る、盥漱を地に棄つるに七寶池を成じ、一一の方面二百里毎に八功德水其の中に充滿し、四色の蓮華清香遠く布く。時に諸の衆會は此の神變を覩て咸信重を生じき。佛爲に法を說き心開き意解け遠塵離垢して皆初果を得たり。次に第四日特叉尸羅國陀婆彌王は佛に請ふて供養したてまつる。是の時に如來は池の四面に於て八渠流を化し、清波を激揚して相ひ連り灌注し、水聲流れて八解脫法諸波羅蜜を演じ、聞く者皆大菩提心を發しき。次に第五日波羅奈國[一八]梵摩達王は佛に請ふて

【一五】優塡大王は、梵語、ウダーヤナ(Udāyana)にして又出愛王とも譯す。

【一六】蘇陀味は、梵語、スダハー(Sudhā)甘露味の義。

【一七】大越支國は、マハーバッヂ(Mahāvajji)中印度に在りし國名。

【一八】梵摩達王は、梵語、ブラフマダッタ(Brahmadatta)にして梵授王の義なり。

供養したてまつる。如來は口中より金色の光を放ち遍く三千大千世界を照したまふに、光の照を蒙むる者身心泰然たること、猶第三禪樂を獲得するが如し、佛爲に法を說きたまへば法眼淨を得たり。次に第六日毘耶離國嚈𡆚大王は佛に請ふて供養したてまつるに、如來慈力を以て平等加持し、普く衆會の一切衆生をして各々互に心行の差別と心の動作する所の善惡の業報を了知し、咸驚喜を生じ佛の功德を歎じたてまつる、佛爲に法を說きたまへば各々了解を得、清淨心を發し無生忍に住しき。次に第七日迦毘羅衞國諸の釋種族は佛に請ふて供養したてまつる。佛神力を以て會に在る者をして各々自身轉輪王と爲り七寶具足し千子圍繞し小王臣民恭肅承事するを見せしむれば、各々忻びて佛の功德を慶讚したてまつる。佛爲に法を說きたまへば皆悉く樂ひて無上佛道を求めき。次に第八日帝釋天主は佛世尊の邪黨を攝化したまふを知り、人間に下降し佛に請ひ供養したてまつる。佛爲に七寶をもて嚴飾せる師子の座を造作し、佛其の上に坐したまふに光明煥赫たり。釋梵諸天左右に侍立し、一切の衆會寂然として安坐す。是の時に如來は金色の臂を舒べ手を以て座を按じ、欻然として聲有り象王の吼ゆるが如し。時に應じて卽ち五大藥叉有り、六師の座を挽拽し摧壞す。密迹金剛の杵の頭より火を出し擧げ擬すれば六師驚怖し奔走す、此の重辱を慚ぢ水に溺れて死せり。六師の徒屬九萬人の衆は皆佛に歸依したてまつり弟子と爲らんことを願ふ。佛善來と言へば鬚髮自ら落ち沙門の相と成り羅漢果を證したり。

・爾の時に　洴沙大王は復佛に白して言く、世尊よ、今は六師生れて佛に遇ふと雖も濟度を蒙らず、願くば往因を聞きたてまつらんと。佛言く、大王よ、善く思ひ諦に聽け、乃往過去無量世の時、此の閻浮提に一國王有り　(一九)賖拘利と名けき、久しく寶位に居せしも未だ聖嗣有らず、是の事を念じて已が心憂の海に沒し、廣く福業を興し此の願を滿さんことを祈る。時に天帝釋は化して一醫師となり、來りて王の前に詣で其の憂ふる意を問ふに、王は上の事を以て乃ち具に之を答ふ。醫曰く、



【一九】　賖拘利王は、梵語、ナクリ(Nakuli ?)。

王の爲に雪山中に入り靈藥を採取して后妃に與へ服せしむれば後ち當に子有るべしと。王曰く甚だ善し。後に於て醫師藥を採りて宮に還り、乳を用ひて藥を煎じ進上して服せしむ、王后見已りて臭を避けて服せず兼て亦信ぜず。化醫遂に去る。餘の諸の宮嬪競ふて藥を分ち飲み、之を服し未だ久しからざるに咸娠むこと有るを覺ゆ。是の時に王后悔ひ惱み愁歎し、遍く前藥を求めしに唯少滓を得しかば、乳を以て煎じ服せしかば後ち亦子有り。餘の諸の夫人月滿ち子を生ず各ゝ端嚴なり。王大に歡悅す、最後に王后乃ち一子を生ず、面貌極めて醜く形株杌の如し。王其の后と之を見て喜ばず、是に因りて名を立て〔一九〕株杌太子とす。年漸く長大して武勇世に冠たり。時に彼の鄰國群寇境を犯す。乃ち太子を遣し之を擊ち退散せしかば、王愛念を加へて其の良匹を訪ふ、遠國に王有り〔二〇〕黎瑟跋蹉と名く、王に一女有り容止端正なり、使を遣し親を求め乃ち相ひ許を蒙れり。六國之を聞き各ゝ慕ひ樂ふことを懷き、競ひ來り聘を求め兵を擧げて相ひ攻む、其の王乃ち曰く、若し其の一を許さば餘は則ち恨を生ぜん、能く他兵を卻けば當に女を與ふに適すべしと。是に於て株杌是の說を聞き已り實爾たるやを審にし乃ち其の器を利くし、方に壯年に在り、戰ふて勝つことを得たり。乃ち六首を取り〔二一〕跋蹉王に獻ぜしかば、大歡喜を生じ納め以て婿と爲す、諸の士卒を奪ひ妻と與に國に還る。婦は醜狀を覩て常に怖るゝ色有り、王子愧恥心をもつて自ら寧からず、便ち林中に至り自盡せんと欲す。帝釋遙に知り下つて其の所に至り、善言をもつて慰喩し一寶珠を賜ひ、密に此を汝の頂上に置かしめば容儀我が如く異ること無きを得可しと。跪き受け喜びて家に還る、婦見て識らず乃ち之に語つて曰く、卿は是れ何人ぞやと。夫卽ち具に珠を得るの由を說く。株杌の名玆れより息む。乃ち更に其れより〔二二〕須陀羅舍と號せり。

佛言く、大王よ、當に爾時の賒拘利王とは今の淨飯父王是れなり。王の夫人とは今の摩耶是れなり。醜王子とは今の我身是れなり。昔の美婦とは今の耶輸夫人是れなり。昔の六王とは今の富蘭那

【二〇】黎瑟跋蹉王は、梵語、ルシワッサ(Ṛṣivatsa ?)。

【二一】跋蹉王は、梵語、ワッサ(Vatsa)なり。

【二二】須陀羅舍は、梵語、スヅルシヤ(Sudṛśa)。善見或は美觀の義なり。

等の六師是れなり。

## 如來不爲毒所害緣起第五

爾の時に世尊遊化して王舍城中に依止したまふ。時に彼の國主【一】阿闍世王、創めて淨信を發し佛に歸依し、四事供養曾て乏しき所無し、大臣、人民、四部の衆咸如來に於て親近恭敬す。梵音聲を以て微妙法を說き諸の弟子を敎へて十惡業を斷ぜしめ、生命を殺し他財を竊盜し非梵行の妄言・綺語・兩舌・惡口・貪・瞋・邪見を作すこと勿れと。是の諸の衆生は佛の敎誨を蒙り十善を修行し、佛法の中に於て清淨に住せり。時に長者有り名を申日と曰ふ、財富無量にして大威勢有り、昔より已來外道に承事し深く外道婆羅門の法に著せり。時に外道の輩阿闍世王・大臣・人民・如來の所に於て歸奉する者の衆を見る、而も我が徒屬は惠施に霑はざれば、心に憎嫉を懷き損害を作さんと欲し、長者の所に詣り共に相ひ議して曰く、沙門常に三世の事を說き了り他人の心の所念を預知せりと、今彼の實爾なりや不やを驗す可し。長者曰く然り、何を以て之を試みんやと、外道告げて言く、當に須らく長者詐り歸依を作すべし、佛に請ひ舍に就き略ゝ微供を陳べよ、彼れ若し遙に知らば應に許されざるべし。若し請を受けば必ず困る所に遭はんと。乃ち長者をして先に門內に於て大深坑を鑿ち多く熾に火を積み、危き鐵椽を布き薄土をもて上を覆ひ、其の沙門の領徒此に至るを伺ひ、躬を曲げ傍ら引き之が上を揖して行け、若し其の安然にして損する所無くんば沙門に命じて次に當に食に就かしむべく、卽ち毒藥を以て飯に和し之を授けよと。申日云く善しと、一に敎ふる所の如し。便ち地を掘り速かに斯の事を辦じ、卽ち詣り佛に請ふて具に虔意を伸べ、其の根の熟するを知り默然として之を許したまふ。時に諸の外道皆大に歡喜す、長者子有り、其の名を月光といふ、年十六歲にして相を具へ聰利なり、久しく善本を植ゑ宿命智を得たり。乃ち父に白して言く、如來は神鑒にして念を



【一】阿闍世王は、梵語、アヂャータシャツル(Ajātaśatru)にして漢譯し未生怨王といふ、頻毘沙羅王の子なり。

擧ぐれば卽ち知りたまふ、外道は愚人なり愼み信ずべからずと。時に彼の申日は子の言に從はず、坑を穿ち火を置き毒を以て飯に和し、遲明に使を遣し佛に臨訪したまはんことを請ふ。如來知りて諸の比丘に勅し應器を執持し吾の後に從へと。四大天王・釋・梵王等・天・龍・鬼神皆悉く隨侍す。是の時に如來諸の神變を現じ、金色の光を放ち申日の舍を照し、諸の大衆と與に安祥として來りたまふ、身相巍巍として星中の月の如く、將に其の門に至らんとするや地六震動し、病苦の有情は皆痊愈することを得、盲者は視ることを得、聾者は能く聽き、毒は消ゆることを得、狂者は正しきことを得、一切の音樂は自然に響を發し、珍禽瑞獸率舞和鳴す、覆ふ所の火坑は佛の神力の故に化して淸淨廣大なる池沼と成り、中に於て復千葉の蓮華を現ず、如來徐ろに步み上を履み前み入りたまふ。諸の大弟子各〻皆百葉の蓮華を蹈み行列して進む。是に於て申日は佛の神變を覩、省已つて知る無き大憂怖を生じ、頭面を地に著け過を悔ひ自ら責む。食時將に至らんとするや、忽遽に妙香の飯を炊ぎ上り如來に奉らんと欲せしに、佛卽ち之を止め、但毒藥を和する所の飯を持ち來れ、須らく復造ることをもちひざれと。佛大衆に語りたまはく、是の飯を受けて且く鉢中に置き未だ食すべからず。世間の凡夫は其の三毒有り、一には貪欲、二には瞋恚、三には愚癡なり。我れ今已に曠大劫よりこのかた煩惱の火を滅し心淸涼を得たり。此に於て三毒永く盡きて餘り無し。假使毒藥大なること須彌の如く、穿つ所の火坑大海より廣きも、則ち我が身に於て害を爲すこと能はず、佛法僧寶行力を以ての故に、一切の惡毒自然に消散せんと。是の說を作し已つて鉢飯を食せしむるに、佛及び大衆一も損ずる所無かりき。彼の外道の輩潛み竄し跡を泯せり。申日長跪し佛足を頂禮し、白して言く、世尊よ、我れ大愚癡にして彼の邪師を信じ此の惡行を造る、唯願くば大慈をもつて哀愍攝受し、我に懺悔を授け憂怖を離れしめよと。如來爲に苦・集・滅・道の四聖諦の法を說きたまひしかば、長者聞き已つて心淨く信解し、初果を證することを得、禮を作して退きける。

# 兎王捨身供養梵志緣起第六

菩薩は往昔曾て兎王と作り、其の宿世餘業の因緣を以て、斯の報を受くと雖も而も能く人語したまひき。純誠質直にして未だ嘗て虛謬せず、智慧を積集して慈悲を熏修し、一念殺害の心を生ぜざりき。彼は無量百千の兎の中に於て、稟性調柔にして其の上首に居り、彼の徒屬の爲に經法を講じ宣べ勸めて諦に聽き善く思ひ之を念ぜしめける。我れ及び汝等は無始劫よりこのかた、正しき行を修せず惡しき流轉に隨ひ、四種の因に由りて三惡道に墮にき。謂はゆる四とは貪・瞋・癡・慢なり。或は慳貪に由りて十惡業を造る。此の因緣を以て餓鬼の中に墮ち、慳增上の故に其の咽針の如く、長き劫のあいだ漿水の名をも聞かず、設ひ少しく食を得とも變じて火聚と成り、皮骨連り立ちて饑渴の苦を受く。或は瞋恚に由りて十惡業を造り、是の因緣を以て傍生の中に墮つ。或は蟄、獸虎兕毒蛇無足多足と爲り更に相ひ食噉し、駝牛の報を受けて重を負ひ遠に致し、項領穿ち破れて住宿の債を償ふ。或は愚癡に由りて十惡業を造り、是の因緣を以て地獄に墮ち、淨き慧無きが故に因果を撥無し、佛・法・僧を毀り般若を學ぶことを斷ずるの人、苦處八寒・八熱・刀山・劍林に於て種々治罰せらる。或は我慢に由りて十惡業を造り、是の因緣に由りて修羅の中に墮ち、心常に諂曲貢高にして自ら大とし、善知識を離れて三寶を信ぜず、福報を受くること彼の天の中にをけるが如しと雖も、常に闘戰に苦しみ支節を殘害す。我れ今略して是の如く諸趣にをいて受くる所の苦を陳ぶ。若し具に說かば劫を窮むるとも盡きず。又我れ汝と與に盲にして慧眼無く、癡增上の故に彼の兎の身を受け、常に饑渴を受けて水草に乏し、林野に處して周慞驚怖す。或は罝網の機の爲に陷り困られ、彼の獵者の爲に傷害せられ、現に此の苦を受くること深く厭患すべし。汝等各々勤勇心を發し、十善業を修して出離の道に趣き、勝處に生ぜんことを求めき。是の時に兎王常に同類の爲に上

の如き相應の法要を宣說しけるに、一外道婆羅門姓有り、世を厭ひ出家して仙道を修習し、愛欲を遠離して瞋恚を起さず、水を飲み果を食し樂みて閑寂に居し、長く爪髮を護りて梵志の相を爲せり。忽ち一時に於て遙に兎王彼の群兎の爲に經法を宣說すと聞き、而も自ら咨嗟し乃ち是の言を作さく。我れ今人中に生ると雖も、愚癡無智にして彼の兎の善法を了達して他を開悟するに及ばず。此は必ず大權にして聖賢の化する所ならん、或は是れ梵王・大自在等ならんか。我れ彼が說く所の法を聞くことを得るに因りて、身心泰然として諸の熱惱を離れたり。今此の兎王は自性仁賢にして、能く先聖の道を發明し、善惡報應の理を分別せり。我れ昔よりこのかた山谷に棲み止り、草の衣に木食して出離の道を求むるも、未だ師友の是の如き教誨に逢はず、今始めて之に遇ひ喜び躍ること量り無し。是の時に仙人即ち起ちて合掌し、兎王の所に詣り安徐として言く。奇なるかな大士や、此の權身を現じて能く有情の爲に廣く法要を宣べたまふ、汝今眞に是れ大法を持つ者、必ず當に蘊ふる所の正法の藏を、願くば今我が爲に最上なる究竟出離の道を開示演說したまへ。我れ先に婆羅門の法を修習し久しく勤苦を受くるも殊に益する所無し。譬へば人有り愚夫に信順して氷を鑽ぎ火を求むるも得べからざるが如し。願くば仁者に投じて歸依處と作さんと。時に兎答へて言く、大婆羅門よ、我れ今說く所の解脫の法は能く苦際を盡さん。汝の機に稱はゞ當に問を發せ悋み惜む所無けん。我れ已に久しく慳貪の垢を除き、有情を利せんが爲に樂みて生死に住し、彼の同類を化せんとて是の兎の身を受けしなりと。是の時に仙人是の說を聞き已りて、心大に歡喜し未曾有なることを得たり。我れ今幸に慈化に親附することを得たり。願くば教誨を垂れ勞ひ倦むことを辭すること勿れと。凡そ多年を歷て義に於て親友より深く、草を食ひ泉を飲み兎と異ること無かりき。時に世の人民枉りて非法を行じ、罪惡に慣れ習ひて福力衰微し、善神捨て離れて災難競ひ起り、共業の招く所天をして亢旱せしめ、數載を經るも甘雨を降らさず、草木焦枯し泉源乾涸せり。時に婆羅門即

ち是の念を作さく、我れ今、年邁にして復た食する所を闕く、若し唯此に止らば轉た饑羸を増さんと。乃ち兎に白して言く、今且暫く離れて餘處に往き至らん、幸に訝らるゝこと勿れと。兎即ち告げて曰く、大仙よ今は其の所を樂まざるか、誠に犯異を恐愱するのみ乞ふ容恕せよ、久要の言俄に輙別を成すかと。婆羅門曰く、此の處幽寂にして其の過患を絕し、諸の兎調順にして各ゝ侵撓せず、但だ我れ薄祐にして其の食する所乏しきのみ、久しく大士に依りて法味を聞くことを獲たり。要す當に身を終ふるまで之を心腑に藏せん、願ふらくば其の傳を廣くし以て群有を濟はん、漿を絕ち食を亡くし已に旬日を經たり、恐らくは命保たず虛しく前功を捐せんことをと。兎是を聞き已り悲哽して言く、今此に睽違せば何の時にか再び遇はんや、願くば一宿を留り扆しく薄供を伸べんと。是の時兎王群兎に語りて曰く、今此の大仙は道力堅固にして、是れ善知識最上福田なり。汝等力を戮せ多く乾ける薪を積み、共に晨飡供爨の用を助けよと。乃ち仙の所に詣り復た是の言を作さく、唯願くば明旦必ず我が請を受けよ。仙即ち之を許す。彼の婆羅門佇みて思ひ詳に審すらく、今此の兎は何の所有を爲すか、或は麞鹿を得或は殘獸に遇はんかと、心歡悅を生じ勤め請ふこと是の如し。是の時兎王群屬に謂ふて曰く、今此の大仙は我を捨て去らんと欲す、無常別離は世の態なること此の若し、衆生の壽命は猶幻化の如く、果報一たび來らば能く脫する者無けん。是の故に汝等當に勤めて精進し出離の道を求めば苦際を盡すことを得んと。爾の時に兎王終夜寐らず、彼の同類の爲に是の如き法を說きぬ。當に其の淸旦薪を積める所に詣り火を以て之を然し、其の焰漸く熾なり。大仙に白して言く、我れ先に請ふ所の微供を陳べんと欲す、今已に具に辦ず願くば强ひて之を食せよ、所以は何ん。智者は財を集め積みて能く施す、受は憐愍して要す必ず受用せよ。我れ今貧乏にして施力難しと爲す、唯願くば仁者決定して納受せよ。我れ他をして安隱の樂を得せしめんと欲し、自ら己身を捨てゝ貪惜する所無く、諸の衆生と共に無上覺を證せんと。是の語を說き已りて身

を火中に投ぜり。時に彼の仙人是の事を覩已りて急に火聚に匍匐して之を救ひしも、不堅の身倏焉として殞ぜり。之を膝に抱き悲み自ら勝へず、苦なるかな大士、奄忽ち此の若し、他を濟はんが爲に而も己が命を殞ず、我れ今敬禮して歸依主と爲さん、願くば我れ來世常に弟子と爲らんと。此の誓を發し已りて兎を地に置き、頭面して禮を作し而も復た抱き持ち、即ち兎王と倶に熾なる焰に投じけり。是の時に帝釋天眼をもて遙に觀、即ち其の所に至り大供養を興し、衆の寶を以て窣覩波を建てたりき。

佛諸の比丘に語りたまはく、昔の仙人は彌勒是れなり。彼の兎王は即ち我が身なり。

菩薩本生鬘論卷第二

## 慈心龍王消伏怨害縁起第七

菩薩往昔瞋の因縁を以て龍中に墮ち三種の毒有りき。謂はゆる氣毒・眼毒・觸毒なり。又別報の福業力に由るが故に、身に衆の色を具ふること七寶聚の如く、日月の光明の照す所を假らず、常に無量百千の諸の龍に周匝圍繞せられ以て眷屬と爲し、人の身に變現すれば容色端正にして、〔一〕毘陀山の幽邃なる處に住し、諸の林木多くして華果茂り盛に、淸淨の池沼は甚だ愛樂すべし。諸の龍女と衆の歌舞を作し相ひ共に娛樂しつゝ其の中に止住し、無量百千萬歲を經たり。

是の時に〔二〕金翅鳥王有り、飛び騰り翔を集めて空より下り、諸の龍を取り以て所食を爲さんと欲しける。其の來る時に當りては風を摶ち翼を鼓し山を摧き石を碎き江河川源悉く皆乾き竭くべし。時に彼の諸の龍及び龍女等は是の事を見已りて心大に驚怖し、著くる所の瓔珞身を嚴るの具顚掉して安からず悉く地に墜ち咸是の言を作さく。今此の大怨は喙金剛の如く觸るゝ所皆碎く、將に來り我を噉まんとす。其れ當に奈何せんや。是の時に龍王初めて此の說を聞き極めて憂惱を生ぜしも、宿善の力に由りて復た更に思惟し、心乃ち畏れ無かりき。然るに此の金翅は大威力を具ふるも、唯だ我が一身をもつて能く彼を禦ぐべしと。諸の龍に謂ふて曰く、汝等但だ當に吾の後に從へ必ず害せらるゝ所無けん、若し我れ能はずんば其の朋屬と與に守護者と作らん、何ぞ是の如き大身の爲に用ひんやと。爾の時に龍王は金翅の所に詣り、心怯弱無く彼に白して言く、幸に少しく神を留めよ共に此の事を議せん、汝は我が身に於て常に怨害を生ぜるも、我れ仁に於ては都て此の念無し。宿惡業を以て此の大身を招き、三種の氣・眼・觸の毒を具ふと雖も、未だ曾て他に於て暫くも損害を興さず、已を度するの能は相ひ抗敵すべく、亦能く遠く去り汝をして見せしめざらしめん。我が今



〔一〕毘陀山は、梵語ビンダヤ(Vindhya)にして名山なり。

〔二〕金翅鳥は、半神半獸の鳥にして龍を食ふものといふ神話多し。

委ね去らざる所以は多くの諸龍有りて我に依附せり、此に由りて兩相ひ交戰するを欲せず、是の故に汝に於て怨心を起さゞるなりと。金翅復して曰く、汝誠に我に於て怨心無きや。龍の曰く、我れ獸身たりと雖も能く業報に達し、審に小惡を知り果の尤も重を感じ、影の形に隨ふが如く相ひ離れざるなり。我れ及び汝の身、今惡道に墮つるは皆先の世に罪因を造作するに由る、汝當に如來の所說を憶念し、怨の心を以て能く怨の結を解くに非ざれば、唯だ慈忍を起して鎖除せしむべし、譬へば火聚あり之に乾ける薪を投ぜば轉た熾然を增し窮り有ること無きが如く、瞋を以て瞋に報ひる理も亦此の如し。是の時に金翅は是の說を聞き已りて、怨の心即ち息み善心生じたりき。復た龍王に向ひて是の如き說を作さく、汝今能く慈忍の力を以て我が瞋恚を息め、流るゝ泉を汲みて其の炎ゆる火を滅するが如く、我が心地をして頓に清涼を得せしめよと。龍王復して曰く、我れ昔し汝と與に無量世の時、先に佛の所に於て曾て戒法を受けしかども、心清淨に非ず復た堅く持たず、名聞を求めて相ひ憎嫉を爲しき。是の因緣を以て惡道に墮ちたりける。我れ曾て發露するが故に能く憶持するも、汝は覆ひ藏すが故に今皆忘失せり。汝今當に本の正念を憶ふべし、慈忍の心を發して淨く梵行を修せよと。金翅復して言く、我れ今日より普く諸の龍に施すに安穩にして畏れ無きを以てせんと、卽ち龍宮を離れて本の處に還り歸りたりき。龍王乃ち諸の龍の眷屬を慰め、復た之に問ふて曰く、汝は金翅を見て恐怖を生ぜしや不やと。各是の言を作さく、極めて大に怖れ懼ぢにきと。龍の曰く、世間の衆生若し汝を見る者恐らくは大に恐怖することも亦此の如きなりと。爾等諸の龍よ身命を愛惜すること諸の衆生等と異り有ること無からん、當に自身を以て觀るべし、況や他身をや。是の故に應に大慈の心を起すべし、我れ慈心を修習する因緣に由りて其の怨に對し其の本處に還歸せしむべし、一切の有情は生死に流轉し、依怙すべき所は慈心に越ゆる無し。大慈心は猶ほ良藥の如く、能く衆生煩惱の重病を愈す。大慈心は猶ほ明燈の如く、能く衆生三毒の黑暗を破る。

大慈心は猶ほ船筏の如し能く生死險難の惡道を越ゆ。大慈心は摩尼珠の如く、能く衆生求むる所の善願を滿す。我れ往昔に慈心を失ふが故に、此の龍の中に墮ちて解脱することを得ず。若し諸の衆生慈門を建立すれば、則ち能く無量の善法を出生し、一切の愚癡昏暗を閉塞し、諸の煩惱の緣而も入ること能はず、常に人天解脱の安樂を生ぜんと。諸の龍の眷屬は是の說を聞き已りて、悉く瞋恚を除きて皆慈心を起しける。是の時に龍王は諸の同類の已れより化せらるゝを見て、而も自ら慶びて言く、善い哉、我れ今作さんとする所已に辦じぬ。汝をして已に無量の惡毒を除かしめ、善淨の法を以て其の處を補ひ置けり。復た汝等の爲に清淨八戒齋の法を建立す、當に之を奉持すべし。閻浮の衆生は八戒の水を以て身心を洗き浣ぎ清淨なることを得せしめ、無量の貪・瞋・癡の垢を斷除し、人天の路に於て資糧と作さしむ。若し能く是の八戒齋の法を持つは、當に知るべし是の人は妙なる服無しと雖も、則ち已に慚愧の衣を具へたりと爲さん。當に知るべし是の人は垣牆無しと雖も、則ち能く六根の怨賊を禦ぎ捍るなり。當に知るべし是の人は上族に非ずと雖も、則ち已に聖種姓中に住するなり。當に知るべし是の人は瓔珞無しと雖も、則ち衆の善を具へ其の身を莊嚴せるなり。當に知るべし是人は珍しき寶無しと雖も、則ち人天七種の法財を集め、橋梁に依らずして險道を超越せるものなり。八戒を受けし者の功德此の如し。時に彼の諸の龍各ゝ是の言を作さく、我れ今願くば八戒の名字を聞かんとす、我當に頂き受け勤めて之を行ぺしと。龍王告げて曰く、其の八戒とは、一には不殺生、二には不偸盜、三には不邪婬、四には不妄語、五には不飮酒、六には不得過日中食、七には不得歌舞作樂香油塗身、是を八戒清淨の齋法と名くるなり。要す憒鬧を離れ、寂靜の處にて如理に作意し專注して奉持せよと。諸の龍白して言く、我が徒の如きは王に少時も心離るれば寧ろ處せざるなり。王の威神に依りて衰惱を免ることを得て、一切時中安隱にして住すればなり。佛法の功力處として可ならざる無し、何ぞ必ずしも寂靜の所を求めんやと。時に彼の

龍王は諸の龍に答へて曰く、欲する所を觀ずば則ち念起らず、慣習は緣を攀ぢ境に對して復た發る、譬へば濕地の泥と成り易きが如し、若し空閑に在らば染心動くこと無けんと。爾の時に龍王は諸の明屬を將ゐて山林幽曠の處に至り、貪欲瞋恚の心を遠離して、常に慈忍を起し以て其の身を修し、齋法を受持して多日を經、食を節し身羸せ復た疲困を加ふ。諸の惡人有りて彼の住處に至らば、龍は人の聲を聞き尋で即ち惺悟す。此の惡人の輩是の事を見て咸驚駭を生じ、而も是の言を作さく、此れ何の寶聚ぞや地より涌き出でたるか、龍自ら思念すらく、若し彼の人をして我が本狀を見せしむれば、即時に怖れ死に則ち壞れん。我れ今持戒の法を修せり、是の諸人等今來り此に至らば必ず我が身を貪り我が命を斷たんと。時に諸の惡人復た相ひ謂ふて曰く、我等山に入り多載を經歷するも未だ曾て此の是の如き形相を見ず、衆彩は燦たる光を交へ人目を耀す、若し此の皮を得ば當に王者に貢すべし、必ず重き賞を獲ん亦た快ならずやと。即ち利刀を持ち剝ぎ裂きて取らんと欲す。爾の時に龍王は慈忍力を以て怨恨を生ぜず亦た痛み惱を亡せば、即ち是の人攝受の想を生じ三毒即ち滅せんと。自ら其の心を慰め悋惜すべからず、怨對卒に至らば得脫すべからず。此の諸人等今我が身に於て其の賞貨を貪りて殺戮を行ふ、我れ寧ろ自ら死し返つて彼を害すること無けん、是の人をして現身に苦を受けしめざらんと。時に諸の惡人は力勇銳を奮ひ、利刀を執持し劙剖して去る。是の時に龍王復た自ら思惟すらく、若し人罪無くして他の爲に支解され、忍受して報ぜず怨恨を生ぜずば、當に知るべし此の人は是れ正士と爲さん。若し父母・兄弟・妻子に於て能く默忍する者は此れ貴とするに足らず。若し怨害心に於て報を加へず、默して忍受する者此れ乃ち難しと爲す。然るに我れ今他を利せんが爲の故に、當に默然として之を忍受すべし。我れ無始の生死よりこのかた身命を枉棄ること其の幾なるを知らず、未だ曾て特に一人に施さず、願くば未來世に於て當に是の人に與へ、無量の法財所願の如く滿さしめんと。是の時に龍王旣に剝れ已りて、遍く體より出血し痛苦

堪え難く、身を擧げて顫ひ動かし自ら持つこと能はず。復た無量百千の小蟲有り、其の身血を聞ぎ悉く來り唼食す。龍王乃ち曰く、此の小蟲等我を食し食するもの願くば當に來世にをいて汝に法食を施すべしと。爾の時に龍王身に楚痛を受けたり。諸龍覩て皆悲しき惱を生じき。王卽ち誓ひて言く。若し我れ當來に成佛を得ば我が身の皮は頃に故の如くなることを得せしめよと。是の願を作し已りて自然に平復せり。彼の諸の龍屬は大歡喜を生じたりき。是れ菩薩が惡道の中に於て慈忍力に住せんが爲に淨戒を堅く持つ爲に此の若きなり。

## 慈力王刺身血施五夜叉緣起第八

爾の時に世尊は舍衞國・祇洹精舍に在して坐夏安居したまひける。時に阿難陀は日の中分に於て食し畢り鉢を收め、諸の比丘と共に林間に詣り經行往來したるのち宴坐消息し、乃ち相ひ議して曰く、今佛世尊世に出興したまふ、甚だ奇特にして第一希有と爲す、諸の衆生に於て饒益したまふ所多し。今此の上首たる憍陳如等の五大比丘は最初に佛に遇ひ、成等正覺の鹿野苑に趣き四諦の法を說きたまふに先に悟り解することを得たるは何の善本を種し何の因緣有りてか初轉法輪に便ち能く悟入し、始めて法の鼓を擊ちたまひしに先に聞くことを得たるや。地神涌出して虛空神に報じ、已に至りて諸天皆作證を爲し、憍陳如已に了解を得たりと謂ひ是の念を作し已りて卽ち座より起ち、具に上の事を以て世尊に白しけり。是の時に如來は阿難に語りて曰はく、汝の問ふ所は因緣無きに非ず、我れ往昔彼を憐愍するが故に、曾て身血を刺し其の命を濟ひ活し、飢渴を除かしめ安樂を得せしむ。此の因緣を以て此の生中に於て彼より法を聞き悟解を得たるなり。尊者阿難復た佛に白して言く、願くば其の事を以て未だ聞かざることを開示し、彼の衆會の心をして泰然たることを得せしめたり。佛は阿難に告げたまはく、乃ち往古の世無量阿僧祇を經たる劫、此の閻浮提に一國王有

り、其の名を慈力といふ、大名稱有りて福智深く廣く、相貌端嚴にして威神匹ぶこと罕なり。八萬四千の小國統領し、后妃眷屬其の數十千あり、二萬の臣佐と共に政事を治む、彼の慈力王は久しく先佛に遇ひ衆の善本を植ゑ、樂しみて慈行を修し仁恕和平なり、諸の衆生に於て之を施し快樂し。復た悲心を起して貧窶を矜恤し、苦の衆生有れば皆拯拔を蒙る。復た喜心を生じ賢者を崇め重じ常に愛語を以て普く忻悅せしめ。復た捨心を起して喜慍を生ぜず、內外の財に於て慳悋無く、等しく衆生を視ること一子の如し。是の如く四平等の行を修作し、多劫の中に於て未だ嘗て懈廢せず。復た十善を以て臣庶を誘掖し、各〻遵承して淸潔を嚴持し、國土安泰にして相ひ慶せざる靡し。諸の疫鬼及び五夜叉有り、常に血を噉り氣觸るれば人を惱せり、彼に由りて皆十善の行を修し、身・語・意を淨め衆殃消殄せん。諸天善神は常に守護を爲し、設ひ邪魅諸惡鬼神有り、損害を懷くと雖も便を得ざらん。時に五夜叉來り王の所に詣り、咸此の言を作さく、我等の徒屬人の血氣を仰ぎて全く軀命を得たり、王の敎導に由り一切の人民皆十善を修す、我が輩此れより食する所を得ず、飢渴頓乏して活を求めん路無し。大王の慈德は諸の苦惱を救はる、獨り我が曹に於て恩惠を施さるやと。王是の說を聞き極めて傷み之を愍み、卽ち自ら思惟すらく、夜叉の徒は唯だ人の血を飮む、何の方計を作してか其の求むる所を滿さんや、當に我が身を破りて能く彼を濟ふべしと、乃ち五處を刺して血卽ち迸り流る。時に五夜叉各〻器を持ちて至り之を取りて飮み、旣に飽き且つ喜ぶ。王乃ち語りて曰く、我れ身血を以て汝の命を救ふ、若し充足せば吾れ希ふ所無し。唯だ十善を修し則ち報恩と爲さん、願くば未來世に我れ佛と成らん時、最初に說法して先づ汝等を度せん。甘露味を以て汝の三毒を除き、諸欲飢渴をして淸淨なることを得せしめんと。佛は阿難に告げたまはく、往昔を知らんと欲せば慈力王とは豈に異人ならんや、我が身是れなり。五夜叉とは今此の會中の憍陳如等の五比丘是れなり。我が宿昔の本願力に依るが故に、今成佛を得鹿野苑の初轉法輪に於て、最も先

に悟解し、苦際を盡すことを得、阿羅漢を成ぜり。是の時始めて佛法僧寶差別の名字世間に出現せり、時に諸の大衆は佛の說きたまふ所を聞き、皆大に歡喜して禮を作して退きぬ。

## 開示少施正因功能緣起第九

佛舍衛國・祇陀林・給孤獨精舍に在して、大比丘衆一千二百五十人と倶なりき。是の時國中に一商主有り五百人と與に巨舶に汎し、大海に入り諸の珍寶を採らんと欲す。時に彼の商主は淨き信心を發し、佛僧に飯に福を祈り祐を保たんと欲し、前の諸佛の所にをいて誠を致し勸請したてまつる。如來知り已り默然として之を許したまふ。其の住處に於て明旦食を設け、其の甘美を盡し虔みて供養を伸ぶ、食畢り座を敷く、佛爲に說法し布施行を讚めたまひしかば、感ずる所意の如く心田倶に勝れ因少く果多し。商主法を聞き心開け悟り解し、禮を作し右に旋りて一面に住立す。爾時に世尊は商主に謂ふて曰く、大海に入らんと欲せば彼は險難多し、必ず歸依の緣を須ひ三寶を念じ、五戒を受持し優婆塞と作り、所願を遂げ安隱にして還るべし。時に彼の商主は佛の說法を聞き、勸懇に頂奉し求めて五戒を受け、佛は諦に聽き善く之を思念せしむ。其の五とは何、一には不殺生、二には不偸盜、三には不邪欲、四には不妄語、五には不飲酒、是を五戒と名く。汝當に奉持して其の形壽を盡し、毀犯することを得ざるを優婆塞と名く、由て彼の商主は宿に德本を植ゑ、聰慧明達にして能く風波善惡の候を察し、衆商勸請し以て導師と爲し、其の人を尊尚し稱して賢者と爲し、乃ち吉日を擇び粮を聚め薪を積み、諸の商人を集めて共に大海に入る。行くこと將に數日にして風濤亘り起る。海神身を變じて一夜叉と爲る、其の狀醜惡にして形色靑黑、口に利き牙を出し牙の端に火現る。彼より涌出して船を挽きて行かず、賈客に問ふて曰く、汝曾て世間を見畏るべきもの我に過ぎたるものあらずやと。是の時賢者は其の怪しき狀を覩て、但だ一心に緣じて三寶を念じ、

佛の加持に由りて即ち恐怖を除かんと、聲を厲し對へて曰く、我も亦た曾て見る、更に極惡汝より數倍過ぎたるものありきと。神問ふ誰れぞや、賢者對へて曰く、世に愚人有り常に不善を行ひ、十惡を造作し邪見に沒在し、後ち地獄に墮ち苦の萬端を受け、獄卒羅刹は諸の罪人を取り種々に治罰し、或は斲ち或は斫り或は擣き或は磨し、其の身を分折して百千分と作し、刀山・劍林・火車・爐煨・塞氷・沸屎・一切備に受く、此の如き苦楚は千萬劫を經たり。此は之れ畏るべきこと汝より劇甚なりと。神乃ち默然として身を隱して去る。漸次前進して復た數日を經たり。海神復た一人に變作し身極めて甚だ羸瘦し、皮骨相ひ連り氣息喘ぎ迫り、俯して船に近づき商人に問ふて曰く、汝曾て世間に人有り我より瘦せたる類のものを見ずやと。賢者對へて曰く、更に枯瘁せるもの復た汝より過ぎたるもの有りと。神曰く誰ぞや。賢者對へて曰く、愚癡の人有り心性弊惡にして慳貪嫉妬布施することを知らず、後ち餓鬼に墮ち頭太山の如く其の咽は針の如し。頭髮髼亂して形容燋黑し、長き劫のあいだ飲食の名すら聞かず、是の如く羸瘦極めて更に汝より過ぎたり。海神船を放ち身を隱して去る。漸次前進し復た數日を經たり。海神復た變じて一丈夫と作り、形容年少にして極めて甚だ端正なり、涌出して船を挽き商人に問ふて曰く、汝曾て年少の色力我に類するもの有るを見るや不やと。賢者對へて曰く、汝の形質の如く乃ち百千倍勝り過ぎたるもの有りと。神問ふ誰ぞや。賢者對へて曰く、世に智人有り十善を奉行し、身・口・意の業をして常に清淨ならしめ、三寶を篤く信じ隨時供養せり。其の人命終して天上に生ずることを得、顏貌端正にして世に倫匹無し、汝が形儀を以て彼に方すれば、獼猴を瞎し其れを仙女に比するが若し。時に彼の海神是の說を聞き已り默爾として自ら愧ぢ、而も是の念を作さく、今此の商主は識智博達にして善く報應を談じ其の辯斯の如し。一近事を以て試驗して彼に問ふらく、即ち右手を以て水一掬を取り、乃ち之に問ふて曰く、掬中の水多きや海水多きやと。賢者對へて曰く、掬中の水多く海水少しと爲す。神復た詰りて曰く、目擊

して見るべし、汝今說く所誡に信を爲し難しと。賢者答へて曰く、斯の言は眞實決定にして謬らず。此れ世智の了知する所に非ず、何を以て之を明すや、海水多しと雖も必ず枯涸有り。劫盡きんと欲する時大千倶に壞れ、須彌亘海磨滅して餘り無けん。此の證を以て海水も必ず竭きんことを知る。若し復た有る人淨き信心を以て一掬の水を持ちて佛に供養し、或は衆生に施し、或は父母に奉り、或は乞丐者乃至禽畜の類にまで。此は之れ少善正因の功能にして、塵劫を經るも窮盡すること能はず。是の故に當に知るべし、海水少しと爲し掬水多しと爲すなりと。時に彼の海神心大に歡喜し、即ち種々奇異の珍寶を以て以て賢者に贈り、諸の珍玩を寄せて佛及び僧に施せり。時に諸の賈客は各々國に還ることを得て、咸佛の所に詣でゝ稽首し禮を作し、彼の海神寄する所の物及び己が施す所を持ち、長跪合掌して佛に白して言さく。世尊よ、幸に如來の遙に慈護を垂れたまふことを蒙り、海に入りて難を免れ寶を獲て家に還る。咸佛恩を荷ふ、願くば弟子と爲らんと。佛善來と言へば、苾芻の相を具し、諸の有結を盡し阿羅漢と成りにけり。

# 菩薩本生鬘論卷第三

# 卷の第四

## 如來具智不嫉他善緣起第十

爾の時に世尊は諸の弟子大比丘衆と與に遊化して王舍大城に依止したまひき。是の時に如來は座より而も起ち、虛空を步蹈し希有の事を現じ、足下に千輻輪相を顯し出し、一一の華に八萬四千の微妙なる鬚葉を出したまひ、次第に莊嚴して遍く十方無量の世界を覆ひたまふ。是の諸の華の上に各〻無量微妙數の佛有り、足下に皆千輻輪の文を現したまふ。是の時會中の淨飯父王は是の事を見已りて心大に歡喜し、五體を地に投じ佛に向ひて禮を作したまひ、即時に阿那含果を證得したまへり。

時に諸の大衆は佛の神變を覩たてまつり、咸共に合掌して白して言さく。世尊よ、我等今見たてまつる所の十方無數の諸佛は諦に觀察し已りて了知すること能はず、何者か眞佛にして、何者か化佛なりやと。時に彼の如來は大悲心を以て衆會を愍念し、即ち之に語りて曰く、諸佛如來は空寂處に入りたまひ解脫・三昧・隨意自在なり。眞化の相は自ら汝の心を召したまふ。所以は若何、佛心は本來湛然として空寂なり、復た解脫光明王定に依りたまへり、此の定力に由りて無邊の身を化したまふ、無邊身とは是れ薩婆若なり、薩婆若とは無著定と名く、無著定とは如來の行じたまふ所にして、或は乞食を現じ、或は復た經行したまふ。是の二法を以て衆生を饒益したまふ。又佛の在世に善男子及び善女人有りて佛步の千輻輪相を見たてまつることを得て、深心に禮を作し供養稱讚し奉り、能く千劫極重の惡業を滅したりき。若し佛滅後に於て四部の弟子正受に住し、佛の行步を想ひ恭敬供養したてまつらば、亦た能く千劫の罪を銷滅せん、設ひ想念せずとも、或は佛跡及び行像を覩ば分に隨ひて供養し隨喜の心を生ぜば獲る所の福報窮盡すべからざるべし。佛は阿難に告げた

まはく、我れ往昔曠大の劫より來、淨き信心を以て一切を恭敬し、彼の修したまふ所の殊勝なる妙行を見たてまつり、常に稱讃を生じ增益せしめ、乃至微細なる一毫の福すら、未だ嘗て心を起して他の善を嫉まず、是の故に我れ今斯の福報を獲たるなり。復た次に阿難よ、我が滅度の後ち若し諸の弟子佛像を造らんと欲せば、當に佛像をして具足圓滿ならしむべし、身光を現攝し化佛圍繞し、及び足下の千輻輪文を繪き、未來世の一切衆生をして此の相を覩せしめ已り廣大なる吉祥如意を得せしめよ、積集の重障は消滅して餘り無からん。汝等比丘よ當に勤めて思惟し理の如くして作すべし。佛は是を說き已りて復た本の座に還りたまひき。時に淨飯王即ち座より起ち白して言はく、世尊よ、今佛出世したまひ何の利事有りてか、能く衆生をして安隱の樂を得せしめたまふや。是の時に如來即ち父王に語りたまはく、舍衛城中須達長者は一老母有り。毘低羅と名く、家業を勤謹し常に信用せられ、出納取與一切之を委ねたり。忽ち一日に於て長者は佛及び諸の比丘を請ひ舍に就て供養したてまつりしに、病比丘ありて求索する所多かりき。老母慳惜にして瞋恚を生じ意與ふることを欲せずして此の言を作さく、我が大長者は沙門の術を受けたるか、彼の諸の乞士は多く求めて厭くこと無し、何道の有ぞや。復た惡言を發すらく、何の時か佛の名を聞かず法の名を聞かず剃髮染衣の人を見ざることを得べきやと。是の如き惡聲は一人聞き已りて展轉して之を傳へ舍衛城に遍し。是の時に王后末利夫人は是かる毀呰を聞き深く歎き訝を生じ、云何か須達は仁惠周く普し、好き蓮華を人見んと樂ふ所の如し。返つて毒蛇の守護する所と爲らんのみと。是の說を作し已りて乃ち長者に勅し、汝が婦を遣し來れ、吾れ與に語らんと欲すと、婦到りたれば坐を命じ、即ち之れに謂ふて曰く、汝が家の老婢は常に惡言を以て三寶を毀謗し、乃至名字すら聞くを欲せずと願へり、何ぞ擯斥せずして亦た快からずやと。時に長者の婦は夫人に白して言さく、佛日世に出で〻癡の暗を破り除き、一切衆生を潤益せらる〻所多し。央掘摩羅は大惡の人千人を殺害し指を取り鬘を爲せしも、

佛能く調伏して道心を發さしめたまへり。此の一老婦何ぞ慮を勞するに足らんや。夫人の說きたまふを聞き心大に歡喜し、我れ當に佛及び比丘衆を請すべしとて、宮中を嚴飾し明日供養し奉らんとす、汝婢を遣し來れ斯れを驗すべしと。是の時に長者卽ち寶餅を以て諸珍摩尼珠等を盛り滿し、使婢に齎し獻じ供養を助興なしにける。末利夫人は遙に婢の來れるを見て、此の邪見の人當に佛の化を崇るべし、若し此の人佛化に從へらるれば、我れ必ず廣大なる法利を獲得せんと。

爾の時に如來は正門より入りたまひ、難陀左に在りて阿難は右に居し、羅睺羅は佛の後に從ふ。老母は佛を見たてまつり心驚き毛竪ち、卽時に退かんと欲し狗の竇より出づ、老母扇を以て自ら面を掩ひしに、佛其の前に在して扇をして鏡の如くならしめたまふ、廻顧し東視すれば東方に佛有り、乃至遍く南西北方四維上下を觀るに皆悉く佛有り、手を以て面を覆ふに十指の間に於て皆化佛有り、老母目を合し眼を開けば還つて見る、十方界に滿ちなん皆是れ化佛なり。此の相を現じたまふ時舍衞城中に二十五の旃陀羅女、五十の異見婆羅門女、幷に餘の種類なる五百の女人有り、先に邪宗に著して佛法を信ぜざりしが、如來彼の老母の爲に虛空に足步し無數の身を現じたまふを見て、心大に歡喜して邪見の網を裂き、頭面に佛世尊の足を頂禮したてまつりける。爾の時に世尊は梵音聲を以て諸女に謂ふて言く、汝今我の名字を稱すべし、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛と、我が名を稱し我が身相を觀ずるに由りて、卽ち八十億劫生死の罪を解脫することを得、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしめたりき。時に彼の老母は暫く佛を見たてまつることを得、疾走して舍に還り大家に白して言く、我れ今日に於て斯の惡對に遇ふ、沙門瞿曇は王宮の門に在り、多衆の前にて諸の妖術を現し、身は金山の如く目は青蓮に〔一〕喩ふべく、百億の光有りて具に狀すべからず。沙門は幻を善くすること比無し。大家の少年は喜びて見るべからずと、是の說を作し已りて木籠の中に入り、多くの牛皮を以て其の上を覆ひ、黑暗の處に於て潛み避けて臥せり。時に佛世尊は精舍に旋らんと欲

【一】踰とあるも恐くは喩の誤ならん、然らざれば意味通ぜざればなり。

したまひしに、末利夫人前みて佛に白して言さく、暫く慈光を屈し老母を攝化したまへと。佛の言はく、彼の人の罪根深重なれば我に於て緣無し、羅睺羅と曩に善友たり。今日如來は空に乘りて行かん、其れが爲に多劫の重障を滅除せよと。乃ち祇園に還りたまひて羅睺羅を召し、汝は須達優婆塞の舍に詣りて彼の老母を度せよと。諸の大弟子千二百人は咸隨喜を生じ、願くば同じく往詣せんと。爾の時に尊者羅睺羅は佛の威神を承けて如意定に入り、佛を禮し畢りて右に繞ること七匝し、卽ち自ら身を變じて轉輪王と作り、一千の比丘化して千子と爲り、七寶・四兵皆悉く具足せり。時に金輪寶は蓮華臺に乘りて須達の家に詣り空中にして住す。時に彼の守宅夜叉靈祇高聲に唱へて言く、聖王世に出でゝ諸の惡人を擯し善法を宣揚せんと。老母聞き已りて心大に歡喜し、聖王出現せば餘は求むる所無し、如意珠有り願くば今獲得せんことを。是の時に聖王大寶聲に乘り鐘を椎き鼓を擊ち長者の家に至る。老母聞き已りて木籠より出で、頭面して禮を作し其の功德を讚む。今聖王に遇ひ善法をもて攝化せらる、必ず當に沙門の惑す所と爲らざるべしと。王卽ち主藏臣を遣し彼の女の所に往き語りて言く、姊妹よ、汝宿福有りて王者の瑞に應じ、今尊奉し玉女寶と爲さんと欲すと。老母答へて言く、我が身卑賤にして猶ほ糞穢の如し、王の暫問を蒙り喜慶限り無し、何ぞ當に玉女寶と爲るに堪任せんやと。爾の時に聖王須達に告げて言く、卿が家の老女は衆相具足せり、吾れ今以て玉女寶に充てんと欲せりと。長者對へて曰く、唯だ命是れ從ふのみ。老婢之を聞きて喜び自ら已まず。王衆寶をして其の面を照さしむるに端正なること願の如くならしむ、願くば唯だ愧を增さば幸のみ。卽ち是の念を作さく、諸の沙門輩自ら有道と云ひ、矜に言論に馳せ一も効驗無し、聖王の出世は物を利すること宏廣なり。我が衰容をして玉女寶となさしめたまふ。五體を地に投じ虔で禮謝を伸ぶ。時に主藏臣は王の敎令を宣べ、十善法を修し其の心を調伏せり。是の時に尊者乃ち本身に復せしかば、老女開悟せり。諸の大衆を見て悲泣して言く、佛法は淸淨にして衆生を捨

てず、我が弊惡の如きすら猶尙度せらると、過を悔ひ自ら責め前咎を懺滌し、五戒を受けんことを求む。時に彼の尊者爲に三歸及び五戒の法を說きしかば、老女領解して心安く泰然たり。未だ頭を舉げざるの頃に須陀洹果を證し。地神涌出して須達に告げて言く、善い哉長者よ、邪見の網を裂け、如來の出世は正しく此れを爲すのみなり。時羅睺羅は此の老母を將ひて祇陀林に詣で、到り已りて佛を見たてまつり、歡喜し禮を作し懺悔發露し、願くば佛教に依りて出家することを得んと。佛勅して憍曇彌の所に往詣し、精進修習し未だ甞て懈廢せず、好き白髭の易りて染色と爲るが如く、應に時に阿羅漢道を證得すべし。

## 佛爲病比丘灌頂獲安緣起第十一

爾の時に世尊は王舍城竹林精舍に住したまひし時、一比丘有り身に惡瘡を患ひ、形體の周遍に膿血交ゝ流れ、衆の見るを惡む所にして人親近せず、疎弊なる低き小房の下に移し置かれたり。世尊は知り已り卽ち神力を以て諸の大衆を蔽ひ知る者無からしめ、如來獨り病比丘の所に往き、善き言をもて慰め喩し水を須ひて之を洗はしめたまひき。時に帝釋天主は諸の天子と與に善法堂に在りて政治を評議したまひけるが、佛の威神を以て加被して知らしめ、無量百千の眷屬を以て天の妓樂を作し前後に圍繞し、空よりして下り佛の所に來詣し、問訊して勞を慰め頭面をもて足を禮し、手には衆寶をもつて成る所の澡缾を持ちて香水を貯へ滿し、世尊を迎へ奉り一面に佇立せり。爾時に如來卽ち百福莊嚴の臂を舒べ、五指の端に於て大光明を放ち、遠く諸天を召したまふに皆悉く雲集せり。及び頂門に於て復た淨き光を放ち病比丘を照したまへば、光を蒙り身に觸るゝ所の苦卽ち愈え、瘡潰の膿血悉く淸淨なることを得、合掌歸命して哀を求めて發露し、願くば佛慈愍して我が重罪を滅せしめたまへ。時に天帝釋は前の寶缾を以て長く跪きて獻じ奉る。世尊受け已りて右手に

水を注めて比丘の頂に灌き、復た左手を以て其の身を按摩したまひける、時に病比丘所染の沈痾は如來の手に隨ひて卽ち平復することを得たり、平復することを得已りて歡喜すること量り無く、志心に稱念すらく南無釋迦牟尼、南無大慈悲父、南無最勝醫王よ、我をして今日身の病瘉ゆることを得せしめたまひぬ、唯願くば如來の本願力を以て哀憐攝受し、法藥を施與し我が心の病を袪にし、有らゆる重障を消滅し餘無からしめたまへと。爾の時に佛は彼の比丘に告げて曰はく、我れ今汝が昔の深き恩を報ぜんが爲に、復た苦・集・滅・道の四聖諦の法を開演せんが爲に、相を示し勸修し圓滿を作證したまへば、卽時に阿羅漢道を獲得し、三明六通と八解脫とを具しにき。時に天帝釋及び諸の大衆は、是の說を聞き已りて皆疑網に墮ちぬ、今如來枉て神德を勞し、病比丘の瘡潰膿血を洗ひたまへり。復た言はく、我れ今汝が昔の深恩を報ぜんが爲に、願くば時の會の爲に分別して解說したまへ。佛言はく、天主よ、乃往古昔無量世の時、一聚落有り名けて增廣と曰ふ、地唯だ沃壤にして民富樂多し、其の中に止る所は皆上種姓のみ、一耆年を尊び斷事者と爲せり。未だ久しからずして一老優婆塞有り、忽ち惡人の橫に相ひ謀害を爲られ、將に囚執に付せられんとし、衆は無辜を念ぜり、斷事の前に詣りしに明察して釋放せられたり。其の危難に當りて卽ち免れ脫することを得たり。是の故に我れ今是の如き說を作すなり。天帝當に知るべし、昔の斷事せし者は豈に異人ならんや病比丘なり。彼の優婆塞の難に臨み免ることを獲たるは今此の會中の我身是れなり。是の故に菩薩は無量の世を經るも、而も小恩に於て常に大報を思ひ、乃至佛と成りても未だ曾て廢忘したまはざるなり。時に天帝釋は佛の說を聞き已りて心大に歡喜す。諸の來れる大衆も天の妓樂を作し、各〻所止に還り佛を禮して退きにけり。

## 稱念三寶功德緣起第十二

昔者にをいて如來は世に出現し、乃ち父王及び諸の大衆の爲に　觀佛三昧法門を演說したまひける。如來は三十二相八十種好を具足し、黃金色なる無量の光明を作したまふ。是の時會中の五百の釋種は佛の身相を觀たてまつるに猶灰人の羸せたる婆羅門の若し。見已りて號哭し自の頭髮を拔き、身を舉げて地に投じ口鼻より血を吐く。如來之を見乃ち安慰して曰く、汝號哭すること勿れ吾れ汝が爲に說かん。過去に佛有り毘婆尸と名く、涅槃に入りたまひし後ち像法の中に於て、一長者有り名けて月德と曰ふ、五百の子有り聰明にして多智なり、世間の經籍を該練せざる無し。其の父の長者は三寶を信奉し、常に諸の子と與に佛法の義を說くも、諸の子は邪見にして觀るに信心無し。後の時にをいて諸の子は同じく重病に遇ふ。父子の前に到り泣き淚し合掌して諸の子に語りて言く、汝等邪見にして佛法を信ぜず、今無常の利刀の爲に割き切られ、汝が命は須臾にして何に憑りてか依怙せんや。今如來有り毘婆尸と名く、汝志心に名號を稱念すべし。諸の子聞き已り卽ち敎ふる所に依りて南無佛と稱し法及び僧と稱す、稱し已りて命終せり。佛を念ずるに由るが故に卽ち四天王天に生ずることを得、天中に壽盡きたり。彼の邪見なる昔の因緣に由るが故に還りて地獄に墮つ、獄卒羅刹は熱鐵の叉を以て其の眼目を刺し、是の苦惱を受けて父の敎へし所を憶ひ南無佛と稱す。是を以て地獄より免ることを得て出で、人中の貧窮なる下賤に生ずることを得たり。後ち式棄如來有りて世に出でたまふに亦た値遇することを得たるも、但だ名を聞くことを得るのみにして佛形を觀たてまつらず。以て毘舍浮佛・拘留孫佛・拘那含牟尼佛・迦攝波佛に至る、是の如く六佛次第に世に出でたまひしも、但だ名を聞くことを得るも皆觀たてまつらざりき。六佛の名を聞くことを得るに由るを以ての故に、今我と同じく釋種に生ぜり。我の身の色は閻浮金の如く、汝は灰色の羸せたる婆羅門と見るは、皆往昔に於て佛を輕しみ毀るに因り、深く邪見に著し斯の重障を招く。汝今過去佛の名を稱すべし、亦た我が名、彌勒佛の名、汝が父の名等を稱すべし。稱し已りて禮を作し、

及び大衆大德僧の前に向ひ、五體を地に投じ邪見の罪を懺悔發露せよと。諸の人は敎を受けて懺悔し畢りしかば、宿殃消散し三業淸淨となり、佛の身相を見たてまつるに黃金の色を作せり。巍巍堂々として須彌山の如く、三十二相八十種好にして無量の光明あり、歡喜踊躍して初果を證することを得たり。佛を求めて出家し漸次に阿羅漢果を證得することを得、三明・六通にして八解脫を具しぬ。佛諸の比丘に告げたまはく、我が滅度の後ち若し我が名及び諸佛の名を稱せば、獲る所の福報無量無邊ならん。阿難よ、汝は如來の路行に在るを觀る時、能く大地をして高き處を下からしめ、下き處を高からしめ、高下の諸處悉く能く平正なり。佛履み涉り已りなば地相本の如く、一切の林木傾きて佛に側向し、樹神は身を現して曲躬禮敬す、佛經遊し已らば林木舊の如し。一切の丘陵坑坎堆阜穢惡不淨瓦礫荊棘皆悉く屛去し、掃酒淸潔にして衆の華は地に布き異香芬馥たり。又復た如來の足躡長陌なれば、無情の土木すら尙皆傾き奉ず、何に況や有情にして而も常に敬せざらんや。何を以ての故にといはゞ、我れ本菩薩の道を修行せし時、諸の有情に於て憍慢を生ぜず、謙下して承け迎へ忻悅を生ぜしめたり、是の善業を以て成佛を得たるなり。情・非情等佛の行きたまふ時に於ては、皆悉く傾側し低頭禮敬せり。我れ昔曾て廣大なる資產を以て、淨き心にて十方の衆僧に施し奉れり。是の緣を以ての故に我れ今成佛するも、所至の處廣博嚴淨なり。又我れ往昔諸の聖賢なる同梵行者に於ても、道路中に於ても平治酒掃し、房舍資具泥飾周く備れり。一切時に於て樂ひて佛道を求め、一切の衆生を利益し安樂し、所至の處は自然に淸淨なるなり。又彌盧山の高廣八萬四千由旬にして、大海の中に入るれば其の量亦た等しきも、及び鐵圍山の高さ十二萬八千由旬にして堅きこと金剛の若く破壞すべからざるも、如來涅槃の時に至らば傾側して佛に向ひ禮を作さゞる無し。若し迴避して傾側せざらんと欲する者は是の處有ること無けん。又佛如來の心淨く染を離れ、所行の處は足汚す所無く蟲蟻をも損ぜざるなり。佛は履を著けたまはざるに三種の因有り、一

は行人をして心に少欲なることを生ぜしめ、二には足下の千輻輪相を現じ、三には見るものをして心に歡喜を生ぜしめんとなり。又佛行きたまふ時其の足地を去ること四寸を離るゝに三種の因有り、一には地に蟲蟻有るを愍むが故に、二には地に生草有るを護るが故に、三には佛の神足を顯現したまふが故なり。汝等比丘よ、當に佛語の如く敎に依りて修行し苦際を盡すことを得よ。

## 造塔勝報緣起第十三

佛は阿難に告げたまはく、我れ今此の大衆の所に於て略して塔を造り得る所の功德を說かん、汝當に諦に聽き善く思ひ之を念ぜよ、假使ば四天下を以て中に滿ちなんあらゆる草木叢林は皆人身と爲り、彼の一一の人發心修行し、其の所證に隨ひ或は須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果、及び緣覺果を獲得する有り。時に長者有り淨き施の心を以て長き時に飲食・衣服・臥具・醫藥を供給し、其の形壽を盡すまで乏きところ無からしめ、滅度の後に至り一一復た爲に塔廟を起立し、繒蓋幡旛の廣大なるを嚴飾し、香華燈塗種々に供養すとせんか。阿難よ、是の人得る所の福報は寧ろ多しと爲すや不やと。甚だ多し世尊よ。佛の言はく、阿難よ、此の大長者は其の福を獲ると雖も猶限量有るがごとし。有る人の佛滅後に於て敬慕の心を以て一舍利を求めしに、至極微妙にして芥子の如き許なるに、塔を造り供養するに如ず、其の量は正しく一菴摩果に等しく、塔心の木堅く直きこと鍼の如し。上に露盤を施すこと猶棗葉の如く、中に佛像を安じ量穬麥に同じ。或は香或は燈分に隨ひて供養すとせんか。阿難よ、彼の長者所作の福行を以て、佛塔を修するに類せんに比を爲すべからず、要を以て之を言はゞ、若し塔を造るあらゆる勝報を以て、分ちて百分と爲すも其の一に及ばず。千萬億分も亦た其の一に及ばず、乃至算數譬喩も知ること能はざる所なり。阿難よ、當に知るべし如來は塵沙劫に於て積習熏修したまふ五分法身出生の功德とは、所謂る戒分・定分・慧分・解脫分・解脫

知見分・四無量心・六波羅蜜・自利・利他・難行・苦行・不可思議神通願力にして、世、出世間に勝れ能ふ者無しとは、所以は何、佛は無量無邊なる眞實の慧を成就するが故なり。阿難よ、一切の如來は昔の因地に在りて、衆生界の自性清淨を知り、彼の客塵の煩惱の覆ふ所と爲す。彼は畢竟して染汚も及ばず、是の故に如來世に出興して、諸の衆生の爲に微妙の法を說き、諸の垢濁を除き解脫を得せしむるなり。

## 出家功德緣起第十四

佛世に在せし時、王舍城中に一長者有り、名を福增と曰ひ年百歲を過ぎ齒衰へ力屈せり、家中大小と無く厭を生ぜざるもの無し、出家を說くを聞きて心歡喜を生じ、功德無量にして譬喩も及ばず出家の利は須彌よりも高く巨海よりも深く虛空よりも廣し。然る所以は、出家に由るが故に方に佛と成ることを得ればなり。三世の諸佛にして未だ捨家出家に因りて成佛せざるもの有らざるなり。是の時に長者來りて佛の所に詣で出家を欲求し、佛の遊化に値ひ、即便ち往きて舍利弗の所に至れり。其の熟老を見て攝受爲られず。是の如く遍く五百羅漢に至りしも悉く度することを肯ぜず。時に彼の長者即ち寺を出で外にて聲を發し大に哭す。是に於て世尊後よりして至り、種々誨喩して其の心を悅ばさしむ。即ち目連に語り、其の出家を收めて與に其の戒を受けしめ、乃ち新學の小比丘の輩の爲に常に調戲を生じ之を嬈亂せられたり。便ち自ら水に溺れ身命を喪はんと欲す。目連は觀見し即ち神力を以て接して岸の上に置き、因に其の故を問はれしかば、具に上に說くが如し。此の人愚鈍瞋恚なること斯の若し。三途報應の怖を以て之を攝化せず、得道するに由無きなり。時に彼の目連は空に乘り行かんと欲し、乃ち專意袈裟の角を執らしめ、漸次に遊歷して大海の邊に到り、新に斃れたる端正の婦人有るを見る、便ち一蟲有り其の口より出で鼻より入る、復た眼より出でゝ

耳よりして入れり。目連見已りて之を捨てゝ去らんとす。弟子白して言く、此は是れ何人ぞや。師曰く、此は是れ舍衛城中の大商の婦なり。自ら顏貌を恃みて福業を修せず、夫の寵念を承けて一切を損害せしかば偕ひ行きて此に至り水に沒して終れるなり。海も屍を納めず漂ひ出でゝ岸に在り、猶身を愛するが故に此の蟲と作るのみ。後ち地獄に入りて諸の苦報を受けんと。漸次に前行するに一女人を見る、自ら大鑊水の滿ち火然ゆるに泥し、脫衣して中に入り皮肉各ゝ離れ骨を吹き外に在れば尋で復た形を成す。自ら其の肉を取りて之を噉食せり。福增師に白さく、此は是れ何人ぞや。師の曰く、舍衛城中に優婆塞有り、三寶を崇重し僧を請して供養し、常に美膳を造り婢を遣して之を送りしに、每に屛處に至り好を選びて先に食せり。大家察して汝は食を竊むこと無きやと問ひしに婢言く、比丘食し訖り殘有れば我に與ふ、我れ之を食することを得たり。若し我れ先に食するならば願くば後世に於て自ら身の肉を食せんと。是の因緣を以て先の[一]果報を受けて地獄に在るなり。次に復た前行せしに一骨山を見る、其の量高廣七百由旬にして其れは日光を障へ海の陰をして黑からしむ。是の時に目連此の山上に登りしに大肋骨有りて往來經行せり。福增は師に白さく、此れは何の骨山ぞや、汝知らんと欲せば卽ち是れ汝の故身の骨なり。福增聞き已りて身の毛恐れ聳ち惶怖して汗を流し和尙に白して言く、聞きたまへ我れ今は心未だ摧裂せず、願くば時に本末の因緣を說くことを爲せと。目連告げて曰く、生死は輪轉して邊際有ること無く、善惡業報の影響は差ふこと無けんと。昔し過去世此閻浮提に一聚落有り、民の物富み盛んなり。時に長者有り名を法增と曰ふ、宗族已來三寶を篤信し、好で仁惠を行ひ生命を傷けず、居人之を推し以て令長と爲す、數十年間民物安泰なり。咸其の德を賴み己の父の如くす。時に彼の令長或は閑暇に因りて其の博奕を習ふ、惡友便を得て之に親輔し、彼に授くるに邪說し其の政事を廢す。未だ久しからさるに境內は强惡恣横なり、按訟交ゝ擧げ刑罰中らず、忽ち一時吏の款賓を呈するに偶ひしが、適ゝ令長は、博奕に勝

【一】底本に受華報果とあるも華字恐くは贅字ならん。

たざるに値ひ、顧み覽るに暇無く盡く死に處せしめよと。來日乃ち諸の軍吏に問ふて曰く、罪人は何所ぞやと答ふるに戮し竟ることを以てす。令長聞き已り悶絶して地に躃れしかば水を洒ぎて乃ち蘇れり。涙を垂れて言く、親愛珍寶悉く皆此に住せよ、唯だ我れ一人獨り地獄に入らん、而して我れ今も率ひて人を殺し易し、當に知るべし卽ち是れ旃陀羅の類なり。是の念を作し已りて尋で便ち命終し、大海の中に生れ摩竭魚と作る、其の身長大にして七百由旬なり。佛言はく、目連よ。若し諸の官屬自ら威勢を恃み、枉げて民物を尅し殺戮無數なるは命終して多く摩竭大魚に墮ち、諸の小蟲の爲に匝り其の軀を食はれ、身痒山を指し蟲血は海を汚し、將に百里の水に流れ皆紅赤なり、彼の魚一眠すれば百歲を經、睡より起き水を吸へば大河に注ぐが如し、爾の時に適ゝ衆商有り寶を採り魚の口を張るに値ひ、船の趣くこと飛ぶが如く將に魚腹に入らんとす、賈人悲號して一時に同聲に南無佛と稱せり。魚は佛の名を聞き口を閉ぢしかば水止む。佛の慈護に由りて衆商は活くることを得たり。時に摩竭魚は渴を忍びて死せり。諸の夜叉羅刹水神有り競ふて魚の身を拽き出して海岸に置きぬ。爾の時に尊者大目乾連は其の弟子なる福增比丘を將ひ、遊行畢りて還り佛所に至り、頭面に禮を作し歡喜無量なり、深く生死無常苦空を悟り、諸の有結を盡くし羅漢果を得たりける。

# 菩薩本生鬘論卷第四

# 卷の第五

〔菩薩施行莊嚴尊者護國本生義邊十一〕

彼の如く縛力の性用は廣大なり、勝義の力用は漏の邊際を盡し、善根發生して彼の倒を遠離す。如理寂靜にして損減有ること無く、實因義利の相狀は鮮潔にして崇修を熾盛にし供養を增上せん。是の如く聚落の處々にをいて彼々の變易を增修し、勝義行の邊は和合にして無諍なり、施は無顚倒にして覺悟は無諍なり。是の如く中に處すれば二邊を遠離せん、善い哉自性和合せば是の如し、彼の布施の邊は諸天の愛樂にして、長夜に精進し勝義を圓滿せん。有情の智慧は世尊に因りて生ず、是の如くに色相は增上圓滿するなり。無諍を運ぶ施は廣大清淨にして如來の色相は眞實最上なり。

菩薩施行莊嚴尊者護國本生義邊十一

〔菩薩布施莊嚴尊者護國往梵天生本生義邊十二〕

實に丈夫の相は和合して變無し、所謂隨順して聽聞するは菩薩の行なり。發起して隨順する自ら所得の法にして寂靜無變なり。廣大な梵行を圓滿に修作すとは、彼の處は無生の善業を修し、甚深を聽聞して妙行を增上し、敎誨を了知し之の事を修崇するなり。聽聞は根本自性を成就し、過去に住して寂靜を增上し、有情を調伏して重任を擔ひ負ひ、德行は眞實にして發語は誠諦なり。瞋恚を增上せしむる有情も其の心生ぜず。又是の處有り、勝義の法は瞋恚の生ずることを作すこと無し。是の如く戒德を學ぶの人有るも、遷變する苦の受は止息すること有ること無けん。輪迴は自性の邊際なることを了知すれば、布施を恭ひ奉じ果を希ひ欲すること無し。寂靜にして安樂な

れば圓滿に依止し、名相自在なれば遷變を止息す。智慧を上と爲すとは、是の處は有學は煩惱を出離せり、是の如き法師は眞實に自在の因を出生し、顚倒の義無く誠實の語言なり。無相の意は圓滿にして惡を息め、邊際有ること無く顚倒の法盡くるなり。是の時彼の煩惱障は寂然として靜止し、遠離の語言は眞實の語言なり。云何してか童女の苦邊を遠離するや。染傾動せずば有學の遠離なり。云何なるか染の本なりや、貪欲勢力盛にして止むべからず、增上の遷變染障の盡くるを求むれば勝義無倒なり。室女の苦受・繫縛是の如し。寂靜の因を行じ無諍を了知せん。最上の布施は無縛を了知し、寂然の修作は倒の言說を離る。梵天の衆は增上の議論圓滿にして見性想應の智慧は處とし了らざること無し。有學は遠離せる戒和尚なることを得、力能く彼の顚倒の因を損壞し、亦た能く論を造り教授阿闍梨を發生し戒師等の軌範を證し、圓滿なる實因は乃ち彼の如きに至る。無倒の言論は彼の諍增上し、善淨なる止息は能く染縛を斷ず。是の如き空性方便は出離・纏縛の性淨きことを了知す。云何ぞ業用を了達すとは、智慧が無遷變の法を了知すれば出世間と名く。一切の塔廟は梵天の福因なりと了知すること是の如し。此の眞實の因は界性を增上して瞋相應無し、自處清淨にして希求すること是の如し。此の言を聽受せば廕覆は蓋の如し、修習行を求めて師友の教誨に依仗す、是の如きは賢善の人に依るなり、卒暴の因無く勝義の行を修し、誠實なること是の如きは難得を了知するなり。菩薩は靜住すと、是の處は具足せり。菩薩は麁重にして顚倒の行無く、縛染の意無し。獨覺の行を離れ暗鈍[一]の慢を出づるなり。云何ぞ空相の如き縛は廣大にして雲の如き凡夫は出で難し。甚深の法は殊勝にして得難く、想念を發生して思惟も及ばざるなり。菩薩の誠言は示教して方に入らん、大梵衆有り我れ其の中に生れんとて。遠離の人は彼の無災禍に趣かん、此の誠因に施設の相貌有り、顚倒を求むること無く十善の行を行はゞ、憂苦の縛無き處に染有ること無けん。「自體鮮潔ならば清淨の報を獲ん」と、是の處は、菩薩の語言は戒清涼の義を教

【一】底本は暗純とぜるも暗鈍の誤ならん然らざれば意味通ぜざるなり。

授し、靜住無倒は虚行の相を豁き、師示を承けて空寂の相を論ずるなり。云何ぞ有情は師より十善の業因を授くるを獲得し、有・空・斷・常の四邊を遠離するなり。云何ぞ無因の遠離とは、世間の因有り顚倒業と名く。有情は無智にして倒の本を了らず、我慢を造作し眼窺ひ視ること無く、顚倒の瀑流は流轉を增長し、變動增修して我見を發生し、勝義の意無く空しく我倒を修し、煩惱諍訟暗鈍修作す、善く彼の染を見て自ら靜なること是の如し。自身も清淨の種族にして慢無し。薩埵は變貪無く增長を受け、修作の慧は罪業無く自ら處す。布施は無因を修せざること是の如し。菩薩行は善淨の意を了り、軌範師は發言して教授を爲す。修を求めて意に我慢の性增すこと無し。是の如き義無くんば別の德行の義無く、根本を求むること無くんば言論可ならず。自ら增上し遷變を爲すは我に在り、顚倒の想を修すれば瞋恚止むこと無く、圓滿なるも實無きは彼の幻を了知するなり。善根を發生して邪法を遠離すとは、是の處は軌範師有りて顚倒を盡し言說を了解するなり。善哉善男子よ、大婆羅門は增上の色相にして寂靜圓滿の行を希求するなり。云何ぞ善靜の法道を修作すとは、無相は修すべく聽聞は了知し、清淨の義邊は圓滿に進修するなり。善男子は自ら煩惱無し、是の如き寂靜は殊勝の義利にして安樂は聽聞止息修すべし。彼の天の自在は實に大丈夫和合の相貌なるも、別に力用無く寂然として獲る所なり。是の如き因の相は聖力の圓滿なればなり。

二小乘聲聞の因行、世間の相貌語言の增上を遠離せよ。

## 菩薩布施莊嚴尊者護國往梵天生本生義邊十二

〔菩薩布施莊嚴鬘飾尊者護國本生之事次第十三〕

彼れ若し煩惱に纏縛するも眞實に出世道を修せば自在有力にして、所謂眞實の勝義を隨順聽聞し、智慧は世間の義利を了知し、根本の我慢を遠離するなり。菩薩は無難の法を施して災禍の衆を

救ひ、能く王の法律を了知するに由りて煩惱流轉し、祕密行を修すれば我慢止息す。世間の慈父は是れ大丈夫にして其の子を恩育するなり。自性齊等なれば遷變を了知し、敎に隨順して功德の法に乘らば流轉の道無く、世間の因行を莊嚴し了解すれば敎法の所詮は眞實一身なり。是の破壞の行は遷變に喩ふ。是の處は無智は飢渴を了らず因果を解し難し。制度寂靜は是の如く修習す。色相は無縛無顚倒の性にして十不善無く三寶を崇め無貪愛を行ずる處なり。智慧は過去の實事を了知し、最上の德行は見了せざる無し。寂善の修作とは彼は施行を修するなり、是の如きを眼と名く、是の處は增上する無智を遠離するなり。眞實の三寶は彼れ知ること能はず、是の如く處所誠實暗昧なり。染因の根本を知らざること此の如しと。是の處は、梵世は三相を了解す、云何ぞ無善ならんや。煩惱現行して止息すること能はずと、此の處は、彼の顚倒行を遠離すればなり。我れ自ら梵衆に施設して語りて言く、自ら賢善を修すれば梵行圓滿なり。彼の淸淨の處は靜住聽聞なり、梵天王衆は圓滿に修作せり。是の處は、彼れ梵衆有らば布施行を修し、處々に愛樂し自性淸淨なり。報身を求めて善淨を行へば無動にして、寂靜・圓滿・最上・最勝・增長・上上ならん。如來性の義は怨親の想無く、有力自在に靜住の行を修す、梵衆は圓滿にして目視ること此の如し。廣大なる色相を獲べく求むるに至るは、慧解の修作染意に因ること無く、施設の相狀は欲染皆盡くること阿羅漢の如し。云何してか有情は倒の災禍を離れんや、彼の意、寂靜は色相に因ること無く、施行を發起するは法の義利に依る。流轉の生ぜざるは聖教を聽聞すればなり。意樂勝るゝは國王に因りて依止し。安樂は別々の自性を了解す、此れは十善に因りて依止するなり。慈母和合すれば體性を成就し、增上の住は渴乏の意無し、施惠無くんば力の發生すること無く、慈母に依仗して安樂を獲得するなり。王は調伏する廣大の智見有り、四方止息すること母の愛樂するが如く諍訟皆止む。和合は彼の吉祥事を發生し、暗縛我慢顚倒生ぜざること阿羅漢の如し。種族の增上は貪・瞋・癡三種の

本惑無きこと月色の明白にして雲の遮閉すること無くんば寂靜愛すべし、此の如く義利を聽聞すれば眞實なり。王の相狀姿容は愛すべき上妙の色相なり、彼の義利無くんば識生ぜざることを得ん。舍宅の女人儀容對無く、淨勝無染遠離を希欲すと、是の處は施を行ずる心地眞實なればなり。摩竭陀王自ら此の舍に來りたまへば、勢力最勝にして淸淨無染なり。暗慢の怖を離れ能く貪欲を壞らば、如來藏祕密の言說平等の心を獲、三世の事や流轉の邊際を了る。依止は地華の色鮮潔にして香氣圓滿なるが如く、隨順の色相嚴峻の制度とは、謂はゆる大乘大般涅槃にして種々圓滿なる福德具足せり。經典を聞持して熾然に了解すとは、是の處は、制度に顚倒の想無ければなり。云何ぞ無因無別の智慧は義利を發生するや。十善の法とは云何なる因の相なりや、眞實の寂靜は慢無き色相にして、淨妙なる福德は善淨の和合なり。雜穢止息すれば力用具足し、淸淨の十善は四念住を修すとは、是の處は、無智の顚倒熾盛なれば十善業無く飢渴の邊に住すればなり。種々の楚毒とは、是の處は、和合なり。國王は欲を離れて淨妙に施を行ひ、自在に修行して煩惱・貪愛・繫縛・暗鈍の法に隨順するなり。比丘の根本は最上の應器にして殊勝の所用なり。根本の我見は三際の邊に處し、報身の行を障へて不善業を造るなり。災禍の根本は聖賢の行無きなり。天女は自在に人趣を遠離す、此れは眞實の行を修習すること無く、十善を修すること無し、是を無智と名く。誠實の處は演ぶる所の說正法なり。心をして歡喜せしめ智慧轉た生じ、意識淨妙にして世間に隨順す。是の如く誠實の意識は自在なり。自性は無盡の義を發生し、無倒なる祕密の行を成就せん。彼の善妙の法を具足して聞持せば、根本の言說にして天人の上妙とするところなり。彼岸行を修するは聖の修作する所にして重任を荷負すること是の如く、進みて長遠なる因行を修し驚異を遠離し、微妙の法を說き聽聞修作するなり。根本の勝行は實に施を行ふに因る、淨妙なる增修は長遠に替り無く、披奉の言說は癡迷を起さず、煩惱障を盡すを聖人行と名くるなり。上妙

最勝なる布施は行の邊にして、清淨の因は染の造作無し。彼の根本の事は心に希欲無く、影像は實無きこと心の所現の如し。勝義誠實なるを清淨行と名け、瀑流は長遠の怖畏にして修し難し、相貌は顚倒の處にして惑滋する所、鈍弱愚昧にして自ら增修すること無し。靜住の邊を崇め持戒行を持ち瞋恚の心を止めよ、心は本より無相なり。王者は自在に眞實の施は治正の法と爲す。五蘊の力用は根本の修作にして彼の相貌は性界の善惡なり。如々の根本は煩惱の纒縛にして處々の依止は飢渴の心なり。「諍訟盡き止れば無力生起す」と、是の處は、支分にして彼には修行無し、最上の法は怖畏にして行ひ難く、煩惱は彼の無邊際を障礙するなり。清淨の行有らば貪欲の根を斷じ、以て顚倒の相貌を發生し難し。力用は遏め難く無智は伏すべし。清淨の施有らば希欲の心無く、運用廣大にして諸天の重ずる所、具足して自在ならば染倒生ぜず、性自ら仁賢發生する有情は是の如く清淨にして義利誠實なり。云何なるか「彼の心意樂は天の和合の相貌の如く、彼の增上義は出離の因を求め無學果を獲と」、是の處は、王有り國界廣大にして自ら調伏治國の法有れば、人民仰望して想念無きのみ、語言自在にして誠實なり。云何してか染・惡の義は相應の意無きを明に解し了知するや、熾然に修作して障盡れば縛無く、煩惱の因有らば世間の事・染惡の業を成ぜん。彼の運載行は智慧に依りて生ぜり、因果は增上の言說無きに非ず、慈母は天より言を出す法とすべし、布施の實因は法に依りて行ふ。和合の自性は別の諍因無く如是作に依る、云何なる實事か無倒の修行にして天損減無し、淨妙なる施を行へば諍の因止息し、意趣を了知すること阿羅漢の如くならん。因行に隨順するは自在の處、教授の義利は衆聖も依るべし。雲の覆蔭するが如き貪欲行を離れ、諸天と共に愚癡を修するは畏るべし。聖言は是の如く靜慮無倒にして、勝因は眞實に依止すること地の如し。施行を修して其の報を思ふこと無きが如く、處在る施は義利無盡と爲せり。施設と病難とは聖人も亦た有り、慈母の教示は所在に濟益し、暗鈍の邊を求め止息を造作

す。是の如き無倒は云何なる意にて無倒の因なるや、罪相を見ること無くして愚昧皆止むればなり。無邊の寂靜は眼目を具足し、自在に相應するなり。云何なるか誠實なりや、聽聞の殊勝を愛樂するも、解脱の圓滿を得難きこと雲の普く覆ふが如く、最上の言說に有情癡暗なること猶子を愛するが如し。破壞の法は運載し能ふこと無く、愛樂は遷變なり。云何なるか遠離といふや、貪著欲染是の如きを毒と爲す。四衆は遠離し施の因を愛樂す。相貌は施し難く無諍を了知し、諍訟の衆は諸天遠離す。王の言說は雲の普く覆ふが如く、利劍を施さずして有力止寂し、性縛無くして法相盡く止息せん。無因の致す所彼岸の事は運動の衆なり。煩惱我見は修行の因にして影像は得難く、義利を了知すれば一切實無し。彼の施を修するの人は是の如く無諍なり。王の言論は云何してか無我なるや。是の處は、暗慢は無實を了知し、染に依りて慧生ずるは布施の相貌なり。若し我見有らば淨妙の性最上彼岸語言の法無く、運用趣求障染止息す。諸大の安樂なる淨妙を了知すれば、邪見の有情は眞實纒縛して前路に飢渇せん、體性は倒を離れ力用は因を修す。世間は廣大なる福德を得ること難く、布施は自在にして無上果を求め、王の教授は貪欲止息す。布施の因を求むれば勝利踰ること無く、無我の因を修すれば遷變の義利煩惱行無し、是の如く有情の諍訟は皆止まん。世間の造作は煩惱の縛に因り、有情の世間は法に依りて修行す。果報盡くること無ければ寂靜を了知し、善根を發生すれば力用無倒にして、有情怖れ無くんば暗鈍の法を離る。義利の行を生じ煩惱障を遠ざくれば靜妙の因に住せん。云何なるか遠離するや、苦の因を造らず、實に暗昧無く安樂を成就し、隨順勝義の因を發生せば慈悲利行の義に安住せんとは、此れ聖の言說なり。是の如く食を設け、義利に自在なるは成辦の法にして、遷變修作の力用は誠實なり。諍因の遠離は無倒を了知し、在處の布施は慈母の行の如く、眞實に有情の義を養せば王の示教の如しと、是の處は施を行へば煩惱の障無く、有情運載の心を獲得せば、衆等しく安樂の行を了知す。施を修するの

法は是の如く眞實なり。最上の勝義は無説を了解せば聖賢を發起し染の自性を息む。施の心を生起して廣大に修作せば、根本の三縛は明慧に止息し、生靈殊勝の義利を養育せば、彼の無諍は慈母の教誨に因る。云何なるか無性なりや、聖賢共に仰ぎ四果を具足す、世間は眞實に段食を了知し、思惟して舌相の清淨を長養せば、能く上味を得ること布施力に因るなり。彼の顚倒を盡せば寂靜にして善を生ず。和合の力用は能く勝義を修し、我慢増さゞれば誠實の無相なり。教誨して處を了知する所寂靜なり。煩惱障盡くれば此の利樂を生じ、染を盡すこと有ること無くんば無垢に自在なり。希欲の心無く祕密の行を了り、制度の嚴峻なるは奇特の義利なりと、是の處は、増上智解の施は淨妙にして愛すべきと爲す。王者の意は、言説を止絶して慧解了知す。福德ある有情の力用は天の無貪に隨順するが如く、眞實安樂なる義利此の如し。有情の愛欲は王者の自制にして德行倒無くんば正解脱の義なり。清淨行有りて染法を斷たんと求めよ。實は大海より出で事は理より生ず、染縛苦倒は路險しくして出で難し、無漏道を起して此の染法を斷ぜよ。自性は染無く眞實に相應して想念皆止まん。

## 菩薩布施莊嚴鬘飾尊者護國本生之事次第十三

### 〔菩薩布施莊嚴尊者護國本生義邊十有其四〕

寂靜の法は力用眞實にして無倒を勤修し、果報行を希ひて教法に隨順するなり。謂はゆる菩薩の教誨を隨順聽聞せば、廣大なる有情は福業を圓滿し誠實有力なり。菩薩は衆類に聖法を稟け授け、有情を導き化して實に疲倦無く智慧圓滿なり。學者奔湊して是の如き義を獲、安靜として坦然なりと、是の處は、有情明白にして滯り無く、年衰へたる有識は勝義の力用ありて行施を圓滿にし、行相を攝藏し生を濟ふ力を有せり。造作の相貌は成實を圓滿にし、布施の修因は海の減ずること無き

が如く、念々に增長し寂然として止むこと無し、怖畏を起さず、無諍を具足し雨露の霑す所枯槁も潤有り。彼岸の實因は空の廣大なるが如く、淨妙を具足して災禍ある我慢の因・顚倒・諍染を生ぜず、唯善にして止息す。彼は發起して布施行を修し倒の施設無し、淸淨なる舍宇は虛曠にして廣大なり。淨妙なる支分の有情は之に居し、三業を成就し因を修すること自在にして義利の行を崇むと、是の處は、布施の心能く荷負すれば、淨妙を欲樂し無諍を成滿せん。大薩埵の行は勝妙にして愛すべく、彼の教誨は壞性を了知し、十善法の義利を聽聞すること無く、無失念の因力を修して自ら求め、造作・運載・廣大に非ざる無し。善を發すの根本は言論を生ずること無く、根本に施を求むる時暗鈍無し。身體の遷變は究竟して往き難く、業行相應すれば自然に成辦せん。云何して彼は正解脫を修するに因りて聽聞成滿するや、相貌支分は有情の生起なれば、大なるは難行に因りて調伏を增上し、自體の發生は界性を具足すと、是の處は、無我・無顚倒の意にして壞性廣大なれば身體止息す。無因は譬を爲さば瀑流の因にして彼は變動無し、一切は是の如く自性を成就す。時に作業無くんば諍を求めて變異し、力用の生起するは無因の染力なり。種族の變動は相貌を損壞すること、猶子を生めば四相に緣じて之を遷すが如し。彼々の支分は實物甚だ多く、果報は修善にして力用は相貌なり。誠に學地に居する其の心海の如しと、是の處は、怖畏は造作を出生し、增長の邊際は平等にして彼れ無し、修は毒害無く具足して聞持す。隨順衆等は普く均しく誠實なり。云何なるか染諍とは、顚倒行を修すれば災禍は眞實なり。時に意明利にして圓滿ならば惡を息む。眞實は海の如く諍盡き怖れ無し、平等の教誨は勝義を發起し、造作の相貌は眞實を荷負す。彼の相應力は動かさること海の如く、相狀分明なること天の光潔が如し。此の學處を修すれば聖力況に譬ふ、其の實無倒の處無きに非ず。所在の行施は和合無きに非ず、自在にして善妙なれば驚畏の事を遠け、瀑流を損壞すれば布施無邊なり。怖畏の相を離るれば和合自在にして自體安住して遷變の義無く、卒暴

生ぜず力用を擔負す。無相の修作は毒施を遠くと爲せり。彼は災患の毒有り近くべからず、止寂遠離は生天行を修するなり、衆人重ずべしと、是の處は、無變運載の行人は繫縛心を離れ、清淨の相狀は圓滿無諍にして、寂然安樂の行を進修するなり。五蘊の性處は不可得にして、勝義の誠實は海の測り難きが如く、因無く本無く前無く後無く、比譬すれば海の善淨無貪なるが如し。菩薩の行は群生を教化して止息有ること無く、湛然として海の如く。虛空の相貌の其の中外無きが如し。煩惱障の大難は出離すべく、彼の顚倒無き自性は毒無し。布施は無邊にして眞實自在なり。任運の修作は增上無盡にして、縛力暗鈍は毒藥行の如し大施の難行は彌廣を損減し、智慧眞實自在にして方無し。熾然の修作は三乘を運載し、此の如く求むべき意解は染無し。彼の慢行無き種族は十善にして清淨崇修圓滿なること海の如し。如來は祕藏して眞性を含容したまふ、彼の大丈夫は色相を談ずること無く、正等に聞持して彼我の相無し。人は師範の爲に時に捨離すること無くんば、過去の相無く發生の相貌は湛然として海の如し、倒色を談ずること無くんば繫縛を作す無く、此の如きは自在色相の和合なり、無染了知し諍訟を遠離すれば支分損壞の處有ること無く彼は言論無し。人非人等我れ自ら捨離す。彼の時善有ること無く倒染無し、運用二無く魔障自ら盡く、海の測り難きが如く染汚生ぜず、此無く彼無く自相無縛にして、無邊際に因りて諍の止息を求む。無力とは譬を爲さば、根本の勢盡き顚倒有る無しと、是の處は、煩惱善妙なれば因無く、諍を息む相貌有ること無し。成就遷變は海の無邊なるが如し、自ら果報を求めて祕密行無く、大なる相狀ある染縛は畏るべし。遠く善行を修する煩惱是の如し。究竟の言說は智慧にて了知し、久遠の時分盡き相貌無く處所虛曠なり。過を悔ひ倒を離れ支體寂靜諍縛遠離す。時に止息すること無き染縛を本と爲す。云何ぞ、縛の因は運載し能ふこと無きや、有情の和合は善を修し因無く、清淨の法は種族を出生し、處所眞實にして彼我增さず、海の金を出すが如く隨順の在る所は遷變種々の莊嚴を出生し、火の熾盛なる

相貌の如く輝を増し、海の廣大なるが如く世間にて善妙の言說に比すべき無し。災禍は火の如く測り難きこと海の如し。時に彼の縛力無くんば用は廣大なり。此の如く眞實の恩敎は母の如く、何等をも運載して瀑流を滯らしめず。自在の相貌は染・淨を修すること無く、長く十善を行ひて有情に布施す。誠實の修作は智慧海の如く、情類を養育して愛樂し捨てず。勝義の圓滿なるは善く諍訟を止め、力用增長し相狀有ること無く、制度力用善妙なること此の如し。段食の用は其の心無狀なること有るも、清淨の言說は有情を義利す。染因力無くんば圓滿行を盡くし、時に暫くも捨つること無し、寂靜なる無相の作用は海の如く、善淨の因有れば煩惱永く斷ぜん。彼の縛は性無く諍訟を損壞し、增上の施は無邊なること海の如しと爲す。智慧をもつて了知せば貪の支分無く、解に達し究竟せば廣大なること海の如し。菩薩の修行は能く染因を離れ、自在は行相を生起し、縛の造作無くんば修因發生せん。云何か布施は殊勝の果報盡くること無しとは、是の處は、眞實なれば彼れ彼れの方所・名色・相貌・傾動すること無きが故に。如來祕密藏は眞實無生なり。無倒を發起すれば勝因を成滿し、無相を愛樂せば世間を破壞す。有情は彼を修して無諍の義と正解脫の義とを求むれば、楚毒・瀑流・慢意・止息すること慈母の行の自ら起る纒縛・病難・災禍を止息するが如し。如々の行を修すれば顚倒有ること無く、清淨の妙用は測り難きこと海の如し。自ら壇法を建てゝ無相の理を設け、具足せる希求は無我の行を作さん。殊勝の妙用は寂靜なること是の如し。有情の聽聞は三種の行を修し、有力・寂靜は果の利を攝持す。煩惱の實因は意の造に非ざるは無し。平等隨順は世間を遠離し、勝義・寂靜は運轉して因を修す。聽授有力は止息の行處なり。是の如く瞋忿の根は煩惱に隨ひ展轉して止み難く、災禍を希求すれば止息を起さず、淨法を損滅して慈母に棄て背くなり、是の處は、我れ[一]黑暗業を造ること有れば有情を敎へ難し、無倒行の如きは無苦を發生し、流轉を壞らず飢渴無きを求め、勝義を聽聞するところの彼は得可きこと難し。正解脫を修し言說を

【一】黑暗業は、黑惡業に同じ。

了解すれば淸淨無倒にして眞實行を成ぜん。眞實と虚僞は自性を移轉し、得難きの義は寂靜を修崇し了り得べからず。學位は其の心精勤にして果を求め、淸淨なる止息は靜住にして怖れ無し。是の如き修作は倒・染を止めんと求め、誠實の語言なれば煩惱遠離し、善淨の究竟は無倒眞實にして悲心具足す。眞如の祕藏は破壞すべからず、德行隨順は有情是に於て靜住・相應・無倒處・淸淨地を獲得し、染淨全く止み心をして自在ならしむ。此の因は壞らずして愚癡止息し、圓滿なる力用は彼の顚倒を盡し、言說を了知すれば和合の相貌なり。

# 菩薩本生鬘論卷第五

菩薩布施莊嚴尊者護國本生義邊十有其四

# 卷の第六

〔菩薩布施莊嚴尊者護國本生義邊十有其四〕

處の大なること海の智らるゝこと無く測り難きが如く、靜住眞實は瀑流の行無しと、是の處は、我の全き有れば悲の導無く、布施を損壞して亂に言說を起し。實に寂靜增上の修因無くんば、荷負有力にして運轉盡くること無し。癡迷・災禍は眞實の因無く、勝妙の報は種々の相貌を獲、處止息無くんば何ぞ運載し能はんやと。是の處は、最上の清淨は比無く、菩薩の上妙にして最勝なる支分は造作盡くること無し。隨順の壇法は清淨の供養にして祕密の呪は更に過上無し。有情は苦を息め三業清淨なれば、無爲の行を修して遠離の學處なり。彼は實に無我・寂然・清淨なり。增上智有るは思惟して其の心無諍を了知し、力實無くんば福修すること能はず、飢渴に縛せらるゝは顚倒の自性なりと、是の處は、我見彼は實に遠離せよ。殊勝なる福德は因有れば生起し、體性の因緣は災患生ぜず。彼此無力なれば我見增長し、煩惱既に盡くれば流轉自ら離る。根本斷ずるが故に末障隨ひて除かれ、瀑流の行は復た更に生ぜずと、是の處は、廣大は言說を發起し、殊勝淨妙の色相を獲得す。災禍遷變は了れば不可得にして、虛幻を遠離するは眞實の觀察なり。是の處は、了知すれば喜を生じて因を受け、彼の造壇の法は清涼愛すべし。相狀眞實なる王者は善を生じ、損壞すれば已に流轉の運載無し。彼は實に隨順安樂にして慢無く、色相光潤なること是の如きは有り難し。可愛の法は守護して損無く、星辰纏ひ度り照臨無難なり。業道流轉の災禍は止むべく、清淨の修崇は聖語に隨順し。瀑流の行は無因の嚴飾にして見聞の義は煩惱海の如し。暗鈍・諍訟・喧雜は止み難く、是の如き運載は長遠に盡くること無し。應器を造作し貧乏に布施すれば舍宇寂靜にして有情毒無しと、是の處は、清淨善妙究竟すれば、智慧解脫を了知して縛無し。彼は隨順有

りて十善行を修し、珍寶を惠施して處所に施設す。因心無盡なる彼は相應法にして心所の自性發生隨逐すと、是の處は、光明は根本にして青色圓滿遠近の相を發生し、自界他界の狀貌は圓滿の色相を發生す。彼の天光淨は教法の修に依り、倒法を遠離して因果の相に順ひ、善友に依止して修行を圓滿にす、是の如きは流轉の義無きことを獲得せしなり。

菩薩布施莊嚴尊者護國本生義邊十有其四

## 〔菩薩布施莊嚴鬘飾尊者護國本生義邊次第十五〕

持戒の修行は精進にして減ずること無く、晝夜を捨てず清淨無倒ならば、謂はゆる菩薩の教誨を隨順聽聞するなり。云何なる時か相行を分たんや、大乘の根本修行の制度は寂靜・無變・離畏・無怖にして炎涼の心を憚らず退屈無し、乃至頭目・髓腦終に愛戀無く、誠實自ら有りて遷變の行無し。顚倒を了知して義利を修行し、隨順處所安樂の因地は眞實に相應し。處所に清淨なれば造業誠實なりと、是の如く彼の處は邊際を了知し、此の暗鈍の法は根の煩惱に隨ひ、有情を纒縛すること毒藥行の如し。又修行の勝利は是れ大有情の修行の相なり。云何か進趣して勝義に隨順し能く染をして息めしむるや。布施の行無きは暗鈍の法にして是れ流轉の因なり。驚畏の義を離るれば慢等の相無く、清淨の義・最上の邊際を生じ、語言を發生して流轉を棄て背くなりと、是の處は、有情は布施行を修行し、福德の相貌は心に隨ひて發生すること、子の母に依るが如く生天の相なりと。是の處は、寂靜の果報は殊妙に、清淨可愛にして過去の因に酬ふ、相貌は是の如く希求を造作し、和合齊等なる支分を發起し、根本を實行して布施行を修するは、熾然なる隨順にして修因の相なり。布施は最上清淨を生起し、能く施し有力なるは邊際を增上し、染・倒・繫縛の性を遠離するなり。和合は淨妙の義利を造作し、熾然は瀑流の行を止息すと。是の處は、菩薩の力用は誠實に

して、能作を圓滿せば是の如く殊勝なり。相、狀明白にして衆をして愛樂せしめ、行施自在にして能く無倒に住し、種族を悲導して之を求むること無盡なり。寂靜は殊勝の義利を修作し、又暗鈍行を修して、顚倒の法を求めば、煩惱茂盛にして處所一に非ず。遷變に和合すれば善法を損壞し、運載癡迷暗昧なること是の如し。又煩惱を遠離すれば楚毒の行無く、誠實に善住すれば學の功能有り、障礙生ぜざれば染法自ら止まん。云何か慈母養育の恩とは、驚畏を遠離すれば淸涼地を獲、十善の悲愍を行はしむるは施の用なり。齊等にして偏無く、世を盡す長時も愛語して倦を忘る。如理の思惟は染倒の行無く、王者は天の如く雨澤時に隨ふ。求むる有らば必ず應に是の處無倒なるべし。供養は修して有德の衆に設け、淸淨にして法の如く天龍に奉施し、有力に隨順すれば密の如く和合せん。相貌・支分・寂靜なること空の如く意解是の如し。根本の語言は此の如く詮詔し、顚倒の止息は香氣遠く聞ゆ。諍訟止寂すれば染相を損壞し、邊際は是の如く勝義の相を修し、普く覆ふこと雲の如し。根本の力用は自性の果報・相貌を出生し、種族增上し飢渴を遠離せん、語言解脫は寂然として遠離するなり。又香氣遠く聞えて千變萬狀なり。又普く蓋は空に滿ちて邊際有ること無し、報を受くる力用は眞實を充滿し、數々の癡迷は損減して生ぜず。祕藏の因を行じて運載の義を生じ、顚倒・瀑流・暗鈍・纏縛し、無明の解相は遷變して染を成ずと、是の處は、菩薩彼の過去の勝因を增上すること有らば、相貌自在にして有力淨妙に誠實圓に平等の法を成就せん。是の如く怖無く淸淨の處を求むれば、敎誨・制度・倒・染・皆盡き、次第に纏の災禍盡く止むん。最上は甚深の勝義を生起し、如來は圓に自在なる無倒を證し、衆寶莊嚴して熾然に光顯したまへり。殊勝なる最上の聽聞は難事にして、怨家は天帝・明妃・天后も言說を損減すと。彼の時廣大を具足して癡迷の根本に隨順すれば又寂靜無く、障染・放逸を遠離すれば廣大なり。相貌は空の如く世間に相應し、倒染を發起すれば處所に造作す。其の心昏昧なれば因の修建無く、有情の德行は淸淨にして無諍なり。是

の如く繫縛は彼の散亂有り、彼の三性心は間雜して有るなり。善を修し倒を離るれば彼の障染無し、彼れ是の如く戒德修行の士にて有るならば、我が因は增上するなり。諍染を遠離すれば眞實の我法にして、持戒を讃頌して尸羅圓滿なり。

菩薩布施莊嚴鬘飾尊者護國本生義過次第十五

〔菩薩修布施行尊者護國本生之行次第十六〕

圓滿眞實の演說は無量の力用に相應し、煩惱は火の如く一合の相貌なり。謂はゆる菩薩の教誨を聽聞する眞實の善友は、無諍の法に相應すること是の如し。顚倒の暗夜は染諍增長し、惛惱・障礙・染縛・無義・相貌・支分・喧雜を遠離すれば又平等なること、父の愛樂して子を育つる共の心の如く、功德を攝藏するの義は三時に、縛無し。彼の布施力は最上の修作にして、諍訟の法・有情の想念無きこと、譬へば慈父の恩育を義と爲すが如し。彼の欲界天は貪・瞋・癡を具し、一切の煩惱發生の處にして勝定の法を障るなり。又是の如く眞實なる勝義も無盡にして、平等を增上すれば能く染倒を盡す。此の求は彼の縛にして遠離の因有り、遷變を止息すれば法本如々にして、安樂寂靜の法は流轉無く、心苦患無くして安樂自在なり。世尊の上妙なる語言は舌相蓮の如く、善く正しく解脫すれば漏盡し圓滿に善く三業を淨めて祕密甚深なり。暗鈍の障・癡迷の染因無く、清淨止息すれば善妙の相狀なり。壽命無倒なること是の如し。縛無きの有情は邪染を遠離し、平等の施有れば有力寂靜なり。體性無滅にして熾然に修作し、相貌・支分煩惱を造らず、意地清淨にして安樂平等なれば、一合の相貌其の心熾然なり。云何ぞ暗鈍にして布施の心無からんや。種族卑下して諍訟を調伏せよ。果報は安住無く動無きに非ず、煩惱は火の如く善根を破壞して惡因止め難し。又運載の因有りて支分の義無く、平等圓滿和合なれば倒無く、有力の布施は聲外に聞えず。又煩惱行を作り

我慢の因を修し、障染に隨順すれば暗鈍を發生すと、是の處は、有力難事を修すること無くんば、勝義圓滿にして染倒盡き止まん。圓滿の義相は布施因を生じ、菩薩行を行じて運載修作す。是の如く【一】大有情衆は我見有ること無く、勝義を發生し聖法に隨順して殊勝を增上すれば、性に染・煩惱・顚倒を修すること無し。不作の瀑流の性を了知すれば、全界の煩惱は廣大麁重にして時に間無く斷ずるなり。此の言は誠實にして圓滿の自性なり。彼の大有情は善行を發生し、根本無盡の災禍は遷變にして顚倒の因無く寂靜止息す。增上の義邊は繋縛無きに因り、智慧は火の如く煩惱の薪を燒く。教授の聖語は寂靜無倒にして、身體の支分は上妙の色相なり。彼れ云何なるか施となすや、無倒の心を發せば無相・無縛にして、殊勝の因を修し靜に住すること海の如し。根本の希欲眞實を發起し、布施の想を運し因の相に隨順す。彼の天は眞實圓滿の自性にして、淨妙の因は圓光鮮にして火の如く、眞實なる有力は雜染行を修するなり。

## 菩薩修布施行尊者護國本生之行次第十六

〔菩薩行布施行莊嚴其處護國尊者本生義邊次第十七〕

染障を修すること無く聞持を發起し、暗鈍を了知し顚倒行を除き無義を遠離せば、謂はゆる師長に隨順して聽聞を發生するなり。菩薩の行とは云何なる相狀なりや、此に於て廣大なる悲願を發し、圓滿を發生して行施に安住すれば顚倒の想無く天魔の難し。造作の行有るも亂想の因無く、衆類を安慰して毒害の因を除き、無垢稱と名く。悲力自在にして世間に等しきもの無く、祕藏の相應は世間の遠離なり。善根無盡にして倒染せざること甚深にして得難し。有情の生因は聞持具足し、自在に止息し殊勝の義を修すと、是の處は、聽聞なり。世間の有情は心に貪欲の相を破壞すること無ければ、大覺は慈を垂れ心を運して安樂の行と善友の相とを施し、依止を教授して煩惱生ぜざらし

【一】大有情衆は、大菩薩に同じ。

む。三者無諍ならば増上の支分は遷變飢渴を了知して利益す。諍訟の十惡は一切皆盡き障難生ぜざるなり。又暗鈍を修し世間の無實なる十不善法に染まば飢渴を離るゝこと無く、倒因を發起すれば勝義の利無きこと、慈母の子を見て憂愁して捨てざるがごとし、智慧をもつて眞實界性を了知すれば煩惱自ら止まんこと、彼の王者の世間を治するが如し。廣大なる有力は飢荒を止息し、廣大圓滿なる無倒を修し崇むれば、我慢生ぜず梵行を了知するなり。暗鈍生ぜざれば有力圓滿自在を增上し、又處所に眞實・有智・有力を朋友とする有らば、淸淨上妙の作用を具足し。意に無染を修すれば壞相を了知し、智慧を發生し染の修行を斷じて果の法に趣くは聖の言說に依る。一切衆生養育の相は其の因無きに非ず、器を作り用ふる有る狀其の盞の如し。養育の相貌は庵覆を義と爲せり。云何なる相狀なりや、和合を造作し諍訟無きことを求むるなりと。是の處は、王有り時として治せざること無く、殊勝なる語言善敎を修作して災禍顚倒此の如く盡止し、孤獨の衆を養育することを成就するなり。又彼の染因の本を造りて施行無ければ世間を破壞し、有情自ら寂靜の語無きことを致すなり。勝義の行邊は眞實を智識し、一相貌に合すれば有情慢無し。世間の苦受は必ず其の因有りて祕密行無きこと王旨の如く時に流轉を分つこと無し。彼の福因有れば德行滿足し、染諍を修すること無ければ世間福業の處を成就す。諍訟を談說すれば凡夫止み難く、勝義をもつて調伏すれば染無く淸淨にして眼根圓に淨く福德廣大ならん。云何か無倒とは、有情寂靜にして言說を止息するなり、王者の體大にして正理を聽聞し、圓滿發生して邪僻の行を離るゝが如し。云何か正解脫の義とするや、善趣は有學にして又煩惱は盡る無し、本有の種は造作を生じ圓滿は顚倒を發生せん。一我慢が自性の根本に合すれば有情の煩惱熾然に相應し、記念憶持して本來妄なること無し、滅し又復生じて遷變盡くること無く、過去の因は緣に遇ふて起り、方圓は器に任せて智慧了知す、寂然として禍無くんば其の心自ら作すなり。大乘最上の智は不可得にして纏縛の行相は如

來永く棄てたまふ。體性は廣大にして遷變窮らず、清淨なる妙因は寂然として對無く、解脱の本心は影像無きを了る。智が有を出づれば言詮も何ぞ及ぶところ無し。清淨甚深なる法性は得難く、倒を無くし畏を離れて過の邊際を出で、災禍處所に止息して生ぜず、我慢纒縛は自性有るに非ず、如空の智は求むるも得べからず。自性は顚倒の作業生ぜず、相貌は最上にして力用の根本なり。施設の名色は威容畏るべく、祕密の自性は一可得に合すれば諍訟遷變の敎誨生ぜず、處所に煩惱纒縛を損減するは蓋し想念已に暗鈍の邊際無く妙慧止息すればなり、種族の力用は相狀無倒にして運載の功能と嚴峻なる制度あり、族類の衆は遷變行を修するも唯如來のみ最尊最上にして名色の根本なり、相狀は淨妙にして寂靜の影像なり。因力は是の如く自性圓滿にして有力の修作は智慧眞實なり、因緣和合して縛を離るゝを上と爲す。根本心は制度の法を生じ、遠離を道と爲すは布施の力なり。多種の物を盡して和合を求むるところの彼々の修行過去の煩惱は天趣を離るゝ行なり。我慢を遠離すれば勝因方に得らる。根本三諍の相より縛我生じ、正解脱の義は遠離にして圓滿なり。染縛と寂靜の行とは眞實を施し、調伏の義を修して業の清淨を作すなり。聞持を具足すれば慢得べからず、慧解明利にして勝因は修すべく、寂靜無等なれば明了にして滅ずること無し。智慧と施設とは和合して動くこと無く、進止成就屈伸するも替ること無し。意解詳審にして圓滿に慧を修し、貪愛は海の如く唯智能く離る。祕藏の義は本より生ずべからず亦た壞るべからず。安樂を義と爲せば輪轉の義無し、是の如き界性は傾動有ること無く、煩惱の自體は如來永く斷したまふ。暗鈍は苦惱を地獄に受く可く、餓鬼の報は恐怖出で難し。無我無倒ならば力用止むべく、聲聞は動轉するも大乘は無動なり、解脱して無生なれば戒を見るも何ぞ往んや。布施熾然たるも希求有ること無く、世の慈父の如く調伏して盡くること無し。戒性の持犯は染の因を止息し、慧解無相なれば煩惱生ぜず。如々の德行は寂靜にして止息し、四果の聲聞は勝義にして眞實なりと、是の處は、王有りて檀那行

を行じ、大瀑流の如く修崇滿足す。布施有りと雖も報應を希ふこと無けん。施は無相の行にして根本より無倒なり、飲食滿足する廣大なる檀を行ふも憍恣を生ずること無く、國界の生靈は忻然として慶有り。敎令制度は普く霑ひ洽ふ。此の布施行の淨妙なるを修し崇め、普く群生を濟へば大施に非ざる無し。國界の內聚落處所に其の數五千なるも、宣令普遍して皆師範をして彼々に修作せしむ。此の國豐饒に修崇し鮮麗なること世の與に等しきもの無く、善く言ひ告諭すと、是の處は、王有り國務本より善く邊方を治し、存亡去就凡て筵會すべし、事は法に當りて古より諍訟せしむること無し。務は眞實に在りて寂然造作の相狀は窮極す。時に彼の支分は法敎の令を聞く、王者は言告有らば當に三說すべし。彼の王は智の力用殊勝なるもの有りて當に卒暴無し。彼の像は天に附し殊勝の修作にして聞持具足し憍慢を生ぜず圓滿にして無倒なり。是の如く世尊は過去世に於て去無く來無く色相圓なりき。

## 菩薩行布施行莊嚴其處護國尊者本生義邊次第十七

### 〔菩薩施行莊嚴護國尊者本生之義次第十八〕

尸羅寂靜にして顚倒行を盡し戒法清涼にして能く染縛を除く、謂はゆる隨順にして聽聞するなり。菩提薩埵は種族寂然にして相貌和合して遷變有ること無し。淨妙の處・平等の衆は眞實寂靜なり。梵行の衆は清淨學處にして善友の衆は智慧增上す。自在に本來の自性を修作し、清淨眞實にして相盡き餘無けん。世間の智慧をもつて有情に隨順し、相貌は清嚴增上にして比無く、人中の慧解明白にして愛すべし。彼岸は清涼にして縛染皆盡き、智慧は善淨にして運用邊無く、煩惱の瀑流を如來は已に除き給へり。是の如く世間の暗鈍は出で難く、自ら智全有ること無くして有力を求め、倒法を了解して知見在る有り。德行最上にして我慢の縛無く、煩惱生起するも知の能く

壞る有り。出家修行は是れ大有情なり、愛樂して處所にて苦受に隨順し、正法に違背して有情を快樂し、布施行を修して意地安樂なり。平等增上して布施行を修するなり。布施は百千の沙門及び婆羅門の施す所の功德に勝れ過ぎたり、阿羅漢の智慧圓滿なるが如く功德異ること無し。聚落は過去するも眞實の隨喜は王者の所居のごとく遷變し動くこと無きが如し。色界の禪定は近分の根本にして清淨の聽聞は因相寂靜なり。名色の體は五蘊の遷變にして形相の淨妙は自在の有力なり。阿羅漢の最勝變現の如く、出家の功德は法に依て行はる。清淨なる妙智は慢の法生ぜず、彼の染相盡き經典を聞持す。變化の相貌は名色遷移し、智慧を發生して纒縛を出離す。淨妙の行施は道德無等にして、善靜の聽聞は清涼なること月の如く喧靜遠離すと。是の處は、無倒なれば善意發すること、慈父の如く恩德無比なるを想ふ。圓滿なる善靜は春の如く生育し、慈父の子を愛し時に捨離するとと無きが如し。處所に造作する語言は倒無く善く能く顚倒を調伏し、相貌寂なること空の如く邊際盡くること無し。功德を稱讚すること山の如く動くこと無く、清淨の力は能く名狀すべからず。智慧の吉祥なる生靈の國界は處所奇妙にして暗鈍居し難く、勝れたる慧の力は能く聖賢も止るべし。上妙の修崇は安固にして動くこと無く、卒暴の纒蓋は應に須らく遠離すべし。女人の本末は憂煎にして畏るべく、有情何ぞ還つて愛戀を生ずべきや。嚴峻なる制度は彼に因る無く、希求は永く增上を斷ち自ら止まん。彼は勝義を求めて生靈を荷負し、義利を聽聞して清淨眞實なること、母の意善く子を敎ふる法の如く、是も變動無し。世間の有情の調伏此の如し。作業圓滿なれば安樂自在にして眞實を增上す。云何ぞ復た安樂の邊際を得んや。熾然忻喜して吉祥の事を作すなりと。是の處は、菩提薩埵根本の希求は安樂の行にして、微妙智有りて染の纒縛を出で、學の資は眞實祕密を敎授す。是の如き知見は敎誡安樂なり。有情は是の如く益濟を荷負し、無相の言說は安樂の想を生ず。彼は災禍の施無く布施業を修し。十善の因を行ひ所在に調伏す。勝慧吉祥にして母の護念の如く、

此を安樂・如性・眞實と名くるなり。彼は因を增上し果報勝妙なり。增上慢を求むとも祕密能く止むるなり。聖性の法は根本是の如し。聞持の義法は不可得にして、有情・自性・凡聖も亦た同じ。彼無く此無く我慢も眞實にして、本因は施設具足有るに非ず。嬉弄顚倒遷變是の如し。彼の布施の因は快樂の本にして、清淨の妙慧は出世の良因なり。運載の法は動靜進止安樂にして、難趣無く有法を求め、寂然自在にして有、道の法なり。本因を成就して無諍を成就して無諍を希求す。是の如き法は有情過を離れ、躬ら聖賢を慕ひ供養を增上し。眞實を圓滿して快樂安靜に、勝法を崇修せば速に成就することを得ん。根本の寂靜は勝義の自性にして淨意生ぜざれば眞實任せ難し。此の法は自性寂然たる安樂の體にして有を離れては平等の妙慧無し。無倒の修作は安樂靜妙にして體性の清淨は此より嚴峻なり。解脫の正慧は有情を護助し、苦惱生ぜず纒蓋皆盡くるなり。根本の勝義は無倒を希求し、三種の縛染は擧動生ぜざること、慈母の快樂の如く云何ぞ捨離せんや。動息・進止を聽聞し安を求む。煩惱の毒染は暗鈍にして纒蓋す。無力安樂にして我慢增上し、處所に清淨の法性は凝然なり。慢等の因緣は求めて得べからず。卒暴の苦惱は暗鈍にして纒縛す。善淨は止寂に相應する遠離にして制度は湛然たること豁として大虛の如し。我慢・癡等は增上することを畏るべし。安樂の相貌は寂然たるも、移轉すれば飢渇に逼らる。此の如く日に苦惱纒縛有れば運載無きのみ。煩惱性を了れば方に安樂を得、無心の理を悟り如々の行を行ず。彼岸は清淨の聖人往く可し。義理を分折するは須らく智力に憑るべし。寂靜安樂にして心の敎道に棲ふ、貪欲諍訟は煩惱の根本にして彼此纒縛すれば慧の發生無し。慈父の力は能く勸諭に處するに在り。瀑流の緣は慢の意方に起るなり。律を持つの學人は是れ大有情なり、善心相應すれば戒行清淨にして煩惱を斷盡するは唯だ阿羅漢のみなり。棄背は纒蓋を生ぜざる相貌にして自性遠離の行相此の如く、根本功能の制度も上の如し。

## 菩薩施行莊嚴護國尊者本生之義次第十八

〔菩薩施行嚴飾尊者護國本生之義次第十九〕

快樂の一類は有智の衆にして根本の宛は遷變と遠離とに對す。謂はゆる隨順と聽聞とは菩薩根本の時分に調伏して寂靜なり。德行廣大にして有力に靜住し、煩惱を息除して智慧を增上す。彼れ彼の災禍は眞實の暗鈍にして顚倒の希求なり。色相諍訟憎惡は德を損し、卒暴に隨順すれば調伏行無し。聽聞を具足すれば布施を增上し、善趣は寂靜行を持つに等しく、煩惱生ぜざれば自在有力にして、勝義增上し飮食圓滿なり。敎誨師の邊は制度を希求し、明解止持して能く犯を作すを了る。善妙祕密淸淨の因行は實に業を作す時三業を增上し、根本因行の修崇已に畢ぬ。鬼趣憂苦の患を遠離し、具足して敎授の言說を聞持せば、染意・暗鈍・瀑流・煩惱の有情は俱時に止息を增上し淨妙なること此の如し。彼れ彼れは縛の根本影像を離れ、和合は顚倒の增上を遠離す。染因の邊際色等は是の如く、一切を希求して淸淨を獲得するなり。婆羅門法は無性祕藏なること、猶慈母の意能く含育するが如し。彼は自在圓滿なる獲得を求め、增上の化生は快樂の相貌にして、淨妙の遷變は神彩壯冠たり。知識自在なれば有智有力にして、諍訟の境を出でゝ彼岸の地に登り、屈伸の中に處して平等に安住し、寂靜なる律儀は妙に禪定に止る。復た無上希有の功德有り、無相に安住して湛然淸淨なり。是の如き義利は實相可得にして、快樂に縛無く世間最上なり。破壞の義は實に纏蓋顚倒有るべからず。是の處は遠離にして淸意相應すれば究竟して平等なり。飢渴の遠離は聽聞に因て得、四果の羅漢は三界の染盡き、憂愁の義寂然として有ること無し。是の如く苦惱と和合して安に在り。此の勝義の體は安靜として縛無く、憂愁苦惱了れば無所得なり。根本の時分は實に自性に因り、染慢皆盡れば覺體自ら得ん。是の處は根本の寂靜を聽聞して、無盡なる安樂の境界に隨

順するなり。此の時には染・倒も施すに處無く常に一清淨と爲る。謂はゆる此の特祕密を獲得して纒蓋を出離するなり。菩薩の教誨は一處にして壞れず有力に隨順すること、子の想を生じ善妙の義を作すと。是の處は、憍逸は根本を增上し、淨妙正解脫の義有ること無く、本因を了解すれば有學の行を修し、其の心安住して力能を荷負し、布施と希求とは彼の先聖の如し。此の七種聖は實に學地を本とす。善友に聽聞すれば智解滿足し、貪は因の起ること無くんば聖人の位に住す。此の眞聖衆は如々の行を修し、十地の位に住し分別して染を除き、正解脫を求めて大乘の法を說くなり。熾然なる有力は安固にして動くこと無く、清淨なる運載は心をして歡喜せしむ。力布施を能くせば五蘊傾かず、染惡の相貌は因の生起すること無けん。彼の靜住は煩惱永く斷ずるに依つて、增上我慢顚倒を損滅す。根本の勝義は無相の止息にして、清淨の禪定は湛然として安樂なり。菩提薩埵は染の法を息め、義利を希求して調伏せし有情なり。色界の諸天は自在にして欲無く、十善道を行じて瞋恚を遠離し、智慧行を求めて色相圓滿なり。顚倒放逸は災禍の患にして、最上の寂靜は大乘の勝義なり。根本の妙智は眞如の性を了り、清淨の衆は布施行を行ひ、圓滿自在にして聖者の行を修す。彼の教誡の法は廣大眞實にして、寂靜變化色相圓滿なり。福德和合して聲の相は微妙に、智慧明白にして時に暗昧無し。彼れ彼れは眞實正解脫の因にして一作業の如く制度嚴峻なり。福德は眞實にして處所に自在に、性は施を修するを好み無倒成滿し。智慧禪定愛語修設す。是の如く體性を壞らず安住せるなり。最上の邊際は染靜の法を息む、是の如く暗鈍の本性は癡迷にして、戒法の清涼は調伏を義と爲す。本性は非實にして遮防の用なり。禪那は倒・遷變の無き有力なり。寃家は天帝すら眞實の過患なり、彼れ彼れは增上圓滿息除す。禪定自在なれば飢渴有ること無く、我慢生ぜざれば處所清淨なり。彼の煩惱を盡せば德行眞實にして圓滿なる力用は自性の根本なり。善法に隨順すれば寂靜遠離す。無色の衆は淨妙にして滅無く上妙生起す。是の處は、修設嚴麗寂靜な

れば煩惱の相狀顚倒止息す。根本淨妙なれば彼の因具足し變狀華の如し。應器染無くんば眞實の色相にして、教誨の因は調伏を義と爲す。具足せる聲相は邊際和合し、暗鈍顚倒は彼れ彼れの諍訟なれば、菩薩化導して煩惱止息せん。顚倒の處なる寃家は明妃天帝すら衆類とす。是の如く縛の根本を行はざれば展轉して苦惱の希求止息し、快樂自在にして微妙淸淨ならんと、是の處は、菩薩最上の趣向は是の如く福德は猶蓮華の如く圓滿にして愛す可く、無倒の修行は種族の遠離なること是の如し。支分纒縛は自性の智慧にして思惟を希求する邊際は眞實なること是の如く、定心圓滿なれば本性も是の如し。

菩薩本生鬘論卷第六

心意自在にして義利圓滿し、持戒清淨にして律義に安住す。彼此希求して煩惱の障無く、意地支分寂靜として止息す、此を色相と名け、五蘊を性と爲す。是の如き心等は無諍を欲求し、福德善利は寂然として圓滿なり。是の如き災禍は其の數三有り、四大・五蘊・遷變し、寂靜安樂にして善妙なる自性なり。菩薩は增上したまふ。是の大有情は自在にして力有り、禪定心寂として意識無動なり。是の如き聞持は普く能く運載し、根本の災難は遠離して有ること無し。是の處は圓滿にして諍訟し能ふこと無く、眞實の法を求めて煩惱染惡心等を息除するなり。菩薩の色相は圓滿に莊嚴すと、其の處は淨妙なる百種の相、狀は身體の殊妙なり、卒暴なる相貌と煩惱と生ぜず、自性を成就し顚倒皆盡く。德行自在にして染法生ぜず、愛樂の根本とは十善の法行なり。上妙の寂靜にして無倒の修作なり。意地無我にして止息を精求し。菩薩は義利にして如々の行を求む。眞實の律儀とは此の處は倒無きなり。圓滿なる靜慮を無染行と名け、意地誠實にして寃對生ぜず諸の惡を遠離す。暗鈍を造作するは我慢の根本にして、布施行を修すれば暗慢自ら止み、遷變して智慧平等を造作す。是の如く修崇し堅固に安住すとは、是の處は菩薩清淨に隨順し、有力は趣き求めて十善業を行ず。彼の如く邊際寂靜圓滿にして、諸の煩惱の本因たる染意に於て卒暴生起するも、意地の本を調伏すれば染自ら止まん。平等殊勝にして親疎有らざるなり。婆羅門行の倒因は止めんことを求め、教授を圓滿にし寂靜を莊嚴すれば憂患有ること無く調伏して靈を生ず。聞持具足して增上を造作し、災禍の邊際飢渴の逼る所、忽然として自ら勝義の語言を殄し、暗鈍は瀑流の支分を造作し、我慢は施の爲に冥然として盡く止まん。暴風の如き顚倒煩惱は無邊にして、繫縛の因緣は眞實の造作なり。無倒の言說は體性自在にして、煩惱の慢無く善妙にして變ること無きこと增上味の如し。根

本の意地は顚倒に因ること無く、王者の力用は風の草を偃かすが如く、王の言も此の如く眞實を輔助して語言に則有り。自在の色相は屈伸自ら得たり、彼れも彼れも修崇して卒暴の體無く、妙因を增上して清淨の智慧なり。無倒の言說は顚倒の性無く、平等の祕密は勝義にして眞實なり。如々の體は大にして染の遷變無く、淨智は無倒にして布施の因を求む。圓殊の勝行は上妙の聞持にして、語言は誠諦にして四禪寂靜なり。器界の無邊なるは相貌の根本にして、殊妙具足して不壞の有力なり。無我の諍訟は本の智慧を求め、群品を荷負して淨妙なる語言をなすなり。彼の聚落の災禍は染の法にして、吉祥の事を求めば冤對自ら止まん。是の處は王者の相貌のごとく安靜にして、殊勝なる義利を發言し承稟すれば、彼の人民の分明に了解するが如し。聽聞する群品を養育して倒無く、界性殊勝なれば寂靜の修作なり。清淨なる有情は倒の因業無く、增上の語言は是の如し。平等の慧とは云何ぞや、體性清淨にして諍訟の邊を出で、眞實に業を造れば界性顚倒し、清淨の法有力なれば本を除くと、是の處は、彼の法は惡の義利を息め、清淨の祕密にして眞實の自性なればなり。最上の暴惡は本行の繫縛にして聽聞を發起するは勝義の因行なれば彼の惡は自ら息まんと。是の處は、夜叉も染無くんば清淨なり。十善の義利は根本の寂靜にして求むる處安靜なり。清淨有力なれば廣大の因行にして、一處の相貌は障無く止寂なり。眞實呪願は性有れば天に生じ、清淨の義利は飢渴生ぜず。最上の言說は執持するところ有らば顚倒を止息し、淨妙の智慧は自在にして無邊に諍染の邊を盡し、喧繁の處を止め暗鈍の慢を出づ。淨妙の處は染の言說無く、忻喜を養育し飢渴を顚倒すること、月の清涼にして還て熱惱の濁染無きが如く暗鈍の繫縛を止息するなり。布施の因は貪染の息むに有りと。是の處は、菩薩の平等隨順にして、災禍の根本甚深なるも止息せん。貪欲の語言は暗鈍我慢の體にして止寂無く、欲染の性體は自ら喧雜す、上の顚倒は求むるの因息むこと無し。是の如く增上する煩惱の性は如々の行を修して當に止息すべしと。是の處は、冤家は天帝天后

も實に患難なりと稱す。貪欲顚倒云何ぞ止息せんや、勝義の處に於て根本寂默なれば、希求自在の力用殊勝なり。增上熾盛にして善性を養育すれば煩惱動くこと無く母の愛育するが如く、清淨の衆は快樂を獲得せん。殊勝の義利は眞實にして畏れ無く、運載の制度は邊際に自在なり。云何してか貪欲は希求を造作し、菩薩の教誨は歡喜恭奉せられ、義利を趣求して顚倒の事を盡さんや。聽聞する彼れ彼れは纒を出でゝ寂靜牟尼寂默ならん。貪欲暗鈍の纒蓋は顚倒せる世間の憂患にして遷變なる苦受は欲貪の義利なり。是の如く染の因は顚倒の法にして慢等の縛有り。化生の因行は廣大なる布施にして寂靜無相の勝義を獲得せん。相應して靜に安樂に住すとは云何なるや。善心倶に染諍の遠離を起すなり。此の中我慢の本因は貪欲なれども邊際を增上することは聖賢を供養するなり。清淨の教誨は運載を義と爲すなり。是の處は、冤家は天后天帝すら眞實の變化にして施設の語言となし、自在衆等は圓滿有ること無しとす。寂靜の作業は有德にして有力なり。根本の運載は圓滿にして障盡くるなり。瀑流顚倒は寂靜の遠離なりと、彼れ彼れの是の處は、布施發生すれば清淨の修作にして希求寂靜なり。菩薩の制々は有情にをいて清淨の因行を發生すとは、是の處は、菩薩の眞實なる布施は聞持を生起し、清淨の聚落は淨妙に隨順す。力用の邊際は大乘增上し、九地の煩惱は天趣に隨順し。王と臣とは自在にして彼此教誨す。冤家は明妃天帝すら憍慢・眞實・瀑流・煩惱・垢染・纒縛・我慢・諍訟・憍逸は自在上妙の語言とす、明了なる智慧なれば煩惱皆止まん。勝義の處を求むること阿羅漢の如く、眞俗の智は報身において自在なり。邊際の相貌は寂然として空の如く、彼の過を懺悔すれば我が縛邊際せん。止息を希求すれば災難を遠離せん。是の如く懺すれば有情三縛を除き、求めて生天の快樂に趣き、衆類は暗鈍の慢を無くし貪欲遠離せん。彼は布施を求めて如來行を修し、施設して寂靜ならん。能く生靈の爲に運載負荷し圓滿にして障無けん。彼此安靜圓滿無動にして患難生ぜず、長者善友は布施行を行ひ、卒暴に給せん。圓滿なる相貌は能く上味を得ん、

彼の人は煩惱行と寃對との居を作し、正解脫無損減の義を修せん。

## 菩薩施行嚴飾尊者護國本生之義次第十九

## 〔菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義次第二十〕

德行の自性眞實にして有力の煩惱も施を以て忻求を爲さば嚴峻の修行有らざるも倒染損減せん。謂はゆる隨順聽聞なり。菩薩は寂默にして種族の正理なり。廣大無盡にして彼の楚毒を無くせり。淨妙なる因行は安靜を希求し、教誡して施せば爲に暗慢有らず。隨順して悲み平等安樂に導くなり。我慢の性は廣大なる施を行ずること無く、大乘を求むるの類は因行の根本なり。清淨の智慧は安靜處を求め、自在力を修し正法を聽聞せば、損無く邊を滅じて世間眞實なり。是の處は清淨心を有して施を行ぜば、王者の種族安固にして動くこと無く、煩惱の囂喧遷變皆止まん。群品を護り助くること世間に希有なり。修崇の意は淨妙の因にして自省を行はん。菩薩最上の教示は圓滿なる善根にして、過去寂靜なる有情の遷變は善淨に安住し、勤求して修習すれば勝義の根本・寒苦の道行なり。戒德の清淨なること此の如きは自性なり。聖者の義利は九種の相狀にして、邊際を生起する最上の調伏なり。戒德の積集は纏縛を出づる義にして、無倒の荷負は寂靜の根本なり。彼れ彼れ無性なれば色相生ぜず、聽聞して記念するのみならば顚倒の因にして、有情何ぞ解脫の相貌有らんや。湛然として安住せば災難有ること無く、我慢全く止み舍宅の塵垢染惡を遠離し、寂靜祕密の行を發生し、清淨なる自性は根本の淨業を增長せん。難行の妙因は煩惱の苦楚を調伏し、圓滿なる天趣は淨妙の勝義なり。持戒清淨ならば道行誠實にして、邊際に隨順し自在なる勝解は圓滿なる淨因なり。纏蓋を出離し驚畏の訟を捨て、彼等を愛育して安樂無染ならん。我見遠離すれば田宅眞實なり。是の如きは希求造作の處にして、自性を損壞して布施を行ぜずば卒暴を愛育して色相を增

上するなり。云何にしてか顚倒の一行は數々諸趣を取り言說を發起して根本の處たる所は染諍有ること無し。愛樂の法は圓滿なる隨順なり。云何か最上勝義の法といふや。自在に有情を邊際に悲み導き、惡を息むるの善友にして衆染を能く止め、布施を生ずる慧にして我慢の邊を壞るなり。戒を持つ自性は寂靜にして無倒なり。隨順して聞持し布施の因を求めば勝義淸淨なり。聖人は隨順を了知する種族にして、眞實の法行なれば顚倒を遠離したまふ。求めて染法を盡し聞持滿足す。界性の祕密は煩惱永く斷じ、自在有力は飮食の施惠にして和合して諍無く顚倒の慢無し。調伏の法を修し成就行を行ふなりと。是の處は、菩薩は生靈を悲み導き精求して已むこと無ければ圓滿に趣向す。無倒の行は纒縛の本と爲す。如々の因行は靜に淸淨に住し、暗毒・災禍・苦惱・飢渴盡きて有る所無く、念々に有力纒縛を出離するは勝義の根本にして聚落城邑在る處安樂なり。本布施を行じ寂然無諍なれば究竟して寂靜なり。資粮滿足して邊際を希求し災難・癡・迷・倒の本を出離するなり。勝義の調伏は顚倒出で難く、智慧ある聽聞は圓滿に了解す。苦惱の患は人の影像にして體性有るに非ず。婆羅門衆は智慧在る有り、城邑聚落人民に自在にして貪愛・纒縛・崇修止息す。大乘教の道は發生趣向し、世間の人は如來性を習ひ相應して苦無し。煩惱の體は實に善業に隨順して、有學修崇せば煩惱自ら止まん。是の處は、王者菩薩行を行ぜば、種族圓滿にして有力無倒なり。名聲自在なれば廣大の施と爲し、智慧身相寂然として安住す。是れ大丈夫にして國界を止靜し、智慧寂靜にして本性を了知し、邊際を發起する淸淨の妙行なり。自在なる調伏は最上の生起にして、果報は淨妙出纒の相なり。有情聞持するは天趣の智慧なり。是の處は、廣大なる有情は淸淨妙寂にして暗慢除き遣り、縛の遷變無く殊勝生起す。冤は災禍に對して冥然止息し、賢慧有力は慧解眞實にして、相貌和合し群生仰ぎ重ず。聚落乏きこと無く誠實なること是の如し。云何か憍恣處所に隨順し、飮食して暗鈍なるは邊際に進趣し、淸淨有德にして聞持し智有るは處所寂靜善根にして染無し。有情和合

すれば別々智生じ、平等の智慧は飲食普く施し、煩惱重障の根本は猶我のごとく、本既に染なる時末も亦た隨つて盡く、此の如く止息するは眞實の敎誨なり。是の如き縛染は俄然散壞し暗慢止息す。如來蔭を覆ひたまへば天の普く蓋するが如く止息に隨順す。智の力用は無邊の功なること王の安住するが如し。云何か施を行じ調伏して智有るやと。善言をもつて慰諭し究竟して出纒す。因行に隨順する彼の智此の如し。是の處は、王の自在なる敎令は國人の稟る所なるが如く、處所に憍慢縛染增上す。有情の苦惱靜止すること本の如し。此の顚倒の因は眞實の我見なり。希求災禍も力無くんば起らずと。是の處は、自性施設すれば喧諍・顚倒・冤對・鈍弱・愚昧・纒蓋・自ら止み、憍慢・纒縛も有情は淨智をもつて意解施設すれば煩惱盡く息まん。大我慢此を根本と爲すが如し。增上なる智慧と善妙の語言は正解脫の義にして一切の有情は清淨衆と供なり。界性の諍訟は寂然として止息し、不壞の瀑流は苦惱無邊なり。上妙なる制度は須らく勝義に憑るべし。布施は無盡にして天趣の因を求め、憂惱飢渴は大智惡無し、淨妙なる聽聞は是の如く安樂なり。淨智の聞持は蓋の蔭を覆ふが如く、染法生ぜず增上寂靜なり。王の敎令の如く善淨の因業は智慧を出生す。時に清淨の衆を欲せざること無く、智慧の力用は妙定を具足し、道行增上して邊際殊勝なり。靜妙上品にして自在に蔭を覆ふ、邊際を究竟して世間安靜なり。在處平等にして處所に最上なれば、施の因の所得は勝義を發生す。菩薩の敎誨は是れ王者の如く、無相行を修して智慧力に隨ふ。天趣は淨妙にして纒蓋遠離し、諍訟の法を作して根本の施無く、冤對行有る彼は實に因無し。求めて染法を棄てゝ淨妙を增上し、因行の正理自性を發生す。德業清淨なれば慢類を止息し、有學寂靜なれば鈍弱の行無し。群品を制度し愚昧を止息す。道德は施を行ひ處として運ばざること無く、自在なる有力は染倒盡く止む。圓滿なる如行は諍染を出離し、苦惱冤親復能く遠離す。彼の智慧の性は善淨圓滿にして眞實の因緣は殊妙生起す。忿怒遷變は諍訟・顚倒・語言・非天の行を造作し、飲食・希求は彼の智を修する

こと無し。貪欲の語言は眞實の慧無く、心地は實に縛染の生起無し。煩惱障は希求の喧諍に在り。大國王有りて正法を演說し、心をして歡喜し正理に隨順せしめ、邊際に自在にして智慧を增上す。瀑流の煩惱は憂惱の相貌なり。聽聞を圓滿すれば顚倒の慢法一切遠離す。云何なるか根本の布施といふや。善法・顚倒・染慢は散り壞れ、業道圓滿すれば支分隨順し、正理の飢渴は邊際增上し遠離調伏することなり。云何か求めて顚倒を盡すといふや。清淨を造作し諍訟を出離し、善淨なる悲愍の十善を忻求す。善友の智慧は圓滿の修作にして、清淨行を行ずる福德此の如し。名色・五蘊・希求は動ずること無く、聽聞の祕藏は彼の因無邊なり。彼の煩惱の倒は眞實苦惱にして圓滿なる學處は身體淨妙なり。世間の福德果報は虛しからず。云何か增上究竟の邊際といふや。學處を聽聞して彼の勝義を求め、眞實の清淨は倒染生ぜず、飢渴・纏縛・意地障ること無く、縛染を壞滅すること空の礙ること無きが如し。思惟有らず、卒暴・纏眠の根本皆盡く。如來の自性は本智了に由る、最上の所詮は須らく言說に仗るべし。暗弱を執持すれば毒恚の因の法にして、業道の緣は全く智力に憑る。力用清淨なれば三毒生ぜず、自性は聞持して求心滿足す。三乘の運載は同じく寂滅に歸し、眞實の支分は倒を離れて圓成す。瀑流の煩惱は三種の根本なれば、本既に斷ずる時餘は皆遠離せん。諸佛の清淨なる教誨に隨順する是の如き法を正解脫と名く。有情の相應は憂惱に因り、嚴峻の在る所に大乘法を說き、祕藏の因を求めば名色の相無く、染諍の遠離は圓滿なること是の如し。有情是の處は貪欲に隨順して煩惱を造作し顚倒に自在なり。清淨なる義利は眞實の自在最尊を成就し、無我の法義の見は倒無く、暗昧の施無く有情は此を證す。勝義の無相は執持して滅ずること無く、善淨の妙因は有力に隨順す。自性澄寂なれば蔭覆の義利あり、布施力有れば聞持を清淨にし、報身の爲に本の福德壞るゝこと無し。遷變の行は有爲にして眞實なり。因業自在なること阿羅漢の如く、寂然として和合し隨順して出纏す。本覺の性を求め眞實を長養すれば三業に犯無く如々の義を求むる

なり。

菩薩本生鬘論卷第七

# 巻の第八

智慧清浄なれば我慢衆無く、善友力有りて顚倒行を除き、徳行を増上することは勝義の根本なり。行ひ難き浄き施は最上の無諍にして精舎の安住は能く貪欲を斷ず。顚倒の支分は意染縛を出で、寂靜の妙理は是の如く證を求む。名色は如々湛然として安住し、勝義の徳行は眞實の無諍にして、善浄の智慧は遷變自在なり。彼の時分は是の如き自性無く、勝義の無諍は智慧に隨順し、寂靜の妙理は徳行に縛無し。病患の因は處所に遠離し、希求浄妙の根本は染無く、無倒寂靜なれば煩惱自ら止まん。彼の根本の智は法身の體を證し、無邊の有情は是れを運載し、勝義の調伏は苦惱因無し。彼の煩惱の縛は顚倒の災禍なれば清浄智を求めて遷變を止息せよ。自在の處に煩惱は邊際し、世間の相貌を破壞すれば寂默たり。煩惱の縛の如く色蘊を生ぜしめ、暗鈍の纏蓋は因無くば自ら殄まん。此の圓滿行は憍恣の煩惱・我慢の根本希求永く寂し、正理に隨順して寂靜を愛護し縛染の惡無し。彼の天道の徳は眞實を生起し、煩惱を出離して根本を求むるに有り。善き衆の徳行は勝義の無諍にして、増上瀑流の運載は盡くること無く、近事男すら衆の善根發生すべし。自在の修作は是の如く難行の法なれば、聞持具足して無倒・遠離なれ。

〔菩薩行布施行莊嚴之義尊者護國本生義邊第二十一〕

貪・瞋・癡を遠ざけ勝義を發生せば顚倒の染は盡きん。眞實十二分法を聽聞せば、恚は體の生ずること無く、染倒に隨順せば、縛の性を希求すなり。謂はゆる聽聞に隨順するは菩提薩埵にして大有情の義、時分を造作する大婆羅門種族の徳行にして寂靜止息す。王の徳行の自在天に稱ふは、世間眞實の智慧有ること無く、相狀精嚴名稱増上せん。修行の業道は有徳の浄妙なる布施を聽聞す

れば、自在にして縛無く有力澄寂なり。彼の災禍の本は驚畏是の如し。聞持を具足すれば彼の染を損壞し、智慧は寶の如く染淨を損滅す。根本の縛力は眞實の我見なり。造作の縛染は善淨圓滿し。調伏の自性は善法を增長す。別境中の慧は遍行の想にして有情安住し、眞實の造作は清淨の教誨なり。倘阿闍梨軌範師等に座し大乘を發起するがごとく、究竟の義なるが故に。布施を受樂する清淨なる界性は染諍の義無く、有情は煩惱・暗鈍を損壞し、勝義・寂靜の聽聞を圓滿す。上妙の相狀は能く毒害を除き纏蓋遠離す。荷負して根本の寂靜に運載し、貪欲・纏縛の行に隨順せば變動の相・賴耶攝藏無く、雜染の所依を破壞すべからず、身體の自性は色根の依止するところなり。是の處は、菩薩の有力に隨順してなせる聚落・城邑の淨妙なる教誨は、有情相應に機器とせざる無し、衆類の有情を調伏し、賢善は十善の法を修し運動依止す。貪欲無きの行は意地清淨にして、安住を希求し三乘に運載す。聲聞・緣覺は大乘三種の性類にして、寂靜の處は色相の邊際なり。生靈を荷負し誓つて寂默を求め、清淨の教誨は空を解するの相に達し。寂靜の祕密は種族具足し、根本の趣は三乘の聖果を求め、清淨無動にして調伏止息せん。淨妙の十善は寂靜の根本にして、最上の希求は無縛の勝行なり。惡行の人は精嚴の意地を息め、寂然として縛無く煩惱生ぜず。勉力諍論して寂靜を精求し、祕密に隨順して倒行起さず、苦楚して愛染を遠離し進修せよ。自在の有力は勝因を損ずること無く、清淨の妙智は梵行廣大にして本より無學果なり。我慢の三種は增上變遷し、自在なる蔭覆は空處有ること無きなり。菩薩は有情の所に於て唯だ捨を修行したまひ、處所に隨順して我慢止息したまふ。是の如く聚落・城邑に修建し、莊嚴無盡にして飲食精純なり。吉祥の慧有り瀑流・煩惱・止息して有ること無く、和合の覆蔭は染の因業無し。勝行を修行して清涼なること月の如く、其の心無盡にして勇猛堅固なり。執持圓滿にして善妙崇極し、禪那寂靜なれば器界の種族は災難遠離し染の纏蓋を出づるなり。彼は實に有力にして根本の相貌なれば、難行なる殊勝の妙行を發起す。

鮮白なる光は淨くして天中の報のごとく、王者の在る處寂然として安住するがごとし。是の處は、其の王彼の時に全く憂惱の患無く、諍訟を調和して快樂增上し、種族の相貌嚴麗希有なれば、最上なる邊際の處を成就し、諍訟損壞し止息有るに非ず。根本の自性は修崇善妙にして、安樂を成就し勝義を增上し、國界上妙にして聚落豐盈なり。本は心よりす。眞實の纒縛は熾然に造作し、不動の相貌は無倒の邊際なり。圓滿なる寂靜は實に自性有り、功德を稱讚し正法に堪任す。意地眞實にして湛然を義と爲す。暗慢增上すれば諸天遠離したまふと。是の處は、國王は菩薩行の如く三業を修崇して平等に普濟す。彼は煩惱障を出でゝ清淨慧を出し、十善の敎誨は顚倒の相を盡す。我慢の因は趣き求むること有らず。阿闍梨の行は肅然として清淨なり。世間は諍訟が自性にして、正寂は聽聞が自性なり。靜居天衆は瞋忿已に寂し、上二界は中に瞋恚行れず。煩惱有らば當地の法を縛し、本覺の自性は彼の倒遠離す。彼の智の自性は力制すること能はず、事觀の力微なれば理觀方に斷ずること、聖人が貪の邊際を說くが如し。非想・非々想處も亦た有り。理慧無きが故に未だ遠離すること能はず。貪・癡・慢・見・第九品道の向果方に斷じて無學心を成じ、王者を遠離す。菩薩は智慧有力にして能く生ず。自在の誨示は纒蓋を遠離し、最上の損減は障染の邊際なり。時に彼の世間は大丈夫の相を獲得し、慈母を愛戀す。色相の清淨は眞實の因にして、如法の調伏は根本の諍無く、圓滿の行を修すれば慢染の障無し。正解脫を獲れば顚倒止息す。是の如く聞持すれば彼の倒は遠離せん。有情寂靜の法體は無諍にして、清淨の勝義は憂惱止息す。處所に意は清淨法に和合し、倒無く眞實にして處所に澄靜なり。有情縛無くんば智慧無邊なり。是の如き女人は暗鈍の諍無く、災禍を遷すは菩薩の敎誨なり。王者は勢大に敎令を增上し、普く覆ふこと天の造作する相狀の如し。空閑無くんば處所に纒縛在り。連持する命に因りて和合の相を求めば染障遠離せん。是の處は、國王は生靈を覆載して有智有力なれば彼の人民に施して貪愛止息す。國界の群生は十惡行を遠け、往い

て聖像を求め親しく詣で丶恭しく奉ず。過患皆止み勝義の性に往き、清淨を聽聞すれば纏縛を出離し、相貌を造作して靜妙に安住し。飢渴楚毒すれば寂靜皆止まん。世間の有情は殊勝生起し、無倒の勝義は諍染を遠離す。是の如く有情正法を演說すれば、身體清淨にして染慢の障、世間の顚倒有るも邊際・纏蓋・祕藏・皆止まん。此の大我慢は眞實の染法なりと聽聞是の如し。云何ぞ最上の性といふや。世尊の德は天中天にして福德自在究竟なること是の如し、顚倒・瀑流・一切皆盡き。我慢は淨妙[一]尸羅を增上し、染諍盡く止まんこと影の形に隨ふが如く邊際を究竟し、壽命增上し福德莊嚴す。制度を造作し彼れ彼れを敎誨す、是の如く自性圓滿なるは施の爲なり。靜妙なる聞持は衆類を悲愍し、眞實なる自性は業道を清淨にす。寂靜なる邊際は天人の心なり。云何ぞ增上慢の繫縛無くんば彼に於て愛樂を增上せんや。清淨なる布施は寂靜の因相なれば寂然として染を遠ざく。廣大なる悲願は慈母の行のごとく子を敎誨すること、王の平等に生靈を運載し暗鈍に等しく給するが如し。是の如く人民は王の制度を稟くるなり。菩薩の勝行は邊際空の如く、煩惱の倒無く忿恨の縛無し。自在の力用にして善妙なる修崇なり。心有盡無きこと王の敎の如し。我は之れ暗鈍にして染障を增上し絕對盡くること無くんば業道生起し、祕密の因なる染性自ら止まん。善く圓滿に支分を修する有力にして、布施廣大なれば煩惱無力なり。處所の遠離とは、彼の十善行は供養を修し設くれば人民安靜にして我慢・喧諍・煎煩・盡く止まん。勝因の義利・慧性は本より有り。菩薩の敎誨は殊勝の義利にして清淨の妙慧なり。慈母の子を育つるは眞實の愛念なるが如く、相貌・災禍に施は意の如く爲し、平等を增上し語を發せば誠諦にして、災難遠離せん。是の處は、彼の王は菩薩の行の如く、生靈を治育し自在に澄寂するなり。云何ぞ無諍にして勝義を發生するや、思惟して諸天の梵行を趣求すれば纏縛止息し、圓滿なる智慧は寂靜を增上し、邊際を造作し布施して瞻奉す善蘊は寂靜にして群品を敎誨す。云何ぞ種族の災患は眞實にして纏縛の本は遠離すべきこと難きや。

【一】尸羅は、梵語にして戒なり。

染靜を希求し我見を增上すればなり。有情運載すれば業を作すこと止息せん。菩薩の善誡のごとく王も亦た惡を止め、聖跡を巡遊して妙善臻すべく、增減生ぜざれば語言止寂にして忿恨遠離せん。如し邊際の慧あらば煩惱の因を制し、忿恨を長養せば教誨して止むべし。最上の我慢は調伏して息除せよ。王は義教を行ふも忿は皆止め難く、善法增上して生ずるは眞實に因る。施を修するを本と爲す義利是の如し。煩惱邊際せば自ら勝因を修し惡報遠離せん。災難は火の如く善根を焚燒し、自在なる有力は運載荷負す。邪行修せざれば人民崇善し、我・倒・纏縛の自性遠離す。布施の因は我・縛の本無く、有の邊際を生ぜば熾然として諍無く煩惱自ら止まん。和合の相貌は災禍の本息み、光明の現證は本より寂として求むること無し。圓滿なる妙慧は思惟及び難く、有情染無くんば勝義是の如し。希求の本は寂として三篇を遠離し、國界の淨妙增上すること此の如く、無倒・遷變・瀑流・止寂す。相狀實無く增上の德行圓滿なれば寂靜なること火の薪を滅するが如く、煩惱・暗鈍・苦惱の邊際と廣大なる瀑流とは無學は永く寂せり。我見の盡を念ぜば勝義を成就し如々增上せん。本は災禍無く澄寂の義利にして、眞實求むるところ無ければ無相を成就し、煩惱・諍訟を正理は除く可し。無邊の繫縛は聖智斷滅し、出纏自在なるは解脫を本と爲す。勝因を趣求すれば染を盡して遠離し、忿恨・遷變の造作は我に由る。無倒の修業は清淨を本と爲し顚倒の染を遠くるなり。云何ぞ勝義とは如々寂默なるや。邊際の眞實は驚畏怖を離れ、力用は天の勝義の如く無我なり。眞實無邊なれば增上慢を離れ、彼は言說無く壽命無動なり。俗家の義邊を無學は已に除けりと。是の處は、國王の德望は休祥にして、人民の仰附は布施を行ふの因なり。遷變有力ならば聖惠周く普し、隨順の色相は善淨の調伏なり。十善行を行ひ布施の心を修し、增上安住すれば制度嚴峻なり。善妙具足すれば聚落人衆く、纏を出で縛を離るれば圓滿なる有力にして、有情の生因無我なれば善靜なり。菩薩の運載は正法を演說するなり。忿惱の行は天の律儀に非ず顚倒に隨順す。寂靜の法無くんば正理

遠離し、進止・擧動・染諍・皆息み、無變なれば災難自在に止息せん。是の如く方便して寂靜に隨順せば善淨の語言なる　補薩陀葛、忿惱行無ければ如來心を修するなり。

## 菩薩行布施行莊嚴之義尊者護國本生義邊第二十一

### 〔菩提薩埵修布施行護國尊者本生義邊第二十二幷第二十三義合〕

本より顚倒無を祕密藏と名くなり。情淨の相貌は實に大丈夫にして善趣を希求す。謂はゆる隨順・聽聞は菩薩の意趣にして大功德衆百千萬衆、邊際は空の如く廣大の處、圓を無我と號し王を最勝と名く、行ふ所の政事境内に偏無く、福德智慧圓滿にして動ずること無し。種族を憶念するに眞實にして替ること無く、生靈に慧施し戒を奉じて清涼なり。四民寃敵を棄てゝ諍訟すること無く、聖力をもつて皆止み、自ら貪欲無くんば飢渴を遠離し、清淨無倒なれば聖德無私なり。敎令普く均しければ自在圓滿にして眞實無壞なり。熾然なる有德は險難も怖るゝこと無く、根本の有學は聖位を希求し、暗慢の有情は能く進み修すること無し。究竟の因は世間の因を行じ體性の破壞は染諍を盡すこと無し、天龍鬼神は縛の因を成就し、無倒の勝義は不可得に因る。清淨の妙因は眞實の祕法にして聽聞自在なり。身體の福は根本の邊際に因り、無倒・寂靜・動止して身安し。是の如きは清淨眞實の布施にして正解脫の法なれば義利無倒なり。寂靜を發生し歌舞を遠離す。清淨の敎誨は黑暗の業を遠け、如々の行を求むること白蓮華の如し。淨妙の根本は塵垢遠離し、繫縛を造る心寂として有ること無きに因る。相貌・遷變・縛心も眞實に聽聞すれば遠離せんと。是の處は、彼の因は清淨行を遠け、有情の熱惱飢渴に逼まられ、寂靜有ること無く縛の根本有り、意地明白を成就し自性動止して安靜なり。災禍止息し煩惱有ること無く、顚倒驚畏は調伏行無し。靜に住して聽聞せば聖力盡ること無く、正解脫の法は煩惱止息せん、纏蓋の相貌は眞實に有ること無く、德行

【三】補薩陀葛は、佛敎特殊梵語にしてポウサダハ(Poşa-dha)は布薩に同じ、淨住の義にして半月毎に淨戒を說き安住して善法を長養せしむる例月の行事なり。

自在にして勝義壞るゝこと無し。善淨の邊際は我慢生ぜず、運載の聽聞は甚深の祕密にして清淨の眞實は調伏の修作なり。梵は靜に名稱ありて國王の有力齊等に讃詠して無我寂靜なり、顚倒の因を遠くれば道行鮮潔にして處所に靜妙に施を行ふこと眞實なり。根本の微妙は無倒の修行にして、十善を聽聞せば因業を增上す。善の一法は福德を增上し、智慧の根本は教誡の語言にして、圓滿なる有力は布施行を修し、福業は眞實にして變化の因なり。十善の果報は勝福慧有りと。是の處は、損減有ること無し。國王の聖德は邊方も止息し傾動有ること無く、快樂は天の如く眞實に安住す。福を集めて因と爲せば聽聞殊勝なり。淨妙の名色は報福の行を求め、有力を成就せば色相隨順し、我慢暗鈍なれば教を聞くも生ぜず、寂靜有德なれば染諍自ら息まん。一切の人民は天人の行を修し。共に施行を崇め名稱を增上し、福樂の因は教を聞きて修行するなり。蓋纏遠離すれば顚倒止息し、勝利を獲得すれば福報天の如し。正行を崇め修し聽聞歡樂せば湛然として安靜なり。法性の根本は寂靜にして無生なれば、聞持を具足せば半身應現せん。繫縛を遠離すれば眞實を祕藏し、生靈を荷負して顚倒起らず。清淨の教誨は安靜誠諦にして無相の智慧は不可得を了す。制度廣大なれば自在にして怖無く、廕覆の相貌は屈伸依るべし。彼れ義利を求むれば造作圓滿にして、變化の邊際は本より勝因に由る。如々寂靜は諸相を遠離し、三寶に安住せば傾動無きが故なり。瀑流の煩惱を如來は永く斷じ、澄靜なること月の如く方圓器に任す。然るに彼の支分は淨妙安住にして作業自在なれば嚴峻則るべく、無邊の災禍も心を澄せば自ら止まんこと、狀蓮華の淨妙にして愛すべきが若し。吉祥の邊際は妙因を發生し、無垢の制度は災患止むべく、顚倒垢染も心善なれば縛無し。如來の德行最勝なれば圓滿自在にして造作無邊なれば遷變止息し、清淨最上なれば無相圓滿なり。善施・性は損減の義無く、明白の自性は寂靜の修作なり。塵坌の止息は善淨にして能く離るゝなり。一切無諍は月の如く瞑を除き、施は喜を生ずと雖も正解脫無く、纏縛を遠離すれば眞實自在なり。

の顚倒は諍染皆盡き勝義安然なれば煩惱動ずること無く、造作の自性は染倒の義利なり。聞持を具足すれば清淨誠實にして暗鈍の障は影像の如く、修作する卒暴の處を眞實に遠離するなり。施は王の濟益無盡なるが如く、布施は偏無きこと雲の普く覆ふが如し。縛無くんば善靜を修崇し止息せん。德行倒無くんば世間成就せんこと、光瑩霜雪冰の如く明白にして垢染縛の體は淨き聞持を修し、遺形無因なれば眞實有ること無く、上妙なる修崇は本佛性有り、譬へば月の滿るが如く淨妙澄寂なり。暗鈍諍染は佛力能く斷じ、邊際處を求めて了知すれば倒無し。慢意生ぜざれば塵垢遠離し、隨順遷變の本は施の修行より。過去の因は處所清淨にして天趣の因の如く彼れ彼れ眞實なり。毒藥を行ずる處無智を了知し、彼の遷流行は顚倒の本なり。三寶に安住すれば顚倒無きが故に、寂靜を莊嚴すれば自在快樂にして、平等の相貌は顚倒の染を盡し、熾然なる修作は安固無動なり。遷變に自在ならば崇因得べし。如來は十力ありて煩惱永く斷じ、根本の淨心は聖因方に得、名色眞實にして五蘊清淨なり。勝義の自性は念澄寂無く、流轉の因盡くれば力用常寂にして、驚畏の因緣は處有在ること無し。是の時世間は眞實にして倒無く、清淨の界性は無邊にして安靜なり。念處の因緣は往古の隨順なり。是の處は、彼の因誠諦淸淨なれば、流轉の狀貌は定慧明白にして、上妙の果報は圓滿和合なり。捨を行ずれば平等にして影像眞實なり。纏蓋慢類は暗鈍の根本にして染性を損壞すれば圓滿に因を修し。勝義の淸淨は力用の修作にして、聞持を具足すれば慢等は損壞す。淸淨の界體は流轉の因無く、不動の行相は無倒の本なり。瀑流の處は遷變彼れ無し、熾然なる災禍は忽にして有らず。涅槃の體は常に湛然として安靜なれば、十善は無邊にして一に淸淨に合す。顚倒・纏眠あれば色力盡くること無く、舍宅田產は我れ能く增盛し、親族を運載して損すること無くんば安靜にして、處所に微妙なれば輕慢有ること無し。是の如き纏蓋を了知し遠離すれば、眞實・無倒にして因を修すること善妙なり。淸淨の邊際方所に寂靜なれば、學解圓滿にして眞常の德行

なり。南方に天有り、我縛に因ること無く、瀑流止息すれば清淨にして無諍なり。梵行は施を勝義誠實と爲す。淨妙なる色相は德行圓滿にして、自性の遷變は福德安靜なり。布施行を修すれば彼我怖れ無く、我見・垢染・顚倒は遠離せん。是の如く災諍恐怖有ること無くんば、諸天の淨妙なる譬喩も何ぞ及ばんや。彼の性は諸法を發生すること是の如し。十不善根は縛の因遠離すと。是の處は、飢渴は菩薩勝義を誨示して圓滿なれば倒染止息せん。云何ぞ寂靜なれば災難遷らざるや。是の處は、豐盈なる教誨は是の如く、彼の天の染行顚倒息除し、寂默安住して意地觀察し。諍訟に因ること無く制度實有り、清淨の色相は本より變動無し。云何に修作してか聖言稟くべきや。大乘究竟なれば安固にして無動なり。全界の煩惱は繫縛を體と爲し、四種の勝義は談旨を上と爲す。清淨の妙因は顚倒染を盡くし、人趣の有情も復た能く遠離す。最上の遷變は三寶に歸命し、如來十力究竟を義と爲す。寂默を成就すれば力用無邊にして、諸天も自在に心を盡くして迴向す。聖人は義利清淨にして眞實なれば、本性是の如く安靜に祕密なり。荷負の處制有ること此の如し。煩惱の力用は如來永く斷じ、根本の智心は最上品と爲す。勝義寂靜は如來性の義なればなり。是の

處は、菩薩は無垢清淨なれば諍訟の邊際は自息に因ること無く損減の義邊は求むるも得べからず。病難の因緣は本十業道なれば、衆人の在る所彼は布施を行ふべし。復た我慢有れば遞相隨順し、甚だ飢荒有れば制度をもつて止むべし。圓滿なれば澄靜なること秋の天月の如く、名色の相を求めて無我を了知し、力用は淨妙の邊際を見るべし。種族寂靜なれば人衆に因ること無く、心を造作すれば萬行に變通し、憍慢にして施無くんば力能を損減し、自在の處には倏忽として遠離せん。流轉に畏無くんば恭謹にして慢無く、破壞無きを求むれば聞持眞實なり。是の處は、和合は增上の聽聞にして、顚倒染を遠くれば遷變を喜びて受け、所在に施を行へば正理に隨順し、鬼趣を捨離すれば智慧を發生す。是の處は、丈夫多聞にして誠實なれば、廣く勝因を作し意地は施を行ひ、色

相は德行知見を運載す。諸天の勝因は聽聞隨順にして、究竟の因行は修崇是の如し。我れ布施を行ふて應器に圓滿し、災禍熾然なるも變化止息し、善妙なる根本の因行とは如何、寂靜眞實にして千般の化行なり。諸天は淸淨纏蓋遠離すと。是の處は、王制度作業有れば、自在に諍訟の止息を成就す。最上の貪欲は義利を舍宅とし、淸淨は方所に眞實を聽聞す。淨妙なる伽藍は平等に相應し、增上の相狀は盡く修崇の業なりと。是の處は、精嚴殊勝なる惠施は湛然として澄寂に、溫潤鮮潔は淨妙なること愛すべし。意地犯すこと無ければ濟淨の根本にして廣大を義と爲す。彼の中には邊際を念ずること無し。是の如き造作は放逸を遠離し、名色無倒の處は菩薩の行なり。上妙眞實は寂靜の根本にして、圓滿なる覺性は本來是の如し。學取して諍の淸淨を求むれば怖れ無しと。是の處は、殊勝なる因行を希求し、布施し運載すれば親族を荷負し、淸淨の誨示は修崇の業を敎ふ。十善は根本を發生すること是の如し。如來の性求むれば飢渴を消除し、淨妙の因を修すれば圓に大器を成ぜん。遷變の行を求むれば善淨なる有力にして、自體の思惟は遷流の本なり。出諍の處は飢渴の事無く、纏蓋を了知すれば自然に無動なり。菩薩是の處は、勤行・敎誨は祕密甚深なれば求むる者自ら得ん。淸淨の勝因は眞實の澄寂にして、善く飢渴を除くは聖說を稟くるに依る。邊際に自在なるは根本の祕藏にして、有情慳貪の行を遠離すれば、安樂にして四種の勝義を具足せん。染倒施さゞれば慢類有ること無く、最上なる慈母の恩義を了知するなり。有情は善く根本の顚倒を知り、暗鈍・我慢・諍訟有ること無く、聞持を具足す。王者の法は有情了知し、布施は殊勝にして平等なること空の如し。修崇は菩薩の敎授を稟くるに依り、隨順無倒は佛の十力の義なり。一切衆生は佛性皆有り、嚴峻の制度とは謂はゆる大乘の大般涅槃なり。是の如き寂靜は有情の義利にして、是の如き有學は自性の智慧なり。方便して煩惱・災禍を運載し、相狀遷變の義を盡さんことを求め、眞實に貪欲の過患を了知すれば、如來の言說は飢渴の義を

除くなり。云何か吉祥とは滿月の如き義なりや。災難の法は本心に由つて起る、因實に不平なれば邊際を發生し、我見の法は染汚を本と爲す。意地縛せらるれば作業盡くること無く、菩提薩埵は聖の言說に依る。不壞の法は本より自ら誠諦なり。朋友の求むる處は有智も依るべく、增上の勝因は正法に隨順す。彼の心は布施をもつて須らく生靈を濟ふべし。飮食遷變は十業道を修し、自在の隨順は如來の祕藏にして、上妙の邊際は身を捨てゝ施を修するにあり。有情運載すれば憍慢の事無く、智慧圓滿なれば倒染捨離す。別々の德行は眞實の了知にして、寂靜の勝義は彼の顚倒を盡すなり。是の處は、無我は究竟の邊際なれば、彼の運載行は靜住にして無倒なり。善能の有力は邊際を修建し、鬘飾の上妙は能く奇工を盡くす。是の如く究竟は彼の智慧の體にして、隨順は十善の因行を修習す。方便を發起して清淨迴向すれば意地慢無く究竟して眞實なり。是の處は、病患の邊際は瘥すこと無くして自ら治療を求め、處々に彼の時驚畏するも飢荒の事無く、言無倒なれば廣大なる智見を說くなり。彼の第六意清淨無倒なれば我見欲貪求むるも得べからず、有情の災患も自ら復た了知し、瀑流の煩惱時に應じて止息し、隨順して遠離を了知せば是の如し。聽聞すれば飢渴も布施して能く離れ、自性の力用は慧脫了知す。自體隨順は語言を發生し、寂靜の力用は月滿の義なり。根本の布施は染諍の義無く、清淨澄寂は煩惱の義無し。聖人は如々の勝義に冥合し、究竟の自性は廣大清淨にして、德行は自在の因力を上と爲す。是の處は、愚昧は遠く智慧を修し、根本より鈍弱なるは畏懼增上せん。復た是の言を作さく、飢渴を捨離せば有情化生せんこと淨因の方に感ずるところなり。平等の了知は隨順の事を求め、吉祥の勝義は復た能く修作し、聖の言說を稟けば善く飢渴を除かん。王の言は調伏あれば所在安樂にして、眞實の因は自然に無動なり。在處の義利は渴乏皆盡き、聖賢は慢無ければ眞實を了知す。聞持を具足せば自在に施を行ひ、無上の敎乘は制度清淨なり。聖法了知すれば顚倒遠離し、聞持を具足せば清淨

の教誨は苦惱去除けば佛十力の義なり。有情の行處は顚倒繫縛にして、究竟は無動なれば布施を勤修し、淸淨の敎法は稟受して乏きことなし。苦惱生ぜざれば唯淸淨衆にして、一修建する處に施の本を了知し、善惡を稱量するは惟れ因業に憑る。淨妙の修作は平等を本と爲す。求因の邊際は相貌有ること無く、布施の支分は靡も壞ること能はず。過去の邊際は淸淨にして縛無く、根本の勝義を了知すれば澄寂なり。遷變の相を求めて調伏の行を修し、無我は眞實とすれば變異は鬼趣なり。慈母の處は求めて怖畏を離れ、敎誡の修因は無倒なり。災禍を遠離すれば破壞の義無く、三有を荷負して慢類を調伏す。是の處は、自在に捨施を具足すれば瀑流の煩惱・顚倒有ること無く、自性は災患の本を了知し。染淨を求め盡くせば貪行に順ふこと無く、相貌の寂靜は和合の本なり。無相の造作は賢聖平等なり。飢渇を遠離し敎誡を了知すれば善い哉善い哉福德廣大なり。隨順して無上正法を具足せば、善淨の諸天は湛然として安樂なり。運載せる有情は十善を了知し、制を作すこと王の如く憍慢の事無し。煩惱愛護に因ること無くんば怖れ無く、時に暫も治育を離れず安きことを求む。云何ぞ有情此に於て寂靜ならば布施眞實にして方所に殊勝なり。無我寂靜は王の善のごとく平等にして、傲慢有らず飢渇止息せんと。是の處は、豐盈殊勝なる解脫なり。王の行は正因吉祥にして意の如く、聞持・善施・讚譽を滿足し、施設する妙因は生靈を敍濟し、顚倒に乘背して廣大の行を修するなり。是の如き智慧は眞實にして倶に生じ、施行千種なるも賢善を上と爲す。彼の慈母の力は無邊の施にして我が爲に實に報無し。瀑流の煩惱は佛果永く斷じ、十地は親しく如來性の義を證し、無邊の寂靜は鬼趣を遠離す。王は勝因を行じて遷變隨順し、布施は眞實無諍の本なりと。是の處は、自在に聞持を具足し、誠諦に出過して不動澄靜なり。施を修する力用は根本の相應にして、有情は飲食を充さゞるに因ること無し。方便修崇して布施滿足せば、我慢・暗鈍も無學は止息し、無倒・淸淨なれば纒蓋を遠離すと。是の處は、國王は智慧圓滿にし

て、究竟の因を見れば三寶無動なり。供養增上すれば妙色熾盛にして、自在に施設の語言を具足す。自處清淨地の法は無諍なり、如來の十力云何ぞ獲得せんや。如々に隨順すれば眞實を造作し、布施を具足すれば聖說を了解し、本因淨妙なれば顚倒止息し、施の制度を行ひて善く調伏を修す。是の處は、多聞寂靜なれば支分圓滿にして、上妙を希求すれば修崇平等なり。病難の因緣は煩惱殄滅し憍恣調伏なり、我見垢染は施設に因ること無し、國王は無邊の禍患を了知し、自ら制度を行ずれば災難泯息せん。

## 菩薩本生鬘論卷第八

菩提薩埵修布施行護國尊者本生義邊第二十二并第二十三義合

# 卷の第九

彼の眞實を求むれば修すること無くして得可く、最上の顚倒は災禍を成就す。善因は憍慢の情深きこと有ること無く、無我にして遠離なりと。是の處は、伽藍寂靜無縛なれば布施多しと雖も全く諍訟無く、有情の所居は廣大にして清淨なり。聲聞動轉すれば大乘安固にして、彼の天は空の如く智慧最勝なり。祕密甚深の因行は無倒にして、邊際を了知すれば力用無盡なり。虚空は無性にして容物に隨順し、貪愛顚倒は自性遷移す。彼れ彼れは復た聽聞の誠實を増し、國王の惠施は清淨に崇修し、珍寶無邊なれば淨妙無倒なり。眞實の諍訟は安靜有ること無く、聞持の勝因は施を行ふこと清淨なり。王者の相應せる善妙を了知すること、彼の王の國界平等安靜なればなり。慈母の快樂は相應せる最上なるごとし。菩薩の是の處は無相の修作にして、是の如き施を行ふは殊勝の事を求め、復た損減無きなり。如來性の義は自ら求むの縛無く、王者は不動に依附して邊方の相狀を止息す。増上の教法は災禍・垢・染・纏蓋・諍訟の邊際を止息し、無量の諸魔も破壞すること能はず、平等・了知・攝集を義と爲せり。病難を増上して自ら災禍を求め、貪欲に隨順して因果を知らず。自ら力用有りて血脈を知らず。三毒復た諍へば垢穢に自在にして遷變を知らざれば顚倒盡くること無し。正理の因緣は顚倒の怖無く、依處に齊等しく慢法遠離す。方便して布施せば煩惱有ること無く、放逸に自在ならば寂靜止息す。増上の教法は快樂の處、暗鈍我慢は無益を了知す。根本如々の法性は盡くること無く、實性を成就し・彼の邊際を求むと。是の處は、實に放逸と我慢無くば、教誨を了知して善く布施を求めん、眞實の諸行三種の鈍弱は清淨遠離し、相貌を獲得せば舍宅安靜にして群生止息し、因行を失はざる清淨の修作は顚倒遠離せん。云何に修習して災禍を除遣するや、是の如き無倒を了知して安住せば、因行を具足して如實を覺了し、根本の相貌は邊際を希求す。

菩提薩埵は是の言を發生すらく、國王の制度は廣大眞實にして邊方を調伏し施設を上と爲し、病難を遠離して飢渴に布施し、彼の語言の善靜なるを見て遠離し、垢染・繫縛を處所に損減す。有力の聖賢は慢類捨離し、邊際の力用は淸淨の布施なり。彼等は善淨にして飢渴有ること無く、此の因は方所と時無くんば修せず。眞實は增上の飢渴に布施し、顚倒を出離すれば語言を發生す。淸淨なる修崇は制度盡くること無く、寂靜を愛樂すれば十善を發生す。此の如き遷變は淨妙の處、自在具足して誠諦を希求し、方便して有情の施因を修崇す。云何か有情の自在なる聞持といふや。王者は廣大なる殊勝の因を具足して敎行を了知す。是の如き自性は無縛眞實にして方便して增上し無諍を了知す。圓に一由旬勝概を修崇せば、必ず淨因を獲て淨妙眞實ならん。邊際寂靜ならば溫潤澄瑩にして、善妙なる勝因を處所に造作し、無邊なる眞實の相貌は愛す可く、自在なる殊勝は自性遠離すと。是の處は、王者は能く飢渴を濟ひ、聖言は譽ある誠諦の時分を誨ふ。盡く災禍を除きて相貌を壞らず、界性欲樂の邊際を了知すれば、有力は勝妙なる因行を遷移せん。布施の相狀は最上無倒にして修崇を壞らず災難遠離す。語言は無諍にて荷負廣大にして果報は寂靜勝義の修作なり。是の如く語言は飢渴の因にして淸淨止息し、正理の施は爲に敎導を發生せん。帝釋天主の語言は誠實にして是の如く十善究竟の勝因なり。第六意識は染惡遠離し、上妙なる語言は布施を希求す。根本の勝因は體性無倒にして、彼は實に邊際なり。云何なるを無性といふや。眞實を損壞すれば善法生ぜず、聖道を趣求すれば正理本寂なり。云何に知解して方便を了知するや。王の處なる所は廣大寂靜なり。是の如き敎令は制約を成就し、施設運動して無邊を益濟し、善く飢渴を除くは最上の言說なり。云何してか方所は世間に上と爲すや。邊方を修め建つれば生靈安靜なればなり。是の如き正理は三寶も傾くこと無く、無動に安住して根本を造作し、因の性を覺了して畏懼の義を離れ、繫縛を愛樂すれば處ある所を遷移す。邊際に自在なれば因行を了知すと。是の處は、覺の性は

智解・了知・勝諦・眞實にして貪欲有ること無く、流轉の因の性なる飢荒止息し、自性の卒暴を調伏して傾くこと無し。戒德は律義を犯すこと無く遵ひ、歡喜を義と爲す力用は依る可し。王の名は廣大にして求むるも得べからず。我慢の邊際は有情遁びて十不善の義を轉ぜん。是の如き布施は由旬の處に滿ち、我慢の有情は聽聞盡く止み、學位の有情は畏を離れて喜を生じ、荷負の有情は在る處において法を說かん。有情の心能く義利を了らば、能く貪欲を斷ずる力用求む可し。彼れ我性を離るれば無性の希求にして、最上の德行は有情の依處なり。是の如き寂默は忿恨の意無く、有情の布施は德行の法なり。彼は瞋恚を離れ纏を出づるを行と爲す。住處において顚倒の修作有らず。唯諍訟を求むるは災患の本なり。佛法の梵行は進趣屈伸利益を義と爲す。最上淸淨吉祥の勝義は顚倒・災禍・希求・盡く止まん。是の如き德行は祕密を獲得し、觀照する力用は眞實を聽聞し、義利を生ぜざれば執持するも實無なり。自在の處は無諍を增上し、淸淨の布施は意地增上し、病難止息せば遠離に相應せん。彼の天の趣は守護を義と爲し、無我の行施は淨妙の依持なり。德行無諍にして覺性を了知すれば、貪愛の界性は解脫の義無く、流轉は無因・顚倒を生起し、淸淨なる施を行ふは眞實なること是の如し。施法を了知すれば殊勝の因にして、善妙の體性は法本無諍なり。上妙なる愛樂の根本は三善にして、寂靜・遷變・吉祥を義と爲し、有情の飢渴・災患を觀察すと。是の處は、國王有力の修集は眞實にして慢無く愛育圓滿なり。纏蓋行れざれば遠離に相應し、飢荒の本は壞性を了知すと。菩薩の是の處は、本より垢染無く、根本の三善は祕密の希求なり。影像の邊際は飢渴遠離し、根本より無倒なれば淸淨にして誠諦なり。諸天の十善圓滿なる勝因は瀑流の煩惱止息せんこと了知し、造作する相狀は貪欲も壞ること無し。布施を修行するは敎法の本にして能く顚倒を盡す本意をもつて此れを修せよ。諸天の本因は布施を行ふにあり、眞實の邊際なれば名けて增上と爲す、されば相貌光潔なること實に大丈夫なり。是の如く無諍は巖谷に安止し、寂靜を獲

得すれば安固にして傾かず、清淨の妙因は無我發生す。善友の相貌は圓滿なること是の如し。造作する力用は義利の成就にして、處所の邊際は過去の福業なる十善の因行崇修なること是の如し。相貌の無諍なるは菩薩の行にして、意地は圓滿なる清淨を獲得す。菩薩の有力なるは布施の莊にして、邊際有ること無く垢染損減し。常住にして不壞なれば眞實の流轉なり。丈夫の諍訟は欲貪寂むこと無ければなり。處所の災禍は造作の本にして有情の智慧彼の盡くるを了知すれば、謂はゆる菩薩眞實の遠離なり。云何なるか相貌圓滿にして無縛なりといふや。觀察の處所に別異なれば是の如くなるなり。世間の怖畏は明に染縛を解し、處所に彼の因の遠離を了知すれば、縛の因棄背して聽聞誨示せん。世間の因は有學能く捨て、清淨自性の智慧之を證す。教誡師の邊は有情は智生じ、廣大に世間の因行を修崇し、三乘を運載して同じく佛性に歸せしむ。影像を遷變する彼れ彼れは實無く、煩惱・愛戀は梵行の因無く、出家の衆は彼の無智なるを觀じ、煩惱・過失を如來は永く斷じたまふ。祕密の德行は清淨の勝因にして、福德・聞持は遠離に相應せり。有情は方便して顚倒を愛樂し、瞋恚は護念を獲得すること有る無しと。是の處は、應に知るべし、世間にて我れ城邑の義利を見るに、遷變の處は無倒を了知する所なり。王者は國を護りて災難有ること無く、具足して聞持すれば所在を了知し、德行を聽聞すれば眞實を觀察す。王の國界邊遠くして往き難けれども、殊勝なる相貌は災難有ること無し。涅槃の自性は無縛の顯す所、倒を離るゝ布施は密行にして眞實なり。最上の處は諦實の修作する所にして、邊際に進趣すれば自性毒無く、邪行修せざれば圓滿にして無諍なり。近住の根本は清淨の依止にして德行の眞實は平等の邊際なり。本の勝因有れば祕行無諍にして愛樂清淨なれば寂然として廢すること無し。菩薩は增上なる自在の邊際にして、聽聞の根本は布施の因相なり。云何なる吉祥か聖道を增上するや。我慢生ぜざれば勝行を了知し、美膳具足すれば眞實を愛育す。相狀盡くれば邊際無きこと是の如し。云何か清淨なる布施は無倒の制

度なりとは、處所寂靜なれば無乏を了知すと。是の處は、彼の實の智慧は無相にして、患難有ること無くば寂靜の修作なり。菩薩の道行は眞實の智慧にして有情の倒災は泯息し難し。自性祕密なれば煩惱有ること無く、施行を了知すれば有力に相應し。垢染遷變すれば德行具足し、慈母の愛育は熾然最上なり。自在の邊際は寂然有力にして、支分の教法は詮顯澄寂なり。國王の制度は邊遠きも動くこと無く、菩薩の本因は嚴峻なる遠離なり。四果の無學は圓滿なる勝義にして諸天の愛樂は教法を增上せん。希有の相貌は喜悅無動にして、寂靜・無諍は淸涼なること月の如し。眞實を修建すれば諍因を遠離し、相應の希願は福德有智にして、根本の教法は諸天も依り稟け、有情を悲愍して流轉替ること無しと。是の處は、貪欲は最上の顚倒にして、聖法を具足せば染因皆盡き、聞持を具足せば正法を勤求す。布施隨順すれば名稱自在にして、最上の祕密は魔も壞ること能はず。國王に愛慕せば遠方も寂靜にして遷變に自在なる嚴峻なる制作は災禍の本末肅然として止息すと。是の處は、智慧は瀑流・顚倒・染縛・多種の慢類を遠離するなり。菩薩の支分は寂靜の修作にして求むるの因壞ること無ければ心意止息し、空性本より寂として自ら安靜を求め、人趣荷負すること慈母を本と爲し、自在の名稱は煩惱盡く止まん。國王是の處は、能く貪欲・瞋恚・愚癡・多種の輕慢を制して飢渴の朋屬生靈を止息するなり。菩薩は增上淸淨の自性なれば、自體は有情の眞實を獲得す。王者も是の如く本業を修崇す、彼は實の災禍にして顚倒の繫縛なり。瀑流は煩惱十種の根本にして造作施は平等の布施と爲し、圓滿なる有力は無諍眞實にして淸淨の界性は嚴峻に獲得す。彼の聽聞の性は有學の因にして戒律の根本は施設無盡なり。隨順の流轉は不動增上し、十善の根本は無性增上す。欲貪・患難も縛する無くんば遷移し、時分眞實なれば施行を崇修す。是の如き諍訟は彼れ慧有ること無く、災難を調伏すれば造作止寂す。放逸を了知すれば根本の知見なりと。是の處は、菩薩無上の教誨なり。云何なる意地にか煩惱斷じ難きや。希求無實なれば造作

無邊にして、母の子を育つるが如く守護を義と爲す。有情寂靜の法を了知すれば無我の力用は善友力に因る。施は寂靜の爲に無怖圓滿にして、邊際に自在なりとは十種の善法なり。邇は不淨の義にして復た語言を生じ。無邊なる修崇は無人の處所にして求めても見るべからざるは無邊の因行なり。過去の業は眞實の自性にして憍慢止息し隨順獲可し。淸淨は有情の顚倒を敎誨し、智慧は穿針の事を了知す。有情の聽聞邊際すれば染盡き、流轉に隨順すれば愛樂の因なり。有情煩惱の過患なることを了知せよ。是の處は、國王人民に惠み施せば寂靜に安住して希求變動せん。智慧了知すれば趣きて解脫を求め、禪定智慧は崇修の相貌なり。菩薩は是の如く纏縛を止息し、布施は有情眞實の義利とす。自在に施を行へば聞持を具足し、修習して[一]捨を行へば善い哉遠離なり。菩提薩埵誨示を發起したまへば、是の時國王人民樂みて施し意を盡くして修行し、祕藏せる珍寶一時に捨し盡せり。有情の是の處憍逸なること是の如し。中間寂靜なれば煩惱因ること無く究竟して安住せん。布施を了知すれば相貌有ること無く寂として傾動無きこと月の澄靜なるが如し。瀑流・煩惱・善心の遠離・增上慢の類・災禍有ること無く、常に本より顚倒を觀察することを生ぜず、處所に運載して寂靜なること是の如し。彼の名色の相は誠實の自性にして、染惡の繫縛具足せる相狀なり。是の如き有情は荷負の色相にして淸淨なる止息は染因の遠離なり。快樂の義利は相貌止息し、世間の業道は果報を成就す。傲慢・飮食・飢渴・顚倒・患難して彼の遠離を求むること有ること無し。過去の顚倒造作の時分、相貌繫縛變動して止息す。淸淨の布施は殊勝を希求し、相應の善因は慈性の修作にして、方所に塵垢の災患を守護す。有學進趣すれば煩惱息滅し、塵坌遷らざれば淸淨にして安きこと有らん。是の如き邊際は復た災禍を生じ、根本の廣大は邊際の因にして淸淨趣は愛樂を求めて施を修し、隨順して有情の敎誨を守護す。國王は處所に廣大を修建す。世間の有情根本の三善とは貪無く瞋無く癡無きことなり。是れ善の本にして自性の縛無く、邪見災禍は眞實有るこ



【一】捨は、喜捨にして施しなり。

と無ければ、生靈の顚倒過患を悲み導くなり。是の如き隨順は廣大にして寂默なり。造作して三寶に從順し安住せよ。瞋恚の希求は無智の修建にして、城邑聚落親衆の所在において、清淨の因行は相貌を施設し、禪那寂靜は[二]伽藍に居する所なり。有情の自性は遷變するも無動なり。四禪の根本は五欲の止息にして平等は根本の快樂を成就す。眞實に災禍を[三]邊際すれば隨順にして、塵坌飢渴を止息する相貌なり。是の處有ること無くんば施は十善と爲す。屈伸・擧動・暗慢有ること無く、祕密は怖無く寂然として止息す。無動を希求すれば彼の本因を見、十善の利益は纏縛の止息なり。云何してか眞實の相貌を壞らず、清淨なる布施の因業を造作するや。[四]應量器の用は勝義眞實にして祕藏を成就し誠諦に自在なり。自性の作業は顚倒諍訟するも、心は菩提に向ひて勝義を圓滿す。時分寂靜なれば施行を希求し、靜住の根本は自ら遷變を求むるにあり。有學は具足清淨にして施を修し、尊像を彩繪し心を盡くして興顯す。一切において施を修するは邊際を根本とし、過去の安樂は無動を增上す。中間の清淨は災禍に因る無く、一種の聞持なり。云何か我慢の相貌の邊際といふや。多種本來の自性を聽聞するにあり。過去の諸業は彼の快樂を求め、福德無倒なれば飢渴遠離す。根本には別無く末業に異有るのみ。布施せば纏縛・貪欲・顚倒・煩惱・瀑流も眞實たること是の如し。諍訟を損減し修施に自在ならば、善業を圓滿して勝利を獲得せん。鎭無く慢を弱くせば有力に進趣し、處所に遷移し重て復た施を行へば、世間は安樂にして無動誠實なり。是の如く無倒を明了に知見すれば、聞持を具足し彼を盡して殊勝なり。眞實の[五]支分は屈伸和合し、無相の本佛の法は是の如し。國王の治化する法の本は眞實にして制度の修作は從順の止息なり。清淨なる聽聞は調伏を上と爲し、進趣は顚倒災禍を止息す。瀑流・煩惱・越ゆること無くんば根隨ひ、最上の相應は智慧を發生し、無倒を希求すれば寂然として遠離す。王の界は邊際を分つも寂靜にして、見聞を造作せば災難遠離せんと。是の處は菩薩無倒を了知すれば、能く一切諸の不淨の義を遮し、有情

【二】伽藍は、梵語サンガハーラーマ(Saṃghārāma)にして閑靜處或は僧園の義なり。
【三】此所の邊際は、究竟といふ意味の語に同じ。
【四】應量器は、鐵鉢のことなり。
【五】支分は、手足のことにして身體を意味す。

彼を見ば快樂を增上す。王の貪欲眞實にして無邊ならば、彼の顚倒の因は忽然として止息せん。聖徳は衆類を育養せんことを希求し、邊鄙寂靜ならば時に隨つて能く了り、施を造作するは制度に由るを本と爲すと。是の處は、菩薩は慈母の行の如く、時分を了知して顚倒を止息し、彼れ彼れを調伏する增上なる觀察は、趣きて清淨の勝義を聞持せんことを求むるにあり。誠諦の根本は名色に因る無く、顚倒を調伏するは行施の自性なり。無動の本は唯だ布施を求め、福徳究竟すれば自在にして安靜なり。增上の愛樂は清淨なる無我にして、根本〔六〕瀑流の自性、飢渴・患難の相貌たる諍訟、寂靜の邊際は鈍弱の慢類たることを了知し、具足長養して師子王の如く、在らゆる所に畏れ無き具足せる相貌にして、屈伸の自性は祕密の因行なり、上妙の遷變は供養して慢無しと。云何なるか眞實なる增上の勝因といふや。寂靜・調伏は清淨の妙慧にして、處所に隨順するは言說の遠離なり。云何なる勝義か無倒の遷變となすや。清淨なる勝因は煩性生ぜず、淨妙なること此の如し。菩薩の誨示は自在に施を求め、眞實の語言は法を說くこと雨の如し、王者は何ぞ制術の如く廣大なりや。善法は無諍にして自性の觀察なり。清淨の妙因は長養を義と爲し、王理の根本は無倒の具足なり。自性和合すれば身體安樂にして養育の處は無邊の修作なり。知見を聽聞すれば眞實の趣求にして覺慧を獲得するは最上の邊際なり。是の如き聖法は清淨にして縛無く、根本具足すれば喧諍動くこと無し。自性清淨なれば煩惱永く斷じ、流轉の本は自性の法なり。鈍弱の慢類は憍恣にして遷變し、災患の本は寂止すること是の如し。有情は影像の無實に隨順すればなり。菩薩は云何なるをか最上の敎示といふや。實に災禍・飢渴の自性有りとす。是の處は、顚倒は過去の時分なり、有情清淨なれば廣大の義利あり、布施の因行善妙なれば止寂せん。有情が菩薩の因行を了知して十善を發起せば安止して無動なり。德を具すれば敎法本來有ること無く、機性に隨順して施設異り有るのみ。增上の祕密は是の如く勝因にして安固無動なり。云何して身體圓滿にして寂靜なり

【六】瀑流とは、三界の煩惱のことなり、能く善品を漂流するが故に瀑流といふ。

や。眞實を修作せば無畏成就し、勝義自在にして邊際を生ずること無し。是の如く不動なる菩薩・阿羅漢は果において清淨を獲得せん。荷負する顚倒・瀑流・煩惱・因無くして生起すれば患難止息せん。有情を觀察するに、清淨なる布施は勝義寂靜にして解脫の力用なり。是の時敎誨は自在修崇なり。是の如く我見は廣大無邊にして瀑流・煩惱の根本生ずる處なり。復た造作して止息遠離を求むれば、觀察を成じて時分を了知せん。云何か有情は自性を調伏し、造作して久遠の時分を懷ふこと無く、寂靜にして空の如きは根本の自性なり。自他の清淨を觀察するは有益なりと。是の處は、殊勝は最上の隨順にして有力が施を行へば無畏を成就す。謂はゆる大乘は無縛を了知して因行を運載すること蓮の水を出すが如く、根本は勝義にして調伏は清淨なり。施を修する因業は善利を獲得し、災禍の本相は惠施を行はざればなり。垢穢と清淨有ること無しと了知すれば、增上の調伏は具足して平等なり。勝義の自性は彼此有ること無く、災患の本は行施の眞實なり。淨智は隨順して是の如く彼を求め、寂靜の自性は煩惱・染縛なり。清淨は名色遷變有ること無く、布施の希求は屈伸の力用なり。一切の有情は觀察無盡にして、隨順希求は最上の因性なり。鈍弱なる慢類の自性は無能にして、無相の布施は彼を盡して修設し、能く貪欲を斷じて眞實の法を說くなり。云何ぞ諸天の語言は眞實なりとは、根本の勝因は無諍の修作にして、施行の無邊なるは壇法の根本なり。遠離を增修するは快樂の義利にして暗慢の本無くんば顚倒を止息す。求めて行を修し進めば聞持を具足し、根本の勝因は天人の無倒なり。布施を增修して勝義に隨順し、眞實の因は根本を成就す。施を求むる因行は廣大清淨にして祕密の本は有情を荷負す。布施の修作は眞實の祕語にして貪欲行を止むれば寂靜增上す。聞持を具足すれば清淨の勝因にして、自在なること是の如くなれば一切の因を求め、勝義眞實なれば增上の造作なり。一切の災難は自然に止息し、繫縛無くんば垢染の遠離有り、煩惱鈍暗は處所に遷變すと。是の處は、有情は寂靜の邊際にして有力は自在なる隨順

の本性なり。垢染縛の因一合して具足し、有情の諍訟を止息すること了知すれば、賢善の修作は災患を勝義とする處有り。寂默自在なれば布施清淨にして眞實の自性は有力の邊際なり。有情の在る所彼れ彼れの作業は、生死に流轉する愚癡を義と爲す。邊際に達解すれば我見遠離し、造作する根隨は災禍止息す。處所に調和すれば空の如く無礙にして、飲食の上妙は捨離を求むること無し。清淨の教法運載の義有るは、諸患を演說して自性止息すればなり。彼は自在寂靜の法を求め、誠諦を布施すれば清淨の施を修す。無諍を圓滿にすれば顚倒の本を遠け、寂靜なること是の如く祕密の義を求む。飲食の施はすなはち言說の教誨と爲し、寂靜を布施せば荷負增上し、空の如き相貌は眞實の了知なり。無學の聖者は根本の行相、正解脫の義是の如く平等なり。垢染止息するは諍訟を根本とし、屈伸の因相は勝義を發起す。清淨の邊際は往昔に造りし業にして、增上の暗慢を息除することを獲得し、瀑流に隨順して寂靜有ること無し。四種の業道は現生・順後往して業定らず。是の如き一切の過去の造作は自在に具足し、清淨の邊際は布施の業行なり。寒き時火に逢へば殊勝の義有り。是の處は、眞實の根本は無倒にして名色の和合は往業の遠離なり。業道を修習するは根本の勝因にして、諸天は淨妙にして安隱の樂を求め。苦受の因は暫時も起さず。快樂自在にして增上の鈍慢なり。是の如き遠離は過去の業用にして、善淨無倒なる有情の布施は纏縛自ら息まん。先世に造りし業の意地生ぜず、時分無邊なれば勝者先づ受く。是の如き無學は廣大清淨究竟の安住にして垢染・纏縛は往昔に殄き盡し、身器清淨なれば患惱も因ること無し。有情を調伏し意を用ひて施を修せば、世間の寂靜・清淨の了知なり。云何か我慢とは多種の癡迷なりや。心所中纏蓋を盡さんことを求めんと欲せば、諸天趣類清淨の所依は、施行を了知して圓淨殊勝なり。多く聖道を聞ひて無諍を了知し。屈伸の制度は嚴峻なる修作にして、快樂の邊際は高下平等なり。是の如き果報は教法に隨順し、布施の因を運らして容儀清淨なり。圓滿なる德

行は作業安靜にして、鈍弱の慢類は調伏生ぜず、世間の有力は因を求めて遠離す。最上の樂欲は行施眞實にして、相貌清淨なること諸天も比無く、災難を遠離するなり。云何ぞ勝因とは全く垢染無きや。施を修すれば慢類止息し、無上趣は薩埵の邊際を求め、智慧明に解すれば敎誨を發生するなり。清淨なる時分とは云何してか彼れ實なりや。義利寂靜圓滿なる知見は勝因に隨順して慢行を止息し、自性の善妙は處所に鮮潔なり。敎法殊勝なれば聞持具足し、無倒を了知すれば布施無盡なり。聞持の有力は善災殊勝にして憍恣遷變なる時分に盡き止まん。知見を論難せる制度の施設は布施相應の行因にして無諍なり。苦果の相狀は調伏止息し、清淨なる有情は飢渴有ること無し。是の如き眞實は怖畏を遠離し、彼此寂靜にして災禍有ること無し。世間の勝義三科の法とは布施・增上・暗慢無施なり。云何か論詰して性・相を研窮するや。正理は欲樂の根本を成就し、垢染の縛繫は我見を本と爲す。顚倒の無分は鈍弱の心にして、垢染は是に於て舍宅し本より施なれば遷變何ぞ有らんや。如來の性は最尊最上にして、牛乳譬へて諸味中の上と爲すがごとく、施の因は清淨にして無倒の義利、戒律の義は善淨の語言なり。是の時國王は自在有力にして處所廣大に邊遠に惠み施し、節制修集制約嚴峻なり。是の如き造作は利益實有り、祕密語言は本性有るに非ず、遷流造作の性は無常の義なり。圓滿なる支分は慈母の恩育のごとく、語言調伏勝義寂靜なり。自性成就すれば世間施を行ひ、善い哉有智は諍訟無く邊王の言止息するがごとし。不壞の因は鄙見を遠離し、正理は無邊にして運載を義と爲す。云何ぞ無難とは最上の無倒なりや、多く聞ひて具足すれば根本に性を見るなり。

菩薩本生鬘論卷第九

# 巻の第十

時分の勝因の本際は如々にして、十善の崇修は流轉有ること無く、根本の知見は聞持具足し、清淨の智慧は自性眞實なり。聽聞の相狀は荷負の修作にして、正解の義趣は求めて得難し。無邊の方所は寂然として安靜に、比丘遠離の根本は纒縛なり。布施の因行は圓滿無動にして、智解增上すれば無畏を了知す。淸淨なる勝因は布施減ずること無く、寂靜なる邊際は力用得べきなり。有學の相狀は煩惱止息し、無學の聖人は根隨[一]永く斷ずるも、四種なる瀑流の習氣は仍ち在り。世間の有情は無明の覆ふ所となり、根本の繫縛は情を恣にして放逸なり。自在にして有力なるも慈忍の行無く、纒蓋出で難く瀑流相續し、福樂の果報聯綿として是の如し。彼の縛は諍訟を本と爲すことを了知すれば、圓寂を希求して解脫の義を證せん。彼は實に無倒の聽業なること是の如し。水火風災熾然として發生し、瞋恚・貪・癡を了知して隨順すれば、法性本より寂にして湛然無生なり。遷變の自性は有爲の可法にして、世間有情の[二]四種の業道は順現・順生・順後・不定なり。祕密甚深なる隨順は無相にして、戒律の持犯は眞實を發生す。如來の性は損減の義無く、持戒は清涼にして澄瑩の自性なり。患難の有情は慈心をもつて施を行ひ、意地了知すれば自然に發生せん。彼岸の法は因無くも得安からん。放逸せざるの行は諸天の修すべきところ、快樂の因緣は根本の三善なり。造作界性は顚倒生ぜず、嚴峻なる制度は淨妙愛すべし。究竟の邊際は有力を了知し、施を修する相貌は具足して發生す。尊像の崇修は福緣永く固く、聽聞を了知すれば寂靜意の如し。三寶安住して傾動無きが故に、此の本勝の義は顚倒の法を遠け、煩惱の性類靜住して生ずること無し。我見增上するは煩惱の根本にして、造作無邊ならば聖力能く離る。貪・瞋・癡無きは三善の根本にして、慢類・顚倒は無力も能く生ず。有學は靜住して現行に起さず、彼は自在力にして戒德清淨なり。相



【一】根隨とは、氣力の本を根といひ、隨とは、隨眠煩惱のことをいふ。

【二】四種の業道とは、順現業・順生業・順後業・不定業なり。

應する聽聞は善住增上し、廣大寂靜の三寶は九と爲す。九品の智慧は無相の趣求にして、諸天は快樂進趣して彼を求め、能く貪欲を斷じて眞實の法を說き、遠離の果報は因行無きこと有れば種子生ぜず。是の如きは勝法の功德力用にして、纏縛顚倒皆盡くるに非らざるは無く、方所に邊際遷變希求す。彼の圓滿なる德業因行の、果報は施設百種の影像なるが如く、田宅聚落殊勝豐に足り、淸淨の敎法は利益安樂なり。眞如の自性は本來常滅にして、取ること無く捨つること無く湛然として安靜なり。三乘の聖人幷に善友と爲す。繫縛の心は眞實の顚倒にして、淸淨の界性は自在の止息なり。瀑流・顚倒の制度は遠離にして、眞實の造作は後ち更に修崇す。最上の邊際は本心の解脫にして、淸淨の祕密は止寂如々たり、相貌生ぜず思議及び難く、此の眞實義は究竟の無我なり。王者は知見制作此の如く、平等無二にして正法安住し、道行圓滿にして寂然として怖無く、情・非情の物を禀くること性常寂なり。解脫生ずること無くんば有爲捨て難く、我慢・諍訟は實に遷變有り。能く欲貪在る所の邊際を斷ず。是の如く嚴峻なる修崇は眞實にして、彼の大丈夫は過去の殊勝なり。無邊の作業は善法成就し、有情の智慧は功能盡くること無し。云何か慈母の養育眞實にして、過去の倒染は誠諦に淸淨なりや。是の如き祕藏は究竟眞實なれば、覺者は無倒にして勝義圓滿なり。【三】毘尼律法は有情能く受け、佛地の圓滿は根本の聖說なり。是の如き邪見は染慧生ぜず、靜住にして相應せば澄心の自性なり。勝義發生すれば邪見起らず、平等に趣き求むれば染慧止息するなり。

菩提薩埵修布施行護國尊者本生義邊已上第二十二義幷第二十三義合。

〔菩薩施行莊嚴尊者護國本生義次第二十有四〕

我見の苦受は眞實の顚倒にして、如々の勝義は作用止息す。謂はゆる隨順して義利を聽聞するなり。彼の菩薩は智慧を行ふこと殊勝なれば、種々の自性は縛無くして安靜なり。尊像を興し顯

【三】毘尼は、梵語ビニ(Vini)或は毘奈耶(Vinaya)滅の義にして戒律をいふ。

して果報を希求し、寂靜として安居すれば冥心泯息し、處所に嚴峻なれば塵勞倶に盡きん。【四】二十二根善法欲の義は善惡昭然として影の形に隨ふが如く、是れ可得の義にして不可得無し。國王は方所に輿緝して自在に、惡を息むこと甚だ深く彼の染も破壞し、生靈を運載する增上の相貌は彼れ實に得難く制度嚴峻なればなり。煩惱は得可く瀑流を義と爲す。形像を造作せば果報具足し、自性を明了すれば怨對何ぞ有らんや。廣大なる遷變は顚倒遠離し、布施の力用は處所に誠諦なり。聖言を想念し崇奉圓滿なれば、彼の智慧の相は無盡を獲得し、大乘は平等の教乘を上と爲す。貪愛繫縛は慈悲行を障へ、自在の力用は移轉有ること無し。戒德は犯すこと無く、制度は遵ふべし。名色上妙なること澄瑩玉の如く、相狀は相扶け工業殊勝なり。菩薩は誠諦にして動靜依るべし。是の處は、彼我を均等にすること是の如し。力用發生すれば果報成就し、慈母の愛縛は邊方の隨順にして顚倒慢類は種々の遷變なり。現行せる縛の體は能く諍訟を生じ、壽數終り盡くれば內外靑く均しと。是の處は、丈夫喧諍を遠離すれば、纏縛の有情は究竟して能く離れ、瀑流の煩惱は隨順して生ぜず。進んで聖道を修すれば福德堅固なり。我慢顚倒は方所に執著し、勝義は清淨止息を發生す。一眞常に合すれば聽聞己無く、意地清淨なれば纏蓋遠離し、患難顚倒謗讟止息す。淨妙なる殊勝は彼我有力にして、根本の煩惱十種起らず、纏縛遷變し制約正しく息まん。云何が心昧くば色力を摧壞し、報を受くること眞實なれば勢力自ら盡き、我見を分別すれば聖に入りて乃ち除き、慢類眞實なれば見に隨つて止むべく、暗鈍諍諍生起に因る無し。世間に隨順すれば施を十善と爲す。彼の邊際の慢は執著を增上し、顚倒の分別は果を受くること決定し、林木の損壞は空の無邊なるが如し。誠諦果を受くれば愛支已に潤ひ、身に我慢を負へは增の本と爲す。因果相扶くること形と影とに類し、空の無邊なるが如く寂然として無礙なり。貪愛の果報は內の發生に因り、善法を修せざれば聖を成ずるに由無し。寂靜は空の如く處所廣大にして、善因を發生すれば果報隨順し。

【四】二十二根とは、眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根・女根・男根・命根・苦根・樂根・憂根・喜根・捨根・信根・精進根・念根・定根・慧根・未知當知根・已知根・具知根なり。

自性清淨なれば顚倒止息し、聲相善巧なれば佛事を建立す。壽數時分は以て遠離し難く、自他を運載するは廣大の祕密なり。平等は行ひ難く、我執增盛し、勝義を趣求すれば圓滿なること是の如し。有情の德行は善く和悅を修し、湛然清淨なれば甚深にして得難し。云何ぞ心法は眞如を性と爲すや。彼れ彼れの時分は平等に安住し。勝義の圓滿は泯息を造作し、十種の業道は並に心に由つて起る。昧鈍の根本は克體唯癡のみ、相應の暗障は王所皆是れなり。我慢分別すれば七九種有り、瀑流の根隨は如來永く斷じたまふ。布施の文義とは謂はゆる大乘なり。佛法僧寶は究竟して傾かず、善惡の二相は形對して立つ。了知の時分は長遠にして得難く、天趣を求むる因は唯善力に憑る。處所を保護し愼密に安住し、邊際を運載するは三乘の說に從ふ。勝力增上すれば善友を了知し、一種の和合は我見除息す。繫縛を生ぜざれ勝義に棲止し、聞持を具足すれば聖力荷負す。如來の性は物に觸れて知るべく、淨妙の名色は澄める心に安住す。圓滿なる智慧は妙覺安然として、涅槃の勝義は彼我倶に盡く。一智力に合すれば鈍慢皆止み、智慧嚴峻なれば長夜を了知す。此の大丈夫は眞の勝義を了り、無相を趣求して自在に止寂す。布施の行を修すれば圓滿具足し、彼の運載は縛を遠離するに因るの義なり。彼の力を成就すれば是の處は平等なり。廣大なる顚倒の因行生ぜず、恭奉隨順して成滿行を修するなり。此の如き勝義は上妙增上すること、林蔭茂盛なれば災禍遠離するが如し。智慧の相有れば祕密を了知し、勝因を發起すれば自在にして無邊なり。世間に施を行へば十善の因と爲し、大丈夫の意は圓滿にして誠諦なり。九地の施因は無倒の修作にして、彼の顚倒行增上除遣し、暗鈍我慢の體性眞實なり。圓滿は淨妙の色相を發生し、欲貪廣大なれば勢力無盡なり。因を去除すること無くんば生死廢すること無く、煩惱に隨順すれば丈夫の志を失せん。聖言の誠を信ぜざれば凡夫の行なり。時分邊際は顚倒の希求にして、纏縛流轉は惡業の成就なり。清淨なる因の性は棄捨遠離なり。是の處は、丈夫廣く勝業を修すれば、彼れ彼れの方所は

安靜にして無動なり。染縛を摧壊すれば邊際生ぜず、人趣の有情は廣大なる福業なり。五蘊壊れず遷變窮らず、福を受くる殊勝は施を行ふを本と爲す。津要制度は最上品と爲し、色相の嚴麗は廣大無比なり。清淨は處所に安靜無動にして、名稱增上し自性澄寂なり。有情體大なれば障礙生ぜず、生靈を悲導すれば勝義を發起し、無倒行施は聖力の所爲なり。邊際を建修すれば摧壊の義無く、怨結相待して隨順勉むべく、貪欲希求は聖人止息すと。是の處は、菩薩は悲願して能く離るゝも、慢體眞實なれば以て制伏し難し。地々の九品は迷の理事に通じ、自性眞實なれば顚倒無盡なり。無明癡暗は寂靜生じ難く、纒裹蠶の如く何ぞ能く出離せんや。眞實を造作し本際を修崇すれば、一切の行相は壽量の希求にして、有情の教悔は實に大丈夫なり。平等の自性は如々依るべく、名色の所依は根本の識性なり。勝義の發生は最上の性にして、相應の運載は丈夫の所爲なり。寂靜の處は貪欲行を遠け、清淨は十方の覺位の圓得にして、入地已往分に所能有り。是の如き勝因は曠劫の所修にして、聖智の功能は因果の異有り。殊勝の行は苦を濟ふて樂を與へ、群品を教導して聖說に遵依すと。是の如き暗慢は我見を本と爲し、有力の行施は相狀を泯絶す。自體の希求は是の如く遷變し、流轉は遺體の類を壊らず。時分邊際は淨穢皆有り、善淨の因は所感の義利なり。眞實の趣求は制度を聽聞し、顚倒有ること無く自在無動なりと。是の處は、我慢は增上趣向し、相應の諍訟は止期有ること無し。有情の勝因は捨離せざること無く、義利を造作するは施法の因なり。生類の苦惱は身分を摧壊し、顚倒の邊際は遠離し能ふこと無し。施行の圓滿は空の無相なるが如く、戒德の清涼は須らく持犯を明にすべし。惡の邊際を息めば煩惱能く離るゝなりと。菩薩是の處は、自性清淨なればなり。彼の止息行は勝義の調伏を勤修する生靈は實に丈夫にして、布施方便は善淨の修崇なり。諸佛は教を垂れて不可に因る無く、法象譬と爲す諦是の如し。方所安靜なれば平等なること空の如く、能く貪欲を斷ずるは梵行を因と爲す。究竟の因緣は

自ら施行を修し、彼の瀑流の義は纏縛盡くること無し。遷變の相貌は護念すること眼の如く、惡知見を息めて勝義を圓滿にす。根本の眞實は自ら己が義を求め、母恩は無邊にして廣大を義と爲す。彼れ彼れの眞實は邪見生ぜず、律部の根本は軌範を施設するなり。快樂の界性は貪欲を獲るに非ず。廣大なる有情は護りて諍訟を息め、善く纏縛を息むるは眞實の丈夫なり。是の大有情は眞實の有力にして相狀の齊等は心をして安住せしむ。根本の寂靜は顚倒を求むること無く、自在の指示は謂はゆる默然なり。影像本末の義利是の如く、圓滿に諍を盡さば何ぞ眞實無からんや。彼の本なる顚倒は云何して是の如きや、我執無邊なれば垢染の行を修す。云何ぞ畏の本を離るれば如々の性なりや。愛樂顚倒は迷色の自性なれば、身分肌膚は布施能く捨つ。彼を處所に求め修建するを上と爲す。造作遷變すれば荷負盡くること無く、祕密甚深なれば相の見るべき無く、應器成就すれば具足自在なり。淸淨は處所に鮮潔を上と爲し、乃至遷變は嚴峻淨妙なり。淸淨の教法は善く能く止寂し、梵行を修すれば因の相貌增上すること、師子王の威嚴對無く、相狀の殊麗鮮白にして廣大なるが如く。心の本は澄寂にして自然に無動なり。根本の癡暗は慧解因ること無く、顚倒の法は正智生ぜず。聞持を具足すれば悲心遠離し、無始の繫縛は愛戀の色身なり。淨妙なる施維は顚倒除遣し、瀑流殊勝なる因行は最上の崇修なり。無表色體の持犯を戒と名け、貪愛の熾盛は有情身に於てす。淸淨の處は造作眞實にして此の平等の相は無邊なれば憍恣狂逸にして、顚倒の業行は制度止息す。淸淨の處は造作眞實にして此の平等の相は根本の安住なり。時分有ること無く希求聽聞すれば、國界の方所安然として寂靜なり。持戒淸涼なれば林麓茂盛し、戒德虧くること無く一に淸淨に合し、制度の勝義成滿するなり云何ぞ彼は十種の善行に因るや是の如く邊際增上の色相は、自在の相貌にして殊勝無盡なり。光潔嚴麗聞持圓滿にして、布施無倒なれば名色具足し、煩惱生ぜざれば瓔珞鮮淨なり。有力を希求せば行施を圓滿にせよと。是の處は、廣大の體性は自在にして、布施の功業は寂靜嚴峻なり。智慧の自

性は苦惱有ること無く、三業の恭敬は思惟の自性なり。殊勝なる因行は顚倒皆盡き、暗鈍我慢は諍訟を作業す。希求の造作は悲導圓滿にして、忿怒の邊際は敎誨止息す。丈夫の錯む所は均等にして偏無けん、敎誡師の邊際は衣を隨順に眞く。聞持を希求すれば諍訟自ら止まん。賢善の性は流轉の義無し。云何ぞ恭敬は覺滿ち是の如く自在に施を行ずるや。益濟の平等は淸淨の自性にして本際の勝義は二種の重障なり。瀑流の災禍なる煩惱永く斷じ、金剛無間は雜染の邊際なり。有漏は皆是れ運載の自性にして、三乘の本なる智慧は得難く、垢染の惡行は世間の凡夫なり。顚倒垢穢は力用を發生し、纏蓋を破壞すれば枝葉茂盛せん。根本の堅固は此を以て譬と爲す。

# 菩薩本生鬘論卷第十

菩薩施行莊嚴尊者護國本生義次第二十有四

# 卷の第十一

自性の根本は智慧の了知にして、增上の相狀は靜に住して惱無く、湛然快樂にして解脫の義を了るなり。惡趣顚倒は　我執盡くること無く、憂苦轉多ければ煩惱替ること無し。根本の災難は相貌定ること無く、瀑流の煩惱は如來永く斷じたまふ。彼の自性は遷變に因つて止息し、隨順具足するは義利の根本なり。力用求むべく運載盡くること無し。彼れ彼れの增上は進止益有り、意地を了知すれば諍を盡くして希求し、煩惱の時分は顚倒息除す。三乘の善因は群品を制約し、諸佛の法性は湛然として淸淨なり。眞實に知見すれば慢等力無く、障礙の法は寂靜を了知す。根本の慢邊は運載して息除し、纏縛は多種に敎誨して約束す。有情の在る處隨順生起し、淸淨の神足は心觀を勸めんと欲す。悔過名懺すれば身器淸淨にして。聖道は唯智慧のみ三性に通ず。究竟して眞實ならば理智を越ゆること無く、如々の勝義は妙覺方に圓なり。眞淨の聽聞は摩訶般若にして、佛大丈夫は群品を調御したまひ、寂靜に依止して屈伸を義と爲したまふなり。淸淨なる聖道は盡く如來性にして、智解了知すれば邊際を窮極す。惡趣彙聚すれば善い哉出で難く、勝義無倒なれば淨業圓滿なり。縛を出で縛を離るれば苦惱因る無く、彼は實に果報を希求して能く離る。根本廣大なれば夫丈顚倒し、顚倒に隨順すれば邊際邪行なり。善本と縛體と學ぶこと有る是の如し。纏縛の邊際は自ら田宅を了すと。是の處は、有情の布施實有らば、惡行の果報倒行止息し、五蓋十纏の梵因能く離る。廣大なる聞持は有力の自性にして、上妙の色相は災禍を遠離し、心は形質無く涅槃は無相なり。慢縛諍訟すれば敎を聞くこと止息し、香氣遠く聞えて身分眞實なり。邊遠方所に了知を增上し、彼れ彼れの田園方に分つこと是の如し。彼の眞の十善は淨慧了知し、人趣の行相は殊勝の方所なり。色體は最上にして破壞すべからず、有情も善く敎ふれば施を修すること圓滿なり。殊勝にして倒無

くんば意地誠諦にして、煩惱暗慢怨對增上し、具足せる蓋纏を調伏し遠離すと。是の處は、恭奉して王者に隨順し、本勝行を修して鬼趣道を捨て、圓滿なる荷負は無盡の邊際なり。九地無相は隨所に說を證し、十種の業道は智慧をもつて了知す。平等の相は盡く界性の眞實にして、勝義の最尊は無爲法なるが故に。增上の造作は暗慢遠離し、冤對顚倒は其數百種にして、瀑流の生起は種現すること無盡なり。云何にしてか有情は餓鬼の報を捨つるや。顚倒・我慢・纏蓋・相續し、寂靜の根本は和合と捨離となり。眞實の布施は希求無相にして、平等增上すれば福德隨順し、人趣の生類は王者を上と爲す。云何か彼の類は根本の我慢にして、纏縛相繼ぎ苦惱獲べし。愛樂の語言は智慧の施設にして、自性の寂靜は藥毒止息せん。善友の因は諦實の希求にして、恩愛の養育は殊勝の所在なり。遠離の作業は彼れ彼れ顚倒し、果報の言說は瞋毒具足す。善友の益濟は聞持有力なれば、自在に調順して煩惱の盡くることを求め、自性を了知するは眞實の根本なり。朋友の鈍弱は遷變の修作にして、圓滿なる勝因は本性是の如し。勝義を發生するは運載の根本にして、煩惱中の貪は同じく我慢を生ず。朋友の善教は淨因を發起し、如行に往趣して塵坌を止息す。清淨眞實の布施は般運し、增上を修崇すれば纏縛を止息す。快樂流轉は勝行を發生し、善妙の因緣は德業意の如し。染の因を捨離すれば靜住を愛樂し、十種の善相は遷流邊際す。朋友の自性は顚倒皆盡き、自性の成就は眞實を了知す。無漏の聖道は彼を證すれば如性なり。勝義の如性は圓滿眞實にして、彼の天の苦無くして如實の邊際なるが如し。殊勝の邊際は生類を運載し、清淨の戒法は圓滿にして無盡なり。如來の智力は廣大圓滿にして、眞實の法を說き邊際無盡なり。云何なるをか運載といふや。佛は善友と爲す、無漏の善業は十種の圓滿なり。

## 菩薩施行莊嚴尊者護國本生義次第二十有四

〔菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第二十五〕

一增上して如來性の義に合すれば、是の如き悲願崇修して盡くること無し。謂はゆる菩薩の敎誨を聽聞すればなり。如何なる相貌か寂靜を希求すといふや。人趣の根本は眞實の勝義にして、種々の界性は族類の根本なり。三種の祕密は三業を制伏し、多種の相貌は其の林藤の如し。身分淸淨なれば因を修すること自在にして、聖道平等なること狀虛空の如し。造作の力用は遷變して窮らず、地は毒藥を生じて、福力除く可し。有情平等に因行を圓滿すれば造作の支分は上妙寂靜なり。常に悲導を行ひて生靈を拯濟し、淸淨心を修すれば聞持增上す。三種の無倒は眞實の根本にして慈母の敎授は諍訟を止息するがごとく、慧解分別すれば貪欲を了知するなり。是の如く相應すれば煩惱障無く、所在方處に調伏行を修す。人趣の有情は求心得難く顚倒繫縛は暗鈍隨順す。遷變を調伏せば、彼の時有力にして諍訟を了知し種々相應せん。是の處は、施を修するは調伏し施設するなり。彼は實に毒藥なるも顚倒すれば害無し、彼れ彼れの佛性は塵々と二無く、眞正の解脫は無倒の義利なり。聞持する有力は善法純淨にして、我慢貪縛は不善にして覆有り。淸淨の名色は五蘊の自性なれば、聖賢を了知すれば顚倒行無し。意悅自在なれば身體殊勝にして、國界殊麗なれば上妙の嚴飾なり。鮮淨なれば天の有情の如く廣大にして、勝因は無邊に發生自在なり。靜に住して鈍弱と我慢を調伏せば身相廣大にして、我見隨逐し、勝負を量度して上中下に施すと。是の處は、菩薩淸淨の狀貌は自在の修作にして、勝乘の義利は淸淨無倒なり。國王有力は治化殊勝にして、常に動轉無く寂靜の因行は邊方を負荷し、諍訟無きを求めて喧雜を止息し、次第に淨妙を方所に發起し、靈は逸豫安固にして傾かず、生民を庇覆して雲の如く普く蓋ふ。布施の力用相狀は和合なりと。是の處は、平等なれば稱ふが如く物を均くす。自在の力用は一蓋に普く施し、塵穢を止

息して有力を了知す。運載は方所に驚畏無きことを求め、一相貌に合すれば肅然として成就し、智慧廣大にして具足長養す。是の處は、自在清淨の聞持は寂靜增上し顚倒遠離す。瀑流の險浚は力用廣大にして、纒蓋を調伏し彼の增上を盡す。寂靜を希求して時分を愛樂し、意地憍恣なるも善く止息に住せん。煩惱四相は彼れ彼れを遷變し、王の如く自在にして制度に圓滿なり。是の處は、菩薩は空の如く無礙なり、云何ぞ聲相大小礙有らんや。清淨の布施は王者誠實なり、尋伺を發起するも麁細にして轉じ、勝義は寂靜安然として無動なり。身語意行の十種の善惡は時分に彼れ彼れ處所を分別し、三性を覺了すれば慈母の子を育つるに善く飢渴を知つて子の性行を體するがごとし。彼の時に王者は善く國界を治す、云何ぞ心地惡諍訟を止めんや。色相鮮淨にして和合なるは愛すべく、實に災難無くんば破壞生ぜず。本の無相の如く力用相應し、能く貪欲・瞋恚・愚癡を斷じ、眞實の法を說ひて隨順修學し、生死の法なる三界九地は變易往來勝劣定り無きを了り、寂靜平等なれば暗慢の類無きなり。云何してか三諍は貪瞋癡の本なりや、諍を爲すの因は貧窮の報を受け、彼の語言行勤は修作を求め、自在荷負は名色眞實にして清淨の智慧は大乘を照了し、究竟の法は圓滿の妙覺なり。時分長遠なれば三大劫を經て、施を修すること自在にして安に心田に處し、具足して煩惱障の行を聞持し處所安靜に圓滿に施を行ず。親族の相貌は心常に施し惠み、纒蓋有ること無く本來不生なり。造作する應器は殊妙にして愛すべく、圓滿上妙なれば恭しく聖賢を奉じ、帝釋天主の殊勝なる智慧は情類心行の法を照了し、如來の進止は力用廣大なり。勝義の無倒は祕密清淨にして、色相の圓滿は壽命安固なり。煩惱欲貪すれば憂苦止まず、淨妙なる修崇は暗慢遠離し、諍訟の邊際は纒蓋を成就し、坑穽下ることに於て心を興すが故に陷るなり。其の苦を受くるに憂煎已むこと無く、瀑流の煩惱は意地より增上し、色相の淨妙なるは自體鮮潔なり。彼れ彼れの發生は邊際の在る所にして、無倒の力用は學處圓滿なり。發起趣求すれば無生忍を盡くし、邊際を尋求すれ

ば廣大殊勝なり。運載清淨なれば平等を具足し、布施眞實なれば我慢を止息す。身語意行は布施を發起し、此の十業道は邊際に自在なり。清淨增上すれば無諍を具足し、無邊際有れば聖智は了知す。長短の形相は對礙を了知し、布施の荷負は顚倒の慢無く、方所に運用すれば主宰自在なり。我慢を具足すれば意識相應して、彼の本縛の體は慢等を性と爲す。鈍弱を具足すれば彼此を顚倒し、冤親を憶念すれば時に止息すること無し。苦惱過患は展轉して離れ難く、遷變を發起すれば生處を增上せん。如來の自性は清淨智もて了り、群品を教導して眞實に聞持せしむ。淨妙なる布施は處として有らざる無く、瀑流顚倒は捨離に因る無し。廣大なる國王の制度は怖畏なるも、相貌の殊勝清淨なること愛すべく、思念を造作すること母の子を育つるが如し。祕密甚深なれば眞實を了知し、恭敬隨順は人趣の行なり。所在に縛無きは淨行の因にして、瞋恚の邊際は愚情の戀ふ所なり。三種の瀑流は貪瞋癡の本にして、無學最上は衣盂を離れず。行施の自性は殊勝の業道にして有力發生して如性を成就せん。眞實の邊際は在處如意にして、趣求の心法は了解唯智のみなり。是の處は、王者は盛德動くこと無く、國界を安靜すること諍訟に因ること無し。此の時分の義勝るゝは施に因るが爲なり。處所に慢染冤對を摧壞し、勝義を思惟して布施を趣求す。瞋恚の造作は名稱衰殄し、我・我所の見は顚倒にして、寂靜を推求するは調伏なり。云何なる時分か主宰を歎異し豐逸を裁刃し鈍弱我慢は喧諍を作業するや。是の如き瀑流は漂溺を義と爲し、彼の布施の因は貧苦を濟益す。顚倒垢穢あらば禪定止息し、彼我を調伏すれば憍恣に自在なり。力用清淨なれば喧諍無きのみ、清淨の教勝るれば冤毒有ること無く、有學は進趣希求すること是の如し。如來の性は誨ふる義圓滿にして、煩惱の障は自性顚倒なり。是の如き根本は無始多劫よりあるも、煩惱性を窮むれば彼は實に空の如し。清淨の誨示は憍恣慢を調伏することを見聞し、淨識生ぜざる自性の邊際は遷變止息すと。是の處は、流轉寂然として盡く止まば、鬼界の愚昧に云何ぞ趣き求めんや。縛の因を增上し染

諍に隨順せば、人趣は鈍弱なれば聖智生じ難し。戒行清淨なれば殊勝を運載し、相應の造作は根本の施行なり。自在の力用は眞實圓滿にして、智慧發生し怖れ無く壞れ無し。顚倒の彼の邊は戒律能く制し、最上の調伏は行施を壞らず。廣大なる身分は義利に隨順し、煩惱の性增上するも皆盡きん。自在の勝因は根本の無倒にして、愛欲の布施は相を亡すこと能はず。彼の煩惱の因行は有執を施すこと、大國王の治化均しからざるが如し。眞實の怖畏は倒染の本にして、無我に自在なる有力は施を行じ、寂靜を修行するは過去の因深く、身分の所執は不可得を了る。平等の眞實は流轉壞るゝこと無く、有情纒蓋法の有る所なり。諍訟垢穢は空界を拍塞し、苦惱は過患の根本にして愛を生ず。災禍は處所に無生有らず、無明は遷變する時分に轉多し。聖道の力能は無染不斷なりと。是の處は、王者は聖德增上し、智慧の自性は照了せざる無く、蜂の蜜を造るが如く共に助けて功を成すなり。聖智は圓滿に寂靜を了知し、發生する語言は安詳として雜り無し。染汚と寂靜との有情は是の如し。我執眞實なれば有情怖を生じ、布施の因行は本意平等にして、究竟の邊際は彼等の調伏なり。云何なる相貌か功用增上するや。方便の時分は殊勝を發起し、因の性は無邊にして力用無礙なり。意地の自性は語言も及ばず、面相の變動は喜怒とゝもに遷移す。彼の施を求むる因は去來是の如し。菩薩は自在に律部の法を行ひ、邊際を發生し因行を教誨す。支體の性は識等の五種有り、因緣の性に親めば報種を說かず。有支を壞らざれば因性に相應し、眞實の自性を了知すれば自性是の如し。德行にして縛を離るれば因の義に隨順し。暗鈍の體性は染心を本と爲す。清淨の有支は無覆無記なり。此は說に約して說く、意處の自性は八識を體と爲し、十二處は調伏を說くなり。云何か彼等の義利愛すべしとは。自性は進修を發起し根本の運載は智解をもつて了知す。心暗鈍・瀑流・纒蓋を起さば、我見・垢穢・染汚の言說あり。聽聞の相貌は布施の修作にして、我慢の有情は心繫縛を生ず。本より實に我見ならば施の修作無く、三乘の運載は自在に遷移せん。云何か彼

は善い哉了知を盡すや。祕密の因は苦惱殄盡し、勝義の無倒は根本の施の性なり。瞋恚盡くること無くんば覺慧生じ難く、病患は縛の因にして梵行をもつて能く離る。云何ぞ、災障とは顚倒の施なりとは。世間上妙の自性を獲得せんが爲に、彼の天の福業は善淨にして有力なり。五蘊の名色は聞持を具足し、造作の相貌は殊勝にして無盡なり。調伏して清淨なるは善施の義利にして、善い哉甚深の祕藏を了知す。眞實の調伏は我執の行相にして、彼の勝因の佛果を成就するが如し。無漏の福德は出世を上と爲し、淨妙の性界は根本無畏なり。知見を了解すれば勝妙の佛法にして、淸淨の名色は聞持有力なり。聚落遷變するも流轉壞れず、智慧甚だ多くとも寂靜生ずること無く、懺悔は染を盡くして調伏すること是の如し。彼の諸の天趣一淨妙に合すれば、嚴峻を增上して無倒誠實なり。是の如く悲願の邊際は無盡なれば、彼の根本義は圓滿無變なり。如來は廣大微妙圓滿にして、聲聞の無學は空解脫を生じ、意地淸淨なれば十無學の法にして、勝義を發生し究竟を趣求す。祕密甚深は菩薩の行にして、有情は煩惱障の義を具足し、暗鈍・我慢は人趣の行なり。眞實の有力は遠離を了知し、煩惱障の體は根隨種現す。二十六法は三乘共に斷ずるなり。

菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第二十五

# 菩薩本生鬘論卷第十一

## 〔菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第二十六〕

顚倒・垢染・苦惱・纒蓋の邊際は空の如く、謂はゆる隨順・聽聞は菩薩の因行なり。云何なる相貌か聲聞・緣覺の上に求むべきもの有りや、故に動轉と云ふ。大乘の至極は安固無動にして、涅槃の止息は清淨寂默なり。圓滿にして對無くんば善性にして染無く、力用の求むべき祕因は無作にして、心境暗合すれば麁重無邊なり。力用廣大なれば本智發生し、無間に永く斷ぜん。聖性起る時凡性已に離れ、上妙の聞持は怖畏の義を捨て、攝藏の最上は廣大なる文義なり。諍訟の邊際は聖因止息し、義利を守護すること王師子の如し。無垢・清淨なれば人天の福を求め、眞實勝義なれば廣大無諍なり。熾然無倒なれば調伏止息し、圓滿上妙なれば清淨にして愛すべく、帝釋を恭敬し尊崇する狀貌なり。云何してか遷變の行を發生するや。雲の覆蓋するが如く清淨遠離し、增上の相貌は無垢寂靜なり。王理は如意自在の根本にして、丈夫有力は究竟の自性なり。國界圓淨なれば十惡行無く、色相は寶の如く勝用を造作す。四神足の如く功用最上なれば、自性を了知し眞實に養育す。貪欲は處所に悲心もて愛護し、名色を照し解すれば顚倒を止息す。纒縛の行相は流轉止まず、殊勝の支分は智慧の體性なり。彼れ彼れの病難は虛實を了知し、根本の邊際は調和の所在なり。寂靜の力能は功用を崇修し、瀑流の染法は聖智能く斷ぜん。不來の果は下地に因る無く、纒縛の染性は力用を止寂す。諍訟の根本顚倒を調伏するは、眼識は色に緣じ意識は第八なり。三識俱時に能有らば用に緣じ、自性清淨ならば教導の因にして、種族を了知し躬ら供養を伸べんと。是の處は、修崇の時分廣大ならば因を求むること有力にして染障顚倒は淨妙の因の圓滿に運載せん。大乘の希求は布施の功行にして、此れ實に丈夫の邊際を造作し、清淨なる聽聞を發起する有力なり。寂淨は處所に施行圓滿に

して、化生し和合して益濟を究竟す。界性を增上するは色相の遠離にして、顚倒を造作し歡樂に趣向せん邊際の相貌は慈母の愛育なり。布施は多種の名相を具足し、調伏の修崇は無倒を義と爲す。施行平等なれば無倒を增上すと。是の處は、菩薩は眞實を趣求し、悲願の修作は聲教成就し、布施の平等は因相殊勝なり。制度自在なれば寂靜を了知し、毒害の施は鈍弱の爲に皆具る。淸淨の勝義は行施最上なり。災の本は眞實にして聞持は無倒なれば、染倒皆具に調伏し了知せん。城邑を破壞するの因は制度無ければなり、地遠ければ心往き難きを生ずること是の如し。人趣の生類は顚倒暗鈍にして、慢等の十法和合生起すれば、彼の體は眞實なる垢染・諍訟にして、我見の自性は諍訟の心なり。誠諦の邊際は施の處所に因り、邊際を了知するは淨妙の趣求なり。繫縛に塵坌すれば聖道除き息み、處所に養育すれば誠實安靜なり。自性を聽聞すれば語言を發生し、有情の愛欲は支分染汚なり。顚倒暗慢は我見皆有り、淸淨の行施は意地無倒なり。諍訟を趣求すれば瀑流轉た多く、災禍垢穢は處所に施無ければなり。相貌は默靜にして縛染能く離れ、意法は誠諦に制して增減を作し。淸淨無倒なれば運載は實有り、鬼趣は施の無力にて在るべしと爲す。苦惱の過失は自ら縛して解無く、平等の勝義は能く得るに由無し。欲樂の邊際するは了知と趣向となりと。是の處は、人の爲に聖道を勤修せば、纏縛の行相は了知を增上し、重任を荷負して殊因を求趣し、勝義を發生して圓滿究竟ならん。平等有力ならば施行を了知し、眞實を調伏せば運載するも沒溺せん。我慢は根本なる諸法の染行にして、喧諍に自在なるは貪欲を愛樂するなり。軌範師等の教誨する言說は、是の如く淸淨にして相貌無邊なり、彼の業行の因を造作せば有情運載して患難止息し、顚倒・諍訟を有情制約し、希求に自在にして染性を了知し、眞實均等なれば愛縛遠離せん。嚴淨なる行施は無學最勝にして、根本の相應は雜染皆盡きん。自性有力ならば纏縛は善の如しと。是の處は、菩薩は界性に淸淨なれば、在處に邊際にして言說を發起し、無心の色相は最上を了知し、勝因を成就すれば信仰をもつて

能く離れん。邊際を生起すれば自性を知見し、平等の相貌は無倒を造作す。德行具足すれば有情畏無く、修建すれば所在に眞實に隨順せん。根本不生は寂然清淨にして、遷變に自在なるは甚深にして得難し。有情本より寂なれば聞持具足し、淨妙にして毒無ければ智慧證す。布施の邊際は色相を希欲し、一無倒に合すれば業の支分を作す。布施の誨ふる譽は聞持に隨順し、彼れ布施を修すれば德行成滿し、究竟して止息し因行を調伏せん。善友も鈍縛の遠離無きに非ず、造作の力用は有支を本と爲す。繫縛に自在ならば諍訟を發生し、又諍訟の處にも染無くして施を修し、意地眞實ならば正理方に現れ、瀑流に隨順すれば顚倒遷變せん。彼れ彼れの修作は心行を調伏し、毘奈耶の法の持犯方に具れり。根本の因は寂靜を了知し、彼れ布施を求むれば愛樂可意なり。有支は五種の報種隨順し、誠諦は處所に聽聞發生す。我見は訟を起し恣逸は慢を生ず。大有情類は自在に調伏し、無生寂靜にして調伏の義を求め、彼此實無きことを淸淨智もて了り。甚深眞實淸淨の敎誨は寂靜の邊際にして喩へば施設して、身語意行十種の業道に向ふも、淨妙なる造作は布施を思惟することなり。寂靜を發生すれば平等の自性にして、一切の趣求は平等の因行なり。根本の聽聞は熾然なる功用なること師子王の無動に安住するが如し。身分圓滿なるは淸淨の制度にして、本より自ら誠實なれば殊勝無盡なり。九種の調伏は淸淨なる敎法にして、聚落の處所に運用無盡なり。飮食の殊勝なるは廣大の因行にして、淨妙の勝因は覺性圓滿なり。調伏行は有勝の如く發生し、界性を了知すれば諍訟を出離す。聖人有力は平等の果報にして、殊妙無諍なれば寂靜を愛樂す。作業殊勝なれば安詳として暴無く、方便善巧なれば身は十行に等し、彼れ自ら無倒なれば布施の希求は遷變の修作なり。根本殊勝の智慧は善妙にして、語言の詳審なるは善い哉制度なり。安靜なる祕密は最上の相貌にして、出づること無き天趣は邊際殊妙なり。如意の寶は進趣寂靜にして、嚚たる塵行を離る。瀑流の根本は塵坌なりと。是の處は、國王の知見は明白なれば生靈を愛慕し寂然として安住し、邊



【一】毘奈耶は、梵語にして Vinaya 滅罪の義なり。

方を調伏し歡樂して替ること無く、可愛の寶は善教に非ざること無し。彼我を調伏することは親教師より受け、一切の自性は方所に平等なり。殊勝の因は進修誠實なれば我が本の造作は制度自在なり。樂欲の因無くんば無諍に靜住し、心は工畫の如く遷變して作す。知見を聽聞するは究竟して心に依れり。十善巧の法は有情の訪習にして、國王の行施は圓滿にして均しく普し。寂然として教導すること晝夜息むこと無しと。是の處は、丈夫は鈍弱なれば諍訟重々發生して誠實を聽聞し。童女の苦惱は顚倒の希求にして、相續繼念すれば有情遷變す。染無くんば增上し造作多種にして、貪愛無邊なれば造作暗鈍なり。煩惱の相貌は我慢相依にして、根本の我見は相資して百を成ず。云何なる時分か德行圓寂し、隨順修崇して彼岸を發生するや。造作の支分增上すれば有力にして、有情世間は支分を發生するなり。隨順の義利は欲樂を發起し、世間の淨因は聽聞有益なり。善い哉自性は布施を因と爲し、彼の情類に施せば飢渇の事無し。了知して倒盡くれば寂靜の聽聞なり。行解圓滿なれば顚倒染盡き、貪の相貌の如きは趣求有ること無し。能く無性を得れば廣大なる相狀にして、界性の增上は善友に依憑す。自性を照了すれば諍染を出離し、此の圓滿行は快樂隨順なり。有支の倒無きは世間の根本にして、智慧寂靜ならば繫縛を了知す。邊際を記念するは廣大の勝義にして、造作を發生するは戰敵を義と爲す。天人自在に靜住するは有力にして、根本の教誨は調伏と淸淨となり。布施を了知すれば智慧無倒にして、十種の善行は趣求止息せん。欲樂の有情は國王善く教へ、聖賢を稽首すれば快樂自在なり。十種の善行は祕藏眞實にして、色相に隨順すれば毒を處所に增す。身分有力なれば圓滿なる勝行にして、復た夜分に於て善事を勤修せん。方所に丈夫は我慢の行無く、聖道は眞實なれば殊勝を發生す。圓滿に倒を盡くせば彼の衆を調伏し、平等無諍なれば身相有力なり。三寶の性を求むれば寂然として安靜にして、男子制有らば能く上に奉ぜん。王者は自在なれば人民咸慕ひ、憍恣止息せば聖道發生せん。恭敬隨順なれば趣求寂靜なりと。是の處は、丈

夫は殊勝を發起し、自在の處に居して世間の行を行ふ。十善の依止は眞實の有智にして、諸天淨妙なれば勝義安靜なり。天人の運ぶ所は定に通ずる敬善にして、彼の瀑流の邊は憍慢止息す。身・語・意の行は十種の善を修し、煩惱障を出づれば顚倒の訟纒蓋無し、造作の根本は寂靜にして淸淨眞實は寂靜の因行なり。有學の自性は世間の善を行ひ、繋縛の相貌は我が諍訟に報ふ。寂靜を修崇すれば果報を了知するなり。是の時國王は十善道を行ひ、諍訟無きを求むれば、國界安靜なり。制度嚴峻なれば民類を調伏し、纒蓋無邊なること雲の普く翳ふが如く、相貌熾然なれば邊際を增上し、珍寶の相狀は盡く我が所在にして施行を發生し、身等の十種は修施を增上し、眞實を了知すれば上妙殊勝なり。慢等の染無くんば我法を損減し、諍訟に因緣して貪愛邊際し、造作するも自性は無諍にして施を求む。暗慢繋縛は顚倒を發生すと。是の處は、菩薩は平等に了解し、種族邊際すれば聽聞眞實にして、平等の敎行圓滿なる時分、寂靜の修作は慧解をもつて了知す。增上して執持すれば倒行を調伏し、正理を了解するは大乘の時分なり。本より施の自性は毒害の意無く、人趣生類の力用は調伏なり。淸淨なる遷變は勝處を了知し、暗鈍我慢は本より自ら具足す。王者は體大にして聖用邊無く、究竟の實因は施を修すること廣大なり。時分の根本は邊際を了知し、勝義寂靜なれば善妙の因力は纒蓋生ぜず煩惱自ら殄ん。云何か布施を求趣して運轉すとは。是の處は、國王は疆界嚴肅なれば人民訟無く荷負有力なり。百種壞ること無くんば自然に生起し、丈夫寂靜なれば方所動くこと無しと。是の處は、實無く固く慳行を修するは、彼れ實に瀑流の根本十種にして、菩提行を求むるは實に大丈夫なり、智慧祕密は聖の言行を了り、暗慢能く離るれば眞實なること是の如し。顚倒染汚は煩惱の生ずる處、童女の繋縛は患母に在り。調伏の義利は精嚴なる敎誨にして、聽聞圓滿なれば了解發生し、我見增上すれば煩惱生ずる因なり。彼れ彼れは顚倒名色の遠離なりと。是の處は、國王の法制は最上にして、相貌の力能廣大なること此の如し。究竟發生すれば祕

藏眞實にして、語言の義利は甚深なること意の如し。貪欲斷ずべければ惡因遠離し、彼の本よりの布施は平等の勝義なり。聽聞修作は無倒の希求にして、我見は垢穢にして寂靜は怖無し、人趣隨順すれば倒・諍訟無く、我見雜染なれば寂默是の如し。菩提薩埵は語言調伏せり。是の如く無學は寂滅の理を證し、正理は造作生ずる因を遠離す。災禍を息めんことを求むれば諍・染の邊を盡くせ、教へ導く語言すれば染因皆盡きん。增上の因を求むれば無邊の染る盡くし、子を愛樂すれば疑心皆棄つるなり。云何か眞實は寂靜の修作といふや。彼れ發生する因は慢の邊際を除き。諍染を破壞し施を行ふて靜に住すれば、方便の所起に因ること有ること無きに非ず、毒害無き處之を求めて彼に往くと。是の處は、三者は生民の諍を盡くし、靜住すれば見の邊損滅し皆盡き、發生する言說は嚴峻誠諦なり。聖道の自性は淨妙の依止にして、根本の所在は丈夫の誨示なり。有支具足すれば毒も害すること能はず、自在の力用は無邊に施を行ふと。是の處は、國王は勝地を崇修し色相嚴麗なるは力有の所執にして、邊際に靜住して法制能く運び、無倒澄寂なること母愛も是の如し。色相を造作すれば恭謹に趣向し、修者は處所に殊勝を了知す。壽數の短長は因業の制する所、教乘の明文は更に異義無しと。是の處は、菩薩廣大の悲願は生靈を運載して增上圓滿し、我慢無き體は布施の因有り。靜止の處に言說を聽受し、相貌邊無きは王の言制する所、彼の天の上妙は毒害捨離し、諍訟の根本有ること無く安住せり。勝義を發生すれば彼の因眞實にして、因の性寂靜なれば有力を發生す教法の制約は無倒に進修し、淨妙の因有るは苦楚の業無し。自在力の邊は人趣具足し、貪欲は我慢の異報にして顚倒なり。行施清淨なれば快樂にして安に處り、彼れ彼れの思惟は增上して發生し、自在の力能は意地調伏す。種族の希求は淨因の所止にして、清淨の智慧は縛諍盡き止むと。是の處は、國王の法令は倒無く、眞實の制度は生民を益濟す。最上の修作は圓滿にして諍無く、勝義を了知すれば多種の慢無し。盡く我見を滅して聖語を聽聞するは、善い哉善い哉廣大なる福德なり。清淨

---

【二】菩提薩埵は、梵語にして Bodhisattva なり、菩薩と訛略し大士の義なり。

なる勝義は造作の根本にして、徳行崇修すれば有情隨順せん。運載は有力修作の勝因にして、清淨を希求するは無我の執相なり。寂默を了知すれば十善眞實にして、布施行を行ひ彼の義利を求めば、國界寂靜にして邊方を調伏し、善教を發生して王城廣大ならん。王者善く施さば慧解眞實にして、流轉を破壞し淨因眞實ならん。清淨の意識は相應解脱なりと。是の處は、國王は最尊最上なれば、生靈を訓導し聖力嚴峻なり。有情の色相は衆の非類と與に、勝義增上して希求誠實ならん。根本の廣大なるは師子王の如く形神畏るべし。祕藏甚深なれば流轉遠離し、五蘊の自性は法數圓滿なり。人趣の法は佛果修すべく、諍訟の邊際は相應遠離す。根本寂靜の力用は止るべし。是の修の菩薩は智慧眞實にして、勝義を具足し心行無生なり。處所に安靜なれば有情を運載し、施設の功行は無邊の勝法にして誠實を趣求す。制度は根本にして三乘の規義なり。王の廣大なるが如く無倒眞實にして正理を敎誨し智解趣求するを不可得と名く。心法本より寂なれば慧解相應し無倒清淨なれば、意地如々の行を了知せん。諸法の勝義は本智親しく得、根本の德行は聞持具足す。施す心精純なれば無所礙を得、勝因無諍なれば災禍止息せん。自在の力用は心修作を生じ、別々の因行は愛樂發起す。清淨なる施の邊は隨順を了知し、無相の行施は彼此知ること無し。湛然として澄寂解脱無生なれば、自在に根本制度を獲得し、不動なること山の如く荷負有力にして、有情を運載して究竟に至る。熾然なる相狀は因の修作を行ひ、邊際を趣求し處所に遠離し、德行を崇修し善い哉施を行ふ。是の如く我見は遷變の自性にして、棄背して無くんば布施生ず。眞實の名色は勝因にして根本の生起なり。王は言ふて譬を誨ふとは。是の處は、王者は平等に荷負し邊際を了知し彼れ彼れ眞實なり。瀑流の法は顚倒有らず、邊際を荷負すれば顚倒皆盡きなん。

## 菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第二十六

〔菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第二十七〕

瞋恚の衆生も流轉遠離すとは。謂はゆる聽聞は菩薩の敎誨にして、智慧は吉祥なる勝行を了知す。種々の自性は報應に非ざること無く、功業力用は根本多種なり。有學の行人は全く因地に憑り、淸淨の名色は根本の自性なり。應器受用する果報多種なれば、勝行を發起し圓滿に施を修す。無垢の自性は聽聞の有力にして、多種の界性は根本の聖衆なり。淨妙の趣求は佛法の梵行にして、布施の功用は處所に自在なり。諍訟を發生すれば善淨止息し、制度の根本は淸淨にして廣大なれば、煩惱・諍訟・倒無くして止息せん。勝因の邊際は勝義を施設し、不壞は空の如く靜住の根本なり。彼は實に力用自在にして倒無く、邊際は雲の如く衆聖和合す。造作圓滿なれば我慢起らず、因行無相なれば果を受くること殊勝にして、顚倒染慢も圓滿なれば生ぜず。香氣遠く聞えて果報自在に、寂靜なること空の如く正解脫の義なり。根本の運載は福德成就し、變化自在なれば快樂是の如し。云何か勝用は善因と了知するや。方所の聚落にて所在に趣求し、彼れ彼れの增上は障を離るゝこと空の如し。勝義は無倒にして甚深は得難しと。是の處は、菩薩は長遠に施を行ひ、十善の自性は隨順すれば止息す。煩惱の自性は根本より生ぜず、我見執著染障より自ら起るなり。果報は形に隨つて捨離に由ること無しと。是の處は、復た其の心の修作に有り。敎誨の寂靜は圓淨の相貌にして、力用の廣大なるは儀容の端正にして、受くる所の果報は增上して滅ずること無し。善業增上すれば香氣遠く聞え、平等の布施は圓滿を發生し、淨妙なる修崇は勝義誠諦にして、過去の隨順は慢の因生ずること無し。聽聞殊勝なれば無智を遠離し、勝義眞實なれば彼此善淨なり。根本の相狀は施を修すること無我にして、寃對を造作すれば勝定生ぜず。平等の莊嚴は染諍遠離し、具足して生ぜざるなり。諍訟の本因は寂然として止息す。戒德は是の如く和合安靜なり。忿に

因りて靜有り、肅然なれば遠離す。淨心を發起すれば時分延長し、自性眞實なれば究竟の邊際なり。修崇の相狀は自ら身體に報ひ、因相動轉すれば卒暴生起す。明白澄瑩なれば報應圓滿にして、增上の修作は淨妙愛すべし。損減有ること無くんば澹淨光潔にして、希求自在なれば施を盡すを業と爲す。色相を了知すれば實因有智なりと。是の處は、王は果報有れば意の如く、處所に自在にして淸淨嚴潔なれば、邊遠も了知すること同じく目視するが如し。制度を希求すれば無倒眞實にして、趣向する色相は作業と相應し、應報は往古より成滿して現在す。運動すれば彼我の貪癡自ら息まんと。是の處は、智解遠からざれば自ら得、有無の心を了知すれば無倒を生ぜん。貪縛止息すれば修施自在にして、煩惱は飮食を流すが如く損減せん。自他を運載することは王の制度の如く、見聞了解すれば彼れ彼れ眞實なり。寂靜は處所に覺解了知し、語言の邊際は力用發生す。彼此遠しと雖も同じく對面するが如く、又復長遠なる圓滿の隨順は身體殊勝にして彼の顚倒を盡くし。了知して修作すれば靜住して止息し、覺の岸は光彩ありて祕密の止寂なり。無倒を發起すれば愛戀を除遣し、垢染衰損すれば淨妙にして替ること無し。自性の染盡くれば誠諦に止息し、眞實を了知すれば廣大の力用なり。彼の蘊相の成滿を求むるは隨順にして、瀑流遷變は寂靜を發起す。祕藏甚深は本より相貌無く、自性隨順は靜住の本なり。顚倒の修作は垢染の災患にして、煩惱の荷負は力用を出生せん。支分の相因は進趣するも縛無く、隨順すれば難行の勝行なることを了知せん。顚倒の生ずる相を趣求する所無くんば、邊際は雲の如く煩惱は自性なり。淨妙の施は災難に罹るも盡く止み、十善の難行は界性眞實なり。世間の慢の相において王者は自在圓滿にして顚倒は繫縛の根本なり。果報は增上なる遷變の修作にして、圓滿に戒香の鬱馥を了知するなり。是の如く王者は姿容觀る可く、果報の最上なること世間において無等なり。平等の自性は十善道を行ひ、福德尊崇の圓滿なること比ぶべきもの無し。是の處は、王者は制度普く均しくして、義利は生靈

の聖力を上と爲す。智解了知すれば生民奔り附き、一切の教令は安靜平等なり。是の大丈夫は國界中の瑞なりと。是の處は、王具足して聞持すること有れば顚倒せる諍無く聖力無動なり。國土の飢荒有らゆる所に聞くこと無く、三寶は倒無く行ひ難きを能く施し、淨妙なる有力にして聽聞誠諦なり。是の處は、菩薩の根本は施を行ひ、力用を出生して寂靜圓滿なり。意地發生する時繫縛無く、勝義を增上すれば世間寂默なり。平等の遷變は無諍を造作し、力用を發生して寂靜の邊際なり。暗鈍諍訟は忽然として止息し、慈母の愛樂は遷變無きのみ。飢渴を止息して遂に安樂ならしめ、廣大なる悲願は趣求して盡くること無く、我見生ぜざれば心眞實に趣き、邊際に自在なれば無等の自性なり。有情は處所に殊勝にして諍無く、彼の根本の智證は得べからず。名色の力用は寂靜なること空の如く、祕密の根本は和合の相狀なりと。是の處は、造作は蘊性の積聚にして、顚倒垢染は邊際無等なり。有情の自性は精進を本と爲す、是の如く無我の相貌を發生すれば、荷負の邊際は一に作用に合し、寂然として無諍なれば舍宅空の如く、爲し難き施設は無相の根本なり。諍訟無く倒施無きを求め爲さば、靜住の因相にして殊勝なる支分は無我にして自止せん。彼の遷變の處は、有學の趣求にして、意を擧げて修作せば災患盡く止まん。增上し發生する修崇は壞るゝこと無く、方所に邊際の相狀を作すべく、制度廣大なれば性本より寂靜なり。狀貌を成就すれば淨妙にして依るべく、祕密無慢の性は自ら有力なり。復た邊際有れば蘊性を積聚し、我慢を具足せば凡性を建立し、速に無諍に趣けば善種發生せん。是の大有情は心を造して安住し、寂靜なること空の如く平等に施を修す。無相に靜住せば驚畏遠離し、默靜なること空の如く本來無相なり。想念の自性は最も尊上と爲せり、是の如き教誨は一に無倒に合すと、是の處は、希求は寶物をもつて施を行ひ、聖道の施は無顚倒の相と烏す。眞實の布施は寂然無作にして、三乘を運載して自ら彼岸に歸せん。寂靜不生は自在眞實にして、色相安然として崇修有力なり。

實夜に運載すれば六時に替ること無く、煩惱も相應して心を修すれば止息せん。王者は聖智をもつて境内を觀察し、種族生靈時に棄捨すること無し。厭離を發生する佛語是の如し。布施は慢無く淨妙究竟なり。平等の佛智は云何して復た種未斷者を生ずるやと。是の處は、王有りて貧乏を益濟すれば貪愛の繋縛は垢染行を修し、身體未だ盡きざるも顚倒止息せん。是の如く造作は處所に遷移し、圓滿なる聽聞は正理の行を修す。上妙なる色相は冤對止息し、我慢の意無し、彼は之れ影像にして誘導の因なり。廣大の心は善友の力にして自性を發生するなり。授敎して止息するは勝義相應にして我見遠離すと。是の處は、國土において淸淨行を修すれば、自在の力用ありて布施すること天の如く、諍訟生ぜず聖力もて止むべし。運用を發生せば憍慢止息し、善心生じ難ければ趣求して得べし。靜住に相應せば貪瞋癡を遠ざけ、根本の勝義は諍訟の縛無し。圓滿に聽聞すれば平等自在なり、是の如く我見は祕密を生ぜざるなり。王は究竟して人中の極と爲すが如く、相貌の圓滿なるは前生の修作なり。本より聖の言說は有情に自在にして、作業の所爲壽數の短長は崇修の致す所なり。最上の布施は專一の修作なれば、衆生趣求すれば冤毒捨離せん。聽聞の有力は布施行を修し、色相の眞實なるは願力の修作なり。無因の相貌は癡暗の施設なれば、是の如き衆類は繋縛を離れ難しと。是の處は、菩薩は眞實にして智有れば有情を荷負して飢渴の難を免れ、布施を希求して戒德に隨順し、永く諍訟無く智解有るが如し。盡く施行を修して煩惱生ぜざるは因智の所爲なり。暗鈍の有情は縱紘繋縛すれば、煩惱は是の如く遠離すること無し。大國王の邊方を荷負し法令平等にして時に替ること有る無きが如く、生靈慢を起すとも行を嚴にして制約し、慈智並び生じて了解に相應せん。王者の令出づるは必ず時有り、嚴峻なる制度は事再發すること無し。希求を生ぜざれば義利止息し、名色無怖なれば我執遠離す。此の時分相は自ら利する所有りて、安靜なる施は菩薩の敎誨と爲す。是の如く王者は欲貪廣大にして邊方を荷負し四遠適附せん。無邊の

殊勝は楚毒因ること無く、我見の染盡くれば苦惱生ぜず。倒染是の如くなれば飢渴無からず、我慢眞實なれば愛縛在る有り。邊方を了解すれば有力の制度なり。靜に住して慢無くんば心を情類に存し、身體の自性は有力にして淨心なれば、瀑流煩惱發生するに地無し。意恭奉無くんば我慢增多く、戒行驚異無からずば無きのみ。自性を了知すれば本來眞實にして、布施は時分長遠にして止まず。有學は自性に無倒の行無く、發意して造修すれば善芽を養育し。寂靜無怖は道行の本にして、自ら布施を修すれば本來相を亡す。淨妙なる蘊相は趣求誠諦にして、自性の邊際は牛乳を譬と爲す。平等の勝義は寂靜を本と爲し、諍染を遠離すれば安靜にして止息せん。舍宅畏無くんば四顧するも隱無く、澹淨の施を無倒眞實と爲す。我見にして施無く諍訟自ら止まば、云何して寂靜は我我の法を離れんやと。是の處は、王淨妙にして施を行ふこと有らば、邊方畏無く益濟平等なり。處所に運用すれば生靈安きことを獲、時分の根本は聖說を趣求するにあり。圓滿誠實なれば我見遠離し、究竟せば空の如く意地淸淨ならん。是の如く意法は平等に發生し、德行無畏なれば崇修して獲得せん。菩薩の教誨は身體を愛育し、顚倒の邊を盡くして自ら圓滿に處し、我見遠離し、勝義の邊際にして破壞の相無く、彼は聞持を具して憍慢止息せり。解脫の根本は法性の聖因にして、瞋恚・施・爲に默・諍すら無きのみ。能く貪欲を壞れば遷變淸淨にして、學處は無怖にして無我を了知す。諍染を出離すれば造作眞實にして、飮食上妙の語言は肅を臻さん。是の如く究竟遷變の相貌は、慈母の教誨の如く約束して獲可し。彼れ顚倒・苦惱・過患無くんば煩惱止息し快樂を增上せん。諍訟を希求するも淸淨なれば止息し、福德自在なれば最勝なること是の如し。過去に發生せし作業は無諍にして、彼の暗慢の邊は[一]禪那をもつて止息せん。應器を造作して三寶を供養し、遷變の智慧は聖力によりて因を修するなり。

# 菩薩本生鬘論卷第十二

【一】禪那は、梵語デヤーナ Dyāna にして靜慮の義なり。

無上法輪 62
無擇獄 32
無憂王 71

—メ—

名稱女請佛緣 83
妙聲緣 194
妙相 (lakṣana) 23
面門 82

—モ—

目連 (mavdgalyayana) 9
目連入城見五百餓鬼緣 154
聞思修 57

—ヤ—

耶舍 1
耶舍蜜多緣 226
耶旬 (jhāpita) 117

耶輸陀羅 (yaśadharā) 138

—ユ—

輸盧那 (cūrṇa) 28
窳惰子難陀見佛緣 83

—ヨ—

欲有 (taṅha-bhava) 26

—ラ—

羅睺 (rahulā) 270, 274
羅睺羅 (rāhula) 23
羅刹 (rākṣasa) 136
羅摩 (rāma) 68
羅摩村 72

—リ—

梨軍支比丘緣 243
離垢 (nirmala) 126

離車 (licchavī) 37
龍 (nāga) 81
龍象大仙 60

—ル—

羸馬王 25

—レ—

蓮華王捨身作赤魚緣 130

—ロ—

漏盡 (kṣīnāsava) 1
六根 (indriya) 7
六識 (parijñāna) 7
六趣 16
六通 126, 178
六波羅蜜 (pāramita) 83, 134
老母善愛慳貪緣 120
鹿野苑 (magadāva) 208

— 本緣部五索引終 —

波羅提木叉 53
波羅奈 (vānānasī) 29
波羅㮈國 (varanasi) 95, 273
波羅那處 (prāna) 29
婆伽婆 (bhagava) 81
婆私吒仙 (vasisha) 43
婆持加困病緣 89
婆羅門從佛債索緣 141
迫迮 41
薄土 37
八關齋 187
八解脫 129
八聖道 (sryamārga) 178
八大人念 16
拔提 (bhadraka) 144
拔提河 (ajiravati) 222
拔提釋王作比丘緣 233
跋伽國 (vajji) 30
跋提 29
般涅槃 (parinirvāṇa) 50
般遮于瑟 210
般遮尸棄 (pancaçipha) 109
般遮羅 (pañcāle) 268
幡蓋 173
槃遮耶王 (pañcālaraja) 96
槃頭末帝 (bandhumat) 188
槃陀羅隨餓鬼身體臭緣 153

—ヒ—

婢使以栴檀香塗佛足緣 124
鞞蘭若村 (vairañja) 30
毘闍婆 (phāgīnatha) 99
毘沙門天 (vaiśravana) 81
毘舍佉 (viśūkha) 141
毘舍離 (vaiçālī) 83
毘舍離城 (vesālī) 29
毘闍耶 106
毘首天子 271
毘提 (videha) 236
毘提訶山 (videha) 28
毘提訶富利 (bhīdhavali) 29
毘婆尸 (vipaśgin) 188
毘紐瑟吒村 (vainuṣṭa) 28
毘婆離國 (vaiśālī) 278
辟支佛 83

白衣 144
白淨比丘尼衣裹身生緣 204
百子同時產緣 175
瓶沙王 (śreṇya) 8
洴沙王 277
瓶沙 (bimbisāra) 141
彌瑟阿難陀 68
貧人須摩持縷施佛緣 88
貧人拔提施佛樵木緣 125
頻婆娑羅王請佛緣 112

—フ—

不受有智 26
不動 94
不放逸 57
不律陀 (ruddha) 60
布施 241
布施佛幡緣 199
浮梨耆婆 (purijīvana) 29
負梨 (bhūti) 238
富那奇墮餓鬼緣 149
富那跋陀羅 28
富蘭那 84, 277
福樓那 (puraṇa) 141
弗迦羅婆梨 (vakrapali) 30
弗沙 (puṣya) 249
佛救濟疫病緣 103
佛現帝釋形化婆羅門緣 107
佛身 (buddhakava) 43
佛說法度二王出家緣 94
佛陀 42
佛度王子護國出家緣 235
佛度水牛生天緣 179
佛垂般涅槃度五百力士緣 142

—ヘ—

兵車 20
鞞舍離 (vaiśālī) 33

—ホ—

蒲伽城 (bhoga) 47
菩薩 (bodhisattva) 81
法界 (dharmadhātu) 66
法王 (dharmarāja) 64
法護王子爲母所殺緣 146

法護王請佛洗浴緣 101
寶手比丘緣 223
寶殿 (ratnaśaila) 106
寶珠比丘尼生時光照城內緣 201
法無憂 (dharmāśaka) 71
梵 (brahmā) 161
梵行 (brahmā) 101
梵仙天 59
梵摩 (brāhmaṇa) 205
梵摩王太子求法緣 138
梵摩達多 116
梵豫王施婆羅門穀緣 132
梵豫 (brahmadatta) 132

—マ—

摩訶薩埵 (mahāsatva) 269
摩訶提婆 (mahādeva) 269
摩訶波羅 (mahāpāla) 269
摩竭 (magada) 274
摩竭魚 (matsya) 46
摩竭提 32
摩醯波低 (mahīvatī) 29
摩睺羅伽 (mahoraga) 81
摩那答陀 (manastabdha) 123
摩尼拔陀天祠 (maṇilhadra) 250
摩耶 (māyā) 141
魔波旬 (pisuna mara) 40
舞師女作比丘尼緣 206
曼陀王 (māmdātṛ) 19
曼陀轉輪王 (māmdhā) 43
滿願 (pūrṇa) 115
滿賢婆羅門遙請佛緣 81

—ミ—

彌勒 (maitreya) 250
獼猴池 (markatahrada) 40
明因論者 14
名稱女請佛緣 83

—ム—

牟尼 60
無畏 (abhaya) 28
無色天 (arūpa deva) 26

十種煩惱 11
初果 12
初禪三昧 58
諸纏 233
飾棄鳥 (sikhin?) 60
觸 (sparśa) 7
小兒散花供養佛緣 118
正語 (sannyagvac) 55
正使 52
正定 (samyagdhyāna) 56
正念 (samyak-smṛti) 56
生盲餓鬼緣 159
唱言生死極苦緣 245
精進 (virya) 56
精進力 86
聲聞 (sravaka) 2
杖林 (yastivana) 5
淨居天 51
淨飯王 (śuddha-dana) 141
常見 52
七覺 (saplabadhyaṅga) 178
七寶 64
蛭駛 (tasya) 253
悉達阿羅陀 (siddhārtha) 22
心 (manas) 7
身有栴檀香緣 188
身作金色緣 187
神足 (ṛddhi) 19

—セ—

施 (dāna) 17, 55
井宕 152
刹利 (ksatriya) 156
栴檀香 (candana) 102, 117
船師請佛渡水緣 99
船師渡佛僧過水緣 123
善愛 (supriya) 109
善愛比丘尼生時有自然食緣 202
善面王求法緣 136

—ソ—

相法 23
僧伽梨衣 (sanghāri) 104
像法 205
孫陀利 (sundara) 136,207,257
孫陀利端正緣 257

—タ—

他那摩帝村 28
多子塔 10
多波提尼劍 29
多聞 (bohusruta) 10
陀羅驃求那 15
大有情衆 326
大迦葉 (mahākāśyapa) 10
大人相 23
大目連 (mahāmaudgalyayana) 114
大龍 31
第一義 (paramartha) 60
提婆底 (devati) 271
提婆達 (devadatta) 30
斷見 52
憫婆羅似餓鬼緣 163
檀越 (danapati) 155

—チ—

地獄 (naraka) 87
地主 68
智慧 (prajña) 56
竹林精舍 (veṇūnana) 8
偷羅俱瑟吒 29
長者身體生瘡緣 247
長者若達多慳貪墮餓鬼緣 160
長者七日作王緣 96
長老比丘在母胎中六十年緣 239
長爪梵志緣 253
頂上有寶蓋緣 193
頂上有寶珠緣 197
調御師 50
帝釋天 (śakra) 67
帝釋巖 71
帝釋變迦蘭陀竹林緣 114
帝幢 112
天 (deva) 8, 49
天帝釋供養佛緣 105
轉輪聖王 (cakravartiroja) 236

—ト—

兎燒身供養仙人緣 144
度生死海 (saṃsarottaraṇa) 124
盜賊人緣 217
得叉尸羅因 (takṣaśila) 274
忉利天 (trāyastriṅrsa) 27,132
掉亂心 11

—ナ—

那羅達多 (nālada) 162
那提 (nadi) 4
那提村 (nādiko) 33
那由多 (naguta) 112
那羅聚落 103
那羅延天 (narayana) 91, 119
難陀 (nanda) 21

—ニ—

二生 (dvija) 9
二十八部鬼神 161
二梵志共受齋緣 182
尼瞿屢陀 (nyagrodha) 28
尼揵憂波離 28
尼律陀 (niruddha) 60
如願臨形戮求佛出家緣 111
女人以金輪擲佛上緣 119
日月光 (candra) 104
人師子 (siṁha) 46
人非人 81
忍辱 (kśanti) 55

—ネ—

涅槃 (nirvāṇa) 20, 58
念 (smrti) 7

—ハ—

巴連弗邑 (pātaliputra) 32
波斯匿王 (prasenajit) 16, 91, 141
波斯匿王醜女緣 213
波多迦 (patakā) 199
波婆城 (pava) 47
波羅延梵志 28

拘蘇摩華 267
拘那羅 (kuṇāri) 257
鳩夷城 (kusinagara) 48
鳩梨村 (kuli) 33
瞿曇 (gautama) 93, 277
瞿師羅 (goshira) 30
瞿曇摩 (gautama) 30
瞿曇門 32
求那 (guṇa) 14
俱夷那竭人 70
俱舍彌 (kauśambī) 30
軍荼陀那 22
群生 250

—ケ—

化生王子成辟支佛緣 116
化生比丘緣 227
罽賓寧王緣 230
稽羅山宮 (kailāsa) 24
醯茂鉢低思 (himapati) 28
夏安居 177
夏坐 228
血饒 43
結 17
結使 134
厥厥河 (kakuttha) 48
月光兒生天緣 169
乾闥婆作樂讚佛緣 108
乾陀羅 (gandhāra) 28
揵闥婆 (gandharva) 81
揵陀羅 (gandhāra) 30
賢善長者婦墮餓鬼緣 150
賢劫 (bhadrakalpa) 116
賢那羅 (kdunard) 207
賢妃 23
賢面慳貪受毒蛇身緣 167

—コ—

居士 (kulapati) 156
五威儀 37
五衍 178
五星 1
五盛陰苦 247
五通 27
五道 13, 232
五百商客入海採寶緣 86
五百鴈聞佛說法緣 185
後有 (punarbhava) 4, 72
劫火 3, 26
劫初 32
劫賊惡奴緣 128
劫賊樓陀緣 147
兀手比丘緣 241
業 (karma) 7
業解脫 51
恒伽達緣 250
根 (indriya) 53
羯磨 (karma) 241
袞花服 37

—サ—

作樂供養成辟支佛緣 127
差摩 113
差摩比丘尼生時二王和解緣 211
採華供養得生天緣 171
最勝 (abhayaprada) 98
罪不請 173
薩遮尼犍子 29
三惡道 34, 172
三衣 225
三界 143
三界の有 (bhava) 20
三擣杖 10
三軍 64
三業 20, 144
三十三司弟 11
三種慧 67
三千大千世界 155
三善門 172
三藏比丘 181
三藏比丘緣 224
三達 81
三弟子 11
三品 25
三寶 122
三摩提 (samādhi) 12
三昧 (samūdhi) 56, 153
三明 129

—シ—

尸毘 (sibi) 271
尸毘王剜眼施鷲緣 134
尸利掘多迦 (śrīkutakā) 28
支提 (caitya) 70
支分 267
四韋陀典 245
四事 41, 101
四衆 232
四諦法 170
四大海 172
四天王 161
四天下 155
斯陀含 (sakadagami) 83
自在天 (isvarava) 9, 43
自恣 (pravāraṇa) 134, 240
自性 (svabhava) 14, 51
事火 4
舍婆提 (sravasti) 16
舍利 (śāli) 66, 117, 271
舍利弗 (śāriputra) 8
沙彌 (srāmaṇera) 222
婆吒利支提 (patȧli cetiya) 32
闍維舁磨 161
闍耶山 (gayā) 49
釋迦文 (śākyamuṇi) 10
釋師子 (sakya siṁpa) 37
釋提桓因 136
首羅 (sūla) 12, 28
須達多乘象勸化緣 175
須拔陀 (subhadra) 142
須拔陀羅 (subhadra) 50
須菩提惡性緣 238
須曼花衣隨身產緣 222
須漫比丘尼辯才緣 205
須彌山 (sumeru) 60
衆行 (samskāra) 43
衆寶莊嚴緣 229
修善意 146
受 (vadanā) 43
授記 (vyākaraṇa) 81
樹提迦 (jutika) 28
醜陋比丘緣 248
十功德 11

# 索　　引

（頁數は通頁を表す）


—ア—

阿迦膩吒天 108
阿僧祇劫 83
阿闍世 (ajatasatru) 31, 96
阿修羅 (asura) 57, 81
阿低梨 (atali) 22
阿那含 (anagami) 83
阿那律 (anuruddha) 21, 57
阿難 37
阿難陀 (ānanda) 21
阿耨多羅三藐三菩提 271
阿婆羅龍 (apalāla) 30
阿摩勒迦波 29
阿鼻獄 245
阿踰闍 (ayodhyā) 30
阿羅漢 (arahat) 83
阿利 (alaka?) 68
阿臘山 (alā) 29
悪見不施水墮餓鬼緣 152
安居 (varṣa) 18, 134

—イ—

伊羅拔 (ajiravatī) 99
異道 18
爲人所恭敬緣 192
維那 (karmadāna) 240
一缺 33
一頓 34

—ウ—

羽寶蓋 22
有爲(samskṛita)42, 207, 248
有大威德緣 190
有大力緣 191
有餘界 63
憂留頻螺迦葉 123
優多羅母墮餓鬼緣 156
優陀夷 (udāyin) 22
優波低舍 (upatiśya) 17
優鉢羅花 (utpala) 116, 188
優婆塞 (upāsaka) 102, 178
優婆離 (upāri) 234

—エ—

依怙 44
圓光 127
菴羅 (amra) 33
菴摩羅女 (ambapālī) 33
閻浮提(jambudvīpa) 28, 70, 155

—オ—

淤泥 31
王遣使請佛命終生天緣 178
王家守池人花散佛緣 91
王舍城 (rajagrha) 277
王舍城迦蘭陀竹林 81
王師 18
應眞 253, 277
央罌利摩羅 (aṅgulimāla) 29
央伽富梨城 28
央伽 (aṅga) 28
鴦掘摩羅 (aṅgulimāla) 123
鸚鵡子王請佛緣 176

—カ—

伽維羅衞城 18
伽尸孫陀利(kāsikasundari) 208
伽尸比丘尼生時身被袈裟緣 208
伽闍 (gaya) 4, 29
迦尸育衣 113
迦葉 (kaśyapa) 3, 10
迦那加牟尼 (kanakamuni) 209
迦尼 (karṇipāra) 44
迦毘羅 (kapila) 8
迦毘羅衞國 (kapilavastu) 187
迦羅迦孫陀 117, 165
迦蘭陀摩 67
迦利摩沙村 (kalamasa) 30
迦樓羅 (garuḍa) 82
過度 144
花盛 (padmottama) 92
我 (ātman) 7, 15
我作 7
我所 6
戒 (sīla) 53
戒律 160
餓鬼自生還噉五百子緣 162
海生商主緣 220
額上有眞珠鬘比丘尼緣 209
竭曇摩 19
甘露道 (amṛta-mārga) 20
灌頂王 101
灌頂王請佛緣 100
含香長者請佛緣 122

—キ—

熙連河 (hiranyavatī) 48
祇桓 23
耆闍堀山 71, 150
耆婆 28, 240
給孤獨 (anāthapiṇḍika) 11
客作 175
經論 (sūtra) 47
憍薩羅 (kosala) 12
憍慢 38
驕薩羅 (kaçala) 179
驕羅婆 (kanrava) 68
金河 48
金剛密迹 256
金翅鳥 66
金毘羅 (kimbila) 21, 30
金步王 25

—ク—

孔雀 (māyura) 71
功德意供養塔生天緣 173
拘尸那城 (kuśinagarā) 142

昭和四年九月十日印刷
昭和四年九月十五日發行

不許複製

國譯一切經 本緣部 五

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地一番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地一番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝（二）一一一六番
　　　（三）〇四〇番

製本所　兩角製本所

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03148 4371